

ZEROの使い魔 太陽の少女

伊豆摺 里弧芦

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

組織の中で、使命を果たすべく戦いに明け暮れるイングリッド。人外の力。それを狙う敵対組織。長い長い闘争。果てのない戦い。突然の召喚。

「力」との出会い。

「美少女（自称）」はその出会いが成るべくして成ったと、思いはじめる。この異世界での闘争もまた自らに課せられた宿命であると。

!!!【重要：太陽の少女インカちゃんではありません】!!!

・オリジナル設定です。

・基本の筋は原作沿いですが、途中よりオリジナル展開になって行く予定です。

・イングリッドの口調にホロ成分が混入しています。ホロそのものと言うわけではありません。そこところは許してくりゃれ？

・原作キャラクターの性格も大きく改変される予定です。

・特に政治に関わる人々の性格は大きく変更されます。

・アンリエッタ・ド・トリステインの原作的性格は時空の彼方に飛び去りました。

イングリッドの設定は曖昧で謎も多いためにオリジナルな設定（妄想）が大量混入します。物語の最後はハッピーエンドにします。

永い作品になる筈です。原作1巻をなんとか1,000,000字以内に収めようと四苦八苦しているところです。

原作再開を祈念して始めた作品でしたが、もはやかなわない夢で

す。しかし、最後まで仕上げていることと思っています。

目次

魔法の世界

銀髪の使い魔 (1)	1
銀髪の使い魔 (2)	33
銀髪の使い魔 (3)	64
銀髪の使い魔 (4)	106
ZEROのルイズ (1)	160
ZEROのルイズ (2)	183
ZEROのルイズ (3)	201
ZEROのルイズ (4)	222
ZEROのルイズ (5)	261
伝説の使い魔 (1)	303
伝説の使い魔 (2)	317
伝説の使い魔 (3)	339
伝説の使い魔 (4)	368
伝説の使い魔 (5)	408
伝説の使い魔 (6)	428
タバサの冒険 1	
タバサの冒険 / タバサと吸血鬼と (1)	456
タバサの冒険 / タバサと吸血鬼と (2)	465
使い魔の日常	
初めてのお出かけ (1)	474
初めてのお出かけ (2)	499
初めてのお出かけ (3)	530
初めてのお出かけ (4)	563

初めてのお出かけ (5)
初めてのお買い物 (1)
初めてのお買い物 (2)
初めてのお買い物 (3)
初めてのお買い物 (4)
そして初めてのの…… (1)

757 729 703 659 628 592

魔法の世界

銀髪の使い魔（1）

「あんたダレ？」

そう問いかけられたのは、銀髪が美しい少女であった。

前髪を僅かに正面に残してサイドで括り、オールバック気味に纏められた頭髪。頭部から後方に垂らされる、光に透けるほどの細い銀糸。それは、風に揺れるたびに光をあちらへ、こちらへ、と、千々に乱れて反射する。返照する太陽の光は様々に色を変えて僅かに地面を照らし、或いは、少女に相對する桃色の髪を抱いた少女の顔を照らす。

髪を纏めるには不便、と思える場所に奢られているのは少女の頭、その左右に位置する円形のアクセサリー。それには不思議な文様が彫り描かれて、それも光に照らされて様々に色を変化させる。

彼女が身に纏っている服は、不思議な設えを見せている。何かの組織に属する制服であろうか。知らぬ者にはその程度の想像しかできない。

胸には大きな白いリボンをアクセントに持つが、少女の身を包む服は、ただ一見しただけでもわかるほどに上等な設えであると予想させるものであった。貴族であつてもなかなかお目にかかれない上等な刺繍が控えめに縁を飾っているのを見れば、その服を纏う彼女の出自をいろいろと推測させてしまう。

肩のみを守って肘の手前辺りまで垂れ下がるカブケープは、何の役割か。想像もつかない。唯の飾りであると断言するにしても、全体の意匠にあまりにも自然に馴染んでいた。

全体として空の青よりなお深い群青——というより上質で、高貴な紫は、どうしたらその色で染色することが出来るのかわからない、高度な技術を予測させる。

染み一つなく、解れ一つなく、彼女の細い身体を覆って飾る蒼は、彼女が身に纏うにはこれ以上の物は無いと、見るものに信じさせてしま

う程に彼女の身体を自然な雰囲気で包み込んでいる。

膝を露出させるほどに丈の短いスカートは、いつそ儂さすら感じる程である彼女の佇まいにあわせるには場違いにも思えた。だが、全体を見て取るとこれまた彼女の足を隠すのに（隠せていないが）はこれ以外の選択肢は無いと思わせる。

細く、しかしがっちり引き締まっていることが見て取れる足。その表面を覆うストッキング、或いは靴下は、女性が見てもため息を吐きたくなるような精巧なつくりで、皺一つなく、しかし、それでいて柔らかく、彼女のスカートが隠すことの出来ていない足を守っている。

唯のローファーというにはありえないほどの光沢を見せる靴は、それだけで一つの美術品であるかと錯覚させるほどの存在感を示し、彼女が身に纏うべき服装を足元で引き締め、その全体の意匠を見事に完結させていた。

長く伸びた腕と、それを覆う袖から突き出た手は、よほどの貴族であつても持ち得ないと思わせる、出来の良い純白の手袋に覆われて、その素肌を隠して見せない。彼女が身に着ける他の服飾品に負けず劣らず繊細な拵えを魅せるそれは、彼女の姿をその細く締まった腕の先端で引き締めている。

そして、その顔。

やや野生気味に微かに黒をまぶした白い肌は、整ったお嬢様的なつくりに対して若干の違和感を感じさせる。だが、総体としては不思議とその身にあつているとも思えた。

小さすぎず大きすぎず、若干太いかと思わせる首の上に乗った顔は、深層の令嬢といった趣である。美しく飾ったティールームで、椅子に腰掛け、紅茶を飲んでいる風景が似合うつくりであつた。他の女性の眉を痙攣させかねないほどに整った風情を醸し出している。

横に一本、細い線を思わせる口は、芸術品を飾る、出来のよい装飾のように凜としてそのスペースを引き締めていた。バランスよく配置されて高過ぎず、低過ぎず、大きすぎず、小さすぎない鼻は、張り詰めた緊張感すら漂わせて、少女の顔面の造形を完成させている。

その顔の上部に慎重に配された目は、若干広く思える、光沢すら幻想させるおでこの下で、猫のように大きめの瞳を供えてた。その中に踊る紅い光彩は、燃え盛る炎よりもなお強く紅で照らし、周囲を見渡している。

刹那の間に、僅かの緊張感を持つて周囲の状況把握に努めていたイングリッドという名の少女。その対面に立って、僅かな呆けを張り付かせた表情でイングリッドの顔を覗き込む少女は、呆れとも、恐れともつかない表情に顔面の筋肉を変化させていく。

イングリッドは自身の身に起きた激烈な変化を潜り抜けて、唐突に現れた少女を内心に混乱を含みつつも、静かに観察した。

年のころは、どうであろうか。少女から伸び上がって、女性へと昇る階段の一段目を踏み上がったというところであろうか？

白いブラウス、グレーのプリーツスカートに隠された小さな肢体を、黒いマントが覆う。そのささやかな胸を張ってイングリッドに視線を送っている。その胸には五芒星をあしらったアクセサリーが、ともすれば殺風景とも思える少女の胸を程よく引き締めている。

その顔は、イングリッドの個人的採点から言えば、マブイというには幼いが、マゴギヤルと言うにはモツタイナイ。磨けばマジカワ間違いなしの微カワイイ。太陽光を反射する桃色のブロンドは後一歩行き過ぎれば、病弱とも取れる白い肌によく似合っている。その顔には「くりくりっ」とした鶯色の目が不安げな感情を見え隠れさせている。ざつと見て北欧系にも似たその外観は高価な人形の様でもあって、永い人生を飽きることなく歩んできた彼女をして、若干の驚きを覚えさせるかわいさでもある。

彼女の着ている服は何だろう？

イングリッドが先ほど見やった周囲には、殆どお揃いであると思われる服を纏った一団が遠巻きにしてこちらを伺っている。一見して見て取れる特異性——明らかな意図を持って特定年齢層で揃えられていると思われる集団性から想像すれば、どこぞの学校の制服と

いったところであろうか？ 時代がかったマントはイケてないが、まあ、及第点ではあろうと判断する。デザインの統一感。裁縫に掛けられているであろう手間。一見しただけで判る高価で上質な材質。制服であつても、ただ単純に制服であるからとは無視できない高貴さを滲ませる服装であるとイングリッドには思える。

黒いマントを微かな風に揺らがせながら、恐る恐るという風に近づいてくる人間の一团は、なかなか滑稽な光景でもあつた。

よほどの田舎に足を運んでようやく見かけることが出来そうな、生命力を強く感じさせる豊かな緑に覆われた草原が広がる。その先に、ヨーロッパの観光地で見かけるような、程よく草臥れて、良い年若い方をしたと納得させ得る石造りの、大きな城のような建物が見て取れた。

足元は激しい死合しあひでも行われたかというほどに酷く醜い荒れ果てた地面を晒しているが。

まるで、ファンタジーじゃ。

イングリッドは髪をかき上げて、額を揉んだ。すでに目に入り、肌で感じた情報のみしかなく状況でも想像される、自身の置かれた現状に頭痛を覚える。

何気ない表情を装いながら黙って周囲に鋭い視線を送る銀糸を頂く少女は、自身が対面する少女から最初に発せられた疑問に何の反応も示していない。その事実不安を覚えたのか、桃色の髪の毛を頂く少女が、その整った顔に徐々に困惑の色を深めた。その顔を見やりながらイングリッドは小さく嘆息する。

眩しいものを眼にしたかのように眼を細めて、微かに強い意思をこめた視線を対面に佇む少女に向けた。

「ダレ、じゃと？」

少女は、イングリッドの口を吐いて出た、その外観から想定された通りの質を持った声と、想像の埒外にある口調に驚きの声を上げた。

「えっ!？」

溜息と言うには随分と深く長い吐息を吐いて、芝居がかった仕草で両手を広げたイングリッドは小さく頭を振った。両腕を腰にあて、や

や顎を引き、ささやかに胸を張る。そうしてから、小さく肩を竦めて刹那、地面に逸れた視線を対面する少女に戻す。

「人に名を尋ねるには、まず、自分が名を名乗るべき、である。そう教わることはなかったのかや？少女よ」

その言葉を浴びてキョトンとした表情を浮かべた桃色髪の少女は次の瞬間、その言葉にこめられた意図を理解したようで、さっと顔に朱を走らせた。

次いで、その小さな肩がプルプル震え始める。うつむいた顔も震え始めた。美しく梳かれた、大事に扱われているだろうことがよくわかる、光沢を散らす桃色の金髪が細かく揺れる。

なんともはや。ずいぶん撃たれもろい御仁じゃ。

状況把握の第一撃。というつもりで友好的とはとても言えない、挑発的な言葉をあえて投げかけたイングリッドである。ぐだぐだとかみ合わない会話を続けて平和裏に双方の状況をすり合わせる事が、あるいはベストな選択かも知れないが、彼女はあえて波風の立つ方法を選んだ。

イングリッド自身が過去に得た経験では、意味のわからない状況に置かれてひたすらに疑問をぶつけ合って、埒が明かない状況というのは少なからずあった。いや、彼女のストリート・ファイターとしての生き方からすれば、それこそが日常だった。そうした状況では、あえてトラブルを現出させて力づくで双方の現況を引きずり出したほうが結果的に素早くコミュニケーションを通すことになる場面の方が多かった。

無論、いらぬ諍いを起こし、場合によっては怪我人すら出る場合があるその下策を、しかし、彼女は好んだ。

今、この場にいるイングリッド以外の人間にとっては迷惑極まりないことであるが、それが過ごす日常とは、出会えば殴り合い、話せば死しあい合。そういった殺伐とした世界であったから、自身の思考が世間一般で言う常識からすれば余りにも異状である事に自覚はあっても、実際の行動の段では頓着しなかった。また、そういう状況になっても、自身の力で無理やりねじ伏せることが出来るという自信も持ち合わ

せていた。周囲に居る者からすれば、なんとも迷惑な話である。

そうした意図的な、悪戯じみた悪意ある意志の投げ付けに対し、真
正面から馬鹿正直に受け止めた少女の反応に、イングリッドは小さな
笑みを浮かべた。

次にどういう言葉を出して、効率的に情報を得ようかと考える彼女
の周りに、手が届きそうなほどに近づいてきた少年少女の集団。彼
ら、彼女らは隠せない好奇心を表情に浮かべている。

首を捻りつつ、一見してそれほどの危険を感じられない無力な人間
達をイングリッドは見回す。

相変わらず胸を張り、腰に手をやったままだが、一応の警戒心を
もって意識を彼ら、彼女らに集中する。集団の中心に意図せずに位置
することになったイングリッドの脳裏には、さくらという名を持った
少女や、直接対峙した訳ではないものの、外見と内面のあり方が大い
に乖離したバレッタという少女とすれ違った記憶が思い出されてい
た。

さくらの爽やかな心持でありながら激しい闘争のあり方と、幸いに
して闘争に突入せずにすんだバレッタは、初見のイメージで油断して
許されるような生易しい相手ではなかった。

その経験がイングリッドに警告を発しているのだ。

唯の勘である。

だが、一合が即座に死につながる闘争の場に身を置き続けてきたス
トリート・ファイターはそれを無視しない。刹那の直感が自らの死生
を分けてきた経験を忘れることは無い。それに従って、やや無遠慮な
視線で睨むように観察する。すると、彼ら、彼女らが何かしら手に棒
のような物を持っていることにイングリッドは気がついた。

彼女が内包する能力の特性上、気がつけたことである。その棒には
何かしらの力が感じられた。

イングリッドは無意識のうちにその力を「探る」。

力は棒を持った腕を通じて、それを持つ者たちの随分奥深いところ
に通じていることに気がついて、大きく驚く。一見した表情に表れる
ことはなかったが……、イングリッドという存在の、普段の態度を知

る者ならば、彼女が信じられないほどに大げさな驚愕に身を震わせている事に気がつけたかも知れない。それほどに大きな動揺が彼女を襲っていた。

「おいおい……。なんじゃ、ここは。」

視線を少女に戻すと、少女もタクトのような棒を持っていることに気がつく。そしてそれから繋がる力を見るとはなしに見やって、その先を覗き込んで……。

「なん、じゃと……!!」

イングリッドはこんどこそ表情を崩す事になった。

だが、周囲で唐突に湧き上った声が、それを覆い隠した。

「おい、ルイズ！ 『サモン・サーヴァント』で、人間を呼び出してどうするんだ！」

勝気で、余裕のなさそうな気配を漂わせる少年が声を出すと、イングリッドの対面でうつつむいて震える少女を除いた殆どすべての少年少女が笑い声を出した。

少女は一瞬身を竦めて苦い表情を浮かべた。僅かな変化をイングリッドは見逃さなかった。だが少女は、その刹那の変遷を振り切つて、キツと表情を引き締めて顔を上げる。大げさな身振りを持って、腰に手をやりながら芝居じみたポーズを取って身を翻す。その身体の動きに一つ遅れて、マントが風を切る。

いささか下卑た笑みを浮かべる少年少女たちに相對した彼女はしかし、腰にやった手に力をこめて胸を反らし、僅かに顎も突き出して微かに首を傾げて大声を上げた。

「ちよっ、ちよっ。ちよっただけ、間違っただけなんだから！」

引き締まった表情から放たれた少女の声は、しかし、つつかえてしまつてなんとも締まらないものになった。それに引きずられて彼女の姿勢も乱れてしまう。

身体を振り乱して弁解じみた言葉を発する少女の声が、鈴の音のように草原に広がる。何がしらその手の職業にある人間のように驚くほどに上品で、よく通る声は、だがしかし、はつきりとした嘲笑と侮

蔑の入り混じった悪意の前には無力であるようだった。

「ハア？ 間違いだった？ ルイズはいつもいっつもそうじゃーん？」

「さっすがわ、我らがゼロのルイズ。やるね！」

「そーそう。俺たちにはまねできねーよ！」

少年少女が畳み掛ける様に声を発すると、どっという勢いの爆笑が後に続いた。

イングリッドは自身の前にいる少女が『ルイズ』という名を持つらしいことは理解した。

その少女が悪意をぶつけられるにたる存在なのかどうかまでは理解に至れない。

それはそれとして!!

仕事柄、様々な悪意、或いは殺意に晒されることの多いイングリッドであっても、この無邪気な悪意というのはなかなかに対処が難しい。

こうしたものは、時に、剃刀よりたやすく人の心を切り刻む物であり、そうでありながらまつたく、含むところのない自然な感情であるところに対処の難しさがある。身構えることも出来ず、兆候を得ることも出来ず、突如として噴出し唐突に収束する類のこういった感情というのは、百人を切り刻む憎悪より、時として黒い力を押し付ける。実のところ、悪意や殺意といった仄暗い感情の発露を力で捻じ伏せる彼女にとって一番苦手な『力』であった。

自然、唇が微かに引き攣る。

苦手な『力』という以前に、それらの悪意をぶつけられた少女……ルイズの奥底に湧き上がる黒い『力』に汗ばむほどのプレッシャーを感じることも、彼女の表情を歪める原因になっていた。

イングリッドには、不思議でしよがなかつた。

なぜ。なぜ、この『力』の昂ぶりに周囲は気がつかないのであろうや。力のつながり。力の扱い。その一丁一石で得られる物ではない力のラインを確立した者が、ここに現れた、悪意への反射として膨れ上がる『力』を感じ取れない筈があるまいに。

もしや、今の我であつては穩便な対処が難しいと思わせるこの『力』に、簡単に対処できるだけの隠し玉を用意出来ているとでも言うのではないだろうか？

イングリッドは、涼やかな表情を顔面に張り付かせてつつも、俄かに沸きあがった修羅場に密かに冷や汗を垂らしながら、その先に訪れかねない本当の修羅場を想像する。

この場で少女に対峙する前に潜り抜けた、あの恐ろしい修羅場が、実は前座と言うのにも容易いモノであつた事実が気がつき、イングリッドは愕然とした。今、この場で彼女は、酷く遠い過去から変ぬ姿を持つて存在する普段の姿からは想像もできないほどに、珍しく、本当に珍しく、動揺していた。本格的に始まつた思考の混乱を纏めてすかして、対応に悩む。

いきなり目の前に爆発寸前の爆弾を置かれて、さて、どうにかしろと対処を投げられたかと錯覚する、飛び切りの修羅場中の修羅場に、身じろぎすることすら出来ない。

イングリッドにとつての恐怖の大王と化した少女が、視線を巡らせた。数瞬の間を経て、少年少女の群れから僅かに離れたところにあつた、悪意から外れた強い意思を此方に投げかけるだけの大人に視線を投げる。

彼女の感情に高ぶつた甲高い声が、人名と思しき言葉を叫ぶ。

「ミスタ・コルベール！」

その声を受けて、突然、自身の存在を知覚した、とでも言うように、強い緊張感を周囲にも感じられるほどに漲らせて、小さく頷く彼。

小さな人波の上に、頭一つ飛び出したその男性は、自身とルイズ、或いはイングリッドを遮る人垣を押しつけてチヨーク・ポイントに分け入る。随分と頭頂部が寂しいが、ただ「大人」であると断じるにはずいぶんと含むところの多い男に片方の当事者が軽く視線をやると、はつきりとした警戒の視線がぶつけて返された。

随分と力を蓄えた、自らの身体に等しい大きさの杖を油断なく構えながら、彼はその身に纏つた真つ黒いローブを翻して、ルイズとイン

グリッドの間に割り込む。

その収束した『力』の塊はイングリッド自身^が現れて出でてからの刹那の間に用意されたと考えるには随分と大きいものだと感じられた。

或いは、そのごく短時間に力を収束させるだけの実力が、この男性にあるのかも、思いなおす。

そうであるならば、この「彼」に対してまったく油断出来ない。

銀糸を僅かに揺らしつつ彼女は表情を強く引き締めて、彼の顔を見上げる。

それはこの場で唐突に始まった、力ある者が力あることを理解した上で行う駆け引きだった。

男は最初からイングリッドをはつきりと警戒するべき対象と認識していた。普段のあり方からすれば些か無思慮なことに、イングリッドは男が自分自身を警戒しているという事実^にこの瞬間まで気がつかなかった。それは、場合によっては致命的ともなりうる隙であった。

それはそれ。過ぎ去りつつある事であり、ストリート・ファイターとしての立場にある彼女にとっては隠しようのない過失ではあったが、そこから結果が出ることは無かった。男は彼女の誤謬に乗ることが無かった。で、あるならば、ここから失点を取り返せば良いということであった。よって、イングリッドは自らのミス^をミスとして記憶にとどめつつも、男が自分を警戒している事に気がついているのだとアピールした訳である。

彼の視線は刹那もイングリッドから外される事はない。にもかかわらず、周囲に油断なく注意が払われている。

素人ではない。

人殺しの、それも職業^{なりわい}として、人を危める類の、強くコントロールされた、感情を抑制することの意味を理解する——生き残るために、それが必要であると体感した者だけが発する事が出来る雰囲気^を纏う、実戦慣れした手練れであるとイングリッドは彼を評価する。

単純な力のぶつかり合いの最中に合って、実力差を覆い隠して生き

残れる類の、厄介な「ファイター」であると認識する。

情報量が少なすぎる現状で、自分の過去に得た経験と照らし合わせることですら馬鹿馬鹿しい状態では、対処の仕様がないと理解する。受動的に過ぎるきらいがあるのは自覚があるにせよ、相手の行動、その出方を待って、状況を見極めざるを得ないと嘆息する。

自分が弱いなどとは思ってもよらないが、自分が最強であるとは妄想の中ですら想像しない。

ましてや、まったくのイレギュラーな状況に置かれれば、後は僅かな幸運を祈るだけである。

彼女の経験した異常事態、特異事象の中でも、なかなかお目にかかれない、意外な出来事の連続である。この状況が、その収束点であればいいのだが、とイングリッドは密かに祈った。

彼女の評価によれば、ルイズという少女を核とした状況は悪化の一途をたどっているものの、コルベールと呼ばれたおっさんの表情以外は、いつそのほほんとした風情を漂わせる現状は、自身が感じている局面が杞憂に過ぎないと語っているに等しい。

とりあえず今は、状況の推移を見守るしかないだろう。

ルイズという名の少女は、自身に背を向けてイングリッドに対峙するコルベールとやらに必死で捲くし立てている。もう一回。もう一回やらせて下さい！次は間違えません！お願いです！そう言って、華奢な身体全体を使って、必死のアピールを続けている。

その少女の中で順当に膨れ上がる黒い『力』の底なしさ加減にイングリッドは眩暈すら覚えてしまう。

彼女が今、身を抑えたくびきの中で出せる力に対して兎戯にも思えるほどの『力』である。それ程のものを背負った少女に相對して、なお、自分のほうが危険な存在であると、彼は言うのであろうか。殺気すら感じられる視線がイングリッドから外される事はない。

まさかに、こういった力が普遍する場所なのであろうかとも想像する。そうであるならば、他を守るために科せられた自身を縛る制限は、寧ろ、自身の身を危険に晒すだけなのかもしれない。制限なしの

闘争など何千年と経験してこなかったイングリッドではあるが、そうしなければいけない時が来るとは思いもよらなかった。

その得体の知れない少女と対峙する男の心もまた、修羅場であった。

只者ではない！

全身が総毛立つ恐怖。

この女性は自分に近い。

爆発の中から現れた、この銀髪の女性は、コルベールの身を竦ませるに容易い気を纏っていた。

瞬間の混乱の中から立ち直った後のその僅かな立ち振る舞いから、決して弱くはないはずだという自身の自己採点を投げ捨てたくなる気配を感じた。

刹那の衝動に身を委ねるような存在でないのが不幸中の幸いであった。「これ」が「召喚」による突然過ぎる状況の変化に驚いて、その衝動のままに暴れる幻獣の類であつたら、生徒を守るには自身の力は余りにも無力だ。

彼が正直に感じている思いに身を委ねれば、振り向いて走り出してしまいたいほどの恐怖が彼を苛むところである。すべてを投げ出してしまいたいと、感情が訴える。

出来ない。それは。

彼の立場を考えれば、まずは生徒を散らして、ここから遠ざけるべきではあろう。しかし、それをして「彼女」の感情を荒立ててしまつては、後に、いかなる惨状を呈するか、予測もつかない。

情報が少なすぎる現状で、自分の過去に得た経験と照らし合わせることすら馬鹿馬鹿しい形勢では、対処の仕様がないと理解する。受動的に過ぎるきらいがあるのは自覚があるにせよ、相手の行動、その出方を待って、状況を見極めざるを得ないと嘆息する。

自分がこれほどまでに弱いなどとは思ってもよらなかったが、自分が完全に無力であるとは想像することすら罪である。

少なくとも、自分が守るべき存在がそこにあるこの局面では、最後

の瞬間まで抗う力でなければならぬ。

とりあえず今は、状況の推移を見守るしかないだろう。

奇妙な膠着状態に、周囲の少年少女たちにも困惑が広がる。修羅場に睨いとある少女が、杖を握り締めて冷や汗を流し、強い感情の発露に当てられた、様々な種類の生物たちが身を竦ませて表情を強張せる。そんななか、その空気に当てられる事のない……自身の内に荒れ狂う感情ゆえに、周辺の変化に気が付く事の出来なかった少女が、その身から溢れる感情に突き動かされて悲痛な声を上げる。

「ミスタ・コルベール！」

呼ばれた彼の視線は蒼を抱く少女から外れることはない。

「……なんだね？ ミス・ヴァリエール」

緊張した面持ちを顔面に張り付かせた男から、地の底から沸き上がったのではないかと思えるほどに力のこもった声が返る。

それを聞きとめて、少年少女たちが驚きの表情を浮かべた。

今までの短い人生の中で、それほどに力のこもった言葉を耳にした経験のない彼らにとっては、その言葉から発せられるプレッシャーだけで、身を震わせるに足る経験であった。

それを、一番の特等席で味わったルイズも、一瞬呆けて、次いで知らず知らずのうちに身を震わせてしかし、次の瞬間には、彼の前に身を乗り出して決意を漲らせた。強張った表情を彼のイングリッドに向けられる視線に割り込ませた。

コルベールと呼ばれた男とルイズには随分と背丈に差異が合ったため、イングリッドを見つめる男の視線を遮るために彼女は、相対すべき少女の視線を振り切ってそれに、背を向ける必要があった。客観的に見ると、イングリッドを守るためにルイズが身を呈しているような、不可思議な光景になった。

自身の身体の大きさをはるかに超える大きな杖を持った小柄な少女が、少女には似つかわしくない表情を崩して、ルイズの動きを視線で追う。

「ミスタ・コルベール！ あの！ええつと……！ そう……、そう！

もう一回。もう一回召喚させて下さい！！」

その小さな身体のどこにそれほどの胆力があるのかと、大きな杖を持った少女を驚かせる。ただしその胆力の方向性が間違っている。ルイズは（彼女だけに限らなかつたが）眼前に発生している本当の問題に気が付いていない。ルイズは自分自身を苛む問題のみに深く囚われて、視野狭窄を起こしているのだろうと少女は推測する。

知らない、知ることが出来ない、と言う事は随分と幸せなことなんだな、と、自身の短くも激動の人生を振り返って嘆息する。

青髪の少女とコルベール。そしてイングリッド以外の人々も、さすがに異常すぎる状況に気がついたようだった。その理解が広がるにつれて、問題の焦点から人垣がゆっくりと遠ざかる。

じつとりとした汗が頬を伝って、顎の先から垂れるにまかせるコルベールは片目を痙攣させつつ、一瞬、本当に一瞬だけルイズに視線を合わせて再びイングリッドに戻される。その極刹那の空白に状況が動かなかつた事実には、彼は安堵する。

僅かの躊躇を持って、しかし、次の瞬間に状況を打破できるかもしれない可能性に気が付いて、彼は慎重に口を開いた。

「それは……、それは、駄目だ。ミス・ヴァリエール」

「そんなっ……。どうしてですかっ！」

コルベールは微かに顔を歪めて、言葉を慎重に選びながら続きを口にする。

「決まりだ。決まりなんだよ。ミス・ヴァリエール。君たち魔法学園の生徒は2年生に進級するに当たって、君たちは『使い魔』を召喚する。たった今、君もやって見せたとおりだ」

二人のやり取りをただ、眺めるのに任せていたイングリッドは小さく首を傾げた。

使い魔？

微かに眉をひそめる。

銀髪の少女が見せた、その僅かな反応。それだけで、コルベールの緊張が高まる。

大きな杖を持った少女が、青く輝く髪を揺らしてじりじりとイングリッドの死角から回り込もうとする。

少女が対象とする一方の当事者の、手袋に覆われてだらしなくゆるゆるとゆらぐ腕が静止すると、右手、その手のひらが、緊張で眼を見開く青い髪の少女のほうに向けられる。

かすかに立ち止まり、意を決して、再度、動き始めた少女。それに合わせて手のひらが動いてゆく。そこには明確な意思がこめられていた。

手首だけの動きではあったが、疑いような無い意識的なそれに驚いて、次いで少女は嘆息する。

刹那の葛藤を持って緊張を解いてその場に立ち止まり、僅かの逡巡の経て、諦めたように肩を竦ませた後に少女は、崩れ落ちるようにして座り込む。驚くべき事に彼女は、その場で左手で抱えていた本を広げて我関せずとばかりに文字を追い始めた。そうしている少女に対してしかし、手袋に覆われた右手は「向けられ」たままである。

色気過剰、燃える様な赤い長髪をたなびかせて浅黒い肌をした長身の女性が、イングリッドの背に視線を向けつつ、座り込んだ青い髪の少女に小走りで近寄る。

「ねえ、タバサ。どうしたの？ なにがあったの？ いったい、なんなの？」

タバサと呼ばれた少女は、僅かに憂鬱そうな表情を浮かべて、困惑した表情を隠さない長身の女性に顔を向けた。

「危険」

「えっ？」

「危険。キュルケもあれの間合いに入ってる」

「ええっ!？」

キュルケと呼ばれた女性が、眉目秀麗な顔に驚愕を浮かべる。

「えっ？ ええっ？ なに？ なんなのよ。分かるように言つてよ！」

タバサが僅かに表情をゆがめる。

「あれは危険」

タバサは、つっと視線を左右に振って、まずコルベールに、そして

キュルケに視線を彷徨わせて、次いで後ろに放つて置いた、実際には刹那に忘却してしまった自身の付き合いの長い使い魔に意識をやる。その視界が酷く強張ったものであることに嘆息してから、手元の本に視線を落とす。

「私たちが束になっても、あれには敵わない」

頭の上に知覚出来そうなほどに大きな疑問符を浮かべたかのような表情を、顔面に貼り付けたキュルケは何度かタバサとイングリッドの間に視線を往復させてからその疑問を思う以外に反応を示せない言葉を発した少女にそれを戻した。長身を屈めてその顔を寄せ、囁くような小さな声で尋ねる。

「そんなに危ない人なの？ あの人」

その問いに対してタバサは、戸惑ったかのように、その戸惑いは自分自身に向けられるもののように、僅かの間、微かな感情の揺らぎを彼女の顔面に表した。長いとは決して言えないが、そこに秘められた濃密さでは短いと言われるのは心外な付き合いをタバサとの間に経験していると断言できるキュルケは、その彼女の顔を歪ませた動きに、不思議そうな表情を浮かべてしかし、それを意識的に無視して、後続くであろう声を待つ。

「経験も、能力も違いすぎる。……たぶん、あれは大勢の人を倒している……と、思う」
「？」

キュルケもタバサの横に座り込んで、彼女の小さな顔に自身の顔を近づけて問いかける。

「強いのか？」

問われた彼女が視線を下に向けたまま小さく頷く。

「強い」

そこで言葉を区切り、顔を下に向けたまま視線だけ僅かにイングリッドの背中を見やる。

「勝つことは難しくない。生き残れるように勝つのは……難しい。生き残って、尚且つ勝つ。そして自分を保つ。保つことが出来る人間は、そんなにはいない。普通は……勝ち続けて、そして、変わる。そ

して、いつか、勝てなくなる。そして、おわる。でも、彼女は……」視線を落とす。その視線はキュルケの見たところ、どうやら手元にある本を見ていない。それを突き抜けて、その下にあるタバサ自身の膝も、その下にある地面すらも突き抜けて、どこか遠いところを眺めているように見える。

「勝つ事と、生き続けること。その意味を知っている人……だと、思う」

キュルケは首を傾げた。

「こんな短い間で、さ。まだちよつとだけの時間しか経ってないのよ。そこまで分かるものなの？」

彼女は胡散臭そうな表情を銀髪の揺れる背に向けている。

タバサは身じろぎ一つしない。彼女の心の中では人に言えない葛藤が渦巻いている。親友と信じる、信じられるキュルケにも言い出すことが出来ない葛藤がある。

いつの日か、必要と信じるならば、ごく一部の例外を除いた他のすべてを犠牲にしても守りたいと思う親友に対してすら、言葉に出せない思いがある。

タバサには理解できていた。そして、それと同じくらいの立ち位置で同様の理解を得ているのが、この場にあつてはコルベルしかいないであろう事も理解できていた。

否。

タバサは否定した。もう一人いる。あの、銀髪の少女だ。

彼女はそこにいる銀髪の少女を「少女」と表現していいかどうかに対して深刻な疑問を思っていた。

タバサのややこしい出自は、タバサに自身が望まない経験を強要していた。

妖魔。異人種。力ある悪意。

そういったものに触れざるを得ない生活の中で、そうではあつても、なお、上があるのだと思ひ知らされる「力」が銀髪の少女から感じられた。彼女はそれを感じ取ってしまったのだ。今現在、タバサの力として外部より影響を与え得る自身の使い魔の能力が、その分析を

大いに補強していたのは決定的だった。

少女の手のひら。

こちらに向けられる手のひら。

タバサは、銀髪の少女を危険だと断じた。彼女の生存本能は無意識の内に、少なくとも自身が銀髪の少女と力を持つて相対するとして、出来うる限り有利な場所へと身体を動かした。

有利な場所等なかった。

ただ、手のひらが向けられる。それだけで、タバサの闘争本能は手折られた。

屈辱であった。

自身がそれほどまでに力がない事を自覚させられて彼女は愕然とした。地面に腰を落としたのは、その無力を自覚した故だった。

あれの臭いは私に近い感じがする。あれの生きている場所は私も踏み込んでいる気がする。

でも。

あれの生き方は私とは違いすぎる。

汗を拭う事も出来ずにコルベルがルイズに言い聞かせる。

それは、ルイズに対する説得という体裁を取りつつ、実のところイングリッドに対する現状説明でもあった。

膠着状態を打開できる可能性の一つであると信じた上での、自分自身に言い聞かせるような言葉であった。

『召喚の儀』によつて現れる『使い魔』は、召喚するメイジ自体に近い、或いは、メイジに必要とされる力そのものだといわれている。また、召喚された『使い魔』は召喚したメイジと相性のいいものが呼ばれるといわれている。

魔法学院では、召喚された『使い魔』によつて召喚したメイジの属性を固定し……、いや、確認して、それによつて専門課程へと進むんだ。一度呼び出した『使い魔』を変更すること等はありえない。なぜなら春の使い魔召喚は神聖な儀式だからだ。好むと好まざるに関わ

りなく、君自身の呼びかけに応えた『使い魔』を……『使い魔』の候補を突き放すこと等、メイジとして許されることではない」

諭すような口調でありながらそこに秘められた強い意思にたじろぎながら、ルイズはなお反発する。

「でも……、でも、でもでも！ 平民を使い魔にするなんて聞いたことありません！」

ルイズがそう言うと、幾分か離れたところから遠巻きにしていた少年少女たちが再びどつと笑った。銀髪の少女の視線が一瞬、そこを彷徨う。高まる緊張感にコルベールの目が充血する。

ルイズは歯を食いしばって肩を怒らせて少年少女たちを睨み付ける。そうであっても笑いは止まらない。

春の使い魔召喚？

なんじゃそれは。

聞いたことがない。こやつらは先ほどから何を言っておるのじゃ。対面する少女の中で渦巻く、暗くよんだ感情に当てられて、冷戦な判断力をそがれているイングリッドはそれでもなお、現状を確認するために必死で彼らが交わす会話の意味を考える。

彼女の右腕が無意識に髪を巻き上げて、頭につけられた太陽の紋章を刻んだアクセサリーに触れる。

「太陽のアンクル」と呼ばれるそれを撫で付けながら、忙しく思考を走らせる。

幾度となく行われた死合にそれに適合した状況がないか探す。

見つからない。

組織との付き合いの中でそれに適合した状況がないか探す。

使い魔？

確か、過去に組織が対応した、人間ならざる存在の中に、サーヴァントなる存在を使役した存在があったようじゃったな。

猫？ 蝙蝠？ トカゲ？ そんなたぐいじゃったか。

視線を周囲に這わせる。推測を現状に摺り合わせる。

目玉のお化け。でかいトカゲ。カエル？ もこもこでふわふわタイ

ムななにか。梟。カラス。狼？なんだか分からないぎりぎりで生き物ちやあ生き物かもしれない生き物のように見える生き物。

そして、この場所が、自身のあずかり知れぬ場所であると強く信じさせるに足る証拠である、ドラゴン。

いかなる強者であつてすら、その頭を自然と垂れさせる、最強の幻想種。

ドラゴン。

それが実体として存在する「場所」。

自分の普段の生活の中でそれに適合した状況がないか探す。

生活の中で……、生活の中で暇つぶしに見たTV。アニメーション。シネマ。漫画。

そう。

ある。

適合する。

組織の持つ記録は、後学のために。或いは自身が陥るとも限らない窮地を打開する手助けになるやも知れんと、暇さえあれば、見れる範囲は読みつぶした。

確かにそこに記録されたなかにある『サーヴァント』は、物語にある『使い魔』そのものじゃ。

『使い魔』。

人間の『使い魔』？

そんなことがあるのか？

無意識に頭を捻るイングリッドを置いて、コルベールとルイズの会話が続く。彼の視線は、銀系とと桃色の間を忙しなく往復している。

「伝統なんだよ、これは。ミス・ヴァリエール。例外は、ない」

コルベールは強張って固まる片手を自身の杖から些か難儀しつつ引き剥がし、関節を鳴らし、大きく震わせながら、酷く苦勞してイングリッドを指差した。その指先が滑稽なほど大きく震えている。

「彼女は、その……ただの、平民、かもしれない」

つつかえつつかえで言葉を続ける。

『平民』と言う言葉に、指を差し向けられた少女の眉が僅かに跳ねる。

それに気が付かなかったコルベールは、幸運であったか。

「呼び出した以上、そして、彼女がそれに応えた以上は、彼女は君の『使い魔』にならなければいけない」

その説明の対象となった少女はその言葉に、額面以上に別の意味が強く含まれていることに気がついて僅かに唇を歪める。

説明というか半ば弁解じみてきた言葉を紡ぐコルベールも対象が好意的ならざる反応を示した事に気がついたが、一瞬の間を置いて、小さく首を振って何かを吹っ切ったかのように強めの口調で言葉を続ける。

「そう、古今東西、人間が召喚に応えた例など記録には残っていないが……、春の使い魔召喚の儀式のルールはあらゆるルールに優越する。彼女には君の使い魔になってもらわなければならぬ！」

最後は彼自身も気がつかない内に叫ぶような声になっていた。

いつの間にか面白そうな表情へと顔を歪ませた銀髪の少女に、彼は感情が乱されてしまっている。

ルイズは、整った顔を絶望に染めて、がっくりと肩を落とした。

「そ……そんなあ……」

一連の流れの中でルイズの中から黒い『力』の発散が急速に衰えたのに気がついたイングリッドも、ようやくのところ緊張を緩めることが出来た。

小さく溜息を付いて、弛緩した両腕を垂らした。銀糸が輝きを放つて、大きく揺らめく。

斜めに傾いだ身体の横でゆらゆらと腕が振られ始める。自身の額に汗が流れていることに気がついて、ぎっと、髪の毛を捲り上げる。ついで、指についた汗を吹き散らすようにそれを振った。

指先についたごみを、遠心力をもって吹き散らすかのような何気ない仕草だったが、コルベールも、タバサも、そしてタバサの言葉に半信半疑ながらもイングリッドの一挙手一投足を逃すまいと注目して

いたキュルケも戦慄した。

余りにも鋭く、重く、すばやい動きだった。まったくの錯覚ではあったが、かなりの距離があるタバサやキュルケの耳にすら、空気を切り裂く音が聞こえた気がした。あの動き一つでルイズの首が飛んでいってしまったとキュルケが幻視するほどであった。

どつと冷や汗に包まれた顔を痙攣させて、慌ててコルベールが言葉を紡ぐ。

「さ、さて、ミス・ヴァリエール！ 儀式を続けるのです！」

何うような視線をイングリッドに向けるコルベール。微細な意識のやり取り等気がつかぬまま、自身の思考の闇にとらわれたまま、滑稽なほどの同様に身を窶す彼に釣られるようにイングリッドに視線をやるルイズ。

二度、三度と、二人の間に視線を彷徨させたあとに、一転して「にまあ」とばかりに笑みを浮かべたイングリッド。

突然の笑顔にたじろぐコルベール。

むつとするルイズ。

驚愕するタバサとキュルケ。

「ルイズが平民に馬鹿にされたぞ！」とはやし立てる少年少女たち。

突如として緊張の空気が霧散して、気が抜けたように呆ける他の百鬼夜行……使い魔達。

随分と弛緩した雰囲気の中で、嫌そうにイングリッド、ついでコルベールを見るルイズ。

だらしない動作で、銀髪の少女を指で指し示す。

「……彼女と？」

慌てたようにコルベールが声をかぶせる。

「そ、そうだ。えー、えーと。そうだ！ 早く。」

次の授業が始まってしまう。召喚の儀式に君は……彼女が！ 応えるのに！ どれだけの時間をかけたと思っているのだね？ 何度となく、そう、何度となく失敗を重ねて、ようやくっ、彼女が召喚に応えて、ようやく！ 現われてくれたではないか！ 何回も失敗して、何回も、だ。失敗を重ねたが！ 彼女が呼び出しにようやく応じ

てくれたのだ！　いいいい、いいいいから、早く契約に移りたまえ！」

だんだんとあからさまになってきた言葉に、イングリッドは噴出した。このはげちやびんは、心優しくも、どうやら前代未聞の事態に陥ったと思しき召喚の儀式とやらで、ルイズの引き起こした結果に対して、それを成した本人には何の落ち度もない。呼び出された私がわるいんじゃない？　っと、言っているわけである。

お優しいことじゃ。

イングリッドはにんまりしてコルベールに顔を向けて、そしてルイズに向き直る。

しかし、伝わっておらぬぞよ？

ルイズは失敗！と言われるたびに身体を震わせた。どう考えても自分が行った行動の結果にも経過にも満足している風には思えない。コルベールが行ったフォローはどう考えても本人に届いていない。傍から聞いていても、どちらかというと彼自身が言い訳をしているようにすら聞こえてしまう。

「そーだそーだ！」

「そーだぞー！」

「はやくしろよ！」

悪い事に、心無い野次が飛ぶ。

ルイズは困惑した表情を浮かべてイングリッドの顔を見つめた。

極僅かの間に、涙、と思しきふくらみが少女の目に浮かび始める。

んー。こういうのは苦手じゃ。どうすればいいんじゃない。

銀髪を揺らして首を捻る。

「……ねえ」

意を決したかのように、覚悟をした表情にすばやく切り替えてルイズはイングリッドに声をかけた。

ほう……。いい表情じゃ。決断も早いし、決断力そのものもある、とな。

ルイズは、自身が呼び出した『使い魔』候補が自身とそれほど背の高さも身体の大きさも変わらないことに初めて気がついて、小さく驚嘆した。

呼び出した瞬間に視線を合わせたときは、その存在感の大きさに眩暈を起こして倒れるかと思ったのだ。倒れなかったのは、失意ばかり目立つ短い自身の人生の中で、それでもなお、すがり、失わず、磨き続けた、誇りとプライドゆえであっただけである。

だけ。

それだけ。

ハルケギニアと呼ばれるこの世界における貴族のあり方としては随分と歪んだものであることに自覚はあるが、それだけ。ルイズにはそれしかなかったから。それに縋るしかなかったから。

ふっと、銀髪の少女が笑った。ルイズはその笑みを好ましいものだと感じた。嘲笑。侮蔑。暗い感情に晒されてきたなかで、家族以外の人に始めて見せられた何の打算も感情もない笑みだと思った。

ただ笑いたいから笑った。

笑うときが来たから笑った。

そういう笑みだと思った。

ふと、ちよつと仰ぐだけで視線が合うのに、彼女を山のように大きい存在であると思った自分が酷く滑稽に思えて、ルイズも自然と笑みを浮かべた。

杖を掲げながら近づき、彼女の右肩に手をやろうとして……。頭を撫でられた。

わしやわしやと。両手で。

「んー、めんこいのー、お主。いい表情じゃったぞ。これほどまでに笑顔が似合う奴はなかなかおるまいて」

一転して硬直した笑みを張り付かせて、わなわたと震え始めるルイズ。

満面の笑みで頭から耳、後頭部と遠慮なく彼女の頭を撫で回すイングリッド。

拳を握り締めた左腕がイングリッドの顔面を襲う。ひよいつとば

かりにステップを踏んで、彼女はルイズの後ろに回りこむ。

腰に手を回して背中側から抱きつき、彼女の豊かな髪の毛に顔をうずめてくんかくんかする。

「んー。いい香りがするの。どんなシャンプーを使っておるんじや？」

羞恥に真っ赤に染まった顔を怒りに歪ませて、大きく身体をよじつてイングリッドを振り払おうとするルイズ。突然の喜劇の開幕に、どうしていいか分からずにおろおろとするコルベール。笑い声をあげてはやし立てる少年少女たち。あつけに取られて見詰め合う、タバサとキュルケ。

キュルケの元に大きなトカゲモドキが走り寄り、タバサの隣に美しい肢体を輝かせて、ドラゴンが降り立つ。トカゲモドキとドラゴンもなんとなく顔を見合わせてからそれを外し、二人の少女の飛び跳ねる様に視線を送って、次いでそれぞれのご主人様と視線をあわせる。

力を抜いて、やれやれといった風情で首を振りながらキュルケが立ち上がり、タバサは無表情のままそれに続く。のろのろと歩く先には美少女二人のじゃれあいが続いていて、その周囲で、クラスメイトが笑い転げている。なんという混沌。

「はああ。なんだったのかしらねえ……」

先ほどまでにあつた緊張のひと時が馬鹿馬鹿しいとばかりに、キュルケがタバサに笑いかける。笑顔を向けられたタバサはしかし、僅かな緊張感を残したまま無表情に前を見つめていた。

「馬鹿っ、やめなさいよ！ 放しなさいっ。放せー!!」

「よいではないかよいではないか、愛いやツめ。うりうり」

「バカバカバカー！」

実はこのとき、息が止まるほどの緊張感から解き放たれて、イングリッドは軽い興奮状態にあつた。シャドルーとかいう組織の軍服マントのヒネクレ顔と相對したところですら感じたことがない緊張感であつた。

ルイズの中からあふれ出しそうになっていた『力』はまごう事なき

比類するものの無い純粹な破壊の力であった。彼女が特段ソレに恐怖したのは、ソレが「破壊」に特化して「暴力」的な力ではないと区別できたからだ。

人が人の中から湧き立たせる力には多かれ少なかれ、感情が混濁して、単純な力としては方向性が歪む。それは当然イングリッドであっても避けられないことであって、性格的な面から、その日の気分から、肉体的特長の部分から、性別からでも、力の方向性に個人的な特徴が生まれる。

ソレを肌で感じて所謂「気配」等と称するのだが、ルイズから湧き上がる力にはソレがなかった。暗い感情を乗せてソレを膨れ上がらせたのに、それ自体のあり方は単純に「破壊」。余りにも純粹な『力』。感情はソレを引き出すためのきつかけ程度だ。火を起こすのに風を送るのにも似ている。

イングリッドはその『力』のあり方に恐怖し戦慄した。

無垢で無色透明な破壊の『力』だった。

今、じゃれあうかのごとく飛び跳ねて、ルイズにセクハラじみたタッチを行うのも、躁状態にあるのが半分、彼女の中を探るのが半分といったところで、深いのか浅いのか自分でもよく分からない感情に引きずられた行為であった。

どうしようもなく非生産的、非合理的な行為であるとの強い自覚がありながらも、なかなか感じることの出来ない、自身の強い感情の発露は、そうであるからこそ止める術が分からず、馬鹿馬鹿しくも飛び跳ねて走り回ることではか発散できなかった。

結局、彼女は、人が持つものとしては、その特殊で強力な能力があるにもかかわらず、或いはその能力故に、普通の反応、対応、そういったものに疎く、自身の感情をもてあますばかりであったのである。

これに近い状況としては、彼女が思い出す限りでは、黒い色に染まった肌で、わけの分からない喚き声を上げながら襲い掛かってきた、ちよつと普段の様子と違っていたりユウや、随分と感じたことのない死の恐怖を身近に纏わせた、神人・豪鬼あたりがここ数十年あたりで該当しそうであった。だが、それらと相對、接触で自身の身

に生まれた感情の高まりと激しいうねりは、ほかならぬそれらとの闘争そのもので発散されてしまった。そのため、今回の参考にはならない。

ルイズから感じた『力』の強さそのものは神人・豪鬼に勝るとも劣らぬものであったから、突然に幼児退行してしまったかのごとき振る舞いは、実際に、そうする以外に方法を思いつかなかったという意味ではまさに幼児退行そのものの、見戯じみた行為であった。

大きな問題としては、リユウや神人・豪鬼の時と違い、ことここにいったり、問題が根本的に解決した訳ではないという事実を、興奮状態であるがゆえにイングリッドが意識からそれを吹き飛ばしてしまっていた事であった。

「うがー！ あつたまキタ！ 何なのよ、あんた!!」

にゆつと胸を揉んで切なそうな表情を浮かべたイングリッドに、茹だつて完全に出来上がったルイズが杖を向けようと振り返る。それを避けて距離を取って向き直り、顔の前で両手をわきわきさせながら、イングリッドは満面の笑みを浮かべた。

「によほほほほほほほ！ まあま。怒るでないぞ！ ニヤツとして笑うのじゃ」

「ミス・ヴァリエール……！ ミス……その、あなたも落ち着いて……！」

なんでこうなったか分からない、急な状況の変化に取り乱して、ローブを振り乱し、杖を振り回して、少ない髪の毛を吹き散らしながら、滝の汗を流してコルベールが走り回る。クラスメイトたちは無責任にはやし立てて笑い転げる。凹凸の少女二人組みは苦笑いを（片方だけ）浮かべながら、ゆつくりと混沌の支配する『闘争の場』に歩み寄る。青い髪の少女は、遊んでいるように見えてその実、恐ろしいほどにすばしっこいイングリッドの動きに表情を引き攣らせている。

爆発した感情に身を委ねたまま、ルイズはイングリッドに杖を向け「力ある言葉」を叫んだ。

「風よ！ 我が望みに応えてあれなる敵を打ち据えよ！ ラナ・デル・ウインデ、エア・ハンマー!!」

イングリッドはその言葉と、それにあわせて湧き出た力の奔流に対して正確に反応して、回避を取ろうとして……出来なかった。

まったく唐突に自身の頭の数センチ先で何の兆候もなく爆発が起きて、もろにその重く激しい衝撃の激発を受けてしまった。

ルイズの身体から力が湧き出したのは分かった。

それが杖の先に収束したのも分かった。

そこから爆発にいたるプロセスはまったく分からなかった。

ルイズが向けていた視線の先、イングリッドのつま先辺りの地面には何の力の動きもなかった。

空間を何かが渡った気配も感じなかった。

唯唐突に自身の眼前で、ルイズの中にあつたのと同じ力が突然に収束し、そしてはじけたのだと理解しただけだった。

バック・ステップが間に合ったのは奇跡に近い。何の確証もなく、ただ、いつもの死合のなかで、敵の放った足払いを避ける。それぐらの勢いでステップを踏んだ「つもり」だった。それが思ったより大げさな動きで予想外の距離を動いたのはまったくの偶然。単純に興奮していたからに過ぎない。間に合わなければ、ブランカに投げ与えたスイカのごとく、頭が砕け散っていたであろう。

否。

眼、鼻、口、耳。

ゆっくりと溢れる血の味を感じながらイングリッドは、呆然としてルイズの持つ杖の先を見る。

間に合わなければ、頭のあつた「空間」が爆発していたに違いない。結果として、自分の頭もバットで力いっぱい殴りつけたスイカのごとく砕け散っていたであろう。

彼女は衝撃で頭をシェイクされ、激しい痛みを覚えてあっけなく意識を手放した。

受身も取れずに顔面から地面にダイブしたイングリッドから少ない量の血が地面にぶちまけられる。

誰もが硬直し、時間も空間も制止したかのようになったなかで一人、少女が青い髪を振り乱しながら、小さい身体で駆け寄り、倒れこ

んで伏した顔を覗き込む。

さっと、首を上げると、一瞬躊躇して、コルベールに眼を合わせた。「危険。ものすごく」

一瞬の硬直。その後、ハッと正気を取り戻した彼も慌てて駆け寄り、イングリッドの倒れ伏した顔を覗き込む。身体を触らないように、地面に自分の顔をこすり付けるようにして、血に染まった銀髪の少女の表情を見る。

見開いた眼は白目を剥いて、まったく反応が見られない。流れ出す血は、赤というより赤黒く、ドロツとしている。勢いは弱く、徐々に地面に広がる血の染み。一定のリズムを刻んで震える身体。

よし。まだ大丈夫。だが危険だ。

「ミス・モンモランシー！ ミス・モンモランシー！！」

突然の惨劇に、身体も意識も硬直させた一団から、ボリユームの多い金髪を巻き毛に整えた少女が、後頭部を飾る鮮やかな赤い色の大きなリボンが風に翻しながら慌てて駆け寄る。

「彼女の状態を見てもええですか？」

「は、はい！」

激しく動揺しながらも、訓練された動きできびきびと状況を見る。

モンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシーという名のその少女は、水系の魔法という、人間に限らない生命力の根源をつかさどる力に優れ、歴史ある貴族の家に生まれた故に、幼い頃から当然のたしなみとして怪我や傷に対処する方法を叩き込まれていた。感情によらないたき上げの技術力の発露の結果として、ただちに、自分に対処しきれない類の負傷であることを冷静に判断する。外傷の見えない、内部の傷である。彼女の持つ能力、技術で何とかなるようなものではないと直ちに断定した。

彼女は自身が下した判断を大きく首を振ることで表現した。そうしてからコルベールに視線を移す。

「私では駄目です！ すぐに医療室に運びましょう！」

「わかった！ ありがとう。ミス・モンモランシー。無理を言っただけで申し訳なかった！」

モンモランシーの発した回答を聞いて、自身の見立てよりあまり猶予の無い事態を悟ったコルベールは、さっと首を振ると、片膝をついて状況を見守っていたタバサに眼を合わせる。彼女の後ろにキュルケが慌てて走りよる。その後ろを、ドラゴン——風竜が大きな翼で風を巻き上げて降り立つ。

「ミス・タバサ！ 先に学園に行き、医療室の準備を整えてくれないか！」

強張った表情を押し殺すように小さく頷くと一転、タバサは小さな身体を翻して驚くべき跳躍力をみせて風竜の背に飛び乗る。

「あそこの建物。急いで」

「きゅいきゅいきゅいー！」

甲高い声を残して竜が羽ばたき、強い弓に番えて放たれた矢の様に飛び去る。

「あっははははははは！ ルイズが使い魔を殺したぞ！」

「わははははははは！ さすがはゼロのルイ……」

「黙れ!!」

硬直からさめた少年達が、笑い声を上げてルイズを指差したが、コルベールの怒声がそれを遮った。強い殺気すら秘めた視線が少年を射抜く。

「……い！」

「……い!!」

「ひっ！」

至近距離でその力の欠片を浴びせかけられたモンモランシーが、身を竦ませて地面に腰を落とす。

それに気が付かぬままコルベールが呪文を紡ぐ。

「この物の重さを疎に託して、宙に引き寄せたまえ。フル・ソル・ウィング、レビテーション！」

倒れ伏した少女の身体が浮かび上がる。焦った表情を隠せないコルベールは、怒声を張り上げながら、力の限りすばやい動きでイング

リッドの身体を運ぶ。

「授業は中止だ!! 解散しなさい!! 自由に寮に戻ってよろしい!!」

生徒に指示を出し、走り出す。

その彼に走りよったのは、あまり恵まれたとは言いがたい体格を持った、或いは随分と恵まれた体格を持っていると言ひ換えることも出来る少年だった。

「先生ー 僕も手伝いますー!」

コルベールの強い感情がこもった視線を受けて一瞬ひるんだ少年だったが、彼自身も同じくらいに強い感情をこめてコルベールを見つめ返す。その間も、コルベールは必死で少女の身体に魔法の力を浴びせ続けている。

一瞬悩んだ表情を見せたコルベールであったが、次の瞬間には小さく笑みを浮かべて頷いた。

「ミスタ・グランドプレ。ありがとう。手伝ってもらえますか?」

「はいっ!」

グランドプレと呼ばれた少年は、小太りな体を揺すって、普段のひょうひょうとした態度からは想像もつかない素早さで動くコルベールに必死で追いつき、必死にサポートを続けた。彼の頭上を心配そうな表情を浮かべた鼻が飛ぶ。

なにか思うところがあつたのか、幾人かの少年少女がミスタ・グランドプレと呼ばれた少年を追って、コルベールの周辺を併走しつつ、魔法をかける。レビテーションを交替でかけ得る状況になったことを理解したコルベールが一層素早く走る。

場に取り残された生徒達も、どこかとぼけた当たり障りのない、変人気質のさえない中年先生という評判の余り目立たない教師が、魔法をかけつつ、なおその状況で全力疾走に近い動きをすることに舌を巻く。誰とも無くお互いに顔を見合わせた後、すでに小さくなった彼らの背中を追いかける。

走り始めた生徒達の後を様々な動物たちが続いて追いつがる。

地面にへたり込んでいたモンモランシーはかなり出遅れて走り出したが、慌てた表情を顔面に貼り付けて一度戻ってきた。視線を彷徨

わけて必死の形相で飛び跳ねるかえるを見つけると、それを掬い上げた。

「ゴメンね。ロビン」

モンモランシーは手のひらにのせたかえるに優しく声をかけながら、頭を指でなでつけて、一息、溜息を吐くと、きびすを返して再度走り始めた。

後に残されたのは、腰を落としてへたり込んだルイズと、走り始めようとしたところで少女の状態に気が付いて硬直してしまい、走り出そうとした刹那の滑稽な体勢のまま、コルベールの後を追うタイミングを逸したキュルケであった。

キュルケは両足を地面に戻して、小さく肩をひそめる。そうしてから、所在無げに頭を掻いて首を傾げつつルイズを見つめる。

うつむいて地面を掻き抱くその彼女の表情は、キュルケのいる位置からは伺うことが出来ない。

キュルケは、唯黙って、足音を立てないようにゆつくりと、唯身体を震わせる彼女の背に近づく。

切なそうな表情を浮かべた彼女は、小刻みに震える小さな肩に触れるか触れないかのところで伸ばした腕を止めて、それを戻すことしか出来なかった。

銀髪の使い魔（2）

イングリッドが眼を覚ますと、その視界には木目が刻まれた天井があった。

ぼうつとして霞がかかったかのような思考を持ったまま、しばらくそれを眺める。

板と板の継ぎ目には僅かな段差すらなく隙間もない。突合せの造詣は見事で美しい。本来は別の木から取られたであろう隣り合った板の、視覚的な木目の連続性に配慮して組み合わせられたそのつくりは、明らかに一流の職人が丹精こめた造作である。また、その結論は、職人が納得するまで十二分に材料を吟味できるだけの材料を用意できるのだと言う事実も推測させる。

どこからとも無く漂ってきて鼻腔をくすぐるアルコール臭は、飲用に適した物ではないと知れる。消毒用に高い純度を維持した合成エタノールというところか。

白い壁。そこを打ち抜いて、大きな窓がある。窓枠にはまった透明度も平滑度も高いとはいえないガラス。やわらかな「春の日差し」が差し込んでいる。

視線を移すと、自分の身を包む、真っ白い、と言うにはやや躊躇いを覚えてしまう、いろいろな色の糸というか、糸そのものを完全に白く染め上げることが出来ずに、わずかにマダラになってしまったと思しきシートに包まれた、ペツタンコで重い布団が視界に入る。清潔なだけがとりえか。

頭の下に差し込まれたふくらみは、枕とは思えない。毛布を巻いて、敷布団を包むシートの下に差し込んだ。そんなところかと想像する。

かすかに空気の流れを感じるが、換気扇の類は見当たらない。空気の流れは一定で、肌で感じる雰囲気と言えば、数時間程度である程度の空気の入れ替えが自然と行われると思われる。

これはつまり、この自分が存在する部屋を内包する建物を設計する者が、非常に高度な設計能力を持ち、なおかつ、その設計を実現する

建築能力を持った者が多数居るということである。

頭を「枕のようなふくらみ」に預けたまま、小さく嘆息する。

職業病じゃな。どうでも良いことから情報を得ようと努力してしまおう。

……戦いは情報じゃ。闘いもかわらん。敵よりわずかでも情報が多いことが生死の分かれ目となることもある。だからと言って、こんな平和な空気のひと時に……!?

刹那の時を経てイングリッドの意識が完全に覚醒した。銀髪を散らして飛び起きる。余り行儀がいい行いとは言えないが、彼女は思わず自分が寝かされていたベットのの上に立ち上がってしまった。

さつと鋭い視線を周囲にめぐらして一息、周囲に警戒心を抱いたまま、音を立てないようにゆつくりと慎重に、ベットの脇の床に素足をつける。

なんじゃ。どうした、自分は。

周囲に視線をやりながら周辺の気配を探る。

部屋に差し込むやわらかな日の光の角度から見て、時刻は昼を回り、そろそろ小腹が空く頃。

差し込む光の深さは、晩冬から初春。室温は非常に快適。湿度はそれほど高くないが、乾燥しているというほどでもない。

光から感じる太陽の力の性質は、自分の知っているものとそれほど違いを感じられない。しかしそこから感じられる力の大きさは自身を知るものとは比べ物にならないぐらいに大きい。

その年、その時代によって随分と力の大きさを変化させる太陽であるが、幾らなんでもコレほどまでに急激な力の変化を見せれば、地球環境は滅茶苦茶になろうとイングリッドは想像する。100年、200年と言う単位で変化してしかるべき違いが、光から感じられる。

窓から見える風景は、風に揺らぐ、良く手入れされた花壇に名も知らぬ小さな花々。そこには環境の激変に伴う大混乱等は見当たらない。

ちなみにイングリッドは、花の名前とか種類とかに頓着しない。彼女にとって重要なのは見て、知っているその存在が、食べられるか、毒があるか、臭いがあるか、その匂いや花粉などが自身に影響するか、おいしいか、不味いか、どういった地域に咲いているか、どういった季節になると咲くか。そういった部分である。名を知ったところで意味はない。地域、時代によって名は変わるし、環境によって姿を移ろわせることもある。「知る」ことは重要でも「識る」事に重要性を見出せないでいる。

そういった意味でも「名も知らぬ花々」のその向こう側に、人が歩くために良く手入れされた石畳。その左右にこれまた手入れの行き届いた芝生が風に揺れている。

外の音が窓から伝わってこない。と、なれば、外の温度が室内環境に影響を与えないようにもなっている可能性がある。

一応、窓の方向を南と仮定する。

自分は西を向けてベットに寝かされていた。そういう事になる。若干どうでもいいことかもしれないが、それ自体も、文化的差異を予測する材料になる可能性があるため、状況を判断する材料としては蔑ろにするわけにもいかない。思考の隅に置いておく。

そろりそろりと窓に近づくとイングリッドに、徐々に記憶が戻ってくる。

窓枠が入ったくぼみの側に背を預けて、室内を見渡す。外からは石畳を外れて芝生を踏み、なおかつ、花壇を乗り越えて覗き込もうという意思がない限りは、まずは自身の姿が見られることはない角度である。そういう事も意図して、イングリッドは自分の立ち位置を慎重に定めた。

イングリッドが寝かされていたベットは、部屋の一番南側に置かれていたようだ。ベットと窓の間には一人一人が立ち入るだけのスペースだけがある。パイプ椅子でも持ち込めば、それで人の出入りは難儀するだろう。

西側にはクローゼットと言うには小さいがチェストと言うには大

きい、非常に凝った造作の家具が作りつけられている。

ベットをはさんだ北側には小さなテーブルと椅子が置かれ、その先を、天井から下がったカーテンが視界を遮っている。

カーテンはカーテンレールを解さずに、直接天井から下がっている。天井の高さはぎつと見立てて3メートル以上。非常に高い。カーテンの取替えに難儀しそうではあるが、カーテン自体は洗い立てのような清潔さを見せていた。

東側は、かなりのスペースが開いていて、5〜6人が立つてもなおスペースが余るだろうが、ベットを追加して置いてしまえば、人の出入りが難しくなるような中途半端なスペースである。

床を見れば、正方形の大きな木製タイルが、木目の通る方向をアミダにして敷き詰められている。

その平滑さ、その仕上げは、非常にすばらしい。見える範囲内だけではあるが、美しく磨き上げられた木目に、普通なら当然入り込んで木目を乱す節が一切見当たらない。素足で立っているのに、床に凹凸を感じることもなければ引つかかるような突起もない。見た目はガラス細工のようである。そうでありながら足の裏に伝わる感覚は、滑り止めを意図したと思しき細工がされていることを示している。非常に高度でありながら繊細な技術の存在を感じさせる。

真っ白い壁に眼を向けると、大きな格子状の線が入っている。これまたうんざりするほど平滑に仕上げられた壁にあるその線の正体は、積み上げられた石材の継ぎ目が線として浮かび上がっているのか、はたまた、構造材の上に貼り付けられたタイルの突合せの目地なのか。判断がつかない。

カーテンは東側で途切れて、一人が入り出ることができるぐらいのスペースがある。今、自分が立っている場所からは、視線が斜めに遮られて北側の奥が見通せない。その範囲内であつても、壁が見えないことを考えれば、自分が眠っていたスペースと同じような配置が連続していると仮定して、この部屋はベットが5〜6個は置けるぐらいの広さがあるのだろうか？

しかし、今のところは自分以外の気配は感じられない。

ベツトがいくつも配置されていたとしても、部屋の中に居ると確信できる気配は自分以外には感じられない。

イングリッドはなんともちぐはぐな雰囲気を感じていた。

建物自体の造作は、眼に入る範囲内であっても、緻密で高度な技術力の存在を主張する。何の装飾も無い簡素な風情だが、それをして質素と言つて良いかは甚だ疑問であつた。窓枠のはまった開口部は鋭角に切りそろえられており、だがその端部は柔らかなアールを描いて、攻撃的な姿を見せない。その工作は端から端まで一定にされており、高度な工作精度か、高度な技術力を持った職人の存在を幻視させる。

その奥にはめ込まれた窓枠自体も、重厚な木製の窓枠であり、装飾のない実用一辺倒でありながら深みのある色を見せている。時折外を吹き抜ける風にあてられてもがたつくことはない。

呆れたことに窓枠は、石材で出来ていると思われる構造材にただはめ込まれているだけのように見えるのに、隙間風が枠をすり抜けているような感じはない。窓自体も二分割して外に押し開ける構造のように見えるが、そうした稼動部を持つはずなのに、これまた隙間一つない。

とんでもない工作精度である。

窓を開けるための蝶番は、外からはうかがい知れない。つまり組み合わさった構造の内側に隠されているということ、その状態で隙間一つない構造を得ようとすれば、単部を斜めに突き合わせる必要があるはずだ。ガラスを支える枠自体の強度も相当あるのだろう。ガラスは重いのである。ガラスの重さに負けて、稼動部分が歪めば隙間が開く。或いは窓が閉まらなくなる。或いは窓が開かなくなる。その可能性は伺われない。そうでありながら、見たところ、結構な頻度で開け閉めされているように思える。

技術力もさることながら、窓一つ、床一つ、壁一つとっても、この建物を建築するに当たり、途方も無い費用が投入されたであろうことが理解できる。もしこれらの造作が、この周辺における建築物の平均的技術力であるというのならば、それはそれで恐ろしい想像である。

多分、あくまで多分、だが、そういう可能性はさすがに無いであろうから、そうなれば、ひどい成金趣味だ。と言いたくもある。が、控えめでありながら、さも当たり前のように手の込んだ構造。単純に成金趣味とは断じることができない。

モノホンの金持ち、と言うことだろう。イングリッドは眩暈を感じた。

さて、ルイズとやらに攻撃されたのじゃった。

ささつ、と素早い動きで一瞬外を見渡し、刹那にため息をついて、それからゆつくりと身体全体を窓に向ける。

白い石材の厚み分だけ奥まった位置に窓がある。窓枠を境に、自然石風に彫刻された、程よく古びた外装材の石材が外壁を彩っている。その厚み分だけ、窓が外から窪んでいる。

窓の両脇に白い、薄手のカーテンと遮光カーテンが括られている。上を見れば2条で一組のカーテンレールが中央でぶつかって区切られている。

あちらこちらに感嘆するほどの造作を見せるのに、なぜかガラスだけがいただけない。ガラスとしての最低限度以上の機能性は維持しているが、ガラス越しに見える外の風景は奇妙に歪んで、下に眼を向けるほど曇り、視界が遮られてしまう。

最初、そういう装飾を施されたものかとも思ったが、上は薄く、下に行くに従ってごくごく僅かながらも厚さを増し、しかし、窓枠に接する部分はそれに引っ張られるように奇妙に盛り上がって……!?

な……なんじゃと!

イングリッドは窓ガラスが奇妙に歪んでいる理由に気がついて驚愕する。

これは……!!

——ガラスはある意味、液体のような物質状態であるとも定義できる。そこからすれば、一見、固体で安定しているように見える板状のガラスであっても気の遠くなるような長い年月を経て、垂下するような現象が見られる可能性が「理論上の可能性」として存在すること

が示唆されている。

あくまで理論上の可能性にとどまる話である。実際には1000年程度でそのような現象が顕著に見られる可能性はない、と否定されているが――

彼女が持つ特殊な能力を通して見ると、そのガラスが「気の遠くなるような長い年月を経て」いるのが見て取れた。

どんな世界じゃ！

イングリッドは確信した。

イングリッドには「召喚」とやらを受けた時点で、僅かばかりの予感があった。

大地を覆う大気に濃密に溢れる『力』。

大地に満ち溢れる精霊。

大地の底から溢れる不安定な『力』の残滓。

大地を踏みしめる（一部、何の力でそうしていられるかは不明だが、ふよふよしている奴も居た）訳が分からないよ、な生き物たち。

煙が晴れて視界が開けた時点で得られた情報の内容のみを吟味しても、自身を包む状況が極めて異常であることはすぐに理解できた。

一つ一つを考えれば可能性がないわけではない。

大気に濃密に溢れる『力』。

所謂『聖地』のような場所であればありうる。

地球に於いても、世界中のそこそこにそういった聖地は点在する。組織の命にしたがって世界中に足を伸ばしたイングリッドは5桁に上るそうといった場所を巡っている。

場合によつては破壊、抹消すらしていたが、その手の『力満ちる聖地』というのは様々な理由により人間に必要とされ利用されるから、組織の『力あるもの』達が、押し付けられた仕事の片手間程度に壊して回っても、時代が下がるにつれてそれらは漸増するばかりで、減りはしなかった。

だいたい、悪意のみで満ち溢れた『聖地』なんぞという歪んだモノ自体が異常であって、普通は、街の気候を安定させるとか、人々の善意を集めて再分配するとか、はたまた人々の営みをささやかながらも守る「ぐらいいはしてくれと助かるな」程度の思いがこめられた『聖地』なんていうモノもある。

例えば極東の島国なんかではその手の『聖地』が数えることすら馬鹿らしいほどに、やたら滅多ら多かつたりする。街角に小さな石像をおいて、力を発散し、或いは悪意を堰き止めて浄化する類の『聖地』じみたものが溢れんばかりにあつたりした。

推物文明の極致にあると見れるような大陸東端の摩天楼であつても、ビルのデザインや、内装の配置、部屋の造りにそういった配慮がなされて、『プチ聖地』が用意されていることも多かつた。あからさまなものだと神棚とか言う奴である。

組織としてもイングリッド個人としても、箸にも棒にもかからないようなショボイ力の集合点なんぞはどうでもいいことで、だれぞ迷惑をかけん限りは、勝手に増えようと減ろうとどうでも良かった。

人の手が加わらなくても、時と場所がそろえば、人の手に余る『大いなる意思』とやらでしか説明できない偶然、あるいは必然でいつの間にかしら山の中に『聖地』じみたものが自然に出来上がる事すらある。勝手に力が集まって、勝手に力が淀んで、勝手に力が爆発して、謎の自然現象現る！ と騒がれてお終い。という事もあるし、山や川、自然の営みで出来た複雑怪奇な地形や巨岩なんぞは、大地の平滑を乱した時点で『力』の集まる特異点になりうる。所謂『竜脈』とか呼称されているのがそれで、そこに人の目が集まれば無意識の意志の集まりでなお強力な聖地になってしまう事もある。注連縄がまかれた岩とかはその典型例だ。

宗教施設だの、公共施設だのはさらにあからさまで、教会などはまさに人工的『聖地』の最たるモノである。

一つの方向に揃えられた人の無意識の意志の集合は、聖遺物だの、御神体だの、彫像だのの目標物を持って更に掻き集まり『力』の特異点となる。

公共施設などは、人を圧する重厚なつくりとか、人の意識に語りかける特異で特徴的なデザインとかで無意識の畏怖を集めて場の『力』を整える。それはそのまま施設に入る組織の力となる訳で、中には公然たる態度で政治討論を行う場の建物を不安定な力場に置いて、意識を混乱させる。そうしておきながら、政府組織の建物を強力な結界で覆い隠すようなことを積極的にやらかす。そのような国々すらある。まあ、つまりは、大気に濃密に溢れる『力』を感じられる場所というのを探せば結構あるものなのだ。

大地に満ち溢れる精霊。

人の行き着くところに果てはなく、地上で人の足が踏んだことのない場所はないとうそぶく馬鹿もいるが、そんなわきやあない。

人が踏み込んだ事の無い場所なんて、その土地の広さの大小はあれどまだまだ果ても無く多くあって、そこにあると見ればこぞって命知らずが飛びつくような山の頂ですら、なお、人の侵入を拒んでいる場所はある。

極めて極端な例を挙げれば、1000年にわたり人が住んでいる家であつてすら、庭の片隅とか、植え込みの下等に、本当にたまたま偶然の産物の結果として、唯の一度たりとも人の肌が振れた事が無い場所がある、という場合すらありえる。

何千、何万と人が押し寄せたような『秘境』であつても『秘境』である事が「ウリ」であるがために決められた散策コース以外の大地がまったくの手付かずで、大々的に観光地として売り出されたが故に人の手によつて守られて、呆れるほどに豊富な精霊の気配に覆われた場所。などという矛盾した存在も、まま見受けられる。

精霊もある種の生き物である事には変わりないから、そこに山ほどの有象無象が押しかけたところで、そのうつとおしい意識の攪拌すら上回る居ごちのよさを感じられるというなら、極端な話、東京砂漠のど真ん中でコンクリートジャングルに囲まれた公園が精霊の満ち溢れる場所になりえたりする。

まあ、ある種の猛禽類が、好んでビルの林立する大都会で繁殖して

数を増やすようなモンである。ちよつと違うか？

どちらにせよ、『精霊』さまの気まぐれに任せるほかないのであるから、精霊が集まる場所なんていうのは、しがない人間にはせいぜい経験則に照らしてこういうところが。なんていうばかりで、実際に精霊の都合で、精霊が押し寄せて集まる場所なんて人間の理解が及ぶところではない。

地の底に溢れる不安定な『力』の残滓。

大昔の聖地の残骸とか、文明の残りかすとか、宇宙人が地球にたどり着いて土に埋もれた宇宙船とか、謎の政治結社やら謎の組織やら（そこにはイングリッド自身が属する組織すら加わってしまうが）そういった『力』が地面に埋められて忘れ去られたり、地面の下に埋めて隠すなんてのはよくある話で、まっことテンプレである。

だいたい、そうやって忘れ去られた『力』の残滓が誘蛾灯になって人が集まり街になったり、施設が建ったりは当たり前なので、人がいる大地の下に地の底に溢れる不安定な『力』の残滓なんてのは当たり前すぎて珍しくもない。

これまた極端な例だが、大昔に造営された巨大な墳墓が忘れ去られて、そうでありながら、そこから漏れる力の残滓によって、後々、宗教施設が作られたり、大きな城が建ったりする例がそこにあつたりする。

今を生きる人々の営みも、或いは時を経て地に埋もれ、それが力の残滓となって、未来の人を引き寄せて街が生まれる。或いは、それが人の営みの繰り返しなのかもしれないとも思ってしまう。

わけのわからない生き物たち。

長く生きていると、わけのわからない生き物なんてのは何度も見ると、どれほどの経験を積もうとも初見の得体の知れない存在などというモノにぶつかり続ける。

まさに宇宙人が押し寄せて滅茶苦茶な闘争が繰り広げられたこともあつたし、何千年もの間、表立った人の歴史の流れから隔絶して、

こつそりと生き続けた集団なんぞというのも居た。地の底を割ってあふれ出た化け物の集団とか、神か悪魔かはたまたそれすら超越するかと言う、力そのものの表れなんぞというモノすら存在した。

吸血鬼やら雪男やら猫女やらとわけのわからないモノが居たし、人造人間とか、機械人間とか、精霊の側に踏み込んだとしか思えないほどに魂を高位の次元に晒した奴もいた。

ブランカなんかは人間と言うにはやや躊躇うところがあるし、自分の闘争の相手はドイツもコイツも人間離れして世界をかき乱す。

リュウや神人・豪鬼なんかはある意味わけのわからない生き物の最右翼であるともいえる。

どれほど長く生きようとも、人の身である以上は見知らぬ生き物、見知らぬ生き様は、どこにでもありふれているんだらう。

イングリッド自身に自覚があるかどうかは判らなかつたが、わけのわからない生き物の彼女なりの定義の中に、まさしく自分自身はまり込んでいる事実は華麗にスルーされた。

しかし、四つすべて……か。

イングリッドは悩む。

あの修羅場に落ち込んで、更に感じたイレギュラーもまた特異であつた。

杖をもってする『力』の発現。ソレを行いえるであろう少年少女たち。1人、少年と言うには歳を取り過ぎた者もいたが。

そして、あのルイズに吹き溜まった『力』。時間をまたいで、自分が眼にするこの建物の異常なほどのすばらしい造作。

そしてこのガラス。これは飛び切りの異常だ。

ざっと彼女自身の力を持って鑑定する限りでは、なんともはや、5000〜6000年は軽く飛び越えた年月を刻んだと思われるガラス。さすがにこれほどの物があれば噂になるどころではあるまいにとんでもない世界じゃ。

そう。世界。

間違いなく異世界であろう。

記憶の中に、自身の心を「キユン」とさせた、あの毛深くも誇り高い王の姿を幻視する。

つまりは、あの手の現象の逆バージョンと言うところか……。

芝居じみた仕草で両手を広げると肩をすくませ両の手のひらで宙を仰ぐ。

軽く身体を傾がせてふわふわと腕を揺ると、右手を突き出し、次いでゆっくりと顔に当てて、額を揉む。

そこで初めて自分が貫頭衣じみた服に包まれていることに気がつく。

ハア、とため息を吐いて身体を回してベッドに腰掛ける。

お尻に伝わる反動から、このベッドが単なる板張りであることを知る。スプリングも何も無い。

ベッドに敷かれた敷布団もなかなか適当なものであるようだった。

羽毛とか言う「高級な」感じはしない。ざらついた、かさかさの感触が帰ってくる。もしかしたらわら束でも入っているのかもしれない。まあ、よくよく乾燥させた清潔な藁ならば、布団の材料としてはそれほど特異なものでもない。保温性は高いし、除湿性もある。ただし手入れを怠ると、極東の地で見られる種の発酵食品の臭いが漂ってくるのが難点ではある。

幸いにして、ここにある布団からはそのような匂いはしない。随分と清潔で手入れの行き届いたものであると想像された。

様々な思考を持って観察した結果、大変に常識的な判断をもってこの場所が、病室じみた医療用の部屋のようにであると結論つけた。だが、イングリッドは首を捻る。

自分のような得体の知れない人間を一人放って置くとはどういう

了見じゃ？

彼女が気配を探ったところ、この【推定名称：病室】の隣あたりに複数の人の出入りを感じるし、この部屋が属する建物全体ではたいした数の人間がうごめく様が見て取れる。

コルベールと呼ばれていたおっさんの対応から考えれば、自分が危険人物と見なされていたことはまごうことのない事実であろうし、監視の一つがあってもおかしくはないとイングリッドは思うのだが。まさか、現状の制限された自分「程度」の力など一ひねり等という者の集団がいたりするのであろうかと首を捻る。

大体からしてイングリッドの推定が、この部屋を【推定名称：病室】から【確定名称：病室】に出来ないでいるのは、医療器具が見当たらないし、水囊一つ、水差し一つない殺風景だからで、実はある種の監獄であるのではないかとすら思えてしまう。エタノールの臭いと見た目の印象から「病室」と想像しただけである。壁の向こうでうごめく気配は、実は看守で、カーテンの向こう、いまだに眼にしない北側の壁は、そもそも壁等なくて鉄格子。等という妄想すらしてしまう。イングリッドは敵対する組織に踏ん捕まって、隔離されたりなんという経験はそれなりに豊富に持っていたりはしたし、場合によっては、豪華な貴族風の部屋で何年も軟禁されて腐った経験も持っている。

彼女の感情を苛む影響力としては、壁からも床からも窓からも感じられる得体の知れない力の発露がある。微弱ではあっても、全周から放出されてイングリッドの肌を刺激し続けている。そして彼女はそれの正体を図れないでいる。地球では一切感じた事のない、比較対象のない「力」だ。

自分の記憶の中から比較対象を見出せない力というのは恐ろしい。理解できないというのは人間にとって最も原初的な恐怖を沸き立たせる。それはどれほど力ある人間であっても変わらない真理だ。自身を力ある人間と冷静に自己分析できる人間というのは、そうであるからこそ、自身の理解の及ばない力に対して極めて慎重な態度を取る。だからこそ、彼らは生き残れる。イングリッドという存在も、疑

いようもなくそういう人間に列する。

そうであるから彼女は、自身の力が、まあ全快状態であると自己採点してもなお、強硬手段を持って部屋を飛び出して周辺を探ろうという気分にはならなかった。

……待ち、じゃな。

身体を捻って足をベットのの上に投げ出し、イングリッドは眼を閉じる。

イレギュラーな事態というのは山のように経験してきた。

状況そのものは飛び切りの異常事態ではあるが、自身の現状も含めた状態そのものは悪い訳ではない。自身がどうしようもない危険物と断じられれば、あの場で存在を抹消されてもおかしくはなかった筈である。

しかし、自分はココにいる。確証はなかったが、どうやら治療まがいの行為までされている可能性がある。で、あるならば。

まあ、なるようになるじやろ。

イングリッドは深い息を吐いて、布団に身体を預けた。その後、極僅かの間において、小さな寝息が空気を震わせた。

イングリッドという名の剣呑な『人間』がベットに身を預ける施設は、その総体を指し示してトリステイン魔法学院と呼ぶ。

トリステイン魔法学院は、ハルケギニアと呼ばれる人類の版図に於いて、始祖と呼ばれる存在の『終わり』の時代から続く由緒正しい3王国のひとつ、トリステイン王国の王都、トリスタニアの南西、馬に鞭をくれて20時間といった場所にある。

トリステイン魔法学院とその周辺は、学院で勉学に勤める生徒達を雑音から遮るために、広大な範囲が魔法学院所有の土地となっており、出入りが制限されている。

……事になっている。

横断するのに馬を駆つて5時間以上はかかると言う、その広大な土地、その隅々まで眼を光らせる方法等存在し得ない。基本的に『土地』という財産は王国の所有であり、各地に存在する領主に配分され、維持管理が委託されているとはされているが、それもまた建前。

魔法学院という存在が所有する周辺の土地は、この国のあり方としても、この世界のあり方としても特異ではあるが、そうであるが故にその扱いが曖昧であった。

魔法学院としては別段、通行税等を始めとした諸税を地域に住む者達から吸い上げるわけでもなく、周辺の土地の管理も一部を除いて半ば投げ出した形であるから、一種の治外法権である。

となれば、各地で生活に困窮して税の徴収から逃れようとする者達が押しかけかねなかつたが、実のところ、魔法学院という『得体の知れない存在』が周囲からの平民の侵入を拒んでいた。

現実問題として、魔法学院という存在は非常に特殊なものである。個人の資質によるところが大きい魔法という技術は、血に頼るところ大であり、ある意味で一子相伝の伝統によつて一族に受け継がれる技術である。

基本は基本として、まとめて教える事にある程度の合理性があることは否定できない現実ではあるが、本格的な技術の習得・研鑽に置いては、能力の高低差がついた集団に対する、時間を区切つた一律の教育は害悪ですらある。

魔法という特殊技術が『貴族』という存在による独占技能であるとされている『ハルケギニア』という世界では、魔法能力の優越が、実務的な面で貴族の良し悪しを規定する側面があるから、個々の貴族に受け継がれる特殊技能としての魔法が外部に漏れ出る可能性のある集団教育の場など、本来はありえないとも言える。

しかし、現に魔法学院は存在する。

歴史を探ればハルケギニア全土に多数存在したといわれる「魔法学院」がトリステインにのみ生き残ったのは、過去のトリステインの人々の深謀遠慮故であるがそれはともかくとして。

現状に於いて魔法学院を冠した施設はハルケギニア全土を見回し

ても、トリステインにのみ存在を許されている状況である。

よつて、魔法の習熟を得て上を目指す諸氏にとつてはトリステイン王国貴族のみならず、他国の者も、ここに留学する以外の選択肢を持たない。

建前である。

実際のところ、トリステイン魔法学院における最大の存在意義は、若い貴族たちにとつての社交界デビューの前にあるワン・クッションといったところだ。

ここで顔をつないで、実際の社交界において、恥を搔かない程度には貴族社会に慣れる様にとつていう事である。

また、一癖も二癖もある有象無象の百鬼夜行が連なる貴族社会に、今まさに泳ぎ出そうとする若い貴族たちに、それなりの『社会常識』を身につけさせる場、という側面もある。

しかし、その本音の部分すら危ういのがこの魔法学院の現状である。

入学時点での年齢層はばらばら。教師の質は落ちるばかり。入学持参金の多寡が先生と生徒の間の関係を決めている。

授業もおざなり。何十年か何百年か前に決められたカリキュラムが飽きることなく繰り返し返されて、生徒の上に垂れ流されている。

本来の意味の学校という存在であれば、学校の卒業時点である種の鑄型に嵌め込んだかのごとく、一律平均的能力を持った人間の大量生産が発揮され得るのが筋ではあるが、この学院にそれはない。せいぜいが「名門トリステイン魔法学院」を卒業したという箔が得られるぐらいである。

それも技術的に優れる人間に対する賞賛の意味としての箔ではなく、トリステイン魔法学院における在籍期間中に対して、莫大な授業料を払い得たという貴族の格を示す物としての箔である。

本当に技術も能力もある「魔法使い」としての「貴族」、つまり「メイジ」の格を高めるのであれば、貴族が個々に、子供達に教育を施して研鑽するのが筋である。

では、現状のトリステイン魔法学院の位置付けとは何であろうか？

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールという少女は自身の能力に懐疑を抱き続ける人生を送ってきた。

2年生になって3日目の座学となる授業は、デュピュイ・ド・ローム先生の子守唄のような声の下に進行する。

実技に集中し、専門課程に細分される2年生という学年ではあるが、初学期始まってすぐのこの一週間は、1年で学んだ教育の総括ともいえる授業が連続して行われる。

ここで1年の勉学を振り返り、基本を見直して、新たなステップを踏むための準備に当てるとというのが建前だが、あくまで建前である。

実際には学年をまたぐ間に差し込まれた、休みの期間中にだらけた生徒達の頭を、学院における学業へとスイッチさせるためのインターバルといったところで、学院の空気を思い出させる場ではない。

更に言えば、新学年が始まったこの時期と言うのは、今の今まで不特定多数による集団生活等思いもよらなかつたわがまま放題の貴族の子弟が大挙して「新入生」と言う形で押し寄せた直後であり、学院の大多数の教師や使用人は、そのような『自由奔放』さを隠せない糞餓鬼をなんとか秩序に押し込むのにてんやわんやである。そんな状況では一応それなりに集団生活らしきものに慣れた2年生や3年生なんていうのはとりあえずのこと、授業と言う形で集めて教室に押し込み、大騒ぎする教師の邪魔にならなければそれでよいという、なんとも後ろ向きな理由があった。

そんな意味を持つ、あるいはその程度の意味しか持たない授業であるから、座学において、非常にまじめで優秀な生徒であるルイズは、ノートを広げ、ペンを走らせて、必死にド・ロームの声を聞き取っていたが、そういった姿勢はこの教室内部では例外中の例外であった。だいたい教師からして、生徒に対してそのような姿を見せることを一縷も望んでいないという末期的状况である。他の生徒達はだらけきって椅子の背にもたれ、或いは机につつぶし、思い思いの時間を過ごしていた。それで良い。それが許される時期であった。

ある生徒は異性との間で指を絡ませて愛をささやき、ある生徒はつめにやすりをかけて、ある生徒はどう考えても教科書とは思えない巨大で年季の入った本に視線を走らせる。

或いは、ある生徒は氣の入った異性に認める手紙の文章を推敲するところであるし、ノートの空きスペースに、召喚の儀で姿を見せた「神秘的な」女性の姿を個人的趣味を上乗せした形でスケッチする者もいた。或いは椅子に広げたカードでゲームに興じる者達もいる。

ルイズは、そうした周囲の状況に流されることもなくただ一人「建前」の授業を、必死で追いかけていた。

ルイズがある種の恐怖と不安に苛まれつつも必死で勉強に勤しむのには、トリステイン魔法学院の現状の存在位置があった。

長い長い歴史の中で、すでにハルケギニアの人類版図では、貴族に対する新規の土地の再分配は限界に達していた。

ある時には、南の海を越えて、レオ・アフリカヌス大陸におけるコロニーの建設を目指した時期もあったが、現地に蔓延る強力なモンスターや、過酷な気象条件等により頓挫。それに追い討ちをかけるように、風土病が侵攻部隊を襲って壊滅。撤退した彼らと共にハルケギニアへ風土病が持ち込まれて大惨劇を巻き起こすという悲惨極まりない結果となった。

現状は、偶然に発見されたいくつかの貴金属鉱山と、レオ・アフリカヌス大陸北部から北西部沿岸部における土地の所有のみが何とか維持されている状況で、ごく一部の冒険心溢れた変人貴族の努力^{趣味}を除けば、更なる勢力拡大には1000年は待たないといけないだろうと言われている。

一度は大部隊を渡海させながら、それほどまでに否定的な予想がされているのは、レオ・アフリカヌス大陸開発運動により、その望まれぬ結果として大陸よりもたらされた風土病がハルケギニア全土を覆って猖獗を極め、おもに平民レベルでの大量虐殺を引き起こしてしまったためである。この大虐殺を逃れたのはごく僅かな国のみであった。

400万とも500万とも言われる犠牲者を出したとされるこの悲劇は、貴族の莊園経営に致命的ともいえる甚大な被害をもたらし、多くの貴族が没落して離散し、野に下った。この事件がハルケギニアにおける統治体制に対してまことに致命的であったのは、犠牲者の多寡によるところではなかった部分が問題をより混沌としてしまった。

皮膚が崩れるような凄惨な外観を持って人を死に至らしめる疫病。「アフリカヌス疾病」、あるいはこの病気を研究し、それなりに有為な治療法を確立したメイジの個人名を冠して「バーセット氏病」がハルケギニアの統治問題に与えた影響で最大の所は、土地に住まう平民に土地への愛着や帰属意識を振り切って離散する事を強要した部分である。

ハルケギニアに住まう平民は、従来であれば基本的に、生まれ出でてから死を迎えるまで、一所の土地から離れる事が無いのが普通であった。ましてや一生の内で国外に出る機会等というのは、精々のところブルミル縁の聖地巡礼程度で、それこそ物見遊山などというのは例外中の例外であった。

「アフリカヌス疾病」がその常識をあつさり粉碎してしまった。経験則として、或いは、単なる恐怖心からかもしれないが、この種の疫病が流行した場合における最大の対策というのは、病人から遠くはなれる事であることを、平民たちは「知って」いた。ただし、通常の病気であれば、病人を家に閉じ込めるだとか、村ごと隔離するだとかの対応を取るのが普通である。それで隔離できる事を皆「知って」いた。

ところが「アフリカヌス疾病」はその常道が通じなかった。どれほどに隔離をしても、嚴重に管理してもそれをすり抜けて外部に拡大した。常道が、経験が通じない事実が知れ渡ると、大混乱が発生した。周辺域で「アフリカヌス疾病」が発生すればパニックが起きる事が常態化し、死への恐怖が平民を突き動かした。

病気を発症しているものから離れる事が、疫病対策の基本である。平民達が知る限りに於いては。しかし新興伝染病である「アフリカヌス疾病」はそうであるがゆえにどれほど離れば安心できるか誰も知

らなかった。ましてや隔離をすり抜けるのである。と、なれば。

病気が発生した地域で、土地を捨て、遠く離れた地域へ移動しようとするものが続出した。簡便に言えば難民が発生したのである。「アフリカヌス疾病」が流行中は各地域は疫病の侵入を警戒して人の移動を制限したから、まさに難民である。十分な警戒を怠らなかつた地域であつてすら疫病の発生を免れ得なかつたことから、難民問題はあつという間にハルケギニア全土を覆つてしまった。貴族も例外なく病魔の侵攻を抑えられないどころか、病魔に倒れる者が現れるに及んで混乱は頂点に達した。

ハルケギニアの政治体系そのものを崩壊させかねなかつたこの問題を収束に向かわせたのが、ジョージ・ドウリ・バーセットによる治療法と感染ルート特定の発表であつた。

トリスティン生まれの母、東方辺境生まれの父を持つアルビオンのメイジであつた彼は、当時仕えていたゲルマニア政府の強力な援護の元に、「アフリカヌス疾病」の研究に没頭し、僅か数年で「アフリカヌス疾病」の病理を解明した。彼の研究成果であつても、発病した者を確実に救う手立ては無かつたが、感染予防と、感染ルートの根絶は図ることが出来、実際に、パンデミックは収束したために、ハルケギニアにおける混乱は劇的な収束を見た。

だが、離散した住民が元の土地に戻ることはなかつた。戻れなかつた、が正しいかもしれない。

同時多発的に各地で難民が発生したのであるから、元の住民が住まう土地に入れなかつた彼らは、住民が難民化して、無人となつた地域に根を下ろしてしまつた。そういう状況が玉突きに発生したため、もはや誰がどこにいたかなんていうのは言い出したところでどうしようも出来なかつた。

本来であればそういった状況を管制する筈の国家や、地域管理者たる貴族においても「アフリカヌス疾病」は等しく平等に襲い掛かつていたため、彼ら自身も混乱して管制も管理も出来なかつた。

彼らが病魔に倒れてしまつたのだからと言う理由ならばともかくも、病気を恐れて管理すべき土地を放棄した貴族が少なからずいたこ

とが問題を深刻化した。その問題を上部で管制すべき管理者たる国家為政者の中にも姿をくرامせしたものが続出したから、どうしようもなかった。一時的な無政府状態があったのである。

管理が放棄された土地の住民台帳などは離散してしまい、もはや地域にもともと誰がいたかなんていうのは確認の仕様もなかった。後年の調査では流入した難民が現地に残されていた書類を意図的に破棄したらしい疑いも出てきたから、誰がどこの土地に住んでいたかの確認は不可能事になって当然だったともいえる。

東方辺境に新興貴族がやたらと多い理由でもあるこの出来事であるが、ひとつだけ利点らしきものを見出せば、各国で再配分可能な「新たな土地」を突然に生み出した点があるかもしれない。

しかし、ハルケギニアにおける土地問題の長期的解決には貢献しなかった。深度化しつつあった土地の再分配問題を收拾のつかない混乱へ投げ込んだだけとなってしまった。

貴族たちがせっせと持えた子供達に分配するには、肥沃さと多数の住人の居住による税収を期待できる土地は余りにも少なくなってしまうていた。6000年という歴史の積み重ねが、あまりにも貴族の絶対数を積み上げ過ぎていたせいでもあった。その貴族達が減ったとは言っても、もともとの貴族の絶対数が適正と思われる数を大きく上回っていたのだ。

レオ・アフリカヌス大陸開発運動後に発生した出来事の結果として、住民が離散してしまつたが故に荒れ果て、再興を図るには莫大な持ち出し予想される土地があちらこちらに現出してしまった。その結果として困窮、離散した貴族が続出したのではあるが、貴族が適正数に近い数に減つたと言つても、その適正な数の貴族を養える土地自体も減少していたから、アンバランスが逆に先鋭化してしまった。

各地に散在する、そういった状況から免れた「資産価値の高い」土地も、いい気になって過酷な税の取立てをしようものならあつという間に住民が離散する結果を招いて貴族の生活を粉碎して終わりとなつてしまい、貴族制度を根幹とした国家経営と言う名の収奪制度の維持が酷く面倒になっていた。レオ・アフリカヌス大陸開発運動後の

地獄の記憶の残滓が、平民の、自身が住む土地に対する執着心を完膚なきまでに破壊してしまっていたのだ。「少し昔」と違って、一丁有事あれば、あつさり生まれ育った土地を見捨てて彷徨う事に躊躇しない平民が酷く多くなっていた。レオ・アフリカヌス開発運動とは関係のないところで発生していた経済活動の発展の結果として増大しつつあった中産階級社会の成立がその問題をややこしくしつつもあつた。

中産階級の職業の場は、第二次産業、第三次産業である事がほとんどだが、そうであるが故に労働力として流動性が高い。土地に縛り付けられているわけではないので、適切な労働の場があればあつという間に他に流れてしまうのだ。

今現在は、どこの貴族も平民の住人が外部に流出しないよう対策するのに腐心しきりである。産業を振興し、インフラを整備し、住み易い環境を整えてと、大変に忙しい思いをしている。優雅さとは程遠い。

6000年にも及んだ現ハルケギニア専制君主王朝期は、制度疲労を起こして綻びを見せていたのである。

基本的に、男性長子が相続する貴族制度において、2子、3子の扱いは悲惨であり、女兒であれば結婚相手を探して嫁がせることも出来得たが、男児に関してはそうもいかなかった。分配するべき土地はすでに荒地か荒野かと言う有様とほぼ同様な状況に陥っていたし、そのような情勢の土地を腰をすえて再開発を図ろうとする貴族の存在は例外中の例外だった。

大多数の貴族は現状維持で破断点の上でなんとかバランスを取っている有様であり、荒れ果ててしまった部分の領地を再開発するための資金なんてどこからも捻り出す事は出来ない情勢である。収益を挙げる土地を細切れにして配ってまわる余裕などもあるわけも無く、長子以外の子供に分けて与える資産は無いのが正直なところであつた。

土地の再開発を図ろうとするがために税の収奪を強めれば、現状、辛うじて税の徴収に応じている住民の流出を招いてすべてがご破算

になりかねないから、特に、レオ・アフリカヌス大陸開発運動で先頭を切つて財産を放出し、開発に奔走した貴族ほど、状況は苦しいという状態である。

ある程度以上に優秀な人間であれば土地を持たない実務的政治家としての一代限りの分家を造ることも可能ではあるが、そうしたところでその子孫が野に下らざるを得ないことには違いない。ましてや由緒正しい貴族の血族である。

必要ないから間引くわけにもいかない。ある程度、能力のある貴族などは溢れて久しいから「ちよつと能力がある」程度では王都に上がることすら出来ないし、他家に婿に行くことも出来ない。6000年という歴史が営々と築き上げてきた貴族制度はその結果として、溢れんばかりの貴族とそれに連なる血縁を山のように吐き出してきたのである。

となれば、長子以外の兄弟は部屋住まいとなり腐るばかりで、問題は、ある程度以上に教養があり行動力がある者が腐っている場合となる。

当然ながらお家騒動の火種となるわけで、レオ・アフリカヌス大陸開発運動の頓挫以降における貴族内で頻発する騒動は各国とも頭を悩ませるところである。

レオ・アフリカヌス大陸開発運動自体が、深度化の度合いを深めていた貴族の財産再分配問題に対する切り札とされていたのではあるが、それが招いた結末は悲惨で皮肉である。

現状、トリステイン魔法学院に入学してくる生徒は、長子以外の貴族。しかも年齢層はばらばら。おおむね18歳程度までの年齢で入学してくるが、それにしたところで限度はある。

ルイズは15歳で入学したが、実は平均としては遅い部類である。概ね13〜14歳で入学する例が多く、ルイズの同級生の中には17歳で入学という例すらあるが、かなり特異な部類である。

同じ家から2子3子が同時に入学することすらあり、歴史の中で、一度は急減を見せたトリステイン魔法学院の生徒数を激増させる結

果となっている。

現在、それらの者達の魔法学院入学に対する最大の動機は出会いである。

伴侶を求めて魔法学院に押し掛けて、それなりの相手を捕まえてこいということである。

それに付随して、裏の理由があるのだが、それを含めてルイズの立ち位置は微妙である。

ルイズは板書をノートに書き写しながら強い焦燥感を募らせる。

自身では成功したと、到底納得できないサモン・サーヴァントの儀式。

コルベールのとりなしで、一応は2年生の授業に参加しているが使い魔を持たない自分の立場は微妙に過ぎる。

大混乱の中で終わってしまった春の使い魔召喚の儀式で、コルベール先生が予想外に生徒思いのよき先達であることを知れたのは僥倖だったが、自分の立場に変わりはない。

貴族制度からあぶれたごくつぶしの吹き溜まりと化しつつある魔法学院における自分の立ち位置。

トリスティン屈指の名門貴族であるヴァリエール公爵家の三女という状況は、狼の群れに投げ入れられた哀れな子羊というところであろうと想像してしまう。

しかも自分の魔法特性。いや、特性ともいえない能力。いや、能力すらない。

ただ、ヴァリエールの名を汚さぬように必死でもがいた1年。いや。それも違う。

自身の特殊性、あるいは無能に気がついてしまったからの茨の人生。

魔法学院への入学。

そういうことなのだろうか？

トリステイン王立魔法研究所に勤める優秀な長女。不幸にもその出自から病を得て、先の暗い次女。

順当に行けば、長女が婿を得て、家を継ぎ、心優しい次女は短い生涯を部屋住まいで過ごしておしまい。三女として必要なことは？

暗い思考に押しつぶされそうになる。

そういうことなのだろうか？

ましてや使い魔ひとつ得ることも出来ない無能。

誇りやプライドといったやくたいたいもない物を除けば、自分にあるものといえば血筋の良さだけだ。それでヴァリエールの名を汚さないようにという考えがどれほど滑稽なことか。

涙に視界がにじむ。必死でペンを走らせる。大げさな仕草で教科書を手に取り、何かを探すかのように無意味にページをめくる。そうやって自身の思考を紛らわせるルイズ。

キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー。

微熱を二つ名に冠する、ルイズの「級友」である。

ルイズの故郷であるトリステイン、ヴァリエール公爵家に直接境界を接する、ゲルマニアのフォン・ツェルプストー家からの留学生である。『火』の系統魔法を得意とする、優秀なトライアングルメイジではあるが、その出自は、結果的に後妻として認められた女性との間に儲けられた庶子というややこしい立場であり、実子からは随分歳の離れた子供であった。その肌の色が示すとおり、レオ・アフリカヌス大陸開発運動中に父がレオ・アフリカヌス大陸でやらかした現地妻との火遊びの結果である。

そうした彼女が本家に足を踏み入れることが出来たのは、平民に大いに牙をむいた地獄のケモノがツェルプストー本家の人間を掠めたからであり、父を除いた血筋がそれによって、ほぼ一網打尽になった

状況では嫌も応も無かった。

キュルケの殆ど記憶に残っていない本当の母親は、キュルケ自身も、その周囲も、理解する事も納得する事も出来ないが、しかし、さもありなるとうっかり頷いてしまえる理由で往生してしまっており、現在は貴族の体裁を守るという理由以外はかけらも存在理由が無い女性が「母親」である。ただしレオ・アフリカヌス大陸開発運動における過酷な現実が肉体に与えた影響として、キュルケの父親が女性に対して性的反応を見せることはなくなっていたから、現状、フォン・ツエルプストーという家の血筋を後世に残す可能性のある存在は彼女だけであるという、本人には迷惑極まりない状況がある。

実際的な問題としてキュルケには、本家に対する愛情は、愛想の欠片位は深く持っているかもしれない程度にはあったが、フォン・ツエルプストーの跡取りを期待されるのは至極迷惑極まりない現実であった。

そうした出自を持つ彼女にまともな縁談があろう筈も無く、実家よりとある老公爵との縁談を押し付けられそうに至り、彼女はトリステイン魔法学院への留学に走った。

燃えるような赤い髪と瞳、褐色の肌を持つ18歳の成熟した女性である。

留学理由から考えて見ても、学院における勉学等どうでもいいと考えている。なおかつ、実家からの縁談を跳ね除けるにたる出会いが得られれば良い。そういう理由から、現在のトリステイン魔法学院の状況をもっとも体現している女性とも言える。

しかし、異性に向けられるはずの彼女の微熱は、教室の前の席で身を縮ませる少女の背に向けられている。

やすりがけが終わって整えられた爪に息を吹きかけて、満足げに笑みを浮かべると、しかしその視線は桃色の髪の毛に吸い寄せられてしまふ。

彼女は自身が出会いを求めてこの学院に飛び込んだことを否定しない。そこに情熱を傾けられる伴侶を得ることが出来るのであれば、その相手が田舎の貧乏貴族であってもかまわないとすら思っている。

そういう点では、ある種のロマンチストであるとも言える。

しかし、1年の学院生活は失意の連続であった。

家柄も顔もよい貴族たちにコナをかけまくって得られた教訓は、ここがゴミ溜めであるという事実であった。

成熟した女性の身体を見せ付ければ腰を振ることだけに汲々として、気の利いた言葉をささやくことすら出来ず、何かといえれば家柄を持ち出して上から視線を向けることしか出来ない無能。

時間も行動も惜しまずに、身を飾ることに労力を費やし、自分の価値を高く飾る事に能力を傾けて多くの男性を振り向かせてきた結果、そのみに嫉妬して、心無い言葉を吐きかける若いツバメ達。

情熱どころか、微熱すら拭き消えかねない。

そうした中で、事あるごとに眼に入った少女は、彼女の微熱を熱く燃え上がらせた。

何があっても貴族であることを失わない少女。

実技で失敗を繰り返してなお折れない心。

汚い言葉を浴びせかけられて、それでもうつむくことのない強い意志を秘めた瞳。

ああ、今ならば言える。今ならば断じることが出来る。

私は彼女に恋をしている。

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールという少女は、無能かもしれない。魔法こそがすべてであるトリステインにおいては尚の事であろう。しかし、無力ではない。こんなにも私の心を熱くさせる。

キュルケには深い後悔の念がある。

最初にルイズと言う少女に声をかけたのは、トリステイン王国一の大貴族、名家の三女でありながら貴族としてあるまじきことに魔法を使うことの出来ない無能と言う、嘘にしても余りにも稚拙でありえない噂の醜聞に興味を引かれた結果である。その噂の内容が僅かの可能性を持って真実であったとすれば、ある種のシンパシーを感じたという、後で考えてみれば余りにも浅ましい、ルイズのプライドを打ち砕く浅慮があった。

その交錯は、それは酷い衝突になった。出会うたびに罵り合う「仲」になってしまふ結果を招来した。自業自得だと嘆息するのは容易いが、時がたつにつれて自身の短慮の様が、キュルケを苛んだ。そして実際に魔法の実技で失敗を見せるにいたり、そしてキュルケ自身がその素晴らしい自身の才能を披露してルイズに爽やかならぬ感情をぶつけたことで、その対立は決定的になった。ルイズとの関係を修復する可能性は絶望的だとキュルケは嘆息する。

所詮は自分も歳若い無能な少女だったのだろうか？

心の底をちろちろと焼く、残り火のような炎は、ルイズに対する好意の裏返しだった。

私はあの立ち振る舞いが好き。

私は決してうつむくことのないあの顔立ちが好き。

私はいかなるときも晴れることのないあの緊張をはらんだ小さな身体が好き。

私はどこまでも遠く彼方まで届きそうなあの涼やかな声が好き。

私は決して曇ることのない矜持を出し惜しみすることのないあの行動が好き。

そして、私は、いつ、いかなる困難にぶつかっても決して折れることのない意志と覚悟を秘めたあの瞳が好き。

私はあのルイズの、人としてのあり方が好き。

暗い感情がよぎる。

彼女はサモン・サーヴァントを成功させた。失敗ではない。確かに『使い魔』を……使い魔候補を呼び出した。それは疑いようもない。

呼び出されたモノが人間であるとかどうとかは関係ない。何かを呼び出した事実すらもキュルケの心中では、実はそれほど重視されることではない。

重要なのはルイズが、僅かな疑いもなく、魔法を成功させたのだという1点である。

失敗を続けたルイズ。

「その彼女が魔法を成功させた。

魔法を成功させ得たのだ！

きつと、大丈夫。

相手が意思を持った人間であるがゆえに不幸な行き違い、そして事故へと繋がったが、それはそれ。魔法を「成功させた」のだという事実は変わらない。間違いない。

呼び出した『使い魔』候補にコントラクト・サーヴァントを行え得なかったという1点で彼女の心が折れそうになっていることに気がついて歯噛みする。

大丈夫。

そう、声をかけたい。

もう大丈夫。

その言葉を送りたい。

しかし、入学からの1年で固定されてしまったルイズとキュルケの関係が、2人の立ち位置がその言葉を難しくさせる。

何を言ったところで彼女は悪くしか取らないだろう。

誇り高いプライドの鎧でその身を着飾った彼女は、そうであつても、いかなる言葉も跳ね返して強い反骨心でそれを切り伏せてきた。

しかし、今のルイズはもろい。

今にも砕けそうな小さな背中が切ない。

せっかく綺麗に整えた爪を無意識に乱暴にかみながら、キュルケはルイズに強い視線を送ることしか出来ない。

青い髪を輝かせる少女が、眼鏡の位置を直す仕草をしながら、キュルケに視線を向け、次いで、桃色の髪に視線を送る。

彼女は小さな、本当に小さなため息を吐く。

時間ばかりを気にして、辛うじて読める程度の板書を殴り書きし続けるド・ローム先生の脇の扉が勢い良く、しかし静かに開かれる。何事かと視線を向けるド・ロームに、なんでもないとばかりに手を振るのは、コルベールであった。

ルイズの表情に緊張が走る。

教室を見渡しして、思ったよりも近い場所にルイズの姿を認めたコルベールは一瞬、小さく驚いて眉を跳ね上げ、僅かに首を振ってから、音もなくその小さな身体に走りよった。ルイズの整った顔に、その耳に自身の顔を寄せて、周囲に僅かな音をも漏らすことなく、囁いた。

ルイズは自身の耳に入って伝わったその言葉に、かすかに顔を紅潮させて、ゆっくりと立ち上がる。そうして一息、見つめ続けているキュルケであったからわかるほどの小さな震えを身に宿すと、すでに教室の出入り口へと、身体を向けたコルベールの後に続いてド・ロームの前を横切る。

興味なさげな表情でそれを見送ったド・ロームは、2人の身体が間違いない教室の出入り口をくぐったのを見届けて後、振り向いて黒板に向き直り、板書を再開する。

コルベールとルイズは教室から立ち去った。廊下を、かすかな足音が遠ざかる。

なんとなく教室全体がざわつくなかで、黒板をリズムカルに叩くチヨークの音が響き渡る。

キュルケはため息を吐いた。

あの子、インクつぼの蓋もしていないじゃない。

ゆっくりと立ち上がって、音を立てないように教室の前に移動する。その姿を興味深そうな視線で追う、幾人かの生徒達。

何を勘違いしたのか小さな笑い声が沸き起こるが、その声に反応したド・ロームの視線に口を紡ぐ。彼は教室を見渡し、いつの間にか席を移動した目立つ立ち振る舞いの女性の姿を眼にして、その行動内容に気が付いて僅かに眼を見開いた。だが、すぐに興味なさげにその姿を振り切ると三度、板書を再開した。

キュルケは握りの部分にふんだんに象牙をあしらった拵えのいいペンからインクを切り、机の隅に置かれたガーゼでペン先を拭う。

ペンを持ったまま窓の方向に向き直り、ペン先を光に透かす。手入れの行き届いたペンは、歪み一つなく、慎重にやすりがかけられた端部は、カーゼで一拭き、軽くなぞっただけで元の輝きを取り戻していた。鈍い金属光が心地よい。

ページの開かれたルーズ・リーフを見渡して、ルイズが記した文字が完全に乾いていることを確認すると、ページを閉じて、表紙を上に向ける。

分解しかねないほどに使い込まれて、縁が手垢で黒く染まった教科書に、金で鍍金された金属製のしおりを挟んで慎重に閉じる。

砥石を出して、僅かな授業時間の間に磨り減ったペン先を慎重に整える。

それを見ていた青い髪の少女は小さく呟いた。

「不器用」

銀髪の使い魔（3）

コルベールの背を仰ぎ見て後を続くルイズは、最初はおとなしく歩いていた。だが、階段を降り、角を曲がり、1階の通路に出たときにはその背中を追い抜いて走り始めていた。

ルイズに、何か深い考えがあつたわけではなかった。しかし、彼女の胸に湧き上がる期待と僅かな不安が、その小さな身体を突き動かしていた。

早く逢いたい。

走る。

逢つてどうするの？

走る。

私の使い魔。

走る。

……人間の使い魔？

立ち止まる。

医療室、救護室と並んで奥にある。その病室の扉の前にたどり着いて、急激に膨れ上がる不安にルイズは胸を痛めた。

人間の使い魔。

ありえない……。

突然に歪んだ視界で、病室と廊下を隔てる大きな引き戸をぼんやりと眺める。

本当に、あれは、私が呼んだの……？。

たまたまあそこを歩いていただけの平民だったりして……。ただ、

『私』の魔法の行使に発生する結果に巻き込まれただけの――

――不幸な平民かも知れない……。

魔法学院の周囲は、魔法学院が管理するという建前がある。

生徒を周囲の雑音から隔離するという意味以外に、国内外から有力な貴族の子弟が数多く集まるためという理由もある。

貴族の子弟が親元を離れて集団生活を送る。ここ以外では王都の王宮周辺の貴族街でもなければありえない特異性が「魔法学院」という場所だ。しかも彼らはハルケギニア全土から集まって来ている。安全面から言って本来は、不特定多数の往来出入りが激しい町など近傍にあつては警備に負担がかかつてしょうがない。

貴族や貴族の卵が異常な集中密度を持つて生活する魔法学院の存在は経済活動の面からいって、非常に魅力的な場所であるはずだが、そういう理由から商人達は歯噛みして眺めるだけである。……表を見れば、の話だが。

魔法学院自体の箔付けという理由も存在する。ハルケギニア中で貴族同士が土地の奪い合いを繰り返している中で、魔法学院はこれほどまでに広大な土地を所有しているんだぞ、というハツタリだ。

実際の側面として、魔法の修練において危険な攻撃魔法等を、能力の未熟な者が実技練習するのに、広大な土地があると何かと都合が良いという側面もある。

攻撃魔法の中には、術者の能力云々という限界はあるにせよ、視界が通る距離ならば射程は理論上無限という物が存在する。

現実的な有効射程はどれほど能力が高いメイジであっても、数百メートルがせいぜい（ただし魔法の種類にもよる。無差別広域殲滅魔法等には「長射程」のものがあることが知られている）だが、学校という場における教育という側面からすると、とりあえずの限界を知るために、個人の能力いっばいの実力を発揮させて、有効な距離を探るという方法が取られる。すると、とにかく視界を遮る物がないやたらと広い土地が必要になる。

実践的側面で言うと、森や丘など、ごく当たり前にある地形の変化に対応した魔法の訓練を行うことが必要であり、これまた広大な土地が必要になる。

別段、攻撃魔法のみに必要という訳ではない。例えば、いくつか方法のある、空を飛ぶ魔法、或いは、地を駆ける魔法を使う場合に、土地の起伏や、障害物の存在というのは非常に重要になる。

土を弄る魔法にしても、土、砂、砂利、岩と、様々な種類の材料があつたほうがいい。

水を扱うにしても、清らかな清流。激しく流れ狂う濁流。淀んだ水溜り。地下より湧き出して停滞する井戸。

いろいろな水の状況があると良い。

或いは魔法を行使するに当たって様々な量と種類が必要とされる秘薬の材料を得るためにも土地は広いほうが良い。どうしたところで特殊な材料と言うのは特殊な土地でしか得ることが出来ないが、すべての秘薬が1から10まで特殊な材料の組み合わせでしか得られない訳ではない。

どこにでもあるありふれた種類の植物や鉱物の組み合わせが、ある種の秘薬の材料となってメイジを助ける事は多い。

で、あれば、単純に量を求める上でも、或いは採集行為そのものの「実技練習」のためにも、広大で肥沃な土地があつたほうが都合が良いのである。

実践的な面で言えば、ありとあらゆる地形が必要になる。山、川、池、茂みに森、洞窟。そういった自然地形。

或いは、村や町、砦等も必要になろう。道路とか橋、小麦畑に野菜畑、ポカージュといった人工的地形も必要になる。戦争は場所を選ばないし、戦場は人の息づく場所すべてが選択肢となるからである。

「国家」の屋台骨を支える「事になっている」貴族の数ある存在意義、或いは、義務と言い換えても良い。貴族たちが行うべき行為の一つに、戦争に置いて率先して戦場に立つという物がある。

ましてや、長子ではない貴族の子弟が集う場所だ。一丁有事ともなれば「国家」のためというよりも「家」のために積極的に「死に急ぐ」必要性すらあり、要は、有効な死に方を学ぶ場所が必要なのである。

ここで問題になるのは、その「学びの場」に少なからず平民が紛れ

込んでいる事実である。

形骸化が進む魔法学院とは言え、貴族が「死に様」を魅せる必要性はむしろ増大していると言えるから、時代が過ぎるにつれ、戦闘訓練の場としての魔法学院の所有する土地の重要性は高まっている。

魔法学院が、自身の所有する土地の管理を半ば投げ出してしまつて、一種の治外法権化しているにもかかわらず、平民が押し寄せることが現実的に起きていない理由がこれである。

魔法学院によって建築された街「のようなもの」や村「のようなもの」に勝手に住み着いて、そこで戦闘訓練が行われた場合、力を持たない平民はただの標的である。

よしんば反撃等しよう物なら苛烈に狩り立てられて、ましてや捕らえられた場合に、その後起きる結末は想像するに容易い。

貴族は領民たる平民の生活を守るのが建前とは言え、魔法学院が収める土地は治外法権である。この場合の治外法権は、平民のみならず貴族に対しても平等である。

平等である以上、貴族に対して平民が反撃を食らわせることも許され得る筈ではあるが、貴族がそこに住まう平民に対して私刑を行うこともまた自由なのだ。ここにいる彼らは「唯の平民」であつて「領民」ではないのだ。存在しない人間であるから、貴族による「平民」の扱いは自由である。

そうではあつても例外のない法則はなく、魔法学院の周辺には少ない数の平民が居を構えている。畑もあるし、町じみた場所もある。建前上、魔法学院としてはそのような存在を認めてはいないが、例えば土メイジが、土地の改良を行う実践的練習の場として不法居留民の畑を弄る事もあるし、その結果として、不法居留民が利益を得る事もある。無論その逆の結果を得る可能性もあり、そうなれば不法居留民という立場であるからして、まったくの泣き寝入りになるが、魔法の修練としての作業となればよほどの偏屈物でもない限りは成功を望んで魔法を行使するのであるから、畑を弄る事を生業とする人間にとつては、これはかなりの魅力となる。

不法居留民の負傷により水メイジがその力を振るうことも少なく

ない。メイジの実践的練習の場にもなるからだ。

負傷を治療する魔法を、まさか、同級生で試す事は憚りがある。専門の療士が仕事として、事故等で負傷した生徒を治療するならともかく、能力的に未熟な生徒が他の生徒を（応急ならともかくとして）治療するのは危険極まりない。

失敗は勿論、寧ろ、後に影響を及ぼすような障害を残せばいかなる悪影響が残るか。想像するだに恐ろしい。とんでもない遺恨を残す事になるだろう。

ましてや、練習のために他の生徒を故意に傷つける事が許されよう筈も無い。何しろ貴族なのだ。教師や使用人に傷を負わせる事も許されない。彼らが失われれば、当然の事ながら生徒の生活や授業に大きな影響を及ぼす結果になる。よって「どうなっても構わない」人間の存在は貴重である。

不法居留民の生活の場を犯すモンスターを退治する事で、火メイジや風メイジが実戦的な修練の場を得る事もある。特にこの場合においては、何かを守りながら戦う練習という面で非常に価値が大きい。なにしろ魔法学院の生徒は貴族ばかりだ。練習とはいえ、貴族が貴族を守るという形を作るのは様々な理由によって難しい。だからと言つて、魔法学院で働く使用人を授業で引つ張り出すことも難しい。

彼らは魔法学院内で貴族が快適な生活を送る上では死活的に重要な存在である。また、ハルケギニア中から貴族が集まるという特性上、その貴族と直接接する彼らは、その身分が徹底的に洗われた平民ばかりである。

そういつた、貴族にとって「信用の置ける」平民の募集と言うのは存外に困難であり、魔法学院に住まう生徒達の中にはそういった部分を理解しているとは言いがたい愚かな者も居たが、少なくとも教職員の間では、彼らを使い捨てにするが如くの行為に投げ込むわけには行かないという認識があった。

しかし不法居留民という領民でも使用人でもない平民を「守る」のは非常に気が楽である。技術的に優しいのではなく、後処理的に優しいのである。

存在しない筈の人間であるから、であるにしても人間であることに変わりないから、護衛任務としては極めて実戦的でありながら、失敗しても死守等せず、放り投げて逃げ出せばいいのだ。非常に簡単である。

状況的に魔法学院が管理する土地に犯罪者が潜伏する事もあったが、今では余程の事が無い限り、そういった本当に危険なものが紛れ込む事は無くなっている。

なにしろ「存在しない筈の人間」の集団に紛れ込もうというのだ。犯罪者が人間の集団の場に好んで紛れ込むのには様々な理由があるのだが、その中に、罪のない人間の集団に紛れ込む事で取り締まる立場の人間による強硬手段を封じて身の安全を図る、という部分がある。

ところがこの場所は、ここに住んでいる事自体が罪である。

町じみた場所であっても、極端な話、犯罪者が紛れ込んでいるという情報があれば町ごと殲滅すれば良いのだ。そうすれば非常に楽であるし、また、町を殲滅するために行われる行動自体が術からず戦争の訓練になるので何かと都合が良いのだ。

「本当に危険な者」として、例えばテロリストやアサシンが紛れ込む可能性はありうる。なにしろありとあらゆる国からありとあらゆる立場の、或いは、将来的にそういった立場に立つかもしれない貴族が集まっているのだから。それを狙う人間の出現は、ある意味で魔法学院とその周辺にとっては究極のカントリー・リスクである。しかしそういう者であればなおさら、町「じみたもの」に潜伏する事によって発生するであろう危険性を鑑みれば、彼等がそこに潜伏する可能性は極めて少なくなっている。やはり「安心」する事が出来た。

ただし町「じみたもの」にある種の理由をもって出入りする貴族は後を絶たないから、それを狙って一仕事をする犯罪者やテロリストの存在の可能性は否定できない。

町「じみた」場所は本来の意味での町と変わらぬ利用価値もある。いや、この土地が貴族の所有では無いという意味では、むしろ魔法学院に住まう人間にとっては高い利用価値があると言えるよう。

魔法学院はこの土地に存在する「定住する人間」を認めてはいないが彼らは実際に存在する。だから彼らも生活する以上は食料等の生活必需品を扱う必要性があり、そうなれば当然流通等の経済活動が発生する。

そしてこの土地には税金が存在しないため、物価が妙に安いという結果が生ずる。

本来は、魔法学院の所有する土地、という閉じた空間に持ちこまれる物品には外から中に至る流れの中で、どこかで税が支払われる筈ではあるが、貴族内の争いが頻発して各地の統治が緩んでいる現在、租税を回避した物品が流入して、活況を呈する結果となった。

輸送時に税を回避することは容易いが、腰をすえて店を開けば、税の徴収は容易く、逃れるのは難しい。だがここは魔法学院が所有管理する土地である。魔法学院が租税の徴収に無頓着である以上は、店を開いたところで税を徴収される可能性は無い。よって、一攫千金を狙って、魔法学院の土地に入り込もうとする商魂たくましい人間が出てくる事にもなった。

しかも、通常のルートに乗せ得ない秘薬や、出自不明の芸術品等が持ち込まれる事も多い。なにしろ貴族の大集団がありえないほど集中して存在しているのが魔法学院である。高価な物品を売るのも容易い。

更に言えば、意外な事に、偽物や贋作、粗悪品が出回る事は殆どありえない。

貴族をだますことは魔法技術という技能の存在により非常に難しいし、ありとあらゆる意味で治外法権であるこの土地で貴族をだますような行為は極めて容易く町「じみた」もの自体の滅亡へと繋がってしまうので、かなり強力な相互監視と自警圧力が自然と成り立っている。

非常に皮肉な事ではあるが「魔法学院が所有する治外法権の土地」はそうであるが故に治安が安定して、しかも安心して物が買える場を提供する事になった。

つまるところ、内部の人間であっても秘薬の材料を手に入れたり、

服飾品の購入やその他の嗜好品を購入するのに非常に都合がよいのである。魔法学院の使用人達にとっても大変に都合が良い。魔法を持たず権利も持たない彼らは、魔法学院内で手に入れる事が出来ない品を購入するには、普通に乗合馬車で移動して往復で2日かかるトリスタニアに出る必要があるのだ。移動だけでまるまる2日かかってしまうので恐ろしく手間のかかる状況である。それがちよつと足を延ばせば手に入る場所にある。

しかも経済活動とは需要に対して供給が発生するから、使用人達の要求が、そのまま供給者達の努力によって用意される。これほど都合の良い事は無い。

また、生活するにおいて絶対な必要性を持たないのにもかかわらず生活の深いところに根ざしている嗜好品というのは租税の狙い撃ちを受けやすく、よつてかなりの可能性で「通常の土地」における価格が高騰しているものだが、ここでは殆どの物が絶対的に外部よりも安く手に入った。

更に、外部の人間がこの場所を俯瞰した場合に得られる結論として、永住するには危険ではあるが、ここ以外の場所で手に入らない何かを手に入れようとする場合は非常に利用価値が高い土地。という事になる。

外部の人間が外部で普通に手に入る物をここで安価に仕入れて、外部に持ち出した上でそれが明るみになると大変にややこしい事態に陥るので、この場所を頻繁に利用する者はそういつたりリスクは犯さないのが普通である。それが、この自由都市の様相を呈してきた箱庭の存在を外部が許している理由でもある。

この町「じみた」ものがたいいていにおいて外部からの流入と内部流通と内部消費でそれなりに回っているのはやはり、存在の根底からして魔法学院の存在が大きいのである。

こうして魔法学院がこの土地に住む不法居留民の存在を積極的に黙認している現状では、貴族間の複雑なパワーバランスもあって、周辺の貴族たちも苦々しくは思っても文句の言えない状態である。そのため、平民のみならず、実のところ各地の貴族や貴族の代理人の

流入すらかなり活発におきているのが現状である。

ルイズがここに来て危惧したのは、活発な交流、人の出入りがある結果として、魔法学院周辺に無案内で紛れ込む平民や貴族の使い、或いは貴族そのものが立ち入る可能性を排除出来ないと言う事実である。

ルイズは「召喚」された、少女の姿を思い浮かべる。あの時あの瞬間。あの少女には、貴族の外見的な尚且つ、絶対的な証となるマントや杖は見当たらなかった。

杖に関していえば、実際に杖である必要はなく、例えばナイフやレイピア、或いは箒や棍を「杖」にしている者も多くはないが、それに少なくともないので、大多数の平民が思っているほどには貴族を見分ける方法になり得なかったりする。だが、マントに関しては別である。

何らかの後暗い理由や、何らかの任務でも受けない限り、公の場において貴族がマントをしないというのは、裸で街路を駆け抜けるほどに恥ずかしい行為であるとされている。

平民に対して理解を求めるのは大変難しい概念であるが、それがハルケギニアの貴族にある常識であるから仕方がない。

よって、ルイズの知る常識から理解する限りは、あの少女が貴族である可能性は限りなく低い。

何らかの後暗い理由をもっていた場合……そもそもあの場にいること自体がありえない。

何しろ魔法学院である。出自の怪しい人間がうろつけば、それだけで問答無用な事態になりかねない。魔法学院の人間が不法居留民の住まう場所に出向くことは珍しいことではないが、その逆はそもそも考えられない。

魔法学院から見渡せる範囲内に関係者以外の人が歩いているだけでもずんばらりんとなってもおかしくはないのだ。実際に魔法学院

に住んでいると忘れがちになることだが、魔法学院、と、言うよりも魔法学院に住まう人間の価値とはそれほどまでに高い。その場所に無関係な人間が故意に近寄るのは余りにもリスクが大きい。

あの時、ルイズたちは、魔法学院の校舎や諸設備から随分と遠くはなれた場所で、召喚を行っていた。

召喚に伴って発生しかねないリスクから、学院の関係者や生徒を引き離す当然の処置ではあったが、校舎が見えないほど遠くではなかったし、どう考えても見落とすことの出来そうに無い生徒のかましい集団である。好んで近づくような馬鹿はいないだろうと結論付ける。

貴族の遣わせる使者等と言うのはもつとありえない。何らかの品を秘密裏に買い求めるために使わされた使者が、何の関係もない魔法学院に近寄ることは考えられないし、屋外学習を行っている生徒の集団に近づくことはますますありえない。

彼らが間違つて、道に迷つて、学院に近づいてしまう。それこそそんな馬鹿な、と言うところだ。重要任務を持った人間が無能。それを遣わせる貴族も含めて極めつけの大馬鹿、である。

少し昔ならいざ知らずレオ・アフリカヌス大陸開発運動の失敗を経て、無能な貴族が大抵淘汰されつくした後の現在である。レオ・アフリカヌス大陸開発運動の失敗は様々な負の側面を抱えてハルケギニアを苦しめるが、糞の役にも立たない貴族どもを纏めて本当の糞のように地面に叩きつけたという点では大きな利益があった。ルイズはそう評価している。

そこから魔法学院に弾いて捨てられる彼らの子弟はともかく、彼ら自身に対するルイズの評価は悪いものではない。そこから導き出される結論からすると、そういった人間があそこにいるという可能性は限りなくゼロであろう。

魔法学院自体に対する遣いであるという可能性も考えてみる。

直前直後ではそれを排除しきれないが、コレだけの時間が過ぎてしまふとその想定は難しくなる。

遣いの者が行方不明になれば遣いを出した側が何らかの行動を起こすであろうし、少なくとも確認ぐらいは取るであろうから、現状はすでに限りなく低い可能性に過ぎない。

だいたい徒歩である時点でありえない。最低限馬を使うし、急がないのならメール・ボーイでよい。急ぐなら自在伝書鳩である。秘密があるなら貴族が直接乗り合い飛竜や自前の竜籠を使うだろう。

魔法学院に住まう平民、つまり使用人に用事がある誰か、と言う可能性を考える。

これまたありえない。

場合によってはどこぞの貧乏貴族よりも余程のことに信頼も信用もある人間達である。

そうであるがゆえに彼らは、この場所に入ったり出たり情報をやり取りしたりするルールを極めて厳格に守っている。

手紙のやり取りは、専門のメール・ボーイが特定のコースを特定の時間に移動するし、例えば家族の訃報等は、平民であつても自在伝書鳩を使うのが普通である。

たまたま自在伝書鳩が使えなかったとしても、広大な魔法学院の所有地を徒歩で横断は馬鹿げている。最低限、ロバなり、何なりであろう。

外部に居る恋人と会う、或いは会いに来る場合であっても、必ず申請を届けて、そして申請された日時に、学院の敷地の外周部にある面談室を使うのがルールである。無論、それらを振り切つて内部で逢引が行われる可能性をゼロにすることは出来ないが、真昼間にそういう目的の人間が学院の至近に存在する可能性は殆ど無いだろう。またそれらの人間が授業中の生徒の集団に好んで近づくというのは想像する事すら難しい。

単なる平民が誤つて近づく可能性というと、これもまた疑問である。

やはり、彼らにとって危険な魔法学院が遠くない場所にある訳であ

るし、同じく生徒達に近づく可能性の存在も疑問である。

余り無い事ではあるが、休日に素行のよろしくない生徒が、一人で歩いている平民を「狩る」事があるらしい。

ルイズ自身が見た事はないし、そのこと自体、たまたま耳にした噂程度ではあったが、去年1年間の学院での生活を振り返るとそういった事をやらしかねない素行を見せた人間が居る事までは否定できない。その噂やあるいは推測がどれほど「平民」の間に広まっているかと言う疑問もあるが、その立場上、つねに耳を研ぎ澄ませているであろう「不法居留民」が自分達の不利益になる可能性を無碍にする事もまた考えられない。

よって、不法居留民が好んで魔法学園の生徒に接近する可能性もない。

それらすべての可能性を斜め上に横切っておりうる可能性としては、余程の阿呆で間抜け、となるが……その時には、それこそ「処分」してしまえばいいだろう……。

否定する。あれは人間かもしれない。サモン・サーヴァントで人間が呼び出された記録なんて知らない。ルイズには酷く利用しがたい環境ではあったが、トリスティン王立図書館よりも充実していると思われる魔法学院図書館にあるサモン・サーヴァント関連と思われる本は出来る限り読み込んだ。少なくともその中にはそんな記述は匂わせるような物すらなかったし、そもそもコルベール先生も否定した。しかし、あれは間違いなく私が召喚した。人間を召喚したというありえない結果。だが、絶対。絶対間違いはない。

押さえつけようのない緊張で身体が震える。

絶対間違いはない。あれは、あの少女は、私が、召喚した！

言い聞かせる。

扉に手をかけて力を入れる。そして、動けなくなってしまう。

ルイズは努力家であり、頭脳明晰であり、勉強家であり、つまり頭

が良かった。

頭が良いだけにとどまらない。

学業の成績が良いと言うだけにとどまらず、実は、創意工夫や応用、或いは空気を読む能力、そして想像力——思春期にありがちな妄想という意味ではなく、自分や周囲の行動や行為の結果を見通すと言う意味での想像力も溢れるほど持っていた。

望んで得た力ではない。そうならざるを得なかった。

自身が望んで得たわけではない魔法の特性上、その望まざる能力を得てしまっていた。

それがある可能性をルイズに想像させる。

ルイズは魔法を行使すると、尋常ならざる結果を導く事が多かった。否、すべての結果が一つに収斂した。例外は無い。否、それもうかは今となってはわからない。少なくともあの瞬間以外の結果はすべてが同一であったし、あの瞬間の直前までの結果もまた、同じであった。

そしてあの瞬間の直後もまた、同一の結果であった。

ルイズはあの場所で、何度も何度も同じ結果を導いてしまっていた。それによる周囲の被害は酷い物だった。そしてそれによって周囲の状況に与えた変化もまた、酷い物だった。

あれほどの爆音とあれほどの煙を噴き上げて、そしてそれを何度も繰り返した結果である。

まったく視界が通らない状態であった。

ルイズ自身のみならず、あそこに居たクラスメイトすべてが覆いつくされる程の自身の魔法がもたらした結果。

客観的に見てどうであろう？

草原に湧き上がる轟音。立ち上る煙。最初からそれを視界に捉えていたならともかく、いや、轟音に気がついた者が居た場合、それを何であるか確認しようとした者が居た場合。

普通は逃げるだろう……。ルイズの少ない人生経験からすればそういう推測がなる。ルイズならば少なくとも「近づく」選択肢は無い。

自身の理解が及ばない現象に望んで近づく。そんなことはルイズの行動における選択肢には存在しない。

しかし、ルイズが読んだ書籍の中にはそういった状況が現出した場合に異なる行動を選択する者が少なからず存在する事が示されていた。

必ずしも納得のいく説明がされているとは言いが、訳のわからない状況の現出に対して、それを近くに寄って確認しようとする者が多いと、彼女に理解させた。そういった者達は大抵物語における最初の犠牲者になっていたが、それとは逆に、物語の主人公となつて最後まで生き残る場合も少なくなかった。

つまり、ルイズの想像もつかない程に優秀な頭脳を持った人間があえてそういう行動を取るのかもしれないという予想もあるのだ。

単なる空想の物語ではある。しかし、空想の物語で語られる行動や行為が現実の世界で驚く程に繰り返し現出する様をルイズは幾度となく見てきた。現実が物語より奇なり、という表現がある。これは翻つて言えば、人の生活の中でおきる事件、事故、或いは人の行動選択という物の大半が物語の中で表現されているという事実到他ならぬ。

今回の事態は、そうやって幾度となく頻繁に現実が発生する類の現象では無いとはいえ、物語の中でそういう行為をあえて望んで行う人間が居ると言う事を表現している以上は、現実世界においてもまた、あの場所で発生した異常事態に望んで足を踏み込む誰かが居る可能性が実際にあるのだと示していると思える。

そう、たまたまそこにいた平民。その可能性がゼロにならないのだ。

ほかならぬ自分の行った行為によって。

サモン・サーヴァントと言う魔法の行使に自信が持てないというのも大いなるプレッシャーであった。

何しろ失敗失敗また失敗の連続であった。あの温厚なコルベールをして、唾を飛ばして叫ぶほどの繰り返しを失敗と言う結果にした。

あの少女の存在で、私は魔法を成功したと信じた。
そう。

信じた。

信じただけだった。

それによつて私は気が大きくなっていた。

すこし羽目をはずしていた。

常にあつた緊張を解いてしまっていた。

常に持った慎重さを欠いていた。

実は、あの「成功したかもしれない召喚の結果」の後に起きた意味のわからないじゃれあいも、悪い気はしなかった。ちよつと楽しかった。

早く、コントラクト・サーヴァントをしなければという思いはあつたが、私が魔法を成功させたのだという「事実」が焦りを吹き飛ばしていた。

それとともに、過去の自分の生み出していた結果の記憶も吹き飛ばしてしまっていた。

あの少女に向かって撃ち出した……撃ち出そうとした「エア・ハンマー」は絶対とまでは言わないが、相当な自信があつた。事実、あの日あの時までとは異なる何かが自身の身体を駆け抜けた気がした。

気がしただけだった。

当てる気はなかった。足元をちよつと弾けさせて、あの少女を驚かすだけのつもりだった。それにより自身の力を見せ付けると言う打算もあつた。そうなければいいなと思った。そうなると思った。そうなつて当然と思つた。

そうならなかった。

結果に戦慄した。魔法を失敗したと言う結果にも驚いたが、その後に突きつけられた結果に戦慄した。

少女は倒れていた。

恐ろしい経験だった。そのままショックで命を失うかと思つた。

恐ろしい結果が眼前に突きつけられていた。

そして、それは、その失敗は。その失敗したという現実は。

直前の「成功」と信じた行為の結果に対する深刻な疑問となった。

その後は良く覚えていない。

気がついたら制服のまま、自室のベッドの上で呆けていた。

どうやってそこまで移動したか、何も記憶がない。部屋で気がついたのは、何かの残り香が自分の鼻をくすぐると言う事実だけだった。どこかで、それも頻繁に感じたことがある香りだと思ったが、召喚の儀の場で起きた事が余りにも衝撃的で、どうしても良くなってしまうた。

時間がたてば何とかなるかとも思った。

気のせいだった。

あの瞬間から3日が過ぎた。

時間が経てば経つほど悪い予感が湧き上がってくる。

或いは少女がそのまま死んでしまえばいいのにとも考えてしまった。

そんなことを考えた自分の浅ましさに反吐が出た。

自分はそんなところで堕ちた訳では無いと、自室から身を投げ出すほどの衝動に駆られた。それをしなかったのは、本当の結末がまだ示されていなかったし、それを見届けなくてはならなかったからに過ぎない。

確かに、あの少女が死んでしまえば、あの少女が実際に召喚された者であろうがそうでなからうが、召喚自体はやり直すことが出来るであろう。だが、自分のエゴが理由で何の罪もない一人の人間を犠牲にってしまうかもしれないという思考の澱みは絶対に受け入れがたかった。

平民であるとかどうかは関係ない。何かを望んで犠牲にしてその先に立つ事を善しとする考えはルイズの知っている、ルイズの信じている貴族像には存在してはならないモノだった。

刹那の妄想とはいえ、だからこそ、絶対にそれを認めることは出来なかった。

頭の良すぎるルイズは、思考の迷路に迷ってしまった。考えすぎた上に、余りにも滑稽な内容の想像に思考を迷い込ませてしまっていた。

考え過ぎとしかいえない妄想の爆発で固まってしまったルイズに、コルベールが追いつく。

表情を強張らせている事が傍目からもはつきりと見て取れる彼女の姿に彼は躊躇したが、意を決して声をかけようとして。

「えええっと。ミス・ヴァリエール様。何をされているのでしょうか？」

扉が開いた。その中から、困惑した表情の、白衣を着た女性が声を上げていた。

なんともしまらない結果に、コルベールは薄い頭を掻いた。

看護婦に先導され、魔法で照らし出された病室を進み、少女の居る場所に近づくにつれてルイズの動悸が高まってくる。

これは何？

期待？

不安？

恐れ？

それとも……罪悪感？

空っぽのベットが置かれた空間を6箇所ほど抜けて、魔法の光に加えて日の光が差し込むことで明るく輝く突き当りを目指す。目的地が近づくにつれ、ルイズは身体がどうしようにも抑えようもなく震えることを自覚した。

なんて言えばいいの？

どうすればいいの？

相手はどう思うの？

相手はどう反応するの？

召喚の儀、その最後の瞬間に自身が起こした結末を思い出して、大きく身体を震わせる。

あの少女は、わたしに、どういう感情を持つの？

恐ろしい。怖い。背を向きたい。逃げたい。この場から走り去りたい。

しかし、それは許されない。

この出会いにいかなる結末があろうとも、それはすべて自分の行動の結果である筈だ。

そこから逃げ出すことなど許されない。自分の犯した行動の結果に責任を持たなければならぬ。

ルイズはルイズの信じる貴族という幻想にすがって、最後の一步を踏み出した。

開け放たれた窓から吹き込む風。

たなびく銀髪。

差し込む光を反射して様々に表情を変えるその銀糸。

頭に留められた髪留めと思われる大きなアクセサリー。

白い大きなリボンが風に揺れる。

肩で二重になった裾がはためく。

こちらに向けて大きく開いたスカートが、その奥にあるショーツの存在を想像させる。

片膝を立てて、丸めたタイツを手には……。

……。

紅い瞳が此方を捉える。

ルイズの後ろからコルベールが顔を出して、少女のほうに視線を向ける。

その脇を看護婦が窮屈そうに通り抜けて少女のほうに顔を向けて一つ頷き、そしてコルベールのほうに慌てて向き直る。

看護婦の手にしたボードが彼の顔の前に差し込まれた。

顔を朱に染めたコルベールがぼつが悪そうに顔を背けて弁解する。

「…………その。申し訳ない…………ミス…………」

緊張が霧散して、崩れ落ちそうになる身体を、ベットの枠で支えながら、しかし敵わずに、ルイズは少女の方に崩れ落ちた。

「お……おい？　大丈夫かや？　少女よ」

なんともしまらない再会になってしまったと、ひそかに涙した。

すっかり身奇麗になったイングリッドとルイズをつれて、コルベールは医療室に移動して仕切り直しを試みる。

コルベールがわざとらしく「コホン」と小さく咳払いをする。

1クラス30人の生徒が入ってなお十二分の余裕がある殺風景な部屋の片隅、窓際にある質素だが趣味のいいデザインをしたアンティーク調で大き目の丸テーブル。なかなか凝った細工のテーブルクロスが大きく縁を垂らす。その周りにこれまた趣味のいい彫刻が施された椅子が並べられている。

とはいっても、3つ並べられた椅子に座っているのは2人。コルベールは少し離れたところで、締まらない表情で鼻を掻きつつ立っている。

腰をかけるのはイングリッドとルイズ。看護婦は居ない。広い室内には3人の姿だけがある。

廊下から静かだが、やや耳障りな音を響かせてワゴンが此方に近づく気配がする。

それが部屋の入り口で止まると、控えめな強さのノックが二度、三度とならされる。

「どうぞ」

コルベールがテーブルのほうに視線を向けたまま声を上げる。

「失礼します」

素朴な雰囲気を漂わせる、黒髪の少女が大きな胸を揺らせながら、扉を開けて室内に小さく頭を下げる。金髪の少女がワゴンを押してその脇を抜け、それを見届けてからブルネットの美しいその少女が、扉を閉める。

その二人のメイドは、ゆつくりとテーブルに近づくと、ワゴンを寄せて、テーブルの前で頭を下げた。

「ご用意させていただきます」

ブルネットを小さく揺らせながら手馴れた様子で準備を始める。

銀細工が施されたと思われる金属性の瀟洒なデザインのスケルトン・ケーキスタンドが中央に置かれると、ワゴンの上でドームカバーがはずされて、ガレット・ブルトンヌが乗せられたプレートが顔をのぞかせる。その途端に、香ばしい香りが2人を包む。それはプレートごと1番下にセットされた。最初から16等分に切れ目が入れられている。

次のドームカバーの中には小山になった様々な形や大きさのクッキーがセンス良く盛り付けられている。ジャムとクロテッドクリームが横に盛り付けられている。プレートの縁に差し込まれた様々な種類の果物が良いアクセントになっている。

中段にセットされる。

最後のドームカバーの中にはほのかに湯気を上げる、様々な種類のパンが並べられている。

小さく切り添えられたバケット、フルート、複雑な造形を見せる、結び目細工が美しいフィセル。ブルー。シャンピニオン。クロワッサン。

最上段にセットされる。

ケーキスタンドの用意の横で、それ以外の道具のセットも行われる。

ナプキンが手早く敷かれ、フォーク、スプーン、ナイフが置かれる。大きさも形状もさまざまで、細工も品質も美しい。

それぞれに、都合10種類は置かれた。表情を変えないままイングリッドが呆れる。ただし視線はルイズを向いたままである。

ルイズ、イングリッド、空いている椅子の前に、プレーン・プレートが置かれ、その半分ぐらいのサイズのプレートが10枚ぐらい、それぞれの椅子から手の届く範囲に積まれる。ルイズと空き椅子の前にはそれぞれ右手側に。イングリッドの前だけ両方に置かれる。

それに気がついて視線を這わすと、2つの椅子の前では、何らかの法則にしたがって、スプーン、フォーク、ナイフが別々に置かれているが、イングリッドの前だけ、一応の法則性を持ったそれらが両手側に肩身狭そうに並べられている。

畳み込まれた何枚ものナプキン。水を張った大きなボウル。中央で小さな炎が踊るガラス細工のティー・パワーマーがセットされ、様々な模様が施されたガラス細工のティー・ポットが上に乗せられる。

最後に豪華な細工の施された、だがかかり使い込まれたことが一目見て分かるアクアマニールが数枚のタオルと共にテーブルの中央付近に椅子の数と同じだけ置かれる。

兎、ドラゴン、一角獣を模したそれらは、それぞれの顔がそれぞれの椅子に對面するように音も無く置かれた。

口で言うには容易いが、水が入ってかなりの重さがあるモノである。それを腕を伸ばした不自然な姿勢でテーブルの中央に置いたのである。アクアマニール自体も中に水を入れる道具であるという特性から結構重い道具である。それを音も無く置いたというのだから、このメイドたちは見た目ほど華奢という訳では無いのだろうとイングリッドは想像してしまう。

五分ほどの時間をかけてそれらの用意を終えると、2人のメイドはテーブルから離れて小さく頭を下げる。

「お付になれなくて申し訳ありません。後刻お下げしますので、御用が済みましたらそのままにお帰りください」

音もなくワゴンを押して扉に近づくと、入ってきたときとは逆の手順を踏んで2人は部屋を出て行った。

ワゴンの音が遠ざかる。

足音はまったく聞こえない。

イングリッドは呆れた。遠慮なく呆れた。それはもう途轍もなく呆れた。

急に表情を崩したイングリッドにルイズとコルベールが緊張する。

イングリッドは行儀悪く足を組むと、腹の前で腕を交差させる。

「で、どうするのじゃ?」

ルイズとコルベールが顔を見合わせる。

「えっと」

おずおずと口を開くルイズをイングリッド右手で制する。

「!」

僅かに眉を上げて、イングリッドがルイズに対する視線を強める。

「名前じゃ」

ルイズが首を傾げる。

「我主の名前を、我は知らん」

少しく硬直した後、ため息を吐いてルイズは口を開いた。

「ルイズ。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールと申します」

緊張ゆえか、知らず知らずのうちにルイズは敬語で応える。

イングリッドはそれに頷いて応えた後、小さく首を振って、コルベールに視線を向ける。

彼は小さく頷いた。

「コルベールと申します。ミス・ヴァリエールの教師をしております」
「ふむ」

イングリッドもコルベールに視線を合わせる。

コルベールは、何かを問いたげなその視線に僅かに逡巡すると、合点が言ったように小さく頷いた。

「唯の、コルベールと」

「なるほど」とイングリッドが頷く。

次いでルイズに視線をやる。

「ルイズ、と、呼べばいいのかや」

何故かぐつと言葉を詰まらせたルイズだが、すぐに小さく頷いた。それを確認してイングリッドは小さく頷き返して口を開く。

「我はイングリッドという。ただの、イングリッドじゃ」

ルイズとコルベールが僅かに頷いた。

その仕草に畳み掛けるようにして彼女は口を開く。

「で、」

イングリッドがテーブルの上を見渡す。

「これは食っていいのか」

その言葉と同時に遠慮のかけらも感じさせない、優雅さとは程遠い音が、イングリッドの腹から鳴り響いた。

コルベールはずっこけそうになった。

もう、いろいろと台無しだとルイズは思った。

いろいろと緊張感をはらんだ再会だと思ったが、のつけから滅茶苦茶になった。コルベールのタイミングが悪かったとも言いきれない。扉の前で、悩んで立ち止まったルイズの行動がなければ、イングリッドのあのような姿は回避できた筈だと思う。

ルイズは対面する少女の姿に眉をひそめて、眉間にしわを寄せる。イングリッドはそれに気がついたがかわせずパンにがぶりつく。

「うむ……うむ。これはうまいの。ここまでのパンはなかなか口に出来るもんじゃないの」

ルイズはその言葉に小さく驚く。

「ここまでのパン」、「なかなか口に出来ない」。

この言葉は、魔法学院で貴族に供されるような上等な料理を、頻繁にはないにせよ口に出来る事が出る立場であることを想像させる。緊張感がぶり返す。ルイズはこの少女への評価がこちらこちらへと揺らぐのがわかった。

「ふむ。このガレットもいけるのー。余り好きでは無いのじやが、こいつならば幾らでも腹に入るわ」

コルベールも驚く。

そもそもガレット・ブルトンのように凝った食品はある程度以上に立場、地位がなければお眼にすることも出来ない。

パンに関しては、実は、コルベールの経験からすれば、魔法学院で口にするのと同等の味を保障できるブーランジュリーが結構な数、そここの町に存在して、平民の食卓に上っている事を知っている。

しかし、ガレット・ブルトンはない。そば粉のガレットならばと

もかく、かなり凝った製法を持つガレット・ブルトンヌが庶民の口に入ることは殆どない。

結婚式やそれに準じた特別なときでもない限りはそういった料理が平民の眼に入ることはありえない。

「ハーブの香りは余り好めないんじやが、このフレーバーはなかなか良いの。これなら紅茶も悪くない」

ルイズもコルベールも揃って驚く。

現在のトリステインではアルビオンから輸入される紅茶が主であつて、それらが平民の口に供される事は無い。大体、今、貴族の間に出回っている、現状、最もはやっている類の紅茶自体がレオ・アフリカヌス大陸開発運動終結以後に、今は亡き先代トリステイン王によつてもたらされた物であるから、貴族の間にも十分に出回っているとは言いがたい。

しかも彼女の言い回しは、記憶の中だけとはいえ、何種類もの紅茶の味を比べられる程に紅茶の味を知っていると云う証左となる。

ルイズは唸った。

テーブルマナー等知らんと言いながら、適当な仕草でパンを食べるイングリッドの姿は、常に貴族足らんとするルイズには怒髪天をつきかねない風景であつた。

それも、世間知らず。否、貴族社会を知らない平民だからしようがないと思えば諦めることが出来た。

しかしこのイングリッドと言う少女は、行儀作法はともかくも！

言葉の端々に貴族社会、或いはそれに近い世界を知りうる立場にあることを証明する内容が含まれている。

なんなのよ、こいつは。

ルイズは知らず知らずのうちに胡散臭そうな視線をイングリッドに向けてしまう。

その視線の先でイングリッドが湯気を立てる紅茶を一気に飲み込んで、かなりの勢いでソーサーにカップを戻す。

「よいお手前じゃった」

うんうんと首を縦に振る。

コルベールは混乱する。

乱暴にパンを口にするイングリッドはなるほど、マナーのかけらもないところにあるように見えた。

しかし、勢いよく下げられたカップはソーサーに音もなく置かれた。食器の音を立てないというのはマナーである上に、貴族の格を知る手段ともなりえる。

食事中に音を立てない。言うは易いが実行は果てしなく困難だ。非常に多くの「実戦」を経てようやくたどり着ける極み。それを行える人間はイコール、格の高い貴族。そういうマナーを徹底的に教え込んで実行させ得る貴族。という評価になる。交流の無かった貴族が初めての顔合わせでその場を食事にするのは、そうやって相手の格を諮る材料が得やすいという事実があるのだ。

彼女は勢いよくカップを振り下ろした。それ自体は行儀が悪い行為、である。

しかしそれはソーサーの上に音も無く吸い込まれた。

行儀が悪い行為をしている彼女が擬態なのか、あるいは偶然音も無くカップがソーサーの上におさまったのか。

悩むコルベールの前で、彼女は澱み無く次の行動に移った。

空っぽになったポットを迷いなくプレートの上に水を含んで置かれた小さな厚手のナプキンの上に移すと、他の食器から離して置かれていたくすんだ色の大きなスプーンの腹で、ティーワーマーにゆれる炎を押し消す。

この少女はテーブルマナーを心得ている!!

だらしな性格好で、だらしな仕事草を隠そうともしない彼女だが、その内実は見た目に惑わされる訳にはいかず、なかなか手強い事に改めて気がつかされる。

「で、どうするんじや」

鋭い視線がルイズに向けられる。

優雅な手つきでガレットを口にして、ナプキンに手を伸ばそうとしていたルイズは目を見開く。

お行儀が悪い。

人がものを食べている事を気にする事なく声をかけるのは、酷いマナー違反である。

眉をぴくぴくと痙攣させながら、ルイズは口の中にある物を飲み込む。

……なんなのよ、こいつは！

コルベールも悩み、眉間にしわを寄せる。

どういう意図があつて、そのような行為に及んだか想像できない。

「あのね、あなた……」

ふんっ、と鼻息であしらわれる。

「イングリッド」

「？」

「イングリッドじゃ」

ルイズはわなわなと肩を震わせる。

「イングリッド……あなたねえ……」

イングリッドがニヤリと笑みを浮かべる。

「怖い顔をしなさるな。我主よ。主には笑顔が一番じゃ。そのように眉間にしわを寄せるでない」

イングリッドがそう言いながら、自分の眉間を指差して楽しそうに笑う。

「……」

ぎりぎりと言が出そうなほどにルイズの口が歪む。

「ふむ」と一つ、小さく首を振って、イングリッドはコルベールに顔を向けた。

「説明してくれるんじゃないかな」

イングリッドは、まあ、テーブルマナーを知らない訳では無かった。

しかし、この世界のテーブルマナー等知らないと言う点では、間違いは無かった。

イングリッドはどうしようもなくおなかが空いていたから、目の前で良い香りを立ち上らせる食い物の山に遠慮をする理由は無かった。

場合によってはこの場における常識を揺るがすような酷い粗相を

仕出かす可能性すらある、自身の知るテーブルマナーを披露する必要は感じ無かった。

どうせ、行儀が悪い姿を見せる可能性があるのであれば、端から失礼の限りを尽くしてしまえという開き直りもあった。

少女(自称)という形から言えば、立ち振る舞いに関して一家言あったが、空腹の攻めはそれを横に退けてしまったというのものもある。よって、適当にしたいように食べ散らかしたつもりであったが、無意識のうちを知る限りのティータイムの常識が、彼女の行動を制限してしまっていた。そして、イングリッド自身はそれに気がついていない。そうしてイングリッド自身が十分に満足をしてしまったので、ルイズに声をかけたただけである。

十分に無作法な方法で。

妙な緊張感に包まれている場を「和ませる」つもりでの行為であったが、ルイズにとってはそれどころではない様であると気がつく。

んむ。ルイズは私の想像以上にお上品であらせられるようじゃの。ややこしい事になりそうな気配を悟り、イングリッドはコルベールに眼を向ける。

「召喚……。召喚のう？」

大体にして予想できる範囲内の説明を受けたイングリッドは、首を捻りながらルイズに向き直る。

焼け糞気味にクツキーをほうばるルイズが片眉を上げて応える。

「なによ」

難しい顔をしながら、頭を撫でて、顎に手をやり、次いで天井に視線を移す。

せわしなく視線を移すイングリッドをルイズの目線が追う。

「そんなことだろうとは思っておった。納得じゃ」

その言葉でルイズは密かに心のわだかまりが一つ、大きな音を立てて碎けるのがわかった。

やにわに小さな震えを覚えて、それをどうにかして抑えようとするルイズに気が付かぬまま、イングリッドが言葉を続ける。

「あそこに来る時に、な」

イングリッドは、ぐるっと視線をコルベールに移してその先を口に
する。

「鏡を潜ったんじゃ」

コルベールが小さく唸る。

「うむ。そうとしかいえないものじゃったな」

顎を大きく撫で付けつつけながら、何かを思い出そうとするよう
に、イングリッドが言葉を紡ぐ。

「あれは……かなり、不思議なものじゃったな。アレに飛び込んで
……引き込まれて、気が付くと、今まで居たところとはまったく別の
風景があったのじゃ」

彼女は窓の外を見つめる。コルベールも釣られてそちらに視線を
送る。

寮塔と、その向こうにある学院を囲う城壁が眼に入る。

しかし、コルベールはイングリッドの視線がその先にある召喚の儀
が行われた草原に向いているのだと思った。

「召喚。なるほどの。納得じゃ」

イングリッドはルイズに向き直って言った。

「我はルイズに召喚された」

「……！」

ルイズは胸の中で膨れ上がる感情を必死で押さえつける。

イングリッドは小さく頷いて、ルイズに断言するような口調で言っ
た。

「間違いない」

口の中にあつたものがいつの間にか咽喉を通り、すべて腹へと消え
たことに気が付いた。

ルイズは酷い渴きを覚えて慌てて紅茶を口に含む。

心を震わせる感情を押さえつけて、顔面に現れそうになるそれをこ
まかすように、口いっぱいにくツキーを放り込む。

しかしイングリッドは首を傾げた。顎を撫で付けるながら疑問を
口にする。

「人間が召喚されることは、普通にあることなのかや？」

ルイズの視線がピクリとゆれる。

イングリッドにはそれだけで答えが得られた。

ルイズはわなわなと震え始めた。

クツキーのかけらを飛び散らせながらルイズは大声を上げる。

「わっ私だって、わたしだってね！」

クツキーが飛び散る事実気がついたルイズは慌てて口を閉じる

ともごもごと口を動かして、次いで咽喉を鳴らし、乱暴に紅茶を口に

含んで飲み下して、イングリッドに視線を戻した。

イングリッドは小さく笑った。

途方もないお嬢様じやの。

何度か肩を上下させて、紅潮した顔色を戻しつつ、幾分か落ち着い

た声で、ルイズはしゃべり始めた。

「私だって、人間じゃなくて……」

難しい表情を浮かべたイングリッドに気がついたルイズは、眼を閉

じて、歯を食いしばり、表情を落ち着かせた。

「ごめんなさい……。あなたが怒るのも」

「イングリッドじゃ」

「……」

話の腰を折るその言葉に、ぴくぴくと眼を痙攣させて、ハアと息を

吐くルイズ。

「イングリッドも迷惑よね。急に呼び出されて」

イングリッドはルイズのその愁傷な態度を見て「ふむ」と頷く。

推移を見守っていたコルベールが慌てて割り込む。

「申し訳ありません。ミス・イングリッド」

「イングリッドじゃ」

「……」

イングリッドは眉間にしわを寄せたルイズに睨まれる。

困った表情を一瞬見せたコルベールだったが、健気にも言い直し

た。

「申し訳ありません。イングリッド」

イングリッドは小さく頷き返す。

「人間が召喚される事態等、私の知る限りにおいてはありませんでした。無論、私自身がすべてを知っている訳ありませんが、記録に残っていない以上は、もしかしたらあまりよくはない事例として、つまりは事故として隠された可能性があります」

その言葉に何うような視線を送るルイズ。

それに気がついたコルベールであったがかまわず言葉を続ける。

「あなたも、不満はおありでしょう。しかし、召喚の儀でミス・ヴァリエールに応えたのも事実。この場で確約は出来ないのですが、かならず、あなたの生活していた場所にあなただを返す方法を探して見せませす。ですから、どうか」

コルベールが視線をルイズに移し、幾分か厳しい表情を作ってイングリッドに向き直る。

ルイズは悲痛な表情を崩せずにいる。

イングリッドは沈黙するままだ。

イングリッドは内心ではコルベールに感心している。この人間はこの期に及んでどうにかルイズの心の重荷を解こうと、あるいは重荷を背負わせぬようと、四苦八苦していることが理解できる。

そしてコルベールの思考が、おそらくはコルベール自身のあずかり知らぬところで無意識の内に歪んでいることも理解した。

コルベールの言いようは、細やかに配慮しているようでありながら、結局のところイングリッドの立場を一切考慮していない。どこかしら、こちらを見下してそれが扱く当然であるという常識が見え隠れする。

それがこの世界のありように関わる部分にあるのだらうと推測した。

「どうか、ミス・ヴァリエールの使い魔という立場を承諾していただけませんか。お願いします。ミス。ミス・ヴァリエールの力になっていただきたい！」

眼を閉じてコルベールは身体を震わせ、なおも言葉を続ける。

「……あなたを元の生活から引き剥がして、これが、虫の良い願い事で

はあると理解しています。正直、あなたを元の場所に戻す算段があるとも言いがたい。しかし、ここは、伏して私の願いを……！」

そのまま絶句してしまう。

イングリッドはそのコルベールの姿に首を捻る。

ほう。こやつはなかなか出来た人間じゃの。

しかし……こやつの言い分は、私がこことは別の……少なくとも遠く離れた、今までに接触のない場所からの来訪者であると結論しているようにしか聞こえないな。

強い視線でイングリッドを見つめるコルベールにイングリッドも視線を移す。

「コルベールよ」

「は……はいっ」

緊張で、汗を流すコルベール。それを拭う事もしないでいる。

イングリッドは右手で自分自身を指し示して、笑う。

「イングリッドじゃ」

コルベールが呆ける。震えが収まった身体の上で首を小さく捻り、次いで刹那のときを経て小さく顔を紅潮させた。

その姿に、イングリッドはまたも笑う。

呆れたようにルイズが嘆息した。

「あなた……イングリッド。あなたねえ……」

イングリッドはついに声をあげて笑い出した。

「すまぬすまぬ、コルベールよ。冗談じゃ」

楽しそうな笑い声がしばし、部屋を駆け抜ける。

「んふ。からかいがいある二人じゃ」

頬をひくつかせて、腰を上げかけたルイズを右手で制してイングリッドが視線をルイズに移す。

「よいぞ」

「えっ?」

「!」

ルイズは一瞬、言葉の意味が判らなかつた。

混乱した表情でイングリッド、ついでコルベールに視線を彷徨わせ

る。

「わまわぬ、と、言っておる」

イングリッドは言い直して、頷いた。

「しかし……いえ。ありがとうございます……！」

コルベールが大きな仕草で頭を下げた。

ルイズが眼を見開く。小さなかすれた声で問いかけた。

「本当に……いいの」

「よい」

イングリッドは大きく頷いた。

その仕草にルイズの顔に影が落ちる。

イングリッドは首を捻った。

「なんじゃ？」

いくらかの躊躇の後に、ルイズは顔を上げた。

「私……あなたに、ひどいことをしたのよ……」

「？」

先ほどとは反対方向に首を傾げるイングリッド。

「あなたを殺すところだった……」

「！」

「あなたを殺すところだったのよ!!」

慌てて遮ろうとするコルベールを振り切つてルイズは大きな声を上げた。叫ぶような声だった。

ルイズの眼に大粒の涙が浮かび、堪える間もなく頬を伝って床に落ちた。

「いつか、あなたを殺して……ううん。傷つけてしまうかもしれない」

いやいやをするように首を振るルイズ。

蒼白な表情を浮かべるコルベール。

無表情でルイズを見つめるイングリッド。

僅かに身じろぎして、眼を何度か瞬くと一転、花がほころぶよう笑顔でルイズに向けた。

「ルイズよ」

「……何？」

大声で泣き出しそうなのを堪えるように口を振るわせるルイズに
イングリッドは顔を近づける。

「イングリッドじゃ」

さつと眼を伏せて歯を食いしばり、そして、肩を震わせるルイズ。
ぐつとこわばった口を結んで、キツと顔を上げ、大きく口を開いて
絶句し、何度かパクパクと口を開いては閉じ、少しの時間を置いて落
ち着いたのか、ずいっとテーブルの上に顔を突き出した。

「あああああなた、あああああなたね、あああああなた
ねえ！ わたつ、わたしがっ！ 私が!! どれほど！ どれほどに！
あなた……イングリッドに……!!」

激しくどもつて、身体を震わせるルイズに満足そうな笑みを浮かべ
てイングリッドは、両手で紅潮したルイズの頬を乱暴に包んだ。

「へいっ！」 みたいな、変な悲鳴を上げてルイズがよろける。

「ん。許した」

「ほへっ？」

今度こそは間違いなく声で返した。キョトンとしたルイズが椅子
に身体を戻す。

立ち上がったイングリッドはルイズの側に歩み寄り、肩に手を置こ
うとして一瞬、手を迷わせ、次いで、人差し指でルイズの頬を突いた。
「かまわんよ。あれは我も悪かった。やりすぎじゃったな。すまぬ。
この通りじゃ。許してくりやれ」

イングリッドは一步後ずさつて、大きく頭を下げる。

びつくりしたルイズも立ち上がってわたわたと両手を振る。

「いや、いやいや、いやいやいや！ あれは！ どう考えても！ 私
がっ！」

つつかえひつつかえ手を振り身体を振り回しながら弁解するルイズ
の両肩をつかみ、イングリッドがその動作を制止する。

「ふっひっ！」みたいな声を上げて、ルイズがイングリッドを見つめ
る。イングリッドは破願した。

「貸し借りなしじゃ」

大きく首を傾げるルイズの口にイングリッドの指が触る。

「いい表情じゃったぞ」

一瞬にして沸騰したルイズが右手を振り回した。さっと、バックステップを取って、イングリッドは笑う。

イングリッドに走りよろうとしたルイズの頭を左腕で抑えて、笑顔のままコルベールに視線を向ける。

「で、どうするのじゃ」

状況の変化についていけずに呆けていたコルベールが慌てて表情を引き締める。

イングリッドの声を反芻して、悩ましげに首を傾げる。

「どうするかと言われましても……」

ふむ。と首を傾げて、興奮冷めやらぬルイズに視線を戻す。

「ルイズや」

「なによー」

ルイズは瞬時に沸騰する。

イングリッドは苦笑いを浮かべると、少し腰を落として、視線の高さをルイズに合わせた。

「呼び出して、終わりなのかえ?」

え? とルイズが驚く。

「むふ」と変な声を出して、イングリッドが顔を寄せる。

「召喚して終わり、なんてことはないんじやろ」

「……!」

一転して酷くこわばった表情がルイズの顔を覆う。

コルベールも緊張した。ブワツとばかりに汗が顔を覆う。

「そう……なんだけど……」

酷くつらそうな表情を見せるコルベールと、酷く悩ましげに顔を苦悩で覆うルイズ。

イングリッドはその二人の仕草にぐりぐりと音を立ててそうな勢いで首を捻る。

イングリッドは過去の経験や、ペーパーブック、小説、漫画、アニメ等で得た情報から、召喚の後に何らかの契約か、召喚した証を自身

に与えるだろうという予測を立てていた。

隣の部屋で目が覚めた後、派手に2度寝をかました訳だが、再度、目覚めた後に、服を着替える段になって自身の身体に目視できる範囲内で何ら変化がないのは確認済みだった。

自身の内面に対しても変化はなかったと思う。無論、視覚出来ない部分や、知覚出来ない部分で変化がある可能性は捨て切れなかったが、ルイズとコルベールとの間で交わされた会話の結果からは、そういったイングリッド自身を縛る「契約」が行われていないであろうことは容易に想像がついた。

だからこそ「それだけではすまない」と、話を振ったのだが……2人の示す、妙な反応にイングリッドは戸惑ってしまった。

「なんじゃ……どうした？ 二人とも」

青褪めた顔を隠すこともなくイングリッドから距離を取りつつ、ルイズは言う。

「あのね……また、イングリッドに怪我をさせちゃうかもしれないの??」

ぐりんぐりんとクエスチョンマークを飛ばしながらイングリッドはコルベールを見やる。

痛ましげな、いつそ、悲壮な表情を浮かべてルイズを見ながらコルベールは答えた。

「コントラクト・サーヴァント、という魔法が必要なのですが……それをして、召喚の儀は終わるのですが……」

「？」

イングリッドは僅かに顎を突き出して先を促す。それを受けてコルベールは小さく頷いた。

「その……彼女の魔法は……」

その言葉に囁く様な声でルイズが自身の声をかぶせた。

「爆発しちゃうの……」

イングリッドは妙な表情でルイズを見つめる。

ルイズは泣きそう顔でイングリッドを見つめ返す。

「爆発しちゃうのー！」

ルイズが頭を振り乱しながら、叫ぶように声を張り上げる。

「わたしっ！ 私の魔法は！ みんな！ 爆発しちゃうのよっ！」

予想もつかなかった告白にイングリッドが「へうっ!?」と意味不明な声を上げて驚く。

ルイズは取り乱したように早口で捲くし立てる。

「爆発しちゃうの！ 私の魔法。爆発しちゃうの！ みんな、みんなっ、爆発するのっ！ みんなっ、ふつとばすの！ みんなっ、ぶっこわすの！」

興奮に身をよじり、頭を振り乱す。

「きつと、いえ、絶対につ！ 酷い事になっちゃう!!」

ルイズは俄かに全力疾走したように肩を上下させてうつむく。荒い息が紡がれる。涙と鼻水でぐちゃぐちゃに彩られた顔が痛ましい。妙な表情を張り付かせて、口を引き攣らせながらイングリッドはコルベールを見る。

彼は、そつと眼を逸らした。

「……そうです。彼女の……ミス・ヴァリエールの魔法は、その、なぜか、すべての結果が……」

イングリッドは顔を正面に向けたまま、少し間抜けな仕草でこくこくと首を動かして唸るような声を上げる。

「爆発すると……」

悲痛な表情が張り付いたコルベールが顔を向ける。

「ええ……」

身体を傾いでぎつと右手をふるい、少しぎこちない動作で右腕を曲げると、手で額を揉む。

「なるほど……」

「？」

コルベールは顔面に僅かな疑問を浮かべて、イングリッドの次の言葉を待つ。

「それで『使い魔という立場』になっってくれ、か」

「！」

コルベールは大きく身体を仰け反らした。

確かにコルベールはそういう意図を持って、その言葉を発した。しかしコルベールも、イングリッドがそれに対して、その僅かなコルベールの心の葛藤を見透かして、ここで話をつなげられる事になるとまでは思っていないかった。

「んむ。使い魔になれ、ではなく、立場になれ、か」

芝居じみた仕草で肩をすくめてイングリッドはルイズに向き直る。

「ルイズよ」

「何よ」

イングリッドは僅かに腰を落として、ひどく近い位置でルイズと顔を付き合わせる。

「いいのか？」

「？」

ルイズのぐちゃぐちゃな顔に疑問がさす。

イングリッドはふんつと鼻を鳴らした。

「使い魔の『ふり』をする我でよいのか？」

「！」

僅かな驚愕がルイズの顔に表れる。

コルベールも驚きを隠せない。

「使い魔でない我をそばに置いて満足か、と問うておる」

「!!」

うつむいてふるふると身体を震わせるルイズ。

地の底から響くような声が漏れる。

「いいわけ、ないじゃない……っ！」

その声に満足げに頷くイングリッド。慌てて二人の横に近づくコルベール。

「否、しかし、それはその、ありがたくはありますが、しかし！」

「危ないのよ!!」

コルベールの言葉を遮って、ルイズはまた頭を振り乱して叫び声を上げる。

「危険なのよ！ 爆発するのよ！ 怪我させるのよ！ ううん。今度こそ殺してしまうわ！ イングリッドを」

ばん、と音でも出そうな勢いでルイズの両肩をつかんでその華奢な身体をイングリッドは引き寄せた。

「やるがいいぞ、ルイズ。恐れるでないわ」

殆どデコが触れ合うほどの近きで、ルイズに囁く。

「我を呼び出したのは失敗じゃったか？」

「！」

ルイズの表情がこわばる。

「我主は、我を呼び出したのは本当に失敗であつたと感じたのかや？」

「!!」

ルイズは思考の底である瞬間に感じた手ごたえを思い出した。

違う！

叫びたかつた。

違う！

あの手ごたえ。あの力の奔流。あの身体を駆け抜けた「何か」の感触。

違う!!

そう。違う。あれは違う。あれは違っていた。あれは間違いがない。あれは勘違いの仕様がなない。だから私は、あの瞬間に、眼を凝らした。身構えた。顔を上げた。間違いなく成功したと思った。

否。あれは、成功だった。

イングリッドを呼び出したのは、成功だった!!

イングリッドがそう言ったからではない。

私の感じたとおりに、成功だった!!

「ミスタ・コルベール!!」

何かを決意した、強い感情の乗ったその声に、コルベールがうろたえる。

「な、なにかね、ミス・ヴァリエール」

ルイズはイングリッドを引き剥がしながら、コルベールに向き直り、懐から杖を出して、それを掲げた。

「やらせてください！ コントラクト・サーヴァントを！」

ルイズは僅かにうつむき、瞳を震わせて、そして大きく顔を上げて正面にコルベールの顔を捉えた。叫ぶように決意を表明する。

「見届けてください！ ミスタ・コルベール」

後ろで、大きく2度、3度と頷くイングリッド。

正直に言って、あのサモン・サーヴァントが成功した行為であったとは、コルベールにはとても思えなかった。いつもの失敗にしか思えなかった。

あれは成功の結果として、イングリッドを呼び出されたとは思えなかった。

あの場でコルベールのみ気がつけた理由によって、イングリッドが、どこか別の場所からその場に突然現れた存在であることは瞬時にして理解できたが、そうであってすら、何らかの伺い知れような理由で、或いは事故によって、イングリッドがその場に現れたのだと思った。

極端な想像を言えば、ルイズの魔法の行使の結果としてあの場にイングリッドが現れたのではなく、イングリッド自身の瞬間移動か何かそれに類する謎の力か技術によって、たまたま偶然にあの場に、イングリッドの意思で現れたのではないかとすら疑っていた。

……実のところ「イングリッドの意思」が介在したのだという点に於いてはコルベールの予想はかなり正確であったが、そこにイングリッドが現れた現象面での原因は間違いないルイズの力であった。

しかし「イングリッドの意思」を強く感じたコルベールは、だからこそ、ルイズの魔法が『失敗』したのだと判断してしまった。そう思ったからこそ、あの場でイングリッドに、あれほどまでに執拗に状況説明になるであろう言葉を吐いたのだ。

一見して、非常に聡いイングリッドであればあの中途半端な説明であってもある程度の理解を示してくれるであろうと言う、期待、いや、願望が、あの場での対応であった。

この話し合いの場で得た結論は、非常に有意義なものであった。疑

いようもなくイングリッドはコルベールの想像通り、いや、想像以上に聡い少女であった。

その彼女が、コントラクト・サーヴァントを望んでいる！

コルベールは大きく動揺した。

そんな馬鹿な！ あれが成功だと！ 少女がサモン・サーヴァントの結果であると！

そんなことはあり得ない！！

コルベールは動揺に身を震わせながら、ルイズに顔を向けて翻意を促そうとする。

「いや、ミス・ヴァリエール。それはきけ……」

その顔にアイアンクロウを食らわせて、イングリッドがコルベールを黙らせる。

「うがぐぎぎぎ」みたいな声を出して悶える彼だが、イングリッドの腕は離れない。

「ルイズ。コントラクト・サーヴァントとはどうやるんじや」

視線をイングリッドから離さないルイズは、強い口調で答えた。

「呪文を唱えてキスをするの！」

一瞬で、決意に溢れてこわばった表情が、赤色に染まる。頭の前から湯気でも吹き上がりそうな程の見事な朱、だった。

「んふ」とイングリッドが声を上げて、アイアンクロウをはずす。唸り声を上げて、コルベールがしりもちをつく。

それを視界の片隅に置きながら、ルイズの視線を外さぬ様に、ルイズの身体に再度近づく。

「それは、呪文を唱えた瞬間に、成立するのか？ それとも、キスをした瞬間に成立するのかや？」

ルイズは首を捻った。あの召喚の場で、自分以外のもの達が、コントラクト・サーヴァントを行い、そして、その結果に喜びの声を上げた姿を思い出す。

「キス、を、した瞬間だと、思う……」

「ほう……」

イングリッドは優しい表情で未だ、立ち上がることの出来ないコルベールを見下ろした。腰をさすりながら顔を上げた彼の目が彼女と交錯する。

「生徒思いいじやの……主よ」

「！」

コルベールは慌てて顔をそらした。

その行動に疑問符を浮かべながら、ルイズはイングリッドの前に杖を掲げる。

ルイズは緊張した身体を震わせながら、眼を閉じて魔法を紡ぐ。

「我が名を使い魔が召喚に応えた、貴様に伝える。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。我は我と貴様の信じるがとらに於いて望む。我が望みは貴様が我とともに歩み我の力の一助となりて、貴様が我とともに歩み我のそばに在ることを貴様自身の心に於いて望むことを願いたもう。五つの力をつかさどるは、その術形、その名をペンタグラム。そこにあるは五つのエレメント。この者に、大いなるその見技より出でて、我らに与えられしエレメントの祝福を、この者にも等しく与えられんことを」

カツと、眼を見開いて力ある言葉の最後を紡ぎだす。

「この者を、我が使い魔となせ！」

刹那の逡巡を振り切つて、イングリッドに飛びつくように身を投げ出すと、イングリッドの頭を掻き抱いて勢い良くルイズ自らの唇でイングリッドの唇をふさいだ。

一瞬、ほんの一瞬、眼を逸らしたことをコルベールは恥じた。

そして、コルベールが自身の教え子に抱いた疑問、懐疑の念を、その生涯にわたり、恥じた。

この瞬間に、確かに契約は成った。

爆発はしなかった。

光ることすらなかった。

煙が吹き上がることもなかった。

空気が震えることもなかった。

ただ少女が二人、強く、強く、唇を求めただけだった。

しかし、コルベールには見えた。
力が。

確かに、力が、力としか言いようが無いものが、二人の唇を互いに
行き来して、二人の体の中へと吸い込まれていくのがわかった。
力。

コルベールとしても、そう短くはない人生のなかで、コントラクト・
サーヴァントをこれほどの至近距離でまじまじと見つめた経験はな
かった。

こうして互いに力のやり取りがあるとは知らなかった。

「この者に、大いなるその見技より出でて、我らに与えられしエレメ
ントの祝福を、この者にも等しく与えられんことを」

これこそが祝福。大いなる見技の恩寵かもしれない。

そう信じた。

銀髪の使い魔（4）

どれほどの時間が過ぎたのか。コルベールには判断がつかなかった。

ほんの僅かな、一瞬の邂逅かも知れないし、或いは数刻の触れ合いかも知れないとも思った。

だが、僅かに黄色を深める外の風景は、実際にはそれ程の時間が過ぎていく訳ではない。その事を、コルベールに知らせていた。

見上げる。

2人の少女は眼を閉じたまま、ゆつくりと唇を離した。触れ合うには遠いが、唯向き合うには近い距離で相對し、しばしの後、どちらからともなく眼を開いた。

2人の唇と唇の間に渡った透明な糸が急速に力なく垂れ下がり、そして切れ、粒となって床に吸い込まれた。それを、なんとなく視線で追ったコルベールは、無意識にそれを残念に思った。そうしてから、そのような考えを思った自分に驚き、しばし赤面した。

コルベールには幸いな事であったが、2人はその事に気が付く事はなかった。

若干の間を持つて、2人とも、知らず、硬直した身体を弛緩させた。それから、イングリッドは小さく首を捻った。

「うまくいったのかや……?」

ルイズに向けられた視線が、ルイズの疑問と不安の入り混じった表情を捉えた。それに気がついたイングリッドは、その疑問に染まった顔を床に座るコルベールに移す。

その視線にばつが悪そうに僅かに身じろぎすると、小さく咳払いをしてコルベールは立ち上がる。

「成功しているならば、あなたの身体のどこかに、使い魔の証となるルーンが刻まれる筈です」

「るーん? ルーン文字かえ? それが『刻まれる』と、な?」

俄かに身体をよじって、腕、足、肩、胸、と、あちらこちらに視線を這わせるイングリッド。

それを不安そうに眺めるルイズ。

その身体は僅かに震えて、しかし、表情はどこか恍惚としたものが混じり、朱が入る。

2人に視線を交互に移すコルベールには不安の表情は無かった。

大丈夫です。間違いありません。

唇が触れ合ったあの瞬間の2人に交わされた、言葉なき交流とその結末に無言のまま太鼓判を押す。

教鞭をとるものとして、コントラクト・サーヴァントにおける、現在までに顕在化したことは無いが、その特性上、当然考えられるのに……しかし見過ごされてきた危険性を鑑み。儀式の見届け人として。幾度となく志願して、コントラクト・サーヴァントに何度となく立ち会った者として酷く恥ずかしい事ではあったが。

コントラクト・サーヴァントにあれほどの神秘的情景が見られるとは思ってもよらなかったが。

そうであるが故に、経験則に照らして判断をする事の出来無いもどかしさがあったが。

だが、彼の直感は、あれは間違いなく、疑いようもない成功だと告げていた。今の彼は、その自身の直感を信じてまた、遡ってサモン・サーヴァントも成功であったと断じた。

ふと気がつく、難しい顔をしたイングリッドが僅かに左腕を上げて、その手の甲に視線を集中する。眼が細められて視線を切り、ついつとルイズに視線を戻された。

「左手に刻まれているようじゃの」

その言葉にルイズの表情がぱっと明るくなる。

だがイングリッドの表情はますます硬くなる。

それに気がついたルイズの表情が、また、不安に揺れる。

「どうしたの……？」

イングリッドは小さく肩を竦めて嘆息した。

「わりかし痛いんじゃないが」

ルイズはびくりと身体を震わせて、慌てたように捲くし立てる。
「すぐ終わるから！ちよつと我慢すればいいから!!」

眼を細め右手で顎をなでつけながら、イングリッドは小さな仕草で天井を仰ぐ。

「これほどの痛みを、使い魔達は。突然の召喚の後に、我慢しとるのか。驚きだな。よく、暴れださんもんじゃ……」

ふとイングリッドは何かに気がついてコルベールへと視線を振る。「なるほどの。じゃから、主がいるわけか」

得心がいったようにうんうんと頷くイングリッドの姿に、幾度目かの驚愕をコルベールは漏らしてしまった。この少女はいったいどれ程までに聡いのだろうか？そう疑念してしまう。

その会話の意味を理解出来なかったルイズは、小さく首を捻りながらイングリッドに心配そうな表情を向けたまま、ただ見つめ続ける。

その彼女が頷く。

「ようわからんが、終わったようじゃぞ」

不安が晴れないまま、ルイズが頷く。僅かに青褪めた表情は、いまだに自身の行為の結果を信じられないでいる事が読み取れた。

コルベールはその不安を取り払おうとして2人に近づく。ルイズに寄り添って、肩でも叩こう、いやそれは「せくはら」かなどと思いつながら。しかし、その顔前にイングリッドが肩の高さまで持ち上げた結果として、コルベールからも良く見えるようになった彼女の左手が目に入る。そのルーンの刻まれた左手に視線を移して、そこに刻まれたものに疑問を覚える。

「ほう……これは……!?!」

妙な声を出したコルベールに、一層不安げな表情を張り付かせて、ルイズはびくりと身体を震わせた。

コルベールがイングリッドににじり寄って左手を見ようとする。イングリッドから見てその姿は、今まで凜として存在していた教育者の姿がどこかに走り去って、突如として殻を打ち破って湧き出した研究者、と、どうかある種のナードの表情だと思った。その手の時と場合によって、理屈ではその行動に押さえが利かない類の人間が苦手な

イングリッドは、突然の豹変を遂げたコルベールを嫌そうな表情で見つめる。

どう考えてもそれに気がついていない風には見えないコルベールは、委細構わずといった態度で、イングリッドの左手を取ろうとする。

「これはめずらしいルーンだ。是非、良く見せてもらって……」

コルベールの言葉が終わらないうちにひよいっという仕草で、それを頭の上に振り上げてイングリッドは、直前までコルベールに向けていた胡散臭そうな表情を引き締めた。宝物を取り上げられた餓鬼のような表情を浮かべたコルベールから視線を逸らした彼女は、生真面目な表情に変容した顔をキョトンとした表情を浮かべるルイズに向ける。

「我が主ルイズよ。この、ルーンとやらは他人に見せてよいものなのか」

突然浴びせられた声に戸惑いを隠せなかったルイズ。その言葉の意味が、言葉に込められた意味が一瞬では理解できなかった。そしてその言葉の中に想像以上に重たい意味があつた事を刹那の瞬間に気がついて、隠し様のない喜びが顔面いっぱい広がった。

この少女は……イングリッドは……！

溢れそうになる涙をごまかすように、ルイズは慌てて首を振ってしかし、イングリッドの言葉には肯定するように、言葉を返す。

「うううううん、ううん。うん！いいいいいいの。いいの！コルベー……ミスタ・コルベールには見せてあげてもいいわ！イングリッド」

何度もつつかえて言い直すルイズに、イングリッドは相貌を崩し小さな笑みを向けて、左腕を下ろす。

「承知」

左手をコルベールに良く見えるように突き出した。

その手を取って、ほうほう、と頷いたり、ふむふむ、と呟いたり、これは……と喚いたりしたりするはげちゃびんを視界の脇に置きながら、うつむいて、震える、しかし、今までとはまったく違う質の震えに身を委ねるルイズの顎を右手で支えて、イングリッドは無理やり彼

女の視線を自分に合わせた。

「おめでとう。我が主」

「？」

震えたり、不安を浮かべたり、眉間にしわを寄せたり、喜んだり、落ち込んだり、頬を染めたり……。まあ随分と忙しく変遷したルイズの表情を思い浮かべながら、イングリッドも邪気のない笑顔を浮かべた。

「2度目の、成功じゃな」

「！」

疑いようなない喜色がルイズの整った顔に広がる。

その姿をうんうんと満足げに見つめながら、左手をつかんで、うぐうとか、むふうとか妙な唸りを上げているコルベールを振り払う。ゴミでも散らすようにひらひらと手を振って、まず自身の左手を見、それから刻まれたルーンがルイズに良く見えるよう、彼女の眼前に差し出す。

「証拠じゃ。もう、だれ憚ることもあるまい」

「!!」

「主は、間違いなく魔法使いじゃ」

「!!!」

こわばった表情でまじまじとイングリッドを見つめるルイズを、彼女は真剣な表情で見つめ返して、すぐに元の笑顔に戻した。

「我が保障する」

「!!!」

「誰が否定しても、我は否定しない」

「……!!」

「主は、どこに出しても恥ずかしくはない……立派な魔法使いじゃな」
その言葉にルイズの表情は遂に決壊した。身体を支えていた力が脆くも崩れて、ぺたんと腰を落とし、腕を投げ出したまま顔を天井のほうに向けて、遠慮会釈なく大声で泣いた。幼い子供のように泣き出した。

困ったような微妙な表情を浮かべてイングリッドはその正面に腰

を下ろし、その手をルイズの頭に載せようとして、躊躇し、結局、その騒々しい少女の前で小さな笑顔を向けながら、ただ、泣き止むのを待った。

コルベールはコルベールで、一瞬の好奇心に身を委ね、自身の教え子に対して真っ先にかけるべき言葉を言えなかつた自身の迂闊さを呪った。

自分自身に対して隠し様のない嫌悪をのせて、大きなため息を吐く。

さあ、て、と。いつか、ミス・ヴァリエールに祝福を与えることが出来るのでしょうか。自分は。

切なそうに首を振る。

コルベールは、魔法学院が嫌いだった。

いや、今の魔法学院のあり方が、嫌いだった。

無気力な同僚。やる気の欠片も無い生徒。自分達にも、生徒達にも、隠し様の無い嫌悪が透けて見える、平民の使用者。

個々の人々に対してはいろいろと思うこともあつたが、総体としての魔法学院に対してはいつそ憎悪していると言つて良い程の感情が渦巻いていた。

晴れやからぬ貴族社会を泳ぐ者としての練達者である校長のオールド・オスマンなどは、トリステイン王国と言う国家の中では他に比べようも無い程の大きな尊敬を、実務者に対する感想として抱いていたが、人間としては別だった。あからさまに言つて、少なくとも自分が生きている内は自分の視界に入つてほしくは無い類のモノだとすら思った。

200年以上にわたり、トリステイン魔法学院の実務上の頂点として君臨してきたオールド・オスマンは、その滲み出る内面の黒さ故に、200年の時をそこに据える事が出来たのだとコルベールは唾棄する。

様々な理由により、貴族社会をドロップアウトした、だが、野に捨ててには惜しい、言い換えれば、野に解き放つには危険なメイジである。

り、貴族では無くなつてしまつた者の受け皿としての魔法学院。その余り知られていない存在意義を一人で切り盛りするオールド・オスマンのあり方は「素晴らしい」かつたが、その奥に見え隠れする彼の本心や本音は、視線を逸らしようが無い程に汚らわしいとコルベールは思つていた。

その汚らわしい世界の筆頭に自分が位置している事実は、吐き捨てるほどに忌々しい葛藤を覚えさせた。

そして、そういう感情を自分が持つてそれを外に撒き散らす権利等は持ち得ていない事にコルベールは憤慨した。

だが、とりあえずは、それに関しては『大人』の態度を持つて振り切る。

そうして、何の希望も未来も持たない惰性のような日々をすごして幾年。

その中にある日忽然と現れたミス・ヴァリエールは、彼には眩しかった。

眩しすぎた。

彼女はその存在が、余りにも眩しかった。

魔法の使えない貴族。

その地位や、それに課せられた責任以前の人間として、唯暮らしていくだけならばどうでもいいところに、魔法が使える事という、但し書きが乗つかつている事が当然の理である「貴族」のありように溺れ苦しんでいる、ルイズ。

それが如何に苦しく、辛い事であるか。本質的な意味で貴族としての職責を果たした事が無いコルベールには、想像する事は出来ない。しかし、そうであるが故に、唯無責任な視線で、貴族社会を生きようとがくルイズがどれほどの苦悩に塗れて、どれほどの屈辱に塗れて生きているかを予想するのは容易かつた。

単なる夢物語として語るにあたってすら、余りにもあり得ない、貴族として生まれた「無能」な貴族。

現実とはどれほどまでに空想の物語より奇なるものか……。残酷で、残忍な世界を、必死で生きるルイズ。

気がつけば、彼は、そんな少女の生き方に魅せられていた。

どれほどの侮辱を受けようとも、いかほどの侮蔑を投げかけられようとも、ただ「魔法が使えない」という一点のみを例外として、彼女はまごう事なき「貴族」であった。

眩しかった。

そうであるが故に、その周囲にある、貴族社会が汚らわしかった。

彼女の生き方故に、貴族の生き方には本質的に「魔法」の存在が絶対では無い事実、コルベールはいつしか気がつかされていた。

むしろ、魔法を持つが故に霞んでいだけで、それを持たざれば、貴族どころか平民にすらもとる者達が如何に多いことか。そこに気がつかされた。

目線を移してみれば、ハルケギニアには、魔法の能力云々を重視せず、金さえあれば貴族という「立場」を買い取る国がある。

そういつた国を無責任に……。いつそ、無邪気な他観的視野で「野蛮」だと思ふ場合もあった。だが、人間社会を生きるにあたって、完全無欠ではないにせよかなりの部分で絶対的指標になり得る財産の多寡によつてのみ、評価して、貴族という立場に出入りできる形と云うのは、コルベールの人生経験上納得し難くはあったが、一つの見識であろうとは理解出来た。理解出来る様になった。

理解出来てしまった。

現実問題としてルイズという少女は、魔法の使用の有無等どうでも良いところで間違い無く、絶対的な貴族の姿を体現していた。

これは魔法学院で魔法を教える立場の人間としては、深刻なコンフリクトを抱かせる事だった。

魔法の有無が貴族の優劣を決める絶対的評価基準では無い……。

トリスティン以外で魔法学院と言う形の教育の場が廃れたのも当然であろうとすらコルベールは考えてしまう。

だからこそ、もどかしかった。

歴史だけ営々と積み重ねて、腐臭すら漂わせるトリスティンと言う

国において存在する……存在してしまつた、ある1点のみに眼を瞑れば、極めて優秀な貴族の卵であるルイズ。

もし、もしもありえざる奇跡の末に、彼女が魔法の存在等どうでも良い国や土地において、その生を受けていたらとしたら……。

だが、そこでコルベールは悩んでしまう。

ルイズという存在が現在、誇り高き貴族の姿を体現しているのは、魔法の存在が絶対であるトリステインのあり方故と言う、皮肉な現状があるからだと気がついてしまう。

ルイズという少女が端から、魔法の使用を是としない場に生を受けていた場合、はたしてそのルイズはこれ程までに誇り高い生を続けてこれたであろうか？

ルイズが体現するその生き方は、侮辱と迫害に塗れた周囲の環境故
Antinomie
と言う反律の中に育まれた、奇跡の果実ではないのか？

ルイズという存在は、歴史と伝統を誇るトリステイン王国のなかにあつてなお、伝統と格式を誇るヴァリエール家という、彼女にとっての地獄のような環境があつて初めて芽を吹いた、奇跡の花ではないのか？

コルベールは苦悩した。

だからこそ。だからこそ、魔法が使えないルイズを哀れんだ。ルイズに僅かばかりの恩寵すら与えない世界を憎んだ。そうしてあかく少女の姿に何の影響を与え得ない自身の無力さを嫌悪した。そして、彼女の苦悩に僅かばかりの感心すら示さない魔法学院という存在に恐怖した。

なぜ。

なぜ、ルイズに、ほんの少しの祝福すら世界はお与えにならないのか？

そうした部分で、過去の自分のあり方に絶望し、貴族社会のあり方に幻滅し、そうやって危険な状態を膨らませて腐り続けていたコルベールは、ルイズという存在のあり方とその環境によって、世界に憎悪しつつあつた。時と場所がかわれば、ある瞬間に彼自身が世界の

破壊者となって、地に立ちかねない危険な状態にあった。

彼が性急に破壊の使者へと身を翻さなかったのは、ほかならぬ「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール」と言う、地獄のような状況下にあつてなお、自身が希望をゆるがせない存在があつた。彼女の行く末を見届けることが、このトリスティン魔法学院で教鞭をとる教師としての責任であるという矜持がコルベールにあつた。ルイズと言う生徒を見守るうちにそれが出来た。だから、あの意味において、あのサモン・サーヴァントと言う場は、二重、三重に崖つぷちであつた。

そこに今、微かではあるが、日の光が差した。

まさに福音。

まさに恩寵。

奇跡。

コルベールはこの瞬間を生涯忘れまいと心に誓つた。

その先に訪れる結末が、いかなる幸福に塗れようとも。いかなる絶望に包まれようとも。

泣き喚くルイズをなだめてすかしてどうにか立ち直らせたイングリッドが、妙な疲労感を張り付かせた表情をコルベールに向ける。

その何か問いたげなイングリッドの表情に、コルベールが頷いて先を促す。それをうけてイングリッドも頷いた。

「さて、後はどうすればよいかの？」

イングリッドが首を捻つて、身体を傾げた。

そんな姿をコルベールは微笑ましく見つめながら、少し考える。

「そう、ですね。コントラクト・サーヴァントの成功は、確かにこの私、コルベールが見届けました。私の責任において上に、間違いなく報告しておきましょう」

「ん」とイングリッドは頷く。

ルイズも、喜色を張り付かせた顔のままそれに続いて小さく頷く。

「もはや時刻も遅い。随分と時間をとられてしまった。ミス・ヴァリエールも明日からは普通に授業に出ていただいて結構でしょう」

少し頭を捻って言葉を選ぶ。

「んんー。そうだ。後は積もる話もあるでしょう。ミス・ヴァリエール。私がいては言う事の出来ないこともあるでしょうから、彼女をつけて寮に戻りなさい。自室で仲を深めるとよいでしょう」

その言葉に何故だか頬を染めるルイズ。

ちらと、それを見てからコルベールに視線を向けるイングリッド。

「そうか。それなら、我が主……」

「ルイズ！」

唐突にルイズが声を張り上げる。小さく驚いてイングリッドがその顔をまじまじと見つめる。

ルイズがそれにニヤリと笑みを返すと、胸を張ってどこか誇らしげに叫んだ。

「ルイズ、よー！」

首を捻り、次いでその紅い瞳をくりくりと瞬かせながら、視線を交わす。次の瞬間に、楽しそうな軽やかな笑い声を上げてイングリッドは頷いた。

「んむ。ルイズよ。では、案内してくりやれ」

「わかったわ。ついて来なさいー！」

楽しそうに笑みを交わしながら、大きな音を立てて扉を開けるルイズ。その後ろをついて、イングリッドは廊下に一歩足を踏み出してから、ふと何かに気がついたように足を止めた。

「ルイズ。すまぬな、一つ、コルベールに確認しておきたいことがあるんじゃ」

「なに？なら一緒に……」

訝しげな表情のルイズを手のひらでそっと抑える。

「すまぬが、廊下で待ってくりやれ。すぐに終わる」

「むー」と、ふくれっ面をつくるルイズの頭を優しくなでつけて、ついで両手で頬を包みまっすぐに見つめる。

「なに。そんなに時間はとりやせん」

ルイズは頬を優しく包む手に、自身の両手を触れ合わせて後、小首を傾げた。小さく嘆息して、頷く。

「早くしてよね」

「承知」

イングリッドが後ろ手に扉を閉めて、どこか不安そうなルイズの顔が遮られて消える。

先ほどまでの暖かな雰囲気は突如、霧散して、肌を刺すような緊張感がコルベールを包む。

彼は俄かに冷や汗をかいた。

「ついつ」と、音も無く彼の元に近づいたイングリッドをコルベールは知覚出来なかった。気がついたら眼前に、銀髪を翻す少女の顔があった。彼女の顔は無表情で、特段の意識の表れは無かったが、視線にこめられた力は強かった。

「いろいろと聞きたいことはあるが、まあ、どうでも良い。おいおい知ればよからうよ」

囁く様な声を上げながら一切の音を立てる事無く彼女は、彼の周りで一定の間隔を空けて円を描いて歩く。緊張で身体がこわばるコルベールは意識のみでそれを追って、視線は扉から離さない。

「主よ……。我の、何に気がついた？」

彼はうつと言葉に詰まって、更に冷や汗を噴出す。

やばい。やはり彼女は聡い。

自分が彼女の力に気がついた事に、とっくに気がついていて、思い出す。

そう、あの瞬間、あのときの対応が「人間が呼び出されたという状況の特異性」に対する警戒の結果ではなく、「イングリッドと言う特異な力を持つ存在が現れたという特殊な状況」に対する警戒の結果であったと見抜かれている！

固まっている彼に構わず、イングリッドが言葉を続ける。

「おかしい……。おかしいんじや、主の言葉は」

ぐくくりと唾を飲み込む。

「召喚の説明で、主はこの世界の動物や生物が、召喚に応える、と言った」

コルベールは僅かに頷く。

「だが、主のいくつかの対応は、まるで、我が、遠い場所……少なくとも、お前達自身が唯の一度も交流した事がない場所からやってきた人間……」

言葉を止め、コルベールの前で顔を向け合う。

「人間の『ようなもの』に対応するような意識が透けておった。……自分達と意見を交換でき、交流は可能な、だが、得体の知れない『異生物』、に対する意識じゃったな」

それは疑問ではなかった。確信。

「主よ。我の何に気づいた」

彼女の紅い瞳には強制する様な力は感じられなかった。純粹に、疑問があった。彼が彼女をどう思ったかに関する疑問ではなかった。彼、コルベールがなぜ、イングリッドの特異性に気がついたのかという疑問。

ごくりともう一度唾を飲み込んで息を2度、3度と吐く。コルベールは自身が随分と長い間呼吸を忘れていた事に驚く。

イングリッドに視線を送っても、もはや彼女がこれ以上の言葉を紡ごうとしないのは確信出来た。彼女はコルベールの言葉を待っている。もしかしたら、コルベールが答えない事すら想定しているのかもしれない。

どうする。

コルベールは残された時間が少ない事を自覚してめまぐるしく思考を走らせる。

どうする。言うべきか。信じられるのか。

静かな時の流れの中で、刹那の紅い光を急速に失わせて、夜の帳が近づいてくる。廊下の外に煌々と照らされた魔法の輝きが、扉の隙間から漏れる。

召喚の場、この短い交流。そして彼女に治療を施し、邪気無く眠る姿を思い浮かべ、次いで、悩み苦しんできたルイズという少女の希望の见えない1年を振り返る。

違う。

言い換える。

希望を与えられない無力な自身の無能を振り返る。

いつの間にか自らの無意識、否、無責任でイングリッドの瞳から逸らされた自らの視線を強い意志力を持って動かして、彼女を強く見つめ返す。

無反応だがなにもかもを見透かすようなその瞳に、僅かながらの恐怖を感じ、そして振り払う。

信じる。信じるしかない。使い魔はメイジの一生のパートナー。自分は言った。使い魔はメイジに近いものが現れると。メイジに必要とされる存在が応えると。

そうだ。つまり自分は、イングリッドこそがルイズに必要とされた存在であると断じた。それを翻すというのか。

ならば、私がここで彼女の疑問に答えるのは……。

廊下の方を気にしながらコルベールは、小さな声で早口に言葉を紡ぐ。

「……あなたの力は、あなたから感じる力は余りにも大きかった」

「……」

「それで？」とも言う様な無言の圧力を感じた。コルベールはそれを受けて小さく頷く。

「それ自体は実は、それほど不思議ではない、そう思いました」

「ふむ」イングリッドが小さな疑問を表情に浮かべて首を傾げる。

「大きい力を持った使い魔が現れるのは、当然だ、と思ったのです」

「！」

イングリッドは驚きを隠さなかった。コルベールの独白は続く。

「ミス・ヴァリエールは魔法行使の段においてはまったくの失敗の連続でした。しかし魔法の『力』そのものが無いわけではなかった」

「気づいておったのか……」

イングリッドが納得したように頷く。コルベールも頷き返した。

イングリッドがルイズに対してコルベールが下したのと同じ判断を下していた事には、もはや驚きも無い。

「ですから、呼び出されるものがあれば当然、彼女の『力』に似合った

……ドラゴンや、或いはそれに類する『力』をそなえた強大な幻獣が現れると思いました」

「我が気がついた時点で主がやる気満々だったのは、そういうことか。なるほどなるほど」

小さく嘆息したコルベールは、しかしイングリッドから目を逸らしてしまった。イングリッドはその態度に訝しげに首を捻る。「？」

コルベールはそれを認めつつも、そのまま言葉を続ける。

「あなたの力は……魔法的『力』に近いと思った……。だが違った。近いが知らない……得体の知れない種類の『力』だった」

「ふむ」イングリッドは頷いた。それはイングリッド自身による肯定の意。

「だから『人間』ではないと？」

コルベールは頷き返す。

「少なくとも、我々が知っている場所、土地に住まう人間とは、明らかに違うと」

イングリッドは微かな笑みを浮かべて、コルベールに頷く。

「なるほどの。主よ。やはり、主は、唯の教師では収まらない」

コルベールは大きく動揺して言葉を詰まらせる。それを認めてイングリッドは声を上げて笑った。

「よい。詮索はせん。我が主に危害を加えん限りは知らぬ。勝手にするがよい」

強張った表情持つてしかし、視線をイングリッドから外せないコルベール。

彼女はそれに頓着する事無く、身体を傾げて右手を大きく振り、一瞬間中にとどめる。そうしてから腕を折り曲げて、頭を飾る大きなアケセサリーを撫でるように、手を動かす。

「ふむう。と、なると、わしの力は見せぬのが吉か……」

コルベールは肯定の意思を乗せてゆつくりと、しかし深く頷いた。

「少なくとも、絶対に必要とされる時がない限りは」

イングリッドは「んー」と唸りながら、顎を撫で付ける。

「不便じゃの……。判断を仰ぐもんはおらぬのかや？」

胡乱げな瞳がコルベールを刺す。

地位的に言つて間違いが無い、政治的地位から行つても絶対的な上司であり責任を持つていて、ことになっている『はず』の立場にあるのは、ロマリアから派遣されているカステルフィダルド、トリステイン魔法学院監督官である。コルベールはその、でっぷりと太つて、いつも汗を撒き散らしている、香水の臭いの塊のようでその実、肉の塊である彼の顔を思い出す。次いで、実務面での最高指導者であるオールド・オスマンの顔を思い浮かべる。

駄目だ。

カステルフィダルドは問題外であつた。コルベールの見聞きした中で、彼にこの様な微妙な問題を委ねる事は、愚かしい以前の判断であつた。

では、と、オールド・オスマンの顔を思い出す。

深い彫が刻まれた、細い面立ち。そこから地面へと伸びやかに身をくねらせた白い髭。身体全体を覆う白いローブ。

駄目だ。

実務者としてはともかく、人間としては……。否。実務者として優れているからこそ、疑い様もなく、イングリッドと言う存在の事実を、イングリッドと言う現実に感じた自身の感想を取り扱わせるわけにはいかない……。！

彼は、大きく首を振つた。

それを認めたイングリッドが呆れたように鼻を鳴らした。

「おらぬのか」

頷く。

「二介の教師の判断が、間違いないと？」

その言葉には、言外にこの魔法学院には無能な者しかいないのか？という疑問が含まれていた。

一切の誤解も勘違いも無く、イングリッドの言葉を完全に理解した上で、それも含めてコルベールは頷く。勿論、一般的な意味で無能な

者しかいないわけではない。学院運営の実務面とかいった点では寧ろ、自分よりもよほどに有能な者がいる。その筆頭は間違いなくオールド・オスマンその人である。それはコルベールも疑いようが無い。その上で、この問題を取り扱う上ではどれもかしこも「無能」だと断じるしかない。

イングリッドは大きさに肩をすくめて両の手のひらを上に向けた。「ぐはっ。想像以上に厄介な世界に来たようじゃの」
世界？

イングリッドの言い回しに疑問を浮かべたコルベールは、それを聞いたただそうとしてしかし、果たせなかった。

扉が勢い良く開かれる。

「イングリッドー。まだー？待ちくたびれたよー」

かすかな不安を乗せた言葉にハツとする。もはや互いの顔を判別するのも困難な暗闇の中で、廊下から溢れる光を背にしたルイズと思しき姿を見やる。その後ろに困った表情を浮かべたメイドが二人、所在無げに立っている。

イングリッドから苦笑いしている気配が漂ってきた。コルベールも苦笑する。

「すまぬ。思ったより時間を取らせてしまった」

ルイズが杖を天井に向けてコマンド・ワードを唱えた。

「封じられた力に望む。その力を発して、望まれた業を我らに示せ」

ぱつと明るくなった部屋に、音も無くメイドが立ち入って、テーブルの上を片付け始めた。

ルイズがその姿を眼で追いながら、メイドたちに声をかけた。

「シエスタ、レン。どちらでもいいわ。スタンドに余っているものを包んで、後で私の部屋に持ってきてくれないかしら」

黒髪のメイドが一度背筋を伸ばしてルイズに向き直り、腰を折った。

「畏まりました」

顔を戻して、問いかける。

「お飲み物も用意しますか」

ルイズが首を捻って、顎をさする。

「んーそうね。大げさなものは必要ないけど……そうだ。そのフレーバーは冷やしてもおいしいのかしら？」

メイドが小首を傾げた。

「申し訳ありません。私どもでは判断が付きませんので……」

あわててルイズが言葉を遮る。

「ああ、ごめんなさい。当然よね。あなた達に聞いた私が無作法だわ。いけないわ、私。」

そうね、おいしいアイステイーがあればそれでいいの。多めに用意できるかしら？カップは二つね」

手をひらひらさせながらメイドに謝罪する。

「ごめんなさい。無理を言って」

その言葉に、金髪のメイドがびくりと肩を震わせる。

「？」

「？」

イングリッドとルイズは顔を見合わせる。

「……畏まりました。お時間は、いかがいたしましたでしょうか」

ルイズは指で額を軽く揉んだ。

「そうねえ……あなた達の仕事がひと段落ついてからでいいわ。急ぐ必要は無いから。慌てないでね」

イングリッドは、コルベールに小さく会釈をしてから、ルイズに近づく。それに気がついたルイズは、彼女を伴って扉を潜り、ふと気がついたように振り返った。

「そうそう。ガレットもパンもクッキーも。それに紅茶も。とってもおいしかったわ。つくった人にお礼を言っておいてね。みんな喜んでいたって」

片付ける作業に戻っていた2人のメイドは驚いて手を止め、すでに立ち去っていった2人の姿を追うように視線を彷徨わせてから、居残っているコルベールに視線を移した。

コルベールは苦笑した。

「二人とも、片づけが終わったら、部屋はそのままにしてよい。報告も
いらぬ。明かりは後で私が落としておくし、施錠もしておこう」

自分がいては2人の邪魔になると気がついたコルベールは、さっさと歩みだした。早く食堂に行かないと夕食が冷めてしまうし、使用人たちに迷惑がかかると思った。今日、これから口にする食事は、きつとここ数年で一番においしく感じるに違いない。

食堂に向かうコルベールの足取りは疑いようもなく軽やかなものだった。

メイドが2人だけになった部屋で、やや乱暴になった仕草で片づけを続けながら、くすんだ色の金髪メイドが黒髪メイドに声をかけた。

「貴族が『ありがとう』だって。『ごめんなさい』だって……」

胡散臭そうな表情を隠そうともしないきつめの視線を浴びながらしかし、黒髪のメイドは素朴な表情に笑みを浮かべた。

「ミス・ヴァリエールはそういう人よ」

その表情は少し、ほんの少しだけ嬉しそうで、そして誇らしそうだった。

イングリッドは無策にルイズとの使い魔契約を承知した訳ではなかった。

召喚の場で自身に向けられたのが強力な殺傷力を持つ攻撃の術だと思っていた彼女は、魔法の行使が術から爆発するのだというルイズにある事実を予想していなかったから本気で驚いたが……ルイズとのつながりを持つことは、自身の身に課せられた使命のくびきもあって、必要と断じた。

半ば以上、勘に頼ることが大きかった。だが、こうしたときの勘は、ごくわずかな例外を除いて信じるべきであるというのがイングリッド自身の見解だった。

イングリッドには核心めいた思いがあった。

極東の街中をぶらぶらと歩いていた最中に現れた、力の塊。一見して鏡を思わせるそれから発せられる力は、人外どころではなかった。いつか遠い日にうっかりかかわって完膚なきまでにずたぼろにされた、赤と青に分けられた、化け物というにも優しい力の権化に立ち向かわざるを得なかったとき。その時に、背筋を震わせた『力』にも等しい恐怖が自身を貫いた。

正直に言おう。

イングリッドの手に余る『力』だった。

だから無視を決め込むことにした。

出来なかった。

無力で、無害な少年が。

自分達が守り、そして我が感謝されることも無く、彼は唯知らぬままに人生を送り、知らぬまま悪くは無経験を振り返り、それなりの満足に包まれて死ぬべき存在が。

しかし、彼は、彼が、時に世界をも揺るがす人の力の原罪とも言える『好奇心』という『力』の一側面を全開にして、「鏡」に対してあれこれと仕出かし始めた瞬間をイングリッドが目にしてしまったときには、息が止まるかと思った。

それを愚かと言う権利はイングリッドには無かった。あれは不思議なものだ。イングリッドすらそう思ったのだ。力を感じなければイングリッドすら好奇心を持って相対しただろう。

ましてや力を感じる事もできない普通の人だ。普通であることは罪ではない。普通であることが当たり前なのだ。普通で無いことは普通で無い人が——つまり、自分が、対処すれば良いのだ。

そして自分は対処しなかった。あれを無視して立ち去ろうとしたのだ！

放っておけなかった。放り出して良い事ではなかった。

やにわに力があふれ出し、純朴な雰囲気の子の表情に驚愕が湧き上がったときには、危うく少年にサンシユートをぶち当ててその場から吹き飛ばすところだった。

無論、そのような事が許される筈も無く。

何がしか以上の鍛錬を経た人間でなければ、サンシユートを食べらつて無事で住む可能性は無かった。制限されている状態であっても——だからこそ、直ちに対処できないと、とりあえずの「無視」を選択したのだが、そうではあつても、少年が少年ではなく、凶悪犯罪者であつたならば躊躇する理由は無かった。だが、平和を謳歌する、多くの同志たちが守りいつくしむ世界の片隅で、罪もない少年を焼き尽くして街角に、俄かに焼死体を転がすような情景を作ることには許されなかつた。

だいたい、イングリッド自身が最悪な判断をしでかしたのだと自身を断罪した。

放つておいてよいものではなかつた。何故そう考えたか、今その瞬間には理解できなかつた。例えその場では及ばずとも、何らかの方法での『力』に直ちに立ち向かうべきであつたし、或いは及ばずとも、仲間の助力を信じて、出来うる限りの対応をとるべきであつた。

あの時あの瞬間に自身の力が『アレ』に及ばないであろうというのはイングリッドの都合であつて、少年には関係の無い事だつた。『アレ』のようなモノに対処するのはイングリッドに課せられた使命であつて、それに他人を関わらせてしまうのはイングリッドの罪であつた。

そうであるが故の、少年に降りかかつた危機。

見放せる訳が無かつた。

ぎりぎりのところで間に合つた。

吹き上がった力が少年を捉えて、鏡『のようなもの』に少年を引きずりこむ寸前に、その随分と強力だが随分と脆い力の線を断ち切つた。

必死の形相を浮かべて、全力で力に抗つていた少年と眼があつた気がする。

しかし、そこで自分が無力であつた事を思い知らされた。

鏡は一度接触した獲物を逃すまいと、また力を噴出した。少年がそれに捕まり、それを自分が断ち切るのを繰り返した。埒が明かなかつ

た。イングリッドは焦った。一度に湧き出す力が尋常ならざる勢いで急速に強力になっていった。その状況が行き着く先は、少年のみならず、周辺全体への大規模な影響となる想像が容易に思い浮かんだ。それを根本的にどうにかする手段をイングリッドは刹那の間にくつか思い浮かべたが、それは『鏡』を粉砕して終わりになる事ではなく、周辺全てを巻き込んだの大惨劇を伴う想定だった。

許される事ではなかった。

少年が急速に疲労の色を濃くする事も焦りを加速した。また悪い事に、自分達の周辺に、大勢の人間野次馬が集まってきたのもイングリッドを恐怖させた。

予測された近い未来の惨状に恐怖したが、それ以上に、ごく僅かの自身の下らない対応の失敗が、その惨状を惹起するのだという不甲斐なさに戦慄した。

急激に取り得る選択肢が失われていく中で、イングリッドは嘆いた。永い永い生を続けてきた自身が、これ程までに幼くも未熟な対応を取ろうとして……あるいは取らなかつたが故に、発生するかもしれない大惨事。

イングリッドは決断した。

一瞬の力の収束を経て、まずはサンシユートを鏡にぶち当てた。つもりだった。

彼女の掌から放たれた太陽の力の残滓は、光り輝く残滓を残して、そのまま鏡を潜った。なんの反応もなかつた。自身の知らぬ場所へと知らぬ方法で飛び去ってしまった。

もはや迷っている暇は無かつた。

自身に力を収束した。出来る限り素早く。出来る限り濃密に。それがために、周囲が薄暗く淀んでしまった事に気がついたが、構う暇は無かつた。

爆発寸前の励起状態にまで収束した力を抱えて、まず少年を力いっぱい、しかし出来る限り優しく突き飛ばした。少年の身体は周囲で遠巻きにする人間を何人もなぎ倒したが、最終的には多くの人間が集まっていたことが幸いして、数人の腕によって受け止められた。それ

でもなお、彼を追う事を諦めない力を打ち砕きながら鏡に飛び込み、そして、力を解き放った。

先ほど無駄撃ちになったサンシユートを見て、咄嗟の判断で決断した行為だった。

サンシユートが何の妨害もなく鏡面を素通りした。純粹な力の塊が、である。で、あるならば鏡が出す力の行き先が少年であろうとも鏡そのものには通り過ぎる何かを選別する能力は無いのだろうと推測した。

内部で力を解き放ったとき、その力を出来うる限り小さく収束した。自爆寸前の収束具合であった。自身の眼前で爆発させたに等しいぎりぎりの発散であった。イングリッドが収束した力は太陽の力そのものであるから、世間一般的な解釈で言えば、イングリッドが放った力の発散は、核融合爆発——つまりところ水爆の爆発そのものだった。それをフィールドで包んで鏡の内部空間そのものにぶつけた。

まったく咄嗟の判断であった。それで何とかなる確証等なかった。勘だった。しかし、信じた。こういうクリティカルな状況で思い浮かぶ「勘」が最善手である場合が多いことを……多かった自身の経験を信じた。信じるしかなかった。

はたして『内側』から見た『鏡』の鏡面はそれで砕け散るのが判った。執拗なまでに力に襲われていた少年は、無事に、力から逃れることができたのまでは確認できた。そして暗転した。

ルイズの後を続いて歩きながらイングリッドは思う。

徐々に状況が明らかになるにつれて、イングリッドの考えも酷く揺らいだ。

或いは、ルイズが呼び出すべきルイズの力になりうる存在に、イングリッドが割り込んで切り捨ててしまったのではないかとも思った。

その贖罪のために……ルイズの使い魔になる筈だった少年の変わりに自分が使い魔になるべきだとも思った。

しかし、召喚の場で感じたルイズの力。実際に自身の身体で受け止

めたルイズの力。至近でそれなりの時間をかけて観察したルイズの力。

この世界に溢れる力。

この世界の理。

この世界のありよう。

判らないことはまだまだたくさんある。

知らないことは多すぎる。

しかし、このホンの僅かな邂逅であつてすら、この世界が現代社会を生きるごく一般的な人間にとっては余りに過酷な世界である事が理解できたと思つた。

今、ルーンを刻んだ左手を無意識にさすりながら、イングリッドは、あの時あの場所であの少年を助け、あの鏡を自身で潜るところまで含めて、運命ではなかつたかと思う。

永い人生を歩んでいると、必然とか、偶然とか、そういうのを軽く超越した、後で振り返つてみると、誰かが敷設したレールの上を全力疾走しただけであつたと思わせる出来事にぶち当たることがある。

きつと、そう。これもそうなんだろう。

ルイズの側にいる。

ルイズの役に立つ。

ルイズを守る。

それこそが運命なのだろう。

イングリッドは自身の思考がある瞬間から奇妙に捻じ曲げられて、異様な方向に歪んでしまったことに気がつかなかつた。

「ほんと？それ」

クツキを乱暴にバリバリと噛み砕きながら、ルイズが多少胡乱な表情を隠さずにイングリッドの発した説明の言葉に応える。

自身のココに至る経緯の説明をひとまず終えたイングリッドもル

イズに遠慮することなく、そしてルイズもそれに頓着することは無く、クツキーを口にほうばる。

2人は細やかで繊細な細工を施された、重厚で、品質の良いテーブルを差し挟んで、薄いのに十分なクッションを持った木製の椅子に腰掛けて、会話を続けていた。

アメリカンナイズドなりビングダイニングですらかくやというだけだっ広い部屋に、もう、どうしようもなく高価で貴重とすら思える高級さをバリバリと醸し出す、統一感に満ち満ちたインテリアに囲まれて、部屋の片隅にある天蓋付きのキングサイズのベットに目を奪われて、なおかつ、ここが生徒の個室だと言われて、しかも、狭くてゴメンねなどと寝言を言われて、イングリッドはどうしようもなく疲れ果ててしまっていた。だが、情報の交換は重要であるし、互いに意思を疎通しておくことは使い魔としての立場をとるためには絶対的に外せないことであつたので、疲労の濃い表情を何とか隠して辛うじて会話を続けていた。

イングリッドは頭痛に苛まれる額を強く揉んで、自分の置かれた状況を言葉を選んで説明した。

少年が引き寄せられたとか、それを遮ったとか、鏡を粉碎したとかの部分ははしよつた。ただ、町を歩いていたら鏡が現れて、引き寄せられたとだけ説明した。自分が普段歩き回っている国や土地の説明は全部適当に済ませた。あまりに技術体系も政治体系も違うことが判つたからだ。特に政治体系でいえば、民主主義社会が全能だとは思ってもよらないが、大いなる過去から組織の仕事の一環として様々な国々の歴史を実体験し、悲喜こもごもの結末を見届けてきた者として専制君主国家に対してそれなりに思うところがあるので、変に論争等にならないよう、特に注意深く話題を避けた。ルイズは当然のことながらルイズ自身の知っている常識の及ぶところでない話をするとは出来ないのので、イングリッドが避けた部分の内容を突き探すことはなかった。それで事はすんだ。

自身の仕事もとりにあえずはごまかした。自警団じみた仕事の内容をでっち上げて、それらしく説明した。隠したつもりは無い。本当の

事を言っていない事に対して妙に罪悪感が沸くが、正直に答えたところでそれを信じられる者等いやしないだろうという常識的判断を優先した。

年齢のこと等、それこそ口に出来ない。イングリッドが実年齢を語って「ふーん。そうなのかー」ですます者がいたら、そいつは殴り飛ばして簀巻きにして病院に叩き込んだほうが良いだろう。自分の存在のあり方はそれほどまでに異常なのだ。その事に自覚はある。

とはいえ、当然の如くの反応を示されて、あれこれと弁明に時間を費やして夜が明けのを待つのも愚作なので、当たり障りの無い嘘を言っておいた。とりあえず、飲酒したりするのに都合が良さだろうということまで21歳としておいたが、ルイズは仰け反る程に大げさな反応を示して驚いた。なにか失敗したのだろうか？イングリッドは頭を捻る。

自身の力もひとまずは隠しておく。コルベールのような人間がいて、それが一介の教職にあることを考えると、実のところ自身の力を隠したところであつたという間にすべてを明らかにされそうな気配も濃密にあつたが、隠せる限りは隠しておいたほうが良からうと思つた。必要となれば、ましてやそれがルイズを守ることには必要と信じる場合であれば、自身の全力を尽くすことはやぶさかでは無いが、必要とされることが無い以上は、積極的に明かす必要もないと考えた。

政治体制やら、社会情勢やら、周囲の地勢やら、経済情勢やらと、軽く表面をなぞって確認しておく。あんまりな違いと、ちぐはぐな世界観に、頭痛が激しくなる。よかつた。ほんとうによかつた。そう嘆息する。

あの少年が鏡を潜っていたら、とんでもない悲劇が現出していただろう。自分の選択に間違いは無かつた。

魔法というモノを使う者達がいて、空を飛んだり地を駈けたり、物を創つたりということ自体に驚きは無かつた。だが、それらが社会全般に強力に根付いていて切り離せないという事実は驚愕した。

魔法っぽいものを扱う人間としては、ローズみたいな者がいて妙に自分に突つかかかってきた経験がある。明らかに魔法としか良いよう

の無い力の行使をしていた存在としては、マリオンがいたことを思い出す。

ああいうのが存在している以上はイングリッドが知らないだけで、結構な数の「魔法使い」の存在が地球上に現にすることを示唆していた。しかし彼女は「地球」におけるイレギュラーだった。イングリッド自身がその位置に近いからこそ出会ったマイノリティだった。

だがこの世界は魔法があつてこそ世界が成り立っているという。

そして、世界、というよりその社会情勢がはつきりとした記録が残っていると信じられている範囲内において、6000年以上も飽きることなく続いている事実は驚嘆した。

人間が住まい、生きていく以上、どうしようもなく争いや諍いがあることには変わりなかったが、ある特定の血筋が6000年以上の年月を、魔法というどうしようもなく説得力のあるお墨付きを得て、とぎれることなく受け継がれているという事実には絶句するしかなかった。

そして。

ちらと窓の外を見やると、2つの月が空に浮かんでいるのが見える。

あれはないわ。

酷く重苦しいため息をつく。刹那、かしましく説明を続けていたルイズが口ごもって心配そうにイングリッドを覗き込む。

あれほどに大きな月が、2つも同一惑星の軌道上を巡っていたら、ほんの1000年と持たずに世界は滅亡じゃ。ほんの1000年単位で惑星の回転軸がごろんごろんとひっくり返って、砂の惑星になってしまふだろうに。その仕舞いに月が降り注いでカプリコンじゃ。

きつと、帝國の陰謀が絡んでるのじゃろ。

想像以上、否、想像を絶するファンタジーを主張するハルケギニアの異世界っぷりに眩暈がする。2つの月が……人間的視界を持つて見る限り、殆ど同じ大きさ、同じ軌道をそれが巡るなんて、どんな宇

宇宙物理学を捏ね繰り回したって説明出来様も無い。NASAあたり
に就労している人間がこの世界に至つたら、夜になつた瞬間に憤死す
ること間違い無しである。そういう状況でなお頭痛を助長するのは、
そうでありながらルイズの言葉の節々に現実と変わらない、世界の暗
い裏側が見え隠れすることだった。イングリッドは頭を抱えたく
なつた。そんなところばっかりリアルにしなくてもいいのに……！

時刻は夜。それはそれはもう、どうしようも疑いようも無く夜。し
かし、2つの月に照らされた世界はとんでもなく明るい。月の力も濃
密に感じて肌を震わせる。イングリッドにとつてありがたいことか
どうか判断の難しいところではあるが、月明かりというのは、月の表
面が、太陽の光を浴びて反射する光であるので、その内包する力が月
の表面に大多数が吸収されたうえで月の力に変換されて再放出され
るとはいえ、変換仕切れなかつた力は太陽の力そのものとして地球に
反射される。反射する月の表面積が大きいためか、或いはこの世界に
おける月の光学的反射効率が大きいためか、そうして降り注ぐ太陽の
力は相当なものである。

地球の夜よりはよほど大量の太陽の力が夜にも濃密に降り注いで
いるのは、自身の力の発現に対する大きなアドヴァンテージだった。

それを確認できただけでも、この話し合いの成果は大きい。

しかし、突然に消えた自分。恐ろしく濃密で強力な力を発露してい
た鏡。多数の目撃者。巻き込まれかけた少年。

あれほどの騒ぎがあれば組織も放つては置けないだろう。若干心
配なのは、あれほどの力の発現が観測されたのであれば、例えば過去
のシャドルーのように、それを悪しき方向に利用しようと画策する組
織が出て不思議ではないだろうという想像だ。

難しい表情が隠すことも出来ずにイングリッドの顔に現れる。

過去の闘争の原因となつた太陽のアンクルに、無意識に手が伸び
る。なんとなくイングリッドはアンクルを撫でつけた。

あれが新たな闘争の火種にならなければ良いのじゃが。

不安げな視線をイングリッドに送つて黙り込んでいるルイズに視
線を移す。

我が主がそれに巻き込まれようものなら。

小さく頭を振ってその妄想を振り払う。

窓の外には、様々な施設が見える。12階建ての寮塔（棟ではない！）の6階から見える風景はウンザリするほどにクリアだった。この世界の科学技術の発展が殆どなされていない事実の証左でもある。

地球ではまず感じるものの出来ない静謐な空気がどこからとも無く漂ってくる。久しく忘れていた感覚ではあるが、余りにも力が濃密すぎて、身体が沸騰しそうだった。地球の過去においてむやみやたらと太陽の力が強くて酷く悩まされた時期があったがその時、自分はどうしたんだっけと首を捻る。

なにか対策を考えないと、その内に身体から太陽の力が噴出して、自分自身も含めてすべてを焼き尽くしかねない。闘争を前提とした場合、力が強いことは良い事だったが、力が強すぎるのがこんなにも早くに自身の立ち振る舞いに影響を与えろとは想像だにできなかった。建物の中や、夜間等、太陽の力が微弱な状況で自身をサポートするために頭につけた太陽のアンクルだが、どうにも、むしろのこと、自身からあふれ出る力を吸収させるために使ったほうがよさそうな気配だった。

本来あるべき自身の力を制限する意味が大きい太陽のアンクルだが、そうであるが故に、消費しきれない力がイングリッド自身の身体の中で吹き荒れている状況だった。余りに太陽のアンクルに依存し過ぎると、過去にそうであったようにそれ自体が闘争の原因になりかねない危うさはあったが、今のところは、太陽のアンクルに寄りかかる以外の方策が見えなかった。

太陽のアンクルは正直なところ容量も能力も底知れぬところがあった、それがために途轍もない大騒ぎを引き起こした前科があるが、まさかにかこうした使い方をする日がこようとは、イングリッドも苦笑いしきりだった。

学院の敷地とその外部、境界を遮る石造りの分厚い壁。コンスタンチンと比べるのはアレだが、15〜18世紀レベルの技術であれをぶち抜くのは難儀だろうと思える。

壁の上の通路の広さも、胸壁の高さもその創りも、10階建てのビルに相当すると思しき壁塔もあまりにも実戦的過ぎる気配が濃密に漂う。その上をやる気の無い衛視が見張りと言うにはおざなりすぎる態度でうろついている。

その先には自身が呼び出された草原が風に吹かれていて、彼女の視力で見える範囲に、辛うじてルイズが引き起こした爆発の残滓が踊っているのが見える。驚くべきは、ルイズの力の噴出した残り香がいまだにその周辺に濃密に漂っているのが見て取れることで、よくもまあ自分の身体が木っ端ミジンコにならなかつたものだと、冷や汗が出る。

その先、南東方向には白い頂を持つ大きな山々が見え、その手前にはうっそうと生い茂る森が地面を遮る。様々な動植物が蠢いているのがひしひしと感じられる。

地球で見られる常緑樹の森とは違う。ヨーロッパや南アメリカには、今だ人の手つかずと言って良いほどの濃密な温帯性の森林がある場所もあるが、あれ程までに大量の生物の気配が轟き合っている場所はありません。

あのレベルになると、アフリカやブラジルあたりに目を向けないといけないが、そこに広がっているのは熱帯雨林である。あの森とはあり方が根本的に違う。

あの森にもブランカの亜種見たいのがいるんだろうか……？ 雰囲気的にはどちらかというと、雲をつくほどの大男か、着の身着のままといったほうが良いような粗末な服を「胴着」だといって憚らない若者あたりが飛び跳ねていそうだが。

そんな奴がこの世界にもいるのだろうか？

その点については要観察。と、頭の中のメモ帳に記しておく。

敷地の中央にある極めて巨大な教育棟を出て、どこもかしこも良く整備をされた敷地内を突き切り、何時か遠い過去に見た中世の城砦のような風景に囲まれたその場所を右へ左へとしばしの時間歩いて、ここにたどり着いた。

ただの物見遊山であればウツキウキのワクワクで済んだであろう

うが、これから生活を送る場であるということを見ると、様々な困難を想像させる物だった。頭が痛いことばかり。

どこもかしこも必要以上に広くスペースが取られて、何をすることも広すぎる。

3人ぐらいで仲良く集まっていればぱらぱらと衰退しても誰の迷惑にもなりそうにない広い通路。閉塞空間であるにもかかわらず全体を煌々と照らす得体の知れない力。何の力で動くか判らないが故に大変に気味の悪いエレベーター。驚くことに、貴族のために用意されたものではないと言う。生徒達は普段、自身の魔法を使って建物の外を飛んでそれぞれの部屋の窓から出入りするのだそうだ。生徒はそれですむが、貴族である生徒達の生活を快適に維持する役割を持つ平民の使用人が、毎日毎日、ひいこらどっこいしよと上へ下へとよれよれ言っていたら、悲しい程までに生活力の無い生徒達がみな腐界に沈んでしまうために絶対に必要な設備なのだそうだ。

外から出入りする。そりや結構！でも、だったらこれほどまでに広い通路も階段も必要ないよね。だいたい雨が降ったり、それこそ嵐になったりしたらどうするの？

その疑問に、だから通路が広いのよ、と返された。

通路を唸り声を上げて飛び交う少年少女を幻視して、はあ、そりやどうも、と気のない返事をしてしまうイングリッドだった。壁にぶつけて90度ターンとか、壁にぶつかって360度攻撃とかしてるんだろうか？

あれやこれやと思考が上下左右斜めに飛び交ったイングリッドだが、思考を強引に戻して、目の前のルイズに視線を戻す。気分を切り替えるつもりで、薫り高い紅茶を口に含む。

もつきゆもきゆと口いっばいにクツキーをほおばるルイズを視界に入れて、イングリッドは思わず、ぶーと紅茶を噴出した。

「きやあつーなにすんのよ、イングリッド！」

げほげほとむせながら、イングリッドはルイズを指差した。ルイズの口から大量の食べかすが飛び散る。

「うえっへん。えへん、えへん！なななんちゅう食い方をしとるん

じゃー！」

かああつと顔を朱に染めながら両腕をふるって抗議するルイズ。

「だだだだだだつて、仕方が無いじゃない！仕方ないじゃない！おなか空いてるんだもん。おなかがよくんだもん！」

「うへあー」とか言いながらレースを三重にあしらった、豪華な刺繍を施されてはいるが、良く使い込まれたハンカチで、飛び散ったかすをふき取る。ルイズも浴びせかけられた紅茶をあわあ言いながらふき取る。

「だつて、だつて、心配で心配で、食事も咽喉を通らなかつたんだもん……」

最後は消え入るほどに小さな声で、呟くようにルイズは答えた。イングリッドは硬直した。まじまじとルイズの顔を覗き込む。

「だつて、しょうがないもん……」

まっかつかにゆだつた顔を見つめて、イングリッドは「はあ」と小さなため息を吐いた。

「すまんかつたな」

イングリッドは大きく頭を下げた。テーブルに額を擦り付けそうなほどの深い深い謝罪の仕草であった。「んにゅっ！」とか聞こえそうなりアクションで、ルイズが椅子の上で小さく飛び跳ねる。

「いいいいいいのよ！使い魔の心配をするのは、使い魔の管理をするメイジとしてはとととととおぜんじゃない!!」

すばらしいドヤ顔を真っ赤に染めて、イングリッドに指を突きつける。頭を上げて、その2つを目にしたイングリッドは刹那、大きな笑い声を上げた。ルイズは不満そうにそれを眺めたが、結局つられるように笑い声で唱和した。しばらくどうしようもなくとめようの無い笑いの輪唱がルイズの部屋を包んだ。

ひとしきり笑つて、ひいひいと息を吐きながらイングリッドは、ルイズに視線を戻す。ともすれば変なテンションで、笑いがぶり返しそうではあったが、無理やり押さえ込む。

「さ……さて、我が主ルイズよ。最後に使い魔のあるべき姿についてお教え願えないじやろか？」

無理やりにつくろった表情を見て、なんどもなんども笑いの発作を抑えるルイズだったが、大きく息を吐いて落ち着かせたようだった。まじめそうな表情を顔に張り付かせてイングリッドに向き直る。

「そうね。そうよね」

「ふん」と気合を入れると、ルイズは腕を組んで目を閉じた。

「基本的には使い魔ってね、居る事だけが重要だったりするものなの」「居る事だけって……」

ルイズはそのイングリッドの言葉を受けて「うん」と頷いて目を開く。

「あのね、メイジって言うのは様々に困難な仕事を請け負ったりするの。そういう困難に望んで立ち向かうのも貴族としてのあり方なの」それに頷くイングリッドではあったが、ルイズのメイジと貴族が癒着して切り離すことが出来ない思考のあり方が気になった。が、とりあえず保留にしておく。

「そういうときにね、心の奥底で繋がった、自分を信じて疑わない存在があるっていうのは心強いことなの」

指を振って答えるルイズにイングリッドは、呆れた声を投げかける。

「それじゃあ、愛玩動物ペットじゃ……」

慌てたように手を振って遮るルイズ。

「勿論それだけではなくてね」

イングリッドの前で指を一本突き立てる。

「まずはね、使い魔は使役者の目となって、使役者の見ることの出来ない狭い場所や遠い場所を見たり、同じように使役者の耳となったりする能力があるわ」

その言葉を最後まで聞きとめてイングリッドはあごをなでつけながら立ち上がり、窓際によつて遠くを見る。イングリッドは内心で、精霊や『力』の流れがごく当たり前に視界を彩る自身の視界を思っ、激しく冷や汗を流した。

「見えるかや？」

目を閉じて何度かうなり声を上げるルイズが小さくため息を吐い

て、顔を上げた。

「無理、みたいね……何も見えないわ。人間同士だとうまくいかないのかしら……」

イングリッドはルイズに気が付かれないように安堵のため息をついて、椅子に戻る。

「そのほうがよいだろうよ」

その言葉を自身を貶める事だと勘違いして感情を激発させるルイズ。声にならない叫び声をまあまあと遮って、宥めて落ち着かせるイングリッド。

「考えても見てみい。ルイズは我がトイレにしゃがんでいる姿や、酔っ払って中身をぶちまけている姿なんかを見たいんかや」

うつつとつまって、視線をそらすルイズ。

「それはともかくとしてな、ルイズ。人の視界が得られるということ、自分の視界が二つあることに等しいんじゃないぞ」

その言葉に、ルイズは疑問符を浮かべる。

「ルイズは、自分の視界にあるすべてのものを間違いなく捉えておるつもりかえ？」

ますます変な表情を作るルイズ。

「はあとため息をついて、両手で丸い筒を作り、自身の眼の前にやって説明する。

「人の眼と言うのはじゃな、実は人が想像する以上に高性能なんじゃそうだ」

「？」

ルイズは首を傾げた。

「ところが、じゃ。人の認識力が低性能過ぎて」

目の前の手で作った筒をぐにぐにと大きくしたり小さくしたりする。

「うん、まあこんなもんじゃろ」

大きさを調整した「筒」をルイズの眼にあてた。

「これくらいしか認識できておらんのか」

ルイズも自分の手で「筒」を作り、大きくしたり小さくしたりを繰

り返す。

「えっ……ええっ！小さい。小さいわイングリッド！これ以上大きいと、見えているのに何が見えているか判らないわ！」

イングリッドはルイズの前で頷く。

「単純に、視野、と言ってしまったえば、ああー、その、な。眼で見える範囲で言ってしまったえば、顔に物理的に遮られた以外の正面すべてが見えておるはずなんじゃが」

自分の頭を指して、つんつんとつつく。

「人間の能力ではせつかくのその広い視野を生かしきれんのじゃ」

ルイズは「視野」という部分の説明には納得して「こくこく」と頷く。

「でも、それがなんで『そのほうがいい』になるの？」

イングリッドも「うん」と頷く。

「自分の目の能力だけですら扱いかねておるのに、同じくらいの能力を持った生物の視野を自分の視野に重ねたら」

頭の上で手のひらをぱつと広げる。

「頭が爆発するわい」

ぶるる、つと身体を震わせる。

にははと、笑いながら手を振るイングリッド。

「まあ、それは言いすぎだが、かなり厄介なことじやろて」

「どういこと？」

直角に近い角度まで首を捻るルイズ。「むふう」と、顎に手をやりながら首を捻るイングリッド。

「ルイズは右目で見ているものと左目で見ているものを両目を開いている状態で、区別できるかや？」

「??？」

激しく眼を瞬かせるルイズ。

「あーつまりじゃな、位置的に言って、鼻を境に、人間の眼の位置ではどうしても右目だけに見えているもの、左目だけに見えているものがある筈なんじゃ」

「ああー」とルイズは大きく頷いた。

「普段は意識しておらんから、そんなことはわからんじやろ」

ふんふんと大きく首を振る。

「つまり、じゃ。普段自分が見ているものすら、どう見ているかも判断できていないのが人間じゃ。ましてや、同じ種族である人同士。モノの見え方は変わらん。ただ違う場所で違うものを見ているだけじゃ。その視界が重なったとき、ルイズは果たしてその視界が使い魔のものと認識できるかや?」

ルイズは「あつ」と、声を上げて驚く。

「恐らく、じゃ。区別できんじやろて。四六時中繋がるモンでもないんじやろが、使い魔の視線を共有できる利点は……そうじゃの。闘いの場などで、自分の後ろを見たり、通路の角の向こう側を覗いたりしつつ、自身の視界も確保して闘えるところにあるんじやろ」

「……使い魔の視界を使い魔が見ているものだって区別できなかったら……」

その言葉を受けてイングリッドは肩をすくめた。

「まぬけじゃの」

がつくりと肩を落とすルイズ。イングリッドは軽やかに笑った。

実のところ言えば、余りにも『普通の人』と在り様が異なるイングリッドの視界をルイズが得れば、即座にそれがイングリッドの見えるものだと判別できるだろうという予測は付いた。

だが在り様が『普通の人間』な他人が極めて情報量の多いイングリッドの視界を手にしたら、恐らくは情報を処理しきれずに脳がオーバーヒートするだろうとの予測もする。

若干、その在り様が『普通の人間』とは異なるルイズであればもしかしたら……という予測もあったが、現実に視界の共有が出来ないのであれば、確かめるすべも無い。

また別の予測もある。

最初から視界にフィルターがかかっている可能性だ。

召喚の儀の場にはドラゴンがいた。最強の幻想種である。恐らくは人の目など比べ物にならないほどの情報量があるだろうと想像する。あれの主がその視界を手にしたとき……そのままなど言うこ

とはちよつと想像し難い。それこそ脳みそパーンだろう。だから人が見れる程度まで勝手に能力が抑えられるか、或いは人が認識できる能力分しか伝わってこない可能性もある。

ドラゴンどころではなくても、梟とか、カメレオンとか、ミミズ、オケラ、アメンボとかの視界がそのまま人間の目に投影されても役に立つどころか眼を回してひっくり返るのがオチだろう。

コレに関しては実際に召喚して使役しているものに確認したほうが良いだろうと思う。

「まあ、ま。そう肩を落とすなや。そう考えると、見えんことは寧ろ良かったと納得できるじゃろ」

「そうだけど……」

なだめてすかして続きを促すイングリッド。

気を取り直したルイズはイングリッドに向き直り、2本目の指を伸ばした。

「……使い魔はね、使役者の望むものを使役者の願いに沿って、採取することが出来るのよ。」

うーん、そう。例えば、秘薬の材料ね」

「秘薬？」

イングリッドの疑問にルイズはこくりと頷きかえした。

「ある特定の魔法を行使するのにその能力を拡大したりするのを助ける役目を持つのが秘薬。物によっては、秘薬なしでは行使できない魔法もあるの」

「ほう」と、イングリッドは頷いた。

「例えば？」

首を捻りながらルイズはいくつかの例を思い浮かべる。

「そうね……風力が凝縮された風石、みたいな貴石っていう括りの鉱物とか、ある種の薬草とか」

「ふむー」と唸りながらイングリッドは首を振るう。

「ここは我が住んでいたところから随分遠い様で。たぶん、私の知識ではどうしようも出来んじゃろ」

しおらしく溜息を吐くルイズ。

「だよーねー……」

まあまあと両手でルイズを慰める。

「どうしても必要であれば勉強するから、言ってくれれば努力もしよう」

「でも、人間だから」

首を捻って石や薬草を拾い集める自身の姿を想像するイングリッド。途中でその姿がトリユフを探して鼻を引くつかせるメス豚に入れ替わる。

「つまり、動物の嗅覚や、聴覚が必要とされる特殊なものもあるということじゃな」

ルイズはそれに頷いて言葉を連ねる。

「うん。それ以外にも、人が入り込めない穴の中とか、高い山の上とか」

イングリッドは表情をしかめた。

「あー、納得じゃ。予想以上に使い魔の仕事は重要で過酷じゃの」

2人で見詰め合って、大きなため息をつく。

「しようがないの」

随分と力の無い首の動きで頷くルイズ。

先を促すイングリッド。

ルイズは3本目の指を立てた。

「場合によっては、これが一番重要視されることがあるんだけど……、使い魔は、使役者である主人の身の安全を図るものなの。本来なら人間ではない使い魔の、人間には無い能力を駆使して、人間では真似の出来ない能力を發揮して使役者の身を守るの」

「ほう……」

ものすごい勢いで納得するイングリッド。それが一番重要視されて、尚且つ、その他の機能がその片手間であるというなら、確かに自身が呼び出されるのに大きな動機となる。イングリッドはなるほどと大きく頷いた。

「でも、イングリッドは人間だから、モンスターと戦ったりは……えっ！」

大きく首を上下させるイングリッドに気が付いてルイズは仰天した。

「ええっ！でもイングリッドは魔法を使えないんでしょ！女の子……なんでしょー！」

その言葉に心外だ、と、イングリッドは大きく息を吐いた。

「その最後の言葉の間が納得いかぬの」

「そこなの……」

脱力してテーブルに突っ伏すルイズ。

しかし、すぐに復活してイングリッドを見つめる。

イングリッドの言い方は、途轍もない自信を漲らせている風に感じられる。

「でも、凶悪な幻獣とかは……」

それを遮って、イングリッドはルイズに尋ねる。

「召喚の場にドラゴンがいたの」

小さく頭を捻って、その風景を思い浮かべる。

「そうね。風竜を呼び出した子がいたわ、たしか」

うん。と頷いてルイズを見つめる。

「そうか……風竜というのかあれは」

にやりと笑ってイングリッドは、ルイズの左手を自身の右手で握る。

「あれぐらいなら相手に出来るぞ」

ルイズは鳶色の眼を大きく見開いて、唾を飛ばして叫ぶ。

「竜よ！幻獣よ！最強種よ！普通、魔法も使えない平民が立ち向かうことなんてありえないわ！」

握られた手を振り払って、興奮して唾を飛ばしまくるルイズの顔の前で指を左右に振りながら、イングリッドはちゅちゅちゅと声を上げる。

「あの程度のやからなら、私の住まう場所では日常茶飯事じゃ」

「どんな天外魔境よ……」

ルイズはトリスタニアの街路で建物を吹き飛ばして爆走する火竜や、土を巻き上げて地面の穴から立ち上がる土龍（土竜ではない）に

立ち向かうイングリッドたちとその周りで普段どおりの生活を送るイングリッドたちの姿を幻視して眩暈を起こした。恐ろしいことに、イングリッドの闘争の場における普段の光景は、戦う相手はともかく、そこで撒き散らされる力の奔流とそれを遠巻きにして迷惑そうに通り過ぎる住民や、場合によっては積極的にはやし立てる野次馬がいるという点で、ルイズの妄想があながち間違っていないという驚愕の事実があった。

はあ、と気の抜けた溜息をルイズが吐く。

「……期待しているわ」

「むっ」と、ふくれっ面をルイズに向けるイングリッド。

「信じとらんな?」

「はいはい……」

ひらひらと手を振るルイズに不満を隠さないイングリッド。

ひとまず湧き上がった怒りを静めていつの間にか乗り出していた身体を椅子に戻す。

イングリッドは小さく首を捻った。

なんで、こんなに興奮したんじや?

普段の自身の性格からはありえない自身の態度に首を捻るイングリッドを胡散臭そうな視線で見やりながら、ルイズは億劫そうに口を開いた。

「しょうがないわね。あなた……」

何かを言いたそうな視線に気がついて言い直す。

「……イングリッドの出来そうなことをやらせるわ。掃除に洗濯に、買い物の荷物持ちとか、授業で必要な道具を持つのを手伝うとか」
まったく不満を隠さないイングリッドではあったが、不満そうな表情のまま腕を組みつつ大きく頷いた。

「しかたがないの……」

その声にルイズは胸を小さく痛めた。

イングリッドの大言壮語は俄かに信じられないものがあつたが、それなり以上の自信があつたのに違いないとは思えた。

しかし、イングリッドの語つた生活や生活環境には魔法の存在が殆

ど感じられなかったから、強力な魔法を行使することがままある、こちらの幻獣を舐めてかかって、うっかりと死んでしまう事態は絶対に認められなかった。

ルイズはイングリッドにほのかな親愛の情を抱きはじめていたのだ。

その彼女があっさりと自身の目の前から掻き消えてしまうという未来は容認できなかった。

ルイズは判断力も理解力も人並み以上にあるがために、数少ないイングリッドが語った彼女自身の情報から、イングリッドの身の安全を図りたいと思ったが故に、そうやって突き放すような態度をあえてとったのだった。

不幸なことに、彼女が判断を下すにあたって得た、数少ない情報自体が恣意的に選択された本質の歪められた情報であったとまではルイズには理解の及ぶものではなかった。そのために、ルイズとイングリッドの間にある認識の違いの溝は随分なものであった。

イングリッドはイングリッドで、魔法行使を失敗するだけで秘められた能力は随分と大きいルイズが呼び出すものが「ドラゴン」であつたら格が釣り合うみたいなき事をコルベールに聞いていたことが判断ミスに繋がっていた。

自分でも原因が良くわからない感情に突き動かされた結果と、ルイズの力を至近距離で浴びた結果として、周囲の状況判断を疎かにしてしまった嫌いがあつたが、1クラス30人程度の生徒の中に、2人の「ドラゴン」を呼び出す可能性がある確立で、能力を持った生徒がいるというのは、この世界がとんでもない能力者で溢れかえっている事実を予感させた。

能力を行使する技術と言う面で現状、ルイズに劣るとは思わないイングリッドではあつたが、単なる力のぶつけ合いを想像すると、現実、抑えられている自分程度の能力では、ルイズにずんパラサとばかりにされてしまうのは確実なだ。であるから、そも、サモン・サーヴァントとは少なくとも使役者よりは能力が劣る——つまり、使役者が実力で捻じ伏せられる程度の實力を持った者が使い魔として呼び出さ

れるものだと理解した。

だからと言って、自身の力を解放する選択肢は考え難いイングリッドだった。

強すぎる力は、唯それだけで闘争を引き寄せる。

「俺より強い奴に会いに行く」。

そう言つて憚らない馬鹿がいたのである。そんな奴らを引き寄せたら自分はともかくとしてルイズの安全を保障できなくなる。その危険性を鑑みれば、自身がサイキョー！と無邪気に力を振りかざすことは最悪の結果を招きかねない。難しいところだ。

そう考えると、あの鏡に引き寄せられそうになっていた少年に罪悪感が募る。

最初からあの鏡は自身を捕らえようとしてそれを無視しようとしたがために、近くに現れた少年を仕方なく捕らえようとしたようにも思える。

それはともかく、おぎなりの周辺状況の把握の中でも、なかなか力を持った能力を持つことが理解できたドラゴンを「ぶちっ」と捻れる術者があの場にいた、と、なれば、ルイズ並とは言わないまでも、それに継ぐ実力者と言うのが、確率的には1/15でこの学院には存在することになる。

その確立を単純にハルケギニア全土に拡大できるかどうかという疑問は、現状の乏しい情報量という点でイングリッドには確証が持てなかったが、魔法学院がハルケギニア全土でここ一つしかないということを考えて、なかなかいろいろと考えさせる事態である。

確かに、これはまったく樂觀できる数字ではない。正直、現状の自分を一捻り出来る人間がごろごろいるという可能性に繋がる訳で、更に言えば、肌で感じる単純な力であっても相当の使い手と見受けられた——だからこそ、睨み合いで終始したコルベールのような実力者が「教師」で甘んじている状態で、ハルケギニアの社会が特に不便を感じないとなれば……。

大いに不満があった。イングリッド自身が推測した結果から鑑みれば、現状における自身の実力的に言つて、そういう判断をルイズに

されてしまったところでしようがないと納得できる筈なのに、イングリッドはなぜか不満の感情を抑えられなかった。

そのことに大きく動揺するが、様々な特異な状況や情報を知って、更に疲労が蓄積しているが故の、神経の高ぶりが収まらないだけなのだど無理やり納得する。

本当は「その程度」で冷静さを欠くのも「ファイター」としてどうなんだ、と言う問題もあるが、なんだか良くわからない胸のもやもやを説明する術を彼女は持たなかったたので、それで納得することにした。

表情を抑える事は出来ていなかったが……。

イングリッドの表情を複雑な気分で見つめたルイズは眼をそらし、わざとらしくあくびをした。

それを視界の隅で捕らえて、イングリッドも表情を崩す。

それを確認してルイズも、安心したように小さく笑顔を見せた。

「いろいろしゃべっていたら、眠くなつてきちゃった」

イングリッドは肩を竦めた。窓の外を見やる。

「そうさの。随分と時間が過ぎてしまったようじゃ。授業に出るとなると、はよう寝てしまったほうが良いの」

ルイズはそれに頷いた。それを見て、イングリッドは部屋を見回し、ベットを見て、それから部屋の片隅に積み上げられたわら束に視線をとめた。それを眼にして片眉を跳ね上げたイングリッドは、立ち上がってブラウスのボタンに手をかけていたルイズに視線を戻す。

「我は、どこで寝ればいいんじや。我が主よ」

ルイズの表情が曇る。脱ぎかけたブラウスにかけられた手が止まる。

「そ……そうよね。そういえば……」

ふかーい溜息をついて、イングリッドはルイズににじり寄った。自分の顔の前で指を3本立てて、それをルイズの顔の前に持って行って付き立てた。

「3日、じゃったか。我が眠っておったのは」

「うっ！」

たらーりと汗がルイズの頬を伝う。

「我を使役するつもりがなかったのかや……」

むむむ、と様々に表情を変えて、次いで顔を真っ赤に染めてルイズは大きく両手を振って叫んだ。

「しかたがなかったじゃない！いろいろな心配で！イングリッドが……その……！」

じと眼を崩さない、傾いだ身体に、左腕だけ腰に当てられた体勢。右腕はぷらぷらと身体の横にぶら下がっているが、右掌は随分と力が入っているようだった。

コルベールの顔をつかんで身動きを取れなくした彼女の力の強さを思い出してルイズは、イングリッドが実は本当に風竜ぐらいなら何とかしちゃうのではないかとも思ってしまう。

ルイズは一瞬の葛藤の後に、一度背筋を伸ばして直立し、刹那、大げさに腰を折ってイングリッドに謝った。

「ごめんなさい。忘れてました」

それを認めて僅かな硬直の後、「ぷっ」と吹き出してイングリッドはルイズの頭をなげた。

「まあよいわ。いろいろあったんじやろ」

小さく溜息を吐いてルイズは頭を上げた。イングリッドに頭を撫でられるのが嫌ではなくなってきた自分の気持ちに気が付いて、僅かに頬を染める。それをごまかすように、ベットへと視線を移す。そういう若干の混乱をはらんだ思考状態で、最初から前提の狂った仮定を口にしてしまった。

「ベットは実家に手紙を出して手配するから。たぶん、使い魔のためだと言え、もうひとつは用意できると思うわ」

豪奢で巨大な、普通のシングルベットの3倍はある天蓋付きのキングサイズのベットを見ながら切なそうに溜息をつくルイズを見て、イングリッドは慌てた。

「まてまてまて。それをもう一つ用意する気か！」

ルイズは肩を怒らせてイングリッドに向き直る。ルイズは頭がよ

いのだ。しかし頭が良い人間が常に最善手を選べるわけでもない。それを成すには人間として経験が必要である。

そういう方面で見ると、ルイズという少女は所詮、16歳に過ぎないのである。よってイングリッドの言葉から早手回しに自身の想像する結論を導いてしまったのも仕方なかった。この一日の経験で晴れやかな方向に振れたルイズの思考だったが、咄嗟の想像がネガティブに揺れる部分が払拭されたわけでもなかった。

だからイングリッドに対する応えが激昂の形を取るのには仕方なかったのかもしれない。

「しようがないじゃない！これくらいのだと、平民の一人暮らしの家が一個、買える位はするのよ！小遣いで買ったなら、一年間、休日の食事は水と残飯になっちゃう！」

小遣いで買えるんかい！というツツコミはイングリッドの立場では恐ろしくて声に出せなかった。あっさり「そうよ！」と胸をはって答えられてしまったらイングリッドのいろいろなところが再起不能になりそうだった。

例えばワンルームマンションなら、日本の地域地方、立地条件にもよるが、安くとも新築で1500万はする。

配属先、出身大学による差別……おっと、区別もあるが、大卒のサラリーマンが、初年度年収500万に届くかどうか、ということを考えて、年収の3倍。実際は、給料のすべてを家につき込んだらすっぱで餓死という愉快な状況になるから、おそらくは「庶民」の給料では10年ぐらいはがんばらないと買えない「ベット」。

おいおいおい……！！

ルイズの想像以上のウルトラお嬢様っぷりにイングリッドは、この世界に現れて出でて最大の驚愕に身を震わせる。

こ……これが、格差社会か……！！

むかしむかしに比べれば随分と快適になったとはいえ、それでも、ポンチョで組んだ風避けの下にウレタンマットを敷いて寝袋とか、1泊1500円のカプセルホテルとか、隣の宿泊者の放屁の音もその臭いも感じられそうなモーテルとかをとつかえひつかえして1

年の大半を過ごす事が多い自身の生活を振り返ってイングリッドは切なさに涙が溢れそうになった。今までこれっぽっちも疑問に思わなかった人生が急速に色あせる感覚に、イングリッドの意識が揺らぐ。でもがまん。だって私、女の子だもん……。

あまりの超現実の意味不明な妄想で頭を混乱させるイングリッドであつたが、いろいろと経験や記憶の使い方を間違っている面があつた。各地各国に定宿はあつても定住経験がないイングリッドの人生のあり方も誤解の元だつた。

宿代わりに安いアパートメントや、賃貸マンションを借りることはあつてもどこまでも一時的な滞在の範疇だつた。どちらにせよ、自身で家を一件買った経験などないイングリッドだつた。

14〜18世紀くらいのヨーロッパであれば、土地の個人所有は建前上、庶民に許されてはいなかつた。土地を所有するのは国王であり、例外として教会が専有する土地があつただけである。だから、領主や教会の許可の下、実際には土地の所有者に周囲の管理を付託された代理人の元、土地の区分けを受けて材料を揃えて家を建てる段取りになる。

その際、中、長期的な永住を考えて1家族が家を建てるとなれば専門の職人の召集は避けられないから、価格は大きく跳ね上がる。そのため実際に、富農による分家とかでもなければ災害や戦争でもない限り、家が新築される事は殆ど無かつた。

貴族の館であつても同じである。基本的には代々受け継がれるのが貴族の家というものである。時代が下がると敷地内に離れがやたら滅多ら増築されたりしたが、台所がないとかトイレが設置されていないとか、引籠もるには大変に不都合な構造である場合が多かつた。これは20世紀を迎えるころまで、建築物を建設する段では水周りにかかる費用と手間が飛びぬけて大きかつた時代が長かつたせいもある。

家族制度からはじかれて、1人暮らしを余儀なくされる男児が1個の家を建てたり、小さな家を買うとなると、殆ど場合は掘つ立て小屋よりはそれなりに上等というモノに成る。すべての土地が、村単位

街単位で管理されて、建材を得るにも勝手に森から木を切り出せば犯罪者としてばっさりやられることを考えると、材料費は現代の人間が考える程には安くない。だが、実際に材料を揃えて家を建てる段では、基本的に完成する筈の家に住む予定の本人を含めた周辺住民のボランティアによって建築されるから、人件費は唯となる。

無論、完全に唯、とは言えなくて、食事を振舞ったり、酒を配ったりと言う事は求められる。だが、家を建てるという行為そのものにはそんなには金がかからない。

なぜ、周辺住民がボランティアで家を建てる手伝いを積極的に行うかと言えば、適当な家を建てて火を出されたら大惨事であるし、嵐で潰れるような掘っ立て小屋を建てられて、実際に道を塞いだとか、畑を潰したとか、他の家を巻き込んだとなれば大迷惑ではすまないからである。だからそうして「ボランティア」が行われるのは、地域コミュニティを守る上での暗黙の了解みたいなものである。そういう行為が普通になされていたからこそ、欧州諸国で現代的な意味での「ボランティア」が現在、隆盛している理由であつたりもする。

それはともかく。

何が言いたいかというと、このハルケギニアという世界においても、ある程度以上の大きさの家を建てようとするやと突然に果てしなく価格が高騰するが、1人暮らしの家となれば「新築」では材料費のみと言う考えになるのだ。

ルイズもそれを念頭に答えたのであり、そう考えるとワンルームマンションの建築にあたり『現代』人件費や諸経費は全体価格の2/3ぐらいが順当なところであるから、この部屋に鎮座しますベットの価格は『現在』の貨幣価値に換算して500万程度と推測できる訳で、それほど常識外れに途轍もなく高価と言う訳でも……。

要審議対象。

—— 閑話休題。

イングリッドの混乱を不満と見間違えたルイズは、怒りにこめかみを震わせる。

「そりゃ、寮の個室に入れるベットだから小さいし、組み立てる材料も

大きく出来ないから拵えもよくは無いけど、まさか、ちゃんとしたベットが欲しいなんて言わないでしょうね！」

「いいーっ！」

イングリッドは叫びそうになった。

これが「安物」だと！

イングリッドは大慌てで両手を振ってそれを遮る。

「ちがうから。いらないから。こんなに立派なのは！ええっと、そうだ！私が3日間寝ていた、あのベットみたいなので十分すぎるから！ああーっ、あのベットの寝心地は良かったなー！」

混乱して捲くし立てるイングリッドの口調がおかしくなって普段と違うものになっていたが、ルイズもイングリッド自身も幸いに、それに気が付くことは無かった。

「……ホントにあんなのでいいの？」

ぶんぶんぶんと、イングリッドは大きく首を縦に振って肯定する。引き攣って青褪めた表情に、ルイズはしばし呆けて、そして勘違いに気が付いた。

「あ………めんなさい……平民ならそうよね……。これじゃあ逆に落ち着かないか」

ルイズは肩を落としてしおらしくうつむいた。

慌てた表情のままルイズの肩をつかむイングリッド。

「おうおう、そうじゃ。こんな豪華なベットでは寝た気になれんわ……傷をつけるかと思うと、緊張して眼を閉じることも出来んぞ」

失敗を理解してぽりぽりと頭を掻くルイズ。

なんでそのような反応をしたかは理解したつもりだった。

イングリッドの行動の端々に、どことなく品格が透けて見えて、なんとなく姉や両親と会話を交わしている気分になっていたのだ。だからベット1つにしても、自身の必要をそのままイングリッドに当てはめてしまった。

町や村で暮らす平民の本当の生活はルイズ自身も詳しく知っている訳でもなかったが、時々見るとはなしに眼に入る、この学園の使用人の寮室の家具を思い出してみれば、この「程度」のベットですら大

げさに過ぎる事に気が付いた。

「そうね……今日は私と一緒に、これで寝ると良いわ。明日すぐつてわけには行かないけど、申請すれば使用人のベットを分けてもらえるかしら？ いぎとなればトリスタニアで注文して……」

ふと気が付いてわたわたするイングリッドに微笑む。

「使い込んでるから、傷なんか気にしないわ。壊されて寝れなくなったら困るけど、そんなに寝相が悪いつてもないでしょ」

刹那、硬直して大きく息を吐いたイングリッドは、大袈裟な仕草で頷いた。

「ありがとう。そうさせてもらおうかや」

そうして安心したように笑顔を見せた。

ようやく落ち着いていたルイズはブラウスのボタンを外し、下着を露にする。それを見てイングリッドも服を脱ごうとしてはたと困ってしまった。

それに気がついたルイズは手をとめて、不思議そうにイングリッドを見つめる。

「しまった……我は着たきりスズメじゃ。寝巻きなんぞ用意できんぞ……！」

あつと、ルイズも理解する。

「ああ……ごめんなさいね、いやだわ。下着の替えなんかも無いんですよ。まず1番にイングリッドの生活用品を買い揃えなくちゃあいけないのに」

頭を捻る。

「ううん……そうね。明日すぐには無理だけど、使い魔のためだと言えば明後日ぐらいは大丈夫ですよ。トリスタニアに出て、イングリッドの生活用品を買い揃えないと」

その言葉に、またイングリッドが慌てて遮る。

「さて、我が主よ。授業をサボらせてまで私の生活水準を上げ様とは思わんでも……」

ルイズは下着姿のまま右手を上げてイングリッドの言葉を遮る。

「使い魔に不便をさせてなんとも思わない程私は冷酷なつもりは無い

わ。早急にイングリッドに不自由な生活を送ってもらいたいのに」
プリーツ・スカートのバックルを外して、それを床に落としてまたぐ。ブラウスとスカートを手にとってテーブルの上に置き、キャミソールに手をかける。

「それに、ここ1週間ぐらいの間の授業は1年の復習をするだけなの。先生達も本当は新入生を纏めるのに大忙しだから、2年生や3年生に関わってられないのよ」

イングリッドは、「ほう」と顎に手をやって納得する。しかし、と首を捻る。

「召喚の儀式はどうなんじゃ？」

パンティを脱いで、テーブルの上に重ねられたキャミソールの上に乗せる。

「あれは、新入生を迎える前日にやる行事なのよ。あれに失敗すれば進級は出来ないから、失敗した人はそのまま翌日、新入生の中に放り込まれるわね」

「失敗」という言葉がルイズから発せられた瞬間に、僅かにイングリッドは身体を強張らせたが、ルイズはなんとも思わずに自然にその言葉を口に出していた。

それを見届けたイングリッドはふつと笑うと、テーブルに積み重なった服を見やる。

ルイズは部屋に入った時点で外されて、椅子の背にかけられていたマントをハンガーのクリップで留めながら、皺にならないように引つ張りつつ、すつぱのままベットに近寄って、天蓋の支えから突き出た棒に引つ掛ける。そうしてからあらためて、その下にかかっていたネグリジエのかけられたハンガーを手にする。

ふと気が付いて振り返るとルイズは、それをイングリッドのほうに突き出した。

「ねえ、イングリッド。これならあなたも入るんじゃないかしら？」

ハンガーにかかったままのネグリジエをイングリッドの身体に押し付ける。

ルイズの身体には大きめで余裕のあるその淡い桃色のネグリジエ

は、イングリッドの身体には——胸のサイズも含めて——ぴった
りフィットしそうだった。

「ん、大丈夫そうじゃの」

頷いたルイズはハンガーからネグリジエを外しながら顎でクロー
ゼットを指し示し、自身はそのまま両手でネグリジエのすそを広げな
がら頭から被った。

「あっちにいっぱい入ってるわ。好きなものを選んで勝手に着てね」
「判った。そうしよう」

さつと服を「分解」しながら、イングリッドも裸になってクローゼツ
トをあげ、ハンガーにかかっている、それはそれは凝った刺繍で彩ら
れた、一つとして同じものが無いネグリジエに眉を引くつかせたあ
と、一番に「質素」に見えるネグリジエを選んで取った。

寢床のシーツの皺を寄せて枕を整えて満足したルイズが振り向い
たときには、すでにイングリッドは自分と同じ姿になっていた。

余りの早業に小さく驚く。

一度ベットから降り立ち、自分の脱いだ服と、その隣に積み重ねら
れたイングリッドの服を見てルイズは、自分の服の山に指を差す。

「申し訳ないけど、明日の朝にはこれを洗濯して貰えるかしら。あな
たの……イングリッドの服は、洗濯したら替えがないし、イングリッ
ドに制服を着せるわけにもいかないし、余所行きの服は作業には向か
ないから……どうしようかしら？」

キャミソールを手にとつて興味深そうに裏返すイングリッドは「よ
いよい」とばかりに手を振った。

「これなら下着も使えそうじゃ……人に下着を貸すのが嫌だと言われ
ると困るが、服のほうは、返された時点で洗濯されておったからの。
一週間ぐらいはどうと言うことはないじゃろ。どうじゃ」

パンティのゴムを珍しそうにみよんみよんと慎重に伸ばしたり縮
めたりするイングリッドの仕草にルイズは、そういえばゴムは貴族向
けの服飾品にしか使われていなくて、平民はサスペンダーショーツと
かバンドルショーツといったニツカース、場合によっては下着をつけ
ないこともあると聞いたことを思い出した。

「うん。構わないわ。明日は私の下着を使えばいい。クローゼットの引き出しに入っているからどれでも自由に選んでね」

「了解じゃ」

パンティを洗濯物の山に戻して、イングリッドはルイズの脱いだ服と自身の脱いだ下着と靴下を纏める。しばし視界を彷徨わせて、部屋の片隅に転がされたかごを見つけるとそれに洗濯物を押し込んで、テーブルの横に置いた。

「うむ。準備はこれで良いじゃろ」

「じゃ、明かりを消すわ」

ルイズが杖を振ると、ランプが急激に照度を落とし、部屋に暗闇が訪れた。しかし窓の外の月明かりは大した物で、動き回る分にはそれほど困らない明るさが部屋に残っていた。

杖を、勉強机と思しき机の上に置かれた杖専用と思しきそれなりにしつらえのいいスタンドに立て掛けると、ルイズはもそもそとベットに入る。それを待ち、ルイズの動きが落ち着いたところを見計らってイングリッドもベットに入った。

「ん……結構明るい」

「えっ、そう？」

イングリッドはその言葉に首肯して思い出す。この世界の人間にとつては月が2つ夜空を照らすのが当たり前なのだ。イングリッドの感覚からすると結構どころではなく、相当に明るい気分だが、ルイズには全然普通であるようだった。

すでに意識が朦朧としているようなルイズを横に感じながら、ふかふかの布団、たつぷりとした枕に身を委ねて今日最後の驚愕をイングリッドは思い出していた。

ゴム、か。

永々と生を過ごしてきたイングリッドであつても個々の工業製品の誕生すべてに眼を通しておける訳では無い。だからして、確信等は無い。だが、うろ覚えな記憶を手繰れば、イングリッドがゴムを使った製品を手にしたのは確か19世紀の後半だった様に思う。軍事製品とか高級な服飾品にはもっと早い時期から使用されていたような

記憶はあるが、ゴムを使った服飾品の発生はイングリッドにとっても大いなる福音だった。パンツを履くのに面倒がなくなった上に、激しい運動……つまり闘いの最中にパンティがスカートからこんにはする事が滅多に無くなったのには酷く感謝と感動の念を覚えた記憶がある。なにしろイングリッドの行う「運動」ときたら全身にある筋力の津々浦々まで全力で動作させる訳であるから——普通の人間であるなら生涯にわたって全力機動する事が無いであろう筋力まで酷使されるのであるから——パンツの紐なんて簡単にぶ千切れた。だから闘争一回で、下着は塵布になってしまるのが日常だった。それが劇的に改善されたのは衝撃的事実であったから、多少の前後はあっても、そう大きな間違いはないと断言した。

なんともちぐはぐな世界じゃ。

窓から差し込む月の光から地球で感じるのとは随分違う、太陽の脈動を受けつつ思考を深める。

せいぜいが15〜18世紀ぐらいかとも思ったが、驚くほど進んだ技術が見られるものよの。魔法が科学技術がある程度カバーしているということか。

眼を閉じて、周囲から漂ういろいろな力の波動を遮る。

これは早急に武器や兵器等を確認する必要があるのじゃ。

マスケット銃や2ポンド砲（40ミリ砲ではなく、前装式の騎兵砲）程度ならどうしようも出来るが、75ミリ野砲や機関銃が山のように持ち出される戦場が当たり前と言うなら、戦場で主を守ることは困難じゃ。

それでも1人で戦場を走るなら、戦車の大集団が断続的にぶつかり合う涙の谷であっても、夜間に無傷で走り回る自信がイングリッドにはあった。だが、さすがに誰かを守ってそれを突破するような事態にはまったく自信が持てなかった。

基本的に、いついかなる時もスタンドアロンであるのが普通で、当たり前前。そもそれに疑問を持つ事すらなかったイングリッドの地球での経験は、ルイズを横に置いてのこれからの暮らしでは殆ど役に立ちそうにもない不安があった。

早いところ、この世界を深く知る必要があるの……。
いつしかイングリッドの意識は柔らかな心地よい闇の中に包まれ
て、落ちていった。

ZEROのルイズ（1）

自分の左腕にかかる強い圧力を感じて、イングリッドは眼が覚めた。瞬間的な覚醒だった。一瞬で切り替わった意識は、直ちに周囲に向けられて無意識の警戒態勢に入る。それこそがイングリッドの日常だった。

窓の外では2つの月が西の空に消えかけ、東の空から濃密な太陽の力を感じる。

空に浮かぶ雲は、地平線の向こうで世界を照らす力を万全に整えた存在が発する強力な力の残滓を一足早く、その身体に蓄えた水の力で地面に向かって反射して、大地を薄く照らし出しつつあった。大地に存在する様々な事象に陰影という存在感を示して太陽は、自身の力の大きさを誇示しつつあるようだった。

急速に藍から青へと色を変える空の高いところを窓の外に見やりながらイングリッドは、自身の身体に絡みつくルイズの手足に嘆息する。肌を感じられる体温が、酷く熱く感じられた。

幼き子供のようじゃ。

イングリッドは、そつと右腕で押してルイズの身体を引き剥がす。小さくむずがったルイズだったが、幸いにして抱きつき返したり、眼を覚ましたりと言う事は無かった。毛布に包まれた身体を「こてん」とひっくり返して、イングリッドからあっさり身体を離れた。ただしその勢いで、イングリッドの身体から毛布をすべて引き剥がして持っていてしまう。

その仕草に「ふっ」と小さな笑みを浮かべたイングリッドは、ベットの上で音もなく上体を起こして慎重な仕草でゆっくりと、そして大きく伸びをした。

ぼきぼきぼきっ。

淑女にあるまじき音が身体のそこかしこから響く。

首を右方向に、次いで左方向に。前に後ろに。

ぐにぐにぐるぐるといった仕草で回して動かす。

ぼきこきかき。

それなり以上に健康に留意し、身体の構造と状態を把握しているつもりのイングリッドだから、そういう動作をしてうっかり神経を傷つけて、首を回したら下半身不随になった等と言う情けなくも悲惨な結末を迎える様な事は無かった。ほどほどに慎重さ保ったストレッチ、のつもりであったが、予想外に体中が凝っていた事にイングリッドは小さく驚く。

「ふむ」と、左右に首を傾げると、上半身が離れたことで重量バランスが変わり、接地圧が高まった事で、ベットに大きく沈み込んだ自身の下半身を見つめる。

やわらかすぎるんじゃないな。

ルイズの寝姿を邪魔せぬように、下半身をそっと回してベットから突き出し、ゆつくりと身体を動かす。ベットの形状が急激に変化してルイズの体が跳ねたりしないように、慎重な態度で重心を移動し、床に体重を移して立ち上がる。

立ち上がった状態で、もう一度大きく伸びをする。今度はイングリッドの身体から音が鳴り響く事は無かった。

それを確認して、イングリッドは本格的にストレッチを始めた。身体を解すことは闘争の可能性がある状況の前段として、事の外重要なのだ。

闘争というのは自身の都合を考えてはくれない。予想外するとき、予想外の場所で、いきなり状況に突入することがある。そんなことは日常茶飯事なのだ。その段になって、足が攣りました。やられましたでは、イングリッド個人はともかく、ルイズの身の安全を第一に考えなくてはならない今のあり方にあっては、非常に都合が悪い。イングリッドが自身の骨格筋を良好な状態に整えておくことは極めて重要であった。

静的ストレッチを十二分に時間を掛けて——しかし、素早くこなしていく。自身の身体に神経を研ぎ澄まして、必要性が感じられる部分に特段の注意を払って解していく。

身体が凝っていたのはともかくとして、精神的に随分と楽になっている自分に気が付きイングリッドは驚く。

周辺周囲から微弱な『力』が発せられて、自身の肌を刺激し続けている状態には変化が見られなかったが、そういう得体の知れない状況でずいぶんとリラックス出来た自身の精神状態に首を捻る。

こんなにも落ち着いて寝ていられたのは、何年振りじゃ……。

十分だ。そう判断してストレッチを終える。本来であれば、ここから動的ストレッチでウォーミングアップ。徐々に体温を上げていつて、バリステイクストレッチへと進みたいところだが……この場でそんな騒ぎを起せばルイズが飛び起きるであろう。イングリッドは自重した。

前日深夜、或いは早朝であったかもしれないが、寝る前の大騒ぎでいろいろと精神的ダメージを——それも、自身の日常である闘争の場で受けるものに、勝るとも劣らない大ダメージを受けていた自覚があるイングリッドとしてはそれほど長くはない睡眠で、それらがすつきりと解消されて全快状態にある身体を不思議そうに見回す。

これほどまでの快眠を得られたとは。どういう理屈じゃろう？

いついかなる時も、それこそ寝ている時ですら僅かの油断すら出来ない地球での生活を思い出しながら、ネグリジエが入っていたクローゼットに近づく。3つある（！）それと、さらにその横で存在感をアピールするクローク。ネグリジエの入っていたクローゼットを下着、寝具用。他の2つは学業用、外着用。クロークはその他の上着、或いはタオルやハンカチが入っているのだろうと益体もない考えを思いながら昨夜、ネグリジエを取り出したクローゼットの前で腰を落とす。

2段の引き出しに首を捻って、一瞬の躊躇の後にまず上を開ける。

想像した抵抗も引つかかりもなく、滑らかに引き出された引き出しは音も無くその中身を露にする。幾度目か思い出すのも億劫になつてきた、もはや考える事すら馬鹿馬鹿しい、造作の素晴らしさに溜息を吐いて中身を確認すると、美しく整理整頓された大量のキャミソールが、一つずつ区切られた枠の中で、自身の出番を静かに待っていた。

僅かの躊躇の後に、淡い桃色で統一されたその中身から適当に一つ取り出して、自分の脇の床に置こうとする。

床に置くのもどうかと、若干の躊躇はあったが、埃どころかチリ一つなく、傷一つ見せない床の姿に大丈夫か、と思い直してそっと、手にしたキャミソールを降ろした。

ゆっくりと引き出しを戻す。

次いで下の引き出しを開けるとイングリッドの想像通り、一つ一つ区分けされた中に、パンティが自分達の出番を待ち受けている。これもまた薄く淡い桃色で統一された色彩の中から一つを取り出して床に置き、引き出しを押し戻す。ゆっくりと戻したつもりだがそれでも乱暴だったようで、僅かの衝撃で上の引き出しが、外に向かって押し出された事に呆れるほどの感嘆を覚えてしまう。造作の優れた家具にはままある現象であり、そのような事態に出会うのは地球では久しく経験がなかった。

100年ぐらい前なら、「今」となっては驚くべき事ではあるが不特定多数が利用する公共交通機関である鉄道の一等車の窓や扉でもそういう現象を経験出来たなど、イングリッドは思い出す。窓袋に向かって勢い良く窓を押し込んだら、その隣の窓を開けて窓枠に顎を乗せてだらしないびきを響かせていたおっさんの顎を、その下から飛び出した窓枠でしたたかに打ち据えた記憶を思い出して、小さく笑う。

空気が勢い良く動かないように、上下の引き出しをそっと押すと、クローゼットの下あたりから、空気が押し出される感覚を感じた。ようやく引き出しがクローゼットに納まる。こういう家具にはこういう理由で空気穴が必要だと『現代人』は知っているだろうか？

床の2つを手にとって、お茶をしたテーブルの上に置かれた自身の服の上に重ねる。脇に寄せられたプレートに僅かに残るクツキーを手にして口に放り込む。造られてから結構な時間が経っているであろうそれは、そうであってもなお、その元の味を失っていないかった事実イングリッドは驚き、そして満足する。

一人で暮らす中では、余りにも大きすぎて邪魔にも思えるサイズのテーブルだった（その精巧にして繊細でありながら重厚なつくりにはもはや感想を考えるのも面倒である）が、ルイズとイングリッド自身

が座った椅子以外にも、壁の前で所在無げに並べられたいくつかの椅子を見て納得する。寮生活等というのは勿論、学校生活すら送った記憶のない自身の人生経験から想像するのは困難であったが、暇つぶしに眼を通したふわふわもえもえの漫画雑誌にあった描写のなかに、女学生達が自身の寮生活の場がかしましく過ごしている姿が描かれているのを思い出して、まあそういう必要性もあるのかと合点する。

かなりの勢いで青から白へと変貌する光を浴びながら、さっと着替える。

脱いだネグリジエを手にして一瞬悩むが、昨日のルイズの行動を思い出してクローゼットに戻そうとして、刹那の躊躇を経て、考えを改めた。他人の体臭が付いたものをクローゼットに戻されるのはさすがに嫌であろうと常識的判断を下す。手にしたネグリジエをそのままテーブルの横に置かれた籠に投げ入れた。

きよろきよろと見回して、必要と思った目的の物を見つけられなかったイングリッドは首を捻り、一つ納得してクローゼットの扉を開け閉めすると、一番右側のクローゼットの扉に平滑で美しい反射を誇る、傷も曇りも歪みもない大きな姿見の姿を認めて、その前で自身の服装を整える。この世界でも、鏡は無防備に外に曝す物では無いと言う様な考えがあるのだろうか？

キャミソールの上に服を着る経験はイングリッドが生きた世界では遠い遠い昔に過ぎ去った過去であったから、彼女は上着の形が崩れることを予想して若干の危機感を抱いた。だが、幸いにして、下に着たそれが服に影響を与えない事を確認出来た。大きな白いリボンを僅かに弄ってイングリッド自身にしか理解出来ない拘りを満足させてから「うん」と頷く。

予測通りに様々な種類の外着が納められていたクローゼットの扉を音が出ない様に、また、扉を閉める動作によつて下の引き出しが飛び出してこない様に気をつけながら、そつと閉める。室内を音もなく素早く動くテーブルの横に置かれた籠を手にして持ち上げる。

まったく予想もしていなかったが、その瞬間に、想像以上のきしみ音とその籠全体から湧き上がってイングリッドは、ぎくりと身体を竦

ませる。振り返って見たベットのの上ではルイズが幸せそうに、それは本当に心の底から幸せそうに緩ませた表情で、口をむにやむにやしながら安らかな寝息を立てていることを確認出来て、イングリッドは安堵の息を吐く。

清浄な空気に包まれた室内で、その音も思ったよりも大きく聞こえて、またぎくりと肩を震わせたが、それもイングリッドの気にしすぎの様で反応はなく、ルイズに気をかけすぎな思考の偏りに気が付いて肩を竦めて廊下へ続く扉に向き直る。

昨日この扉を潜った時にも気が付いた通り、取っ手も突起もくぼみがない、ただそこに施された彫刻が壁と顕著な差異を醸し出しているという1点に於いて「扉かもしれない」と思わせるそれは、扉を開けたという意思を持ってそこに触れただけで静かにその口を開けた。

この部屋に来た時は、ルイズが触った瞬間に部屋の内部に向けて扉が開いていたので、今も当然手前に向かって扉が開くのだと予想して後ろに下がったイングリッドだった。だが、それを笑うように、扉は廊下に向かって開いた。その姿を若干の呆れと共に見て外に出る。開かれた扉の、予想以上の分厚さを誇る縁に意思を込めて触ると、それは音も無く動いて刹那の後に壁と面一に戻る。

壁に施されたものとは異なる彫刻を見なければ、もはや扉があることすら判らない、もう、何を考えてこんな面倒な構造にしたのか予想も想像もできない【推定：6000年以上前】の設計者や建築者の考えに首を捻りながら、戻って来た時にルイズの部屋を発見出来なくなる可能性に身を震わせてイングリッドは、思わず周囲を見回す。

扉が「あつた」上にネームプレートがあり、ルーン語に近い形状の文字で家名も含めたルイズのフルネームとクラス名が書かれているのに気が付いて安堵の息を吐く。ふとイングリッドは、それに違和感を覚えたが危機感を感じなかったので、その場を立ち去って階段の方に足を向ける。

円を描く廊下から扉で区切られていない階段室に入ると、目の前にエレベーターの扉が姿を現す。エレベーターは使用人専用であるという昨日聞いた説明と、その作動原理の不確かさにそれを敬遠して、

エレベーターシャフトに巻きつくように弧を描いて、上下に段数を伸ばす階段を下に向かつて音も無く、静かに素早く降りていく。

一フロアの天井が呆れるほど高いために、昨日感じた体感よりも多くの時間を費やした気がしたが、強く萌える緑の気配が濃厚に漂う1階に、しばしの時間を経てたどり着く。

生徒達の部屋は、2階以上にあつて、1階は寮専属の使用人達が詰める部屋と、その簡易な生活のスペース、仮眠室に、彼女達のためのトイレやキッチン、リネン室に倉庫等と、生徒達が気にかけてどころか眼にすることも殆どありえないような施設が軒を連ねてひしめいていた。昨日の段階ではルイズに意識を向けることに忙しく、気が付く事の無かった施設の配置を頭に入れておく。殆どありえないだろうが、まさか、この学院が戦闘の場となった時に、それらの記憶が一瞬の生死を分ける事態にならないとも限らない。判断材料と選択肢は多ければ多いほど良いのだ。

その向かい側、出入り口に近い場所にある歓談室のみが貴族たちの興味を引くスペースとなっていたが、それなりに重厚な拵えを見せる調度も立て籠もるにはバリケードの材料ぐらいにはなりそうである価値がありそうだと記憶しておく。

それも基本的に寮棟の外を行き来するのが普通だという生徒達が利用する頻度は高くない様で、それら、品のいい調度で飾られたサロンのような部屋は、柔らかな明かりに照らされながらもどことなく空虚な装いを感じさせた。上層のフロアとほぼ同じ位置に上下を重ねて、何人も同時に用を足せるトイレがあつたが、それも使用された形跡は殆どなかった。

ルイズや使用人達が着る服装のデザイン等から、トイレの存在を強く示唆されてその実、イングリッドは大いに安堵していた。このハルケギニアと言う世界の現状が、地球上の文明が辿った、どの歴史に近しい世界かはいまだに正確な予想ができていなかったが、極東のごく一部地域や古代辺りまで見渡さないと、自称文化的国家の殆どでその歴史上、トイレの存在が重視されたことが殆ど無かつた事実若干ど

ころではすまない危機感を覚えていたのだ。

表に見える煌びやかな装飾の陰で、たいていに於いて酷くおぎなりにされてきたのがご不浄の歴史である。金色に飾られたおまるを跨いで腰を下ろして用足し、そして窓からその中身を投げ捨てるような生活を強要されるんじゃないかとイングリッドはひやひやしていたのだ。

それが常識であった時代であった世界に身を置いていた頃であれば、イングリッドもそれをする事に何の疑問も覚えなかった。何しろそれが普通であり常識だったのだから。

だが、こと水周りで急激に長足の進歩を見た近現代の1000〜2000年程の歴史の変化を実体験として経験してしまった身としては、人通りのある街路の奥で尻を出す生活はもはや想像も出来ない。多くの歴史家が無視しがちな事実であるが、実際に歴史を肌で感じて駆け抜けたイングリッド自身から言わせると、19〜20世紀は戦争の世紀の前にトイレ革命の世紀であったとすら思う。特に極東のある国家で異常なほど発達したアレとかソレの機能はそれはそれは凄まじくも素晴らしいものであったと知っている。

アレの快適性に慣れた身で、15世紀辺りのヨーロッパに投げ込まれては恐らく「ご不浄行為」で憤死、いや悶死するだろう。

この分ならこの世界ではぼんやりと街路を歩いていても、上から汚物を浴びせかけられる心配もあるまいと詮無い慨嘆を覚える。

どうしても良いようで、実は恐ろしく重要な問題を考えつつトイレの周囲を見回す。いやーな臭気が漂っているかとも思ったがそれはない。それだけでこの世界のトイレに対する期待が高まる。実際に使ってみる段でどういう状況が展開されるかは乞うご期待といったところだった。ベットの所で意識がなかった期間も考えるとその手の欲求が湧いて来るのも時間の問題だと思われる。尿瓶でも使われていたらアレだが、自己分析する限りではその可能性はなさそうだった。

イングリッドは自身に要求される仕事の特性上、その手の欲求を我慢する事に慣れていた。極地探索等では、それらの行為を行う事が命

の危機に繋がる場合すらあるのだ。極寒の地では尻を出した瞬間に凍死というかショック死に近い状況を曝す事がある。男でも竿を出すぐらいは何かなるがそこから液体を迸った瞬間に膀胱内部まで瞬時に凍り付いて悶絶死と言う笑えない最後を迎える場合すらある。だが、ココはそういう場所ではないし、どれほどにトイレがアレであつても、トイレがあるという事実は変わらない。であれば、我慢せずに済ませられる可能性があるのだからそれに越した事はないのも確かなのだ。

ビック・ジョンを我慢しておなかぽっこりは女性という立場からしても避けたいし、闘争になだれ込んで腹パン。そのせいでうっかりああああ！と、なつてしまつては穴を掘つて埋まりたいどころではない。ましてやルイズの前でとなれば……。

思考が尾籠所ではない所まで飛んだところでイングリッドは頭を振つてその話題を振り切つた。とりあえずは棚上げするしかない問題なのだ。廊下を歩く自分の体の前後に、次々に明暗のある影が流れる事に刹那、気が付く。

そういえば、ここに至る内も随分と照度を下げたにせよ、暗くて歩行に困難を感じるほどではない光に包まれていたなと思ひながら、生真面目な顔をした使用人、メイドが顔を見せる小窓に小さく会釈を投げかけて横を抜けて外に出る。

左右から上り、頂部で互い違いにして段差になつた部分に大きな換気口を設けて、水蒸気と言うには濃い、白く、大量の湯気をもうもうと吐きながらその下の喧騒が透けて見えるクリーニング室らしき施設を視線に入れる。

この手の阿呆みたいに大量の使用人を抱える施設では、仕えるべき貴族の服装がどうこうと言う前に、使用人たち自身の服装を整えるのに酷く難儀するのをイングリッドは経験則として知っている。

『今』でもわずかばかり生き残っている「大貴族」の邸宅には使用人専用のクリーニング室がまま存在していて、家を清潔に維持管理するだけで大量に出る洗濯物も含めて、24時間体勢でかたすのに四苦八

苦するものである。

本気で上級を目指す貴族であれば、1時間おきに使用人を着替えさせるのを普通とする場合もある。そうなれば、何百何千と言う数の服が飛び交って大混乱どころでは済まない事態に陥るのだ。

日がな1日、洗濯するだけの人、干すだけの人、プレスをかけるだけの人、アイロンをかけるだけの人とかもいて、貴族の邸宅に仕える使用人の中でモリモリマッチョメンといったら、コック以外の最右翼はランドリーマンである。別に要塞を爆発させたりはしないだろうが。

貴族の服と使用人の服が同じ施設で洗濯されるのは「現代」ならともかく、過去に於いては殆どありえなかったにせよ、呆れる程、大量の水と燃料を一日中大量消費するそれらの設備が遠く離れた場所に分けて建てられている非効率率は殆ど考えられないので、まずはあの湯気の立ち上る場所に向かえば洗濯もできようと、イングリッドは目的地を定めて早足で歩く。

そのイングリッドに慌てたような気配をまとつて誰かが走りよってきた。

僅かに疑問を顔に浮かべて立ち止まり、訝しげに振り返ると、昨日見かけたブルネットのメイドが大きな胸を揺すりながら此方に近づいて、息を切らした。

「はあはあ……あしが……はやいんですね……」

何とか息を整えようとする彼女の前で、何事だろうと身体を傾いで待つイングリッド。

昨日も思ったが、なんとなくどこかで見たような、この世界には似つかわしくない肌の色と顔の造姿を、じろじろと見てしまう。

その視線の強さにたじろいて、僅かに身をひいたメイドはしかし、背筋を伸ばしてイングリッドに相対する。

「あの……お客様？手にされたものをどうされるんですか？」

視線を外さずにしかし、強く問うメイドにイングリッドは小さく笑う。

「うむ。主に洗濯を頼まれたのでな」

隠せない疑問を顔に表して、小首を傾げる姿が酷くかわいいと思える立ち振る舞いだった。イングリッドはこのメイドが天然のたらしで、純朴そうな表情の影で、うぶなねんねなら一撃必殺で撃滅、屍累々だろうと思った。

「ええっと、その、お客様が……？」

困惑に混乱が差し込むメイドの表情に頭を捻って、気が付いて1つ頷く。互いの勘違いにしようがないであろうとイングリッドは思いついた。

「お客様と言うのはやめてくりゃれ」
「？」

ますます困惑するメイドにイングリッドは笑いかける。

「我は我が主、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール様に仕える……昨日より、仕えることになった使い魔じゃ」

おそらくはルイズの身の回りの世話もするのであろうメイドに、それが有効な動作であるかどうかの僅かな疑念を抱きつつ、右手を差し出した。

僅かに見開いた黒い瞳を持つ眼を、一瞬くりつと反応させてから表情を微笑みに変えて、刹那の躊躇いの後にメイドの手がイングリッドの右手を包んだ。

「あなたが……」

さっと頬を朱に染めて顔を僅かに振って小さな声でつぶやく。

「いけないわ……私」

小さく首を傾げたイングリッドの前で慌てたように、イングリッドの右手から手を離し、両手で手を振った。1歩下がって胸に手を置いて息を吐き、大きく腰を折ってから、背筋を伸ばし、きりつとした表情でイングリッドを見つめ直す。

「すみませんミス。私。この身はメイドにある、シエスタと申します。よろしければその高貴にして寛大なるあなた様の身に於いてお許しを得られれば、そのお名前を卑しき身分のこの身の耳にいただける榮譽を授かれれば、この私めは大変に光栄にございます」

あんまりにも時代かかった慇懃無礼な態度に大いに驚きうろたえたイングリッドは、その自身の覚えた動揺を突いて思わず、声を上げて笑った。

その姿に恐ろしい程の緊張感を噴出して汗を流したシエスタを見てイングリッドは、手を振りながら肩に触ろうとする。シエスタはびくりとして飛び去りそうな反応を見せながらしかし、強い意志力を持ってその場に留まって、屠畜場でめられる順番を待つ牛のような表情でイングリッドに目を向ける。

突然の表情の変化に驚きながら、反応が激しすぎることに僅かの逡巡を得て、左手にした籠を取り落としてイングリッドは、慌てて彼女の両肩をつかんだ。

もう、覚悟は出来たとでも言いそうな表情を自身の顔に引き寄せながら、イングリッドは捲くし立てる。

「違う違う。違うのだシエスタよ。我は使い魔じゃ。平民じゃ。主らと同じ立場じゃ！そのような悲しい表情を我に見せないでくれ！」
その態度に、無表情から混乱へ、そして困惑へと表情を崩し、最後に無表情に戻った顔を急速に朱に染めて、今度こそ飛び退って、大きく頭を下げたシエスタ。

「申し訳ありません。ミス。かような態度をいたしましたることまことに……」

焦りを表情に滲ませたイングリッドは、そのシエスタの謝罪の言葉に被せて大声を上げた。

「おおーい！そのよう態度は無用じゃシエスタ！」

びつくりして顔を上げる彼女に、近寄ってまた肩に手を置くイングリッド。

大きく溜息を吐いて、顔を上げ、ニヤツとイングリッド自身が表現する笑顔を浮かべる。

「イングリッドじゃ」

突然に口にされた聞いた事の無い言葉に、刹那の疑問符を飛ばすシエスタ。

その表情に、邪気の無い風を装ってイングリッドは、再び笑顔を浴

びせかける。

「我の名じゃ」

ふうと溜息を吐いて、僅かにステップを取り、距離を離す。

「ただ、イングリッドと呼び捨てしてもらえばありがたい」

「え？」と、呟やいて難しい顔をするシエスタに、悲しげな表情を向けてもう一度溜息を吐くイングリッド。

難儀な世界じゃ……！

右手を上げて強引にシエスタの右手を引つ掴むと、あわあわする彼女を無視してぶんぶんと上下に振るった。

「イングリッドじゃ、イングリッド。シエスタと申したか我主」

酷く取り乱したシエスタは、混乱のままこくこくと頷く。

「我は貴族ではない。主らと立場は一緒じゃ。以降、見知って、出来得れば、なかようしてもらえればありがたい」

ここに来てシエスタが混乱を呈する理由にようやく思い至ったイングリッドは、頷きながら手を離し、右手で自分の顔を指し示す。

「このしゃべり方は我の癖じゃ。もう直らんのじゃ。混乱させたようじゃの。許せ」

大きく首を傾げてようやくのこと混乱から抜け出た風なシエスタは、頬に手をやりながら大きく腰を折った。

「申し訳ありませんイングリッド様。私……」

顔を上げたシエスタに、酷く悲しそうな表情を見せるイングリッドが認められて、なにか粗相をしたのかと再度の混乱で表情を強張らせた。そのシエスタに、イングリッドは肩を竦めて笑いかけた。

「イングリッドじゃ」

幾度めかもわからない疑問に、幾度目かもしれない困惑とともに首を傾げるシエスタ。

小さな声で笑いながら、イングリッドは更に笑いかける。

「ただ、イングリッドと」

しばしのときの後、シエスタもようやく何を言われているか気が付

いて、大きな笑みを浮かべた。

「イングリッド……様、でよろしいですか」

しばし悲しげな顔を張り付かせたイングリッドであったが、大きく溜息を吐いて、芝居がかった姿で両手を振り仰ぐ。

その姿にくすりとして、シエスタはあわてて顔を緊張させる。

「うん……まあ、立場もあるし……しようがないの。それでよいか」

顔の前で右手の人差し指を出して、ゆっくりと振る。

「敬語は要らん。せめて普通にしゃべってくりやれ」

シエスタは刹那の緊張を解いて表情を笑顔に戻し、いたずらでも思いついたかのように奇妙に歪めた微笑でイングリッドに言葉を返す。

「イングリッド様。ではイングリッド様もそのような態度で私どもに対応されなきよう、お願いできますか」

イングリッドは「ぐぬぬ」と妙な唸り声を上げて仰け反った。頭を掻いて首を振る。

「ぬ……ぬう。一筋縄ではいかぬのシエスタよ……しかし、その、なんだな、我は、いや、わたすいは……」

痛い。かみまみた、などと呟くイングリッドの姿を見てシエスタは遂に声を上げて笑い声を上げた。

「ごめんなさいイングリッド様。此方もよろしくおねが……よろしく、ね？」

楽しそうに身体を振って、後ろ手にしつつ身体を傾げるシエスタの顔は輝くような笑顔が浮かんでいる。

こやつは酷く手ごわい手合いじゃと内心で嘆息しながらイングリッドは苦笑いした。

「お……おう、シエスタ、こちらこそよろしくじゃ」

シエスタは、今度は躊躇い無くイングリッドの右手を両手でつかんでぶんぶんと手を振る。

「ああ、よかったわ。ミス・ヴァリエールにこんないい人が付いてくれたなんて！」

その表現に訝しげな表情を向けてしまうイングリッド。

あつと、驚いた表情を浮かべてシエスタが小さく舌を出す。

「ごめんなさい、イングリッド様。イングリッド様はミス・ヴァリエールの使い魔ですものね」

そのニュアンスに極めて微妙な感情が、あるいは認識の相違が含まれている事に気が付いたイングリッドは、僅かな怒りを覚えてシエスタを見返してしまおう。

「そうじゃ。我はルイズの使い魔じゃ。そこにおかしなことなどない」

その言葉に、本格的に首を傾げるシエスタ。

「ええ、イングリッド様はミス・ヴァリエールの使い魔になったんですよ?」

大きく頷いてイングリッドは答えた。

「そうじゃ。我はルイズの使い魔に成ったのじゃ」
「……………」

妙な沈黙の後に、そのニュアンスの違いが指し示す彼女の、あるいは彼女達使用人に蔓延って広まったであろう認識にイングリッドは、酷く重い溜息を吐いた。

「無能」。

「失敗」 故か…………。

その言葉がどこまでもルイズに…………おそらくはイングリッド自身をいろいろな面で苛み続けるのであろう事実が気が付いて。気が付かされて、ルイズを酷く汚された思いを抱いて怒りが激発しそうになったが、ぐつと堪えて表情を保つ。

しかたが、ないんじやろうか…………?

イングリッドは首を振って、顔に笑みを戻す。苦いものが多いがちゃんとした笑みに戻ったようには、見えた。

シエスタが不思議そうな顔で、それを見て、ついで地面に置かれたままの籠に視線を移す。

「イングリッド様、洗濯物はおもち……もって行きます。終わったらミス・ヴァリエールの部屋に返しますから、気にしないでね」

若干の怒りをぶり返してシエスタを見返すイングリッド。

「いや、我がおおせつかつた仕事じゃ、場所を教えてもらえば……」
笑いながら首を振って否定するシエスタ。

「パンはパン屋に、ワインはワイナリーに。ですよイングリッド様」
シエスタはさっさと籠を手にした。

「正直に言っつてね、イングリッド様。素人がランドリーに入っても迷惑です」

口調は厳しいが声は優しい。イングリッドを心配するような響きも感じられる。

「私たちも『使用人』です。それをご理解ください。『使い魔』の仕事は取りませんから、今までどおりに私たちが出来る仕事は私たちに任せてください」

籠についた芝生のかけらを払いながらシエスタは、籠の中身を確認する。

「イングリッド様は『使用人』の真似事なんかせずに『使い魔』をしてくれればいいんですよ？」

夜のルイズと交わされた言葉を考えると俄かにうなずけるものでもなかったが、言っている事はシエスタが全面的に正しい。イングリッドはそれを理解した。

判っているのだ。イングリッドにとって洗濯といったら洗濯機にぶち込んでボタンを押すだけ。コインランドリーであるならば、ボタンを押す前に指定の金額を入れる作業が割り込むが。

ある一部の国では洗濯用の洗剤のブランドがやたらと細分化されているために、自分自身が選んで買い込んだ洗剤を入れて蓋を閉め、洗剤にあつた設定を入力してボタンを押す必要があるが、大抵の先進国の洗濯機用洗剤といったら有名どころが数社あるだけで、それが洗濯機の自動投入装置に最適化されているがために、本当にボタンを押してお終いの場合が多かった。洗剤の量が足りない時は警報が鳴る。その時だけ洗剤を投入口に継ぎ足せば良い。洗濯時間や濯ぎ時間、脱

水時間などを事細かに設定出来る洗濯機というのは少数派なのだ。手動で設定を事細かにやる必要がある自動洗濯機を自動洗濯機と呼んでいいのかという意見が大勢なのだ。それはともかくとして、電気も蒸気も何にも無さそうなこの世界では、そもそも洗濯機の存在自体怪しい。となれば手洗いだろう。

過去には、手洗いた事もあった。歴史の流れからすれば、手洗いで洗濯経験のほうがはるかに長い。しかし、ここ数十年で全自動洗濯機に慣れ親しんでしまったイングリッドには、今更手洗いというのは荷が重い。洗濯機がない場所を往く場合でも、数日から最悪でも数週間程度で洗濯機のある場所にたどり着けたから、洗濯機がない間は河原で下着をすすぐ程度で済んでしまった。下着等は最悪の場合、使い捨ててしまえばよかった。そんなに嵩張らないし。

手洗いしなければならぬのだとしても数度程、洗濯をすれば思い出す程度の忘却だろうが、自分の服はともかく、ルイズの持ち物を練習で扱うのはどうかとも思う。はつきり言って力加減を間違えてびりびりとなる未来が確定しているような気がする。

洗剤はどうするんだ。すすぐにも蛇口を捻ってお終いとも行かないだろう。絞るときはどうするのだ。脱水は。乾燥は。

それらを思っただけでイングリッドはぐつと言葉に詰まると、僅かな時間を硬直で過ごして、どうしようも仕方が無く溜息を吐いた。のろのろと顔を上げて、疲れた表情でシエスタに頷く。それでもシエスタに対する心えは言葉にするのは若干躊躇われた。しかし、刹那の躊躇を経て、結局は言葉として口を出した。

「う……うむ。そうしよう。頼んだ」

「頼まりました」

くすくす笑いながらシエスタはふと気がついて、籠の中から一つ、洗濯物を取り出す。

「あら……変わった、下着？かしら。何かしらこれ……？」

ブラジャーを手にして右に左に揺すっているシエスタ。そういえばブラジャーの誕生はいつごろであったらうかと首を捻るイングリッド。とりあえずは説明しておいたほうがよいと、何であるか説明

しようとかあれこれと言葉にする。

「うむ。それは肩から紐でつって、胸を下から支えるものじゃ。脇から紐で括って抑えて胸の形が歪まないよう整えるように……」

説明を遮って唐突に「まあー」と声を上げるシエスタに、イングリッドはびくりと身体を震わせる。

「これが『ブラッシエール』ですか。始めて見ました。へー、話で聞くよりずっと良く出来ています。すごいですね、これ。私も欲しいです」

彼女の首の下、健康的な肌色を見せる首から繋がった身体のラインを急激に左右へと「掻き乱す」ソレを見ると、イングリッドの表情はなんとも微妙になる。何をするにしてもゆさゆさというかゆっさゆっさで、尚且つ、おっぱいぶるんぶるん！なソレを見て、まあ、そうじやろうなと悲しくも大きな納得を覚える。

シエスタは顎を撫でて首を捻る。

「これだけ繊細なものは……まあ、ワイヤーで抑えてるんだ。ゴムも入っているし……すごい！こんなにかさく精巧な金属で……？ええっ、これでとめることが出来るんだ！」

顔色を赤くしたり青くしたりしながら、ためすがえすするシエスタの言葉に昨日から自分が思ってたウンザリした思考と同じものが入っている事にイングリッドは苦笑いする。ブラジャーが芸術的建造物と同じ評価になるとは……！

ひとしきり肌触りを確かめたり、中身が無くても形を崩さないその部分をもみもみしたり、首を捻ったり頷いたりした後シエスタは心配そうな表情を顔面に浮かべてイングリッドに顔を向けた。

「これ……普通に洗って大丈夫ですか？」

イングリッドも首を捻る。ドラム式の洗濯機に服やら靴下やらと一緒にくたに投げ込んでも形状が崩れる事は無かったが、まさか棒で叩いたり足で踏んだりするようなまねをされれば跡形も無かろうと想像する。過去にはそういう洗濯方法が一般的であった時代があったのだ。腐った小便で満たされた器で踏み踏みとかいう事すらあったという。さすがにその時代の洗濯を自身が経験したことは無かった

が。

それ以前に大多数の女性からは、イングリッドの適当極まる洗濯方法は大きいに非難されるだろう。

外行きの服だろうが、下着だろうが、ズボンだろうが、パンティだろうが、何でもかんでも混ぜこぜにして洗濯機に放り込むスタイルは便利な機械の恩恵に与った、だらしない女……と言うより、だらしない人間の代表みたいなものだった。

イングリッドにしても一応の言い訳はある。激しい「運動」を伴いがちな「仕事内容」からすれば、下着やストッキング等は使い捨て同然なのだ。そういう仕事に就いている者がストッキングを愛用するのはどうなんだという問題はあるが、イングリッドの揺るがせない拘りだから仕方が無い。

現代、イングリッドを知る者がイングリッドを思い浮かべてデフォルトの服装だと考える、青い服。つまり、今現在着用している服に関しては、色々な技術が使われてやたら滅多ら頑丈頑強なので、そう簡単に損壊する事態はありえない。至近で爆弾が炸裂しても、ブラジャーやパンティ、ストッキングはずたずたになっても、服と、その中身たるイングリッド自身は無傷という状況が出来る。それぐらいの超技術の塊だった。それが故に、逆にイングリッドの洗濯作業がことさら適当になっているという問題もあった。

そして、自身の洗濯にかかわる思考が、他とは幾分ずれている事に自覚が無い訳でも無いイングリッドだった。だからこそ、シエスタの意見をあつさりを受け入れたのである。

「ん……うむ。基本的には手洗いじゃな。微妙なところを覆うものじゃ。毛羽立ったりすると酷く困ることになる。金属も細くて弱いからの。錆びることは無い金属じゃが、細かい造作に糸やゴミが絡むとちとややこしいぞ」

「うん」と、シエスタも納得するように首肯する。

「そうですね……紐も見た目よりもずつと丈夫みたいですけど、絡

まったら怖いわ。金属部分が引つかかると他の服が大変になりそうだし、ブラツシエール自体に絡んだらそれこそ大変ね。高価な品だけはあるわ。特に気をつけるように注意しないと……」

イングリッドは顔を引き攣させながらそれに応える。

シエスタの中ではそのブラジャーが、芸術品並の価値を持った至高の高級品！という立ち位置で固定されてしまったようだった。だが、イングリッドはあえてソレを否定しない。

現状、替えがないという点に於いて、確かにそれは「至高の一品」だからだ。

「む……うむ。そうじゃ。面倒をかけるが、そうしてくりやれ」

シエスタは「はい」と大きく頷いて、ベルトをたたみこむとカップの中に収めた。そしてそれを大事に手で包みながら、そつと籠に戻す。ソレを見届けてイングリッドは、いつか訪れる結末を思う。アレが失われたらサラシでも巻こうか……。

「よかったです、確認できて。ショーツもすぐ高価な品のようだし、こんな肌触りの品は見たこともないです。しっかりと伝えて慎重に洗わせますね」

動揺を浮かべた変な表情を隠せずに、イングリッドは頷き返す。

笑顔で頷くシエスタは答えを期待しない言葉を続ける。

「ミス・ヴァリエールの使い魔の身に着ける品だといえ、絶対に粗末にはさせません。ご安心くださいね」

そういえば、自身が寝て過ごした間になされたであろう洗濯ではどういう風にしたのだろうという疑問を持ちながら、イングリッドは大きな仕草で頷いた。

「では、失礼しますね、イングリッド様。よい一日を」

大きく腰を折って、背筋を伸ばすと、鼻歌でも歌いだしそうに軽やかなステップを刻んでシエスタは、湯気を噴出し続ける建物に向かう。やはりあの建物はランドリーなんだろう。

それを切なそうな表情で見送って、イングリッドは僅かに顔をうつむいて小さく苦笑し、すっかり夜が明けた空を振り仰いで身体を翻す。

「仕事がなくなってもうたわ……」

徐々に騒々しい喧騒が見られるようになってきた寮塔を見上げて、その入り口に足を向けた。

太陽に照らされて、俄かに湧きあがった草の臭いがイングリッドの鼻を刺激し、さわやかに駆け抜ける風が髪の毛を撫でた。

イングリッドはそこで思考を停止したが、この世界にブラジャーが存在している事に関して考えを巡らせるべきだったのかも知れない。そこには主たるルイズを守る上で看過できない「かも知れない」問題が潜んでいる「可能性」があった。

ブラジャーの起源や誕生時期については諸説ある。最も古い「ブラジャー」らしきものでは4000年近く前の中国の墳墓から出土した例すらあるのでよくわからない。「ブラジャー」的構造を持ったアンダーウェアの歴史を俯瞰すると、意外にも全世界各地で相当に古い歴史があることがわかってくる。

極めて早い時期に「サラシ」で満足してしまつて、後の発展が逆に阻害されてしまつた極東の島国を除くと、多種多様の創意工夫の痕跡が世界中に分布しているのだ。それだけ女性にとって身体の前方で揺れる脂肪の塊を押さえ込む需要が大きかつたのだと想像される。

しかし「現代」ブラジャーの直接の始祖と見られるアンダーウェアの発生は戦争で負傷した兵士を世話する女性看護師が、当時女性のアンダーウェアとして一般的であつたコルセットの腹部分を撤去して、胸を押さええることに特化したものを現地ですち上げたものであるとの説が有力である。

胸を押さええるという意味での必要性は勿論のことながら、腹を押さえ込まれるコルセットを禁忌して、屈みこむことが出来るように工夫されたものがブラジャーの起源であるらしい。

本来であれば「そう」である蓋然性は無い。ヨーロッパは椅子の文化であるから、屈む必要性は無い。傷病者を横たえる場所もベットであるので、屈む事が難しいコルセットを装備していたところで問題はない。床に落ちたものを拾うにしても、背筋を伸ばしたまま腰を落と

して手を伸ばせば何とかなる。東洋人が見たところ不自然極まりないあの姿勢というのはコルセットを装備しているが故である。別に淑女たるもの常に背筋を伸ばしてあれなんていう理由ではない。単純に腰を曲げる事ができないからあんな姿なのだ。

ところが、技術の進歩がそんな悠長な事を言っている暇をなくしてしまった。

縫製技術の進歩が、ではない。

軍事技術の進歩が、である。

具体的に言えばクリミア戦争辺りからであるらしい。

そのあたりの戦争で、傷病者の数が爆発的に増えた。幾何級数的と言いつても良いかもしれない。単位時間当たりの負傷者数が激増した事によつて、戦前に予想された被害想定を軽く上回る負傷者が野戦病院に持ち込まれることでベットの数が足らなくなった。

冷たい床に負傷者を横たえることはそれだけで戦病死者を増加させる原因になりえるので、ひとまずは藁束の上に負傷者を寝かせたりした。早い段階でそれは衛生的に問題があると判つたので、藁をシートで包んで簡易な敷布団を用意する事になった。良かれと思つて用意された藁束に寝かされた重傷者が、石畳の床に寝かされた重傷者よりも重篤な感染症を発症する例が続出したのだ。

それはともかく、布団は比較的素早く用意できたもののベットとなるとそうは行かなかつた。

記録ではクリミア戦争前に一方の当事者が用意したベットは2000床ほどでしかなかつたらしい。それでも相当におごつたつもりになつていたという。

現実に発生した戦病者は15万近くに上つた。その人数が全て同時期に発生した訳ではないが、このうちの70パーセント程度が戦場に蔓延した感染症によるものであるとの報告がナイチンゲールによつてなされている。そうであればなおさらのこと、マットの上に横たえるべき人間が多数に上つた事になる。

しかしベットが足りない。戦場に展開した艦船からかき集めてもベットの数は集められなかつた。士官以上しかベットを持たず、兵や

下士官がハンモックに包まる事が常態の当時では、艦船にもたいした数のベットはなかったのだ。

大量に用意された藁を、これまた大量に用意されたシートでくるんだ簡易な敷布団は床に近いレベルである。コルセットをしている女性では、とてもものことではないが、まともな医療行為を行え得ない。

かくしてコルセットはブラジャーへと進化したのである。

そこに至る遠因に軍事技術の進歩が潜んでいる。幾何級数的に負傷者を増やす原因がまわりまわって近代的ブラジャーの成立を促したのだ。その軍事技術とは……。

しかし、仕方がないと嘆息するしかない部分でもあった。イングリッドはそのことを知らなかった。自身の「仕事」に直接関係しない部分であったから、ブラジャーは便利な道具であるとの認識で終わっていた。その誕生に軍事的問題が隠れているなんて言うことは想像の埒外だった。

永い生を持つて広く浅い知識を持ったイングリッドとはいえ、知らないことを想像する事は土台無理である。自身の見聞がやたらと多いが故に一般的な書籍に知識を求める努力が足りなくなりがちな部分も影響した。ブラジャーの根源的な歴史がどうかはともかくとして、あらゆる部分でイングリッドの知識や経験は歪み、軋み、そして、おかしかった。

ZEROのルイズ（2）

生理現象を済ましてすっきりしたイングリッドは、すぐさま階段室に足を向けた。やや重い、だが素早い足取りでルイズの部屋を目指す。

日が昇るにつれて逆に寒々しい空気が濃厚に漂い始めたかというような錯覚を覚える階段を、足音一つ立てることなく駆け上がった行く。何しろ寮塔の各フロアは天井が高い。建築構造上、いかなる造りをしていくかに大いなる疑問があるが、フロア床、或いは天井を構成する構造が分厚いのもあって、単純に6階に行くのがかなりの重労働である。

魔法が使えないが故に、毎日、この階段を上り下りし続けたルイズはかなり頑強な身体をしているのではないか。イングリッドはそういう想像してしまう。

実際に貴族が利用していない現状があるとはいえ、建前としては、貴族が利用することを前提とした構造である。「通常の階段」と比べるならば相当に緩やかな構造で1段1段の幅も広い。塔自体の構造が円筒形であり、背骨のように塔の中心を貫くエレベーターシャフトに沿って作られた階段であるから、当然のごとく階段も弧を描いて上を目指す。中心に近い部分の幅は狭く、外に向かって扇方に面積が増し、外周部はこれを階段であると言うにはかなり勇気が必要な程に踏み代が広い。

この様な構造では、ぼけたんとしてなんとなく足を踏み出せば、次の段に足がかかることなくけつまずいて池田屋落ちを体験する羽目になる。中心側であってすら緩やかであるから、それほど酷い事態にはなりそうも無いが。

階段を「昇降する」と言う面では楽な構造と言えなくは無いが、絶対的な歩行距離は相当なもので、コレを毎日となると、女性としては（人間としても、だが）ありえないほどに頑強頑丈なイングリッドであつても想像するだけで顎が出そうである。

それを毎日、である。ルイズは真面目で優秀な生徒だとコルベール

は何度も強調していた。「真面目」で「優秀」な基準は、学校と言う体裁を取る「学院」に席を置いてはまず何を置いても「成績」であろうが、次いで重視されるのは「態度」であろう。

「態度」の中で重視される筆頭上がるのは、出席日数である。「真面目」で「優秀」だと手放しで賞賛されるのであれば……。

毎日毎日、たった1人だけで孤独に階段を上り下りする日々。想像してしまう。

勉強道具、授業道具を持って、この寒々しい階段を1人で。

薄桃色の金髪を揺らし、ただまっすぐ前をむいて、口を結んで、ただただ階段を進むルイズ。

足音だけがそれに着いて行く。天井全体が発光しているかのような照明によって、人にとって最も近い隣人である影は散らされてはつきりしない……。

イングリッドはいつの間にか自身の足が、踏み出すことを忘れてしまっている事に気付く。

哀しみを感じる情景を頭を振って振り払い、気を取り直して上を目指す。

誰かが来る可能性は無く、誰かが利用した気配も殆ど無く、それにもかかわらず、毎日の清掃が行き届いて清潔なあの場所。西洋風のつくりで、落ち着きがある調度といい、酷く肌触りのいい象牙製と思われる座る場所の感触とあいまって、非常に気持ち良かった。

トイレット・ペーパーが備えられているのにはさすがに驚かされた。ロールタイプではなく、積み上げられた正方形の紙であったが、間違いなくトイレット・ペーパーだった。たぶん。

思ったよりも柔らかくて肌触りが良く、しかも白い。処分に関してはどうすれば良いか見当もつかなかったのだが、トイレの個室には便器とレバー以外に何も見当たらなかった。そのためイングリッドは躊躇いつつも便器に投げ入れて流してみた。詰まって逆流ともなればそれこそどうしていいかわからないが、幸いにも問題なく流れた。この世界の技術的発展の方向性の揺らぎにはもはや驚くことを通り

越して呆れるばかりである。現代地球でも大都市圏であるならばともかく、先進国であつても汚物以外は流せない水洗便所というのは結構あるのだ。汚物にしても、あまりにも大量に投下する事が予測される場合には数度に分けて流すことが求められる場合もある。そういうものなのだ。

さすがに貴族のための学院だから、であろうと思いたい。一般庶民も含めてこの生活が維持されているならばこの世界に対する評価を大幅に上方修正しなければならぬだろう。

ちゃんと便器に臭気避けの水がたまっていたのもポイントが高いし、自身の予想よりもずっと勢い良く水が流れたのは最高に気分が良かった。

想像以上に悲惨な情景を幻視したことを忘れるために、そんな益体も無い事をイングリッドは考えた。

その複雑な気分のまま更に急いで3段飛ばしに階段を上がついてくイングリッド。「普通」の階段ならば10段分はある幅を、普通に3段分ある高さと共に1歩で踏み抜いて駆け上がるその姿は、既に人間の範疇を踏み外していたが気にしない。無意識に気配を探り続けるイングリッドには、階段室に接近する誰か等は感じられない。階段室に誰かが来る可能性は今のところ無いのだ。遠慮する謂れは無い。

そうして走るイングリッドは、多くの気配が活動を始めた寮塔の中にあつても、一切の人間に出会わない事に当惑もするし、納得もしていた。本当に誰も近づこうとしないのだ。ルイズから受けた説明が正しいのであれば、今、この段階で、階段で他の生徒に出会う事は無いだろうし、これからもよほどのことがない限りありえないのだろう。それでも若干の疑問は募る。

本当に、空を飛んでいるのだろうか？

実はイングリッドは、この世界の理の根幹にある魔法と言うものを未だにはつきりと見ていない。

召喚の儀によって現出した『鏡』は正直なところ、余りにも異常な

ものであって、あれが人の『力』であるというのはイングリッドには俄かに領けないところがあつた。

意志の介在があつたのは認めるが、その結果を得るためにあの『鏡』が行つた、少年を『攻撃』したあの姿。あれは、どちらかと言うと魔法という人間の力が介在した『力』の発現と言うよりも、あれ自体が一種のクリーチャーであつたと言われたほうが、まだ納得の出来るモノだつた。あれ自体が『使い魔』を得るために地球に遣わされた『使い魔』であつたとすら思える。

判断するにはあまりにも材料が少ないし、自分が存在する以上は2度と発現しないのだと言われれば、それを調べるのも難しいので、とりあえずは保留する他無い。だが、やはりあれを『魔法』という、人間が行使した『術』と見るのにはかなりの疑問があつた。

コントラクト・サーヴァントも結局のところ、メイジという『力』の行使者がサモン・サーヴァントと共に一生に数度行かうかどうかと言う魔法である。使いようによっては強力な武器、或いは武器になるであろう存在を呼び出せる筈の、召喚の儀。サモン・サーヴァントと実質セットになっているそれを一生使わずに過ごしてしまふメイジも多いという。

確かにドラゴンを呼び出して使役出来得れば、それだけでメイジの格は固定されたも同然の結果を得らよう。だが、当代一流のメイジが、一流の血筋が呼び出した使い魔が、アリンコでした。などとなればいろんな意味で面目丸つぶれであろう。そういったリスクがあるのであれば、確かにその使用は躊躇わざるを得ない。

またそういうことがあるかどうかは知る由もないが、魔法を知らない者としては当然の如く考える想像として。

サモン・サーヴァントは成功しました。

ハウザーを召喚しました。

コントラクト・サーヴァントは失敗しました。

ハウザーに喰われました。

などと言う可能性もありうるのでは？と、思つてしまふ。

特に「キス」という魔法行使の形態はいただけない。使役状態に

至っていない、中途半端な「呼び出されただけ」の状態にある猛獣に近づいて「キス」。非常にリスキーな行動だ。

「常識的な想像」をめぐらせればバックリやられてお終いであろう。そのあたりの「常識」が随分と乖離して普通に思っているフシがあつて、イングリッドは困惑するところしきりである。

凶暴なケモノでも現れて、暴れましたとなれば魔法で麻痺させるとか瀕死の重傷を負わせるとか何とかしているんだろうか？そのためコルベールの様な者が、召喚の儀を行う場所にいるのかとまで邪推してしまう。ソレはそれで使役する段で深刻な状況を招来しそうだが。そんなんで信頼関係を結ぶるとでも思っているのだろうか？

そこまで考えてイングリッドは思わず笑ってしまう。出来る。他でもない。その実例がここにあるではないか。

コントラクト・サーヴァントが基本的には積極的に他人に危害を加える類のモノでは無いのは確かな様である。すなわち、現状における最優先事項となっている自分の主たるルイズの身に及ぼす危険が無いという点では、あまり調査優先順位が高くない。

翻つてサモン・サーヴァントに関しては『元の世界』に与えた影響の未知数と、サモン・サーヴァントが『元の世界』で観測されたであろう事が确实と言う情勢での「その後」の影響が未知数と言う部分で無視し得無いため、本来は極めて調査優先順位が高いのだが、調査のしようが無いというのが悲しい所ではある。

イングリッド自身に浴びせかけられた『攻撃』も判断が難しい。コルベールやルイズの言を信じるならば、極めて稀なと言うか、他に類例の無い『現象』であるという。そうであるならば、あれを受けたイングリッドの経験は、現状ではルイズ以外の他の魔法行使者に対する判断材料には使えない可能性が高いと判断せざるを得ない。

他ならぬ重要護衛対象であるルイズの『力』であるから、アレによりルイズの実力を測って、危急におけるルイズの行動如何を判断する材料として一つの指標にはなろう。けれども、今のところはあれ1回のみであるし、判断材料となるケースを増やさなくてはルイズが何を出来て何が出来ないかもわからない。

そも、ルイズが魔法を失敗すると言われても、それこそイングリッドは判断が付かない。判断のしようが無い。

失敗だと言われた爆発も「攻撃」として見れば大した威力で実際、イングリッドは危うく命を落としかけたのだ。あの発現プロセスがわからない攻撃を自由自在に狙ったところに起こせるのなら、自身の知る闘争の場では最強に近いだろう。デミトリやジェダ辺りでも瞬殺では無いかと思える程の力の収束を見た。死ななかつたのが本当に奇跡に思える。

さらに、実際に召喚「される元」で起きた出来事に疑問符があるとはいえ、結果だけを見ればサモン・サーヴァントは「成功」している。

コントラクト・サーヴァントも成功している。実際に成功しているかどうかは、他の例を知らないので比べようもなく、イングリッド自身に判断が付かないのだが、コルベールは成功と断じた。彼との会話で彼が様々な理由により、積極的にサモン・サーヴァントに立会い、その副次的結果としてコントラクト・サーヴァントを多数見届けている上で経験からの意見と言うならば、まあ信じるに足るであろう。

イングリッドにはつまり、何が本当の意味で『魔法の成功』であり、何が本当の意味で『魔法の失敗』なのかすらわからないのだ。

実は、この3つのみなのである。イングリッドが実際に観測しえた「魔法」という現象は。

イングリッド自身に影響を与えた魔法はそれ以外に、レビテーションと秘薬という、魔法をブーストする役割を持った薬に水の魔法を併用した治療行為があったというのだが、双方ともイングリッド自身の意識の埒外であったし、双方とも後遺現象が一切残っていないため（治療の結果としてイングリッドの負傷が全快したという意味では後遺現象が「あった」とも言えるが）、なんとも判断に苦しむ面がある。

自身にあつたかなり大きな負傷を治療したらしい『水の魔法』の行使は、その能力のあり方としてある種、恐ろしいものがあつたが、実際の負傷程度もわからなかったから（何しろ跡形もなく治療されていた）結果がすさまじいと理解出来るだけで、どのような力の行使があつたか判らないという点では、結局、無知のままである。

それ以外の魔法に関しては、話に上るだけでイングリッドとしては留意事項として心に留めて保留するだけであつたからこれまた判断材料が無い。特に、ルイズに食らわされた一撃以外の「攻撃魔法」がいかなるものか、実際に見ていないという事実はイングリッドに焦りを感じさせる結果となつた。

自身が自分の意思で守ると決めたルイズを、現状、もつとも危険にさらす可能性のあるのが『魔法』である。魔法を行使して当たり前という存在が溢れかえつていて、しかも、それらを普段から当たり前のように生活に密着させている。

イングリッドが特段にそれらに脅威を感じるのは、それが「拳銃」では無く「包丁」であるという点だ。

拳銃であれば、それを扱うのには様々な葛藤が生まれる。シリアルキラーでもない限りは、普段からそれを振り回すことなんてありえない。

しかし包丁は違う。身近な道具だ。普段の生活で包丁を使うことを躊躇するものは、先端恐怖症の者か、余程の不器用者だろう。ここで問題になるのは、普段の生活に密着している故に、些細な理由でそれが持ち出されかねないという事だ。それはつまり、喧嘩とかである。

拳銃が持ち出される喧嘩、なんていうものも日常茶飯事な国があるが、それは国レベルでのイレギュラーであつて、人間社会全体でいえば普通ではない。

しかし包丁やアイスピック、カッターに彫刻刀といった生活に身近な道具が顔を出して、他人を殺傷したという事件は世界中で枚挙に暇が無い。

イングリッドが恐怖するのはつまり、魔法がそういった存在であるように思えるこの世界のあり方である。しかも、イングリッドが体験した限りに於いては「拳銃以上の威力を持った包丁」。そうなつてしまふ。これを恐怖しない理由は無い。

それらの実際の正体が不明であつては、ルイズを守るところの話ではない。早急に確認したいところが本音である。

あれこれ考えながら、走っている内にルイズの部屋の前にたどり着いてしまう。

実際に寮の外、空中にいくつかの気配が『飛んで』いるのが感じられたから、魔法で空を飛ぶ事が出来るのであろうと言う納得は得られたが、早急に目で見て肌で感じる必要性がある事には違いない。

「空を飛ぶ」事。それ自体は攻撃ではないし、イングリッド自身の経験から言っても、「空を飛ぶ」事、それ自体は珍しいモノではない。わりと普通にみなさん空を飛んでいらつしやる。

イングリッド自身も長距離は難しいが「それなりに飛ぶ」事、それ自体は可能だ。能力制限無しでよければ、太平洋を一跨ぎ、なんていう事も「不可能ではない」。そんな事をすれば確実にNORADを混乱させるため、余程の緊急事態が無い限りは禁じ手だが。

しかし「空を飛ぶ」事を行いつつ何が出来るか、何をする事が出来るかを理解し、確認する優先度は非常に高い。それにのみ拘泥して、他の事柄から目をそらすのは無論、危険であるが、本当に飛んでいるモノがいるらしい事実がそこにあるようだというなら、早く確認したいという思いは強い。

ただ、現状に於いての優先事項はもう一つある。しかもそれが最上位であるから、その目的を達するべく、ルイズの部屋に入る。

ルイズを起こすのである。

自身の背後で音も無く閉まりつつある扉を感じつつイングリッドは、ベットに近寄り、ルイズを見下ろす。見ているほうも幸せになれるような表情が微笑ましい。これでよだれに塗れているとかあれば酷く興ざめであろうが、幸いにもそういう状況にはなっていない。ひどく自由な体勢で布団の上に身体を投げ出してなお、育ちのよさがにじみ出ているように思えるのは身びいきか。みだれたシーツや布団からはみ出した両腕も微笑ましく見える。

いつの間にか自身の表情が随分緩んでいることに気が付いて、イングリッドは小さく咳払いをして、自身をごまかす。詮方ない行為をし

た自身を恥じつつ、穏やかな寝息を立てるルイズに顔を近づける。

どうやって起こそうかと思っている内に、イングリッドの気配に気が付いたのか、ルイズ自身が自分の意志で目を覚ましてしまった。鳶色の瞳をゆっくりとまぶたの間から表して、イングリッドを見上げるルイズ。

イングリッドが自分自身の意思でルイズを起こすことが出来なかった。そのことに予想外の残念を感じた自身の気持ちに気が付いて、なぜか頬が紅潮させる。自分はそういった類の危ない趣味の人間であったのかと、妙な混乱に包まれて身体を硬直させてしまった。

ルイズに覆いかぶさるように身体を傾げるイングリッドに、緩やかに起き上がったルイズは、なぜかそのままイングリッドに抱きついて、その顔を、その人並み程度にはあるとイングリッドが自己採点している胸にうずめた。

イングリッドは自身の顔がすさまじい勢いで熱くなるのが理解できた。頭から蒸気が噴出しそうだった。

ルイズがイングリッドの胸の中でもぞもぞと顔を振って口を動かす。そのこそばゆさにイングリッドの口がおかしな形に歪む。目じりからなぜか涙が出そうだった。イングリッドはルイズを抱きしめようと両腕をのろのろと持ち上げて背中に回そうとする。

「ちい姉さま……おはよう。今日の朝食は何かしら……」

一種の幸福感にも似た感情に包まれていたイングリッドはその言葉聞いて、意味を咀嚼し、そしてその言葉の中に自身の知らない人物の固有名称が含まれている事に気が付いて、急速に気持ちが醒めるのがわかった。一瞬の激情で、背中に回そうと上げた腕に力をこめて、ルイズを突き飛ばしそうになったが、その激情とは別の部分で醒めたイングリッドの心が、そのようなことをすれば『主』を傷つけてしまうと強く警告を発した。

結局、一瞬の激情に身を震わせはしたがイングリッドは、努力してそれを収めると、目を閉じて深呼吸をした。その鼻にルイズの頭から発せられる香りが入ると、またもや急激な幸福感がよみがえって、そういう自身の気持ちの激しい変遷に大いに戸惑ってしまう。

イングリッドは努力して混乱を収め、ベットの上で膝をついて腰を落とし、無理やりに——だが優しく、ルイズを引き剥がして視線を顔に合わせた。

「我が主ルイズよ。朝であるぞ」

しよぼしよぼとした目を瞬かせて「ぼけっ」とでも音のしそうな仕草で首を傾げるルイズは可愛い。

イングリッドは、なんでかルイズに対する感情が術からず自動補正されているような気がしたが、あくまで気のせいだと、首を振って無理やりごまかす。

その間によく覚醒状態になったのか、ルイズはベットの上で大きく伸びをした。

「……イングリッド……おはよう。ちゃんとおこしてくれたのね……」

「ほにゃほにゃ」と顔を歪めて両手でぐりぐりと目をこする。先ほどの眩きは無意識であったのか、はたまた夢の続きであったのか。ルイズ自身は気が付いていないように見える。

その仕草もまた……と思考が揺らぐ様に気が付いてイングリッドは大きく首を振った。意味不明な自身の感情の揺らぎに大きな動揺を抱えたままベットから飛びのき、クローゼットの方向に後ずさる。

なんじゃ。なんじゃこの感情は……！

それに気が付かないルイズも、ネグリジエのすそを無意識に引つ張りながら、ベットの天蓋を支える柱に手をかけて、ゆっくりとベットから降りる。

その柱にかけられたハンガーを手にして、ネグリジエを脱ごうとし、当然のことながらハンガーとそれを握った手が邪魔でネグリジエを脱げないでいるが、ソレを理解出来ていないように首を捻る。何度かそのまま脱ぐ努力を繰り返して、ハツとした表情でハンガーに視線を向けて、次いで自身の身体に目を落とし、何かに気が付いてプル震えながら顔をゆっくりと動かして視線を這わせ、室内を見回す。そうしてルイズは、ついにイングリッドの姿を見つけた。

クローゼットを背に身体を預けたイングリッドは「ぼかん」という

音の聞こえそうな表情でルイズを見つめ返し、次いでルイズと視線が合ったことに気が付いて首を捻り、最後にルイズの行動に合点が行って、その顔をじわじわと歪めていった。

それを見つめるルイズの顔を朱というにはなお赤い色が染め上げて、ついにその口から声にならない怒声突き抜けた。

「……………」

両手を大きく振り回して何かを叫ぶ。当然、手にしたハンガーが猛烈な勢いで空中を渡り、イングリッドを襲う。イングリッドは素早く身を翻し、しかし避けてしまつては投げられたハンガーそのものか、はたまたハンガーの軌道の先にあるクローゼットか、或いはその両方に甚大な被害が出る可能性に気が付いて、身を引きつつ左手を突き出してハンガーをキャッチするという妙な格好を取る羽目になった。

風車をつけたベルトを巻いていれば、次にジャンプして変身するのだと言われても信じてしまいそうな珍妙なポーズだった。その体勢をとるために酷く身体が捻れたが、幸いにしてそれにより脱臼とか阿呆な被害を自身に発生させることもなく、思ったよりも強力な投擲能力をルイズが持っている事実に感心するだけでした。

ひとしきり両手を振って落ち着いたのか、或いは疲れたのか。大きく肩を上下させて息をするルイズ。イングリッドはハンガーを壁際の床に置きつつ、我慢できずに小さく吹き出した。先程とは明らかに違う種類の涙が自分の瞳に表れた事に気が付いて更に大きく表情を歪める。

そのイングリッドの様子を見たルイズが再沸騰しそうな状況を知った彼女は瞬間焦って、一瞬にしてルイズに近寄り、その両肩に手を置いた。

混乱が収まりきらない内にルイズの妙な仕草を目にしたイングリッドは冷静な判断を欠いて、そのまま混乱状態を継続してしまつた。一瞬が生死を分ける闘争の場に身をおき続けたイングリッドとしては極めて致命的な状況である。そのため、何か考えがある訳でもなく、反射的にルイズに接近しただけであつたが、風を巻き起こして突然自分の前に現れたイングリッドに驚いて、呆けたルイズは両手を

胸の前に置いてびくりと身体を震わせる。

無表情にそれを見つめたイングリッドはだが次の瞬間に、ルイズが先程見せた痴態を思い出して抑えきれずにまた吹き出してしまう。

目の前でイングリッドの表情の変化を見せ付けられたうえにイングリッドの口から跳んだ唾を浴びせられて、ルイズは再度、身体を震わせる。だが、それを遮るように「ほんぽんっ」とばかりに頭を撫でられて、顔に付いた水滴をぬぐうイングリッドの左手を目で追うと、刹那に震えを収めて顔を上げる。

「とりあえず、着替えかや。ルイズよ」

柔らかな笑みを浮かべたイングリッドの表情を浴びせられて毒気が抜かれたルイズは、はあと息を吐いて、いつの間にか緊張で固まっていた身体から力を抜いた。

「そうね……」

ゆるゆると今度こそネグリジエを脱ぐルイズ。

「朝から疲れたわ……今日は休もうかしら……」

クローゼットの前で片膝をついて引き出しを開け、その中から目的のものを取り出すイングリッドが呆れたように声を上げる。

「馬鹿なことはいわさるなルイズよ」

パンティとキャミソールを手に取り、それを片手にまとめて、先程脇に避けたハンガーを持ち、ルイズに近寄る。

ルイズがパンティとキャミソールを手に取り、代わりにネグリジエを手渡した。それを受け取ったイングリッドは、ハンガーにネグリジエをかけ、昨夜見た、ベットの柱についているフックにそれをかけた。

パンティを履きながらルイズはテーブルの脇にあっただはずの籠が無い事に気が付いた。イングリッドに問いかける。

「洗濯は済んだのかしら」

クローゼットから制服のブラウスとスカートを取り出していたイングリッドはぎくりと肩を震わせる。キャミソールを頭から被ってもぞもぞしていたルイズはそれに気が付かない。

「あー、そのな、ルイズよ」

イングリッドのすまなさそうなしおらしい声に疑問符をつけながら、ルイズはキャミソールから頭を出して手を伸ばす。

まずイングリッドはスカートを手渡し、それを受け取ったルイズが足を上げて通す。

「メイドに取り上げられてしまったわ」

イングリッドは、ばつが悪そうに視線をルイズから逸らせて鼻を掻く。

スカートの位置を合わせて、留め具をかけ、スカートの腹回りを調整する。

「???どういふこと」

問題が無い事を確認したルイズが再度手を伸ばしたので、イングリッドはブラウスを手渡す。

「うむ。素人に洗濯されると迷惑だから、勝手なことをするなど怒られたわ」

手ぶらになったイングリッドがテーブルを回り込んでベットに向かう。柱のフックにかけられたマントを手に取る。

「えっ！そんなことを言われたの！」

ルイズはブラウスのボタンを留める手が止まり、若干の怒りを表してイングリッドに振り返る。

イングリッドは慌てて手を振ってそれを否定する。

「違うのじゃルイズよ。そんなに強く叱責されたわけではない」

その言葉に首を傾げながらブラウスのボタンを留める作業を再開するルイズの背に回って、イングリッドはマントをルイズの小さな、しかし、妙にがちりした肩にかける。

「まあしかし、道理じやの。使用人の仕事を奪うわけにもいくまい」

イングリッドに手伝ってもらいながらマントを肩に固定するルイズ。その顔には不満が表れていた。

「……場所を借りて、洗濯すれば良いじゃない」

その言葉に疑問を浮かべるイングリッド。小さく首を傾げて一つ、頷くと、勉強机の上にある杖を手にする。

その姿をルイズは腰に手をあてたまま見つめる。その表情は不満

がありありと浮かんでいる。

「ルイズや。洗濯はどこでやるか知っておるかや」

イングリッドはルイズに杖を差し出したが彼女はその杖を手にする事もなく、不満顔のまま首を捻る。杖を持った腕が行き場をなくして宙を彷徨う。

ルイズは自分が生まれて、それから短くは無い期間を過ごした自分の自宅とそこにある設備を思い出してた。

……そうやって学院の施設を思い出さない辺りに、使用人の仕事に対する興味の無さ、無理解があるところに気が付かない。

「ランドリーでしょ」

イングリッドがその答えに呆れたように鼻を鳴らした。

「なんじゃ。知っておったのか」

その言葉に瞬間で激昂して、勢い良くイングリッドの持った杖をつかみ引き寄せようとして……ルイズは目的を果たす事が出来なかった。微動だにしない。綱引き状態にすらならなくて、本当の意味で真実、微動だにしない。そのことに驚愕する。まるで彫像の腕を引っ張っているようだった。

その姿にイングリッドは内心、忙しい人じやのなどと溜息を吐いたりする。

「洗濯物がどれぐらいあるか知っておるのかや？」

ルイズは腰を落として必死な表情で杖を引っ張るが、まったくその努力が実りそうにない。彫像の腕どころか実家の庭に置いてある大きな岩を引っ張っている気分になるルイズ。それを表情を変えぬまま見つめるイングリッド。

「朝と……夕方に……」

その言葉にかぶせるように呆れた声がイングリッドの口から漏れた。

「なんじゃ。知ってはおらなんだか」

イングリッドが力を緩める気配を見せたため、慌てて引っ張るのをやめるルイズ。そのまま力いっぱい引っ張っていたら、ルイズの身体は壁まで吹っ飛んでいただろうと思える。

「大量じゃよ。大量にあるんじゃ。24時間、四六時中じゃ」

ルイズは微妙に疲れた表情を顔に浮かべながら杖を受け取って、スカートに作りつけられたホルスターに杖を収め、表情に疑問符を重ねてイングリッドを見つめる。

「え？私たち、そんなに洗濯物を出さないわよ？」

息を吐いて、眼を伏せたイングリッドは振り返り、微かに目を開いて再度机の上に視線を彷徨わせる。

「掃除、洗濯、それをするのにメイドたちはスツパで……裸で作業するのかえ？」

ルイズは「すつぱ」と言う言葉の意味が判らなかつたが、言い直した言葉で、それが裸を意味する彼女の「方言」だと知った。

「でも……着替えぐらい」

イングリッドはその言葉も遮って自身の言葉をかぶせる。

「どれだけ広いとおもつとるんじゃ。正直我も全体はしらんが……」

何かを見つけてそれを手に取るイングリッド。

「服も相当汚れようぞ」

その言葉にルイズは頭を捻る。

「でも、そのまま掃除をするんでしょ」

大きく溜息を吐き出された。イングリッドがやれやれとばかりに首を振る。

「汚れた服のまま自分の部屋の掃除をされたいんか、主は」

その言葉にようやく僅かばかりの理解をする。

イングリッドはルイズの背に回る。

「1部屋ごとに着替えんといかんの。1部屋1部屋じゃ」

首に手を回し、ペンタグラムをあしらったネックレスを首にかけて整える。後ろから回されたイングリッドの手が意図せず、肌に触れるたびに、妙な熱が自分の頬に宿ることにルイズは気が付いた。

「シーツとかも代えんといかんしの。掃除するにも雑巾を使うであろ」

イングリッドはルイズの正面に回りこんで、しゃがみこみスカートを整える。その姿を正視出来ずにルイズは視線を逸らしてしまう。

「個室だけでないの。教室も掃除するであろうし……」

イングリッドが立ち上がって皺が寄っているブラウスを綺麗に整える。

「食堂も掃除するであろ」

ルイズは巨大で豪華な食堂の内部を思い浮かべて身震いする。どうやって掃除すれば良いのか見当も付かない。

イングリッドがブラウスの袖を引っ張り形を整える。

「他にも掃除するところはいっぱいである」

ルイズのブラウスのすそを引っ張り、少し戻して形を整えるイングリッド。やたらと手馴れている風だった。

「テーブルクロスとか、カーテンとか、ハンカチに、ナプキンと、マットとか……まあ、洗うべきものは幾らでもあるの」

ルイズの豊かで美しい薄桃色の金髪を肩からはらい、手で素早く梳いて、整えるイングリッド。なぜかイングリッドの手がものすごく熱くなっていると錯覚したルイズだった。

手で梳いただけなのに、見事に決まった髪の毛に気がつけない。湯気が立ち上っているイングリッドの手もルイズは見逃してしまった。

「無論、彼女、彼らの下着等も」

イングリッドは1度、僅かばかりの距離を取って正対し、ゆっくりとルイズの周りをぐるりと回る。視線をルイズの頭の先端から足のつま先まで這わせる。

「戦場じゃよ。24時間の」

イングリッドがルイズの正面に戻って、再度、上から下まで視線を撫で付ける。

「んなどころに素人が紛れ込んで……」

イングリッドは満足げに頷き、ルイズの肩を叩いた。

「まっ、こんなところじゃろ。準備は完了じゃ」

四六時中ひきも切らない洗濯物の山が持ち込まれるランドリーで忙しく立ち働く使用人たち。その片隅で、1人が付き切りでイングリッドに洗濯のやり方を教える。ルイズの想像する前提としてイングリッドが洗濯のやり方を一切知らないという形になっているが、こ

んなに偉そうな少女が、その道のプロフェッショナルたる使用人たちの手を借りずに手早く洗濯を済ます姿が想像もつかない。

ついでに考えてみれば、この少女が箒やちりとりを持って部屋掃除したり、バケツを担いだり雑巾を絞る姿は生まれ変わってもありえなさそうだった。

ルイズは肩を落として大きく溜息を吐いた。

「じゃま、ね」

僅かに傾いだ顔に、一瞬切なそうな表情を見せて、しかし、イングリッドも頷く。

「そうじゃろ」

息を吐いて、両手を垂らし、肩をならすルイズ。その姿をイングリッドは苦笑いで追う。

ルイズは朝食の後に慌てる事が無いように、今のうちに勉強道具を整えようと、机に近づき視線を左右に動かす。

「そうすると……どうしようかしら」

目当てのものが見つからないことに僅かに焦りを深めながら、ルイズは呟く。

「イングリッドの仕事」

ルイズは首を傾げて探し物のありかを思い出そうとする。

イングリッドはばつが悪そうに頭を掻く。足で床をけりそうな勢いだ。

「ああー……、我は役立たずじゃの……」

ルイズは顎に手を添えてくすりと笑う。

「服を整えてくれたじゃない」

イングリッドは肩を落とした。

「それじゃあ鏡じゃ……」

ルイズは自分の探し物の行方を思い出して小さく嘆息した。肩を竦めてイングリッドのほうへ振り返る。

「そうね、私の側で私を慰めてくれれば良いわ」

イングリッドは背を丸めた。

「それじゃあペットじゃ……」

くすくす笑いながらイングリッドの右腕をつかんで引き寄せて、しおらしく下を向いた頭を右手で「いいこいいこ」するように撫でた。

「我はごくつぶしじゃ……」

今にも泣き出しそうなイングリッドのしよぼくれた声に、ルイズは遂にその頭を抱え込んで胸に掻き抱き、抱きしめた。

ルイズはイングリッドの背中を撫でつけながら、今までの短い人生の中で感じたことのない感覚に包まれていた。

かわいい……かわいいわイングリッド！

ZEROのルイズ（3）

ぶすりとして不機嫌を隠そうともしないイングリッドと、それに微妙な笑顔を向けて妙にうきうきした気分のルイズは、ようやくのことで部屋を出た。

扉が完全に閉まったのを確認して、ルイズが扉のあった部分、その向かって右側の端辺りを撫でると、隠された鍵穴が現れる。

彼女がポケットから取り出した鍵をその穴に差し込んで扉を施錠する。かなり大げさな音を立てて錠がかかる音が廊下に鳴り響く。

その音に反応した——待ち構えていたとしか思えないタイミンで隣の部屋で扉が開き始めたのを見て、機嫌よくイングリッドの右腕をつかみ、足を出しかけたルイズの表情にさつと暗い影がよぎる。

不機嫌な表情の奥で、常と変わらない思慮深さを隠し、周囲に強い警戒を配っていたイングリッドは素早く扉とルイズの間に立ちふさがった。

いつもの「普段の生活」通り、周囲の気配を探っていたイングリッドの予想した範囲内の行動が見られたから、想定通りに彼女は行動していた。その想定があったがために彼女は、その方向に立ち、ルイズをカバーできる立ち位置を取っていたのだ。

そんなイングリッドの行動を理解出来ないルイズは、その予想もしていなかった彼女の動きを目で追って眉を上げる。

イングリッドは一瞬で王妃を守る騎士のような雰囲気を出して自分の視界を遮ったと、ルイズは感じた。

開ききった扉から、若干の時間を置いてもったいぶったようにゆつくりと長身の女性が現れた。

戦場に踊る様こそが美しいと思わせる、燃え上がるような見事な赤に染まった髪を、自然に垂らしているよう。そうでありながら実のところ、その髪の形状は相当な時間をかけて拘ったセットが施されているのがイングリッドには理解出来る。かなりの手間隙をかけているのだろうかと思えた。

うまく横に広げられて形を崩さない髪は、ボリュウム感を前面に押し出して、彼女の存在感を強くアピールしている。彼女の髪が視界の片隅に入るだけであっても、周囲の人間は、ひとまず彼女に視線を向けない訳には行かない。そう想像させるほどの存在感がある。

一見したところ、その背は日本人あたりの成人男性の平均身長に近いと思われ、女性としては長身の部類に入るものであるのがわかる。慎ましやかなルイズとソレよりはボリュウム感がある——おもに筋肉的な意味で、女性としては全体的に一回り大きなシルエットを服装でごまかしているイングリッドも、身長的にはルイズと殆ど変わらないのだ。ルイズが細身なのだと言おうか、イングリッドが太つて……がっちりしていると言おうか迷うところではあるが、それはともかくとして、扉の影から全身を露にした女性は、こちらの2人を軽々と見下ろしてしまえる身長であった。それは相当に背が高い事実を示している。

ましてやイングリッドの予想（随分と揺らいでいるが）するところの15〜19世紀の時代に近しい世界である。食糧事情や栄養事情が『現代』社会並みかそれ以上であるというのであればともかく、そういう時代背景の中では彼女の存在は、唯身長が高いというだけで恐ろしく目を引くに違いない。

情報量がまったく少なく判断材料に乏しい現状では無論、そういう可能性も留意する。食糧事情と言うのは現地の治安情勢に直結する場合が多いので、ルイズを護衛する上では重要な判断材料になるのだ。確認をしなければならぬ事実が増え続けて一向に解決しない事にイングリッドは溜息を吐きたくなる。

出るところは出て引つ込むところは引つ込む彼女のプロポーションは、イングリッドの彼女自身気が付かない無意識の劣等感を刺激するものであった。だが、彼女の意識は、そのプロポーションが極めて強い意思をこめて創り上げられ、守られてきた後天的な努力の結果である事を確信させる。そこに、慎重に考え抜かれた配慮で選び抜かれた化粧水が、ぎりぎり悪趣味にならない量で散布されているらしく、そこから発せられる香りがイングリッドの鼻腔をくすぐる。彼女の

肢体からうける視覚的刺激をうまく強調する絶妙なバランスが好ましいとすら思えた。

自身も同姓であるイングリッドの思考には欠片も影響を与えない感覚だったが、彼女が傾けているであろうそれらの努力が結実して、男性であれば飛びつきたくなくなるであろうほどの色気が『自然』と発散されている。

コーカソイドに特有の彫りが深い顔は絶妙なバランスを保つてくどいと思える感覚の一手手前を揺らめいていて、それが有効に作用して印象的な美貌を彼女の顔に与えている。一度見たらなかなか忘れられないであろう陰影を持ったその形状は、女性が女性というあり方そのものを武器とする場合、強力な攻撃力を保障するものだった。

彼女の胸が、そのバランスを崩している。

全体のプロポーションとしては芸術的なバランスを保っている中で、大きく張り出したその胸は、せっかく美しいと思わせるスタイルを崩す余計な付加物と思える。だが、それが人間の女性に配されたモノだと考えると別の感想も持たざるを得ない。絶妙なバランスでプロポーションを崩す二つの脂肪の塊は、そうであるが故に逆に彼女の肢体を強く意識させる。

ルイズの身に着けている制服とデザインが変わらないはずのブラウスは上から1番目と2番目のボタンが外されていて、胸元を覗かせている。何かの意図を持って外されているというより、物理的容量の限界が故にしかたなく外されていると考えたほうが自然とも思える。その本来の役割を放棄した2つのボタンは、使用目的通りの利用が行われた場合、その存在、寿命が極端に短いだろうことが容易く予想される。

そしてそれらすべての感想を覆い尽くしてしまうような、彼女の肌を彩る色。

見事な褐色であった。

『現代』社会であればそれを『健康的』と言うは容易い。だが、どこに近しいか判らないにせよ、封建的雰囲気の色濃く残る古典的、あるいは保守的とも言い換えて良い雰囲気濃厚に漂わせるこの世界だ。

肌の色に『特徴』がある。唯それだけで強力な武器にも、逆に、致命的な弱点にもなりうる、隠し様も無い『特異性』を否が応にも視覚的に強調していた。

すべての面に於いてルイズともイングリッドとも対照的な雰囲気であるが、そのどこからも滲んであふれ出す、彼女が望んで隠したいであろう努力の片鱗がイングリッドに取っては好意的に思えた。この一瞬の邂逅で、その存在がルイズにとってどの方向性にあつたとしても、他のすべてをとりあえず置いても認めるべき好ましい結果の発露であると断じた。

その彼女は優雅な仕草でゆっくりとこちらに振り向き、芝居臭い仕草で髪をかき上げてから見下ろす視線で此方を捕らえ、かすかに困惑を表情に表すと、次いで合点が言つたようにイングリッドの上を飛び越えて後ろに視線を移し、ニヤリと笑いかけた。

「ルイズ、おはよう」

その語尾に音符でも飛び跳ねそうな勢いで、想像よりもずっと深みのある声質の音が紡がれた。

完全にその存在を無視されたイングリッドであつたが、緊張感を緩めない。ルイズから発散される晴れやかならぬ感情の方向性が彼女の態度のどこに向けられているか判断が付かない以上、第一印象はともかくとしてイングリッドにはこの女性は警戒すべき対象である。

イングリッドが醸し出すその雰囲気を感じ取れなかつたルイズは、キュルケの視線を真正面から受け止めて、顔を大きく歪めた。表情には隠せない嫌悪感がある。

「おはよう……キュルケ」

ルイズがファースト・ネームと思しき固有名詞と推定される言葉を出した事で、朝に感じたのと同じ種類の痛みが胸を突く感触に気が付いたイングリッド。だがそれに関わることなく、ルイズの前面を守る。

僅かに漏れ出る、この場所には似つかわしくない形の緊張感に当てられて彼女、キュルケは、小さく首を傾げて一瞬、視線をイングリツ

ドに移しすぐさまルイズに戻す。

「あなたの呼び出した使い魔って、これ……？」

その言葉に含まれた予想外に多くの感情に、イングリッドはやや虚を突かれる。

ただ、その言葉の表面上にあるニュアンスだけ取ってみれば、ルイズに対する侮辱を隠さないものであったから、短い交流の中であっても随分と感情豊かであることが知れた、自らの主がどうという反応を示すであろうか容易く想像出来るイングリッドは刹那、慌てた。

予想通りに暗い感情を強く印象付ける雰囲気を纏ったルイズが、イングリッドの後ろで僅かに身を振った。

「……そうよ」

その言葉に籠められた意識もまた複雑であると気が付く。「望まずそうになってしまった」と言う意味の「そうよ」と、唯単純に肯定を指し示す「そのとおりよ」と言う意味の「そうよ」が微妙に交じり合っ
て溶けた、切り離しがたい意識の混沌が湧き出した「そうよ」であ
った。

「望まずそうになってしまった」と言う意識が透けた事に、イングリッ
ドは切ない気持ちに胸に広がるのを自覚した。

「ふーん。ほんとに、人間？なのねえ。すごいじゃない？」

ますます微妙な意識と感情が混濁するキュルケの言葉に、イング
リッドは強く警戒する。何を知っておるんじゃないやっは……！

キュルケの言葉に感情を高ぶらせて、眼前の背中を避けて前に出よ
うとするルイズに、イングリッドは立ち塞がって距離を保つ。感情の
起伏を身に纏って、幾度か左右にステップを踏んで前に出ようとした
ルイズだったが、イングリッドの背中にことごとく止められてしま
い、不満げな息をついて引き下がった。イングリッドの後ろで腰に手
をやって溜息を吐いている。

常なるルイズであるならば、イングリッドの身体を突き飛ばしてで
も前に出たであろう。そうしなかったのは、無意識な感情であった
が、ルイズがイングリッドをそれなり以上に信頼している部分が大き
かった。イングリッドがこういう場でふざけたり、意味も無く主たる

ルイズの邪魔をしないであろうという予測があった。何らかの勘違いである可能性は残っているが、イングリッドが取る今の行動がルイズに対して無意味な物では無いだろうという推測があったのだ。だからルイズは、イングリッドの背中に自身の行動を止められて、不満はあっても引き下がるのを選んだのだ。

そのイングリッドとルイズの仕草を認めて、ごく僅かの笑みを向けてキュルケは視線をルイズに戻す。

本当にごく僅かの間ではあったが、疑いようもなく晴れやかな笑みであった。その意図の不確かさにイングリッドは首を捻る。

「うん。『サモン・サーヴァント』で『人間』を呼んじやうなんてねえ……。あなたらしいと思うわ。人と違うことをやるにつけては、思わぬ才能を発揮するわよね。あなた」

小さく肩をすくめて、キュルケは明らかに意識して強めの感情を乗せて言葉を続けた。

「……さすがはゼロのルイズ！」

どこか何うような表情を片隅に乗せた、妙な笑みを張り付かせて、胸をそらして哄うキュルケ。複雑怪奇な感情が絡み合うその雰囲気の中身を徐々に察して、僅かながら緊張感が薄れるイングリッド。

キュルケの発した言葉の最後の部分を捉えて、見事な白磁を見せていたルイズの表情が強い感情に染まってさつと朱が入る。

「ううううううるさいわ、ねえ……！」

ルイズは強く両腕の拳を握り締めて唸る。

両者の言葉にまったく持って複雑な感情が入り混じっている事実、イングリッドはウンザリする。しかもそれらの感情がイングリッドを境にして互いに届いていない。微妙な部分ですれ違っている。随分と面倒なコミュニケーションの取り方をしているものだとイングリッドは思う。

黙っていれば胡散臭い限りだが、口を開けばやや正直すぎる嫌いのがある、会話の場を持つに当たっては、その心の奥底にある澱みを表に出そうともしない部分に目を瞑る限り、割かし素直で、晴れやかな頭……意識のありようを持っていたコルベールをイングリッドは思い

出す。ただ会話の相手とするのであれば、あちらのほうが気が楽であろう。

「ふふーん」とでも声を出しそうな、胸をそらしたままの態度で、キュルケは笑みを深める。相変わらず無視されているようでありながら、彼女の意識がちらちらとイングリッドに向けられている。イングリッドはソレに気が付いていたが、気が付いているという事をおくびも出さないで、無表情にキュルケを見上げる。

ただ、キュルケとの距離が近いのが困りものである。キュルケの立ち位置はルイズと会話をする上では極常識的な距離と言える。しかしイングリッドはその空間に望んで身を割り込ませたのだ。よってキュルケの表情を伺うにはかなりの角度で顔を挙げておかなくてはいけない。キュルケの鼻の中が見えそう。いや、実際に見えてしまう。

鼻毛も赤い色をしているんだなど、どうでもいいことを心の片隅で思ってしまう。

「あたしもね、ちゃーんと使い魔を召喚したのよ！どつかの誰かさんとは違ってね、一発よ。一発！」

キュルケが口にするだけで随分と性的雰囲気纏わり付いてしまふ、言葉の最後の部分を捉えて苦笑いして、イングリッドはルイズの感情の動き、気配に注目する。幸いな事に思ったよりも平坦で、呆れすら混じっている様だった。

イングリッドは知らず、安堵の息を吐く。

キュルケが一瞬眉を跳ね上げるが、次の瞬間にはそれを振り払って微笑を表情に戻し、ルイズに挑発的な視線を送る。

「使い魔ってのはこういうのよねー。やっぱり。

おいでフレイムー！」

勝ち誇った雰囲気隠す事も無く、キュルケが何かを呼ぶ。固有名詞であるらしいその言葉と、その前の文脈からしてその『フレイム』は、彼女の使役する使い魔の名であろうとイングリッドは推測する。

キュルケの言葉に「のっしのっし」と爬虫類独特の骨格を見せた巨大なトカゲモドキが現れた。随分とイングリッドの中にある力に近

い、しかし根本的なところで大きな違いを示す力を内包した巨大な生物は、顎から腹、尻尾の下にかけて、随分と柔らかそうな白い色を見せる以外は、キュルケの髪の毛に負けず劣らない見事な赤を見せて、キュルケの前に鎮座する。

これまたキュルケの撒き散らす色気にも負けず劣らず濃い熱気が、むうんと広い廊下を覆う。狭い場所でこれを浴びれば一瞬にしてサウナだろう。通気に関して相当な配慮を見せる寮塔の構造が幸いした。居室のみならず、廊下についてもかなりの工夫がなされていると思しき造りをしているがために、フレイルムから噴出している熱気は、湧き出でる側からどこかへと流れ去って行く。

「ほう……いー」

キュルケと相対して初めての声がイングリッドの口から漏れた。キュルケもルイズも驚く。その言葉は明らかに隠せない感嘆の情に彩られていたからだ。

ぐぐいつとルイズの不機嫌指数が急上昇する。キュルケはそれに気が付いて笑みを深めるが、その眼には何故か焦りが混じる。

「どおよ、このヒトカゲ。すごいでしょ。あなた、見るのはじめてかしら？」

初めて明確な意思を言葉と共にイングリッドに視線を向けたキュルケに小さく頷いて、イングリッドは上半身を乗り出してフレイルムを見下ろした。好奇心が隠されなのまま、その背中に溢れて見える。

ますます不機嫌さを募らせるルイズと冷や汗をたらすキュルケ、それに気が付かずに首を捻るイングリッド。

「ほう……うむ。こやつ、なかなかのモンじゃな」

イングリッドはフレイルムの中に太陽の力を幻視した。地球の奥底に眠るマグマ、いやマントルが持つ力である。

惑星が地殻の下に持ち合わせる熱量は、惑星がその存在を成立させた時期に発生させた衝突によって発生する摩擦熱の残滓である。

しかし鉄等の十分な重さを持った物質の液化化した流動エネルギーは惑星が十分な大きさと、恒星からの必要な軌道距離を取った場合、恒星、つまり太陽の引力を受けて流動する。最初は過去の摩擦熱

のみであった力の塊は原初がそうであっても徐々に太陽の力が混ざり合い混濁する。そうして大地には太陽の力が蓄えられて満ち溢れる。

それで全ての熱量が補給される訳では無く、実際の熱量の大半は惑星の『核』自体に内包された放射性情質の崩壊熱が大半を担うのだが『地球型惑星』の内部に太陽エネルギーが様々な理由で交じり合っていること自体には間違いが無い。

そういった類の濃厚な力がトカゲモドキの全身から発せられていた。大本の出自からしてしょうがないノイズもまた強く混ざり合うが、全体としてイングリッドに好ましい力が彼女の肌を撫でる。

ただの『火』であり、ただの『炎』であってもイングリッドには大好物な「力」なのだ。イングリッドという存在の力の根源は太陽であり惑星、というか、地球そのものである。イングリッドの存在を規定するのが地球なのではあるが、イングリッドの振るう力は太陽に求められている。太陽とは、そも、炎の塊なのである。根源的に核融合反応の残滓としての『炎』は実際に地上に存在する『炎』とはごくごく僅かな人工的行為の結果として得られる例外を除けば、かすることも無く異なる存在ではあるのだが……「炎」を好むイングリッドのあり方がそれらを嫌うことは無い。

好奇心を全開にしてフレイムを見やるイングリッドの態度を誤解して、ルイズが感情を沸騰させる。明らかに予想していなかった展開に驚いて、キュルケが焦る。

「あああああなた、あなた……イングリッド！あなたねえ!!」

イングリッドの背に飛び掛らんばかりに感情を高めたルイズの視線の前で、フレイムがイングリッドに親愛の情を見せるようにひっくり返って腹を見せた。

その展開もまた予想外で、キュルケもルイズも驚いて身体を硬直させる。

にんまりと笑ったイングリッドがフレイムの前に腰を落として、躊躇いなくその腹を触る。

「ほうほう。予想通りにやわらかいの。」

んふ。気持ち良い肌触りじゃ。主はめんこいの」

イングリッドの手の動きにあわせて目を細めるフレイムの姿に、キュルケは大いにうろたえる。あっけに取られたルイズはどうして良いかわからずにその一人と一匹を眺める。

良く育ったトラ程もある大きな身体が、良く人になれた猫のように身をよじるその様は客観的に言って、酷く滑稽だった。その、自身の視覚情報に入り込む情景が、自身の思考に馴染んで思考が理解に至るとルイズはたまらず噴出してしまった。

「あっはっは。キュルケ！ずいぶんと手なずけたのね。短い間にご苦労様だわ！」

腹を撫でるイングリッドの手の動きに合わせて小さな火炎を噴出すフレイムの姿に、イングリッドも目を細める。驚愕に固まるキュルケを見上げてイングリッドは微笑んだ。

「よい使い魔を得たようじゃの」

その言葉にカチンと表情を歪めたルイズと、小さく笑みを浮かべるキュルケ。

「いいでしょ」

偉そうに顎を突き出して頷くキュルケ。イングリッドはそれに頷き返す。

「んむ。かわいいの」

そういう風に言われるとは思っていなかったキュルケは僅かに目を見開き、ルイズは小さく嗤う。随分と忙しい感情の変遷をイングリッドは自身の背に感じていた。

それには構わず、イングリッドはキュルケに問いかける。

「傍にあって熱くはないのかや」

その言い回しに違和感を覚えつつ、キュルケは頷いて答えた。

「そうね、私にはまだ涼しいぐらいよ」

「で、あろうな」とばかりに納得して頷くイングリッド。その姿に何かを感じたキュルケだが、何かを思う前にルイズの声に思考を遮られる。

「ね、これってさ……えーと」

ルイズは額に指を当ててぐりぐりしながら、記憶を探る様に首を傾げる。

「えー……そうだ！サラマンダーって奴？」

キュルケはその言葉に胸を張る。

「ふふーん、そうよー。ヒトカゲよー。見て見て見て！この尻尾」

背を床に擦り付けて、イングリッドの手の動きに合わせて身を振り続けるトカゲモドキの大きな尻尾をキュルケは手に取る。

「どーよ、ここまで鮮やかに紅く燃え盛る炎を持った尻尾は、間違いなく火竜山脈に住むサラマンダーの証ね！ブランド物なのよっ。高級品よ。希少価値よっ！好事家に見せたところで値段なんてつけようもないのよ」

その言葉に、苦々しい顔をしたルイズだったが、彼女が声を発する前に、彼女以上に不機嫌さをその身から吹き出したイングリッドが視線を上げる。その手はサラマンダーの顎で止まっており、心地よいイングリッドの腕が急激に硬直した事に気が付いて彼は、心配そうに炎を吹き出した。

左手でその炎を「пейつ」とばかりに吹き散らしたイングリッドは、キュルケがたじろぐほどの強い視線を彼女に投げかける。

「……こやつを売っぱらうきかや、主は」

キュルケはその視線に冷や汗を流して大げさな仕草でそれを否定する。

「違うって。そんなことしないって！例よ、例えよっ！フレイムが素晴らしいって意味よ！」

強く弁解するキュルケにニヤツと表情を崩して笑うイングリッド。からかわれた事に気が付いて不機嫌に顎を引くキュルケ。そのやり取りに毒気を抜かれて呆れるルイズ。

「まあ、その……さ。素敵でしょ。フレイム。あなたも、そうおもえるでしょ。属性的にもこんなにぴったりなんだから、さ」

力ない言葉で彼を賞賛するキュルケ。

ルイズは自然と頷く。

「そうね。あんたはエレメント属性が『火』だもんね。確かにぴったり

だわ」

その言葉に僅かに機嫌を直して笑うキュルケ。何かを誤魔化すように大袈裟な仕草で頷いた。

「そうよ。この『微熱のキュルケ』。心をささやかに焦がす情熱は『微熱』。でーもね。それくらいでも、『男共』はイチコロで尻尾を振るのよ。あなたとは違うわ」

強く激しく対象を見下して地の底に埋めてスコップの背で叩いて、なお足りずに墓石でも建ててしまいたいようなニュアンスが感じられるその物言いに、かすかに疑問を持って、だがイングリッドの腕はサラマンダーの腹をさするのをやめられない。くすぐったそうに身を振るフレイム。

得意げに胸を張る彼女に対抗してルイズも負けてなるものかと、意味不明な対抗心を燃やして胸を張る。しかし、悲しいかな、哀れさを感じさせるほどにその突き出されて空間を占めるものの大きさに差がありすぎる。イングリッドはうっかり目を逸らす。それに釣られてサラマンダーも目を逸らす。キュルケも付き合ひよく目を逸らす。その事実ルイズは眼を引くつかせたが、それでもなおキュルケをねめつける。素晴らしきは我主ルイズの負けず嫌いよ。

「ああああああんたみたいの色気えさを振りまいてサルサルの群れを呼ぶほど暇してないのよ！」

にっこり笑ってキュルケはイングリッドに向き直った。まったく堪えていない。たいしたタマだ。まったくの余裕である。どこかに諦観じみた雰囲気があるがそれを隠して相手に悟らせないところも含めて『たいしたタマ』だと思う。

「ミス。出来ればあなたのお名前を教え願えないかしら」

必要とあれば必要なときに必要な態度を瞬時に切り替えられるキュルケに、イングリッドは初見の印象がそれほど間違いではなかったと思いつつ、立ち上がって相対する。

小さく頭を下げて向き直り、顔を上げて彼女の視線を受け止める。本当はもう少し距離を取りたいところだが、ルイズが後ろにいる状況ではそれどころではない。キュルケの胸の向こうに彼女の顔が辛う

じて見えるぐらいの距離感である。

これは距離が近すぎるのか、キュルケの胸が大きすぎるのか……。イングリッドが何に困っているのかを正確に把握して、キュルケが後ろに身を引き、身体を傾がせる。

安堵と感謝を乗せて、イングリッドは小さく頷く。キュルケはそのまま受け止めるには含むところの多い感情の乗った笑みを浮かべて頷き返す。

「我はイングリッドと言う。唯のイングリッドじゃ。我主、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールの使い魔をやっておる」

寂しそうな表情を浮かべてイングリッドを見上げるサラマンダーに刹那、優しい笑顔を向け、再度首を上げてキュルケを見つめる。

「フレイルム共々、精々よろしくしてくれと嬉しいの」

随分と晴れやかな笑顔で見つめ返してくるキュルケ。微かに感じていたキュルケから漂う感情の意味を確信したイングリッドに、キュルケも頷く。

「わかったわ。よろしくしてあげる」

自然な仕草で差し出された右手を握り返してもう一度、今度はイングリッドも確かな感情を表情にこめて視線を合わせる。

「そうしてくりゃれ」

その言葉にキュルケは微かな苦笑いを顔面に浮かべて、さっと手を振り払う。

燃え盛る炎を払い除ける様にして髪をかき上げ、マントを翻し、颯爽とその場を立ち去った。名残惜しそうな表情をイングリッドに送って最初はノタノタと、最後はその姿には似合わない素早い動きでサラマンダーが後を追う。トカゲモドキと言うよりトカゲそのものの素早さであったと、イングリッドはサラマンダーに対する評価を改めた。

イングリッドは心の奥底で、その評価を審議対象の棚に収めた。召喚の場に現れていた「モンスター」達が見た目以上に素早い可能性に留意する。それに伴って第一印象で感じたそれらの強さも評価済み

欄から未評価欄に移し変える。評価済み欄には自分の名前しか残っていない現実には溜息を吐きたくなる。

ルイズの身を守るためのハードルが刻一刻と高くなる事実には眩暈すら覚えてしまう。そのハードルはその内に天元突破して大気圏を突き破り、月に悶^{つか}えてしまうのではないだろうか。そんな妄想すらしてしまいうングリッドだった。そうならばハードルの支柱をよじ登って月に遊びに行けるな……。

最後に交わされた一連の感情の交換と、イングリッドの悩む姿に気が付かなかつたルイズは、拳を強く握り締めて床を踏みしめる。

「くやしいわイングリッド！なによなによなんなのよ、もう！自分がでっかいのを召喚したからって！すごいのを呼び出したからって！」怒りに酷く混乱したまま言葉を吐き散らすルイズ。すぐそこにある確かな存在を一面で否定する表現を用いながら、否定している筈のその存在に対して同意を求めるといふ無茶を仕出かした。

自身の吐き出した言葉に、その言葉を受けた対象が、悲しげで切なげな視線を言葉を吐いた自身に向けている事に気が付いてルイズは自分がなんと残酷な言葉を口にしたかを理解し、大慌てで両手を振って否定する。

「違うの！間違ったの！ゴメン！ゆるしてイングリッド！この話は無し。終わり！もうしないから！」

その言葉を受けて瞬間、満足げに頷いてニヤツつと笑いかけてルイズの右手を取るイングリッド。

彼女はルイズを引っ張って階段の方に向かう。されるがままに引きずられるルイズ。

「そうじゃの。我はペットじゃ。せいぜい主に可愛がられる様になんばる所存じゃ」

怒りとも羞恥とも取れない表情でルイズは焦って声を上げる。

「もう！そんな意地悪しないでイングリッド！違うから。本当に違うから！ごめんね。許して！二度と馬鹿なことを言わないから！あなたは私の大事な使い魔よ！」

ニヤツ！ニヤツ！ニヤツ！つと妙な声を上げながらルイズの先を

進むイングリッド。

困った表情であれこれと捲くし立てるルイズ。

階段にたどり着いて、イングリッドは手を離す。

怒りかそれに類する感情故と、それに勘違いしたルイズは更に言葉を重ねようとしてイングリッドに遮られる。

「まあまあルイズよ。階段でじゃれあっては危なくてしようがないじゃろ。落ち着くのだ」

一転、生真面目な表情を浮かべてルイズを見つめるイングリッド。しかしその眼には隠さない笑みがあった。それで自分がかかわれていたと気が付いたルイズは不機嫌指数を急上昇させたが、それにかまわず振り向いて、階段を下りていくイングリッドの姿にあっけにとられて慌てて追いつがる。

「あああああなた、あなたね、」

ルイズのほうに振り向かないままイングリッドが答える。

「イングリッドじゃ」

昨日から何度となく交わされたそのやり取りに呆れて、疲れて顔をうつむかせてしまうルイズ。

その前に立ち止まったイングリッドの背があつてぶつかる。階段の途中と言う位置関係により、危うく顔面を彼女の後頭部に激突させるところであつた。

微動だにしないその身体に壁か城砦かと思ひ見下ろすと、振り返つて此方を見上げる笑顔に自然と笑いかけてしまう。

「ん。その顔が一番じゃ。やはり我主ルイズの顔は笑顔が一番じゃな」

ルイズは呆れた笑顔を浮かべて肩を竦め、幅の広い階段でイングリッドと隣同士になつて下を指す。

『微熱のキュルケ』か。言いて妙だの」

ここに来て1年。実際にはそれを僅かに超える期間で唯の一度もこういう風に誰かと並んで歩いた経験がなかったルイズは、笑顔が張り付いたままで表情を戻せず、イングリッドの横を歩む。

昨夜、自身の後ろを子犬のようについて回るイングリッドの姿も、

それはそれでなかなか味わい深いものであったが。

「わかるの？」

うんと頷くイングリッド。その表情は予想外に真面目であり何かに悩む風でもあった。

「んむ。熱いのあれば。魔法もそれなりじゃろ」

ルイズはそれに驚く。ルイズ自身が評価するところでは、それなりと言いつつ留めるには足りない力を持つキュルケである。認めるのは悔しいが、実力は素直に賞賛する。それを「それなり」で済ますのはイングリッドがキュルケを舐めているのかイングリッドの実力が『それなり』なのか。

イングリッドが『平民』にはあつまり知れない「メイジ」の実力を肌で感じてキュルケの力を判断した異常性にルイズは気が付かない。「実力に見合った『使い魔』じゃったな」

ルイズもキュルケ本人がいない前ではあつまりとそれを認める。あれが間違いなくキュルケの使い魔としてこの上なく似合っている事に異論はない。実際にフレイムの存在に出会った以上は、もはやあれ以外の「何か」をキュルケの横に想像するのは難しい。

「そうね……コルベール先生も言っていたけど、使い魔ってメイジの実力に似合ったものが応えるの。『メイジの実力を知りたくば使い魔を見よ！』って言う言葉もあるし。」

実際には『我が使い魔を見よ！』って誰か、偉い人が言った言葉らしくて、でもその真意は良く判らないらしいけどさ」

微かな笑顔を浮かべてルイズに頷くイングリッド。

「我は……どうであろうな。ルイズよ」

それに複雑な表情を向けざるをえないルイズ。

コルベール、タバサ、キュルケは絶対的確信まで持っている訳では無いにせよ、イングリッドの実力を高く評価していた。ところが今、最も近くにいて、これからも最も近くで過ごすであろうルイズにはその評価を決めるべき、判断材料の持ち合わせが無かった。

召喚の場ではとても冷静でいられなかった上に妙な事になったル

イズである。契約の場でもとても落ち着いていられなかった。それ以外でルイズがイングリッドを見ていた期間と言うのは3日間、実際にベツトに横たわっていた期間は2日弱であったが、妙に愛らしい表情でどけなく眠る顔を見ていたばかり。そこにはイングリッドの実力を評価する材料等、欠片すら転がっていなかった。昨日の歓談であっても、イングリッドが妙に頭の回る、舌禍で対するには手ごわい相手だとルイズは理解したが、口でモンスターを撃破出来る訳では無いので、なんとも評価し辛かった。

だが、その外見を見て、多くの者が下すであろう常識的判断として、イングリッドが無力では無いにしろ、一見して歳相応の力量程度しか持たないであろうという評価を混乱させる事を彼女はいくつか見せ付けていた。

イングリッドが目を覚ましてから、極僅かな時間しか経っていない現状であっても、ルイズが眼にできた中で、実はすごい実力——少なくとも体力的な意味で、力を持っている可能性を示唆させる経験があったのだが、それも最終的結論を下すに足る量という訳では無かった。

彼女との間に交わされた会話、彼女の行った行為を注意深く観察した中に、魔法の存在を示唆させるものではなく、魔法そのものを知らなかったと思わせる片鱗すらあったから——自室の扉を開けるのに仰け反って、明かりを灯すのに感嘆していた——のだから、イングリッドが魔法能力を持たないだろうことは確実だろう。ルイズはそう判断した。

イングリッドが驚いた理由は魔法そのものよりもその結果を導くために、必要以上に凝った魔法が施されているが故の呆れという面が強かったのだが、ルイズにそういった他人の機微を理解せよというのは酷だった。イングリッドが魔法をハルケギニア的な意味での魔法と認識しない形で操る何かであった場合も、そういう判断材料しかそろわない可能性を無視してしまっている部分に関しては、いくら他人の表情を伺うことに優れた——望まず、優れてしまったとはいえ、やはりルイズの経験不足としか言えないところだろう。なにしろ彼

女はわずかに17年間の人生経験しか持つていないのだ。確実に自覚し、経験として咀嚼し、それを身に付け得た時間は更に少ないのである。

いろいろな思惑を持つて複雑な感情に縛られたコルベールは、自身が感じたイングリッドに対する評価をルイズに伝えていなかった。また、ルイズがその場から排された会話の場で交わされた中で明らかになった事実は、イングリッドから『ルイズに言うな』と釘を刺されたに等しい。よってコルベールが自身の判断のみでイングリッドをどう評価したかをルイズに言うことはありえなかった。

もつともその判断を行うにあたって彼が基準にしたのは、過去のコルベールの経験に照らしてという面が大きくて、客観的評価を示すのが難しい。困った事に彼もまた純粹な「ハルケギニア的魔法能力」をイングリッドの中から見出せなかった。これではイングリッドに実力があるのだとルイズに強弁できない。ルイズにせよ他の誰にせよ、ハルケギニア人である限りは、魔法能力があるのがそのまま個人の實力として認識されてしまう、抜きがたい常識があった。ハルケギニア人では身を置き難い客観性を持つて俯瞰した場合、その考え方は偏見とも言い換えられるものだ。コルベール自身がイングリッドと出会う直前までそうであったから、ますます難しい問題となる。イングリッドの中に『力』があり、尚且つ、それがかなりのものであるとはいつても、それはコルベールにとっては予測であっても確信にたる想像であったが、魔法以外にそういった力があることが知られていない——コルベールもイングリッドと相對するまでは知らなかった状況では、やはり説明の仕様がなない。

タバサの判断評価もコルベールに似たものである。

まづもつて、なぜタバサがイングリッドを評価する材料を持つていないのだという問題がある。複雑な事情があつてタバサがそれを説明できない以上、タバサの下したイングリッドの評価をルイズに伝える事が出来ない。そもそもルイズとタバサの接点が無い。

タバサ自身で言えば、タバサが自身で持っている経験と、それなりに付き合いが長い自身の使い魔たるシルフィードという名の風竜が、

タバサに伝えたイングリッドの評価を材料として、ある意味でコルベールよりも踏み込んだ位置でイングリッドの実力を確信に近い部分で見えていたが……現状でそれを口にする事は出来なかった。

様々な理由によりタバサはイングリッドに対して興味を抱いていたし、それが故にあの召喚の場で常のタバサとは違う思い切った態度をとっていたのだが、それはイングリッドとの接触であつてルイズとの接触では無い。

接触があつたといつても、イングリッドにはその記憶がないし、その接触を眼にしていたルイズは視界にそれらが入つていたというだけで、その時の自身の精神状態などの要因により、タバサがイングリッドと接触していた事実を綺麗に記憶から脱落させていたから、ルイズがイングリッドの評価をタバサに尋ねるという選択肢はありえない。ましてや尋ねられたところでタバサが応える事がありえそうもないという問題もある。

キュルケによる評価は難しい。キュルケがイングリッドを評価する最大の理由は『タバサが評価する』から、である。

キュルケ本人の本心を言えばタバサによるイングリッドへの評価に疑念があつたが、キュルケはタバサの実力もその人物評にも欠片の疑問を持たない。だからイングリッドがかなり「出来る」存在なんだろうという評価は持つていた。だが、それはキュルケ自身による評価ではない。

よつてキュルケの言葉でイングリッドの評価をルイズに説明できない。

自室の前の刹那の交感で、イングリッドへの自身による評価が出来たがそれはそういう気がする、あるいはそうであるらしい程度であつて、しかもタバサの見立てに間違いはなかったという評価であつたから、真実イングリッドに対するキュルケ本人の評価であるとは言い難い。

現状、イングリッドが判断するところルイズに一番近い立場にあるキュルケではあるが、イングリッドの力を説明するには最も遠い存在と言うところでもあつた。

結局のところ、ルイズはイングリッドの実力を判断出来なかった。今ルイズがイングリッドを『使い魔』として評価している部分は、第一に自身の魔法の成功例としての存在であり、自分自身のような『無能』のメイジに『応えてくれた』奇特な、恥ずかしい言い回しに言い変えれば、心優しくも、自身のわがままを受け入れてくれる「人」だという面のみである。つまり「実力」ではなく「人格」で評価しているに等しい。

それはそれで人間関係を築く上での評価としては大きな好意的評価結果と言えたが、「使い魔」に対する評価としてはソレはどうなんだという問題がある。

そこに複雑な感情があるのは、イングリッドが自身に対する『同情』で使い魔を受け入れたのではないかと言う疑念がルイズにある事で、イングリッド自身のすべてを投げうって、自身の傍に寄り添う事を同意したイングリッドの底知れぬ優しさに寄りかかっているに過ぎないという感情が渦巻いているところに、ルイズの不幸があった。

自分自身であるならば、突然今住んでいる場所から連れ去られて、突如として『使奴隷』の立場に貶められてしまったら、どういう感情を持つか。その結果が容易く想像出来てしまうのだ。そうであるにもかかわらずソレを気にも留めない『様』に思えるイングリッドの態度。もしもソレが本心を隠した擬態であるならば。

様々な勘違いや交錯のあった会話の中で、激怒されて突き放されても仕方がない感情の発露をぶつけられて結局それらをすべて許して忘れるイングリッドの底の深さは、ルイズにとって理解出来ない、一種の恐怖ですらあった。イングリッドがそれらに、大して気を向けていないのも不幸であるし、イングリッド自身がそれらを重視していないのも不幸であった。ルイズがイングリッドに対して感じている申し訳なきの材料はイングリッドには考える必要も無い事ばかりであって、それによってなおのこと、イングリッドがルイズの発するこれらの感情を理解する事が出来ないでいる不幸もあった。

対人関係の構築に対して基本的に一期一会か、さもなければ拳で語れ

を常識にしていたイングリッドは、はつきり言ってそのあたりの空気を読む能力に致命的に劣っているため、ルイズのそういった反応に対して対応出来ていないという不幸があった。

イングリッドがある程度自身の考えでルイズに対してあれこれと配慮をしているつもりになっていたのだが、それらはルイズに伝わっているとは言い難いものがあった。

楽しく仲良く相対しているようで、その実、2人は深い溝を挟んで互いにすれ違っている状態だった。

イングリッドの問いに、ルイズは複雑な笑みを向けて頷くくらいしか出来なかった。

「うん……そうね。一緒にいてくれるだけで嬉しいわ」

小さな花が開いた様な微かな笑みに、イングリッドは大きく頷き返す。

「うむ。まあ、今のところ何をしていたいか判らんが。だが、一緒にいることは約束しよう」

うんうんと頷くイングリッドが今度ははつきりとルイズに顔を向けて、笑う。

「主が嫌じゃと言わん限りは絶対に離れんぞ」

その言葉に、ルイズも大きな感情をこめて頷く。

「うん……ありがとう……」

知らず、ルイズは身体の前で何かに祈るように手を合わせた。

最大の不幸は、或いは幸福は、イングリッドがルイズに何を考えて、何をしようとしてもそれを歪めて曲げる何かがあるイングリッドの中にあつたことだった。

それがその後にはいかなる影響を与えるかを想像出来る者はいない。

ZEROのルイズ（4）

トリステイン魔法学院は、強固で巨大な城壁を持って外周を守っている。その外側を更に空壕が囲んでいる。そのことにイングリッドはいろいろと思うところがあつたがとりあえずは保留した。

出入り口は北側にある正門がメインになっている。空壕を渡る「橋」は土を盛って構築され、その側壁は石積みで補強されているが、恐らくは爆薬か何か——簡単な魔法で吹き飛ばせるようになっていいると思われる。橋の部分だけ空壕が深く、広くなっているのは余りにも実戦的な設計と言えるだろう。崩壊した「橋」の体積を受け入れられるだけの余裕が作つてあるので、うっかり転落事故でも起こせばかなり不味い事になりそうな深さである。周辺の気象条件によつてはいつまでたつても水が引かない水溜りとなつて、見た目も環境も悪くなつたりするのでその場合には水メイジの訓練の場となる事もある。そんな場所ではあるが建前上は、学院の出入りはまず持つてここから行われるべしとされている。

学院に入学する新入生はまずこの門を潜るし、学院を卒業する貴族もここを潜つて外の世界に帰る。そういう建前である。全寮制であるこの学院の生徒が、普段から頻繁にする出入り口という訳ではない。

そこから少し離れた場所にあるのが使用人や荷物の出入りに使う通用口である。質素ではあるが豪華で巨大で見るものを圧する正門から、衛視が詰める建物や城壁の外周形状、壁塔などで正門付近からは直接見えないように、うまく隠されている。基本的に隔離された施設である学院内部と外部の接触はその「通用口」が一番使用頻度が高い。

こちらは空壕を木の橋で乗り越えている。それなりに頑丈そうだが、2本セット、4本の橋脚で空壕の中で橋を支えている。魔法どころか斧一つで簡単に落とせるだろう。斧で橋を落とした者は確実に残骸の下敷きになりそうだが。

正門そのものには学院を訪れる「お客様」の使用した乗り物である

馬やワイバーンを預かったり、学院内部の施設まで行く必要もなく済ませられる用事をこなす為に歓談室等が設けられ、それらの施設でそれなりに人をもてなせるように世話人が詰めている。

確認すべき事柄が山のように積み重なってウンザリするが、それらの位置や警備状況、構造、周辺施設の状況等も早急に調べておきたいとイングリッドは思う。

ルイズの身の安全を図るためには是非とも知っておかなければならないことだからである。

東側には教職員が主に出入りする門があり、あまり使用頻度は高くない。これは教職員もごく一部の貴族階級にある教職員以外は、術からず学院の敷地内に居を構えているためであり、週に一度、誰かが出入りするかどうか程度である。

教職員はその立場上、顔パスが基本であり、衛視達はその極僅かな出入りもほとんどまともに対応をせずに素通りさせている。ルイズが何度か偶然に見かけた経験として、挨拶だけして出入りしている教職員の姿を何度か目撃している。

イングリッドにとって警備状況的に一番危険を感じる場所であるが、現状では教職員の行動に注目して注意を払っておくぐらいしか考えられる対応策が無い。教職員の出入りを顔パスで済ますことが学院の方針、であるなら根本的対応策を考えるのも難しい。ある程度の地位にある人間を抱き込んで何かを持ち込ませるとか、或いは入れ替わって地位の高い人間をブスリというのはまことにテンプレである。とイングリッドは知っている。余計に心配になってしまう。

何がしかの事件がおきない限り、対応が改まる事は無いであろう。そうは言っても、そういう事態が起きるといふ事は、誰かが犠牲になることを示していて、それはつまりとりもなおさず、その犠牲者がルイズになる可能性が僅かでもあるのであるから、不謹慎な願いをすること自体が、ルイズを守る役割の自身の立場の放棄、となってしまう。だからイングリッドは、そういう願いを一瞬でも考えた自身の思考を恥じた。

西側には生徒達や使用人が出入りするのに使うことになっている

門がある。学院外部に対して手紙をやり取りするためのメール・ボーイが年中無休、24時間体勢で詰めていて、自在伝書鳩や貸しワイバーンにその騎手、滅多に使われる事のない竜籠などが用意されている。馬小屋も備えられていて、多くの馬や単騎乗りの乗用魔法生物等がそこに繋がれている。

生徒の属する貴族の格から言うと、馬やワイバーンを独自に用意している者も多いから、馬小屋といいながら設備は果てしなく巨大となる。それらを専属に世話する人間が、それぞれの貴族個人の責任で派遣されてもおおり、そうなると大勢の人間が生活する事になる。

それらの人間を世話するために、ランドリー以外の生活設備が学院そのものとは別途、用意されており、その周辺だけ雰囲気が違う状態となった。

なぜ「使うことになっている」なのかと問えば、やはり使用人としては貴族の子弟たる生徒や、生徒個人に仕える貴族の、その領地から派遣された使用人の目に留まる場所を出入りするのは勇気がいることなので、そちらの施設を維持管理する「学院使用人」に急病人が出て、応援に出向く必要があったりしない限りは、「通常」の学院の使用人がそちらに近づくことも殆ど無い。

それらはルイズの親しいメイドからの又聞き情報であった。使用人の愚痴に耳を傾ける貴族。なんとも世知辛い絵面だが、イングリッドとしても役に立つ情報であるので、ありがたく領いておいた。

警備状況的に一番混沌としていると思える場所である。

この手の状態にある施設は、学院内に学院の常識とは別の常識が働いている場所があるという事を示している訳であるから、イングリッドの危機感も大きい。ただ生徒個人に仕える使用人がいるという事は、学院全体に危険を及ぼすような事を望んでいる人間はいない筈であろうと言う予測も成り立つ。更にそういう考えの人間が色々な貴族から別々に派遣されているとなれば相互監視も成り立っているであろうから、イングリッドも判断に悩むところだ。

調査に行くにしても一番困難を感じるところであろうという問題

もある。

うっかり一人でその周辺をうろろすれば、たちまち要注意人物とみなされて、いろいろな貴族に目をつけられかねない。どう調査していいか現状では思いつかない。

……ところで自在伝書鳩とは何ぞやとイングリッドがルイズに問えば、宛先を伝えればその目的地に直接手紙を送る事が出来るハトだと言うからなんとも便利なものであった。「本来」の伝書鳩とは帰巢本能を利用した一方通行の情報伝達手段であるし、なかなか管理が難しいのが「地球」における伝書鳩である。

鳩を伝書鳩として飼いならすのには簡単とはいえない手間がかかるのに、消耗も激しく補充も難しい。第一次世界大戦では前線から放たれた伝書鳩の内、2割が司令部に帰れば御の字といったところだった。

どうでも良い話だが、伝書鳩を情報伝達手段としているが故に司令部の位置を移動するのを躊躇して大損害を被った軍隊、というか国があつたぐらいだから伝書鳩が如何に使い難いモノか理解出来る。その手の問題の顕在化というのは使い方しだいということだから、司令部が……などと言う話は、適材適所ではない事例のとびきり悪い見本と言うところである。これは極端過ぎる例だが。

行つて帰つてきて更に別の場所に向かわせる、どころか、行つた先を中継して、その先へその先へと足を伸ばして誰が所有する自在伝書鳩かわからなくなつても最後の用事が済んだら「主人の元へ帰りなさい」で直接、大本の場所に帰還可能だというのだから呆れるばかりである。確かに「自在」伝書鳩である。

学院成立時にはなかったが、現在ではそこそこの利用頻度を持つのが南門だ。使用人達が他に気兼ねなく出入りできるように設置された本当の意味での勝手口で、門と言うのもおこがましい唯の扉である。

ただし使用人達のためのメール・ボーイや自在伝書鳩の用意、ソレがもたらす情報の管理、仕分け、使用人達が外部の者と出会うための施設等もあるから、存外この世界の貴族達の言うところの『平民』も

随分と大事にされているのだなというのがイングリッドの感想であった。ただし、使用人達の身元調査が嚴重であるという建前はあるが、やはり学院が一番危険視しているもの使用人であるから、そういう粗末なものであっても警備はもつとも嚴重だ。そうしてイングリッドが聞く限りの印象では、最も安全性が高いとも危険性が高いとも言える。

コレもまた先程の「ルイズと親しいメイド」からの情報である。何の屈託も無くその事を話すルイズの姿を見て、イングリッドは切なくなつた。

同じ立場、人としてのあり方の近い貴族の友人らしい話が一向に出てこないのだ。ルイズの過去1年間の生活がどういうものであつたかと想像すると、イングリッドは胸が締め付けられそうになる。

学院そのものの施設では、外周部から随分と距離を取つて、まず生徒達の寮塔が存在する。各学年に2塔づつが割り振られて男女が厳密に分けられている。過去には男女がごつちやになつていた時代もあつたそうだが、そうなれば当然の如くお家騒動の原因となるようなアレやコレやをしでかす者が出てくる年齢層の、元気いっぱいの若者の集団であるから、学院成立後のきわめて早い段階で、現状に落ち着いたようだ。

ごちゃ混ぜを是として学院を創り上げておきながら大慌てで対応したというのなら、実際にけしからん状況が現出したのだろう。常識的に考えて、最初からそうしておけよとイングリッドは思うが、きつと、学院を創り上げた人々は理想に燃えていたに違いない。理想に燃えて、人間的な常識も燃やし尽くしたんだろう。

場合によっては貴族同士の紛争に繋がりがかねない貞操の問題である。さすがにイングリッドも同僚から聞いただけであるが、地球における歴史の中で過去には男女関係のもつれで1つ国を滅ぼすような戦争に至ったケースもあると言うから納得である。まったく関係ない国民には双方共々良い迷惑だが、人のプライドとはそんなものだろう。貴族や王族となればなおさらである。彼らはプライドを保ち、守

り、誇る事すら存在意義の1つとしている。ソレは国家規模の問題に容易く摩り替わるのだ。

「イングリッド達」の立場で言っても、勝てる死合をプライドが何と
かと言ってみすみす失うような話は茶飯事であるので、そういった類
の話には大いに頷けるところもある。

……まあ、地球の話では、戦争の原因となった男女が全然別の
場所でもろしくやっていたというオチが付くから、なんともはやとい
うところである。

学院が3学年制を取っており、男女別にしても6塔あれば済む筈な
のに、なかば放置されているものも含めて12塔も寮塔が存在するの
は、過去にとんでもない人数の生徒数を数えた事がある名残で、学院
の諸設備が巨大で巨大となつてしまつた理由にも繋がる。やたら
めつたら学院内の諸設備が広大な敷地に散在してうつつとうしい理由
がようやくイングリッドに理解出来た。

この世界では固定資産税等が無いのであろうから、設備を増やした
り敷地を広げたりする事はあつても、使用しないからそれらを削つて
狭くしようという発想が出ないのだろうと納得する。

生徒達が主たる移動手段を空を飛ぶと言う形で取つていけば、事故
の危険性を考えると、広いほうが都合が良いとも思える。設備が狭い
ところに集中していれば彼らの動線が交錯して空中衝突と言う事にな
るのは容易に想像出来る。管制設備なんてある訳も無いから、空域
混雑となれば最悪な状況に陥るだろう。

だいたい、人の動体視力と言うのは人が思う程に性能が良いもので
はないのだ。ましてや平面を歩く事に特化した身体形状を持つて進
化した人間と言う生物である。立体機動中の周辺状況把握能力はか
なりの疑問があるだろう。或いは6000年もの長きにわたり空を
飛ぶことを普通としてきた貴族達である。何らかの差異が平民との
間に出来ている可能性は否定出来ない。それがルイズを守る目的に
あたって影響を与えかねない可能性もあるので無視して捨てる問題
でもないかと、イングリッドは1人ごちる。問題山積で『頭痛が痛い』
どころではない。

そんな風な貴族達の「ため」の施設が魔法学院なのだから、移動時に面倒があるからコンパクトにせよという文句も出ないのであろう。使用人達からどういふ感想が出ているのか興味深いところではあるが。

ことさらそれを目的にしているかどうかは別として、敷地が広大であるが故に、移動のたびに少なからず飛行魔法を行使する必要があるというならばそれもまた勉強、鍛錬の1つといえる。単純にいろいろな面倒だからと言う理由が大きそうだが。また現在でも落第者や、いろいろと問題のある生徒を隔離するためもあつて、使用する寮塔は6塔では足りないという。さもありません。

学院は2塔1学年1セットで風呂場や大きな歓談設備が用意している。過去にはそれぞれに食堂も併設されていたが生徒数の減少により、酷く人手のかかる食堂は、教職員の分も含めて一箇所に纏められた。現在、食堂であつた部屋は、改造されてレクリエーション設備になつたりクラブ活動を行う部屋になつていたりしている。それもあつて浴場がある施設はレクリエーション棟と呼ばれていることをイングリッドは知つた。

残された入浴設備も維持する手間隙はかなり大きな物である筈なのだが、実際にそれを維持するに当たり作業員を配する手間は少ないので、それで良いということだろう。現実にはぶつ壊れない限りは、入浴設備というのは使用できる状態を維持するのに存外手間のかからないものなのだ。衛生管理面を無視すればと言う恐ろしい但し書きが着くのだが。その事実はイングリッドにとつて要確認事項だつた。今日の夜にでも確かめる事が出来るだろうかと考える。

2塔1学年1セットであるから3つの設備が供用停止状態にあつて閉鎖されている。ただし警備はそれなり以上に嚴重にされている。貴族向けのそれなり以上の体裁を誇る施設である。手付かずの放置された建物があるとなれば、よからぬことをたくらむ人間も出るし、そこに忍び込んでけしからんことをする人間も出るし、そういう場所で密会してよろしく楽しんじゃう人も出るしで、学院としては結構扱

いに悩んでいる。もしかしたらありえるかもしれない将来的な事も考えれば、使わないなら壊してしまえと言えないところが苦しい。

中央に聳え立つ巨大設備が学院の肝。教育棟（塔ではない）である。外周を全力疾走して周れば、元のところに戻ってきたときには息も絶え絶えになるという雄大な建築物で、1〜2階が食堂、礼拝施設、大のホール、その他の集団活動設備となっていた。大食堂に関しては天井はぶち抜き。食堂自体も通常の集団食堂に、24時間営業の簡易食堂も維持されていて、小さな売店も用意されている。ルイズの言うところの「小さな」が本当に小さいかどうかはイングリッドにとって大いに疑問だったが、それもまた24時間営業で年中無休で維持されており、唯生活するだけならそこで何でもそろうがお値段が張るのが欠点と学院に住む者達に認識されている。生徒や教職員はともかく、平民から広く集められた使用人にはハードルが高かった。

しかし、24時間営業の靈験あらたかなところは使用人たちにも恩恵が会った。値が貼ることに目を瞑れば、危急の用事もある程度は済ます事が出来るのだ。女性のみ押し付けられた一カ月置き程度にやってくる面倒事の処理を行うための道具とか、普段のペースが崩れて急遽必要になったりする場合でも間違いなく用意されているというのは大きな利点であり、生活する上でも仕事をこなす上でも安心材料だった。よって、生徒、教職員はもとより、使用人も利用頻度が相対的に高い施設だった。

そういう諸施設の中に、イングリッドがぶち込まれていた医療施設も含まれている。

3階以上が勉学の場となっており、6階までが教室である。正方形の1〜2階の構造物の外周に沿った回廊状の設備となっていて、専門教科向けの専用室を含めて60室以上あるというから壮大な設備だ。移動するだけでうんざりである。事実ルイズは走る羽目になる場合が多かったから、大きいのは常に悪い事ばかりでもないのだ。最近では一部教師による明らかな配慮により移動距離が少なくなつて大分

に楽になったルイズだが、それもえこひいきで、そんな配慮は要らないと嘯くルイズのあり方はイングリッドにとって好ましくもあつた。

建物に囲まれた中央に、2階の屋根を利用して中庭が用意されている。ただし、1年の殆どで日当り良好といえない中庭はあまり生徒達に人気のある場所とはいえない状況であつた。男女で弁当を広げて「きやつきやうふふ」という定番が見られないというのは、イングリッドにとって残念であつた。

表彰式とか卒業式とか学院を挙げての大規模な式典があれば利用されるが、普段は放置状態である。せいぜいが中庭を挟んだ先の教室に近道するのに、その上を飛んでいく程度の「空間利用」である。まさに正しく「空間利用」だ。イングリッドは眩暈を覚えた。

施設の屋上は、単なる屋上以外の意味を持たない。エレベーターの動力室とか、暖房設備の排気口とか突き出ているだけで面白くもなんともない場所だつた。空を飛びまわれる人間にとって足を付けた高いところと言うのはなんとも思えない場所なんだろうかとイングリッドは思ったが、すぐ脇で職員塔が見下ろしているから落ち着かないという答えが帰つてきた。イングリッドはなるほどと頷く。

その施設の東側に教職員の仕事場や生活の場が設けられている。教育棟に近接して職員塔が配されて、それは学院内施設内でもっとも高い建築物である。その威容を持って教育棟を睥睨し、威圧しているが、職員室は1〜3階にあるだけで、利用頻度が高いのはそこだけ。その上は倉庫、となつている。

高いのは飾りかよ。イングリッドは内心で呟いた。

12階に宝物庫があり、その上に学院長室が備わる。学院長は基本的にそこで生活もしている。呆れた事に彼専用の風呂もあるというのだから大したものである。水はどうやって上に上げているのだろうという当然の疑問がイングリッドにあつたが満足な答えは返つて来なかつた。ルイズも始めて気が付いた問題に、頭を捻るばかりだつた。

高い場所に最高責任者がいる。イングリッドにとってはテンプレ

な話だ。どこの世界でも変わらない世界の理なのだろうか。煙か何とかは、というものののだろうか？

そうかと思えば、更にその上は繋留設備だという。なんの？ヒンデンブルグでも飛んでるのだろうか？MEGA〜っ！MEGA〜っ！て叫ぶ大佐でもお空を飛んでくるんだろうか？科学的時代背景の揺らぎの中で、ましてやファンタジックな世界である。そういう可能性もありうるかとイングリッドは思いなおす。しかしここで状況的にもヒンデンブルグになったら大変どころではなからうと想像する。可能性は少ないかもしれないがイングリッドは、ルイズの安全を守るという点でそういう状況がありうる事には留意しておいた。

職員塔は生徒の出入りがそれなりにある場所だが、更にその東側から城壁までの空間に広がりひしめいている職員的生活施設は基本的に生徒の出入りは無い。ごくごく一部の貴族の立場にある教職員以外は使用人が付くことも無いし、そういった使用人は彼ら自身が手配する専属の人間であるから、学院の使用人がことさらその区域に立ち入る事も無い。

一部例外を除いて、全員が貴族であるという訳でもない教職員が住まう場所なので、まごうことなく貴族である生徒が遠慮する必要も無いのだが、ルイズも含めて殆どの者がそこに足を踏み入れる事は無なかった。別に教師に敬意を払ってとかプライベート空間だからと言う考えが彼ら、彼女らにある訳でなく、単に行く理由がないからというだけである。よってその内部はイングリッドに問われるまで想像した事も無いとはルイズの弁だった。

まあイングリッドが想像するところ、教職員の上に足繁く通う生徒の姿と言うのはどうにも絵面が悪い。どう考えてもけしからん予想しか思い浮かばない。教師と生徒の道ならぬアレ。よくある話ではある。

同じように南側の使用人区画も大いに謎であった。ランドリーを始めとした学院全体を維持するために必要な諸設備が集中しているが、イングリッドに尋ねられるまでルイズは、存在すら忘れていたと

いから呆れるばかりだった。まあ仕方ないかとイングリッドは嘆息する。貴族はそんな些細な事に気を配る必要はないのだ。貴族は貴族足らんとするだけで、貴族であり、使用人や作業者をヒト睨みで走らせて何ぼである。一々その生活まで干渉する必要もなければ監督する必要もない。

彼らの生活設備も良くわからない。彼ら自身も基本的に学院設備から外に出なくても1年間を快適に暮らしているようだということだから、それはもう1つの町だが、どう考えていいか判らない。イングリッドによる調査も難しいだろう。

北側から正門にかけては、屋外実習の場で、何らかの式典などがあればここを使って大々的にということもある。イングリッドが過去を振り返れば、さくらの生活を覗いた時に見た学校とやらを考えれば、まあ、運動場といったところで、そういうものだ和理解した。体育教師として職を得て、教師でありながらオリンピック競技でメダルを総なめにするという事をやらかした彼女であるなら、この広さは垂涎物だろう。波動拳も打ち放題だ。「通常の状態」では遠中距離攻撃に弱いイングリッドとしては闘争の現場に選びたくない場所でもある。イングリッドは端っこに相手を追い込んで「ずびしずびし」とやるのが基本の戦闘スタイルなのだから。

ただし屋外実習はこの場所だけでは場所が足らずに、学院敷地の外に出ることも多い。単純に広さが足りないだけでなく、森や川、丘などの地形を利用した実習もあるし、単純に学院施設内部で攻撃魔法をぶちかますのは危険極まりないという理由もある。

爆裂波動拳でどかーん！とかやってたら教室で授業をしている者も迷惑だろう。

西側に姿を現すのは巨大な図書館と自習棟で、その蔵書は世界有数である。なんでルイズがそれを誇って胸を張るか知らないが、ルイズはその常連で、職員には知られた顔である。せっかくの立派な設備ではあるが利用者は年々減るばかりで、学院生活3年間で、そこに唯

の一度も足を踏み込むことなく学院を去る生徒も多いというのがルイズが聞いた職員の愚痴だった。

ルイズ自身には自覚のないところであるが、貴族が平民かそれに類する立場の人間と容易く話をし合えるような気さくな関係をもてると言うのは、たいしたコミュニケーション能力である。イングリッドはシエスタとの疲れる会話でも思い知らされたが、この世界における貴族と平民の断絶は相当に大きいものであるから、ただ貴族が望むからと言う理由で関係を持つとうとする平民は殆どありえないと思う。そういう状況でルイズが言葉を交わす平民の知り合いを造れるというのは為政者候補としてはなかなか頼もしい限りである。

そういえばシエスタはルイズのことを相当に詳しく知っていたような雰囲気があったとも、イングリッドは思い出す。気疲れを理由にしてそんな簡単なことすら確認しなかった自分の落ち度を思っただけが沈む。イングリッドは随分と気が緩んでいるらしい事実に至って、思考が澱んでしまった。

食堂に移動する道すがらイングリッドは、夜に聞くことの出来なかった事を思いつくままどんどん聞いていく。常識を常識であるとして無意識に扱っていると陥りやすい事であるが、そういうものである、では何故そうなのか？で話が収まらなくなりがちであるので、聞くほうもかなり気を使って質問を考えなければならぬ。うっかり突っ込んだ話を聞けば、回答者が悩んで話も進まなくなってしまうので難しい。

たとえば時間単位であるが、現在では24時間制だという。不思議な事にイングリッドの体内時計と照らし合わせるところ、その24時間の、というかハルケギニアの絶対時間の経過は地球とそれほどの差異を感じさせない。えらく都合の良い話だとも思ったが、それはその後にくるルイズの説明からすると単なる偶然なんだとイングリッドは納得した。

ハルケギニアの過去には25時間だったりした可能性があり、また、過去の1時間が現在の1時間と間違いなく同じであったかと言う

と、疑問が多かった。古い文献に描かれた描写では、とても1時間では済ませられない作業を行った描写が複数の文献で確認出来たりするし、それに付随して、記録に残る人の一生が極端に短かったりするの、発掘される過去の人間の遺体を調査すると、生物学的な観点から見て、現在とそれほど極端に寿命が違おうという訳でもないという結果が出ているのだ。

また時間経過が不明になるように工作された部屋で、対象者の感覚だけで生活をさせると、1日あたりで平均1時間から1時間半の時間のずれが発生すると言う実験結果が報告されているため、過去には1日の絶対時間が現在の時間に換算して、25時間強でありそれが人の身体に受け継がれているのだと言う説は歴史家と生物学者の双方の間に結構強く囁かれている。先程の生物学的な例と、文献の分析結果から、日が昇り日が沈み、また日が昇るという意味での1日が現在換算時間で50時間以上であり、睡眠、起床、活動、また睡眠と言う人間の都合に合わせた「1日」の1サイクルの生活が太陽の運行に合わせた自然現象的な意味での「1日」で2サイクル1セットで行われていたのではないかと言う過激な主張すらある。イングリッドは感嘆した。なかなか面白いことを言う人間がいるものである。

確かにそうなれば平均寿命が現在60年であると想定して、単位日換算であてはめれば現在使用されている時間を定数とした絶対的時間換算平均寿命に変化がないと仮定すると、過去の平均寿命はそのまま当時の時間単位で30年となってしまう。

囁かれているらしいで終わっているのはそれを強力に認めようとしない集団がいるからで「何だそれ」とイングリッドが聞けば、宗教集団と言うのだからその時点で質問内容を直ちに切り替える必要が出た。それとなく聞いてみればなかなか強力な一神教集団であるようなので、それを貶めかねない話題をうっかり他人に聞かれて、それを理由にルイズを排斥する人間でも現れたら面倒だし、うっかりずんばらりんとなれば大変なので、どうにもその辺の危険性に疎いルイズはともかく、疑いようもなく異邦人のイングリッドには極めて微妙な取り扱いを求められる話題である。

まさか時間の話でそういった微妙な問題が飛び出るとは思いもよ
らなかつたので、イングリッドは大きく唸るばかりである。

もともと寮塔から外に出て食堂に向かう道すがら、朝日に視界が開
けたこともあって、夜間移動であつたがために説明されなかつた施設
の紹介の後に、時間つぶしでアレコレ知つておこうとイングリッドが
はじめた話である。それが質問の1答目でこれでは、どうにも不特定
多数の人間の存在が予想される場所で、うっかりな質問をすることが
憚れてしまった。どんな致命的な問題をうっかり誤発動スーパ
ーアーツさせるかもしれない。イングリッド自身のうっかりでルイズ
の人生を決着させる訳には行かないのだ。

ルイズとしては、こういう風にかしましく会話をしながら歩くこと
自体が新鮮でこの上もなく楽しい経験であつた。それだけでも何を
する必要もなく使い魔がいることに大変な満足感を得ていたのだが、
その相手であるイングリッドが突然うんうん唸りだしたので、驚い
て、心配して、その顔を覗き込んでしまう。

「どうしたの？身体の調子がまだ戻ってないの？」

イングリッドはそんなルイズの姿に、小さく笑つてなんでもないと
首を振る。

「んむ。突っ込んだ話はまた後日としようか。今は食堂に向かおう。
時間は大丈夫かや？」

ルイズは心配そうな表情を崩さないまま頷き、懐中時計を取り出
す。まったくの実用品のようで、何の装飾も見られない。ただし純銀
で鍍金されている。反射される太陽の力のベクトルでソレが見て取
れる。

その表面に傷ひとつないのはどういう理由だろうか？なんらかの
微弱な力を感じる。その力はこの世界で眼を覚まして以降、散々にイ
ングリッドを悩ましている力であり、何であるかを確認したくともど
う説明して良いかもわからないので、ただ眺めて無視するしかなか
つた。

「ん……7時35分。後ちよつと歩けば食堂だから、問題はないわ」

「朝食は何時からじゃ……いや、その後の時間の流れも教えてくれな
いかや」

うんと頷いて、頭を捻りながら、ルイズが応える。

上空を何人もの生徒が飛び交い始めて、それらから余り良い気持ち
のしない視線が投げかけられるが、イングリッドは無視する。ルイズ
は気が付いていない。2人で学院敷地内を歩くという新鮮な体験に
心奪われて、周囲に対する警戒が疎かになっていた。

「そうね。まず朝食は8時から。2時間、時間が取られているわ。開
始時間に間に合うように行く必要があるけど、食べ終わったら、授業
開始までは自由ね」

「2時間って……」

タイムランがいきなりイングリッドの予測を粉砕破壊してしまっ
た。もはやそれ以降のイングリッドの予測は無意味だ。

イングリッドの呟きに気が付くこともなく、ルイズは言葉を重ね
る。

「午前の授業は2時間1コマ。でも先生によるわね。早く終わっちゃ
うことも多いし。でも2年生の実習授業はどうなるのかしら？ 終わ
れば昼食と休憩。これも2時間。ただし昼食の内容は軽食が基本ね。
ガッツリ食べたい餓鬼どもは前の週に申請して別に用意しておく必
要があるの」

イングリッドは「ふーん」としか言えなかった。地球における学校
生活なんてTVドラマとかアニメーションとかで、フィクションとし
て知る以外にはないのがイングリッドの生活であつたのでそれが普
通なのかどうかも判らない。

「昼食は指定された2時間以内に自由に時間を取って食べればいい
の。女の子の中には食べない子もいるわね」

はー、へー、と頷くイングリッド。「そうなのかー」としか言いよう
が無い。

「午後の授業は2時間2コマ。でも授業の間に移動したり準備したり
があるから最初の1コマは30分ぐらい早く終わらせるわ。逆に後
のコマを遅らせることもあるし。これも先生によるわね」

イングリッドは首を捻って、地球でのさくらの話を思い出す。彼女の職場では1日最大で7時限の授業やっても17時ごろまでには終わっていたはずだが……。随分と違うのだな、と感心する。なるほど異世界じゃ。

「そうすると授業が終わるのは18時か……。遅いの。食事はその後かや?」

教育棟。正確には食堂に向かいながら、ルイズは頷いた。

「うん。食事自体は18時から21時までの間に自由に時間を取れば良いわ。先に風呂にしてもいいし、クラブ活動してもいい。私は授業の復習を先にするんだけど」

「なるほど。自習棟か」

「うん」

イングリッドは余計な想像もしてしまう。ルイズの立ち位置を考えると、早い時間に食堂に向かって大勢の生徒に囲まれるのはつらからう。時間を見計らって、目立たないように食事を取るしかあるまいと考える。

「お風呂はね、いつでも入れるの」

「昼間でもかや」

「うん」

イングリッドは頭を捻る。随分と目的地に近づいた事にも気が付いた。

「授業があるのじゃろ?」

「そうね。たとえばね……」

2人は大きく開け放たれた正面入り口を潜り、建物に足を踏み入れる。さすがに建物の中を飛んでいくような無作法者もないが、入り口自体は3メートル近い高さがあるし、中の天井はイングリッドの見たとところ目測5メートルといったところであった。壁の中腹にバルコニーらしき構造があり、等間隔で渡り廊下があるのを見れば、単なる吹き抜け構造なのだろうと推測する。これが教育棟の1フロアの高さでございだと言われたならイングリッドは、どんな文句を言われようとも、移動に際してルイズを抱っこして飛んでいくところだっ

た。

「今は良いけど、夏とかは……ね」

「ああーそうよな。男はともかく女性は、な」

女性、というより、貴族は、と言い換えても良い。身奇麗にする事も立場上求められる地位であるから、風呂と言うのは結構重要な問題だった。

文化的特長からすると、これだけ風呂風呂と言うのも不思議ではあるが、ここは地球では無いのである。

地球のある文化圏の歴史では、香水を多用している時期があったが、それは自身の体臭を気にしてであり、本来であれば、体臭を抑えるよりもその根本を断ち切りたかった筈だ。技術的な問題とか衛生的な問題とかから風呂と言う選択肢が取れないから、香水と言う手段をとったのであって、本来であれば入浴したかったに違いない。

ここでいう衛生的な問題とは風呂に入らないが故に身体的な衛生状態を保てないと言う意味ではなくて、風呂を多用する事による捨て湯の処理が適当であるが故の、衛生状態の悪化という問題である。

中世あたりでは、どの国でも古代よりも下水等の設備が退化していたから、街路がそのまま下水の捨て場になっていた。そこに年がら年中1日1人当たり200リットルの身体を洗った残り湯が押し寄せたら、衛生的には大惨事である。病人が混じっていたら年がら年中パンデミックだろう。湿潤状態が維持される事で大発生する類の厄介な細菌もいるし、ムツシームシムシ大行進となっては目も当てられない。特にGの存在等はどの国でも厄介なものだったが、街路一面をおおい尽くすそれとかなったら大惨事どころではない。

糞も小便も街路に投げ捨てていた時代があったから、風呂の残り湯ぐらい、と言う考えもあるが、一応はご不浄に関しては専門の処理者がいたし、ビツクジョンを含んだ土で火薬の原料が取れるとわかってからは、逆に町が綺麗になったからアレな話である。風呂の残り湯となれば量的にとんでもない話になるし、また、お湯を年がら年中大量に沸かすのを繰り返せば100年と立たないうちに、ヨーロッパの自然は消え果ていたであろう。現代であっても、ただ炊事のための燃料

を集める行為だけで周辺の自然環境が壊滅状態になった地域なんてごまんとあるので、それが入浴となると洒落にならない。

そういうことを防ぐために、風呂文化が逆に衰退したのではないかと言う主張を行う研究結果もある。

公衆浴場文化が高度に発達していたローマあたりでは、それを維持するために恐ろしいほどの木を切り出して、気候を激変させ、山の保水力を壊滅させて、大水を引き起こしたり、港を流出土で埋めてしまつてその文明を急速に衰退させたのだという考えもあるから、それらが伝承的に伝えられて風呂に毎日入ることを非とする雰囲気が無意識にヨーロッパの人々に伝播したと言う推測をいう歴史学者もいる。風呂がローマ人を滅ぼしたのだ。そして風呂にこだわらない（こだわらなくなつた、と言い換えても良い）ヨーロッパの人々の考え方が永い間、ヨーロッパの自然環境をそれなりに保ち、彼らの繁栄を維持する原因となつた。そういう考え方である。これは極論ではあるが。

それはともかくとして、イングリッドにとつても女性の端くれとしてはいつでも風呂に入れる環境と言うのは魅力的であつた。特に夏ともなれば抗いがたい。

「ん。納得よ。そうなれば……ルイズ、どうしたのじゃ？」

幅5メートル程の広さの通路は突き当たつて左右に分かれる。ただしその突き当りには通路の幅と同じくらいの幅で天井まで届く高さを持つた巨大で重厚な扉があり、その上に、ルーン文字が刻まれている。両開きの扉の先からはかなりの数の人間のざわめきが響いている。それにあわせて様々な臭いが複雑に絡み合つて漏れ出る。

ここから見る限りでも、高い天井から吊るされた豪華なシャンデリアに、人一人横になつても左右の端に届きそうにない幅を持つた長いテーブル。その真ん中を飾るフラワーポッドと交互に置かれた果物の山。敷かれたプレートが見えなくなる程の山盛りである。

テーブルと椅子に座つた生徒の間を縫つて忙しそうにメイドが走り回つているところを見ると、食事の時間には早い、腹を空かせた生徒の中には早々に果物に手を伸ばしている者もいる。

見える範囲内の事であるので壁は見渡せないし、シャンデリアが天井から釣つてあると言うのも推測に過ぎない。いろいろイングリッドから見て型破りな学院の施設である。シャンデリアが空中に浮かんでいると言われてももはや驚くつもりはない。装飾が豪華なものにも慣れてしまった。

その風景の手前で、滝の汗を流してルイズが固まっている。顔色も心なしか悪い。焦ったイングリッドは彼女の前に回り顔を覗き込む。「どうしたルイズ。主こそ体調が優れないのではないか？我が心配させたせいかな？食事はやめておくか？我なら1食ぐらいは抜いても……」

ゆつくりと首を振って、それを否定するルイズ。顔色の悪い表情のままイングリッドに視線を移して、かすんだ声で言葉を出した。

「……ゴメン、イングリッド……あなたの食事、忘れていたわ……」
身体を跳ねさせて、妙な表情で驚くイングリッド。納得したように声を上げた。

「ああー、あああ、そうじゃ。そうじゃな……。昨日の今日か。用意できるわけもあるまい……！」

イングリッドは先程の、昼に多く食べたいのであれば、前の週から申請しなくてはいけないと言言葉を出す。であれば、朝食に新たに1食を増やすのも同じで、ましてや人間の使い魔である。肉の塊をぽいっと投げてお仕舞いとはならないし、ましてや食堂に使い魔を連れて来るなんて想像できる話ではない。椅子すら用意されていなくてももしようがないだろうと、早手回しに考えてしまう。

イングリッドは鼻で笑って、ルイズから1歩距離を取って、頭を掻く。

「まっ、そうよの。すぐに用意できるわけもあるまいて。ふむ。そうすると……」

ルイズはこの世の終わりでも来たかのような表情で、イングリッドに飛び寄り、肩をつかむ。思った以上に深刻なその表情にイングリッドもびくりと身体を震わせてしまう。

「お……おい、ルイズ？」

首を振って、うなだれるルイズ。

「違うの。違うのよ、イングリッド。ゴメンね……ただ、その、ね。……忘れていただけなの……」

泣き出しそうなのか、悲しそうなのか。酷く紅潮させた顔で、眼を合わさないルイズ。その姿を見てイングリッドは僅かに笑った。

その声を聞きとめて、ルイズが顔を上げる。

それを見つめて、イングリッドはルイズの頭を撫でた。

「ん……仕方がないじやろ。いろいろあったのじゃ。いろいろ、な。うん。まあ、よいわ。先程も言った様に……」

イングリッドは思い出す。地球における任務を。闘争の連続を送る日々もあったが、張り詰めた緊張感が持続するその日々は、空腹等覚える暇もなく、ただ目的に向かって走るだけであった。

それはいい。満腹で鉄山靠を食らって私たちマーライオン！などと言うよりは、いい。

問題は、何かを探せ、と言う任務の場合だ。どこにあるやもしれん何かを探して世界のあちらえこちらえ。過ぎ去るいくつもの日々。

町や村を巡るなら、何とかなる。金銭感覚に疎い組織であったが手ぶらで行け！ということとはなかったし、人がいるなら路銀を失っても、バイトをするとか、手はある。よほどに就労制度に厳しい国でも意外と何とかなるもので、人の善意に付込んで泣き落としてどこぞの職場にねじ込んでも良いし、あまり褒められない方法で収入を得る術もある。イングリッドはすべてを許した事は無いが、最悪、女性であると言う利点を最大限に発揮することも可能であった。それらの術がすべて不可能であつてすら、人が営みを過ごす上では大なり小なり発生する廃棄品、つまり残飯をあさるといふ最醜手段もある。

人がいない場所であつても自然があれば、何とでもなる。野生動物を狩って、草を食み、泥水をすすつても生き抜く術はある。イングリッドは、その立ち姿からは想像し難いが、相当に野性的な生活を送ってきたのだ。で、あるからこそブランカと知り合えたし、仲良くなれたのだ。

問題は、極地の探索だ。

水を得るのも難しい砂漠であるとか、水を飲むのも危険な山の頂、或いは氷の荒野となると当然食事すら不可能である。気温が低くても風さえなければ何とかなる場合もあるが、そういう「理想的な状況」というのは極地ではほとんどありえない。だからこそ「理想的な状況」なわけだが。水を飲んだ瞬間に食道付近で凍結。窒息死なんていうこともある。あるいはその冷たさにショックを受けて死亡とか、首の血管が凍結なんていうこともある。そうなれば極めて悲惨な死に様を曝す事になる。十分に気を配った周到な用意を行ったうえで準備を行って行動しないと、食事をしたのがトドメとなつて命を失うかもしれない場所を踏破探索して彷徨う場合が多いのがイングリッドの「仕事」なのだ。

秘密結社とか謎の組織と言う手合いは好んでそういうところでアレコレたくらむから面倒である。面倒だからこそそういうところにアレコレ作るんだろうが、造り上げるのも面倒だから、特殊な何かを大量に用意したり、作業員を多数引っ張って痕跡を残して場所を推測しやすくしているのだから何をいわんやというところである。

しかし、そうして場所を知れたところで凶悪な気候と地勢を踏破して実際にそこに出向かないといけないという面倒がなくなるわけではないから、そういう中では、何日も食事も水も摂れない場合があったし、その状況で闘争な等となるとなかなか絶体絶命であるが、そういう状況を何度も乗り越えて生き延びた経験もイングリッドにはあった。

ルイズの鬼気迫る表情から、イングリッドも混乱して滑稽な程に思考を飛ばしてしまっていたが、とりあえずはルイズを宥めようという思考に変わりは無く、何とか宥め様として、その努力は報われなかった。

なぜなら彼女の背に、今日の朝に出会った少女の声がかげられたからである。

「イングリッド様……ミス・ヴァリエール。準備させていただきましたので、此方にお越しください」

「ほへっー」と叫んだルイズと「ニヤッ！」と喚いたイングリッドに

妙な表情を浮かべて、2人を大げさに避けていく生徒達。立ち尽くす2人の生徒の前で、小さく首を傾げる黒髪のメイド。

「あ……i・シエスタ。どういうこと？」

ルイズがシエスタの名前を知っていた事にイングリッドは驚いたが、そういえば、契約の行われたあの部屋を立ち去る時に確かに名前を言っていたなと思い出した。

「ご無礼かとは思いましたが、此方でイングリッド様の食事を手配しておきました。いろいろと忙しかったご様子。勝手なことをしまして大変に申し訳ありませんが、お許し願えないでしょうか」

見事な言葉回しであると、イングリッドは感心する。何もおかしいところは無いな。

ルイズの失敗も立場も押さええて両方ともに問題が無いように誤魔化しきる言葉だ。実態はどうあれ、この言葉でルイズの不名誉は雪がれたと言っている。メイドが勝手をして無礼を働いたと言う事実の問題をすり替えながら、無意識に貴族に対して責任をかぶせつつ、有耶無耶にしている。そして結果を解決の方向に導いている。

やはり一筋縄ではいかないメイドである。これがこの世界の使用人のあり方だと言うなら、平民も存外にしぶといのであろう。

関心しきりになんとなく頷いてしまうイングリッドの横でその様に気が付かないでいるルイズが驚いて声を張り上げそうになって、自分の口を手でふさいだ。息を1つ吐いて落ち着くと、シエスタに近寄り、小声で囁く。

「うんうんうん！許す許す許すわ！シエスタ。ありがとう！さすがね。いつイングリッドに気が付いたの？」

シエスタに先導されながら、ルイズ、イングリッドの順で、食堂に入る。見た事も無い妙な闖入者に、訝しげな視線を送る者がいたが、そういった反応が広く沸きあがる前に、1人の恰幅のいい——最大限好意的な解釈をした上で、そう言える黒マントの生徒が勢い良く立ち上がり、その結果として大きな音を立てて椅子をひっくり返した。

当然のように食堂の注目は彼に集まり、部屋全体を満たしていたざわめきも一瞬、消え去る。

妖精でも通り過ぎたような瞬間であったが、食堂の注目を一身に集めたその生徒は、恥ずかしそうに頭を垂れて周囲に謝罪の仕草をする。と、メイドが戻した椅子に腰掛けて身体を竦めた。

それを見届けて、ざわめきが戻る。その頃にはすでに、ルイズもイングリッドも案内されて席に着き、シエスタともう1人の金髪のメイドの世話の元で食事の準備を始めた。

「イングリッド様とは、朝にご挨拶をさせていただきます」

先程の問いに答えたシエスタに、ルイズが頭を捻る。そして何かに気が付いて「ぽんっ」と手を叩いた。

『叱責した』メイドつてのはシエスタだったんだ。そっか」

シエスタは周囲の注目を浴びないように小さく頭を下げて、これまた小さな声でルイズに謝罪した。

「差しでがましい事をしてしまいました。大変申し訳ありません」

ルイズは笑顔でひらひらと手を振る。

「いいのよ。私こそゴメンね、シエスタ。あなた達をないがしろにするような事をしたわ。此方も謝罪させてね」

シエスタはその言葉に再度腰を折り、小さく笑った。

「ありがとうございます」

イングリッドには2人の間に隠しきれない親愛の情があるのに気が付いて、小さく胸を痛めた。

その事に慌てて頭を振って、目線を彷徨わせてしまう。その先にもう一人のメイドの姿があった。

金髪のメイドは、無表情、無愛想で黙々と作業を進めるが、シエスタは隠し切れない僅かな笑みを浮かべたまま仕事をこなす。

フム、と頷いてイングリッドは2人のメイドを何となく見比べる。

医療室でブリティッシュ・スタイルにフレンチが混ざった妙なお茶の準備をしているときも感じられた事であったが、イングリッドの見たところ、このシエスタと言うブルネットのメイドは、見ているほうも釣られて笑顔になるような楽しそうな仕草で仕事をする。非常に好ましく思えた。

仕事の態度が、ではなく、人としてのあり方が、である。

人との出会いを繰り返しても、印象的なのは強い感情を互いに浴びせて死合ばかりで、それもまた人との付き合いの1つと信じてはいたが、そこにある感情が殺伐としたものになるのは避けられなかった。だからと言って死合うのを楽しそうにやられてもどうかと言うところはああるし、とはいっても、自分自身も表面上は楽しそうに死合うのが常と言う状況になっていた。

これはある種の防衛反応だと思う。

絶対に、楽しからざるものである死合。華やかならざる世界で、それに身を置き続ける以上は自身に黒いものがたまるばかりである。だからと言って正面からそれを受け止め続けては染まった後に残るのは何であろうか？

となれば演技であつても、楽しそうにするぐらいでしかイングリッドは自身を保つ方法を知らなかった。

リュウのような悟りきった人間は余りにも人のあり方を踏み外している。或いは人のあり方を歩んだ末の先にある、あれが到達点なのであるだろうか？

イングリッドから比べれば、消しゴムのカス程にも届かない短い間で、あそこにたどり着いた、或いは歩み去ったリュウは彼女には眩しすぎた。

「人の魂は肉体の寿命以上には保てない」

遠い昔に聞いた、龍の秘術を受けた少女の言葉であるが、けだし名言だと思う。永い生を過ごすだけでも磨耗する魂は死合う事で擦り切れて砕けていったような気がする。今ここにいる自分は単なる搾りかすではないかと想像する時があつた。単に永い経験と、人が扱うには強すぎる力のくびきが、人のようなモノを維持させているに過ぎない。そう思ってしまう。

そういうところで、何の邪気も無いシエスタのような人のありようを眼にして、それを受けて心を震わせると、ようやく安心して自分が人の心を保っているのだと納得出来るのだ。

自分が弱いとは思いはしないが、心のありようの面で強いかは疑問ばかりである。

シエスタもそうであるが、アレコレと彼女に声をかけつつ楽しそうに笑うルイズのありようも美しく、また、強い。

イングリッドは、そんな彼女だからこそ、望んで側にあつて守りたいのだと強く思う。ルイズの強さと、シエスタの強さ。それを引き寄せるルイズの力。ルイズ自身は気が付いていないであろう、同じように惹きつけられたキュルケ。

イングリッドの顔はほころぶ。

なんと素晴らしい主を得られたと言うのか。

いつの間にか、シエスタもルイズも、金髪のメイドも妙な表情を浮かべてイングリッドを見つめていた。それに気が付いて、イングリッドは気圧された様に身を引く。

「お……おう、なんじゃ?」

ルイズはシエスタと顔を見合わせて、首を捻り、それを受けてシエスタは金髪のメイドと顔を見合わせて、首を捻り、それを受けて金髪のメイドはイングリッドと顔を見合わせて、首を捻り、イングリッドはそれを受けて、硬直した。

「なんじゃ、ってねえ。イングリッド」

シエスタに視線をやったままでルイズが呆れたように呟く。

シエスタがそれを受けて視線をイングリッドに移して再度首を捻って笑いかける。

「すごい、良い笑顔でした。よね、レン?」

最後の言葉は金髪のメイドに向けられていた。無愛想な無表情に顔を作り変えていたそのメイドも、隠しきれずに唇を僅かに跳ねさせている。

ルイズが肩を竦ませて、身体を傾げて、少しイングリッドに身を寄せて小さい声で言葉を紡ぐ。

「ねえイングリッド。平民では食べられないような豪華な食事だからって、喜びすぎじゃない?」

眼を見開いて、「ニヤッ!」と小さく叫んで椅子の上で身体を跳ねさせる。

イングリッドは頬を両手でさすりながら恥ずかしそうに身を振つ

た。

「お……おおう。そういうわけではないのじゃが……我は、そんなにマンモスウレピーな顔であったか？」

イングリッドは肩を掻き抱いて真っ赤な顔を振りつつ身を震わせる。

『まんもすうれぴー』ってどこの言葉よ。意味わかんない」

イングリッドは頭を抱えた。このような慣用語を説明するのは滑ったギャグを説明するのに次いで恥ずかしい。

「う……うむ。『すぐくうれしい気持ち』を強く強調したいと思ったときじゃな、会話で可愛く表現する場合に使う感嘆語じゃ」

熟れたリンゴの様に、まっかつかに染まった顔でルイズを見つめながら説明する。すさまじい公開処刑だ。ライフゲージがやばい。

「へー、面白い表現があるのね。違う国には違う表現があるのね。勉強になるわ」

存外にまじめな表情でそれに頷いたルイズにイングリッドは呆けてしまう。その後ろでルイズの言葉の一部分に驚いたシエスタが、思わずルイズを強い視線で見つめてしまう。

それに気が付いたルイズはシエスタに向き直り、口に人差し指を当てた。いたずらつけない表情でウインクをする。

「ごめんねシエスタ。時間があるときに詳しく説明するわ。ここで説明するのはちよつと、ね。黙っていてくれるとうれしい」

まじめな表情に戻して小さく頷いたシエスタ。ルイズはそのまま視線をレンに移す。レンも無表情で頷いた。

「助かるわ」

その次の瞬間にざわざわとした雰囲気が食堂の奥のほうから潮が引くように収まり、僅かに緊張した雰囲気が部屋に満ちる。

シエスタとレンはさつと身を引いて、通路の中央に陣取る。大勢のメイドたちが同じように身を引いて、テーブルとテーブルの間で、互い違いにそれぞれの身をそれぞれの受け持ちのテーブルに向きなおして、済ました顔で眼を閉じる。

ルイズも身を正して、遠い食堂の奥に一瞬、視線を移しそれからす

ばやく自身の正面を向いた。その空気を読んでイングリッドも同じように身体を椅子に浅く腰掛けて、身を正し、正面に視線を移す。

僅かに顔を傾げて視線でその姿を追っていたルイズは、小さく嘆息して今度こそ本当に正面を向いた。

個人が発するには存外に大きい声が食堂内に響き渡る。

「本日は、私、サヴァアティエ・マーテル・ラ・カステン・ジョーレキベリが挨拶させていただきます」

「ふぬ？」っと、イングリッドが内心で首を傾げると、ぎつと音を立てて、生徒達が両手を握ってテーブルの上に掲げる。眼を伏せて顔を下に傾げて。何かに祈るようだ。

イングリッドは合点した。祈るようだ、ではない。まさに祈るのだ。

イングリッドも見よう見まねで同じ仕草をする。はて、様になっていいるであろうか？ただ「握る」だけならいいがゴルフクラブのグリップを握るような「ややこしい作法」があると困りものじゃ。

「我らを導きたもうは偉大なる始祖、ブルミエル」

一拍置いて、それに続く声。人数が極めて多いため、叫んでいるわけでもないのに怒声を浴びせかけられている気分になる。

『我らを導きたもうは偉大なる始祖、ブルミエル』

その声が収まるか収まらないかのタイミングで次の声が響き渡る。相当な緊張がこもることが知れる声であった。

「今生で我らを導きたもう、ブルミエルが子、トリスティンが頂、女王陛下よ」

妙な震えが残る声の後を次いで、唱和が続く。

『今生で我らを導きたもう、ブルミエルが子、トリスティンが頂、女王陛下よ』

声の後ろで大きく息を吸う気配が食堂に響き渡る。

「今ここに、今朝のささやかなる糧を」

彼は、自分自身の呼吸が大きく響き渡ってしまったことに『ささやかに』動揺してしかし、声を続けた。

『今ここに、今朝のささやかなる糧を』

隠せない溜息を大きく吐いてしかし、強く言葉を紡ぐ。

「我ら、幼き子羊の群れに与えたもうたことを感謝いたします」

一気に言い切った。それに唱和が続く。

『我ら、幼き子羊の群れに与えたもうたことを感謝いたします』

食堂の奥で祈りの言葉を紡いだラ・ジヨレーキベリと食堂全体が安堵にも似た空気に包まれる。

それを切り裂いて大きな声が響き渡った。

「はあー。緊張したよ！コロム！」

一瞬の静寂の後に、どつと笑いが巻き起こった。

「まずいって、拡声を解いていないよ。変な事言うなよ、サヴァル！」
大慌ての声が、囁くような調子で、だが食堂中に響き渡る。

「わあああー！しまった、コロム！どうしよう！」

爆笑に包まれる食堂に混乱した声がかぶさる。

「黙れ！今、拡声を……！」

ようやく声が収まったが、笑いは収まらずにしばし尾を引いた。イングリッドは思わずルイズを見る。ルイズもイングリッドを見つめる。かわいそうなのは使用人たちである。テーブルの間に立つメイドも、壁際に控えるフットマンも必死で笑いを堪えている。酷い拷問だろう。なんともしまらない食事の風景だ。イングリッドは嘆息する。何故だかこういう風景を繰り返し見ている気がする。何故だろう？

ざわざわとかましい食堂で、食事が進む。昨日のルイズのお茶の風景から貴族たちが食事に当たり、強く抑制されたテーブル・マナーを発揮して物音一つしない食事風景を展開させたらどうしようと思っただが、そんなことは無かった。

様々なルールに従い、様々な使い分けるはずの、様々な大きさとデザインフォークにスプーンにナイフ。しかし、それらすべてを使い分けて優雅に食事をするのはごくごく僅かの人間だけである。その中には我らが主、ルイズも当然の如く混じっているわけだが、イングリッドとしては、酷く複雑な気分である。市井の『高級な』レストラン

ンでのテーブル・マナーは折に触れ、習う機会もあったが、さすがにここまで本格的な、しかも、別世界のテーブル・マナー等まったく自信がない。どうしていいかわからない。

ルイズと、イングリッドの席は他の生徒達から随分離されたところにあるが、そこから見ても、相当に適当な【不確定名称：テーブル・マナー】を発揮している者がいて、げんなりする。はつきり言って、ファミリーストランでもちよつとありえないだろうという「食い方」をして恥じない人間がいっぱい居る。恐ろしいことに、それは女性も関係ない。男女の区別無く、一定数の人間がアレな食べ方である。せつかく育ちが良く、顔も良く、スタイルも良い人々なのにあんな食事風景を見せられては……。あれでは百年の恋も醒めようと思った。

食事のマナーが悪すぎて、離婚したのだと言う話を男女の区別無く聞いたことがあるイングリッドだ。当時は「そんなことで!？」と随分と首を捻ったものだが、ここでああいう様を見てしまうと納得してしまう。ましてや完璧な比較対象があるのだ。よって、イングリッドは最高に困ってしまう。どう食べればいいのかろう……？

ルイズはそうやって戸惑うイングリッドに気が付いて、手を休めて僅かに嘆息する。

「あのね、イングリッド。あなたに完璧なマナーなんて求めてないから。最低限、まあ、あいつらみたいに」

イングリッドの眼を見たまま、僅かに顔を振って、奥の生徒達を指し示す。

「最低な様を見せなければ、どう食べてもらってもいいのよ」

イングリッドは唸る。

「しかし、ルイズよ。主が完璧な食事マナーを発揮してる横で、それでは……」

ルイズはその言葉に一瞬顔を赤らめて、眼を閉じ、表情を戻してイングリッドに視線を戻す。小さく溜息を漏らした。

「あのねえ。10年以上貴族をしている私のマナーをイングリッド。あなたが1分でまねできるとでも？違うでしょ。それなりで良いか

ら

会話を遮らないように注意を払って回り込み、ルイズのグラスにワインを注ぐシエスタ。

ルイズはそれを見るとは無しに眼で追って、小さく会釈をしてからイングリッドに眼を戻す。

「そのまま残すほうが失礼だわ」

その言葉に僅かに眼を見開いて、小さく感嘆してしまうイングリッド。

「う、む。我が主ルイズよ。その通りじゃ、な。うむ。自信は無いがそれなりで、食べさせてもらおう」

眼に笑いの感情を乗せて、芝居くさい仕草で肩を竦めてルイズは正面に向き直った。

「そうしてね」

残さず食べるには余りにも多い食事量であった。朝から栄養をたっぷり摂取して、仕事に向かうが最も効率の良い合理的食事方法だとは言いが(異論もある)、それにしてもあまりにも多かった。ルイズもすべての皿に満遍なく手をつけているが、無論食べきれぬ訳でもなく残している。

食後のヨーグルトに添えられたブルーベリーかな?と思わせる果実を口にして、ナプキンで上品に口を隠して種を吐き出すルイズの姿はもう芸術的だった。

用意された食事が半端なく多いのは、理由があるのはイングリッドも理解している。残ったものは、使用人の賄になるのだ。いや、賄の材料になるのだ。使用人が高級なものを食べるのはいろいろと憚りがあるが、明らかに生徒や教職員の人数を軽く上回る数の――なにしろレンとシエスタがここにいる2人に専属で付いて、誰も困らないのだ。それだけの数の使用人の食事を別に作っては材料費も手間隙も含めて大変に馬鹿馬鹿しいことになる。

無論、材料を足して作り直し、体裁を整えて、完全には貴族の食べるものと同じ物になる事は無いだろう。いろいろ投入して、それこそ

生徒達の食事の準備で出た料理に入れる訳には行かないもの——
食べるには困らないが、食卓には出せない材料、野菜の端部とかを混ぜたりして、見た目も悪く、量を増やすためにいろいろ混ぜて、しかし当然価格が高いだろう調味料を足すことなく、それがために味が薄くなった賄となつて彼らの口に入る筈である。

大変に合理的である。

裏の意味もある。常に貴族達の口に入る食事の残りが、使用人たちの口に入るとなればけしからん事を考える者がいなくなると言うことだ。こういう厳密な階級差がある世界では、致命的になりかねない食事などは、恨みつらみを晴らす武器になつてしまいかねない。別に毒を混ぜる訳ではなく、例えば鼻くそを入れたり、雑巾の絞り汁を混ぜたりというのは十分にありえる。そうしたものが最終的に自分達に帰ってくるとなれば、けしからんことはしがたい。かくして貴族たちの健康は守られた、と言うことである。

むしろ、問題は、教職員達である。コルベールも含めて、教職員には、純然たる貴族は少ないと言うのがルイズの説明によるところである。学院長という立場にある、トリステイン魔法学院の頂点に立つ人間ですら貴族ではないというのだから、その彼らが、純然たる貴族である生徒達に用意されたのと同じ食事を取るのはどうか？とイングリッドは余計な心配をしてしまう。

非常に困ったことに、教職員の中は「純然たる貴族」が混じっているというのだからややこしい。彼らの間で食事には差をつけてはそれこそ諍いの種であろう。きつとみなし公務員という制度のように、みなし貴族みたいな形を取って整合性を取っているのだろうと想像する。だいたい、一番問題になりそうなのはほかならぬイングリッド自身である。一番に自分の心配をするべきかもしれない。

すべての作業……：食事が終わって、まったりとした時間が4人にすぎない。優雅でありながら素早い食事と言うなかなか高度な技を見せた自身の主たるルイズは懐から懐中時計を取り出して、時間を確認している。イングリッドの体感時間としては40分位しか経っていない。

ない筈だ。数字で見ると短いようで、その実、「現代社会」からすると随分と長い食事時間である。

自分がそうである事は任務の一環として紛れ込むところで経験したぐらいではあるが、まあ朝食の時間がある職業と言うのは酷く少ないが、たとえば、職業に就いている人々が昼食で40分も時間をかけて食事をするというのはなかなかありえない。

大体は昼食時間と言うのは、ごく一部の国を除いて1時間であろうし、極東のある地域の会社等では食事時間も含めた昼の休憩時間が45分だというのがあたりまえというところもある。ある種のサービス産業では30分という所すらあった。短期のバイトでそういった業界で働いたことがあったが、それもその業界では普通で、そこで働く人は疑問を思わないというのだから大した物である。

その時間に、手を洗い、あるいはトイレに行き、食堂に移動して、食事を取る。酷く忙しい。一齐に休憩に入れば、一齐にトイレに人が押し寄せるであろうし、無論、食堂にも一齐に人が押し寄せるであろう。酷く面倒な事に、仕事着で食事を探る事を禁止しているような職場もあった。そうなると45分、或いは30分の間に着替えを2回も行う必要があるわけで。食事そのものに40分も時間をかければ、午後の仕事に遅刻間違い無しである。

手早く済ませたようで、やはり貴族なのだと言グリッドは思ってしまう。イングリッドの生活では昔はともかく、「今」ではコンビニやスーパーで弁当を買って5分で掻き込んでおしまいと言う場合すらあるのだ。それでいながら食事に対する満足度は昔より高いと言うから、技術的文化的進化と言うのは恐ろしい。しかも先進国であればたいていは国の端から端まで——離島とか、山奥とかの特殊環境で無い限りはほぼ同じレベルの食事を取るのが可能と言うのだからささまじいと思う。

ルイズはイングリッドに領いて席を立とうとしたが、イングリッドはそれを制した。

小首を傾げてルイズが椅子に座りなます。

「時間はあるようじゃから……下らんことかもしれんが、教えて欲し

いことがあるんじゃないか?」

それを聞いて、腕を組んで小さく首を捻り、頷くルイズ。懐から懐中時計を取り出して、蓋を開け再度、時間を確認する。

「ん……そうね。授業の30分前ぐらいまでなら、まあいいわ」

その言葉にイングリッドは頷いた。

「ん。ありがとう。ルイズに感謝を」

くすりと笑みを浮かべて頷いて、手を振ってシエスタを呼ぶルイズ。

「いいからいいから……シエスタ、紅茶をお願い。ホットで……イングリッドもいい、それで?」

それにイングリッドも頷く。

「かしこまりました」

ワゴンを押して、ルイズとイングリッドの前から下げた食器とそこに残る食べ残しを運ぶレンを小走り、いやぎりぎり歩いているともいえなくも無い素早さで追い越して、どこかに……おそらくは厨房であろう方向にシエスタは「早足で走り」去った。

厨房の位置はあそこか、と、記憶に刻み付けるイングリッド。

ルイズは視界からシエスタの姿が消えるまでを見届けて、イングリッドに向き直る。

「で、なに?」

6つのテーブルがあり、そのうち中央よりの3つを使って食事がなされた。いや、終わったような言い方はおかしい。すでに食堂を立ち去った生徒も多いが、まだまだ食事を続けている……というか料理を突いて崩すだけで、駄弁っている者も多い。ああいう行為は無意識であるにせよ使用人の反発を招くであろう。行儀が悪いのはいろいろと損を招くものである。

中央の通路が広く、正面奥、向かって右手に2年、1年の順にテーブルを使い、左手に、空きテーブル1つを挟んで3年が座るように配されている。その理由は様々な噂があるらしいがルイズもこれと言って納得できる理由を聞いた事は無いそうだった。

生徒達のマントが見事に3つに分けられているのは、学年を区別するためで、茶色は1年、黒は2年、紫は3年と言うわけ方であるという。学年によって固定されているのではなく、入学時に前年度、卒業した生徒の色をローテーションで受け取るのだという。

そこに銀色のマントが混じっているのは監督生という制度らしいが、まったくの形骸化をしてしまった制度で、過去には教職員の手を煩わせる程でもない問題をその生徒達のもとの解決していたらしいが今では単なる名誉職だという事である。噂でしかないようだが、卒業にあたり箔をつける程度のものであって、どうも金で買えるらしくもあり、ルイズに言わせると、つまり望んで自身が無為な学院生活を送ったことを広く知らしめて喜んでいる極めつけの阿呆と言う事になる。そういう意味では区別しやすいので良いかもしれない。

上にはロフトが設えられて、そこが教職員の食事の場であるという。食事を運ぶことが面倒そうだといっても、エレベーターがあるからといわれて納得するし、納得がいかない。確かにエレベーターは地球に於いても存外長い歴史を誇る装置だが、こういうファンタジー世界では随分に場違いに思えるのはイングリッドの頭が固いせいかな？

すさまじく豪華絢爛に彩られた食堂の様子に疑問を向ければ、なにか苦いものを噛んだように表情を歪めて、ルイズはイングリッドに視線を合わせた。

「あのね、学院で教えるのは魔法の技術だけではないの」

イングリッドは頷く。

しかし溜息を吐きながらルイズは身体を傾げた。

「……メイジは、まあつまり、貴族、なわけよ」

ルイズは指を立てて、しかめっ面をして言葉を紡ぐ。

「貴族は魔法をもってしてその精神となす」

欠片も信じていない神の御言葉を唱えるような表情で、ルイズはそれを吐き捨てた。

「学院ではその精神の元、貴族足るべき教育を、存分に受ける、わけよ。だから、っていうことで、食堂も！貴族の食卓に相応しいものに設えているってわけ」

言っている内容は大変に素晴らしいが、それを言い終えたルイズの表情もまた大変に素晴らしく歪んでいる。自身の言葉を全然信じていないようだ。その顔は、そう、とある訪れた土地で、歓待を受けて最高のもてなしだと、器いっぱい盛られた足をもいだアリンコを差し出された時の自分のようであった。

いや、あのね。文化の違いを馬鹿にするわけではないの。環境によつては、虫類が重要な蛋白源になることは知っているし、芋虫を食べるとか、蜂の幼虫を食べるとかに躊躇は無いのよ。結構おいしいのもあるし。でもね。器いっぱいのアリンコ。しかも生きてるの。足をもいであるけど。生きてるのよ。それも器いっぱい。

一応ね。私も女の子だから。だから、ね。

妙な事を思い出して、ルイズの表情に釣られるように顔をしかめたイングリッドに彼女は気が付く。本当はそうではないのだが、ルイズはイングリッドが自分が何を言いたいかを理解した上でその表情に至つたのだと考えて、苦い表情をしたまま頷いた。

いや、理解したのは事実だが表情の原因は違っていた。無論、そんな些細な事をルイズに伝える気はイングリッドにはさらさら無いので神妙に頷き返す。

ルイズが深い溜息を吐いてイングリッドに力なく視線を戻す。

「どう？ トリスティン魔法学院って素晴らしいでしょ」

イングリッドはアリンコを、いや害虫を噛んだような表情で見つめ返して、しかし、すぐに小さく笑みを浮かべてルイズに笑いかけた。

「うむ。素晴らしいの」

ルイズが首を傾げる。実は伝わっていなかったのかと疑問に思ってしまう。だが予想もしない言葉がイングリッドの口から飛び出した。

「そこななかで、ルイズは立派な貴族なのだな」

一瞬呆けて、急激に顔を朱を表すルイズ。この少女は、イングリッドは、こういうことを……。

先ほど食事マナーがどうこうと言われた時にも思ったのだが、イン

グリッドは不意打ちでルイズを手放して褒めちぎる事がある。それも何の打算も感じさせ無い言い方で。心の底からそうだと言うように。恥ずかしい内容の言葉を、へっちゃらな表情で言い放つのだ。始末に終えない。昨日からどれだけの不意打ちを受けただろう。そう。「昨日」からだけである。その僅かな時間で、どれほどに。

その言葉に攻撃力があるのであれば、ルイズの身体はすでに生徒が踏み荒らした使い古しの玄関マットの如くにずたぼろだろう。

慌てて焦って、震える腕で懐中時計を取って、ルイズは時間を確認する。まだまだ時間はあったが、顔を振ってイングリッドに視線を戻す。

「あああああああのさ、もうそろそろさ、じかんもいいところだからさ、そろそろいこうか！」

その言葉に少し眼を見開いて、組んでいた腕を解いてイングリッドは頷いた。

イングリッドはルイズがどもるのを時間が無い故だろうと思いをいして即座に同意した。

イングリッドが勘違いをしたのに気が付いて、ルイズはこっそりと安堵する。

「む。そうか、少々しゃべりすぎたようじゃの」

さつと周囲を見回すと確かに随分と食堂内の生徒達の姿は減っていた。視線を上げて上を見回すと、ロフトも空っぽに近い。いや、ほぼ空っぽだ。完全に空っぽではないのはコルベールが難しい顔をして此方を見ているからで、イングリッドがにやりとそれに笑いかけると彼は慌ててそっぽを向いて立ち上がった。

それを見届けてイングリッドはルイズに視線を移す。

「ん。いくかの」

互いに頷いて、立ち上がる。2人の背に張り付いていたレンとシエスタがさつと距離を取る。その2人にルイズとイングリッドが声をかけた。

「シエスタ」

「レン」

2人は互いに顔を見合わせて、小さく笑う。

「ルイズからどうぞ」

「イングリッドからどうぞ」

しばしどうぞとやってから、同時に噴出して、イングリッドが頷くと、ルイズも笑って頷いた。その顔をイングリッドから引き剥がして、シエスタとレンに向ける。

「ゴメンね、ありがとう。私たちを守ってくれて」

そう。イングリッドは失敗したと、若干の後悔があった。いや若干どころではなかった。

シエスタたちは2人が下手な注目を浴びないようにと、入り口近くに席を設えてくれたのだ。嫌でも目に付くイングリッドである。好奇の眼に曝されないようにと配慮していたのである。それは理解していた。理解していたからこそ、時間を取って、会話をするのを選んだ。大失敗だった。

入り口に近い場所なのである。当然テーブル奥の生徒達が外を目指せばルイズとイングリッドの後ろを通らなければならない。最奥であれば1年側に回って迂回も出来ようが、無論そのような遠慮をする必要など無いから、中央通路を歩けば、必然的に2人の後ろを通る。そうした人々の注目から2人を守るために、わざと2人の座席の後ろに位置して「邪魔」になったのだ。通路を歩いて外を目指せば、メイドを突き飛ばすのでもない限りはレンとシエスタを大きく避けるしかない。中央通路は十分な広さを持っているからそれほど不自然という訳でも無いが。

しかし、途中わざと4人ぐらいで横に広がってこれ見よがしに近づいてくる者がいたので、面倒を避けるために、或いは面倒ごとにするためにイングリッドは腰を浮かしかけた。だが、ロフトの上から咳払いと言うには大きすぎる音を立ててコルベールが注目を集めてかなり強い視線でそれらを睨み付けた。

それですんだのだが、そうまでされると逆に立ち去り難くなってしまい、後ろの2人に申し訳なく思いつつも会話を続けた。

随分と「太ましい」2年生が何度と無く後ろを往復したようだが、2

人の背を守る2人のメイドがさり気無く視界を遮って守護してくれたために、彼は諦めて立ち去ってくれた。

そういう、平民と言う立場にありながらも相当に強い態度で生徒を跳ね付けてくれたメイドには感謝のしようも無かった。

ルイズが周囲の視線を気にしつつ、近くにいるからこそ気がつける僅かな動作で2人のメイドに目礼した。

囁くような声で、2人に声をかける。

「ほんとつゴメン。この埋め合わせは必ずするから」

レンとシエスタは顔を見合わせて視線を戻し、シエスタだけが小さく笑みを浮かべて頷いた。レンの方は昨日からかわらぬのポーカーフエイスである。

「いいんです。勝手にやったことですから」

素早く周囲に視線をやって、次いで視線を2人に戻し、イングリッドも小さな声でメイドに謝意を示す。

「面倒をかけた。思慮が足りなかったな、許せ」

再度「いいんです」と小さく頷いたシエスタと、無表情で此方を見つめるレンに、ルイズとイングリッドは目礼をして、足を出口に向けた。

「ルイズ、そういえば壁際の人形は何じゃ?」

歩きながら、イングリッドが小声でルイズに問う。

「ああ、あれね。あれはアルヴィーという魔法人形で……」

「アルヴィー?この食堂の名と関係あるのかや?」

「ええっ、何で知ってるの?」

「入り口の上に書いてあったよぞ。『アルヴィーズの食堂』とな」

「えええっ!あなたルーン語が読めるの!?!」

「イングリッドじゃ」

「それはいいから!」

最後は随分と大声で楽しく笑いながらアルヴィーズの食堂を出て行く二人を、やわらかい笑みで見送りながら、テーブルの上を片付けるシエスタ。

レンは呆れたように息を吐きながら2人を見送り、カップとソーサーを手にする。

シエスタはポットを手にして素早く揺ると、中身の反応がないことを確認して蓋を開け、確かに湿った茶葉がある以外には何も残っていないことを確認して、蓋を戻す。

楽しそうに笑顔でそれらを手早くティーワゴンに戻すと、素早くテーブルを拭いて満足したように1つ頷いて、ワゴンを押し始めた。後ろをレンがついて歩く。

「変わった人たちよね……」

無意識にレンが呟いたが、それを背中に受けてシエスタは大きく頷いた。

「良い人たちでしょ」

「良い人たちって……」

レンは見た事の無い話であったが、馬鹿馬鹿しい事にアルヴィーたちは夜になると食堂で踊っているという。メイジ様の考える事は何からないと思いつながら、シエスタの顔をしたアルヴィーたちが楽しそうに踊っている姿を想像すると何かの意味があるのかもしれないと、下らない思考を一瞬浮かべて、顔を振った。シエスタの背中に視線を戻す。

「あんたも変わってるわ……」

レンの呟きはシエスタには届かなかった。

ZEROのルイズ(5)

食堂入り口を出るとその正面は一直線に正面玄関に通じていて、2階天井まで吹き抜けである。その両側には吹き抜けで切断されているフロアを渡れるように渡り廊下がいくつかあるが、その風景はどこと無く、地球のどこかの都市にある瀟洒なショッピング・モールを連想させた。

やわらかくアーチを描く天井は、魔法を使つたとおぼしき明かりで照らされている。イングリッドにはそうとしか想像出来なかった。光源そのものがどこにあるかはイングリッドからは見えない。天井全体が淡く発光している様にも見えた。力の流れ、人外の能力を見る事に長けたイングリッドだが、ハルケギニアに来て以降、その能力が対して役に立っていない事がイングリッドを憂鬱にさせる。

能力が無くなった訳ではないし、ハルケギニアで能力が通じない訳でもない。世界を満たす精霊の力、「不確定名称・魔法の力」も『見る』事が出来ている。

問題はそれらの力が世界に溢れている事だった。否、イングリッドは思いなおす。

世界に「溢れかえっている」のだ。

あまりにも普遍的に、大量の力が躍っている。それに塗りつぶされて、イングリッドが能動的に選択して力を取捨出来ない状態にある。イングリッドは海水に流れ込む真水を探しているような困難を感じていた。それを成すのは極めて難しい。

それが出来ない訳ではない。海水と真水を比べる場合、比重が違ったり、温度差があつたり、分子の動きが違つたりと、判別する手段が無い訳ではない。しかし時間が経つと希釈されて、区別する意味が失われる。2つが混ざり合った1つは別の何かになってしまう。そういう意味に近い問題もあつて、イングリッドは普段の自分の力を発揮出来ないでいる。

今のところはどうしようもない問題を、イングリッドは頭を振つて後回しにした。

世界に溢れる精霊の力は、慣れれば区別できる筈という目算がイングリッドにはあった。所謂4大精霊と言う形でそもそも区別される力である。あまりにも量が多いためにノイズとして混ざり合っているが、何とかなるだろう。「普通の人間」であっても慣れれば……例えば、合金をサンダーして飛び散る火花の微細な具合から、合金に混じっている物質を正確に判別できるようなものである。問題は魔法の力だ。僅かに見た実例からしても、精霊の力を変化させて人間が使える形と成した後に出るのが魔法の力。イングリッドはそういう風に理解している。その推測からすれば、魔法の力は精霊の力から変化した時点で消費され、消えてゆく物の筈である。しかし、何故かこの世界には魔法の力が溢れている。建築物の中などではその傾向が事の外強い。それがどういう理屈なのか。そもそも前提条件が間違っているのか。そこが判らない限りは、今のところどうしようもないとイングリッドは嘆息する。

とりあえず、眼に見える範囲内で世界に対する理解を深めようと、イングリッドは視線を振る。魔法学院の設備はルイズにとつてのホーム・ベースだ。それを理解するのは急務だった。

2階に上がる階段は中央通路から直接アクセス出来ずに、いちいち脇の階段室へ足を向ける必要があるという点でこの建造物の不便さが際立つ。大食堂自体が建物の中央部分を占領している構造もなかなか疑問を感じさせる。ゾンビ相手に立て籠もるには最高のシチュエーションであろうと、イングリッドは余計な想像をしてしまう。

1階フロアの外周部分に存在する各施設は、北側を向いた正面入り口から一度大食堂の入り口前で突き当たって左右の通路を歩くか、各所にある使用人用の出入り口を使うのでなければ、後は南側から聖堂を抜ける必要があるというのもおかしな構造であると思わせる。大食堂、簡易食堂、厨房は建物の中で周囲を通路に囲まれて孤立しているといっても過言ではないのだ。吹き抜け構造の上層部にあるテラス、バルコニーは通路側で孤立して、建物の2階フロアとはすべて連絡橋を介さなくてはアクセス出来ない。食堂施設が存在する中央設

備からはその上にある中庭への階段は無く、使用人控え室に梯子があるらしい、としかわからない。3階以上のフロアに存在する教育施設には直接いける階段は無く、必ず大食堂正面入り口を出て中央通路の階段室に向かう必要がある。食堂内にある2階バルコニーにアクセスする階段も長方形の大食堂フロアの四隅に押し込められて使い勝手が悪い。厨房上には使用人の控え室があつて、簡易食堂2階は倉庫。しかもこの倉庫は大食堂2階側からしかアクセス出来ないというのだから非常にあからさまな構造だとイングリッドは見た。

つまり、本当に立て籠もるのに便利な構造なのだ。そういう使用方法を想定しているとしたか考えようがないのである。

食事を終えた生徒達が授業前に教室を目指そうと中央通路から左右の階段室に吸い込まれていくなか、それらの人並みをぬってルイズは正面玄関を出た。ルイズはまず、職員塔を目指す。

イングリッドが不思議に思つてそれを問うと、前日コルベールに呼び出されてイングリッドの元に駆けつけた時、授業道具をすべて教室に投げ出して来たのだという。しかもその後には色々あり過ぎたがために忘れ去り、今日の朝まで授業道具の存在をすっかり忘れていたのだとも言ふ。

医療室で観察した通り、教育棟の1階には窓が少ない。2階も同じく控えめの数の窓が、分厚い壁の奥に引っ込んで控えめに存在を主張している。

しかし3階以上のフロアは超巨大で豪華に飾られた窓が連続して鎮座し、どこかの宮殿のようだ。各フロアには大きなベランダが備わつていて、『現代的学校校舎』的雰囲気を感じられなくも無い。現代ではない差異と言えはそのベランダが下から柱で支えられていることで、カンチレバー構造を取れないところにこの世界の建築技術の未熟を見る。この建物の建築当時は不可能だっただけで「現在」は違ふかもしれないので即断は危険であるが。

3階のみは下の建築物の屋根構造から引っ込んでいるのも手伝つて、やたらと広いテラスが備わっているようだった。東京お台場になんな感じの建物があつたなあ。シャドルーとの戦闘で炎上したけど

……と遠い目をしてしまうイングリッドだった。

窓がやたらと大きいという一面のみに注目すれば、ロンドン万国博覧会でこんな建物を見た気がするとのんきに思うが、鉄骨で支えられている訳ではなかったからあそこまでのシースルーっぷりを発揮しているという事も無い。

2階と3階の間を境にして上下で連続性の無いその外観はひどくちぐはぐだった。

見た目は全然違うのだが、なぜだか、石垣の上に乗った日本の城砦……天守閣を思わせる構造だとイングリッドは感じてしまった。

その前を早足で歩いて回って、職員塔を目指す。

ルイズはイングリッドが来てから私の調子は滅茶苦茶だと笑う。イングリッドは我のせいかと笑って応える。

その距離感を心地よく思いながらルイズは職員塔の2階にある、デュピユイ・ド・ローム先生の席を目指す。

円形の建物と言うのは酷く無駄が多い。とは、一概にそうも言いきれない。

極めて慎重に設計を行い内部配置をしっかりと考えた上で建設すれば、これ程までに無駄の無い建物も無い、という建築を達成するのも不可能では無い。

ただし、孤立建築物限定である。

多数の建築物が集合した場合、つまり団地のような場所で円形建築物を多数配置すると、どうしても無駄な土地が発生する。

固定資産税だとかなんだというくびきがある場合、そういった無駄は致命的な問題に発展しかねないので、スタジアムやホール、強度上の問題で円形であることがどうしても求められてしまう超高層建築物でもない限り、「地球」に於いて建築物を円形（円筒形）で設計する蓋然性は殆ど無い。設計も面倒であるし。

イングリッドは教育塔がどちらの理由で円筒形を取ったのかを興味深く観察する。それがわかればこの世界の建築技術を推測する材料になるからだ。それは一足とびに飛躍して考えるのであれば、科学

技術の推定材料になり、更に関連して冶金技術などの推定にも繋がる。風が吹けば桶屋が儲かるではないが、最終的に銃火器の存在の推定材料にもなるので、ルイズを護衛する任務に対してはそれなりに安全を図る材料になるのである。

入り口に詰め所みたいのがあり、顔パスで通過する。制服を着たルイズを見て、その後ろを歩くイングリッドに訝しげな視線を送り結局素通しさせた衛視の態度を見ると、イングリッドは危機感を強めざるを得ない。

得体の知らない人間が、この学院施設で寮塔に次いで重要施設と思われる職員塔に誰何なく入り込めてしまう状況。外周の警備を突破しなければここにたどり着けない。ましてや貴族の後を付いて回る人間。

外周の警備を信じているのかもしれないし、貴族様の立場を配慮したのかもしれない。しかし、不審者阻止の最後の砦にもなりかねない人間が、やる気無く知らない人間を通してしまう。この結果は、ルイズの身を守る立場のイングリッドに頭痛を与えてしまう。

眉を痙攣させるイングリッドに気が付かないで職員塔の回廊を回るルイズ。内部構造は色々と残念な構造で、それもイングリッドの神経を痛めつける。

外壁と内部構造の2重になっているのがわかった職員塔は、内側の塔から鉄骨トラスで外側を支える構造になっていて、なかなか馬鹿らしい。外筒と内筒の間隔は目視で5メートル。上部に行くにつれてそれは狭まる。科学技術推定の確固たる材料になりそうな「鉄骨」の存在に一瞬色めき立ってしまったが、かなり粗い間隔で配されたその構造のゴツさから鍊鉄あたりかと目算をつけて、混乱してしまう。

イングリッドの眼にはそれは3000年ぐらいの歴史を持っているのが見て取れたからだ。

石造りが基本の重力式静構造物の教育棟は、病室での経験と食堂にいたるまでの観察、食堂での内部観察から6000年以上と言うのは間違いなかった。しかしここは外筒3000年、内筒6000年とずれているのが見て取れた。

放射線年代測定が出来る程には性能が良いという訳ではないイングリッドの眼だが、100年単位前後のずれに収まる範囲内では、物の年代を知る事が可能だ。建築物に宿った精霊の疲れ具合を見る事で、それを知る事が出来るのだ。だから3000年ぐらゐもずれていれば、さすがに大きな間違いはないと自分の推定を信じられる。別に年代測定の鑑定眼を望んで養ったつもりはないイングリッドだが時代の移り変わりを実際に眼で追ってきた身。自然と身についたそれなりに役に立つともどうでも良いとも思える『特技』である。

内筒に張り付いた階段を上る。

緩やかで広いが、手すりが無い。壁に手をつけて上るしかない。

飛行能力がある貴族であるなら、気にする必要もないであろうし、実際にイングリッドとルイズが階段を上る横で教職員や生徒が飛び交っているのも、実際に手すりの存在意義をことさらいいう必要性はないのだろう。ご他聞に漏れず、ここにもエレベーターがちゃんと存在していて、使用人はそれを利用してのが見える。内塔に階段の張り出し分だけ離して、外筒と内筒の隙間に器用に押し込んであるその構造は激しくやつつけ仕事である。現代建築に慣れた眼からするととても近寄りがたい威容であった。

内筒には等間隔にベランダのような構造があつて、外回廊のようになつている。これまた手すりが無い。そこから等間隔にトラス構造の支えが突き出て外筒に接続し、外筒内周にある回廊に接続している。渡り廊下がトラスの上であり、外筒の回廊とあわせてかなりごつい形状の手すりが用意されている。

外筒には大きな揃えられた窓が多数設けられていて、それらが整然と等間隔に並んでいる。

そこまで見てイングリッドは確信する。

この学院構造物は、城砦のよう。ではなく、まさに城砦だったのだ。学院として施設が建築されたのは間違いないであろうが、当然考えられるさまざまなリスクを勘案すれば、学院そのものを城砦とする合理的理由はある。2階を目指す緩やかな階段を歩きながら、内筒外周側の壁にアレコレと刻まれた傷が、実際にこの学院が外部からの襲撃

を過去に受けたであろう証拠が見えてくる。

その経験が2重構造なのだろう。

おそらく被弾によると思われる物理的衝撃による破壊の痕跡を補修した形跡がある。鑄鉄、或いは青銅製の球形実体弾の命中によって発生したと思しき破孔は完全にふさがれているが、周囲に発生したスプリンターの痕跡はかなり残されたままだ。これはルイズを守る上ではまったく無視できない決定的証拠だ。早い段階で重火器の存在の証拠を得られたのは僥倖だと思う。これからの護衛任務中にアレコレと配慮することが出来るだろう。

新たに問題となるのはその砲弾がどれほどの距離を飛翔してここに命中したかと言うことである。外周を守る城壁を飛び越えて、学院敷地外からの攻撃がここまで届いたのだとすれば射程が長いところではない。軽く10キロ以上の射程を持つということになる。理論上の最大射程でたまたま命中したのなら面倒は少ないが、有効射程内で狙って当てたとなると恐ろしく面倒なことになる。どちらにしても砲弾を吐き出した砲は、相当な技術力を発揮して製造されたことになるが、それが飛ばす砲弾が球形と言うのも不思議な話である。

常識的にいえば城壁を破られた上で、敷地内で敵味方が分かれた砲撃戦が行われた歴史が学院にあるということになるが、その辺までは判断がつけられない。またまた保留である。

しかし錬鉄の存在。それも3000年前である。どうしてもこの世界の科学的水準が読めない。悩みばかり深くなる。どう判断して良いかわからないことだらけである。

頭をうんうん唸らせて湯気を立てているイングリッドを引き連れて、ルイズが2階のフロアに入る。

完全に真円形のフロアで、一切の柱も壁もない構造が見えた。フロア構造の上にプレハブでも建てたかのように、いくつかの小部屋を別に作って、区画している。そういった小部屋は、トイレだったり休憩室だったりするのだろうとあたりをつける。もう頭が痛い所ではない。どうやって床を支えているかイングリッドの知る常識では予想することすら出来ない。

そのあたりの思考を半ば放棄して、しかし教職員の能力を測るよう
に気配を読み続ける。判る範囲内で彼らの実力を知り尽くそうと、気
を配り続ける。

直径30メートルは在る円形の空間ほぼ全体を占める雑然とした
雰囲気彼女が彼女の能力を阻害する。レイアウトは滅茶苦茶だ。好き放
題にディスクを持ち込んだのだろう。ロッカーなりチェストなり、配
置に法則性がない。必要性が出た時に、置きたい物を置きたい所に置
きました。そんな感じであった。床には一応カーペットだったもの
の残骸が敷かれているようだが、何かの前衛芸術の如く、つぎはぎだ
らけだ。段差が無いのだけが救いで、非常にうまくつき合わせてあ
る。技術力の無駄使いここに極まれり。

教師や職員の机とそれらに付随する設備で暗礁宙域化した中をル
イズがすすいと進んでゆく。イングリッドはシールドが欲しいと
思ってしまう。うっかりすればデブリに激突して機体損失だろうと
わけのわからない妄想をしてしまう。

授業前の喧騒か、先生達、と思われる人々が書類やら教科書やらと
格闘している。助教師等もいるようだ。えらそうに若い人間を怒鳴
りつけている爺もいる。マントをつけた者が頭をかきむしったり、誰
かの使い魔と思しき大型の狼？が書類を啜えて走り回ったりしてい
る。モッフモフやで！飛びついて撫で回したい誘惑をイングリッド
は振り切った。

その混乱の間を職員らしき人間が決済書類らしきものを持って走
り回っている。すばらしい混沌。学校施設の職員室とはどこもこう
いうものなのだろうか。これが普通なら、さくらのように体力お化け
のような人間が年がら年中疲れ果てているのも理解できる気がする。

イングリッドの眼にうろこが張り付きまくっている内に、ルイズは
目的の場所にたどり着いた。急ぎの仕事が無いのか、のんびりと書類
をめくっている。ルイズはデュピユイ・ド・ロームの神経質そうな顔
に皺が深く刻み込まれたその視界に回って、声をかけた。

「ミスタ、ド・ローム先生」

ハッと気が付いて顔を上げる。イングリッドは惜しいと思った。

もう少し柔らかい表情が得られれば、なかなか印象深い表情を得た、好感の持てる顔になったであろうと思わせる姿だった。

しかし彼の顔の現実には神経質さが先に立ってしまっている。

「お……どうしたかね？ミス・ヴァリエール」

その時、ド・ロームというイングリッドにとつては初対面の相手が、ルイズたち生徒に神経質にならざるを得ない理由がわかったような気がした。複雑な感情を混在させて此方を見上げている表情はいつぞ痛々しいとまで言える。貴族である生徒との距離感を図るのが難しいのであろう。教師と言う形で上にありながら、その存在に於いては格下どころではないのだ。教師と言う人のあり方は、生徒というあり方に対しては最初から、相対的に『上』であり続けることを求められるのだ。で、あるのにハルケギニアの社会のあり方がそれをややこしくしている。彼らが生徒と会話一つするのも胃が痛い経験になるだろう。

ルイズのようにそういう距離感を気にしない生徒はありがたくも迷惑だろう。個人間の会話のみであるなら気にする必要もないのだろうが、そこに耳をそばだてる第3者が居ればそれだけで恐ろしく状況が混乱する。僅かな経験からも存外気さくな性格を持っていると知れるルイズだが、そうやって気さくに近づいてくるからと言って教師がそれにあわせることは危険すぎる。無防備に接して考え無しに彼女を扱えば「あの先生は貴族を蔑ろにして……」等と悪い評判が立ちかねない。しかし「そういうことなのでもっと気をつけてくれ」とは教師側から生徒であるルイズに申し立てることも出来ない。教師である前に『平民』と言う人のあり方に身を置いているのだ。となれば常に教師が空気を読んで接するしかないということになる。恐ろしく厳しい職であろう。イングリッドはうっかり同情を覚えてしまう。

「あの……申し訳ありません。昨日は授業を途中で抜け出してしまいました……ご迷惑をおかけしました」

ルイズが頭を下げる。イングリッドは誰にも知られることの無いように小さく溜息を吐く。これは……やりにくかるうよ。

むしろ胸を張って用件だけ言ってしまったほうが、ド・ロームにはありがたいことだろう。

予想通り、彼は酷く難しそうな顔をして、言葉を慎重に選びながらルイズに答える。この会話は彼には相当堪えるであろうと想像して小さく笑うイングリッド。

「う……うむ。気を使う必要はないよ、ミス・ヴァリエール。君にもその……」

彼の視線がちらりとイングリッドの方を向いて、すぐにルイズに戻された。

イングリッドは内心で胸をなでおろした。その何かを確認する気持ちの乗った視線は、明らかに自分の存在を知っている視線だった。

「……使い魔のことですらいと大変であったのだろうか？ あー、今の時期ならそれほど授業に影響も無いからね。大丈夫ですよ」

やはり、とイングリッドは内心頷く。きつとコルベールが気を回して申し送りしてくれたのだろう。このフロアに入った瞬間から此方をうかがう気配が複数感じられていたが、それは得体の知れないものに対するものではなく、何かを確認しようとする好奇心じみた感情が乗っていた。もしかしたら入り口の監視にすら手を回していたのかもしれないと思ひ直す。そうであるならばコルベールは随分と気の使える人間であるのだと、彼に対する評価を上げる。

「……その、なんだ。あー、彼女がミス・ヴァリエールの使い魔……で、よろしいのかね？」

やはり人間を「使い魔」と表現するのは抵抗があるのだろう。彼の顔には隠しきれない困惑が見えた。

ルイズが生真面目な顔をして頷く。

「はい。彼女は私の使い魔です。イングリッドと言います」

「ほら」とルイズがイングリッドの背を押す。周囲の視線が痛い。

少しだけ悩んで、言葉を選ぶ。シエスタとの会話で大きな誤解が生じていたことに気が付いたからだ。ここでもその誤解が続いてしまうのなら。後々ともない苦労を背負い込むことになりかねないとイングリッドは警戒する。

「はい。私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールの召喚に応え、召喚の儀の場に現れました。イングリッドと申しませう。いろいろと行き違いがありました。昨日、無事に契約の魔法を成功させて、使い魔となりました。以後、見知り置いて頂ければ幸いです」

普段の常なる態度と違うイングリッドの姿に、ルイズは自分が居る場所も忘れて大きく仰け反った。イングリッドはそれに気が付かない風を装ってド・ロームの表情を観察する。内心では冷や汗をかいて、彼の反応をうかがう。

硬い表情で一瞬固まった彼は、ゆっくりとイングリッドを上下に見渡して、鷹揚に頷いた。

「うむ……なかなか面白い力を持っているようだね、君」

小さく笑ったその顔はそこそこに好意的印象が見えた。彼はルイズに向き直った。

その姿を見送ってイングリッドは彼の言った言葉を捉えて、警戒心を募らせてしまう。

メイジというのは、イングリッドが内包する力を嗅ぎ取る何かの術をすべからず持っているのだろうか？しかしルイズにはそのような素振りが見られない。難しい判断が迫られている気がする。力を隠し続けるべきか。隠せないならいつそすべてを明らかにするべきか……。

「うむ。良い使い魔が得られたようだ、ミス・ヴァリエール。大事にしないさい」

ルイズは驚愕で固まっていた表情を一瞬呆けさせて、次いで小さな花が開くような笑みが彼女の顔を覆い、うんと頷く。

「……はい。私の使い魔です。素晴らしい使い魔です。大事にします！」

ルイズの笑みに釣られるようにイングリッドも笑った。ド・ロームもそれに釣られて笑う。一瞬、それに気が付いて誤魔化す様に咳払いをして、彼は表情を取り繕い、再びルイズに身体ごと向き直った。

イングリッドは、ド・ロームにそれなり以上の好感を持った。悪い

人物ではないのだろうと考える。信じられそうな人物をピック・アップ出来たことは一つの成果だろう。

「……使い魔の紹介のためにここに来たわけでもないでしょうミス・ヴァリエール。何の用件でしたか？」

それに、「あつ」と小さく驚いて、恥ずかしそうに顔を振り、ルイズは本題を切り出す。

周囲でイングリッドをもっと良く見ようと観察する視線が増えるのがわかる。フロアの出入り口から遠い場所にわざわざ足を向けるとなれば、彼ら彼女らの目的は一つしかないだろう。

「え、すいません。その。昨日ですね、授業道具を放り出してしまっただけです……あずかっていないでしょうか？」

おう。とても声を出しそうな仕草で頷く。彼は、デイスクの書類やら教科書やらの山の間、の間の溪谷に手を入れると、そこから一つに纏められた勉強道具を取り出した。

「うむ。ミス・ツエルプストーリーから預かっているよ。これでよいか確認してくれないかね」

随分と人好きする笑顔になった彼は、ルイズにそれを差し出す。イングリッドはその表情が彼の素なのだろうと想像する。

ルイズが小さく驚いた。

「え、きゆる……」

ルイズは何かの動物の鳴き声のような声を出しかけて、口を紡ぎ、慌てて言い直した。

「ミス・ツエルプストーリーが？」

妙な表情で疑念を顔に表したルイズに彼は頷く。

彼自身は小さな笑みを浮かべていた。

「うむ。よい友人を得ているね、ミス・ヴァリエール。あの子は君の事を随分と気にかけていたようだ。時間が取れるときに良いから、彼女にも使い魔を紹介してあげると良い。きっと喜ぶだろう」

その言葉で表情を複雑に歪めて曇らせてしまうルイズ。その反応に、ド・ロームは一瞬訝しげな表情を浮かべ、ついで隠し切れない動揺が現れる。ルイズは貴族なのだ。教師でしかないド・ロームには腫

れ物である。なにか対応を誤ったのかと不安に思っているのだろう。イングリッドがすぐさま軽くルイズのわき腹を小突く。基本的に頭の良い彼女である。それだけで気が付くであろうとイングリッドは予測した。

事実、ルイズはハツとした表情で視線を上げた。椅子に座ったド・ロームの顔に現れているものに気が付いて、表情を慌てて笑顔に戻す。イングリッドはうんと頷いた。やはりルイズは頭が良い。後は経験を積みれば大成するだろう。

「はい。預かっていただきありがとうございます。ミス・ツエルプストーにもお礼を言っておきます。ご迷惑をおかけしました」

ルイズは小さく頭を下げた。ほっとした表情でド・ロームは誤魔化しきれずに溜息を吐き、それに気がついて慌てて笑顔を浮かべた。

「うむ。どこまでお役に立てたか、喜んでもらえて幸いだ。そろそろ授業に向かうと良いでしょう。今日は新任の先生が顔見せする日です。早めに教室で待ったほうが良い」

「えっ、そうなんですか」

「うむ。昨日の授業の最後に説明したのだが、ミス・ヴァリエールには伝わっていないようだね。申し訳ないことをした」

再び冷や汗を流しながら彼は大きく頭を下げた。ルイズが「あわわ」と喚いて両手を振る。

「いえー私が授業を抜け出したんです。しょうがないです。でも、教室は予定通りの部屋で良いんですか?」

小さく頭を捻るルイズに、彼は安心したように頷く。イングリッドはこの学院の先生と言うあり方に同情する。随分と気を揉む職業だ。コルベールもこういう気分を味わって頭頂部を寂しくしたんだろうか?

「うむ。昨日と同じ教室を使う。さあ、そろそろ急いだほうが良い。君の……ああーっと。使い魔君も居るのだから、慌てないうちに教室に向かったほうが良いだろう」

ルイズもイングリッドも行儀良く彼が本当はうっかり何を言っただけで頭を叩いたか気がつかないフリをして頷いた。二人で頭

を下げて、失礼しますと声を出す。来る時とは異なり若干の荷物が増えたルイズは飛び跳ねるような勢いでフロアの外を目指す。周囲で此方を伺っていた視線はいつの間にか消えている。ド・ロームの失言に気がついた瞬間に蜘蛛の子を散らすように逃げ散っていたのだ。イングリッドの視界の隅でド・ロームが頭をかきむしっている。確かに毛根の健康に悪い職場だな……。

勢いよく階段を駆け降りて、衛視の前を走り抜ける。職員塔を抜けて敷地を走るルイズ。その後ろから心配そうにイングリッドが声をかけた。

「ルイズ……さっきのは……」

ルイズは大きな声をかぶせてその言葉を遮った。

「言わないで！」

一瞬振り向いて強い視線でイングリッドを貫く。しかし、その顔は笑顔だった。また前に向き直り走る。

「気にしてないからー」

あれだけ走ったのにルイズは息を切らせることは無かった。若干、頬が紅潮し肩も上下に揺らいでいるが、教育棟の4階まで一気に走ったのに、疲れた風でもない。やはりイングリッドの想像通り、ルイズは身体が丈夫なんだと思った。いや、望まずとも丈夫になってしまったのだろうと思ひ直す。

扉を抜けると、まず教壇と黒板が見えた。大きな教卓が鎮座している。これまた大きくて幅が広く背の高い黒板が、真ん中で区切られてチェーンで連結されている。上と下を入れ替えれるようになっていたのだろう。良く考えられたギミックに小さく驚く。

階段状になった席配置もなかなか考えられている。これなら後ろからでも前の席の生徒が邪魔になることなく教師の姿を見ることが出来るだろう。外から見たとおり、大きな窓から降り注ぐ光も教室を明るく照らして勉強の場としては良い雰囲気である。技術レベル的

にいろいろと悩ましいところが多かったが、勉強の場における様々な工夫の跡には素直に感心する。

イングリッドが現代社会の教育現場に疎いだけで、現代社会を知るものがこの風景を見れば、大体の者は平均的な大学の講義室のようだと感想を述べたであろう。日本の一部の私立高校や欧米のハイスクール等でも取り入れられている構造である。ヨーロッパでは1900年ごろにはすでに見られた形態だ。

彼女の生活にまったくと言って良いほど関わってこないそうした情景に、イングリッドはとことん無知なのだ。さくらやそれと関わる人間、たとえばかりんやひなたといった人間とは精々が学校と言う施設のごく一部でしかない運動場で闘争を繰り広げたぐらいである。さくらに関しては彼女の家まで押しかけたことがあったが、その自宅は平均的な日本の家屋であったので、当然学業の場がどうなっているかなんてイングリッドには想像の機会さえなかった。さくらとの会話などで「教室」というものが集団で勉強する場所の名称だとは知っていたが、さくらにとつての常識から教室の構造が……なんていう説明がことさら言われるわけも無く(何しろ『常識』なのだ)、イングリッドもさくらが話す彼女の日常生活の描写を「ふーん」で済ましていたから、現代とハルケギニアを比べようも無かった。

これまたイングリッドには縁も縁もない話であるから、黒板が「黒板」というものであることは知っていても、黒板の時代的由来がどうとまでは考えが及ばない。彼女の生活の中では気がついたら街角で見かけるようになった気にかける必要も無い道具の一つでしかなかったのだ。気がついたら、カフェやバーの軒先に置かれてその日のメニューが書かれている便利な道具。その程度の認識である。腹を空かせてそれを見るイングリッドにとっては書かれている内容こそが重要であつて、黒板そのものに注目が行くことはなかったのだ。

黒板自体の出現は19世紀前半にさかのぼることが出来るが、大々的に使用されるようになったのは19世紀後半である。大量消費が始まったのは軍事目的からであるが、そうであるが故に高価でなかなか広まらなかった。それが安く簡単に手に入ってカフェの前に置か

れるようになるのは1940年前後と言うことを知れば、イングリッドは頭を悩ませて爆散していたかも知れない。

一般的に普及したレベルで考えると、黒板は20世紀の道具なのだ。

そういった構造に「ふんふん」と感心しているイングリッドを引き連れて、ルイズは教室の一番前にある列に席を取る。無遠慮な視線が山ほど浴びせかけられるがルイズはまったく気にしていない。胸を張って、むしろ楽しそうに準備をしている。自分の横に立ったまま「ごくごく」と頷きながら周囲を見回すイングリッドのすそをひいてその視線を自身に向けさせる。

「なんじゃ?」

小さく笑みを浮かべたルイズは、自分の隣を「ぱんぱん」と手のひらで叩いて指し示す。イングリッドは頷いてそこに腰を下ろした。

余り良い気分になれない押し隠した笑い声や、囁きを無視して、ルイズが懐中時計を取り出して蓋を開け時間を確認する。そうしてルイズとイングリッドの間に双方から良く見えるように時計が机の上に置かれた。9時45分。まだまだ余裕がある。

いくつか質問をこなす時間も取れそうだと、ルイズに視線をやると「なに?」とでも言いそうな顔が此方を向いていた。随分な以心伝心をこなせる自身の主に苦笑して、さて、何から聞けばよかろうかと頭を捻ったところで、ルイズが僅かに緊張するのがわかる。視線が教卓の右側に向いている。イングリッドも振り返った。

フレイムをつれたキュルケが開け放たれた入り口に立っている。

朝のやり取りを思い出してイングリッドはふつと笑う。

朝の時点でキュルケが随分とルイズに「特別」に気を回していたことを思い出す。職員塔でのド・ロームとの会話は朝に得た確信を補強するだけだった。ルイズはキュルケが自室の窓から外に出ずに、わざわざ階段を降りていった意味を理解しているのだろうか? ルイズが自分自身でその事実にとどり着いてくれることを願うイングリッドは、そのことをルイズに説明する気が無い。

緊張した表情のルイズの横で小さく笑いを浮かべてキュルケを見

る。彼女も随分と複雑そうな笑みを浮かべてこちらを見ていたが、ふっと肩をすくめてフレイムを追い立てる。フレイムはキュルケとイングリッドの間で何度か目線を彷徨させた後、諦めたように、のっしのっしと階段を上り、教室の後ろを目指す。教室に入った時点でイングリッドは気がついていたが、教室の最後尾には、山のように怪物が寄り固まり、なんだか良くわからない言葉と仕草が飛び交ってそれなりにコミュニケーションを取っているようだった。彼もそこに混ざるのだろうか？

笑みを顔面に張り付かせたままのキュルケが此方に近づく。ルイズは非常に複雑な表情だ。ド・ロームに言われた言葉を思い出しているのである。キュルケに複雑な感情を持っているらしいルイズだが、イングリッドがある程度理解したつもりのルイズの性格なら最初に出る言葉は一つだろうと予測する。

「おっはよ。ルイズ。さっきぶりね」

「むっ」としたルイズだが、小さく息を吐いて躊躇し、しかし、顔を上げて、目の前に立ったキュルケに自身も立ち上がって答えた。

「ありがとう。ミス・ツエルプストー」

「はいい?」

彼女が予想していなかった反応だったのか。群れる場所を追われた老成した刑事のような、若い女性には似合わない妙な口調でキュルケが驚く。それを見て、イングリッドは思わず噴出した。

それですぐさま気を取り直したキュルケが、しかし妙な表情のままルイズに問いかけた。

「えっと、どういたしました?」

ぷっ、とルイズも噴出す。頭からクエスチョンマークを飛ばしそうな表情で、キュルケは頭を捻っている。ルイズは呆れたように小さく笑って腰に手をやり、右手で先程準備をしたルーズ・リーフを持ち上げた。

「片付けてくれたんでしょ。助かったわ」

ああ、と合点したのか、こくこく頷くキュルケ。初対面時と違い随分と余裕が無いその仕草に、イングリッドは顔が歪む。

それに気がついて、不満そうな表情を浮かべたキュルケだったが、はあ、と溜息をつくとき、イングリッドの横の席に入り込んでさっさと腰を下ろした。

腰を下ろして前を向き、足を組んで、手も組んで。準備万端となったところでイングリッドに視線を移した。

「ここ、座らせてもらうわ」

イングリッドも眉を跳ね上げてキュルケを見つめてしまう。

「座ってから言われてものお……」

「座ってから言うな！」

立ってイングリッドを見下ろすルイズと眼を見合わせて、小さく笑いあい、ルイズは溜息をついて席に腰を下ろした。

それを見てキュルケは小さく笑う。

「仲、いいわね」

即座にルイズが答えた。

「でしよ」

背もたれに大きく背を預けたキュルケが、イングリッドの後ろに視線を通してルイズにやりと笑いかけた。

ルイズも背もたれに身体を預けてイングリッドの後ろから視線を通し、キュルケの言葉に屈託無く応える。

イングリッドはムズ痒い思いを背にしてぶるつと身体を震わせた。

「なにこ？」

「なによ？」

ほぼ同時に反応して顔を見合わせる二人を見て「主らもたいがいじゃ」とは言えないイングリッドだった。まあ、仲のよいことは重畳じやて……。

頭を振って、後ろに身体を回し、上を見上げるイングリッド。ごく一瞬だけの強い意志の透過に、教室のざわめきが収まるが、イングリッドの視線が生徒達の上を飛び越えてその後ろの使い魔達へと向くと、あつという間にざわめきが戻る。

イングリッドに釣られて視線を向けたルイズとキュルケに気がついて、イングリッドはルイズに問いかける。

「んむ。ずいぶんいろいろな居るんじやな……おもしろいの」

何を言われているかに気がついたルイズも後ろを見渡す。ルイズは自身の失敗の連続と、その後の混乱で、どうしたところで存在感が強烈過ぎた風竜以外にどんなものが召喚されていたかを知らなかったことを思い出した。イングリッドと同じように興味深そうな視線で後ろを見渡す。

イングリッドが目を覚ますまでの期間でも、本来であれば他の使い魔を観察する時間は存分にあつたはずだったが……イングリッドの事や、自身の問題に気をとられていたルイズは、彼ら使い魔に対して一切の注意が向いていなかったことを思い出していた。

「そうね……。いろいろ居るわね……」

そこに暗い感情は感じられない。純粹な好奇心だけがあつた。イングリッドは内心で安堵を吐いて、知らない生物達の情報を得ようとルイズに問いかける。

「んむ。でっかい蛇に、鼻か……カラスに、猫。まあ、定番じゃの」

イングリッドの頭には、暇つぶしに読め。あんたの家は殺風景過ぎる！と、さくらに押し付けられたゲームやジュブナイル小説、漫画等の内容が思い浮かぶ。そうやって頷いているイングリッドにルイズは驚いた。昨日の時点でイングリッドは魔法がほとんどない場所から来たのだと見当をつけていたのだ。それなのに召喚された生物の一部を指し示して「定番だ」と批評している。イングリッドに対する評価がルイズの中で混乱する。

イングリッドはその様に気がつかず、さらに目線を振る。

「んーあの6本足は見たことないの。なんじや？」

唸っていたルイズは何を言われたか判らずに一瞬の混乱を表情に出す。キュルケがそれに気がついて助け舟を出した。

「ああ、あれね。確か……バジリスクって言ったかしら？」

ルイズも慌てて頷く。少し眼を泳がせて、ここにはない、いつか見た図鑑のページをめくるように思い出しつつイングリッドの疑問に答える。

「ええっとね、たしか……オーガとかの巨体のモンスターも一瞬で死

に至らしめる猛毒を持った蛇……だったかしら」

その答えに、妙な表情でルイズに視線を移すイングリッド。

「トカゲじゃないのかや?」

「そう言われてみればそうよね」と、ルイズも首を捻る。

「凶鑑の挿絵もトカゲにしか見えないのに『蛇』って表現なのよ。なん
でかしら……?」

キュルケも首を捻る。

「そう言えばそうよね。考えてみると不思議だわ」

イングリッドは鼻白んだ。

「いい加減じゃのう……」

顔を寄せて小さな声で反論するルイズ。

「しようがないじゃない!そう書いてあるんだもん」

「はいはい」と、身体を仰け反らしながらなだめて、イングリッドは
別の生き物に視線を移す。

「あのでかい目んタマの、ふわふわのもこもこはなんじゃ?」

ルイズには「ふわふわのもこもこ」と言う表現は理解できなかった
が、目んタマといわれてアレのことかな?と視線を移す。

「ビホルダーね」

どうやって飛んでいるか理解しようと、イングリッドは力の流れを
読む。下から吹き上がる力の流れが見えた。

ルイズはビホルダーを呼び出した誰かを素直に賞賛しようと思っ
たし、素直に疑問を思う。

「あれはメイジにはかなり危険な相手なのよね」

ルイズが答える前にキュルケが表情を僅かに曇らせて答えた。

「ん。なぜじゃ」

イングリッドがキュルケに向き直る。イングリッドの顔がキュル
ケに向いたことにルイズは僅かな怒りを覚えた。だが2人は気がつ
かずに会話を続ける。

「あいつの視線は魔法を無効化するのよ。フライを使つてるときにあ
れを食らったら大事故よね」

「……ほうー!」

イングリッドは感嘆した。相当に強力な相手だと認識する。ルイズの爆発も無効化できるのだろうか？

ルイズはその「魔法無効化」と言う部分に引っ掛かりを覚える。魔法がもつとも大事なメイジが呼び出した自身にもつとも相応しい使い魔の力が「魔法無効化」。もつとも相応しい力が？

あれこそ自分に一番相応しい使い魔ではなかったらうか。ほかならぬ自身の大事な使い魔の背を見ながら、とんでもないことを考えてしまったルイズの表情が曇る。

突然暗い感情が渦巻いた、その気配に驚きイングリッドはルイズに振り返る。

「な……どうした、ルイズよ。大丈夫かえ？」

顔を上げたルイズには視界いっぱいイングリッドの顔。仰け反って飛びのくルイズ。その瞬間に彼女は左のひじをしたたかに机にぶつけてしまった。かなり大きな音が響いて一瞬だけ教室が静まり返る。

「あうう……！あの、あのね、イングリッド」

悶えるルイズにイングリッドが心配そうに顔を近づける。

「な、大丈夫かルイズ？」

その顔を抑えて引き攣った自身の表情を思いながらルイズは、弱々しい仕草でイングリッドの身体を押し返した。

「近いから、顔！」

「おおー」とか言って飛びのくイングリッドはキュルケの身体にぶつかる。豊かな双丘がクッションとなって跳ね返されたイングリッド。呆れた表情で2人を見るキュルケ。

「ホントに仲いいね、あんたたち」

その声に2人で身体を跳ねさせて顔を見合わせる。乾いた笑みを同時に浮かべた。

何かを言おうとしたルイズだったが次の瞬間、教室の入り口から足音が響いた。そちらに顔を向けると、見たことのない姿の女性が入ってくる場所だった。あれが新任の先生だろうか？机の上の懐中時計を見ると時刻は10時10分を回っている。まあ、平均的な時間だ

ろう。

ルイズはさっと身体を前に向ける。教室の後ろのざわめきも静まった。キュルケも面倒くさそうに身体を回して前を見やる。

どことなく優しい雰囲気、輝かせた瞳が印象的な中年の女性だった。それなり以上の人生経験が刻まれた顔は、しかし柔らかい空気を漂わせている。イングリッドは時にさくらをも叩きのめした彼女の母親の姿を幻視する。新任ゆえの希望に満ち満ちた表情なのか。あれが職員塔で見た疲れ果てた教師達と同じように薄汚れていくのだろうか。

品のいい紫色のローブはイングリッドの服の色よりは淡いが、彼女の立ち振る舞いに良く似合っている。所謂「魔女帽」の唯一言で説明しきれるような、同じく紫色の帽子。白いリボンが巻かれているということはない。シンプルなデザインだ。ローブの下から姿を見せる、ゆったりとしたズボンの裾は使い古された、しかし手入れの良いブーツに押し込められている。マントは身につけていない。

一見した印象に惑わされてはいけない手合いと思う。馬に乗るようなあの下半身の姿は、かなり活発に動くことを普段からの前提にしたスタイルだ。走り回ることにはさすがに苦手な様だと見るが、活発に飛び回ってはいるだろう。ローブも帽子も手入れが行き届いているが、あちらこちらに補修の痕跡がある。きつと採集とか何とかで外を走り……飛び回っているに違いあるまいと想像する。

静まった教室を見回し彼女は、満面の笑みをこめて大きな声を出した。

「はじめまして皆さん。私はシュヴルーズ。今日から皆さんを教えることになりました土メイジ。新任ですが、これからよろしく願いますね！」

頷くルイズにつまらなそうに頬をついて頭を傾げるキュルケ。後ろからはしらけた雰囲気伝わってくる。

しかしその空気にまったく当てられることもなく、元気いっぱい声を張り上げるシュヴルーズ。なかなか良い性格の様だ。

彼女は教室を見回して大きく頷いてうれしそうに微笑んだ。

「まあ！みなさん！春の使い魔の召喚の儀は大成功だったそうですね！実際に目にする、皆さん、いずれ劣らぬ素晴らしい使い魔を呼び出したようですね！」

腕を組んで苦笑いをしながら大げさな身振り手振りを交えるシユヴルーズを見守るイングリッド。その姿にかけらも共通点が見当たらないのになんとなくかりんを思い出す。こんな考えをしていることを知ったら彼女は殴りかかってくるだろうか？

笑みを浮かべたままの彼女の顔が下へと移ってゆき、遂にイングリッドにたどり着いた。一瞬、訝しげな表情を浮かべた後に、大きく頷いてまた笑う。ルイズもキュルケもその反応に首を捻ってしまう。「まあ！まあまあ！本当に人間ですね！ミスタ・コルベールから聞いてますわ。ミス・イングリッドでしたかね？」

その声に、イングリッドは頷きそうになったがそれを制して、彼女は言いなおした。

「ミスタ・コルベールから聞いておりますわ！ミス・イングリッド。自分のお名前にこだわりがある様子。でもこの歳ですから。ごめんなさいね！恥ずかしいですよ。ミス・イングリッドで我慢して頂戴ね！」

ルイズとイングリッド以外の生徒達が首を捻るのが理解できた。キュルケも何を言っているんだろうという表情でシユヴルーズを見ている。

イングリッドは苦笑いを大きくし、ルイズは机に突っ伏しそうになったが堪えた。

コルベールは何を申し送ったんだ！

二人の思ったことは同じだった。

イングリッドの中でコルベールの評価が一段階下がった。

イングリッドは続けて思う。

この御仁は悪い人ではない。悪くはないが。その、何と云うか……。

疑問が晴れる前に、教室の後ろから大きな笑い声が沸き起こった。

「召喚できないからって金で雇った人間を連れてくるなんて、随分なご身分だな！ゼロのルイズ!!」

そういう発言がどこかで出るとは予想していた。覚悟もしていた。しかし予想以上の悪意の発露にイングリッドは怒りがわく前に驚いた。

ルイズと言う存在がそこまで貶められていることを知って、悲しい気持ちでイングリッドの胸を痛めつける。

かなり強烈な負の感情であったためかシユヴルーズも驚愕で身を固めている。キュルケもびっくりしたとばかりに振り返った。

イングリッドの感情が怒りに転化する前に、ルイズが能面のような表情で立ち上がりゆっくりと振り返る。

長い、光沢すら見せるピンクブロンドを翻して、後方をにらみつける。イングリッドがこの世界に現れて後、もつとも強烈な怒りの感情が彼女を支配していることがわかって身を大きく震わせた。

「なんですって……!!」

地を割って現れたあの日の恐怖の大王の再臨に、イングリッドは冷や汗を流す。唇が大きく震える。

視線の先にあるのはどこかで見た記憶の在る、余裕のない顔が印象的な少年だった。ルイズの極めて厳しく激しい剣幕に一瞬ひるんだようだったが、身体を前に傾げて、いやらしい笑みを浮かべた。

イングリッドはいろんな意味で感心してしまう。知らないとは、幸せなことだ……!!

「はんっ！魔法が使えないからって、金で解決つてのが大貴族のやり方かよ！貴族も腐ったもんだな！」

キュルケの表情が蒼白になったのがわかった。イングリッドはキュルケがそういう表情を出せることの理由に思い当たる。やはり彼女はルイズを良く知っているのだ。ルイズのその内面を理解しているのだ。

それは地獄で見かけた場違いな菜の花であったが、状況に変化を与えるものではない。地獄の釜が開く寸前の修羅場である。決定的な

何か一つで釜の蓋が開き、或いは底が抜けるだろう。悪意に染まった溶岩が学院を溶かしつくすに違いない。

壮絶な感情の嵐を真横から吹き浴びせられてイングリッドは硬直した身体を動かせないでいた。思考が引き伸ばされる。この感覚は何度も感じたことがある。

死、だ。

濃密な死の臭い。

甘かった。これくらいは想定してしかるべきだったのかもしれない。しかし後悔は先に立たない。これを現状、意図的に制限された自身の力で抑えきるのは難しい。自分1人ですべてを投げ出して逃げ出すのはたやすいが、全てを丸く治める方法なんて思い浮かばない。どうするどうするどうする！

決定的な「何か」がああ愚か者の口から出そうになっている。時間が遅い。すべてがゆっくりと流れるその世界を唯眺めるだけのイングリッド。思わず目を閉じそうになった。

その次の瞬間。

「どかつ」と言う鈍いが激しい音と共に、少年の身体が机の裏に沈んだ。周辺で汗をかいている少年達の上半身が妙な動きを隠して正面を向いている。下半身が相当にせわしなく動いているようだったが、机の下を隠す板が邪魔で何をしているかまでは見えない。

しかし、想像は出来る。みんなで蹴りを入れているんだろう。それも相当に激しく。

ルイズは一瞬で呆けて疑問を浮かべる。お行儀の良いルイズにはあそこで起きている現実も想像もつかないのだろう。イングリッドも緊張が解けてへなへなと肩を落とす。キュルケも呆けて、次の瞬間にくすくすと笑い出す。

ルイズの怒りとその噴出した雰囲気気がつかなくなったのは机の下でケルナグルな目にあっている愚か者だけであつたようだ。さまざまな緊張感に包まれた教室では、前にいる2人、シユヴルーズも含めれば3人も含めて、恐怖の大王の光臨を正確に気がついていたのだ。

恰幅のいいと辛うじて評価できる少年が、やけに元気よく立ち上がる。やたらとあちらこちらで見かけたような気がするイングリッドだったが、なんら危険性を感じなかったので、まあ、いいかと無視する。

「ミセス・シユヴルーズ！ミスタ・ヴィノグラドフは気分が悪いそうです！」

ようやく動きを取り戻したシユヴルーズがしかし声を出せないままこくこくと頷く。

「僕がミスタ・グランドプレと一緒に医療室に連れて行きます！」

金髪のなかなか色男とって良い少年が続いて立ち上がる。

声を取り戻して落ち着きも取り戻しつつあったシユヴルーズが再度頷く。

「ええ……ええっと、ミスタ・グランドプレとミスタ・グラモン……でよろしかったですか？」

名前も顔も知らなかった新任教師が自身の名前を知っていた事実を驚いたような2人が頷く。それで名前を間違わなかったことに確信を持った彼女は再度大きく頷いた。

「申し訳ありませんが、お願いできますか？」

イングリッドはそのやり取りを見て首を捻る。シユヴルーズは何がどうなったか気がついていいるんだろうか？ド・ロームなら気がついていいるんだろう。それ以前にこんな修羅場を招来するような微妙な話題をそもそも出さないかもしれない。何とか慎重に避けて通るんだろう。コルベールならどうしたであろうか？

しかし、とも思い直す。シユヴルーズは天然で、何故こうなったか、どうしてこうなったか、今一つ理解しているとは言いがたいようにも思える。それでよかったのかも知れない。問題の根本的解決にはなっていないが、この「使い魔」の話題はどうしたって避けて通れないのだ。早いか遅いかの違いでしかない。最初の最初で激しい修羅場を晒して問題を惹起できたのは不幸中の幸いであったのではと思った。

正直イングリッドもこうも早い段階で、こういう風に問題が表に出

るとは思わなかったし、こういう解決法があるなんて知らなかった。いや、解決はしていない。だがベストではないにせよベターといえる結末を見た。世界は広いのだなと、激しく感心する。

酷い有様のヴィノグラドフとかいう阿呆の姿がシュヴルーズの眼に入らないように、慎重に担ぐ2人。グラモンと呼ばれた少年が刹那こちらを見て素早くウインクをした。なかなか色っぽいウインクであった。5年もすれば随分良い男になるだろうと思わせる。

ヴィノグラドフを挟んだ反対側でグラモンと呼ばれた小太りの少年が、なんとなく不機嫌な表情を見せていたが、イングリッドは彼に對しても小さな仕草で頭を下げておいた。面倒を押し付けたことは間違いない。彼もそれでニヤリと笑った。余り華やかな感じではなかったが、無邪気な笑みだった。歳相応と言っただろう。

キュルケとルイズが顔を見合わせて、小さく頷き、ルイズがグラモンに目礼する。彼の視線はすでにルイズから外れていたが、いいよいよとでも言うようにグラモンの手が振られて応えた。

後ろからパタパタと音を立てて小さな身体が彼ら3人を追う。

「あら、タバサ。どうしたの？」

キュルケの前で立ち止まって小さく頷く。巨大な杖を3人の背に向ける。

「心配」

呆れた顔でキュルケがタバサに視線を移す。

「大丈夫だって。2人に任せておきなさいよ」

青い髪を揺らして僅かに表情を歪めた後、3人の後姿を追うシュヴルーズを横目に声を潜めてキュルケに顔を寄せる。

イングリッドもルイズもなんとなくその姿に引き寄せられて顔を近づけてしまう。

「……変なことを考えないように『説得』しておく」

随分と含むところの多い言葉だった。実のところ、いろいろな面で性格が善人に過ぎるルイズはその言葉の意味が良く理解できなかった。だが残りの2人は正確にそこにある意味を読み取る。

2人同時に噴出す。ルイズは自分が置いていかれたことには気が

ついて不満げな表情を浮かべる。その3人を順に見てタバサは頷き、身を翻す。3人が立ち去った姿を見送ったシュヴルーズがようやくタバサの姿を見咎めた。

「あら……ええと、あなたは？」

「タバサ」

シンプルな受け答えにシュヴルーズは一瞬混乱する。イングリッドも「タバサ」と言うのが最初、何を指し示す言葉か理解できなかったので同情してしまう。シュヴルーズもそれを固有名詞とは認識できなかったのだろう。しかし流石に初対面の生徒の顔と名前を覚えようと努力を傾けていたのだろう新任教師である。「タバサ」というあからさまな偽名が自身の目の前の少女の名前だと気がついて、頷く。

「ええっと、ミス・タバサも医療室に……？」

「そう」

極端に言葉を惜しむ会話の中でもタバサの意識がすでに扉の向こうにいつていることがわかる。しかしシュヴルーズは難色を示した。

「いえ、しかし、2人いれば大丈夫でしょうから……」

シュヴルーズの声を遮ってキュルケが援護射撃を放った。

「ミス・タバサはトライアングルのメイジです！水の魔法もある程度得意ですし、風の魔法でレベーターションも使えます！きつと役に立つでしょう！行って貰うと役に立つはずですよ！必ずですよ！間違いありません！同じくトライアングルのこの私、キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストーが保障します!!」

有無を言わさず捲くし立てる。その勢いに押されてシュヴルーズが思わず頷いたのを確認してキュルケがタバサの背中を押す。

「はいはいはい！早く行く！頼んだわよタバサ！」

身体を傾げながら、タバサは頷いて、素早く走り去った。

キュルケは押し切った。初見の生徒達の顔と名前を知っていたシュヴルーズのことである。生徒達の能力も把握しているの違いない。そう考えた。時間を取られればその彼女が思い出すのは間違いなくモンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ

だろう。そうなる前に強引に押し切れたことに大きく溜息をついた。それに釣られるように教室全体の雰囲気は弛緩して、緩む。

微妙な雰囲気の中でルイズは自分が立ち上がったことを思い出して、腰を下ろした。

僅かな音がしたが、静まり返った教室には想像以上に大きく響く音であった。

その音で我に返ったシュヴルーズが点3つになっていた表情を戻して、小さく咳払いをする。それで生徒達全員が我に返ってごそごそと席に戻る。激しい修羅場から急転直下でコントを演じた人間たちを呆然と見ていた使い魔達もどことなく騒然とした雰囲気を見せていた。

教室を見回してもう一度咳払いしたシュヴルーズが仕切りなおすように大声を張り上げた。

「さ、さあーじよぎようをはじめましょうか!」

イングリッドはずっこけそうになった。

かみまみたよ。この先生……。

「はいはい」

手をパンパンと叩いて注目を集めるシュヴルーズ。

教室になんとか緩やかな空気が流れている。こういう状況ばかりが続いているなあと遠いところに眼をやるイングリッド。それに関係なく、声を張り上げるシュヴルーズ。

「二つ名を『赤土』と言います。『赤土のシュヴルーズ』と呼んでもらえればうれしいですわ! 『土』系統の魔法を1年間、実技で教えます。今日は初顔合わせですから特別に講義の時間を作ってもらいました。復習としていろいろと皆さんに答えてもらいますね!」

なんとなくしまらないぐだぐだな状況ではあるがシュヴルーズの元気いっぱいな声は好ましい。しばらくすれば雰囲気も戻るのでろうと、イングリッドは期待する。キュルケは机の上に両手を出してなんとなく真面目に見えなくはないかもしれない表情を作っているし、ルイズは言わずもがな。後ろでもそれなりに真面目な気配が漂って

いる気がする。

シュヴルーズはそのような雰囲気にもまれた教室を見回して、1人の生徒に視線を送る。

「さて、ミス・モンモランシ。魔法の4大系統はご存知ですね。お答えいただけませんか？」

急に呼ばれたことに驚いて動揺を見せたモンモランシであったが、何とか答えをひねり出す。

「は、はいーミセス・シュヴルーズ。ええっと、『火』『水』『土』『風』の四つです！」

シュヴルーズは大きげな仕草で頷いた。

「はい、そうですねー！良く出来ました」

黒板に向き直り、それぞれの系統を書き記してまるで囲む。その外側に、もう一つ書き加えて、間を線で結んだ。

こちらを振り返る。やけに視線がイングリッドに絡む。こつちみんな！

「今は失われたとされる『虚無』。これをあわせて全部で5つの系統があるのが私たちが使う魔法のあり方です。その5つの中でも『土』は最も生活に密着した魔法の一つであると私は考えます」

再び黒板に向き直ったシュヴルーズはこしこしと黒板に随分とかわいらしい絵を書き連ねてゆく。それを見てルイズの顔が歪む。あれをノートに記すべきかどうか悩んでいるのだろう。

「『土』系統の魔法はですね……ここに書いたように、万物の組成を司る、重要な魔法なんです。この魔法があるからこそ、私たちは金属製品を手にすることが出来ますし、それらを形にするための加工も行えるのです。石材を切り出して削り、この学院のような大きな建物を建てたり、畑で収穫される作物を大きく育てることも『土』魔法では重要な役割の一つとなりますね」

生徒達に向き直り、一度、言葉を切って教室を見回すシュヴルーズ。異論が出ないことに頷いて、再び口を開く。

「かように生活に密着した力を見せるのが『土』系統と言う魔法です。みなさんも貴族として大成できなければ野に下る身。この力を自由

に扱うことが出来れば市井の生活で引きも切らない存在になれるでしょう」

その言葉に教室が凍った。天使が通ったどころではなかった。一瞬の静寂の後にきわめて複雑怪奇な気配が後方から湧き上がる。ルイズは思いつきり顔をしかめているし、キュルケは……表情だけ見ると大爆笑である。何とか声を出さないように必死で腹を振っている。シユヴルーズは相当にヤバイ地雷を踏んだようだった。イングリッドは流石にルイズに確認を求めた。あふれ出す雰囲気は相当に「ヤバイ」感じだが確認しておくべき問題だと直感したのだ。

強く感情を抑制して小声でルイズに尋ねる。

「あれは、その……どういふことじゃ？」

不機嫌な表情のままルイズが振り返る。

「今の魔法学院は、ね。次男、次女以下の貴族の子供が押し込まれるの」

首を捻る。それだけでは説明が足りない和理解してルイズはますます声を潜める。

「領地を相続できそうにない子供が投げ込まれるのよ……せいぜい格の高い結婚相手でも見つけて来いって……」

とんでもない内容の告白に大いに動揺して表情を歪める。イングリッドは何度目かもしれない混乱に見舞われた。砂をかんだとか苦いものを含んだとかでは済まされぬ歪んだイングリッドの表情にルイズも顔を歪める。

「ななな、なんじゃと！キュルケやルイズのように優れたメイジを捨てる場所が学院のあり方と言うのかや……！」

その言葉を耳にして、一瞬で表情を朱に染めたルイズは机に突っ伏す。「ん？」と首を捻るとイングリッドの後ろでごとんと音が響き、それに振り返ると、そっぽを向いたキュルケが机に顔をつけている。

そのキュルケが呟くようにささやいた。

「良い性格してるわあんた……」

イングリッドは首を捻り、次いで小さく笑った。気を取り直して顔を上げたキュルケの前に指を突き出し、眼を見開いたキュルケと視線

を合わせて囁いた。

「イングリッドじゃ」

「ごんつとルイズが頭を机に打ち付ける。呆れたように呟いていた。
「あんだ……飽きないよね」

ルイズは、振り向いて口を開きそうになったイングリッドの頭を、手にしたルーズ・リーフで軽く叩く。縦に。

「アイテナー」

かけらも痛そうにない声を上げて頭をさするイングリッドに、ジト目を送るルイズ。何かに気がついたキュルケがイングリッドの肩を叩く。

それに振り返ったイングリッドの眼前にキュルケが顔を近づける。

「おおう」とかいつて驚く彼女に笑いかけるキュルケ。

「イングリッドって呼べばいいのね。わかったわ」

シュヴルーズの最初の挨拶の後の謎のやり取りを理解してキュルケはうんうんと頷いた。

それにイングリッドも笑顔で頷く。

ルイズはその後頭部をルーズ・リーフでこついた。金属部分で。

「あ……ルイズ。いかん。それはいかんぞよ。流石に洒落にならん……！」

音を立てないようにもみ合う2人の姿にキュルケは溜息をつく。

「仲良いよね、ホント」

自身のすぐ近くで行われているコントに気がつかないまま黒板に板書をしつつ、シュヴルーズは言葉を連ねていた。

「皆さん、『土』系統の魔法の基本は『錬金』です。すでに1年生で習得された方も何人もいるようですが……」

板書を終えて、シュヴルーズは振り返る。イングリッド、ルイズ、キュルケ。シュヴルーズと最も近い3人は神妙そうに彼女の表情を伺っていた。

後ろから一部始終を眺めていた生徒たちは呆れて物も言えない状態である。

「……基本は大事です。ここでおさらいしましょうか」

彼女は石ころを懐から取り出した。石ころと言うにはやや大きい
が、何の変哲もない石ころである。路傍で拾える、どこにでもある石
ころであった。

教卓の上にそれを置いて、一步距離を取ると、杖を取り出し鋭く突
き出す。視線を集中させて力をこめるのが判った。

「みよや神のみ業を……世界は知れその力の術を。イル・アース・デ
ル、アル・ケミヤ！」

石が光りだした。その組成が変化する。杖から流れ出す力が物質
を変換する。でたらめな変化が発生して、感情が驚愕に染まってイン
グリッドの表情がなくなる。

光が収まると、そこには金色に光る金属があつた。大きさは「石こ
ろ」より若干小さくなっている。

「金？ですか、ミセス・シュヴルーズ！」

机の上で伸び上がって身を乗り出したキュルケが小さく叫んだ。

だがシュヴルーズはその声に僅かに身を振って、恥ずかしそうに笑
う。

「いえ。残念ながら、真鍮です。ミス・ツエルプストー。金を練成でき
るのは『スクウエア』クラスでありませんと……」

ふっと汗を吹き払うように顔を振ってシュヴルーズはキュルケに
向き直る。

「私は唯の『トライアングル』ですからね」

そのやり取りの横で、無表情でイングリッドは唸った。2つの驚愕
が心を満たす。

まず、物質変換。でたらめだ。とんでもないでたらめだ。大概にし
てでたらめなものを見てきたがこいつは飛び切りのでたらめだ。い
つか聞いた植物の自殺と言う話よりもでたらめだった。

いや、それをやりかねない人間は幾人もいたが、これほど小さい力
でそれを成してしまうというでたらめさは信じられない。目の前で
起きた現象と言ってもどうにもありえない。イングリッドの知る地
球における常識と照らし合わせてしまうと、イングリッドが築き上げ

て来た世界観が崩壊しかねない。思い切り頬をつねってもらいたい
と思った。ねじ切れるほどに捻られても痛みすら感じないだろう。

もう一つは、真鍮を練成して、金が練成できないと断言してしまう
その思考が信じられなかった。何言ってんだこいつ？と思った。

合金をあつさり練成して、なにが純粋金属は無理だ！んな阿呆なこ
とがあるか！

叫びそうになった。

ゆるゆると無表情のままルイズに顔を向ける。異様な雰囲気を察
してルイズがイングリッドを見る。

馬鹿馬鹿しい現実をルイズに問いただそうとしたイングリッド
だったが、ルイズもそうであるし、シユヴルーズも勿論のこと、キュ
ルケもその他の生徒もそれをまったくの当たり前と受け取っている
ようだった。と、なると質問をしたところで此方もそちらも言葉が通
じない騒ぎになるだろう。トンチンカンなことになりかねない。

ぐつと堪えて別の疑問を口に出した。

「……スクウエアとかトライアングルとは何ぞや」

「ん……」と顎に手をやるルイズ。

ルイズは内心で混乱している。こんなに基本的なことですら知ら
ない。やはりイングリッドは魔法を全然知っていない。錬金ですら
恐ろしいほどの動揺を見せていた。どういふことなんだろう。

とりあえず疑問を脇に於いてイングリッドの問いに応える。

「メイジは系統を足せるのよ。いくつ足せるかを示すのがそれ。メイ
ジのレベルはそれで決まるの」

「はいっ？」

イングリッドが首を捻る。

ルイズは小さく嘆息して説明を続ける。

「そうね、例えば『土』に『火』を足せば強力な魔法になるわね。ラ
ンド・バーストって言う魔法なんかは、『土』と『火』のエレメントを
持たないとうまく使えないんだけど、その魔法を使えば、土を巻き上
げてそれを燃えるものに変換しながら敵にまわり付かせて蒸し焼
きにしたり出来るわ」

「ほう」

具体的な魔法の力の話になったことにイングリッドは内心身体を乗り出した。威力、能力の判断を区別できる言葉が出てきたのだ。ある程度の判断基準になるだろう。

キュルケがルイズの後を受けて続ける。

『火』『土』のように2系統足すと『ライン』。シュヴルーズ先生みたく『土』『土』『火』って3つ足せると『トライアングル』クラスってことね」

ルイズが頷く。「ふむ」とイングリッドが頷いて、質問を続ける。

「同じものを足すとどうなるんじゃ？」

指を出して2本立てる。それをイングリッドの前で振るルイズ。

「その系統をより強くすることが出来るの」

顎に手をやって撫で付けてイングリッドは納得したように頷いた。

「なるへそ。つまりミセス・シュヴルーズは3つの系統を足せるから『トライアングル・メイジ』と言うわけか」

ひよいつと身体を正面に向けてシュヴルーズに向き直る。

「先生は優秀なメイジなんだと言うことが理解できました」

此方を注目していたシュヴルーズは氣勢をそがれて仰け反る。いつの間にかじろじろ見られていたことに気が付いてルイズとキュルケがいごごち悪そうに身を振る。

シュヴルーズは誤魔化すように咳払いをした。

「……はい。その通りですね。わからないことを知ろうとするのは大事です。しかし授業中ですよ3人とも。わからないことがあれば個人的に先生に申し出てくれればありがたいですね。今は授業を進めておきたいのですが」

すいませんとしおらしく3人で頭を下げる。

それに満足そうに頷いたシュヴルーズはルイズに視線を移した。「そうですね。ミス・ヴァリエール。鍊金をあなたにやってもらいましよう」

ざわっと教室に困惑が広がる。それに気が付かないシュヴルーズは懐から再度石を取り出した。

教卓の上にそれを置く。

「ここに石があります。これをあなたが望むままに……そうですね、先ほど見せたように金属に変えてみてください」

ルイズは立ち上がれない。困ったようににもじもじするだけで立ち上がらない。イングリッドは内心頭を抱えた。

「どういう申し送りをしたんじや……！」

いや。思い直す。貴族が魔法を使えない異常性。ありえない事態。ルイズがどれほどの立場の家にあるか知れないがヴィノグランドフとやらの言い振りから鑑みるに、また自身のルイズを観察した経験から推測するに相当な名家なんだろうと想像する。

それも含めて資料が用意されたのであれば、この世界のありようから余りにも逸脱した内容は信じられないかもしれない。ましてや名家となれば、後々記録として学院に残るであろう書類にそもそもそんな不名誉な内容が記されていない可能性すらある。内容が無いよう！

心底不思議そうな顔をしてシュヴルーズが声を上げる。一々大きい声がここにきて酷く癩に障る。

「ミス・ヴァリエール！ どうされたのですか？」

再びシュヴルーズが呼びかけると、困惑と動揺が同居した顔で、キュルケがシュヴルーズに申し出る。ルイズの近くに座るべきではなかったとも思っているのだろうか？

「……先生」

首を捻ってキュルケに向かい合うシュヴルーズ。

「なんででしょうか？」

ルイズを見、視線を落とすその姿に思わず空を振り仰いで再度シュヴルーズに視線を戻す。

苦渋に満ちた声が漏れて、その苦さに驚いてルイズが顔を上げる。

「やめたほうが、いいと思うんですが……」

ルイズの気持ちに気が付きつつ、言うべきことは言わなければならぬ。それをするのは自分だ。

そうとでも言いそうな顔である。どうもイングリッドは誤解した

ようだった。いつもこうやってキュルケはババをひきつけてきたの
だろうか。不器用な生き方である。

顔を紅潮させて立ち上がりそうになったルイズの肩をイングリッ
ドは抑えた。

軽く添えられただけにしか感じられないイングリッドの手を振り
払うことが出来ずにルイズは混乱する。硬い。途轍もなく硬い。微
動だにしない。

キュルケの言葉に教室内の空気が強い同意を示している気配が漂
う。

それを受けてキュルケは言葉を重ねた。

「……危険です」

そのキュルケの言葉にシュヴルーズはあつけに取られて首を捻る。
まったくの疑問しか浮かんでいない表情。申し送りにはそもそもル
イズの魔法が爆発するとは記されていないのだとイングリッドは確
信した。

ルイズはうんうん唸なつてイングリッドの腕を引き剥がそうとも
がくが、どうやっても動かない。途方にくれてしまう。

シュヴルーズは眼前で起きている小さな修羅場に気がつくことも
無く、キュルケに常識的な判断をもってすれば当然過ぎる疑問をぶつ
けた。その口調は若干強い調子になっていた。

「どうということなんですか？危険と言うのは」

キュルケは何らかの覚悟を決めたかのように、両手に力をこめて
シュヴルーズを真正面から見据える。

「ルイズの魔法は失敗すると爆発するんです！」

その言葉に彼女の顔が点3つになる。滑稽な表情だった。

ルイズの身体から力が抜けて、しかしその表情は屈辱に塗れる。

シュヴルーズは信じられないとばかりに首を振って、更に表情に強
い憤りを乗せてキュルケに言葉を連ねる。

「そんな馬鹿な……失敗はありえますが爆発なんてありえないです
ね。そんな非現実的な嘘でミス・ヴァリエールを貶めてはいけません
よ。ミス・ツエルプストー」

どうあつても届かない言葉にキュルケの顔が歪む。ルイズの表情も大きく歪む。

その埒の無いやり取りに教室内が騒然とする。

「ホントなんです！」

「信じてください！」

「危ないんだってば！」

今の今まで空気に解けていたかのように存在感の薄かった後ろの生徒達が一斉に叫ぶ。

各々の主の動揺を感じて、使い魔達がざわめき始める。

顔を落としたルイズの身体が大きく震える。

それを見て取ってイングリッドはルイズの肩から手を離れた。芝居じみた大げさな仕草で大きな溜息をついて首を振り、一転して顔を上げると、それから勢い良く立ち上がる。

「諸君！」

突然の行動に、教室が静寂に包まれる。シュヴルーズも表情を強張らせる。かなり強い感情が噴出しているイングリッドに気が付いて、キュルケも口を紡ぐ。

静寂に包まれた奇妙な緊張感に染まった空間で視線がイングリッドに集中する。それを確認して教室をゆっくりと見渡した彼女が口を開いた。

「我が主ルイズが失敗でドカンとやるのは諸君らも知つての通りじゃ！」

あつけに取られてルイズが顔を上げる。

それを視界の隅に置きながらイングリッドは続けた。

「しかし我は呼ばれた。それはまごう事なき成功じゃ！」

手袋を剥ぎ取り、左手を大きく振り上げて、そこに刻まれたルーンを掲げる。

「契約もこのとおり。これで成功2つじゃ！」

ルイズは大声を上げるイングリッドをまじまじと見つめた。彼女が何を言いたいかをおぼろげに理解する。

視界の隅で表情を変えつつある自身の主の姿に、知らず、表情を緩

めながらイングリッドは言葉を続ける。

「次も成功するとは限らん。しかしルイズの魔法も失敗だけではないことの証明が我じゃ！」

イングリッドは言い切つて、ルイズに振り向いた。

一転、優しい言葉でルイズに問いかける。

「のう我主よ。それは主が一番理解していることじゃろ。違うかえ？」

ルイズは顔を下に向け、自身の膝を見つめる。今までの人生がよみがえる。失敗失敗また失敗。しかし、今その中には2つの成功が刻まれている。一週間前には失敗のみで埋め尽くされていた空間には今、燦然と輝く成功の文字が記憶の空間を染め上げている。間違いようも疑いようもない成功。

ルイズは強く表情を引き締め、顔を上げた。

「やるわー！」

ルイズの言葉に「うん！」と、イングリッドも強く頷いた。

声にならない悲鳴が教室を揺らす。

イングリッドが教室を見回して叫んだ。その表情には隠しきれない笑みが乗っている。

「さあさ！成功確率はまだ低いんじゃないじゃ！多くの失敗の中に成功2つ。また失敗する可能性は高い。みな対策を採るんじゃない！」

イングリッドはルイズの手を取ってキュルケの後ろを回り、前に出る。ルイズも力強く足を踏み出している。

すれ違いざまイングリッドがキュルケに囁いた。「すまんだの」。

キュルケはハツと気が付いてイングリッドの背を視線で追う。

教室の後方では、机の下に潜り込む者、自身の使い魔に抱きつく者、窓を開けて使い魔を外に逃がす者など、大混乱である。後ろの段差を飛び降りて後部の出入り口から廊下に飛び出す生徒まで現れた。

その混乱の中でシュヴルーズが呆然と眩く。

「本当に爆発するんですか……？」

イングリッドがにやりと笑いかけて頷く。

「うむ！たいした威力じゃった。我も危うく死に掛けたぞ。威力は保

障済みじゃ！」

とんでもない内容をさすがらしい笑顔で言いきった。その表情に釣られてルイズも笑った。その笑顔に影はなかった。

ルイズは笑みを浮かべたままキュルケに視線を向ける。

若干顎を上げ、胸を張った姿勢で腰に手をやっている。妙に自信に溢れた姿がそこにあった。

「吹っ飛ばされたくなかったら隠れなさいね！」

「くくく」と頷いてキュルケは慌てて机の下にもぐりこもうとして……刹那立ち上がった。

それはルイズの成功を信じてそこに立つ姿か……と思いきや、首を左右に振って視線を彷徨わせると、何かを見つけ、ばたばたと後ろに走った。突然発生した混乱に首を捻っているフレイムを抱き寄せて、それを引きずって教室の最後部にある机の下に潜り込む。

その姿にイングリッドとルイズは顔を見合わせて大きく笑った。

刹那の時間の後に笑いを治めて、しかし表情に笑みを浮かべたままイングリッドがシュヴルーズに視線を向ける。

「……はあ。さて、シュヴルーズよ」

「あ、はい」

間拔けな表情で頷いたシュヴルーズをイングリッドは「しっしっ」と手で追いやる。

「そんなところでは危ないぞ。主も離れてくりやれ」

半信半疑の表情でくくく頷いて、のろのろとその場を離れるシュヴルーズ。

教室中の視線がルイズを固唾をのんで見つめる。

大きく息を吸ったルイズは、緊張を隠せないまま教卓の真正面に立ち、杖を取り出して勢い良く突き出した。

杖の先に、何の変哲も無い石ころが鎮座する。

その姿を認めてイングリッドは右手の手袋も外し、スカートのポケットにねじ込む。そうしてからルイズの後ろに回りこんで杖を握るルイズのその手を外側から自身の手で包み込む。

そのイングリッドの行動に一瞬びくりと身体を震わせたルイズは

刹那、眼を閉じて、次の瞬間に眼を見開いた。

視線の先には石ころがある。何の変哲も無い石ころ。小さく頷いて、背後のイングリッドに意識を向ける。

「用意は良い？」

ルイズの問いにイングリッドは大きく頷いた。

「いつでも」

ルイズの視線は、強く強く石ころを睨む。

「これで終わりかもね」

ルイズの背後でニヤリと口を吊り上げるイングリッド。

「まあ、主と一緒に黄泉路も退屈はせんだろうって」

ルイズは首を傾げた。

「なにそれ」

イングリッドはルイズを巻き込んでこけそうになったが、踏ん張って持ちこたえる。

「む……うむ。こちらには黄泉と言う概念はなかったのか。」

まあ、その……地獄みたいなもんじゃ」

ルイズは反対側に首を傾げて小さく笑った。一瞬だけイングリッドに視線を向けて、また石ころを睨む。

「なら地獄で良いじゃない」

イングリッドも笑う。

「我らは最後までしまらぬのう……」

ルイズは刹那の笑顔の後に目を瞑り顔を引き締めた。思い出すのは契約の儀式、その接吻の瞬間。あの感覚。

思い出せ思い出せ。あの瞬間を駆け巡った力の残像。

「いくわよ……」

「来い！」

ルイズの口が力在る言葉を紡ぎだす。

教室の緊張感は最高潮に達した。

教室の一番後ろでフレイムの背に顔をうずめるキュルケは、だが声

にならない声でルイズに語りかけていた。

成功するわ。大丈夫。間違いない。信じてる。ごめんね。意気地なしな私を許して！

「みよや神のみ業を……世界は知れその力の術を」

イングリッドにも判った。ルイズの身体から何かが湧き出し、それが腕に伝わるのを。

イングリッドにも見えた。腕からあふれ出た力が杖の先に収束するのを。

ルイズは信じた。自分の身体に伝わるぬくもりを。

ルイズは感じた。自身の魔法の結果で現れた少女の覚悟を。

「イル・アース・デル、アル・ケミヤ！」

伝説の使い魔（1）

トリステイン魔法学院の、実務面での責任者であるオールド・オスマン。

コルベールと言う名の冴えない外見の男性が彼に見出されて20年が過ぎ去っていた。

20年。

オスマンとの出会いの前に、すでに人間としての華やかな部分は殆どが失われていたコルベールである。だが、そこから踏み込んだトリステイン魔法学院の20年は、失意と挫折と失望と共に隊列を組んで行進した20年であった。

ある時、その時。

折に触れて先への希望が見えたような気がする瞬間があった。しかし、それを振り返ったときに見えたのは、それらが単なる願望から来た妄想であったということだった。自身を人ならざる道へと引き込んだ自分自身の過去の経験から振り返ったとき、随分と浅ましい思考をしたものだと思嘆するばかりである。

しかし情け無いことに、刹那の忘却を経て希望らしきものを見出すことを繰り返して20年。なんと頭を垂れた事か。

もはや嘆息することも忘れたコルベールは或いは、忘れ、繰り返すことこそが人間としてのありようなのかと思ひ始めていた。

だとしたらなんと愚かしいことなのか。

コルベールが心身をすり減らしていたとき、コルベール自身がその自身と人間と言うあり方に絶望を見出したときに彼自身が迷い込んでいた場所は、愚かであることこそが人間であるというのならば、という薄暗い思考の迷路だった。

教師という制限された立場を持って、ルイズとのささやかな交感。そして、ルイズの生き方に触れ、なお絶望し、そして刹那の希望を得て、その将来に輝く未来を幻視した今。あるいは幾度目かとも判らない絶望にまた囚われるのかもしれないという恐怖に脅えつつ、コル

ベールはオールド・オスマンの元に走っていた。

二つ名、『炎蛇のコルベール』。『炎』のエレメントに優れ、強力な『火』の魔法を操る彼は、そうであるが故に黒い世界に触れ、そして世界に絶望した。オスマンという存在は或いはそこから自身を救い出し、導く希望であったと幻視した事もあったが幻は幻。単なる幻想であった。しかし、今は感謝するべきではないかとごく僅かに思い始めていた。オールド・オスマンの本心がどうあれ、ルイズと言う存在に出会えた僥倖は間違いないオスマンの存在あればこそだった。怠惰と、惰性と、そして、ホンの僅かの義務感の中で、辛うじて奉職して来た教師という立場であったが、今、コルベールはその職の本文に立ち返っていた。

『春の使い魔召喚』に於いて発生した尋常ならざる事態で、ルイズが呼び出したその結果。彼はそれを無視することは出来なかったし、それをないがしろにして忘れられるほどにも無責任ではなかった。

教師としての経験のみならず、人生で得た経験のすべての面から言っても、使い魔召喚で人間が呼び出される事態と言うのは単なる空想であって思いもよらない絵空事であった。

そう思っていた。

彼の記憶の中には、華やかならざる世界を生きていたからこそ読み解いた文献もあったが、そういった表に出ない資料の中にさえ、人間が召喚される事態というのは臭わされる事すらなかった。使い魔として人間が呼び出されるなんていう事はあるにええ、しかし突きつけられた現実の結末。

無意識にその結果たる『使い魔』に投げかけたあの言葉は、彼女達が気が付くことの出来ないほど深い場所から引き出された、コルベールの経験から導き出された、本心からの推測だった。無意識に口をつけて出でたからこそ、彼女たちはそれが意図する深い感情に気がつかないでいた。

あの、存在が、立ち位置が複雑な出自を持つルイズが、それに気が

付いていたら。使い魔として呼び出された、あの存在が、あり方が複雑にして怪奇なイングリッドが、それに気が付いていたら。

あの場所でのイングリッドと交わされた、2人きりの会話は厳しいどころの話ではなくなっていただろう。彼女は、悪意、嫌悪、哀しみ、憎しみ。そういった感情との衝突に慣れ、敏感に察することが出来たが、そうであるが故に、逆に無意識で放たれる感情の発露に対して疎かったのだ。

それはコルベールにとって幸いであつたしイングリッドにとつても幸いだつたかもしれない。得られる情報に限りがあつて、得た情報の真偽すら確かめる術を持たない状態で、コルベールを信じるに値せずと断じていれば、情報源があたり失われる事態に繋がつたかもしれない。不幸中の幸いだつたと言えよう。

コルベールはいささかややこしいあり方を持つ少女、イングリッドの左手に浮かび上がったあのルーンが酷く気にかかつていた。教職を得て、知つた知識の中にあれを見た記憶があつたのだ。

彼の無意識が囁いた。あれは捨て置いて良いモノではない。

ルーンに対する知識の出所は、教職としての時間の中からであつたが、それに囁いた彼の無意識は、20年間押し隠してきた彼の深遠の底から湧き出たものだつた。無視できるはずもない。

新任教師として翌日から教鞭を執ることになつていたシユヴルーズに申し送りをしながら、夕食を機嫌よく採つていたとき、唐突にわきあがつたその感情はコルベールを戸惑わせた。だが、その魂の囁きに従つて彼は、その足を走らせた。突然存在を忘れ去られたシユヴルーズも酷く戸惑つたが、彼女が人間としてそれなり以上に深い経験と、他人に対する洞察力を『持つて』、人間として熟成されていたことは僥倖だつた。彼女はコルベールの豹変に対し「あらあら忙しい人ね」で済ませてしまつたのだ。なかなか『出来た』態度である。

コルベールは全ての仕事を忘れ去つてなげうつて、図書館で必死に資料をあさつた。一般生徒に明かされることは殆どないが、それゆえに忘れ去られていると聞いていい貴重な資料群にまでその目は向けられた。焦りと疑問がコルベールを苛んだ。

日を跨ぎ、いつの間にか知らずに完徹し、朝食を取るのも惜しいと調査を続行した。

しかし途中で思い直して、何かの判断材料になるかと朝食の場へ赴けば、厄介なことがおきる寸前であった。やはり自身の勘が衰えておらず、それに従った自分の行為は間違っていないと納得したのだと納得して、もう一度、図書館に飛び込む。そうして調べて一時。

人間が呼び出されるなんてありえない。
使い魔。

その思考にとんでもない誤解、或いは矛盾が隠されていて、自身も含んだ大勢の人々が気が付いていない。或いは、意図して背を向けていた事実が気が付いたとき、彼は驚愕して走り出していた。

彼は今、右手にとある本を抱えて職員塔に走りこんだ。上を見上げて強い視線で先を見据える。朝の授業が始まったことで出入りが一服し、気が緩んでいた入り口を守る監視は、尋常ならざる雰囲気のコルベールに恐怖した。昼街灯もいいところのコルベールをそうした視線で見るとは今の今までなかったが、本当の意味で実は彼が『昼間に忘れ去られた街灯』であったのかと思直した。

消灯されることを免れて昼に光を放つ街灯を気にかける者は殆どいない。余りにも強力な光源である太陽の光に遮られて、認識できなないのだ。しかしそれが弱い存在であるとは決して言えない。それが必要とされる夜間にそれが照らし出す世界は存外に広く、その光は唯見つけるだけであるならばその足元で見上げて想像する以上に遠くから見出すことができる。つまり『昼街灯』とは必要とされない時と場所では知ることの出来ない優秀性を隠した人間に対する尊称なのだ。

あつけに取られてコルベールに視線を向ける監視は、彼に対してそう思ってしまった。それほどまでに彼の雰囲気は普段と違っていたのだ。

コルベールは呪文を唱えると、浮かび上がり、一瞬の躊躇を経て猛スピードで唸りを上げて上を目指した。

彼が向かう先は学院長室。

学院長室は職員塔の最上階に位置する。本当はその上に係留設備などが収められた部屋があるのだが、使用頻度が低すぎて皆忘れ去っている。学院の意識では学院の活動の結果として湧き上がる煙を除けば、学院敷地内で最も高いところにいるのはオールド・オスマンと、言う事になる。

オールド・オスマンの居室は広い。上に向かって絞られた円錐形とも言える職員塔だが、最上部に近いこの場所であってすら床面積は大した物で、何十人と言う人間が押しかけたところでお余裕がある。

彼が普段腰を据えている執務室も広い。学院のすべてが運営に当たって必然的に吐き出す書類。そのすべてを彼が処理する必要があるわけではないが、最終的な決済を行うのはオールド・オスマンの仕事であり責務である。そうなってしまうている。

本当は全てを彼が処理しなければならないわけではなく、もう一人の責任者がいて、そちらがそれなり以上に書類の処理を行う必要があるのだが、それが機能していない。

それがために、オールド・オスマンの仕事は彼が仕事をすべきと定められた日、時間でこなすにはその量があまりにも圧倒的であった。それらを円滑に処理するためには執務室は必然的にそれなり以上の広さを必要としていた。

学院で生徒を教える必要性から湧き出る些事は、多岐、多種、多様に渡るため、彼は常に書類に埋まっている状態であるから、彼を補佐するためにそれなりに大勢の人間が彼の執務室に収まっている。彼らを養うための実務をこなすにはそれなりの使用人も必要であって、それにより職員塔の最上階における人口密度は高い。

常日頃におけるその場所の男女比が異常に女性側に傾いているのはその場における最上位者の思考を想像させるものであったが、オールド・オスマンの実務能力に関しては、彼が導き出す結果だけを見た場合、まったく疑いようもなかった。そうであるから、普段の執務中の折々に透けて見えるオールド・オスマンの人間性に対して愚痴る人

間は数多くいれど、オールド・オスマンの実務能力そのものに文句を言う人間はまったく存在しない。その状態が100年以上続いているというのだから様々な面で大した人物である。

『愚痴』るだけで済まされて、職員塔最上部行きを本当の意味で拒む女性がいないのも、過去の実績が物を言っている。

外部からいろいろと言われることの多いオールド・オスマンだが、彼の元に発生元不明の幼児が出でることは知られている限りに於いてはなかったし、幼児を連れて「オスマンの子よ！」と叫び、押しかける者は少なくなかったりもするが、浅ましい思考を持ったそういう女性が学院に相手にされることがないあたり、本質的な面では強く信頼されているのがオスマンという人間のあり方であった。有能な実務能力と強力な地位を持った人間に対して擦り寄ったり、貶めようとする者が現れるのはある意味で有名税みたいなモノであったが、オールド・オスマンという個人に対して、本当の意味でスキャンダラスな事態が発生したことは殆ど無い。

この学院は学院そのものからして表裏の乖離が激しいが、その最頂部に居る人間こそがそれを身を持って体现しているあたり、学院を取り巻く複雑な問題をより鮮明にしているとも思われた。

この日、オールド・オスマンは普段どおり朝の早い段階から執務をこなしていた。昨日、夕刻から夜にかけては、普段ではありえないような些事が彼に押し寄せていたが、今日の執務に影響を及ぼすには至らなかった。

ルーチン・ワークから外れた突発事態に対応してなお、普段の生活リズムを大きく崩すことなく状況を進行させ得るのは、真実、彼が有能である証であるが、周囲に問題を知られること無く状況をこなす姿は、その有能性を寧ろ押し隠す方向に働いてしまう。よって、有能であればあるほど彼の能力が軽んじられてしまう。難しいところだった。

彼は、事務員が彼の部屋を訪れる前から「普段どおり」に前日の内に処理しきれなかった書類に目を通していた。

椅子に座れば床に着くほどに長く、それでいて見事に手入れの行き届いた白い口髭を扱きつつ、大して纏められてもいないのに彼の視線を邪魔しないように自らの意志で位置を整えているとしか思えない白く豊かな頭髪を揺らして、ゆっくりとではあるが着実に書類を処理していた。

重厚な拵えを見せるセコイアのテーブルは書類の頂に埋もれ、その谷間で彼の頭が揺らめいている。そんな風景だった。

決済が済んだ書類を持って部屋を出る職員と、決済を求めて書類を持ち込む職員はひきも切らない。

彼らの仕事、学院のあちらこちらへと往復する面倒を考えれば、オールド・オスマンが学院で最も高い場所に腰を据えている現実は害悪ですらあった。

しかし、大抵の事務員の生まれ出でるよりもはるかに昔よりオスマンが、ここに腰を据えているという事実は、まったくの疑うことのない常識として彼女達に染み付いている。オスマンという人物が仕事を円滑に進めるに当たって不便を感じる場所に籠っているという事実は、疑問として考えられる事はない、強固な常識となつて人々の意識にこびりついてしまっている状態だった。

この場所に、魔法を持たない人間が足りなく通う。通わざるを得ない現実がエレベーターの少々無茶な設置の理由となつているわけだが、その便利な存在があるがために、オスマンをこの頂から引き摺り下ろす運動の発生につながっていかなかったのは皮肉である。

エレベーターを待つ。エレベーターに乗る。エレベーターの中で待つ。このインターバルが、忙しい職員たちにとっての微かな休憩時間として重宝されている事実も、オスマンをことさら高い場所から突き落とす合理的動機への非合理的抵抗となつている面もあった。

執務室の扉はとてものことではないが閉めておく暇などなく、早朝と深夜以外でそれが閉められる事は、年末年始のごく僅かな期間しかないと皆知っている。つまりそれだけオスマンが勤勉で勤労なのだというのがトリステイン魔法学院に奉職する教職員の共通認識である。

翻つて、トリステイン魔法学院に属する生徒達の認識は微妙で、そういう実務を知らない者達にとつては、オールド・オスマンという老人は、何らかの行事がない限り塔を出ることのない引きこもり。その程度の感覚である。

その生徒達からしか魔法学院内の情報を得ることが出来ない、貴族たちの認識もかなり微妙なものだ。

よつて実務能力から言つても、その実力からしても、積み上げられた実績から勘案しても、決して甘く見ることが出来ないどころか、警戒すべき人間の筆頭として祭り上げられるべき人間であるオールド・オスマンの巷の評判は酷く歪んだものである。

執務室を出ることができない。出る暇も無い。それこそが真相なのだが、真実を知らない者の気楽な思考である。オスマン自身がそういった生徒の感想に対してことさらに述べ立てることは無かったが、常日頃から書類と格闘している人々の間には忸怩たる思いがあった。

沈黙を尊ぶことが美学とも言いそうなオスマンの態度が教職員と生徒の関係を緊張させる材料の一つとなつている現状は、当事者の間では理解されていなかったのが皮肉である。

時には一日一本の割合で消費されることが在る羽ペンをインクつぽに刺して、首を回すオスマンは自室の喧騒に満足げに頷いて、見ていた書類を決済済みの箱に投げ入れた。

そこに即座に腕が伸びて、女性職員が走り去る。

翻つてはためいたスカート奥の奥に何かの存在を認めて、オスマンはうんうんと頷くと、自分の机の引き出しを開く。部屋付きのメイドが素早い動きで彼の机に近づいて彼の空になったカップを下げ、すぐさま新しいカップを用意する。湯気をくゆらすそれをオスマンの視線が通る範囲に、慎重に配慮して置くと、彼女自身は、また元の位置に戻る。それに気が付いている風もないオスマンは、口を開けた引き出しから水キセル一式を取り出した。

5つある秘書席のなかで、新しいがゆえに部屋になじんでいない席に座る女性が、書類に視線を落としたまま自身の手にした羽ペンを振った。

その動作の後に、僅かな躊躇の時間を経て水キセルが一式が空中をすべり、彼女の手元に降りる。その一連の流れに、少なくとも数事務員達が密かに溜息をついた。

常に顔に張り付いた微笑を絶やさないオスマンの眉がそれを見て僅かにはねた。そのまま水キセルの行き先に視線を向ける。

「年寄りの一服の楽しみを邪魔して何かうれしいことでもあるのかね。ミス・ロングビル？」

やれやれと肩をすくめて、彼はお茶を手にする。彼の腕は、迷うことなく自分のカップの位置に向かってそれを取り上げていた。

湯気を上げるそれに満足したように一瞬だけメイドに視線をやつて、小さく嘆息する。

オスマンから視線を受けて、部屋の隅に控えていたメイドは小さく目札を返した。

そのやり取りを無視して、ロングビルは手元の水キセルを乱暴にまとめてしまう。

「あなたの健康管理も私の仕事と理解してますわ。オールド・オスマン」

仕事熱心だが微妙に空気が読めない新任秘書と言う共通認識が執務室内に成就されつつある彼女が、自身の机の引き出しに水キセル一式をしまいこむ。

その様に苦い笑いを浮かべて肩をひそめるオスマン。

彼は行儀悪く、手に持ったカップから紅い液体を音を立ててすすつた。

様々な気苦労が多いと見られているオスマンの気晴らしぐらいは多めに見よ。と、言うのがロングビル以外の職員の認識である。長年にわたって行われてきたその気晴らしの結果として執務室に染み付いてきた慣習をいまさら取り上げて健康管理もないだろうという意見が支配的である。人手不足は慢性的であるし、ロングビルという女性がそれなり以上に優秀であることは皆も理解していることではあるが、それ以上にオスマンの負担になっているのではないかという

意見もある。

これで彼女が露骨に排除されないのは、ロングビルをここに連れ込んだのがほかならぬオスマン自身であると言うのが理由である。普通の経路をたどってここに勤めたものであったら、すでに叩き出されていただろう。

「仕事と言うものはひたすらに連続すれば良いというものでもないじゃ、ミス・ロングビル。適度な休憩は効率を高めるよい塩梅になるのじゃぞ」

苦味の走った表情に僅かな諦観を載せつつ、紙の山脈から書類を取るオスマン。

彼の顔に刻まれた深い皺が、彼のたどった歴史の長さを語っているようである。その齡、200とも300とも言われるオスマンである。酸いも甘いも経験しつくしたその彼が、ロングビルと言う女性に苦笑いするばかり。彼女のどこに遠慮するいわれがあるのか、2人以外の職員は興味津々であつたりする。

そうした微妙な空気は突然の闖入者によって破られた。開かれた扉から、突風をまとつてコルベールが飛び込んでくる。

やにわに発生した場所をわきまえない嵐に、書類が飛び、多くの抗議と悲鳴が飛び交つて職員が右往左往する。メイドたちも、飛び交う書類に手を伸ばしたり、お茶の注がれたカップに手をかざして書類のダイブが発生しないように自身の周囲を守ろうとする。

その修羅場にのまれ、小さく目を見開いているオスマンの表情も無視して、ことさらに大きな足音を響かせながらコルベールがオスマンの執務卓に歩み寄る。彼は勢いよくオールド・オスマンの執務卓の上に一冊の本を叩き付けるようにして置いた。その振動でゆれる書類の山の行方に、少なくとも職員が声のない悲鳴を上げた。この部屋の住民しか知らないルールに沿って「整然と」積み上げられた書類の雪崩と、その後続くかもしれない混乱を想像して顔を硬直させる。だが、幸いにして彼女達の想像する最悪の事態は免れた。

揺れが収まった山の前で場違いな姿を見させているコルベールに

様々な感情が乗った視線が集中するが、彼はそれらの意識を無意識で跳ね除けて、オスマンに強い視線を向けている。ここにも空気が読めない人間がいるのだと職員たちは嘆息して、とりあえずはこなすべき仕事に集中することにした。

ざわめきが収まった部屋で、コルベールは重々しい声で唸るように声を上げた。

「……オールド・オスマン。大変なことが起きました。時間をいただけないでしょうか？」

コルベールの存外に厳しい視線に気が付いてオスマンは表情を作ると、顎の下で腕を組み、頷いた。

だがそれに続いて口を開こうとしたコルベールを制して、オスマンが口を開く。

「きみい。昨日からどこに雲隠れしておったんじや？」

むっとした表情をしたコルベールが抗議をしようとして口を開きかけたが、オスマンは構わず続ける。

「きみね。ミス・ヴァリエール君を気にかけるのはよいが、なーんも引継ぎし取らんじやろ。ミス・ヴァリエール君関係でアレコレあつた尻拭いをさせられる身にもなってくれんか？」

疑問を浮かべたコルベールにオスマンは苦笑いで返した。やれやれとばかりに首を振る。

彼の身体が後ろに傾ぎ、歴史を感じさせる椅子の背が、彼の体重を預けられてぎしりと悲鳴をあげた。

「医療室はほつたらかしだし、朝食もなかなか取りにこん。来たと思つたら、なーんも言うことも無くミス・ヴァリエールを見つめるばかり。朝食が終わればすぐにどっかに走り去る。」

ミス・ヴァリエールが知らん女を連れて歩きまわつるとどれだけの報告があつたとおもつとるんじや？」

ハツとした表情で顔を紅潮させるコルベール。呆れたような笑みを浮かべたまま大きく息を吐くオスマン。

「君の悪い癖じやよ、コルベール君。一つのこと集中すると周りが見えとらん。ミス・ヴァリエールは微妙な立場にあるんじやから、近

くで見ている君がもつとフォローせんかい」

そう。コルベールは昨日に発生した出来事を何一つ誰にも報告していなかった。それによって発生したのは学院内での不審者騒ぎである。

医療室に誰かが寝ていることは知られていたし、召喚の儀で何かが起きていたことも大きな噂になっていた。

しかし、医療室の誰かは面会謝絶であったし、コルベールが監督していた召喚の場で発生した事件は嚴重な緘口令が布かれていた。よって真実は出所不明の無責任な噂で覆い隠されていたし、それらの出来事を昨日発生した不審者騒ぎに結び付けられる人間もいなかった。真実を見たのはルイズとコルベール、そしてメイドが2人だけである。

問題の、もう1人の当事者であるイングリッドには学院内で発生している話に対して配慮する手段もなければ、そもそも知る立場にもなかった。その立ち位置からいって、そもそも配慮する言われも無い。

よって授業中に注目を浴びて当然の行動を取ったルイズが、その夜に謎の人物を引き連れて学院内を練り歩いているとなると、召喚の儀で起きた事態を直接知っている30人を除けば、どういう類の噂でも立て放題、想像し放題と言う状況だった。ルイズ・フランソワーズ・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールと言う少女がただ無責任な噂で笑うにはリスクの大きい家の子供であったから、対処は難しくはなかったし、キュルケのように積極的にフォローして回った生徒や、使用人側を押さえた2人のメイドもいたことで騒ぎは小さいうちに収めることが出来たが、単なる不幸中の幸いである。

何が起きそうになっていたか、何故そうなったかにすぐさま気が付いたコルベールは紅潮した顔を歪めて大きく腰を折った。

「……申し訳ありません！私が報告しないばかりにオールド・オスマンには……」

目を細めて笑みを深くしたオスマンは手をひらひらさせてコルベールの言葉を遮った。

彼は執務卓の上に身を乗り出して、コルベールに顔を近づけた。

「うむ。過ぎたことじゃ。次より気をつけるがええ」

どのような人間ですら安心させてしかるべきと思わせる「優しい笑顔」でオスマンが大きく頷く。コルベールは緊張した面持ちでそれに頷き返した。

「うむ。納得したようじゃな。で、君の話は何じゃったかな。コルベール君」

椅子の上で背筋を伸ばして腕を組むオスマンの姿は威厳があった。自分に向けられたものでもないのに、事務員たちは自然と背筋を伸ばしてしまふ。そういう緊張感を成就する態度がオスマンにはあった。

「は、い……」

気を取り直したコルベールが、自身が先ほど執務卓の上に置いた本の表紙をオスマンに見えるように立たせる。隠さない好奇心を見せるロングビルからは見えないように角度をつけてオスマンの身体に向かって押しやる。

それを見たオスマンが眉をひそめる。

「ほう……。これは……」

そこでいったん口を紡ぎ、身を乗り出して本を手にする。コルベールの配慮に気が付いていたオスマンは書類の山の間で本をひっくり返す。

彼は顔をコルベールに近づけて小さな声で囁くように問いかけた。

『始祖とその使い魔達』……御伽噺の類じゃな。これが？』

侮れない鋭い感覚で、周囲に配慮を見せて声を細めるオスマンに舌を巻きながら、コルベールは黙って懐から紙を取り出す。

昨日、契約の場でイングリッドから見せてもらったルーンを後から思い出してスケッチしたものだっただ。

机の上に置かれたその絵を見て、オスマンは首を捻る。椅子に背を預けて、しばらく顎を扱いた。再度、椅子の背もたれが悲鳴をあげる。なんとなく静まり返って、2人に注目する職員たちの耳にその音は思った以上に大きく響いた。

刹那の間を経てオールド・オスマンが小さく頷き、小さく目を見開いた。

「……なるほど。君が取り乱すのも無理はないか……。ここではちと話せんの」

コルベールも頷く。それを見てオスマンは立ち上がった。

彼は首を振って、ロングビルに視線を合わすと、ゆっくり近づいた。「応接室に行く。しばらく誰も入れるな。お茶もいい。2人だけにしてくれ。絶対に誰も入れるなよ」

普段とは違う鋭い目つきのオスマンに驚いたロングビルは反射的に頷いた。それを見て彼は満足げに頷くと、次いで執務室を見回す。「忙しいところすまんの。そういうことだから応接室に行く。誰も来るでないぞ」

それからオスマンはコルベールに視線を合わせた。それにコルベールも頷き返えして、自身の持ち込んだ本を手にする。

威厳をたたえた重々しい足取りで、杖を手にしたオスマンが部屋を出て行く。それに同じく杖を手にしたコルベールが続く。

足音が遠ざかると、誰ともなく大きな溜息が漏れて、執務室から緊張が溶けた。

伝説の使い魔（2）

「よいつしよ」

そんな気が抜けるような掛け声とともにイングリッドが持ち上げたのは、全てのガラスが失われた窓の脇まで転がった教卓だった。それはルイズが見たところ、100人が見て99人が「彼女では持ち上げることが出来ない」と断言するような巨大なものである。無論、ルイズも99人側にいる人間である。

残りの1人は最初からイングリッドのことをよく知っていたか、或いは……人間としての「常識」をどこかに置き忘れてきた者なんだろう。そうとしか思えなかった。

教壇の上はルイズが箒で綺麗に掃いた後で、特に問題はないようだった。教壇自体には被害は無い様に見える。傷やら、破片が突き刺さった痕やら、イングリッドに言わせるならスプリンター（スプリンター痕）とか炸裂痕とか言いそうな模様がついているが、見た目が悪いことに目を瞑れば、教壇として利用するのに不自由は無い様に思える。

落下した黒板はすでに撤去されている。物品を管理する立場にある職員が顔をひくつかせながら作業員を幾人が伴って持ち去った。そのうち新品をもって作業者と共に教室にやってくるだろう。滅茶苦茶に壊れた机やら椅子やら、粉碎された窓ガラスやら、片付けるべきものは教室のそこそこで自己の存在を主張し続けている。手早く作業しなければ、修復作業に移れないであろう。そうでありながらもルイズはイングリッドの姿に目が釘付けになってしまふ。「どうなされた、ルイズ。手早くやらんと間に合わんぞ」

あつげに取られていたルイズに、教卓を置いたイングリッドが声をかける。天板が粉碎されて酷い見た目の教卓だが、それ以外は意外なほどに綺麗で傷も目立たない。天板の交換だけで再利用は不可能ではないかもしれない。

僅かに口をあけて眼を見開いているルイズの姿に、溜息を吐いて肩を竦めたイングリッドは、箒で足元のガラス片を手早くかき集めた。

彼女が箒を持つ姿が想像できなかったルイズは、それに対してもあつげに取られてしまう。意外と堂に入っていて、その仕草はそういった作業に慣れているように見えた。

散々魔法を失敗してきたルイズは、箒も塵取りも雑巾もその扱いに慣れている。貴族の子女としてはあるまじきことかもしれないが、嫌でも慣れた。実家で魔法の失敗を繰り返したとき、いつのころからかその失敗の結果として現れた、その後の結末を自身で片付けることが日常だった。どうしてそうなったか。その経緯は今となっては思い出せない。使用人が嫌がったか、母親に言われたか、或いは自分からそう申し出たか。そう遠い過去でもない掠れた記憶のなかで、涙ににじんだ視界で、母親に対して申し出ている自分の姿を幻視する。それが真実であるかどうかは定かではないが、ルイズの記憶の中ではそれが事実となっている。どうだったか……。それが摩り替わった記憶なのかどうかを判断する術が無い事だけがルイズにわかったただけである。

自身の起こした爆発の結果として授業が中断した後、シュヴルーズが教室の清掃を命じ渡したのだが、言われるまでも無かった。

1年生のある時期、やたら滅多らと教室を破壊して、魔法の実技は外部で行うべしと定められることになったが、教室の修理はともかくとして、清掃に関しては自分で志願することが多かった。

大抵の教師は、複雑な感情を持ってそれに同意していたが、今振り返ってみると、彼らの胸中は複雑どころではすまなかったのではないかとも思える。

貴族に清掃を命じる教師。

相当に外聞が悪い。

しかし、魔法を失敗するルイズ。

授業を続けたところで、何を成し得ると言うのか。

どれほど練習を繰り返したところで爆発という結果しか残せない生徒であるならば、爆発で滅茶苦茶になった教室を出て別の場所で授業を続けたとしても、何か結果が残せるわけでもない。ならば、掃除でもさせておけばよい……。

1年生の時期に行われた数少ない魔法の実習授業で、ただ成功を指して必死であったルイズには見えない想像があった。

今やつと、間違いもなく、疑いようも無く、魔法の成功例として胸をはれるイングリッドという存在を得てようやく、あのころの周囲の困惑を理解したような気がした。

なんと自分勝手に迷惑な生徒だったのだろうか。苦い笑いが表情に浮かぶ。

「大丈夫かルイズよ。疲れているなら休むと良い……後は我がやろう」

心配そうに顔を覗き込むイングリッドにルイズは首を振って断った。どうも勘違いされているようだ。掃除自体は慣れたものだ。これくらいで疲れてしまうほど自分は柔ではない。イングリッドの行動に疲れたのだ。あんなことをするとは思わなかった。後から考えると顔から火が出そうである。一緒に手を握って魔法を使うとか。

否、イングリッドが魔法を使ったわけではない。魔法のサポートをしたわけでもない。優れた術者は、互いに魔法を補って、1人では扱えないような強力な魔法を行使したりするそうだが、イングリッドにはそのような能力はない。ただ後ろから手を回して、ルイズの手を包んだだけだった。

それだけ。

その瞬間を思い出して顔が熱くなるのがルイズは判った。いつからこんなに赤面症になったのだろうかと考え。あんな事をする人はいなかった。今の今まで。

心配して声をかけてくる人はいっぱいた。たぶん、心の底から応援してくれる人もごまんといたのだろう。しかし、一緒になって、失敗のそのときまで側にいてくれる人なんていなかった。母親も2人の姉もそんな事まではしなかった。そんな事をする人がいるなんて思いもよらなかつたし、そういう方法で自分を支える事が出来るなんて想像しなかつた。

ルイズは唐突に気が付く。

嬉しかった。ものすごく嬉しかった。あの瞬間に人生が終わった

のだとしても満足して逝ける位に嬉しかった。その自身の心のありようにルイズは激しい動揺を覚えて顔を歪めた。

唐突に表情を曇らせて眼に涙を浮かべたルイズに、イングリッドが大慌てで飛びついて肩を抱く。

「ルイズー大丈夫だ。我は大丈夫。我主も問題ない。心配するなルイズよ。失敗したがそれだけだ。いつかの成功を目指そう！」

そのイングリッドの姿にルイズはくすりと小さな笑みを浮かべた。

ゴメンね。また勘違いさせちゃった。悔やんでるわけでも悲しんでるわけでもないの。……ただ、嬉しいのよ……。

何があっても轟然と胸をそらして、いかなる雑音も跳ね除けるのがルイズのあり方だと思われてきた。ルイズ自身もそうだと嘯いてきた。周囲もそれで当然だと思っていた。ルイズ自身がそうだと信じてきた。

それが薄っぺらい殻でしかないことを自覚してルイズは涙を止める事が出来ないでいた。自分が自分の想像する以上に弱くて脆く、そして実は崖っぷちに立っていたのだと理解する。

イングリッドの存在はルイズにとってもはや欠かすことの出来ない存在だと自覚した。今、ルイズの前にあるこの少女は、ルイズにとっての蜘蛛の糸なんだと思った。思ってしまった。

いつの間にかイングリッドの胸をつかんで、自身が顔を押し付けてしまっている事に気が付く。イングリッドの表情をルイズはうかがうことが出来なかったが、イングリッドの手は優しくルイズの背を撫でていた。それがルイズの心を掻き乱す。信じられないほど大きな包容力を感じた。母親の中に感じたあの暖かな、そして大きなモノ。それよりも更に大きなモノをルイズはイングリッドの中に幻視してしまった。まるで春の麗らかな日差しを投げかける太陽が、眼前のちいさな人間の胸の中に詰まっているようにすら思えた。

ルイズの感情が唐突に恐怖に摩り替わった。

少女。

ただの少女。

自分とそう大して変わることの無い時間を過ごしているように見

えた少女。

この少女はいったい何者なのだろう？

ルイズは俄かに心に浮かんだ本心を押し隠し、イングリッドの胸をそっと押して、彼女から僅かに身体を離れた。後ろ足でたたらを踏むように距離を取りつつ、何度か鼻をすするが鼻水が止まらない。ハンカチを取り出して僅かに躊躇い、顔を振ってからそれを見つめ、その後豪快に鼻をかんだ。その行為には自身に浮かんだ僅かな思考の澱みを誤魔化す意味があったのかもしれない。

なかなか荒々しい音を立てたその姿にイングリッドは一瞬、顔を呆けさせて、次いでニヤリと笑った。

「ん……大丈夫そうだなルイズよ。掃除を続けるかや？」

ルイズは鼻水が付いたハンカチを一度広げて、その鼻から吹き出た物体の状況を確認する。埃やら何やらで随分と黒くなっているそれを苦笑いしながら見て取って、それを隠すように畳み込んだ。そうしてから、小さくなったそれをひっくり返して湿っていない面を表に出し、自身の顔に持つていって、弱々しく涙を抑えた。

しばらくうつむいたまま顔をハンカチで覆っていたルイズだったが、小さく頷くと、ハンカチをポケットに戻して顔を上げた。イングリッドに相對したその表情には笑みが戻っていた。

「……当たり前じゃない。私が汚したんだから。私が掃除するのは当然じゃなくて？」

ルイズが立ち直るまで、ただ静かにその姿を見つめていたイングリッドは、ルイズの発した傲岸な言葉に、腰に手を当てて大きく頷ぎていた。

「その調子じゃルイズよ。それでこそ我主じゃ」

ガラス片の山が教室の隅に出来ていた。完全に分けて置かれたわけではないが、舞い上がった埃やどこから出てきたか判らないほどに出た量のゴミも、机やら椅子やらだったものの残骸も、それぞれに離れた場所で山を形作っている。

大きい破片は殆どがイングリッドの手によって集められた。左右

が繋がって教室の幅の半分も在る机の残骸等も軽々と持って「かさばるから」と極めて自然な手つきでそれをへし折って小さくまとめてしまった。そのイングリッドの姿は、頼もしいを通り過ぎて恐ろしいほどに凄まじかった。いつの間にか、春と言う季節特有の人の心を沸き立たせる甘酸っぱい香りを感じさせる空気が、ガラスが完全に失われた窓から教室に流れ込んでくる。暖かさを感じるその空気は、過ぎ去った時間が昼に近いことを示しているようだった。

金属製のバケツに半分ほど入った水に雑巾を浸して、思ったよりも冷たいそれに身を震わせる。雑巾を取り出して、水が飛び散らないように縦に雑巾を絞る。ルイズにはおなじみの作業で、特に気負う必要もない。具合良く水が切れた雑巾を広げて、そして畳み、手早く机を拭いてゆく。

イングリッドはその姿に頷いて、同じように机を拭いていく。

「ん……なかなかの威力じゃったな、ルイズよ」

何気なくイングリッドから漏れたその言葉はしかし、若干のこわばりが見えた。どこか、何かを伺っているような気持ちが見える。

何を伺っているかを正確に理解できたルイズは小さく溜息をついて、その問いに答えた。

「そうね……。風竜ぐらいなら一撃でぶっ飛ばせそうだったわ」

ハツと顔を上げたイングリッドに視線を合わせて、次いでニヤリと笑う。

「どう？…すごいでしょ」

すっかり黒く染まってしまった雑巾に気が付いて、バケツの置いてある場所に移動する。

「これが私の実力よ……」

自分で思ったよりも大きな悲しみが言葉に乗っていることに気が付いて、ルイズは刹那、焦った。思わずイングリッドに視線を戻してしまう。難しい顔をしたイングリッドが、一度視線をそらして手近な机に持っていた雑巾を投げつけた。どこかに苛立っている様な空気があった。それにルイズも気が付いて僅かに身を震わせてしまう。

あの苛立ちが自分の無能に向けられているのだとしたら……。

イングリッドは自分の顔に右手を近づけて指をこめかみに当てようとしたり。眼前に運ばれた自分の指が思ったよりも汚れていることに気が付いて溜息を一つつくと、ポケットから自分のハンカチ——ルイズから借りたハンカチを取り出して、一瞬、それが自分の持ち物ではないことに気が付いて躊躇った後、諦めたように肩を竦めて、それで手を乱暴な仕草で拭う。

「ん……力はある。力はあるんじゃない。そこに間違いは無い……」

今度こそ自分の眉間を揉んで、顔を振るイングリッド。机にもたれて天を仰ぎ、顎に手をやる。左手でハンカチをポケットに戻す。芝居がかったその仕草は妙に老成された雰囲気、ルイズに感じさせた。

「我也感じた。ルイズから何かが出て行くのを……」

頭をかきむしる姿は、何かを推理する探偵のようにも見えた。

「わからん……なぜ爆発に摩り替わるか。直前までは、あの先生と違わんように感じた。どこで、なにが違うのか……。経験が足らんのか。我也情報が足らん……それだけか?」

頭を捻るイングリッドが刹那、顔を上げて強い視線でルイズを見る。それを受けてルイズも頭を捻った。

「なに?」

常の失敗ならここまで冷静でいることはなかっただろうと思うルイズだった。ヒステリーに身を焦がして、いろいろなものに当り散らしながらそれでも掃除だけは何とかこなしただろう。だが今は妙に心が平板だった。直前直後にそれどころではない感情の起伏を感じたし、そのせいで受けた心のダメージは失敗がどうこうという話を押し流すものだった。今はイングリッドと正対して話をする事のほうが重要だった。

何が重要なのはわからない。なんとなく、イングリッドと話をしていたかった。変な気分だった。

「失敗……失敗な?あれが?」

イングリッドが勢いをつけて机から身体を離した。

「失敗とは……魔法の失敗は、術からずして爆発するのかや?」

ルイズにイングリッドが近づく。

妙な迫力がある彼女の姿に、思わず身を引くルイズ。

「そ……そうよ。私の失敗は爆発するわ」

身を引きつつ頷くルイズ。イングリッドはそれを確認して頷き、そして再度頭を捻る。

『私の』……つまり、普通は爆発しないのではないのかや？」

遂に眼前までやってきたイングリッドとルイズは視線を合わせた。イングリッドが何に頭を捻っているかに気が付いたルイズは、今度も頷いた。言葉は出せなかった。

イングリッドは何かを視線に乗せて、ルイズに頷き返す。

「だろぅな……失敗の結果が爆発ならば、教室内で魔法を使おうなどと言う授業のあり方は異常であるからな」

目を閉じたイングリッドが腕を組んで唸る。

そう。魔法の失敗。それはイコール爆発では『ない』。断じてありえない。

ルイズ自身すらも経験のあることだが、『本当の失敗』は腕から何かが漏れ出て、外に散っていく感覚だった。何もおきない。ただ瞬間に、身体が弛緩するだけだった。あれこそが本当の失敗。

翻って自分の『今』の失敗はどうだろう。

なにかが収束する。杖に集まる。そしてそこから飛び立つ。目標で収束する。そして爆発。

ルイズはそのプロセスすら失敗だと思っていた。何かが足りないのだと信じていた。人が使う魔法を良く観察した。そこには自分に足りない何かがあると信じたからだ。何かは判らない。判らないことすら自分の未熟ゆえだと思った。そう信じた。

何かが違う。自分の行おうとする行為に人とは違うの何かがある。或いは無い。で、あろうから爆発という失敗を招いているのだ。と、いうことは判っているつもりだった。

つもりでしかなかった。

実際には何も判っていなかった。

何が違う？

ルイズが初めて魔法を『失敗』させてからの、ここまでにいたる10年ほどは唯それを探る、探り続けた10年であったと言っている。ひたすらに感覚を研ぎ澄ませて、何かを探る10年。

失敗だと断じていた感覚が混乱したのは他でもない。イングリッドの存在。

イングリッドを呼び出したとき、あそこで感じた感覚。基本的には常の失敗と変わらなかった。そこに手ごたえがあった。失敗。そう断じた感覚の先に現れた成功と言う結果。

混乱した。

そして契約の儀。

失敗するかと思った。余りの緊張で表情を変える暇もなかった。力が出て、力が収束する感覚。普段と変わりはなかった。だから爆発すると思った。内心ではこれで終わったのだと思った。

イングリッドを打ち倒したあの爆発。それが唇の先で起きる。その結果は。

成功だった。

だから、ルイズはなおさら混乱した。

爆発。爆発の先にイングリッドが現れた。だからあの時点では、推測が、一つ変化した。

ルイズの魔法は失敗して爆発するのではなく、爆発の先に結果が伴うのかとも思った。何らかの理由で、結果をもたらす現象が途中で爆発という状況を作っているだけなのかと思ったのだ。

力の出現。収束。爆発。そして結果。

今までは結果の発現の前に起きる爆発で結果が吹き飛ばされて確認できなかった。それだけ、とすら想像した。

今ままであったら単なる妄想でしかない推測。弱気になって、ありえない妄想に逃げたのだと言われても仕方が無い。

しかし、あの時は違った。イングリッドという結果を伴ったのだ。成功と言う結果が観測された。魔法の発現の失敗と言う風に見られていた爆発の後に伴った結果がイングリッドなら、この推測は十分に

成り立つものだった。ルイズの魔法にとって、爆発とは成功を導くためのプロセスの一段階に過ぎないのではないか？それがあまりにも結果の瞬間に近いタイミングで発生するので、正しい成功の結末を観測できなかったただけだった。そんな推測もありうるかと思った。

しかし、契約は違った。爆発しなかった。しかし本当の失敗でもなかった。ちゃんと成功した。イングリッドにはルーンが刻まれた。ルイズの思考は螺旋回廊に迷い込んでしまった。出口が見えない。出口が見当たらない。

イングリッドが何を言いたいかわかるような気がする。いや、とつくに理解していた。皆、理解しているのだろう。たぶん言えなかった筈だ。言える筈が無い。

魔法。

魔法のあり方。

常識としての魔法のあり方。

本当の意味で、本当に、召喚と契約は、ごく僅かの成功の実例だった。そうなのかも知れない。初めて本質的な意味での成功だった。そういうことなのだ。

いや、本来人々が知っている意味での、魔法と言う体系の中での『成功』。

魔法を知っている者なら言える筈が無い。言おうとした者が大勢いた筈である。恐らく、母も姉も——厳しく接することこそ義務と気負った長女も、その分だけ暖かく包むのが私の義務と決め付けたであろう次女も、言えなかった言葉。

大勢の者が私を指導した。皆、熱心に指導した。10年である。10年間という短くは無い年月の中で、ルイズに対して、ルイズの「失敗」に対して、ありとあらゆる試みが行われた。

ルイズが心折らなかつたのは、自分が信じる無能に対して大勢の間が、その結論は性急だと断じ続けたからである。

ありとあらゆる人々がルイズを調べた。ありとあらゆる方法でルイズの魔法を調べた。

全員が全員、心の底からルイズを心配するという訳ではなかったと思う。中には、誰もが知り得なかったルイズの秘密を暴いて、他人を見下そうという浅ましい考えを持った人間もいたのかも知れない。ルイズに対して欠片も人間的興味を持たずに、自身の功名心だけを持ってルイズを調べた者もいたかも知れない。しかしそういう人間であつても、いや、だからこそかも知れないが、真剣にルイズの魔法の失敗の謎を解き明かそうという気概に、他との違いはなかった。きっとそういう事も考慮して、ルイズの両親は大勢の人を呼んだのだろう。その実力におかしいところがある人間はいなかった。

彼女らには結局、ルイズの謎を解き明かすことは出来なかった。ルイズの元を離れてなお、調査を進めているのだというメイジは少なくは無い数があったという。事実、魔法学院に入学したことに対して、恨み言じみた手紙を送ってきた者すらいる。魔法に関しては疑うことすら罪と、外からは見られているハルケギニアの魔法技術研究の総本山である魔法学院である。そこに入学すればたちまちルイズもその能力を開花させるでしょう今畜生！ぐらいの意味不明な手紙を見たルイズは好意的に苦笑いするしかなかった。ああ、私はこんなにも心配されているんだ……！

今思い直すと、その手紙の内容は随分と含むところが多かつたような気がする。ある一面で同意するような別種の苦笑いが浮かんでしまう。きっと手紙を出した主は、魔法学院のあり方がある程度理解した上であのような捻じ曲がった、本心を隠した手紙を自分によこしたのだろう。そうとまで思ってしまう。

それはともかくとして、あるいはそれも含めて、実のところ、ルイズを見て指導した人々にはある種の結論があつたと思う。推測ではない。ルイズ自身もなんとそれに気が付いていた。

両親も気が付いていたかもしれない。いや、彼女ら以上に常に近い位置にいた2人である。その可能性に気が付かないはずが無い。姉も気が付いていたのだろうか。やはり気が付いていただろう。そのほうが自然なのだ。何をしようと、何を行おうと、何を試みよう、と、爆発。どう指導しようと、どう教えようと、爆発。

手を尽くし、技術を尽くし、言葉を尽くし。そしてなお、爆発。
ルイズは指導に対して熱心に応えた。必死になって応えた。言われたとおりの事をやった。教えられたとおりに魔法を行使した。爆発。

爆発。

爆発。

そして爆発。

ルイズの魔法。ルイズと言うあり方の持つ魔法。その結果。それが導く結果。それが導くべき結果。

駄目。

それは駄目。

もし、イングリッドがここに「いなかったら」。

召喚の儀に失敗していたら。

納得したかもしれない。諦めたかもしれない。

しかしイングリッドがここにいる。

これは成功の証。

「普通の魔法」の成功の証。

到底納得できない。

駄目！

イングリッドが硬い表情を浮かべている。何かを迷っている。何かを口にしようとしている。

彼女が口を開くであろう直前にルイズは声をかぶせた。

「いやー！」

ルイズは一度視線をそらして、そして思い直し、強い感情を乗せてイングリッドの視線に自身の視線を絡める。

それを受けたイングリッドは一瞬言葉につまり、そして口をつぐんでルイズの言葉を待った。

「その結論は聞きたくない。その結論にしたくない！」

ルイズは見開いた目でイングリッドを強く見つめる。同じように

強く見つめ返すイングリッド。

「まだそれで、納得したくない！」

見つめるイングリッドは僅かな時間を置いて目を閉じ、小さく頷いた。

イングリッドは納得していた。やはりそうであったのか。そう思った。

イングリッドは、どれほどの間、いかほどの期間、ルイズが苦しみがき続けていたか。それを正確には知らない。

しかし短い期間ではないだろうとは予測していた。あまりにも諦観の滲んだルイズのあり方。ありとあらゆる試みが行われてきたのであるということぐらいは容易に想像がついた。

ましてや貴族なのだ。今日起きた出来事で、そのあり方が半端では利かない、半端で済ませられない大貴族であろうと言うことまで理解できた。そういう大貴族の子供が魔法を使えない。

貴族、すなわちメイジ。そのあり方が普遍的な認識であるハルケギニアで、魔法が使えないまま放っておかれる貴族。そんな事はいえない。ならば、何とかしようとするだろう。

当然である。当然、ありとあらゆる試みがなされて来たに違いない。そして、ここまで来てしまった。

本当に無力で無能か？

それは無い。そうであったならそもそも魔法学院にルイズが現れることはなかった筈だ。まだイングリッドが知らぬルイズの両親が、貴族であることを最優先に考える人間であるならば、そもそもここまですルイズが生きていられる筈が無い。そのような外間を憚って、貴族としての立場を揺るがす材料になりかねないルイズという存在を許して置ける筈が無い。

ハルケギニアの貴族のあり方をすべて理解しているとは言いがたい現状であっても、貴族の両親から生まれた「事」になっている子供が魔法を使えない。そんな事がありえるか？

そこから想像される物語は余りにも外聞が悪い。メイジである貴族からメイジである子供が生まれるのが当然という常識がハルケギニアにおける人々の共通認識であるならば、つまり、当然ではない結果の元にルイズが生まれたのだとなってしまう。真実がどうあれ、現実にはそう認識されてしまうに違いないだろう。外聞が悪いどころではない。ルイズはどこから生まれたというのだ。どこで拾われたというのだ。どこで種付けされたというのだ。

そのように互いに疑心暗鬼を抱きかねない状況下で、夫婦の仲が睦ましいというなら異常どころではない。ほとんどホラーだろう。緊張、衝撃、不安。それらは恋に必要な事だと言われているが、それどころではない。普通の結婚生活はそれを超越したところにいたる結果であろう。それが継続した結果がルイズというのなら……。

ただ単にルイズを愛した結果だと言っても、やはりルイズが魔法学院に足を向ける理由にはならない。貴族にとって魔法が使えないという結果が大変にまずい状態であるのは変わらない。

「魔法が使えない」ルイズが共通認識であるというなら、魔法学院に送るだけ無駄という話だ。むしろ魔法が使えない貴族を魔法が使える貴族の中に投げ込んで、どんな虐めだ、どんな嗜虐趣味だ。そういう結論になる。しかしルイズの生き方、ルイズのあり方に、そんな人間性が見えない家族の後姿は見えない。愛されていなければ、人の愛を知らなければ、人に愛される意味を知らなければ、人を愛する事の意味を知らなければ、こんな人間は生まれえない。こんな人間にはならない。

たしかにルイズは余裕が無い。ルイズは感情を激発させる。しかしそれはイングリッドの見るところ、誰かを愛しているからゆえだと思えた。

誰かに期待されている。誰かから何かを貰い受けている。だからそれに応えたい。応えられない。不甲斐ない。だから感情の激発。

不完全で不器用ゆえの感情の発露。ルイズのヒステリー気味のあり方は、愛情を受ける者の裏返しとしてたまさかに見られる、それなりに珍しくも無い思春期的行動の一種だ。イングリッドの理解はそ

れぐらいである。だからルイズがヒステリックになってもイングリッドにとつては何ということはなかったりする。生暖かい視線を向けないように苦勞するぐらいだ。

しかし、そのあたりの推測が正しいとなると、ルイズが魔法学院に今、現に存在する理由が難しくなる。

貴族として魔法を使えない子供が許せないなら、それがわかった時点でいなかったものとされるであろう。魔法学院なんて選択肢にもならない。そこまでたどり着く事すらない。

家族として愛があるならば、貴族として魔法が使えない子供を表に出すのは危険すぎる。魔法学院に入学させるなんてとんでもない。

しかし、現に魔法学院にルイズは入学している。そして今回の結果を見るに遠慮会釈なく魔法を「失敗」させている。周囲の人間も、少なくともルイズの同級生はその「失敗」の程を知っている。

本当の意味での魔法の「失敗」がいかなるものかを理解している者が達が、ルイズの魔法の「失敗」を何度となく見せ付けられている。

魔法の失敗。

メイジとしての無能。

貴族としての無力さの証明。

……それを多くの者に見せて回っている。むしろ周知しているようなものである。ルイズは魔法を失敗する。

逆に考えてしまう。イングリッドは、逆に見てしまった。

ルイズの魔法は爆発する。

それこそがルイズの魔法。

実は結論はとつて出ているのではないか？

本当に無能。

本当に失敗。

それならば魔法学院に入学させる意味がわからない。

ルイズは言った。今の魔法学院のあり方は、ねるとんする事こそが本質だと。ルイズは自身の無能ゆえにそれを諦観と共に自身に当てはめている雰囲気があった。

それもありえない。

まったくの無能と決め付けられて、貴族としてのあり方を揺るがすような人間に求婚するような阿呆がいるか。いるわけ無い。無意味だ。いいところのお嬢さんをつかもうと必死の「無能者」が本当の無能者を欲しがるものか。このように聡明に育ったルイズを、聡明に仕立て上げた両親が無能なわけも無い。

で、あるならば……。

実はルイズを思い、ルイズの将来を案じる人々は、ルイズに対して、ルイズの魔法に関してとつくに結論を出しているのではないか……？

生徒達も気が付いているのではないか……？

それを共通認識とするために魔法学院に。ルイズは。

見詰め合ってしまう。

イングリッドが見たルイズの反応は、どうもそれをルイズ自身が気が付いているのではないか？そう疑わせるものがあった。

ルイズが見たイングリッドは、イングリッドがルイズ自身が下して目をそむけ続けた結論に気が付いていないかと思わせた。

しかしルイズは迷っている。召喚。契約。

どちらか一方だけの結果であるなら、別の選択肢も浮かんだ。

成功した。今また失敗。だが成功の可能性はある。信じればいつかは。

しかし片方はまごうことない成功。片方は良く判らない。

問題は、どちらが成功でどちらが良くわからない結末であるとしても、どちらにせよルイズを迷わせるという問題があることだった。

だから結論を出せない。

どう結論を持っていいかわからない。

だから2人は見つめあう。それしか出来ない。

「おっほんー！」

そのわざとらしい咳払いに2人は飛び上がって驚いた。文字通り飛び上がった。

イングリッドはうつかり天井に突き刺さるかとまで思った。実際には足がほんの少し床から飛び上がるだけで済んだ。ルイズは危うく倒れこむところだったが、それも堪えることができた。

「ギギギ」とでも音が出そうな動作で2人がゆつくりと首をまわすと、その先には、キュルケが苦笑いをして教室の入り口に立っている姿が見えた。

何かを手に持っている。

「仲良くなに見詰め合っているのかしら……？」

わざとらしく手で天を仰いで、顔を傾げながらルイズに歩きよるキュルケ。

顔を紅く染めて、怒りを表しながらルイズが手を振り上げようとしたところでキュルケは、その振り上げられそうになったルイズの手をつかんだ。

「お邪魔だったらごめんね。でも、これは返しておきたかったから……」

手をつかまれて表情も動作も固まってしまったルイズの手のひらに、キュルケが何かを置いた。

疑問符を浮かべたルイズがキュルケの顔を見て、それから自身の手のひらを見る。

そこには懐中時計の姿があった。ルイズがハツとしてキュルケを見る。

「あ……これ！」

キュルケがぱつと離れて頭を下げる。

「ゴメン！大事なものだったんでしょ。でも直すのにしようがないから」

ルイズは首を振る。

「ううん。ありがとう。私も忘れてた。どうしたの、これ？」

「ほっ」と安堵の息を吐くと、キュルケは顔を上げて頭をかいた。

「うん。私の前まで飛んできたのよ。かなりの勢いだった。直撃だったら死んでたかも」

いたずらっぽく笑うキュルケにルイズは怒りをあらわにして唸る。

「むー、ちゃんと隠れなさいって言ったわよ、私！」

イングリッドがそんな2人を見て笑う。ルイズの怒りの矛先がイングリッドに移りそうになった。

慌ててキュルケがそこに割り込む。

「ああああのね、ルイズ。ふたは取れるし、文字盤は割れるし、結構酷いことになってたから、こういうのが得意な奴に治させたのよ……余計なお世話だった？」

顔を赤らめて言うキュルケに、ルイズはふっと緊張感を緩めて笑いかけた。

「ん……ありがとう。そうね。大事にしてたのよ。忘れてるなんて私も薄情よねえ……」

溜息をついたルイズの表情を見てキュルケも小さく笑う。

「うん。いい物を見れたわ。あれ。劇場でも見れないような感動的なシーンだった」

一瞬呆けたルイズの顔が見る見る赤くなって行く。イングリッドは頭を掻きながら視線をそらした。キュルケはそんな2人を順番に見てから、今度は声を出して笑った。

それを見てキュルケに飛びかかろうとしたルイズだったが、ルイズが飛び掛る前にキュルケが頭を抱えて蹲ってしまふ。

首を傾げて見ると、キュルケの頭があつた場所に大きな杖が顔を出していた。キュルケがうずくまったことで通るようになった視線の先には青い髪の少女が、無表情に佇んでいる。

「やりすぎ」

溜息でも出そうな声で、表情を変えずに呟く少女の姿はシニールだった。イングリッドは笑いを堪えながら彼女に近づく。

「ん。タバサだったか、主よ。授業中は世話になったな」

首を傾げて少し悩んだようだったが、タバサは小さく頷いた。

「なにもしていない」

「くっ」と笑い声を上げて、イングリッドは思わずタバサの頭を撫でた。

「そうか。なら我の勘違いとしておいてくりやれ」

特に嫌がる風でもなく、タバサは頷く。

杖で頭を殴られたキュルケは、頭をさすりながら立ち上がる。ルイズは良くわからないと肩を怒らせながら3人に近づく。

「なによ、さっきからさ。3人だけで秘密めいたことしちゃって、さ。私にも判るように言いなさい！」

3人で顔を見合わせて、イングリッドは苦笑いをし、キュルケは何かを含んだいやらしい笑いを浮かべ、タバサは無表情にルイズを見てイングリッドに視線を移した。イングリッドはそれを見て「おや？」と首を傾げる。

キュルケはルイズを見て笑いながら口を開いた。

「ああ、あれはね。あの時、あの馬鹿が……」

「ガッン」と音でも出そうな勢いでキュルケの頭にタバサの杖が突き刺さる。

なかなか痛そうなの姿にイングリッドは思わず「おお……」とか口走ってしまうし、ルイズは口をひくつかせて身体を引いてしまった。

タバサはうずくまったキュルケを見て、ルイズに視線を戻した。

「なんでもない」

なんとなく勢いで、キュルケとタバサも掃除に加わった。大分片付いていたとは言っても、教壇の周りとはかく、教室の後ろは結構どころではなく散らかっていた。ルイズとイングリッドだけでは昼食時間に踏み込んでなおどうしようもなかったであろうと思われた。しかし、キュルケとタバサの参戦により、人数が倍になっただけで掃除の勢いが違う。戦力二乗の法則というのは、普段の生活の中でもかように発揮されるものなのだ、イングリッドは1人ごちる。

バケツの上で雑巾を絞るイングリッドに、汚れた雑巾を持ったタバサが近づき、そして立ち止まった。そのままイングリッドを見上げて見つめる。

タバサが何を意図してそうしているのかがわからないイングリッドは戸惑うばかりでそれを見つめ返す。教室の後ろで机の雑巾がけ

をしていたルイズがそれに気が付いて、イングリッドに声をかけた。「イングリッド！机の上じゃ、タバサは困っちゃうよ。バケツを床におろしなさい！」

ああ！と納得してイングリッドが視線をタバサにやると彼女は頷いた。

「すまぬのう、気が利かなくて」

床におろされるバケツを視線で追いながらタバサは小さく頷く。

「いい」

その2人の姿に箒を持ったキュルケと雑巾を持ったルイズは顔を見合わせて笑った。

その気配を背に、イングリッドはタバサにことさら顔を近づけて声をかけた。

「で、なんじゃ。何か言うことがあるんじやろ」

タバサは小さく驚いた仕草を見せると、小さく頷いて声を潜めた。

「ヴィノグラドフ」

極端に言葉を惜しむのが個性だとしても言うタバサではあったが、流石に惜しみすぎて意味不明だった。イングリッドは苦笑いをしてしまふ。

「あの阿呆が何じゃ？」

ぎぶぎぶと雑巾を洗うタバサの表情が僅かに苦味走る。

「納得してない」

「？」

意味が通らない言葉に首を傾げてしまふイングリッド。

構わず言葉を続けるタバサ。

「あれはいろいろおかしい……ルイズに対する態度も、授業態度も、ヘン」

上から足音と共に声が降ってくる。

手が伸びてバケツの縁にかけられた雑巾を取り上げた。

「あいつ、余裕が無いのよ。おかしいよね。召喚の後から特に余裕が無いの」

雑巾を持って立ち上がり、自分の持った雑巾が思ったよりも乾いて

いることに気がついて、キュルケも大きな身体を縮ませて窮屈そうに腰をかがめた。

「ルイズの失敗はいろいろあれだから……無視つて言うか、見守るのが暗黙の了解なのに、あいつだけ激しく突っかかるのよ。そのセイでクラスの雰囲気も悪いの」

雑巾を絞るタバサの横で、黒ずんだ水に顔をしかめながらキュルケがざぶざぶと音を立てて雑巾を洗う。

イングリッドは思わず声を出してしまう。

「む。ルイズの魔法に、笑つたりからかつたりするのは日常ではないのか？」

自分の役割はキュルケに譲ったとばかりに、タバサは立ち上がり、ルイズが拭いている机のほうに向かう。イングリッドはきつと、ルイズがこちらに向かつてこないようにタバサが対応するのだろうかと思つた。

雑巾を絞る手が、なんとなく重く見えるキュルケ。

「んーほとんどあいつのセイなんだよね。いろいろ言いたいことはあるけど、さ。ルイズはいろいろあるから。触りたくないんだけど、ヴィノグラドフが口に出すから、ここぞとばかりに釣られて口を出す、みたいなの？」

キュルケの体勢が——主に胸のせいで思つたより苦しそうなことに気が付いたイングリッドはバケツを手にとって、持ち上げようとして、だがキュルケに止められる。

キュルケは一瞬、教室の後ろに視線を移して、ルイズとタバサが椅子の拭き掃除に移っていることを確認して溜息を吐いた。イングリッドに視線を移す。

「なんて言うのかな……。ルイズに文句を言わないと生きていけないって言うか」

首を振って、雑巾を広げる。

「それは言いすぎだけど、なんか、ね。あいつのルイズに対するこだわりは尋常じゃないよ」

「ふむ」と頷いてイングリッドも唸る。

「ん。それは思春期特有の好きな相手には……って、訳でもなさそうじゃの。主の顔を見ると」

雑巾を畳みながらキュルケは苦笑いを浮かべた。

「そんなんじゃないよアレ。いつそルイズを憎んでる、って言ってもいいね。そういう感じ」

立ち上がったキュルケは教室の後ろに向かいかけて、そして足を止めて振り返った。大きな声を張り上げる。

「それからね、あなた！」

釣られて立ち上がったイングリッドに声をかけていた。

「なんじゃ？」

いたずらっぽい表情でウインクをするキュルケ。

「あたしはキュルケ、よ！」

その声にタバサとルイズが顔を上げて此方を見つめる。

一瞬何を言われたか分からないイングリッドだったが、次の瞬間には理解に至って「ああ」とばかりに頷いて応えた。

「うむ、キュルケよ。我はイングリッドじゃ！」

くすくす笑いながらタバサのほうに向かうキュルケ。ルイズも苦笑いを浮かべてタバサと顔を見合わせる。タバサは無表情のまま首を傾げた。

イングリッドは腰に手を当てて、天井を振り仰ぐ。

「やっかいじゃの……」

呟くイングリッドの背にがやがやと声を立てながら、がっちりした体格の男達が手に手に道具や材料を持って教室に入ってきた。本格的に教室の修理を行うのだろう。

伝説の使い魔（3）

教室の清掃が終わった後に、埃を払って、洗面所で手を洗い、顔を洗い、そして鼻の中を洗った4人である。時間はちよūdいタイムニングだった。そうしてルイズが選んだ昼食の場所は集団食堂ではなく、簡易食堂だった。

昼食時間帯における集団食堂のメニューはスモーガス・ボードである。

現代的な意味でのビュツフェ・スタイルではなく、語源となったスモーガス、つまり、サンドウィッチのような軽食をシッティング・ビュツフェ形式で食べる形である。一応、ドリンク辺りまでは無料のようだ。なかなかアメリカなスタイルである。

アメリカのビュツフェ・スタイルでは、ソフト・ドリンクどころか下手をすれば安物のアルコール飲料まで飲み放題というところが多かった。そういうところでは無論、未成年者お断りとなるが、東海岸近傍の都市以外ではそのあたりがむにやむにや……というのはよくあつた話である。

それなのに、軽いアルコールが用意されているが故に、ビュツフェからつまみ出されるイングリッド。なかなか悲しい絵面である。どうしても「そこに入りたい」場合は、穏便な対応で「押し入った」モノだが。

それは別にしても、コンビニエンス・ストアで買える程度のアアルコールなら、買う者は阿呆、という程に何でも無料であつたのがアメリカン・スタイル。日本等のごく一部の例外地域を除けばコンビニエンス・ストアが言うほど「コンビニエンス」でもないという現実があつたりするのだが。

北アメリカ大陸の内陸部では、ミネラル・ウォーターのみ有料とか言う場所も過去にはあつたが、ペットボトル・ドリンクの隆盛と共に、現代アメリカ合衆国では液体飲料のほぼ全てが無料となった。液体飲料扱いされている「アルコール」も含めての話である。

世界が相対的に落ち着きを見せた近現代になって初めて———実

は勘違いから、ビール等をたしなみ始めたイングリッドだが、水の変わりに安いワインを飲まなければならなかった時代はともかくとして、現代アメリカでの任務となれば夕食でへべれけになるまで飲んだり、それで厄介ごとに巻き込まれたり、そうしてケンとかアレックスと出会ったり殴りあったりしているので人の付き合いとは分からないものだ。

アレックスに対してはマールイオン・ブレスを浴びせかけたのが馴れ初めであったのだが。

そのアメリカン・スタイルな集団食堂に対して、簡易食堂では24時間、常時、オーダー・ビュッフェ形式で食事が供される。

昼食で「ガッツリ食べたい人は……」というのは、後精算で貴族らしい昼食が用意されるという意味であり、簡易食堂で供される食事は、大衆食堂で出される食事よりは余程に豪華であるが、貴族向けの食事としてはかなり格が劣るということだ。またその場で精算する必要がある。つまり、現金を持つ必要があるという点で、煩雑でもある。

簡易食堂の利用に当たって、実は「現金精算」という部分で大きな落とし穴がある。一部の「貴族」に対して。

魔法学院は月謝方式である。

毎月、手形を切ったり現金を輸送したりする面倒を押して月謝方式になっているのはややこしい理由があるのだが、それはともかくとして。

学院に通う貴族は、本家より払い込まれる月謝によってその地位が保全される。通常の食事や、学院指定の制服、授業で使用される物品、生活するに当たって必要な寮や入浴設備、ランドリーの維持等はそのから賄われる。

格が酷く落ちる事を厭わなければ、ベットや下着、普段着等すら無料で「貸与」される。

無論、貴族が学院から何もかもを支給されて生活するなどという事態は外間が悪いこと甚だしい。よって、ごくごく一部の学院生活を送るに当たって必然となる物品。つまり、制服や学年指定のマント、学

院指定の寮等の生活場所、風呂や食堂といった諸設備を除いたすべての生活道具は各々の貴族が自弁で用意するのが通例である。

一通りの生活道具を月謝が払い込まれる限りは学院が全て用意するという形態は、まったく意味を失ってしまっている制度であるという。これは過去に、有力な後ろ盾を持たない貧乏貴族の優秀なメイジを救済入学させる処置の一つであったようだが、授業中にルイズから示されたとおり、現状の魔法学院のあり方からするとその活用がまったく期待できない形骸化した制度と言える。

学院敷地内で現金を使う可能性がある場所は、簡易食堂と売店のみであり、後者の支払いはパーソナルチェックを切ることで、後精算に回せる。

なぜ、現金精算が罫かと言えば、学院に籍を置く貴族の中には相当な無理を犯して入学を勝ち取った者が少なく無いという事実があるからで、豪奢に着飾ってその実、実家も自分も懐は火の車。という現実には苛まれている生徒がいるという情けない実態があるのだ。

そうすると、簡易食堂で食事することなど夢のまた夢という「貴族」の存在が現出するわけである。

月々の月謝の支払いに対して自転車操業的困難に汲々としている者がいるので、子供に現金を持たせることすら出来ない、という実像が突きつけられる。

そういう者こそ「形骸化した制度」を使えよと言いたくなるが、その制度は、そもそも「優秀な」者を「救済する」ために用意されている。現状、真に「優秀」なメイジの卵は、そも、大本の本質でどこか歪んでいる魔法学院に足を向ける可能性が無いのであるから「貧乏なだけ」の貴族が制度を利用するのは困難である。

制度を利用させると横車を押そうにも、結局は「実弾」が無い事が根本的理由になっているのだと言うならば、どうしようもなかった。横車を押すためにまずは「実弾」が必要なわけで。

なんで簡易食堂が現金精算一本かと言えば、ここには貴族専用というわけではなくて、教師や職員も訪れるからだ。特にメニューが固定されがちな学院指定の食事を嫌って簡易食堂の常連となっている職

員も多い。

集団食堂で供される食事は貴族の子弟向けということを手を抜くことは無いはずだが、ながく学院に勤める教員の中には、結局は3年でローテーションされる食事に飽きが来ることもあろう。教員以外の疑いようも無く平民のみで構成された職員ともなれば（一部例外がいるとはいえ）、学院が用意した職員食堂の食事です食となるが、一ヶ月どころか2週間程度でメニューがローテーションされてしまうので、食通でなくともどうしようもない事態に追い込まれてしまうのである。このあたり、全てが他人に任せ切りの貴族的社会、というか封建社会の欠陥で、こういつた施設における食事情は地球においても実際、使用人のほうが余程恵まれていたりするのはよくあることである。これは洋の東西を問わなかった現実である。

簡易食堂では『簡易』と冠しながら、現金収入を得る努力を怠らせずに、つねに目新しいメニューの開発に熱心であったり、また、貴族向けの食事のように後先考えずに一流の材料を常に用意できるわけでもないのに、勢い、その調理に工夫を施すことになる。すると、少なくとも季節ごとにメニューが変遷するわけで、実際には気象状況や流通事情によっても変化が発生して、ごく一部の定番メニューを除けばメニューの変化が大きいので、昼食をいろいろ楽しめるといことになる訳である。

ぶつちやけて言えば、集団食堂のスモーガス・ボード自体が実のところ「貧乏貴族」のための食事であって、横車を押したくても押せない貴族に対する学院による精一杯の好意の表れだった。無理して頑張って月謝を払い込んでくれる貴族が、まともな昼食を取れないがゆえにドロップアウトなどというのでは学院としても損であるし。

本当にお金がある貴族ならば、貴族らしい食事を嗜む為に、別途昼食を注文してふんぞり返るわけである。

或いはお金が無いのだが、年齢的肉体的に欠食気味な若者であれば、後清算で個人メニューを注文せざるを得ないということである。

スモーガス・ボードでトレイ山盛りの「軽食」を運んで席に着くのは貴族のプライド上は大変に難しい行為であろうと予想される。

本気の本気でお金が無ければ……プライドなんて灰になれ!と、言うことだ。

純粹に多彩なメニューを楽しみたいのであれば、昼食は簡易食堂で。と、なる訳である。

集団食堂の昼食内容が朝食、夕食に比べて大きく内容が劣る理由はいろいろとある。

女生徒のなかには意図的に昼食を避ける向きもあったし、男子生徒の中にも、常に間違はなく昼食を取るというわけでもない人間が一定数含まれている。思春期の多彩な興味が尽きない男児であるなら昼食時間、というより、昼の休憩時間は貴重な活動時間であろう。

教職員になると仕事が忙しければ、食事を取りたくても無理、というものもあるし、重いものを食べたくはないという歳を経た者もある。食堂施設側としても、朝食からそれほど時間の経っていない時間帯に、朝食と同じレベルかそれ以上の食事を用意する面倒を避けたいという話もある。

多くの人々の考えが交錯して、やがて昼食がビュッフェ・スタイルへと変遷した訳である。

ルイズがイングリッドに説明したところはそんな感じであった。

イングリッドが予想するところのルイズは、ごく僅かな時間での観察結果から言ってもまごう事なき「本当の」貴族であろうし、現金の持ち合わせが無いなんていうことはありそうに無かった。

傍目から見ても「美少女」といつて差し支えないルイズが欠食児童なんてことは更にありそうにも無いことだったし、となれば、純粹に昼食を楽しみたい集団に位置するのは自明であろう。

『簡易食堂』の名に反して相当に豪華な拵えをみせる内装には溜息が出てしまう。

貴族がデザイナーを取るには余りにも軽いデザインであるが、だからと言ってビジネスマンが飛び込むにはちよつと躊躇してしまうような『食堂』だった。

足元から腰の辺りにかけて、木目が美しい重厚なたたずまいを見せ

て壁を飾っているし、真っ白い柱は、一々面倒な装飾が施されている。木目で飾られた壁と、それをところどころで隔てる柱のコントラストが鮮やかだ。

何調と言っているかは分からない。あえて言えば現代バロック調か。どこかのおしゃれなカツフェ、とでもいおうか。もはや「ハルケギニア調」と諦めるべきか。建物の外観や内装からハルケギニアの文化レベルを推測しようとする努力は諦めたほうがいいのかも知れない……。

それでいて軍隊の食堂の如くに、サイド・メニューやサラダがセルフ・サービスで用意されているのだから何がなんだか分からない。本当に混沌とした文化的背景があるようだ。もう滅茶苦茶である。

メイン・メニューは、作り置きの見本がいくつも置かれて、そこから選んでオーダーするようだ。やけにシーフードが多い。シーフードが多い……？

「む……海産物が多いのであるな」

入り口近く、大勢の人間が取り巻いている大テーブルに並べられた見本を眺めながら、イングリッドが頭を捻る。イミテーションではない実際に調理された料理だった。作られてからそれなりの時間が経過しているためか、色や香りなどがおちてしまっているのが残念だ。

首を傾げるイングリッドにルイズが心配そうな表情を向ける。

「トリステインの、今の流行なのよ。魚とかは嫌いだったイングリッド？」

苦笑いを浮かべてルイズに否定の意味で手を振るイングリッド。

「いや、そうでは無くてな。こういうところでは肉類が多いかと思っただんじやが」

イングリッドの頭にはヨーロッパの貴族社会で供される食事風景が思い浮かんでいた。勿論フランスやドイツの風景である。どっかの島国の食事風景は記憶に無い。見たことが無いわけではなく、全然記憶に残らないようなしよっぱい食事だったのだ。内容が薄いという意味でも味が淡泊で一本道な意味でもしよっぱかった。

だいたいにおいて、へばい郷土料理やシヨボイ宮廷料理が多くて、

何度か大陸と戦争するうちに海峡向かいから「それなりに優秀な」料理人を何人も拉致つて、そのな料理を食べ始めてテーレツテレー！したぐらいだから本来の内容は押し知るべしといった所だ。

それは脇に置くとしても、海産物が貴族向けに供されることは珍しかったような記憶がある。イングリッド個人が見て、触れて、体験する範囲などは高が知れているので、記憶に偏りがある可能性は否めないが、海辺にある領地でもない限りは内陸地に新鮮な海産物を輸送するのは困難であるが故に、内陸部で食卓に供される海産物と言ったら、貝類が精々なところだった。今、目の前にある甲殻類や魚類が姿かたちを残して料理されているなんて言うのは、なかなかお目にかかれなかった気がする。

貝類がせいぜいと言ってもなお衛生的な問題が頻出して相当な犠牲者が出ていたことが記録からも知られているし、それでもなお、貝類を得ようとする人間が後を絶たなかったのは、とりもなおさず、肉類に飽きが来ていたと言う証拠でもあったりする。海浜で網を引けばとんでもない量が採れることがあったのも、中世、貝類が比較的、庶民の口に入った理由の一つでもあったかもしれない。

河川部沿いで人間の生活が営まれた結果として、河口付近の沿岸部が富栄養化して、阿呆みたいに大量の貝や海草が繁殖したことはままあったのだ。

やたら滅多ら貝類で食中毒が発生して、王族にすら少なくない犠牲者が出ていたのが中世ヨーロッパの現実である。魚となれば塩漬けとか発酵食品があるぐらいで、実際には海産物というのは内陸部では珍味扱いだった。

大河川脇で発達を見たヨーロッパの都市であるが、河川脇に住民が殺到した現実の裏返しとして河川の汚染は深刻であったから、川魚を食する文化は中世から近世辺りで壊滅状況に陥った。水質汚染が収まりを見せつつある現代でも、ヨーロッパの大河川の中流域から下流域では、川魚を採集する行為が復活していない。

疑いようも無く極めて先進的な重工業が発展して、ありえないほどの住民がひしめいている、先進国家たる日本の都市部の、その大河川

の河口部で、わりかし平気で漁業が営まれていて、あろうことかそこで採れた物が普通に市場に流通している現実というのは、日本以外の国から見ると相当に「逝かれた」風景だったりするのだ。

北海にしろ地中海にしろ内海に近い地勢であるから、重工業の発達に伴って近海漁業は殲滅されてしまったから、ますます魚介類の取得は困難になった。ヨーロッパでそれらが復活の兆しを見たのは、第二次大戦後、重化学工業が衰退の兆しを見せて以降という皮肉な歴史がある。

ただし北海沿岸域では、枢軸国の総本山たる国家がせつせと生産して溜め込んだ生物化学兵器を戦後、大量に海中に遺棄するという馬鹿なことをしたために、漁業がまともに復権するまでの道のりは恐ろしく険しかった。

よって、西ヨーロッパではポルトガルやスペインのように大西洋に面した海岸を持つ国を除けば、シーフード料理なるものの登場は近代以降を待たなくてはいけなかった。

ダディ、クールだね！とばかりに肉を食べてる印象のあるアメリカ人だが、彼らのほうがシーフードの消費量はヨーロッパよりはるかに大きいというのが本当のところ、現代に入ってやっとこ海産物が普通に食べられるようになったというところがピレネー以东の国家の情勢であつたりする。

1960年代以降に急激にフランスあたりでシーフードが隆盛したのはとりもなおさず、冷凍技術が発達したからで、大西洋岸で採集される魚介類が長距離輸送可能となった事実が大きい。1800年代中盤には既に氷を大量生産する技術があつたにもかかわらず鮮魚が内陸部に流通しなかつたのは「氷で冷やす」程度ではいかんともしがたい細菌や寄生虫が海魚に常在していたからである。新鮮な魚というのは本質的には人間が食べるには危険な食物であつたのだ。

マイナス20℃以下の急速冷凍技術の進展を受けて初めて人類は完全に近い形で安全な魚介類を安心して食べられるようになったのであつて、生魚、つまり刺身は勿論、鮮魚であつても、煮た、あぶつた程度では安全が保証されることは無かつたのが海産物の特徴であ

る。ヨーロッパにおける揚げ物や炒め物が、まず魚介類で進展したのは、経験則的に魚介類が危険だということが知られていたからであり、本質的にシーフードというのはリスクが大きな食べ物だったのだ。

揚げ物にせよ炒め物にせよ、食用油と強力なカロリーを發揮する燃料を大量に消費するわけで、それらを調達するコストを考えれば「今日は魚にしようかしら」程度に気楽に料理を楽しめるものではなかった。また、中世後半になって石材の利用が一般的になったヨーロッパの都市部であればともかく、中世の前半では木造家屋が普通であった人口密集地で、住民が食事時間にオーブン以外の火を起こせばうかつりミス一つで大惨事である。

殆ど全てのヨーロッパの大都市が、大惨事を経験したからこそ、最終的に石材を使用した都市景観が普通になったわけだが、そういった歴史故、ヨーロッパ沿岸部の都市であつてすら火を通す魚の料理と言えば、メインはオーブンで調理される焼き魚か蒸し焼きであった。

「宅配便」を生業とする魔女が受け取ったパイなんかを思い出すとよい。あれがシーフードを使った料理の庶民的工夫の限界だったのだ。

先ほどの島国の例で言えば、とにかく焼く。なんとしてでも焼く。親の敵とばかりに焼く。それが料理の基本である。よほど食中毒を恐れたのであろう。小麦でもジャガイモでも大々的に食中毒が発生して少なからぬ死者が出ていた時代があつたから分らないでもないが、消し炭みたいな料理がメインですといわれてはげんなりするかと請け合ひである。フィッシュ・アンド・チップスでも上等な料理だと感心したのだ。

イングリッドが思わず苦笑いを浮かべたのはそういう「経験則」からである。

推定年代が激しく変遷しているが、朝食内容から特定する分には16〜18世紀フランス辺りと見ていたハルケギニアの食文化に対する評価が、うっかり砕け散ってしまった事実に関心を痛めていたりする。もう、本当に、本当に滅茶苦茶である。

イングリッドが苦笑いを崩せずにルイズを見る分には、その顔に魚介類に対する嫌悪感が見られなかった。それはつまり、シーフード料理が珍しくないという証左であって、貴族が食する分にも安全が保障されているという証拠なのだろう。

一つ一つの通常の生活活動で一々驚かされてばかりである。どこまで、いつまで驚かされ続けるのだろうか。イングリッドは自分の神経が保てるか心配になってきた。永い生を過ごしてきたというだけで無闇に物知りになってしまったイングリッドだが、今となっては自分の広くて浅い知識が恨めしい。知らなければイノセンスでいられたらうに。

互いに見つめあう格好になったルイズとイングリッドに妙な視線を送りつつ、キュルケとタバサは本日のメインデッシュをなんにしよるかど喧々囂々である。後から後から大勢の人間が押し寄せる入り口で、お見合いを続けるのも迷惑であるから、イングリッドは海老（ロブスター？）の香草焼きを選んで注文した。釣られるようにルイズも同じメニューをオーダーする。

すると、あーでもないこーでもない騒いでいたキュルケとタバサも結局は同じメニューを頼んだ。

4人が連続して同じメニューをオーダーしたのを見た後続の者達も、集団心理とばかりに次々に同じメニューを注文し始めて、厨房でメニューを聞く人間の顔が引き攣る。

結局、ルイズたちが海老の香草焼きを選んだ後、ものの数分でそのメニューはクローズと相成った。

ルイズたちが知らない、或いは気が付いていないだけで、海産物に対する危険性がまったく失われていない可能性はあった。しかしイングリッドはそれを重視しない。ルイズたち……というより、ルイズを、イングリッドが疑うことは無かった。

何を食べようかと迷うことはあっても、ルイズが禁忌しないのであればシーフードを選ぶことに対する躊躇いは無かったのだ。

自分達の後ろで海老の香草焼きが人気メニューになって、俄かに厨房が混乱することになった。そんな騒ぎが起きていたとは知らない

4人組は、テーブルを一つ占領すると、次々にサイド・メニューを選んでいく。あきれ果てたことにテーブル一つ一つにアテンダントが付いて回って、持ってきたメニューをメモしていく。つまり、それで清算する事になるんだろう。

契約を行った場で口にしたパンの種類の多彩さと味の良さの記憶から、イングリッドは躊躇う事無く多種多様な種類のパンを、プレートに山盛りになった中から適当に選んで取っていく。

メニュー・テーブルには揚げ物や焼き物、煮物と、かなり多様なメニューがあつて驚いてしまう。これでオーダー・ビュッフェとは疑問である。所謂「バイキング」と違い、ブーランジェテーブルとサラダバー以外には調理人が幾人か付いていて、その場で頼めば、一定量を盛り付ける形だ。つまり、その一定量で値段が決まっているのだろう。中途半端なビュッフェ・スタイルと言える。なかなか人件費がかかりそうなスタイルだ。それを疑問に思つて、イングリッドはルイズに尋ねてみた。

「うん。昼食のときだけよ。四六時中こんなことやつてるわけではないわ。ディナー・タイムや休日なんかは定食メニューだけよ」

一抱えもあるプレートに山盛りのサラダを乗せて運ぶタバサが、よろよろとテーブルに近寄る。それに気がついてキュルケは小さく微笑んでタバサに手を貸す。青い髪を揺らして、小さな顔を上下に振つて謝意を示すタバサ。

「サラダとドリンクは取り放題、飲み放題で無料よ。授業がある日はパンも昼食に限って食べ放題なのはありがたいよね。メインをオーダーせずにサラダとドリンク、パンだけつてのはマナー違反だけだね」

そう言いながら、キュルケがヴァン・ムスーをコップに注いで回る。パチパチという音がテーブルの上に響き渡る。音と共に弾ける泡から発せられる匂いはかなり甘い。糖度が高さそうなワインのようだ。ルイズが苦い顔つきをしながらそれを眺める。

「ねえ、キュルケ」

空っぽになったビンに気が付いたメイドがすぐさまそれを回収す

る。フロア・アテンダントかとも思ったが、昼食時間帯だけのお手伝いといったところだろう。朝食の時間に見かけたメイドやフットマンがあちこちにいるのが見て取れる。

「なあに、ルイズ？」

影の無いにこやかな笑顔でルイズに振り返るキュルケ。なぜだかいやそうな表情でルイズはその長身を見つめ返す。

「私たちって、こういう仲だったかしら？」

キュルケの笑顔が凍った。

メインを待ち切れずにもきゆもきゆとサラダをほおぼるタバサは訝しげな視線を二人に送った後、我冠せずと咀嚼を続ける。イングリッドはイングリッドでそんな二人のやり取りを見て嘖き出してしまふ。

「なによー！」

「なんなの……もう」

にししとばかりに笑うイングリッドを無表情でタバサが見つめる。しかし口の動きはとめようとしない。右手で次々にサラダを口に投げ込んでいくのも止まらない。

「いまさらだの。もう素直になっていいのではないかや、キュルケよ」
小さく眼を見開いたキュルケの顔が赤く染まっていくように見えた。実際はそういう雰囲気だけで本当に赤くなっているかどうかはよくわからない。彼女の体色はそういう機微を見せるには向いていないのだ。

「え……、その、あのね……」

わたわたと手を振るキュルケはまったくの無意識でルイズと接していたようである。急に現実に戻って、自身の行動を振り返ったのだろうか。

イングリッドがキュルケを認識してまだ数時間しか経過していないが、朝の邂逅からも授業中の行動からも、キュルケがルイズに、普段どう接していたかはある程度想像がついているイングリッドだった。恐らくは自分が原因で、キュルケがルイズに向かって積み上げていた壁を無意識かつ一方的に崩してしまっただろう。彼女はこれ

から壁を作り直すのだろうか？

「え……なに？なんなの、この雰囲気」

思いつきり響められたルイズの表情がある意味微笑ましい。そこに暗い感情は無い。むずかゆい空気に純粹に困惑するばかりのルイズ。

そこにワゴンを押したメイドがやってくる。

「パリユルスの香草焼きと、小魚の揚げ物付け合せです。4人分ですよ。良かったですか？」

氣勢をそがれたルイズは作り笑いを浮かべてメイドに相對する。キュルケはあからさまにほっとしたようだ。タバサは喜色満面といった面持ちだ。雰囲気だけが。表情は鉄面皮のまま。鼻腔を強く刺激する香りが心地よい。

イングリッドは耳にした事が無い海老の名前を聞き及んで頭を捻る。40センチはある巨大な海老は腹を裂かれて茶色く染まった身を露にしている。褐色の身に様々なハーブが絡んでいるが、海老自体の香りは損なわれていない。かなり高度な調理が施されている。だからその正体が分かってしまった。

イセエビかよ！

椅子の上でへなへなと姿勢を崩してしまう。

イセエビだよイセエビ！40センチだと！でかいよ。大きいよ。

巨大だよ！髭も立派だよ！色も見事だよ！

一度湯に通してから焼いてるねっ。衛生面からだろうかねっ！生簀なんて無いだろうから、湯に通して置いておいて、客に出すときに火を通して焼くんだらうね！面倒だね！安全だね！おいしそうだね！ロブスターじゃなかったんかいっ！ロブスターじゃなかったんかいっ！！ロブスターじゃなかったんかいっ！！大事なことなので3回言いました！！

硬い視線で、ぎこちなくルイズを見つめてしまう。いろいろと心配になってしまふ。主に値段的な面で。

「る……ルイズや」

大きくは無いテーブルの上でアレコレと置かれたプレートを退け

ながらルイズがメインデッシュを受け取る。恐縮するメイドから受け取った皿を手にした瞬間の、僅かな沈み込み量から結構な重量があることが見て取れる。

「なあに、イングリッド」

ルイズは受け取ったプレートを手渡して、別の一皿を受け取る。タバサは「よっこいしょ」とばかりにその皿を身構えて受けとっていた。キュルケは自分の分を勝手にワゴンから両手で取り上げてさっさと自分の前に置く。ワゴンから続いてスプーンを手にしようとした。メイドが慌ててそれを制して食器を用意し始める。

……メイドが両手で抱えたプレートを、ルイズは片手で受け取った。それで、特に困った風にも見えなかった。

あまりに自然な動作だったので見逃すところだった。だが、それはイングリッドも仰天してしまう。

それになにかを思うところもなさそうなルイズは、キュルケを見咎めて唸った。

「キュルケ。行儀が悪いわよ」

むーと不満そうに頬を膨らませたキュルケは、髪をかき上げた。

「いいじゃない、これくらい。マナーなんてうるさく言う人はいないよ」

ルイズの目が尖る。片眉が跳ね上がった。

「私が言うのよー」

タバサがそれを見て取って、キュルケと同じようにごく僅かに眉を上げる。

「面倒」

ポツリと出た言葉にルイズの口元が歪む。

そこから騒動が起きるかもしれない状況を察して、それに巻き込まれぬようにとイングリッドの後ろに回ったメイドは、こっそりとイングリッドの分を素早くその前に置いた。頭を下げてそそくさとその場を離れる。ただ、イングリッドの心中はそれどころではなかった。

「いやいやいや、ルイズよ。昼まつからコレを頼んで財布は大丈夫なのかや」

心なしに青褪めた表情を見せるイングリッドの様子に気が付いてルイズは首を傾げた。キュルケも不思議そうにイングリッドを見つめる。タバサもひとしきり首を捻って、ふと、何かに気が付いてぼそりと口を開いた。

「確かに安くない」

ルイズとキュルケがその言葉に反応して互いに顔を見合わせてタバサに視線をやり、次いでイングリッドに視線を移した。

「イングリッドが選んだんじゃない……」

イングリッドは慌てて両手を振った。

「違う。違うんじゃないよ。置いてあった見本は色も香りもおちておったから、我は私の知るもつと庶民的な海老の料理だと勘違いしたんじゃない！」

えっ！と驚いた表情を見せるルイズとキュルケ。引き攣った表情で恐る恐る海老に顔を近づけるイングリッド。いろいろなハーブの匂いに負けずに間違いなくイセエビ特有の濃縮された動物性プランクトンを主とする香りが彼女の鼻に襲い掛かる。やっぱイセエビだよ、コレ……。

「へー、平民はこんなに大きなパリヌルスモドキの海老を食べることがあるんだ」

純粋な好奇心を顔面に浮かべて、キュルケが笑みを浮かべてイングリッドを見つめる。

ルイズはルイズで若干複雑な表情を浮かべている。

「そういえば平民には手が出るようなモンでもなかったわね、コレ。コレを選んだ時点で気が付くべきだったかしら？」

「いいっ！と驚愕に表情を歪めるイングリッド。ルイズが苦笑いでそれに応える。」

「2人で毎日食べたなら流石に月末に苦しくなるかもしれないけど、たまになら大丈夫よ」

大丈夫なのかいっ!!毎日食べても「苦しい」ですむのかいっ!!すか
んぴんになって困らないのかいっ!!

どこまで、いつまで驚かされ続けるのだろう。イングリッドは自分

の神経がどれだけの間、保てるか心配になってきた。割と早い段階で発狂するかもしれない……！

キュルケも苦笑いを浮かべた。

「そうよね。平民の感覚からすれば、昼間にパリヌルスが普通にレストランに置いてあるなんてことは無いモンね。確かに迂闊だったかも」

タバサがフォークでイセエビの身をつつきながらうんうんと頷く。

「学院ならでは」

解された身を口に運んで幸せそうな表情が一瞬、本当に一瞬だけ浮かんだのが視界の端に見えた。イングリッドは驚いてタバサの顔を見つめてしまう。

イングリッドだけでなく、キュルケもルイズも、一瞬のレアな光景に気が付いていたようだ。3人でまじまじとタバサのポーカーフェイスを見つめてしまう。そういえばこの世界にはポーカーというゲームが存在するのだろうか？ 寮塔1階の応接室にはゲーム・テーブルがあったからカード・ゲーム自体はあるのだろうか。

混乱が抜け切らないイングリッドは意味不明な思考を頭の中で振り回してしまう。

教室で相對してから、ごく僅かな時間しかタバサをうかがうことが出来なかったイングリッドだが、この小さな体躯の少女が、酷く歪な思考を抱えて頑なになっていることだけは気が付いていた。

彼女が表情を固定して崩さないその様は彼女なりのなんらかの防衛本能の発露であると思っていたが……歳相応の小さな笑顔は眩しかった。その記憶だけでこれから食する料理の味が三割増しになるのではないかとすら思えた。

結局は、そのイセエビをいただいた4人である。出された食事を残すのは罪である。ましてや自分で選んで注文した料理なのだ。食べ残すことはありえない。

マナーがどうかという意味でなく、ある時ある瞬間に、食べられるものを食べるという行為が存外に難しい事なのだという実感がイングリッドにあるからだ。

昔に比べて劇的に改善されたとはいえ、今でも地球では、財布に必要なものが入っていれば必要な食べ物を得られる地域というのは多くない。自身が生活する上でも、自身が闘争に身を置く立ち位置にあるという点からも一食一食に大いなる感謝を得ることは自然なことだった。極東の一部地域で使われる、様々な意味のこめられた食事にささげる感謝の言葉「イタダキマス」は、イングリッドの大好きな言葉の一つである。

ちなみにイングリッドの所感では「〔不確定名称・イセエビ〕の香草焼き」は大変おいしゅうございました。他の3人を見てまわしても大満足だったようである。

支払いの段になって、激しく目を背けなくなったイングリッドだったが思い直して3人がどれほどの金額を支払うのかを見届けようと向き直った。それもまた、ハルケギニアを考察することに対する一助になるといいなー、と若干後ろ向きに考えたからだ。

自身が予想するよりも強い視線がルイズに向けていたらしかった。ルイズがイングリッドの視線に気が付いて小さく微笑む。

「大丈夫よイングリッド。『使い魔』に十分な食事を取らせるのもメイジの責務。あなた……イングリッドに支払えなんて言わないし、私がイングリッドの支払いを立て替えた、なんて思わないでね」

その時、ルイズの内心は喜色満面だった。ルイズが持っている金銭が自分が稼いだお金でないことは重々承知していたが、貴族に限らず、自分達が夫婦の営みの結果として生まれ出でた子供に対して、それが独立した生活能力を得られるまでの間、独立を勝ち取るまでの教育と、生活援助を継続することは貴族以前に人間としての責務であるというのがルイズの持論だ。

現実の要求の結果として、そうではない、そうならない状況があることも知ってなお、そうであるべきであり、外部がどうあれ、いつか訪れる未来で自分がそうあるべきだと信じている。

よって、今ここで支払いを行う金銭に対して、気後れする事は無

かった。

無駄使いは戒められるべきことであつたが、必要なときに必要なだけ必要と信じるべき金額を使うことに葛藤は無かつた。

それ以上に、今ルイズを支配している感情は、今までに一度も感じたことの無い喜びだつた。まさか昼食一つでそんな慨嘆を得られるとは思つても見なかつたというのが本音である。

誰かに何かを与えられるだけの人生だつた。友人らしい友人なんていなかった。姉妹も両親も家族であつて、血縁者であつて、それはそれとして大事で、一生をかけて守るべきものとして定めた存在で。だけど、そこにそれと同じくらい大切に大事な存在が加わることがあるなんて、実感として得られたことは唯の一度も無かつたのだ。

一度も、である。

大概にしてルイズは不遇な人生を送つてきたのだ。

人間が人間として生活を送る上では何の必要も無い魔法だが、あれば便利という程度で、無ければ無いなりに工夫もされようし、魔法が存在しなくても何とかなるのだろうという実感は、ほかならぬイングリッドの存在が証明していると感じ始めているルイズである。

しかしルイズの立ち位置は違つた。魔法の存在は絶対である。そういう出生だつた。この世界に生まれ出でたその瞬間から、彼女が魔法を行使するのは必然だつた。そして彼女はそれに対する能力に大いなる疑問符が付きまどつた。

これでは近しい立場に友人を得よというのが無理な話である。ルイズが家族以外の存在から孤立感を深めたのも納得だつた。ヴァリエールの家の中では特に難しい立ち位置だつた。

貴族に仕える使用人は、貴族個人に奉仕する前に魔法を使う人間に對して仕えるという前提が會つた。ハルケギニアでこの考え方は、個人の無意識に深いところで刻み込まれた絶対的真理であると言つてよい。イングリッドには理解しがたいことであつたが、平民と貴族を隔てている現実には、貴族という立場、平民という立場以前に、魔法が使えるかどうかという1点が恐ろしいほどに深い溝を穿っているのだ。

彼らに自覚があるかどうかは疑問な部分もあるが、魔法を使えると言う事には、単純に技術の有無以前の問題として、始祖ブリミルに祝福された人間とその他という区別があるのだ。

これは恐ろしいほどにこの世界を縛っている。

うっかりすれば、魔法を使える人間がその他の人間を排斥に走ってもおかしくないほどの差別を生みかねない、厳然で冷酷な事実なのだ。ハルケギニアの歴史に於いて、そういった惨劇が発生しなかったのは僥倖であったといえる。単純に魔法を使える人間の絶対数が少なかっただけかもしれないが。

つまり、現状、魔法を使える者が貴族、そしてそれに仕える使用人というのはある意味、始祖ブリミルとそれに連なるものへの奉仕という一側面があるのだ。実感がどうあれ、この世界で平民が貴族に頭をたれるのは、地位の違い以前の根源的な問題なのである。

そこに、ルイズ。という存在である。

ヴァリエール家に仕える使用人がルイズという存在に対して大いに困惑したことは間違いが無かった。人間的な感情以前の部分からやって来る思考が、ルイズの立場を非常に難しいものにした。これでルイズが目に見える形で両親からの愛情を得ていなければ、ルイズの幼少期は悲惨極まりなかったであろう。もしも失敗魔法を、失敗ではない方向に向けていれば大惨事だったに違いない。

そうはならなかったのは、或いは、使用人たちがその可能性に気が付いたからかもしれないし、それ以前に、ルイズを取り巻く家族達がルイズに注いだ愛情と教育がルイズをそういう方向性に導くことを許さなかったのだという結果があった。

しかし、ルイズがヴァリエールの土地で孤立していたことには間違いが無かった。使用人たちは腫れ物を扱うような風であったし、ヴァリエールの領民はルイズに対してどう接すればいいか分からなかった。

ルイズという存在が直ちにヴァリエール家への疑問に繋がらなかったのは、ヴァリエール家の歴代当主の政治手腕がたいしたものであった証左であるのだが、それはルイズ自身への慰めとはならなかつ

た。

よつてルイズの今までの一生とは酷く寂しいものになっていたのだ。

そこにイングリッドである。

彼女を『召喚』という形を持って拉致したのだという重い目はルイズを苛み続けている。恐らくは一生涯を持って担ぐべき原罪なのだろう。ルイズはそう思っていたし、そう信じていた。彼女はこの思いを誰にも悟られることの無いように、一生心に押し込んでいくのだと誓っていた。

しかし、だからこそ、イングリッドの生活を守る、イングリッドと共にある事こそがルイズの責務だと信じた。そうすることが現在、ルイズの存在理由だともいうように。

だから、今の今まで注がれてきたモノを、受け渡すことが出来る存在としてのイングリッドはルイズにとってあまりにも特別なモノだった。

ルイズにとってイングリッドは、あまりにも複雑な立ち位置だった。それを説明できるとは思わなかったし、説明して回る事も思いつかなかった。心の奥底に押し込めて、いつかブリミルの前で懺悔すべき内容だと思っていた。

そこまで考えて、思考は最初に返る。

一瞬で走馬灯じみた思考を弄んで、実際には、今のルイズの身を震わせるのは兎戯にも似た喜びだった。

誰かに『奢る』。

この行為がコレほどまでに快感だとは知らなかった。

物語とか歴史書とか、誰かの日記だとか、ルイズが読み漁ってきたいろいろな書物で示された人間の性癖の中に、ルイズが納得出来ない、理解できない人間の性癖の一つとして、やたらと誰かにモノを贈り、奢り、終いには自分の生活すら投げ捨てて散財し、路傍で果てたという描写があった。

理解できなかった。

そして、今、理解した。

何という快感。
何という愉悦。

しかもイングリッドである。

彼女は無一文なのだ。そうしたのはルイズ自身の責任だという感情はあつたが、それを脇に寄せてしまえるほどに、イングリッドが自身を頼る以外に他無いのだという事実は、ルイズにある種の嗜虐感を沸き立たせた。

ルイズの本質は他人に痛みを与え、痛みを負わせることから喜びを得ることなのか。唐突に湧き上がったその疑問すら愉悦だった。

突然ルイズの顔面に現れた不自然な笑みにイングリッドはぎよつとしてしまう。ほんの刹那の時にルイズの中に途轍もない葛藤が流れて消えたのだとは誰にも想像し得ないことだった。だから、ルイズの笑みに理由を見出せる者など存在するはずも無かった。

イングリッドの仕草に気が付いて、キュルケとタバサが振り返る。その手にはメモが握られている。先ほどの食事の内訳が書かれているのだろう。みんなで適当につまんだサイド・メニューをどう支払おうか話し合っていたのだ。

彼女達が振り向いたときにはルイズの笑みは柔らかなものに変化していた。2人はイングリッドの態度に首を捻る。イングリッドは冷や汗を拭って、まじまじとルイズを見つめてしまう。ルイズは小首を傾げた。

勘違いであつたのだろうか？

「……有難う」

なんとかその一言を振り絞ったイングリッドだった。

その言葉に満面の笑みを浮かべて応えるルイズ。

「どういたしまして」

支払いに関して3人でアレコレと悩む。ルイズが最後まで強硬に、自身とイングリッドの分を支払うのだと譲らなかつたが、キュルケと、驚くべきことにタバサも、等分に分けて支払うのだと押し切つてしまった。結構な時間を経て、強引に納得させられたルイズが不満を

持ちながらも金貨を20枚近く差し出した。

キュルケとタバサも同じだけの金貨を出す。

支払いカウンターの上に積み上げられた金貨を係りの者が数える。イングリッドを酷く困惑させることに、そこには機械式のレジスターが存在した。

初期のタイプライターのようにボタンを押すたびに大きな音を立てながら、ジャーナルを打ち出して金額が出てくる。計算機能もついているらしい。ジャーソン！と音を立てて、長く打ち出されたジャーナルが床に向かって垂れ下がる。

ジャーナルの印字部分の基部につけられたカッターを左右に素早く動かすと、紙が断ち切られて、それが係員の手元に残る。そこに印字された内容とカウンター上に金額を見比べて、ドロワーからつり銭をつかんで数えた。

いくつかの銀貨が差し出されて、キュルケが受け取る。

その少なくない量の銀貨をどう配分するかでまた一つ揉めた。ここではルイズが押し切つて、全額タバサとキュルケで分け合うことになった。

あからさまな不満を浮かべたキュルケが銀貨を等分にしようとして一瞬硬直し、いやらしい笑みを浮かべて3等分になると、自分の財布、タバサの手のひらと銀貨を分けて一山、手元に残ったものをイングリッドに差し出した。

ルイズが眉を跳ねさせる。タバサが首を傾げた。支払いの騒ぎの間中、まったくの蚊帳の外にあったイングリッドは唐突に自身に注目が集まったことに狼狽する。

「う……なんじゃ、これわ」

変な発音でキュルケに尋ねてしまう。

「はい、お小遣い」

ルイズは目を吊り上げて、タバサは目を背けた。イングリッドは目を点にしてしまう。

「はあ……何ということでしょう。我は子供かや」

ルイズが頭から湯気を立ててキュルケの前に割り込んだ。

「なによそれ！あてつけ？あてつけなのね。私に対する侮辱かしら！」

大声をあげたルイズに笑みを浮かべて、キュルケが「まあまあ」と宥める。

「違うつて。もともとはあなたの分よ、これ。受け取らないなら、イングリッドに渡したほうがいいと思ったの」

こめかみをひくつかせてルイズが更に言い募ろうとするのを制して、ルイズの顔の前で指を振るキュルケ。

「あなたからイングリッドに渡したの。これ。そういうことにしときなさい」

歯をぎりぎりと鳴らしながら一步下がるルイズ。イングリッドは笑う前に感心してしまった。キュルケの行為をなかなか良い落としどころを見つけたものだとな得してしまっただ。それ以前にルイズをからかう部分が大きそうだったが。

頭を掻きながら、左手でそれを受け取る。手のひらに乗せられた思ったよりも多い銀貨を眺めて呟く。

「我は価値を知らんのだが……」

「えっ」とキュルケがイングリッドを見つめる。タバサも振り向いた。ルイズは慌てて話に割り込む。

「だだだだ大丈夫！明日、明日ね！トリスタニアで買い物するから！そのときに教えるから！」

その言葉でニヤリとするキュルケ。しまつたと口に手をやるルイズ。

「明日。明日ね。聞いたわよ。聞いたわ。タバサも聞いたよね？」

タバサがこくりと頷いた。眼鏡を「くいっ」と押し上げる。

「明日。トリスタニア。買い物。イングリッドと」

文節を区切ってはつきりと応える。

ルイズは一瞬、表情を紅潮させて肩を怒らせたが、溜息をついて肩を疎めると、もう一度深い溜息をついて頭を垂れる。

「ああ……仕方がないわね。失敗だったわ……」

小さな声で呟いた。

「荷物持ちができたと思うか……」

その言葉を聞きとがめてイングリッドは噴き出した。だが一瞬、首を傾げると、何かを思い出して次の瞬間、あわててルイズに詰め寄る。「さて、それは私の仕事である。私の仕事を他人に押し付けるでないぞ」

キョトンとしたルイズは次の瞬間噴き出して、イングリッドの肩に手を置いた。

「だいじょーぶだって。ちゃんと期待している。精々働いてもらおうんだからね！」

それに笑みを返してイングリッドも肩を竦めた。

「働かしてもらおうではないか」

向かい合って笑いあう。

キュルケも小さな笑みを浮かべてタバサを見下ろす。

「仲いいよね」

タバサも頷いた。

簡易食堂を出て、4人はゆっくりとした足取りで外を目指した。午後の授業まで一時間は余裕がある。教室掃除をしていたときに感じた外の風景は春本番といったところで麗らかな日差しが心地よく感じられた。割れた窓ガラスから吹き込んで強制的に押し付けられた空気ではなく、実際に地面に立ってそれを感じたいと、ルイズたちはなんとなく思ったのだ。

この時期は、どうせつまらない授業の連続なのだ。ルイズの性格上、サボることはありえないが、だからと言って教室で望んで缶詰になりたいという思いがあるわけでもない。

4人は、特にキュルケは、午後に発生するであろう睡眠欲との激しくも熱い激闘に身を震わせて、まずはリラックスしておきたいと思った。

教育棟の裏手、聖堂のほうで大勢が巻き起こす騒ぎが聴こえるが知らない振りだ。きつと新入生相手に教職員が大騒ぎをしてるのだろう。

そういえば彼らは朝食の時の也大騒ぎだった。彼らが遠慮していれば朝食の祈りでサヴァティエ・マーテル・ラ・カステン・ジョーレキベリ君とやらもあれほどの辱めを受けることも無かったであろうに。昼食が遅れているのは時間が押しているのだろうか？やたらと簡易食堂が混雑しているのはもしかしたら、1年生が集団食堂で騒ぐ可能性を嫌った人間が多かったからかもしれない。イングリッドが眠りこけている間にも彼らの悪行はあつたはずだから、そういう選択肢を取る者がでるのも当たり前であろうと思う。

魔法の光で照らされる廊下を歩きながら、イングリッドは貨幣単位に対する簡単なレクチャーを受けていた。

明日、実際に使用するに当たって現地で教える、とルイズは強弁したのだが、それじゃアカモにしてくださいって言っている様なものよ、というキュルケの言に一理あると納得したのだ。

「下からドニエ、スウ、ダカットね」

ルイズが財布から銀貨と金貨を取り出し、イングリッドに見せる。キュルケが補足する。

「銅貨、銀貨、金貨と言い換えてもいいわ」

それに頷いてイングリッドは銀貨を手にする。なかなか銀の含有量の多い、いい品質の銀貨だった。ついで、金貨を手にする。光に当てると、イングリッドにだけ分かる理由により、酷く混ぜ物が多いことがわかる。

「むう、これで通貨として流通しているとはな。かなり強力な圧力が無ければ、額面どおりで流通させるのは難しかろう」

ルイズ、キュルケ、タバサの3人は、イングリッドの見立てに驚く。3人で顔を見合わせてしまう。

「よくわかったわね……」

イングリッドは眉をひそめた。

「やはり、か」

ルイズは神妙に頷いた。

「ダカットって言うのはね、ゼツキーノ金貨って言われる、ロマリアで発行されたお金のの」

イングリッドは「ふんふん」と頷く。

キュルケが肩を竦めてあさつての方向に視線を向けた。

「ロマリアって言うのは、始祖ブリミルにとつての聖地で総本山だからね。ちよつとむかしまで、普通に流通していたフローリン金貨っていうのを、始祖に対する尊敬がないって言い出してかき集めて、代わりに発行されたのがコレなのよ」

何がおきたのか、だいたいは予測が付くイングリッドだった。

「貨幣価値が混乱したのだな」

タバサが頷いた。

「迷惑した」

極めて単純化された感想にキュルケとルイズが噴き出す。

笑いながら、ちよつどいい高さにあるタバサの頭を思わず撫でるルイズ。

「知らなかったわタバサ。あなたたつて辛口だったのね」

キュルケも笑って答えた。

「おかげでドニエの価値が下がりすぎちゃつてね。平民はスウの利用が一般的よね」

それをうけてルイズがイングリッドのほうを向く。

「一応ね、10ドニエで1スウ。1000スウで1ダカットつてことになつてるんだけど」

キュルケは腕を組んで唸る。

「ここ数年の為替だと、750スウで1ダカットつてところよね」

「ややこしいの」

キュルケが自分の財布からいくつもの銀貨と金貨を取り出す。

「こつちのちつこいのが1スウ。これが10スウ。こつちの大きいけど薄っぺらいのが50スウ。トリプルシルバーって言われて、一番使用量が多いと言われてるわ」

ルイズが残りの銀貨をキュルケの手から取り上げた。

「こつちの分厚いのが100スウ。トリプルシルバーに次いで使う事が多いわね。こつちが500スウ。大きくて重いし、額面も大きいけど、贖物が一般の平民市場に多く出回ってるから、貴族社会ではあま

り使われないわ」

キュルケは金貨を持ってイングリッドに見せる。

「さっきルイズが出してたのもコレ。1ダカット金貨。でも、この金貨に関しては500スウとして使うのが一般的」

ほら、と、イングリッドに押し付ける。

「見て、これ。ふちを削る馬鹿が多いのよ。金は薬に使ったりすることが多いから、手っ取り早くゼツキーノ金貨をつぶす奴が後を絶たないのよ」

ルイズも頷く。

「だから1ダカット金貨は、1ダカットつてだれも言わないの。私たちも金貨っていうつもりで使っていないの。これは」

ルイズがそれを親指で弾いた。

歪な形のそれは、空中で不規則な回転を見せて、ルイズの右手に戻る。

「通称ロマル。500スウ銀貨の代わり」

イングリッドは溜息をついた。

「めんどくさいの」

ルイズは小さく頷く。

「私が直接体験したわけじゃないけど、コレの発行で、ロマリアの権威は酷く揺らいだそうよ」

だよねーと、苦い笑みを浮かべてキュルケが笑う。

「もっと大きな額面のゼツキーノ金貨もあるみたいだけど、見た事無いね」

イングリッドは呆れて息を吐いた。

「なんじゃ、それは。それでは750スウで1ダカットといっても意味がないではないかや?」

3人とも頷く。「はあ?」とイングリッドは首を傾げた。

「ほら、私はトリスティンの国民じゃないからさ、実家からお金を送ってもらおうときに為替って結構重要なよ。だからある程度は知っているの」

そう言いながらキュルケはタバサに視線を向ける。タバサも頷い

た。

ルイズは苦い笑みを浮かべる。

「キュルケの国、ゲルマニアっていうんだけど、そっちじゃ、結局、銀貨が基軸通貨扱いで、その上はフローリン金貨が出回ってる」

ああ、とイングリッドは納得する。

「ん、つまり国際的にはゼツキーノ金貨が交換通貨だから、価値の変動が問題になると?」

3人が頷く。

「ロマリアの顔を立てることも大事だから、面倒だけど、国境を跨いだ取引はゼツキーノ金貨を使うのが建前なのよね」

キュルケが顔を傾いで両手で天を仰ぐ。なかなか様になる仕草だった。

「国内で普段使う分には銀貨で十分だし、貴族間の取引もフローリン金貨、エキューっていうんだけど、わりとおおっぴらにそっちでやってるのよ」

呆れた顔でルイズを見つめるイングリッド。

「なんじゃそれは。ロマリアとやらの権威はたいしたことが無かったんじゃないの」

んー、と、ルイズが唸る。

「一般的な平民の市場からはエキューは完全に駆逐されたといってもいいわ。でも、もともと貴族は大量のエキューを溜め込んでいたから、そんなに困ってもいないのよ……」

キュルケもタバサも頷く。

「レオ・アフリカヌス開発運動の頓挫で、その後、どこの貴族も大量のエキューを市場に放出したから結局、流通に影響は無かったのよね」

「それでよくもまあ、ゼツキーノ金貨が駆逐されんの」

ルイズは難しい顔をするがキュルケは鼻で笑った。

「ロマリアがせっせとゼツキーノ金貨を造るから。価値はどんどん下がっていく一方よね」

キュルケは手の上で1ダカット金貨を弄ぶ。

「国内で使う分には、500スウです、で、すむけど、お約束、見たい

なもんだモンね。いつまで通用するかしら」

イングリッドも肩を竦めてしまう。

「これでエキューとやらに贖金が出たら、市場は大混乱じゃの」

キュルケとルイズが顔を顰める。タバサも心なしか硬い表情だ。

「それ、やりそうなのところがあるのよねー」

半ば冗談で言った言葉に思ったより深刻な内容の言葉が返って、イングリッドは絶句してしまう。

やや強めた視線で、ルイズ、タバサ、キュルケの順番で視線を向けてしまう。

3人に大きな身長差があったため、首が大きく動いてしまった。それとともに、大きく扉が開かれた集団食堂の入り口、アルヴィーズの食堂の前で足が止まってしまう。

その話は流してしまつてよいものかと、イングリッドは躊躇してしまふ。この手の通貨問題が紛争のきつかけとなったことは地球の歴史でも少なくは無かった。それはつまり、イングリッドの守護対象であるルイズの安全に直結しかねない話題であるから、自然と視線が強いものとなつてしまった。

硬い表情のイングリッドに、困惑する3人。1人は変らない鉄面皮だったが、雰囲気には隠せない戸惑いが合った。イングリッドはルイズに一步近づき、肩をつかみそうな勢いで尋ねようとした。

「それは……」

その次の瞬間、何かが割れる音と共に、小さな悲鳴が上がり、それに続いて「どっ」と笑い声がアルヴィーズの食堂から響き渡つた。

4人は顔を見合わせて、それぞれに困惑して食堂の中を見る。

悲鳴の主に聞き覚えがあったからだ。

伝説の使い魔（4）

床にばら撒かれたのはガレットやトルテリユといった手の込んだ創りのパンたちであった。

食事をことのほか重要視するイングリッドにとってその姿は酷く悲しくもあり、そして強い憤りを感じさせる光景でもあった。

昨日食したそれらのパンの味、その創り、そしてそこに含まれた製作者の思いを考えると、イングリッドは思考を沸騰させてしまいそうになった。瞬間湯沸かし器もかくやという思考の変遷である。

一丁一々に他人に理解してもらえない感情であるとはイングリッドも思っていない。そうではあるが、一瞬の激情に身を任せてその光景の元に、原因の発生源に走ったことは、彼女にとっては必然だった。取り残された3人に、イングリッドが走り去った姿は見えなかった。気が付いた次の瞬間には、彼女の姿は掻き消えて、ふと視線を移せば、やにわに巻き起こった風で自身のマントとスカートが吹き上がっていた。

慌てて首を回せば、イングリッドの身体は集団食堂の突端部に現れて、騒ぎの中心部で身を屈ませていた。3人は驚く事も出来ずに呆けてしまった。常なる鉄面皮を崩してタバサも狼狽を表情に浮かべている。

そのことが後に続く騒ぎに口を挟む機会を逸してしまう原因となったのだが、この時点ではそれを理解せよというのが酷であった。イングリッドの行動はそれほどまでに敏捷であったし、また、3人にとってはまったく意表を突く反応であったのだ。

イングリッドは割れて砕けたプレート破片と、撒き散らされて無残な姿を晒す多様なパンの残骸の中で、身体を震わせているシエスタの脇に膝を落とし、四方に視線をやった後で、青褪めた表情を隠せないでいる彼女の身体をかき抱いた。

アルヴィーズの食堂は、食堂として使われていることは間違いないが、その奥、先端は一種、祭壇の様な光景である。

6つ並べられた長い机は、どこにそんな木が生えていたのかと驚かせる事に、継ぎ目が無く、イングリッドが見立てたところ、ブレット・トレインの2両分ぐらいの長さがあった。その先、10人ぐらいが横に、或いは縦に並んでなお余裕がある広場を挟んで、まさに祭壇としかいえない段差がある。その上には、教壇といおうか、説教台と言おうか、そういうものが鎮座している。

段差の上もそこそこの広さを持っていて、聖歌隊が立ち並んでそれなりに様になりそうなほどであり、その背後には荘厳な彫刻が施された壁が、2階の天井までそびえたつていて。そこには美しい女性の姿がレリーフ状に刻まれていた。

不思議なことに、その女性には顔が無かった。

背後から彼女の頭上を巻いて前に垂らされたブーケに遮られて、俄かに顔をのぞくことが出来ないという意匠を取りながらその実、最初から表情を刻むことを放棄したような彫刻であると見て取れた。何らかの強い意思を持って、その顔を刻むことを拒否したことが分かる表現であった。

そんな壮麗な姿の前、開けた場所にはオーダー・テーブルが並んで軽食が所狭しと並んでいる。ある種、滑稽な風景だった。

ルイズの言を聞けば、ビュツフェ・スタイル、というか、スモーガス・ボードという制度自体が学院成立後、随分と後になって成立した妥協の産物とイングリッドは理解していたが、この光景を見ればそれも納得だった。最初からスモーガス・ボードを想定していたのならこんなちぐはぐな光景はありえなかつただろう。西洋宗教様式的結婚式で、スタンディング・ビュツフェ・スタイルの披露宴が神の像の前で行われた、ぐらいに珍妙な光景だった。

珍妙な光景ではあったが、それが即座にこの世界の人々の信仰心の薄さに繋がるのだとまでは直ちに認識出来るわけではない。

場所は場所だし、信仰心は信仰心なのだ。

世情が安定した世界、国で、ある一定以上の教育がなされた人間の集まりであるなら、普段の生活と信仰が厳密に区分されることは自然

だ。

地球の中世ヨーロッパにおける貴族の館では、その成立に当初、その敷地内に礼拝堂を設置するのはごく自然な事だった。そしてそこでは休日ごとに、家主が立つて、それなり以上に礼節の備わった礼拝が行われているのが普通な光景だった。

ところが、イングリッドがあるとき気が付いたときには、どこの貴族の家も、そうやって備えた礼拝堂を別の用途に使っているのが当たり前になっていった。

倉庫に使うぐらいならまだしも、一時期はやったのは、礼拝堂として使うに当たって備えられた多数の窓を流用して、温室として整備し、オリエンタルな動植物を押し込んで悦に浸る光景だった。そうしたことが大々的に行われていたのを見かけたときには、さすがのイングリッドも目が点になった。

そうやって使うのであればごく当然の結果として、酷く湿度が高い状態が維持されて、そうなれば、深く刻まれた彫を見せる頭を垂れるべき扱いの石像は、カビだらけ、コケだらけとなって奥に放置されることになる。

倉庫として使ってまーすなら、その奥で埃まみれになりましたですまされようが、温室という箱庭世界に置かれて、人工的な自然の営みの結果として前衛芸術じみた色とりどりの姿を見せていることに無頓着な人々の態度は、なんとも言いがたいものがあった。

それでいて神に対する遠慮が無いわけではなく、彼らはちゃんと教会に足げく通っていたのだし、結婚だ、出産だ、育児だ、独り立ちだ、葬式だとなれば、教会に頼っていたのだからなんともはや……といったところだった。

そうやって、倉庫だ温室だとなって、取り出されることも無く、建物の奥底で忘れ去られた彫刻が救出されて現代、中世芸術を今に伝える貴重な遺物として再発見される様は、なかなか感慨深いものがある。

サロンだ、離れだと改造された礼拝堂にあった様々な神の見姿は、碎かれるか、壁に埋め込まれるかしたのだから、歴史の変遷というの

はなかなか興味深いものである。

下らない想像を頭を振って意識から散らす。

突然現れて心配そうな表情を向けるイングリッドに、驚いて視線を向けたシエスタの表情には若干の驚嘆を含んでいたが、刹那の前まで浮かんでいた悲しげな表情は塗りつぶされていた。

そのことに気が付いてイングリッドは小さく笑みを浮かべた。

やはり、一筋縄ではいかん少女だの。

周囲に十二分に同情心を沸き立たせる、可憐な表情であったと思う。床と彼女自身の間で押しつぶされて形を歪める胸も、健康的な指向を持った男児を相手にするのであれば十分に興味を引き付けられる獲物なり得ていた。

彼女の周囲を取り巻く貴族の子弟と、状況を見て取れば、何が起きたかはそれなりに想像は付いた。その瞬間の出来事で意識的であるにせよ無意識であるにせよ、咄嗟に「そういう」姿を披露することができるのであれば、やはりこの世界の平民というのは存外に強いものようだと思ってもった。

もつともシエスタの行動姿勢がこの世界の平均であると即断することは危険である。その辺りの観察は、明日に回せばよい。

いまここで発生している問題は、いかなる理由があつてシエスタが地に伏し、なぜそれを「少年」達が彼女を半周に取り巻いて見下ろし、華やかならぬ笑みを彼女に向けているのかということだった。

イングリッドが現れたことで下卑た笑みは半分凍って、瞳を跳ねさせているのは道化じみているが。

騒ぎに気が付いた者達が、足早に周囲に集まってくる。

イングリッドとシエスタを半周に取り巻く10人ほどの男児を囲んで「祭壇」を盾に、大勢の黒マントと紫のマントが揺れる。

イングリッドが見渡すところ、その集団の中に銀色のマントが混じっているのが見えた。

ルイズの講評から考えてなんの期待も無く、それでも僅かな期待を

持つて、なんとなく銀マンツの生徒に視線を移す。

想像したとおり、彼の顔には何の反応も見られなかった。単純に好奇心を乗せた顔面をただ、イングリツド、シエスタ、その周囲の男児に向けて揺らせているだけである。イングリツドは溜息をついた。

少しでも銀マンツの意味をその身に宿しているのであれば、という期待は単なる妄想でしかなかったようだ。ほんの少しでも銀マンツを頂く本来の意味を理解しているのであれば、前に歩み出でるか、或いはきびすを返して走り去るか。

走り去るのであれば2つの期待が発生する。

教師を呼びに行く。

或いは知らぬと決め込んで逃げ去る。

先の期待であれば少しは救われようというものだ。ただし、銀マンツにこめられた「本当の理由」を考えれば、何の対応もせず第一に教師の下へと走ったというのだから銀マンツ失格ということである。

後の期待、或いは失望であるならば……まあ、行動の如何はともかくとして、人間的にはごく僅かな諦観を抱いてもよい。イングリツドはそう思う。少しは人間的な感情を持つていたということだろう。恥辱の何たるかを忘れたわけではない人間であったぐらいは評価してやってもよい、それぐらいにはイングリツドの心は大きかった。

ここに足を向け、この場で起きている出来事に対して興味を向けている銀マンツの少年は、そのどちらでも無かった。ただ此方を眺めて次の事態の推移を期待している。なるほど、極めつけの阿呆だった。下らない状況の現出の中で、ルイズの見立てが優れて的確であった事実を把握できたことは僥倖であった。そう、乾いた笑みを浮かべてしまふ。

イングリツドの周囲では、集団が大きく育った結果としてか、無意識の悪意が大きくなりつつある。状況としてはどれほどの事でもないが、対応が難しいという点では結構な修羅場が成就されつつあることを理解してまた溜息を吐きたくなる。

後先考えずに走り出した自身が、長い生を経てなお、唯の少女と変らぬ思考を生かしてきた事に慨嘆してしまう。まだまだ若造ですよ、

私。

こういう手合いに対する対応は、イングリッドは飛び切り苦手だった。イングリッドが今になって思うところでは、この手の問題であるならばキュルケに任せるが吉であるはずだった。間違いなく煙に巻くだろう。それでどこにも角が立つことはないはずだ。極めて短い付き合いだがそれくらいにはキュルケの「力」を信用しているイングリッドだった。

イングリッドがこの手の問題に首を突っ込んで、自身の「力」を發揮しては「角が立つ」どころではない。角が立つぐらいですめば幸運で、角も壁も踏み潰して粉碎するぐらいがイングリッドの「力」のありようだった。自身の立場を省みるなら「ジャッジメントですの」というわけにも行くまい。ある程度は銀マントにそういう期待があるはずだが、それは忘れ去られている。イングリッドは常識的対応を取ることにつけてはまったくの無力なのだ。その辺の女学生のほうが余程に強い「力」を持っているに違いない。後悔先に立たず。さて、と。

この世界に出でて、自身の行動がいろいろと情け無い方向に力を向けているような気がするイングリッドであったが、さりとして「勘違いでしたテヘツ」で済ますことが出来ないことは理解していた。状況に飛び込んだのは自身の意思である。よって、状況の収束までを世話する責任があった。

問題は、イングリッドが介入する事で状況が果てしなく大袈裟になって収集がつけられなくなりそうなことであったが……しようがない。もう既にイングリッドは当事者だった。ここで局外に立つ事など出来る筈も無い。この世界に立つことになった地球でのあの騒ぎ、自身の不甲斐なさを原因として、騒ぎに巻き込まれてしまった少年の顔を思い出す。

2度は無い。

イングリッドは小さな笑みを浮かべて眼を細めた。

望んで飛び込んだ修羅場である。どうにかしてくれようぞ。

一つ頷くと、状況を打開するために行動を起こした。

「で、諸君。我が友人たるシエスタになんの用ぞ」

人垣の後ろでもみ合うキュルケはイングリッドが発したその言葉に仰天した。

何らかのちよつかいを出された結果であろうシエスタの姿からその注目を引き剥がす効果としては、その言葉は事の他に強力であった。そういう台詞が発言されるなんて、ここにいる誰一人として想像する事すら出来なかったからだ。

状況的に言えば、そういう言葉を発するような場ではない。ハルケギニアの常識であれば、何はともあれ床にでこを擦り付けるぐらいが精々だ。そのほうが状況を治めるにはうまい手といえる。プライドとかが邪魔をしなければの話だが、平民が貴族に対して取る対応としては存外おかしなことではない。反射的な対応としてはベターですらある。

だがイングリッドはそうはしなかった。あの言葉を発するというのは、燃え盛る炎に火薬を投げ込む様などんでもない行為だった。何かを言うのはよい。弁解もありだろう。キュルケが見立てたイングリッドであれば、うまい言い訳の一つも放ちそうだった。しかし、あの言葉はないだろうに。

ハルケギニアの常識からは飛びぬけておかしな行動だった。平民の取る行為としては空想の中ですら発せられない、非常識極まる発言だった。

キュルケが身を凍らせたと同時に、周囲の空気も凍る。

キュルケが身を凍らせたことで釣られて周囲が凍ったのではない。この場では、イングリッド以外の全てが凍っていた。イングリッドが誰にも知られていない強力な冷却魔法を発したのだとでも言うように。

イングリッド自身の見立てたとおり、イングリッドにはこの手の修羅場に対する対応能力はまったく存在しなかった。また、まったくの別世界の別文化であるという事実に関して、様々なカルチャー・ギャップを経たことで注意が散漫になっていた事実も、イングリッド

の思考と行動原理に大きな影響を与えていた。

何もかもが地球の中世ヨーロッパ風な世界であつたなら、イングリッドが挑発としか取れない台詞を口にするには無かつただらう。もつと慎重に言葉を選んだはずだ。

イングリッド自身、地球の中世ヨーロッパや、極東地域の中世世界で自身の任務の途中経過として、貴族や王侯、それに類する「偉そうな」立場の人間に接する機会は少なくなかつた。封建制度華やかしき頃は、領地内で自由に行動する外部の人間。それだけで排除の理由になる。イングリッドの任務上、いくつもの領地を渡り歩いて探索するとなると、領主の協力——少なくとも、領地内で自由行動を許すぐらいの消極的協力は積極的に求める努力は不可欠だつた。だから、そういう手合いに対応して、彼らをおだててすかして持ち上げて、彼らの逆鱗に触れない様にごまかして煙に巻く行動様式というのは、彼女自身の思考の中にいくつも用意されていた。

だいたいからして、後先考えずに状況の見極めも無いままシエスタの元にはせ参じるとかいう行動自体もおかしかつた。慎重さが無い。彼女の行動が刹那的になつているのも、様々な心理的ダメージの影響が大きそうだつた。

例えば「イセエビ」とか。

イングリッドは実際に死合段しあう以外の場で、自身の中にある生きるためのプライドなんぞというものは米粒よりも小さなものだったから、問題を収めるために必要であると断じたならば、頭を地面に擦り付けるも、腹を見せるも容易いことだつた。ここはそういう対応が求められる場所であり世界だつた。

しかし、この世界に対する理解を得るのには、イングリッドが目覚めてからの時間はあまりにも短か過ぎた。イングリッドが主と仰ぐルイズの周辺で起きた出来事は、その短い間でも濃密に過ぎた。それらはこの世界にとつてもイレギュラーに過ぎることをイングリッドは理解しきれていない。ハルケギニアという世界を理解するにはイングリッドの周辺で発生した事象というのは、実は、混沌として混乱に満ち満ちていすぎた。そこから世界の理を得よというのは酷過ぎ

た。

よつてここで発生しつつある大騒ぎというのは、イングリッドが騒ぎの発生を聞きつけた時点で実のところ必然であったのかもしれない。

イングリッド自身の行為の結果として、イングリッドの周囲を取り巻く状況は一瞬にして最悪の方向に振れた。刹那の記憶に自身の不甲斐なさの結果たる、被害者の少年の顔を思い浮かべたことが、皮肉にも問題をややこしくする材料となっていた。

イングリッドの腕に抱かれたシエスタの表情は蒼白を通り越して、空虚だった。シエスタの心の中では自身が何を間違つて、この状況を現出させたのだと、まったく彼女自身に責任の無い問題に対する葛藤が渦巻いていた。

無責任にもそれらの状況にまったく気が付いていないイングリッドは、身を凍らせるシエスタに気が付いて、いつそ無邪気とも言える笑みをシエスタに向けた。シエスタの身体を優しく返し、顔を上に向けさせて、イングリッド自身と相對させる。シエスタはそのイングリッドの表情を信じられない思いで見つめ返してしまう。

「ん……大丈夫かや、シエスタ」

イングリッドの放ったありえない言葉が胸に染みてシエスタは絶句してしまう。シエスタはシエスタでこういう風に浅はかな貴族にちよつかいをかけられたり、悪意をぶつけられることは慣れていた。それなりの経験を持ち、自分一人である程度対応することも出来たし、同僚の助力も期待できた。ぶつちやけて言えばイングリッドのよくな存在が助けに来る等と言う事はイレギュラーで、精々の期待……想像ではルイズが助けに来て場を掻き乱すぐらいはありえるかも、という予想があつたぐらいだ。

ルイズが現れた場合に関してはいくつかの選択肢を用意していた。そういうのもままあることだからだ。一方的な親愛の情を持つルイズであれば、ある程度の無茶を押しでもなんとしてでも対応するつもりであるし、ルイズという少女自体も元来、聡明で優秀な少女であつたからよほどのことがない限りは対応を誤ることもないのだと

いう安心もあつた。

だが、いまここに現れて出でたのはイングリッドだった。そして彼女はとんでもない行動をしている。イングリッドという存在があまりにも遠い。その肌が触れ合った少女の顔は、空に浮かぶ双月よりも彼方にあるように思えた。

頷くことすらできずに弛緩した身をただ震わせるだけのシエスタ。その姿に気が付いてイングリッドは僅かに視線を強めた。勘違いが彼女の身を震わせる。状況の連続が誰にも気が付かないうちに現状を果てしなく悪化させ続ける。負のスパイラルという物はこうして発生するのだという、酷く冷厳な例が示されていた。

イングリッドは右手でシエスタの身体を浮かせたまま、左手が、その美しい白を見せる手袋が汚れることを厭わず、床を払って、ある程度綺麗になったのを確認すると、それに満足して、シエスタの身を横たえた。

優しい表情が一転、隠せない怒髪天を付いて、瞬間で立ち上がる。くの字とでも言うような傾ぎを見せて、左手を腰にやり、右手を水平に突き出すと、流麗な仕草でそれを髪に沿わせて、大げさな仕草で髪を吹き散らした。

それにあわせて大きく首を振ると、撒き散らされた銀色の残光が周囲を照らして、一瞬の幻想で世界を照らす。

イングリッドに自覚は無かったが、そういう行為は、イングリッドの立ち姿にことのほか似合っていた。「黙っていれば」超、が付くほどの美人なのだ。それにイングリッドの自覚があれば、その動作だけでこの場は収まつてうやむやになったであろう。

イングリッドの仕草に見とれたキュルケは、そうとまで思ってしまった。それほどまでに騒ぎの中心という舞台で行われたイングリッドの仕草は美しく、眼を奪われる光景だった。

周囲を囲む群衆。地に伏す少女。混沌とした状況。

舞台配置としては完璧だった。これでイングリッドが何も言わずにシエスタを抱き寄せて、この場を立ち去ればそれで舞台は終結。めでたしめでたし。

そうなると思った。
そうならなかった。

残念なことに、イングリッドは残念な美少女だった。

イングリッドは自身の美貌にこれっぽっちも理解が無かった。イングリッドにある評価基準というのは、その容姿にあるまじき事ではあるが、まずもって腕っ節であり、それを支える精神力であり、それらを支配する心のありようだった。

不幸だった。

イングリッド自身に対しても不幸だった。

イングリッドが自身の容姿に一定以上の理解があれば、実のところ彼女が歩んできた過去に、避けて通れた問題は想像以上に多かった。イングリッドが普段を過ごす世界では、イングリッドが知らないうちに彼女自身に残念な評価が付きまわっていた。周囲の評価としては、彼女は酷いトラブルメーカーという見立てが定まっていたのだ。彼女自身の容姿と立ち振る舞い一つで避けえたトラブルに、望んで飛び込む脳筋少女ぐらいの評価が出来上がっていたのだ。

誰一人として指摘をする者がいなかったのも不幸であるし、気を許してそういったことを口に出れるほどの仲を持った人間をわきに置くことが出来なかったイングリッド自身の無力も不幸だった。

近年に於いて、一番にそこに近づけたかもしれないさくらという存在はしかし、その内実はイングリッドに近いという点も不幸だった。彼女もまた、口で語る前に拳で語る存在だった。だからこそそれなりの仲を持てたのであるし、なればこそ、イングリッドの自身が気がつけなかった武器を指摘できる可能性の一番高い存在でもあった。

秋葉原で起きた事件がその可能性を吹き飛ばしてしまったのは不幸だった。

結局は彼女の周囲に巻き起こるトラブルというのは今までがそうであった通りに、今ここであっても必然と諦める以外は無かった。だからキュルケの想像なんていうものは唯の妄想で終わってしまった。イングリッドがベストとまで思いもよらないまでも、まあベターか、或いは状況を動かす一助かと思っただけで行った行動というのは、ベストか

ら果てしなく遠いところにやってきた最悪だった。
不幸だった。

周囲にとつても果てしなく不幸で、そして迷惑だった。

ここで起きている事件が、起きつつある騒動が小さく治まって済ませられる可能性は刻一刻と少なくなっていた。

「我が友人を可愛がってくれたのは……誰かや？」

キュルケの背中の後ろで、人垣に揉まれていたルイズはその言葉を聞いて顔を引き攣らせた。

口にモノを含んでいたら拭き出した所だ。いや、強張って強く閉じられた口に反射して、鼻に集まった空気は2つの穴から勢い良く噴出して、糸を引く湿り気をキュルケのマントに吹き付けた。ルイズはそれに気が付いてあわあわと両手でそれを擦り取る。少々テカりを帯びた残滓がキュルケのマントの一部分に広がった様を見て、タバサが嫌そうに視線をそらす。

前に出ようと人垣を掻き分けて身を振っているキュルケは、自身の背後で起きている出来事に気が付かないでいた。

予想だにできなかった出来事に強いショックを受けたシエスタは、完全に身体を弛緩させて気を失った。彼女の心にある貴族に対する強い恐怖心は、目の前で起きている修羅場で増幅されて彼女の許容限度を突き抜けてしまった。

それに気が付いたイングリッドは一瞬、シエスタの姿を視線で捉えてそれを水平に戻し、引くついた笑みで表情を凍らせる男児にそれに向けた。

また一つ、勘違いが重なった。

状況が悪化するばかりである。

唇を痙攣させたイングリッドの視線の先に、見覚えのある顔が合った。

そうではないかと想像していた。それぐらいしかないなとも思った。そうであつたらあまりにも予想通りだし、現実とはあまりにも陳腐だと天を仰ぎたくもなった。

彼女の視線の先には、ヴィノグラドフと呼ばれた男が、肩を怒らせ

つつ強い感情をこめた視線を此方に向けていた。

思わず溜息を吐く。それに気がついたヴィノグラドフが鼻を鳴らして、一步、イングリッドに進み出た。

「貴様……何のつもりだ……！」

怒りに眉が痙攣している。鼻の穴がひくひくと大きくなったり小さくなったりする様は見えてなかなか面白い。イングリッドの常人ならざる視力が、長い鼻毛が一本、彼の右の鼻口から出たり引つ込んだりする様を捉えて、一瞬、彼女の表情を歪ませてしまう。

悪いタイミングだった。

その姿は、彼を嘲笑する様としか見えなかった。周囲でこの成り行きを見守っている者達は、キュルケも含めてイングリッドの表情に浮かんだ僅かな変化を悪い方向に解釈した。世界は悪意に満ちている。そうとしか思えなかった。この瞬間に連なる状況は、余りにも悪いことの連続だった。

一方の当事者はともかくとして、客観的に見て被害者としか見えないう少女と、その前に立ちふさがるイングリッドの側に、望んで問題を悪化させる心算は無かった。

しかし結果が否定している。

最悪だった。

「……シエスタが、何か粗相を仕出かしたとでも言うのかや、我主よ」
イングリッドのしゃべり方も問題があった。客観的に言つて彼女の言葉は余りにも「偉そう」だった。

或いは現代社会なら「変な個性」ですんだかもしれない。いきなりそういうしゃべり方をはじめた少女が現れて出でたら、たちの悪い厨二病の発症かとも思わせるが、彼女が「普通」の場で普通にしゃべることは殆ど無かったし、彼女と長い会話を行い得た人々はいかなる意味でも「普通」では無かった。

だからイングリッドは自身のしゃべり方が、実力が示されないまま紡がれたときに、人間社会の通念上、いかなる問題を巻き起こすかという部分に理解が足らなかつた。

ましてや相手は絶対的な立場と自身を信じる「貴族」である。

ただ、イングリッドが常と変らぬ態度で「会話」を行おうとするだけでその実、恐ろしい大問題を引き起こしかねなかった。

ここはそういう場所だった。

今の今まで、その点に関して大した関心を示す者がまったくと言っていいほどにいなかったのは飛び切りの不幸だった。

一番、その問題に強い関心を示して、イングリッドのしやべり方に対して強く問題を惹起したのは実は、シエスタであったのだが、ルイズに関わる問題のアレコレや、その後を目にしたブラジャーでそれを中途半端な状態で途切れさせてしまっていた。イングリッド自身にはシエスタがあの場合で何を言わんとしたかの想像がまったく出来なideいでいた。だから自身の自身が気が付いていない特異性に対する危険を理解する場は失われていた。イングリッドの現状の危機はイングリッド自身が身につけていたブラジャーのせいなのかも知れない。

キュルケもタバサも自身の立場の特異性から、イングリッドの行動様式に問題を感じる事が無かった。だからそのまま相対してしまつたし、それに関心を示さないでいたのも不幸だった。それに加えて、ある程度以上の実力を兼ね備えた人間にありがちなことではあるが、自身の持つ能力上、相手の能力を無意識下で自然と看破してしまう技能が悪い方向に影響した。

タバサもキュルケもイングリッドの実力を直接、眼にしたわけではない。しかし、タバサは、自身の能力から得られる無意識の審議眼を補強する材料をいくつか得ていた。それらを総合して「勘」等と称するわけだが、タバサの経験上、自身の勘を疑うような習慣を持たない彼女は、それに従って無意識に、直ちにイングリッドの実力を見定めていた。だから、イングリッドの「偉そうな」態度を自然と受け入れてしまつて疑問を持たなかった。

キュルケは自身のイングリッドに対する見立てを確信できてはいなかったが……タバサがイングリッドに対して高い評価をしているらしい事実がキュルケ自身の判断を掻き乱していた。

自身が肌で感じたイングリッドに対する評価は実は、きわめて確度が高いものであったが、経験不足がそれに対する信頼性を揺るがして

いた。

で、あればイングリッドが周囲に対して行う行動に対して疑問を保持したり、或いは苦言を呈したりする、出来る、可能性があった。だが、キュルケがタバサを信頼しているという事実が、それらの可能性を潰してしまった。

無意識にイングリッドを評価したキュルケの思考を、タバサの言葉が補強してしまった。キュルケはタバサの言を疑うような習慣を持ち合わせてはいなかったから、そのままイングリッドの立ち振る舞いが彼女の実力に見合った自然なものであると、無意識に断じてしまった。それにより、客観的に見て不自然さを感じてしかるべきイングリッドの行動をこれまた無意識に容認してしまう結果となった。

そういつた事で、タバサとキュルケがイングリッドの「偉そうな」行動様式を受け入れてしまったのは不幸だった。

ルイズは……まったく気が付いていなかった。気が付いてしかるべきだったし、出来ればそれを指摘して改善を促すぐらいはするべきだった。だが、気が付かないでいた。

イングリッドという存在のルイズにとっての特異性が、イングリッドにある立ち振る舞いの特異性に関する違和感を吹き飛ばしてしまっていた。

事あるごとに、僅かな邂逅の中で、イングリッドの立ち振る舞いがおかしなものであることに気が付ける瞬間があったが、イングリッドの舌禍や、その行動そのものでうやむやにされてしまっていた不幸があった。

イングリッド自身が特段意識を持って、自身の特異性を誤魔化そうとした訳でもなかったという点も不幸だった。

彼女自身、自身の特異性を理解しているようで、全然理解が及んでいない部分があることを気が付いていない点も不幸だった。

だから、イングリッドの言葉でヴィノグラドフが瞬間的に激昂したのは必然だった。

「きさまー！俺を、俺様を、侮辱する気か!!」

突然の感情の沸騰に当てられて、イングリッドは呆けてしまった。

なんでヴィノグラドフという男がコレほどまでに怒り狂うか理解が及ばなかった。

本当に理解できなかった。会話の持って行き様ではどこかでそうならざるを得ない瞬間があるかもしれないと身構えていたし、そうならないようにあれこれシミュレーションしつつもあつた。

それらを飛び越えて、会話の冒頭で予想した流れが全てひっくり返された現実には、呆然としてしまった。

イングリッドはなぜ、こんな展開になったのか、本当に、真実本当に理解できなかったのだ。

「こんな侮辱はありえん！許せんで、貴様！見逃すわけには行かんない！」

滑稽なほどに身を震わせて両の手を身体の前に突き出すヴィノグラドフ。

呆けたままそれを見つめるイングリッドの前で彼は、自身の手を見て何かに気が付き、慌てて身を振って、ポケットをまさぐる。

硬直して動きの無いイングリッドの前で、ようやく何かを引っ張り出した彼は、それに視線を落として眼を三角にした後、一息ついてから、その白い物体をイングリッドに投げつけた。

悲しいかな、その物体は途中まで勢いよくイングリッドに近づきながら、果たせずに力尽きて広がり、ふわふわと床に落ちて広がった。ハンカチだった。

お行儀よくその一連の流れを視線で追って、結末を見届けたイングリッドは最後に視線をヴィノグラドフに戻してかわいらしく首を傾げた。

それで彼の感情は爆発した。

「決闘だ、決闘！俺は貴様に決闘を申し込む!!」

「いいっ!!」っと仰け反って驚くイングリッド。

ヴィノグラドフの言葉の後に訪れた静寂。イングリッドは気が付いていなかったが、その周囲は酷く騒がしかったのだ。それが静まり、痛いほどの沈黙が訪れた。

次の瞬間、爆発したように湧き上がる歓声。

「え……え……??なに?なに??」

右手で右の耳辺りをさすりながら、きよときよとと周囲を見渡すイングリッド。

「決闘だ!」

「決闘だぜ!」

「決闘するんだって!」

「決闘かよ!」

決闘。

なんだか場違いな言葉が集団食堂を包み込む。

外に向かつて走り去る者や、意味も無く飛び跳ねる者、唾を飛ばして隣り合った者と大声で喚き合う者。

イングリッドはあつけに取られたまま、ただ身を傾がせる。

肩で息をするヴィノグラドフが、整った金髪を乗せた頭を振り乱してイングリッドの眼前に立つ。

背のところ、170センチといったところか。キュルケとどっこいと見て取れる。しかし、慢性的な猫背が彼の立ち姿をいささか情け無い雰囲気で彩っている。

その体軀は……まあ、イングリッドの見立てたところ、可もなく不可もなく。特段貧弱というわけでもない。だのに、余裕の無い顔立ちと、雰囲気、随分と立ち姿を悪く見せている。それほど悪いとはいえない顔立ちをしているのにモツタイナイねえ……。

意味不明な経緯をたどった周辺状況についていけずに、呆けたまま彼を見上げるイングリッド。

こめかみをひくつかせた彼は、イングリッドの胸を右手で強く押すと、それで彼女を押しつけて、集団食堂の出入り口を目指す。

その姿をなんとなく眼で追ったイングリッドにヴィノグラドフが大声で言い放つ。それは間違いなく喧騒に包まれる大食堂の隅々まで響き渡った。

「中庭に来い!そこで叩きのめしてやる!!」

「はあ?」と、首を傾げたイングリッドの肩を叩き、頬を叩き、或いはおでこを叩いて、彼の取り巻きがヴィノグラドフの後を付いて走り

出す。

叩かれたところをなんとなくさすりながら立ち尽くすイングリッドの脇を、大勢の人間が走って行過ぎる。

彼ら、彼女らはもともと立っていた位置関係的にいって、わざわざイングリッドのほうに向かって進んだ後にアルヴィーズの食堂の外を指す形となった。それだけイングリッドに興味があったということだろうか？

「逃げるなよ！」

「楽しみね！」

「恐かったら言えよ！」

「代理ならするぜ！」

「逃げて怒られないのよ！」

「先生を呼んでくるから待っててね！」

「立会いなら任せろ！」

なんだか分からない意味不明な経緯の流れを思い出せば、思ったよりも好意的と思える意識がぶつけられて去り、それもまたイングリッドを酷く混乱させる。

激しい人の流れに逆らってキュルケが慌てた顔を隠せずにイングリッドの元に立つ。キュルケの背が高いことが幸いした。この一方的な流れの中では、強く衆目を集めたイングリッド以外の人間は、流れに身を任せるままになって仕方が無かった。

ルイズとタバサもキュルケの背に守られてイングリッドに何とか近寄れた風だった。

ルイズが唾を飛ばしながらイングリッドにつかみかかる。こめかみが痙攣していた。

「決闘って何よ！何でそんなことになるのよ！何を勝手にしているのよ！」

この混乱の中で、シエスタが踏みつけられなかったのは、彼女の身の回りに集まった使用人たちのおかげだった。

周囲の注目がイングリッドに集まっているうちに、彼女達はさっさと散らかったパンを集めて、フットマンが割れたプレートをかき集

め、手首で振ることが出来る小さな箒を器用に使って、素早くキレイキレイしていたのだ。それと平行して、メイドたちがシエスタを介抱して、フットマンが彼女を担いで、走り去った。

とつくの昔にシエスタの姿はこの場所から掻き消えていたのだ。

首を傾げて、頭を掻くイングリッド。

「なんだろうねー。なんでこうなったんだかねー。……どうしてこうなった？」

普段と違う態度で、本当に困惑した表情でルイズを見つめるイングリッド。

その態度に毒気を抜かれたルイズが、眼を見開いて固まる。

キュルケがその脇で、肩を竦めた。

「あの態度はまずかったわイングリッド。あそこでやられちゃってもおかしくないよ……」

キュルケのほうに視線を送ったイングリッドは僅かに眼を見開く。

何も気が付いていないようだったイングリッドにキュルケはやれやれと首を振った。

「平民と思われているあなたに、あんな態度を取られたら……決闘なんてならずに無礼討ちよ。そうなくても仕方がないわ」

首を捻るイングリッド。納得がいかないように首を振って頭を強く掻き乱し、刹那、動作を治めて、顔の前に降ろした手のひらを見つめる。

それを見ているキュルケの前でイングリッドはふと顔を上げて、溜息を吐いた。

小さく首を捻るキュルケ。

キュルケの顔を見上げて眩くようにイングリッドは言葉を吐いた。

「……イングリッドじゃ」

キュルケはこけた。

ルイズは頭をイングリッドの胸にぶつけた。

タバサは変らぬ鉄面皮を保って、うっかり杖を落としそうになり、何とか堪えた。

身体を震わせながら、言葉にならない言葉を出そうとして、結局顔

を紅潮させるだけのルイズ。

「……………!!」

お尻をさすりながら苦い笑みを張り付かせてルイズを脇に退けるキユルケ。

「はいはい。冗談はそこまで……で、どーすんの？イングリッド？」

表情を緊張させたルイズがイングリッドを見つめる。頭を右手でガシガシと乱すイングリッド。

「まあ……奴には、貸しが出来たからの……返してもらわんと」

えっ！と驚くキユルケ。

タバサも僅かに眼を見開いた。眼鏡がずり下がる。

ルイズは緊張に身を震わせる。

「なに……？何をされたの？」

イングリッドは両手で胸を抱き、その手を僅かに上下させた。

「あやつ……私の胸を触っていきよった……！」

キユルケはこけた。

ルイズもこけた。

タバサも腰が砕けた。

イングリッドは怒りを瞳にたたえて手を振り回した。

「高いぞ……私の身体は！ルイズ以外の誰に触らせるといっか！許せん……!!」

その言葉に一瞬顔を硬直させて、言葉の内容を理解した次の瞬間、身体を真っ赤にしたルイズがイングリッドに飛び掛った。

腰を床に落としたままキユルケはそれを見上げて、次いでタバサに視線を移す。

「結局、さ。何があったか分からなかったわね……」

タバサが頷く。

そう、騒ぎの原因も経緯も結果もうやむやになった。シエスタが何をされたかは分からないし、ヴィノグラドフが何をしたかも分からない。

何が起きてどうなったのか……。

ここにある結果はわけが分からなかった。

まったくと言っていいほどに存在が忘れ去られて、それが普通の中庭。

日はまともに差し込まず、一年を通して滅多に差し込むことが無い光が、ある一定の期間、差し込むときはゆだるような暑さに晒されて結局は存在を無視される。

そんな場所だった。

だが、今は例外である。

よく手入れされた植え込み、芝生。今それは踏み荒らされて滅茶苦茶だった。普段は誰も意識を投げかねないが故に悲しむ庭師も、今の場の状況を見れば、別の意味で涙を流しそうな、そんな状態だった。どこから湧き出したのかと思われるほどの人間が、それなりに広い場所を埋め尽くしている。

中庭に入りきれない者たちは4階、5階の窓から鈴なりになって眼下を見下ろす。

出遅れてなお、なるべく近い場所でこれから起きる出来事を見ようとする者は、3階の窓枠に足をかけて、身を乗り出している。

その中心部で背筋を伸ばして立ち、両腕を組むのはヴィノグラドフ。

いらいらとした仕草で足を鳴らし、爪をかむ彼に歓声ともつかぬ声が断続的に浴びせかけられている。

そのたびに取り巻きが叫んだり応えたりとかましい。全体が大きく高揚してざわめきが最高潮に達しようとするころ、もう一方の当事者が姿を現して、それで観客の感情が爆発した。

怒つとした声が校舎を揺らす。

窓が震える。生徒達が踏み鳴らす足音が物理的な意味でも中庭を揺らす。

当事者を導きいれるために分かれた人垣から、紫色を光らせて、銀髪の少女が現れる。

その姿を認めた者達は、認めたそばから、その口を閉じて表情を緊張させる。

徐々に静寂が広がり、数瞬の後に中庭は沈黙に包まれた。恐怖。

そこに立った少女から立ち上る感情は、はやし立てて騒ぐ類のモノではなかった。

ヴィノグランドフは一瞬気圧されて、しかし首を振り、一瞬身を竦ませた後に胸を張って、大声をあげた。

「諸君！決闘だ！」

返ったのは沈黙。一瞬声を上げかけた取り巻きがバツが悪そうに顔を見合わせて、身を竦ませる。

彼らの視線の先には、沈黙と無表情。しかし隠せぬ怒りを身に宿らせたイングリッドの姿があった。

彼女は目線のみをあちらへこちらへ揺るがせて、なぜか彼の頭上を越えてその先へと怒りをぶつけているようにも見えた。

自分に直接怒りが向いていない事実が気が付かされて溜息を付いたヴィノグランドフだったが、次の瞬間、自分が無視されているのだという事実が気が付かされて苛立ちに顔を歪めた。彼はその怒りを感じ情に乗せたまま更に大声を張り上げた。

「コイツは俺を、貴族を侮辱した！貴族を侮辱したのだ！わけの分からん理由でここに現れて、俺達を馬鹿にしている！」

怒りに震える表情で周囲を見渡して、キツとイングリッドに指を突きつける。

「コイツはラ・ヴァリエール家の娘の『使い魔』を僭称して、我ら貴族のあり方全てを侮辱したのだ!!」

イングリッドの存在に疑問を抱いていた者は実のところ少なくなかった。

召喚の場に居合わせた者はどうしたところで、ルイズ本人を含めて31人。契約の場にいた者は、僅かに2人。しかもそこには客観的な

立場を取れる人間はいなかった。事實は藪の中と言っても過言ではない。

しかもルイズなのだ。

魔法を失敗するルイズ。

魔法を使えないルイズ。

ゼロのルイズ。

本心からイングリッドがルイズの使い魔だなんて信じている者は、学院全体から言えはいないも同然だった。当たり前だ。

人間の使い魔。

ありえない。

ありえるはずが無い。

そういう常識である。

ましてや、ゼロのルイズ。

ヴァリエール家のルイズ。

ゼロのルイズという面から見れば、そもそも使い魔がいるということ自体が疑問だった。

使い魔を召喚できる筈が無い。

使い魔がいる筈が無い。

ましてや人間の使い魔。

ありえない。

ヴァリエール家のルイズという面から見れば、そもそも人間の使い魔がいるという時点で疑問だった。

使い魔を召喚できないと2年生になれない学院のシステム。

緘口令が出されて当事者が口を噤んでいることが分かっている召喚の儀。

ましてや人間の使い魔。

ありえない。

否。

ありえる。

別の可能性がありうる。

口に出さないだけで実は、そう思った人間は多かった。ただ「ヴァリエール家のルイズ」という立場を考えるとそれを口に出せる者はいないも同然だった。

言える筈が無いのだ。

格において絶対の隔たりがある貴族。

トリステイン切つての名家と言つて過言は無いヴァリエール。

それに口を出せるのは、王家のみと言つてもいい。

他国の者からするとそのあり方は更に微妙になる。

トリステイン王家の血筋に連なっている公爵家の3女、ルイズ。そういう立場にあるのだ。

トリステインの国民が忘れてのことだが、現在、トリステインの王家は酷く混乱している。

王が死に、女王は喪に服したまま王位を継がないでいる。

王の子は、ひとり、娘がいるだけなのだ。庶子の存在すら確認されていない。

このハルケギニアという世界では、子がある日突然命を失うなどということとは珍しくともなんともないのだ。

衛生面から言つてもそうだし、ましてや王家の子、となれば誰もが納得しつゝ納得しえない理由により突如としてその生を終わらせる子など、枚挙にいとまが無い。

そこにヴァリエールである。

その継承権は高い。トリステイン王国の王位継承権のトップ2にはヴァリエール家の長女が立っている。

いや、王が死に、女王が立たないでいる時点で、ヴァリエールの現当主に王権が移つてもおかしくないのだ。そういう考え方は別段おかしい話ともいえないしそういう形の前例が無い訳でもない。

この手の微妙な問題というのはどのような国に於いても前例続行主義がまかり通るのだが、前例がいくつもあるならば何の問題もなく、王権が禅譲される可能性があった。

つまり、トリステインの外部から学院に留学している者にとっての認識は、ヴァリエールの娘、すなわち王族なのだ。とくに王権の行き先があちらへこちらへと忙しい歴史を重ねたゲルマニアからの留学生にとつてはトリステイン王国のヴァリエール体制は、もう既成事実と言つてよかつた。トリステインの国民や貴族からするとその考え方は飛躍が過ぎたが、国外からトリステインの情勢を俯瞰した場合、そういう認識は無理からぬものがあつた。

だいたいトップが不在という状況がおかし過ぎるのだ。そんな事態はハルケギニアの歴史を眺めてもありえないといつてよい。

ありえない事態が放置されて、ありえる未来が無視されている。ように見える状態。

となれば想像力豊かな人々が無責任に噂するところでは、現状のトップ不在は王権のヴァリエール家への委譲にあたる体制固めのインターバル、そうなつてしまふのである。

ヴィノグラドフの言葉はその誰もが躊躇する「事実」の再確認だった。ルイズが使い魔を持っている。その使い魔が人間である。それ以上にはありえなかつた、ルイズの立場によつて抑えられた不満に対する暴露。

一瞬の沈黙。

そして小さなざわめき。

さざ波のように広がった声の連鎖は一瞬にして中庭を何度も周回し、増幅され、割れんばかりの怒声となつてその場を支配した。

大きく口を歪めて両手でその声に応えるヴィノグラドフ。

両手を振り回して騒ぎを煽る取り巻き達。

満足して確信に満ちた表情でイングリッドに移された視線は、しかしそこに、氷よりも冷えた視線が自身を射抜いているという現実を理解させただけだつた。

イングリッドは、治まらない騒ぎの中で、眼を閉じ、小さく首を傾げて右手をさつと横に突き出し、そこからゆつくりと腕を曲げて耳と髪の毛の間に手のひらを突き込んで次の瞬間、大きくそれを吹き散ら

した。

細く美しい銀糸が僅かな光に照らされて中庭を彩る。

かすかな輝きが壁に、窓に反射して、光が踊る。

観衆の耳目は一瞬にしてイングリッドに引き付けられた。

物理的に他の人間の背に遮られているのだという者を除けば、ほぼ全ての視線が、わずか数瞬のイングリッドの仕草のみで引き付けられた。

それはヴィノグラドフすら例外ではなかった。

顔を僅かに左右に振って、前髪を整え、うつすらと眼を開く。そうして左腕を眼前に差し出したイングリッド。

沈黙の中で集中する視線は、自然とそこに集まる。誰かの唾を飲み込む音が思ったよりも大きく響く。

大げさな仕草で左手を左右に振り、手首をつかんだ右手が、左手をおおった手袋をゆっくりと上に押し上げていく。

最後の瞬間に、ぱつとばかりに取り払われた手袋は誰もが注目する中で、注目を浴びないままイングリッドの右手に収まって、一瞬にして彼女の不思議な拵えの服装の、そのポケットに収まった。

だから、周囲の視線は彼女の左手に集まったままだった。

彼女はまるで周囲に見せ付けるように左手首をゆっくりと振る。

左右前後に振る。

次いで視線を前にあわせたまま僅かな動きで身体全体を使って周囲に見えるように、左手を……その甲を見せ付ける。

一部の聡い人間はすぐに気が付いた。

彼らの驚きと動揺に気が付いた他の人間も、何故そんな反応をしたのかを彼らに尋ねて、或いは少しの時間を経て、自分で気が付いた。

それでもなお気がつかないでいた者は、周囲がコツいて、あるいは教えて、或いはようやくの事で気がついて、その事実にしたった。

見せ付けている。

その左手に刻まれたルーンを見せ付けている！

もしもここにいるのが平民であれば、その仕草はまったくの意味不

明だった。

しかしここにいるのは貴族である。

貴族はすなわちメイジなのだ。

そして、ここにいる人間はすべからず、黒と紫のマントを纏っている。一部銀色のマントを纏っているがそれについてはどうでもいい。

つまり、全員が間違いなく、一部の例外なく使い魔を持っている。

そしてルーンがある意味を知っている。

更に言えば、それなり以上の実力を持っているメイジであれば、使い魔とその主人に、ルーンを通じて繋がるパスがあることが「見える」。

それはつまり、イングリッドがルイズの使い魔であることの証明であり、宣誓だった。これは常識的な能力を持ったメイジからすれば疑うことすら罪な、現実の確認であった。

イングリッドの背から離れたところで僅かに紅潮した顔を揺らし、胸の前で手を合わせるルイズという存在が使役する使い魔が、疑いようも無くイングリッドであることのこの上ない証明だった。

これでもなお、イングリッドが召喚されたのかどうかを疑う者はごく僅かにいた。

しかし、疑問を持つこと、疑念を表明することは憚られた。

ごく僅かの例外を除いて、召喚はイコール契約と意識が繋がっているのが普通だった。

ここでは、召喚の儀の後、契約が済まされぬままイングリッドが意識を失わせて病室に担ぎ込まれた事実が知られていない事が幸いした。

つまり、彼らの常識……これはハルケギニアにおけるメイジの一般常識と言い換えてもいいが、契約がされている存在イコール召喚された存在という事だった。

疑えなかった。

疑うことを考える事すら思い浮かばなかった。

なにしろ契約しているのだ。

つまりそれは召喚されたのだ。

それは間違いなく使い魔なのだ！

ヴィノグラドフが滑稽なほどの動揺を身に現して身体を震わせた。ヴィノグラドフがこの、召喚された事に疑念があり、契約したのか定かでない自称「使い魔」を合法的に叩き潰す手段がこの瞬間に失われた。

不幸だった。

彼は間違いなく召喚の場でイングリッドが召喚された姿を見ていた。

疑念は後からやってきたものだった。

召喚イコール契約。

あの場で契約にいたらなかった。

その事実が「イングリッドが召喚された存在ではなかったのではな
いか」という疑念に繋がっていたのだった。

あの場で契約にまでいたっていれば、人間が召喚されて使い魔になつたのだという「ありえない事実」も「ありえるかもしれない例外」で済ますことが出来たのだ。

イングリッドを召喚したのがルイズであったというのも不幸だった。

あの場でイングリッドを……人間の使い魔を呼び出したのが例えばキュルケやタバサであったのなら「ああ、あの変人共ならさもありん」と納得できたかもしれない。

だがイングリッドを召喚したのはルイズだった。

繰り返して言うが、ヴィノグラドフはイングリッドがあの場で召喚されたのだという事実。「あの場」では疑念を抱いてはいなかった。

事実、彼もその周辺も、あの時ルイズに向かって「平民を召喚しやがった！」と叫んでいる。

平民を呼んだルイズを馬鹿にしたのであって、召喚が出来ないでいるから召喚した風を装って平民を引っ張り込んだという風には思っ
てないなかった。

召喚イコール契約という思考が彼を縛って、逆に、あの場で契約に

進まなかった事実がイングリッドの存在に対する疑念の出発点となった。

ルイズ自身が後になってやたらとイングリッドの存在に疑念を持ったのも、後から考えてみれば「人間が召喚される」異常性に対する疑義を持ったからであって、あの場所あの瞬間では、ルイズ自身もイングリッドを召喚した事実に対する疑念を持つてはいなかった。

あの場所でもっともイングリッドが召喚された事実疑念を抱いていたのはコルベールだったのだ。

ヴィノグラドフがシユヴルーズの授業を途中退場したのも不幸だった。

イングリッドはあの場で自身のルーンを見せ付けた。

それどころか誰もが顔を青褪めたあの爆発の威力を知らながら、ルイズと共にあってルイズの側でその爆発を身に浴びるのだと強い決意を漲らせた。

それこそありえないことだった。

僅かな疑念を持っていたクラスメイトもそれで疑問が払拭されたといつてよかった。

ルーンがあるのだ。

後からいらぬ疑念を持ったが、確かにイングリッドはあの場所で召喚されたのだ。

そして爆発を主と共に浴びるのだと叫んだ。

例えば金で雇われたメイジがそこまでするだろうか？ 召喚の儀で瀕死の重症となった爆発である。

それが単純なミスであり、事故であったのだとしても、あの威力を知つてなお、偽者の使い魔があれをもう一度望んで受けるか？

それこそありえない。

イングリッド自身にはそこまでの恐怖とか、躊躇は無かったし、そんなことに頭を回す余裕も無かった。

ただあの場所でイングリッドは、ルイズと共にあって、ルイズの魔法を見届けるのだと決意しただけだった。

だが、周囲からすればあれはイングリッドがルイズの使い魔である

という事実のこのうえようも無い確認の場になっていた。結果論だが、あの行為はルイズのクラスメイトにイングリッドを受け入れさせるベストな選択だったのだ。

その場になかった。

ヴィノグラドフはその場になかったのだ。

グランドプレもグラモンもヴィノグラドフを医療室においた後、タバサに追い立てられてすぐに教室に戻っていた。戻った側であの大騒ぎに巻き込まれて右往左往する羽目になった。

だからあの2人もイングリッドがルイズの使い魔である事実を自然に受け入れていた。

ルイズの失敗魔法が故に。

皮肉な話だが、ルイズがゼロのルイズであるが故に、そのゼロの由来たる爆発に望んで立ち向かったイングリッドはルイズの使い魔以外の何者でもないと納得されたのだった。

無論、魔法の能力にそれなり以上に優れた者……ライン以上の能力を持った者は、そこまでの行為をしなかったところで、ルーンを見せ付けられた時点で納得を得ていた。

だがグランドプレもグラモンも能力はドットだった。だからもしかしたらルーンを見ただけではイングリッドに対してどうかと思っただかもしれない。

しかし既に結果が出ていた。

極めて皮肉な結果だったが、ヴィノグラドフをタバサが「説得」している間に、そういうことが起きた。タバサの説得によってヴィノグラドフがイングリッドを受け入れる結果は得られなかったのに、説得の時間の間にこの上ない説得力のある結果が現れて出でていた。

不幸だった。

ヴィノグラドフは不幸だったのだ。

静かなざわめきが支配する中庭で、力なくヴィノグラドフは腰を落としていた。へたり込んでいたといったほうが良いかもしれない情け無い姿であった。

いつの間にか眼前にあったイングリッドを虚ろな眼をして見上げる。

ヴィノグラドフは不幸だった。

最初は間違いなく、イングリッドに侮辱されたのだから決闘だ！と叫んだ。しかし、周囲はそれを受け入れたとは言いがたかった。

集団食堂から立ち去るその背中には、明らかに決闘の経緯に納得していない多くの声が聞こえていた。

中庭に立つても周囲からは疑問の声が溢れた。

真に決闘を望むなら、段階を踏むべきだったのだ。

別段、決闘自体はおかしな行為ではない。

貴族階級に於いて、決闘という行為は日常茶飯事とまでは言わないまでもそれなりにありふれた日常風景なのだ。

ただし、決闘には絶対の理がある。

1つ。

同じ階級にある立場同士の者が行うこと。

これはつまり、貴族階級の者が平民と決闘すること等ありえないということだ。

使い魔も同様であるといえる。

厳密に考えると制度上は許されている筈も無いのだが、貴族の男児同士の決闘なら、手袋をぶつけて「決闘だ！」と叫べばそれでお膳立てが出来る。

そういう慣例なのだ。

しかし、イングリッドとヴィノグラドフの2人ではそうは行かない。イングリッドはその存在に疑惑があったとはいえ、その主が「使い魔」であると強弁していたのだから、同等の立場とは言えない。

なかならず、金で雇われた「使い魔」のフリをした流れのメイジだったとしても貴族である可能性は常識的に考えて有り得様も無かったから結局は一緒の事だ。

真に使い魔であったのだとしても、今の今まで、使い魔が人間と決闘を行える状態にあることなんて唯の一度も無かったからグレイ

ゾーンかもしれない。だがやはり、厳密に考えるならば決闘を行い得るかは疑問がある。

この場合、大げさな話になるが、場合によっては、王宮に対して伺いを立てるべきであったかもしれない。

もし、立場的に、階級的に決闘が認められなくなれば、それでお決闘を望むならば、どちらかの身分をどちらかにあわせる必要がある。

イングリッドを貴族として一時的に遇するか。

ヴィノグラドフを一時的に使い魔の立場に貶めるか。

或いは、双方共に自由民として扱うか。

イングリッドが貴族になる等と言う事はあり得えない。絶対にあり得ない。

たとえ一時的であっても、下の階級の者が上に立つこと等あり得る筈も無い。例外など無い。絶対に無い。

使い魔という「立場」が貴族階級より上なのか下なのかという、今の今まで誰も考えたことの無い問題はあるが、貴族たるメイジに「仕える」存在なのだから多分、貴族よりは下の階級なのだろう。

使い魔の立場にヴィノグラドフがなるというのも難しい。そも「使い魔の立場」とはなんぞや？という話である。

よってあり得るのは、双方が「自由民」という立場に立つことである。

これもまた大変にややこしい処理を行う必要がある。

建前だけ「自由民」ですよーで、貴族がずんばらりんとなつては、その後継に相続だ継承だと問題になって大騒ぎになる。よって、教会を立てて一度、一族の血縁からヴィノグラドフが存在しないものであったことを証明した上で、王宮がそれを追認しなければならぬ。

勝てばいいのであるし「平民」に過ぎないイングリッドが「貴族」たるヴィノグラドフに勝つ可能性なんてありえないのではあるが、可能性とは常にゼロで無いから可能性なのだ。

本気で決闘を行うのであればゼロではない可能性に留意してすべての処理を粛々とこなした上でないと、決闘という段階に至れないの

だ。

これはどんなに急いだところで1週間から一ヶ月は時間がかかる作業である。

書類の処理とかだけではすまない。

血縁身者等から疑義があると、それらを審査する必要も出る。

当たり前である。貴族という階級の「特別」もあるし、例えば長男が当事者であったり、継承権を持った子供である上に、例えば一人っ子だったりしたら話は果てしなく大げさになる。

一方の当事者が、貴族の地位や財産を狙った何らかの陰謀による存在だったら。他家の悪辣な嫌がらせであったりしたら。そういった可能性は当然考えられるし考慮される。自身の手を汚さずにライバルの貴族にダメージを与えられるのであれば。

そういう話が吹き出るのは必然なので、貴族対機族の決闘よりも、貴族対その他の階級の決闘の方が準備にはるかに時間がかかるのである。

そんな騒ぎを起こしては、決闘に対する情熱も失せようというものだ。

実際に、やたらと時間をかけて双方の頭を冷やし、決闘を諦めさせるがためにややこしい手続きを踏ませるといふ考えがあつたりするのだが、それはヴィノグラドフのあずかり知らぬことだった。

と、なると、その決闘だ！すぐにずんばらりんだ！とはならないのが2人の立場だった。

最初から前提がおかしかったのだ。

もう1つ忘れてはいけない理がある。

決闘とは男児が行いえる神聖な儀式である。

その時点でヴィノグラドフがイングリッドと直接拳をまみえる可能性は失われる。

貴族同士で、女性対女性、或いは女性対男性という決闘が一切行わ

れていない訳ではなかった。ただしこの場合は決闘裁判所が開かれて、正式な段を踏んで、代理人を立てる必要がある。貴族同士であっても性別が違うものが事に及べば単なる紛争であるし（貴族同士の争いなのだ！）、どちらかが命を失えば単なる殺人事件として扱われる。殺人事件の容疑者に下される罰は死刑だ。これには平民も貴族も区別は無い。こうなると喧嘩両成敗が基本なうえ、騒ぎに関わったもの全てに咎が及ぶので、問題が大きく波及する事にもなる。

だから時間はかかるが、面倒だろうが決闘の前段階として裁判を行う必要がある。裁判の開廷は当事者同士が金銭を出す必要がある。審議者は双方の談合の上で認められた第三者を選定しなければならぬ。王家からの立会いも求める必要がある。

問題の解決を行う行為に対して前段に裁判が行われるという事実はなかなか滑稽な話ではあるが、そういう制度なので仕方が無い。実際に代理人を立てる段で、金に明かして能力の高い野良メイジを用意しようが、双方で示し合わせて剣闘士を立てようが自由なのだが、これまた時間も金もかかる騒ぎになる。

この場合であつてもイングリッドが「貴族ではない」事実は揺るがないので、つまり、正式にヴィノグラドフがイングリッドと決闘を行うおうとするならば、タブーを二つ曲げる必要があつたのだ。

もし、強行してイングリッドを殺した場合、例えヴィノグラドフが「自身が辱められたのだ！」と叫ぼうが、周囲がすべからずヴィノグラドフを弁護しようが彼に突きつけられるのは「殺人者」の汚名であつて、彼に訪れる未来は「死刑」である。さすがに例外はあり得そうにも無い。

だからこそ、イングリッドに「代理ならするぜ！」と声がかかったのだし「逃げて怒られないのよ！」という発言があつたのである。つまりと、そもそも決闘等は出来る筈も無かつたのだ。

一時の激情に任せて「決闘だ！」と叫んだ時点で話は終わっていた。

だから、あの言葉を叫んだ。

「ゴイツはラ・ヴァリエール家の娘の『使い魔』を僭称して、我ら貴族

のあり方全てを侮辱したのだ!!」

これならば言い訳になる。

決闘と叫んでしまった失敗はあるが、つまり、犯罪まがいの行為を犯した、いや、犯罪以上の世界を揺るがす行為を行った者に対する無礼討ちだと宣言したのだ。

コレならば何もおかしいことは無い。まったく正統な行為だった。極端な話、立場的な事を言えば、ここまで騒ぎを大きくする必要性が無かった。そもそも食堂内で魔法を放ってイングリッドを打ち倒してもなんら問題は無かった。実は、無礼討ちという形を取るなら、あんな言葉を叫んで赤っ恥をかく必要性すら無かった。

単純に「うるさい死ね！」ですんだのだ。

だが、その前提も崩れてしまった。

他でもない、彼女自身がその左手を掲げて証明した。

彼女は使い魔だった。

疑いようもなく使い魔だった！

腰に手をやって、微妙な笑みを浮かべてこちらを見下ろすイングリッド。彼はそんな彼女を見上げて、何でこんな騒ぎに発展してしまったのか、大いに頭を悩ますのだった。

何がなんだか分からないまま混乱して、イングリッドが差し出した右手をつかんで立ち上がった。

戸惑う彼の前でイングリッドは居住まいをただし、腰をおって大きく頭を下げた。

ヴィノグラドフは仰天して飛び上がってしまう。

「すまぬなミスタ・ヴィノグラドフ。我は我主、ルイズ・フランソワズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールの使い魔をやっているイングリッドという」

顔を上げて、ヴィノグラドフの眼を射抜き、そうしてもう一度頭を下げた。

「ただのイングリッドじゃ」

また、顔を上げる。

恥ずかしそうに頭を掻いている姿は、目の前で向日葵が花開いたかと思わせるように美しかった。

……向日葵は美しい花と言えるだろうか？

「我は遠くから召喚された様での……こちらの常識に疎いんじや。我は、主を侮辱するような気はありやせんかったのじや」

背筋を伸ばしたイングリッドは、ヴィノグラドフに正面から相対して見上げるともう一度腰を折った。

「このしゃべり方は我の……我が場所では普通の事であるのでな。勘違いをさせて申し訳ないことしきりじや」

顔をやや持ち上げて、下から見上げるイングリッド。

その姿に激しく顔を紅潮させるヴィノグラドフ。

小さな声で、囁くように声が発せられる。心なしか震えるように聴こえるその声は、ヴィノグラドフの純情を揺さぶった。

「許してくりやれ？」

見つめるその瞳には小さな水滴が乗っている。ますます頭に血が上ったヴィノグラドフはあわあわと両手を振って飛びのいた。

「いや！申し訳ない！すまない！迷惑をかけた！ゴメン！」

土下座でもしそうな勢いのヴィノグラドフの手をイングリッドは慌ててつかんで立たせた。イングリッドが自身の身体を触れたことでヴィノグラドフは心臓の鼓動を早めてしまう。彼の肩を伸び上がって掴み、正面から上目使いに見つめるイングリッドは刹那、右手で目じりを拭って小首を傾げた。

「出来得れば、主の名を主から教えてくりやせんか？」

一瞬硬直したヴィノグラドフは次の瞬間に壊れたおもちゃかとう如く、首を激しく上下に揺すって僅かにイングリッドから距離を取った。

「はい！はいはいはい！私の名は、アンドレ・オルジョニキーゼ・ダ・ネフスキカヤ・ヴィノグラドフと言います！」

ざっと、音を立てて一歩下がると右手を腰の前で払って、大きく身を折り、頭を下げた。

「ゲルマニアの北東、ジェダーノフ公国領、ヴィノグラドフ家が2子。

以後、見知り置いて頂ければこの身の光栄！」

顔を上げた彼の前に、思ったよりも近い位置にイングリツドの姿があった。仰け反る彼にイングリツドは小さく頷いた。

「ミスタ・ヴィノグラドフと呼ばばいいのかや……？ダ・ヴィノグラドフであろうか？」

紅潮した顔でヴィノグラドフはイングリツドの右手をつかむと、腰を落とし、頭をたれ、その甲に接吻した。

一瞬、ほんの一瞬、イングリツドの表情が爆発しそうになったことに気がついたキュルケが腹を抱えて笑う。

「アンドレ・ヌーラフ」

顔を上げたヴィノグラドフに首を傾げたイングリツドが疑問符を浮かべる。

キュルケはあと少しで地面を転がりそうな勢いで笑う。

「親しいものはアンドレ・ヌーラフ、と」

ドヤアあ……。眩しい笑顔からそんな擬音が漏れそうな雰囲気だった。僅かに開かれた口の奥で、彼の奥歯が光る。そんな姿が幻視された。

タバサが勢いよく視線をそらして肩を震わす。

イングリツドは小さく頷いて、しかし、儂げな笑みを浮かべた。

「分かった、が、ここはひとまず、ミスタ・ヴィノグラドフと呼ばしてもらおうかや」

ヴィノグラドフはその顔面に大いなる落胆を浮かべてしかし、頷いた。

「このような迷惑をかけてなお、名を読んでいただけける光栄。ありがたい」

大げさに3度腰を折ってイングリツドに囁く。

「この度の迷惑。必ずや注がせていただく。イングリツド様。いつかこの身を許していただける日が来ましたら必ずやわが名を……」

イングリツドは小さく頷いた。

「そのときはアンドレ・ヌーラフ、と呼ばせてもらおうかや」

ぱつと笑顔を見せて飛びのき、4度腰を折った。

「ありがたきしあわ……」

そこまでだった。

彼の頭にチョップが突き刺さる。

慌てて頭を挙げて見回す彼に、取り巻きがせまる。

「テメエ……」

「自分ひとりでナニよろしくやってるんだ……!」

「俺達は道化か……!!」

「許されると思うなよ……!」

あうあうと情け無い顔を浮かべて引きずられていくアンドレ・ヌーラフことヴィノグラドフに小さく手を振って、姿が見えなくなつたところで、イングリッドは大きく息を吐いてルイズのほうを振り向き、身を震わせた。

次の瞬間に、両手を振り上げて叫ぶ。

「うがー!慣れんことはするもんじゃありません!」

両腕をさすって飛び跳ねるイングリッド。

「うーうー!さぶいぼがでるで!」

膝を落として息も絶え絶えに、声にならない笑い声を上げるルイズだった。

「……死ぬっ!死んじやう!笑いすぎて、息が出来ない……!」

首を回し、左腕を回し、右腕を折って、こきこきと鳴らし、腰に手をやってルイズに呆れた表情を向けて左右を見渡して、最後にキュルケに視線を送るイングリッド。

ふと気が付いてハンカチを取り出し、右手にこすりつける。

「ごしごしごし。」

「ごしごしごしごし。」

「ごしごしごしごしごしごしごし。」

親の敵が右手に宿つたともいう勢いでハンカチで乱暴に拭う姿に、キュルケが笑いを大きくする。

馬鹿馬鹿しい茶番劇に付き合いきれないと、鼻白んで三々五々と解散していく生徒達。

イングリッドは、擦り過ぎて朱に染まった右手を光に透かして満足

すると、ハンカチを乱暴にポケットに押し込んだ。

肩を竦めて天を仰ぐ。

「……最初から、キュルケにまかすべきだったかや」

ひーひー言いながらキュルケがイングリッドの肩をバシバシ叩く。

「だーめ、だめだめ！あれはね、相手よりも背が低いから使える手なんだから！」

一瞬の真面目な表情を保てず、大きく歪めると、また腹を抱えて笑い出すキュルケ。

痙攣するルイズの背を撫でながら、それに呆れたような視線を送り続けるタバサ。

そう、大変に面倒な問題の出立に、大慌てになった3人は、やる気満々なイングリッドを抑えてなだめてすかして、ごく僅かの間に、出来る限りの悪知恵を働かして、どうにかして問題を軟着陸させようと頭を捻ったのだ。

その結果が、ここにあった。

食堂でのイングリッドの姿に妄想を抱いたキュルケが主になつて考えた茶番は、何とかうまくいところ、落とし処にはまったようだった。

イングリッドは嫌そうな表情を向けて再度、大きく溜息を吐いた。

「はああー。まあ、あれじゃな。皆みなに、我の立場を納得させることが出来たのじゃ。それは僥倖じゃやて……」

息を整えて、咳払いをして、ルイズが立ち上がった。瞬間、ふらついたがイングリッドが肩を抱いて立たせる。

その後ろでタバサが両腕を所在無く突き出していたが、イングリッドはそれに小さく頷いてルイズに視線をあわせた。

「そーね。そーよね。うん。よかったわ、ちょうどよかった！まさかいちにちふつか一日二日でイングリッドの事を周知して納得させられるなんて！」

イングリッドから離れてぐいーと身を伸ばすルイズ。

「イングリッドの事をどう説明して回ろうかと思うと憂鬱だったのよねー！」

晴れやかな笑顔でイングリッドに笑いかけるルイズ。それに応えるイングリッドは身体を傾げて疲れた笑顔を向けた。

「まつ、そうよな。いちいち尋ねられてあーだこーだ言うておっては身が持たん。いい道化つぷりじゃった」

イングリッドは引きずられて去ったヴィノグラドフの姿を幻視して眼を細めた。

ルイズはそれでまた嘔き出して身を震わせる。

それを見たキュルケが笑みを浮かべて、ふと何かに気がついてイングリッドに視線を向けた。

「ねえ。そういえばさ、イングリッド」

イングリッドは首を傾げた。

「なんじゃ?」

キュルケがイングリッドのささやかな胸を指差した。

「……………いいの?」

ルイズが眼を跳ね上げてイングリッドを見つめる。

一瞬の無表情の後「にたあ」といやらしい笑みを浮かべてイングリッドは笑った。

「によほほほほほほほほー! まあ、そうさな! 十分に利子を育ててから取り立てるとしようぞ!」

空を見上げて笑い声を上げるイングリッドに釣られてキュルケもルイズも笑い声を上げた。人氣がすっかり失われた中庭で、ひとしきり笑い会って顔を見合わせると、誰ともなく頷いて教育棟に入る扉を目指した。

疲れたように溜息を吐くタバサに、キュルケが微笑んで、頭を撫でる。

ルイズは妙にうきうきした表情で飛び跳ねるようにして歩く。

呆れた笑顔を浮かべてそれを眺めるイングリッド。

溜息を吐いて顔を上げた。

「はあ。さて、午後の授業じゃが……」

その扉の前には、薄緑色の髪を流し、整った顔面に眼鏡を抱いた女性立っていた。

その視線は明らかに4人の方を捉えていた。

「どうも、出ることは出来そうにないの」

伝説の使い魔（5）

学院長室でオールド・オスマンとコルベールは相対していた。

ソファに深く腰掛けたオスマンは、厳しい表情が張り付いた顔を、僅かに天に向け、眼を閉じて髭を扱っている。

髭を撫で付ける右手に対して左手は手持ち無沙汰で、彼自身の膝をぺしぺし叩いたり撫でたりと忙しない。オスマンはまったくの無意識で無意味な行為を左手に強いていた。

コルベールは居心地悪そうに僅かに身を振る。オスマンにテーブルを挟んだ向かい側で対面し、ソファに浅く腰掛けて、その目線をテーブルに向けている。

始祖とその使い魔達。

テーブルの上におかれたその本は、あるページが開かれていた。

コルベールは膝の上においた両手をあわせ、何かに祈るように頭を垂れていた。実際に何かに祈っているのかもしれない。何に祈っているかは彼にしかわからないことだろう。

薄目を開けてコルベールの姿を認めたオールド・オスマンはその姿に溜息を吐きそうになった。が、強い意志を持つて堪える。その間も彼の無意識は左手を動かしている。髭を扱く行為は、彼なりの計算である。彼のデフォルトの行為として認知されているこの行動は「オスマンが深く考え事をしている」サインであり、オスマン自身が望んでそう認知させる努力を行った成果だった。

おかげで、ただぼうつとしたときでも髭を扱っているだけで周囲は遠慮してくれる。ありがたいことだった。努力のし甲斐もあるということだ。

無論、この場では本当の意味で深く考え事をしていて。それに間違いは無かった。

僅かな気配を感じて何気なく顔を上げたコルベールの前で、先ほどと変わらず、オスマンは思慮深い表情を顔に浮かべ、その眉間に皺を寄せて相変わらず髭を扱っていた。

彼、オールド・オスマンのあり方を説明することは大変に難しい。ただ人づてに聞きかじった場合における、よわい 齢200から300などというのは世迷言であったが、しかし、トリステイン魔法学院という実在の場所に、厳然と歴史を重ねているという点で現実であった。「彼の元」を巢立っていった貴族たちの総数は数千とも数万とも言われる。表向きはすべてが記録に残されているのであるから、実際に資料を精査すればその数値に確定した結果を出せる筈であろうが、その必要性を認める者は殆どいない。

はつきりとしているのは、トリステイン魔法学院で魔法を収めた、と、される多数のメイジに彼の存在が陰に陽に影響しているだろうという認識だった。

それもまた本当であるかどうかを知ることは大変に難しい。

オールド・オスマンという存在が、トリステイン魔法学院に赴任した初期、その時点で既に「校長」という立場にあったにもかかわらず、彼が教鞭をとったことはそれなりに知られたことである。

しかしそのことが実際に生徒である貴族に何がしかの影響を与え得たのかという点では、疑問だらけだった。

10年は人の世であり100年は時代の流転という。つまり、現在を生きる人々が一瞬で過ぎ去った光の矢の軌跡を手繰ってその過去を知ろうというのであれば、手がかりは、今現在を生きている本人に聞くのでなければ、書物等に得るしかない。

しかし、それなりに多くの人々が見知っているはずのオールド・オスマンの姿は揺れて安定しない。

80から100年おきに編纂されるハルケギニア年代記のトリステイン史に書かれたオスマンの姿は存命する人間に対しては異例なことに美麗賛辞に満ち溢れていたが、それを額面どおりに受け入れられる人間は少ない。

なにしろ生きているのだ。

その上で、国家に対してある程度の影響力を持ちうる魔法学院の校長という立場にある以上は、彼の事を貶めるような言葉は記しにくい。その程度の想像は誰もが自由に浮かべることが出来た。よって、

彼の内面を探る資料としてはトリステイン史は価値が低いと言わざるを得ない。

他の場所に資料を得ようにも、トリステイン史に資料価値を見出すことが出来ないのと同じ理由がオールド・オスマンを知ろうとする人間を襲うことになる。

なにしろ生きているのだ。

後顧の憂い等を思慮出来ないような平民であるとか、断絶が決まった貴族であるとかならばいざ知らず、貴族としては、後に血を残すことが第一となれば、いつまで生きるのか知れない存在に対して、半永久的に残る文章等、残せるはずも無い。どのような一文が人の逆鱗に触るかは予想もつかない。

ハルケギニアの歴史に於いては、外交文書に記された一文が気に入らないからと戦争になったとか、修復した教会に記された祈念の言葉が原因で破門になった小国とかいう実例もあるから、もしもオールド・オスマンの何がしかに意見するような言葉を残すというのであれば、あまりにも面倒であることは容易に予想されることだった。

で、あれば、面倒ごとを回避する一番懸命な手段は、オールド・オスマンの存在に対して何も触らないことである。

存命中であり、なおかつその功績に関して大きなものがあると喧伝されるオスマンという存在であったが、様々ながらみゆえに、彼の事を知ることが出来る文献は恐ろしく少ない。それはそういった理由があったからだ。

うっかりオスマンの勘気を被るようなまねをして自身の子孫にかほどの迷惑をかけるか。

オスマンはその存在上、平民より上、貴族より下という微妙な立ち位置にあったが、彼の教えを受けた——彼が頂点に立つ魔法学院に教えを受けた大多数の貴族にとっては、オールド・オスマンは彼ら自身にとっての恩人、主人、或いは父であった。それらの認識が、なお一層、オールド・オスマンという存在の立ち位置をややくしくしている。

学院のあり方が捻くれて曲がってしまったことに誰もが気がつい

ていたが、それを積極的に活用しているのはハルケギニアに存在する貴族たちである。その内心は極めて複雑であろう。

貴族たちにとってオールド・オスマンは一種、空気みたいな感じがあった。軽いという意味での空気ではない。

ごく「僅かな」本当の意味で貴族の主流をなす人間以外にとっては、オスマンは自身の子供時代を見つめ、知り、記憶する、一種のパンドラの箱である。

思春期における重要な3年間を閉鎖空間で過ごした少年少女の黒歴史を知り尽くした老人、オールド・オスマン。

これが脅威ととられないはずが無い。

しかし、ここ200年、或いは300年で彼がそれを政治的意図を持って利用したことは一度もなかった。裏はどうであれ、表ざたになつたことは唯の一度も無い。

彼ら彼女らが学院に刻んだ歴史は、当然ながら華やかなものばかりという訳でもないから、ある意味で首に紐をつけられているようなものである。オールド・オスマンとはそのような存在なのだ。

しかし、彼らは好んで自身の子弟を学院に送り込んでいる。

現状、オスマンが「悪いようにはしない」事實は、現実に示され続けているし、どこにしようかと、どう教育しようと逃れられない思春期特有の思考を抑える術は、血縁や両親といったくびきですら軽いものであるから、酸いも甘いも知り尽くした老人の下で大過なく過ごさせるほうがマシだ……。何がしかの悪いことがあっても彼ならばなんとしてくれる。彼なら周囲の目撃者に対しても何とかしてくれる。そういった「信頼」もあった。実際に何とかしてきたのが彼だった。そういう「信頼」を寄せられる存在。オールド・オスマン。

彼を「知る」人々にとって精一杯の好意的評価はそういったところだった。

学院内部の評価で見た場合、その内情は更に混沌とする。

現実に彼に教えるを受ける——直接受けているわけではないが、彼が大筋を示した教育方針に従って、勉強を教える教師に学ぶ生徒、すなわち貴族の卵にとって、オールド・オスマンとは捉えどころの無い

存在だった。

基本的にはいるのかいないのか分からないし、顔を見るといつでも行事等で遠くから眺めるだけ。通り一辺倒の深くも無い、興味も湧かないどうでも良いことを言うだけの誰か。

せいぜい食堂で上から見下ろしているだけの老人。程度である。

それが幸せであることを知る人間は少ない。

彼が生徒と直接言葉を交わす瞬間というのは基本的に、生徒に面倒ごとが将来した時であるのだから。それであっても、基本的にはウラで解決に向けて手を回すのがオスマンである。だからオスマンと言葉を交わせる人間というのは、余程の偉業をなした人間ということになる。漆黒の歴史にまた1ページ。

生徒たちがオールド・オスマンという存在に対して一定の評価を下すことが出来るようになるのは、生徒という立場を逃れた後。すなわち「本当の貴族」になった後、なのである。

そして殆どの場合に於いて、彼ら、彼女らはオールド・オスマンに「見られた」「知られた」過去を思つて、ベットの上で悶絶するのである。

教職員の立場で見ると、また評価が変わる。

基本的には彼がいなくては何も回らないし、彼の言うことに錯誤は合つても過誤は無いというのが基本的評価である。まずまずの評価と言つてよい。

彼の上にあるはずの人間がまったくの役立たずであるから、ますますその存在は重要である。

教職員の個人的意見となると複雑怪奇な様相を見せる。

彼に見出されて将来を展望し、大きな期待に胸を膨らませる新人は毎年のように学院に現れる。

その評価は天をも突かんばかりだ。まったく無邪気にオスマンを慕う教職員は少なくない。

ある程度時間がたつと疑問が頭をもたげてくる。

どれほどに時間を費やしても言葉を費やしても何も変わらない学院。更に時間が立つと諦観が頭をもたげてくる。

変わらないことこそが重要。

ここで思考停止すると、ただ日々を過ごすだけの、繰り返される日常を守ることに汲々とする教師が出来上がる。

学院の教師で10年選手となれば、だいたいがそんなところで収まり、最後の日を迎えることになる。それに疑問は持つても意見はしない人間である。評価がどうかすら考えなくなる。

そこを突き抜けた教師となると……つまり、コルベールのような存在である。彼によるオスマンに対する評価は極めて難しい。

そことは別枠にあつて、立ち位置が微妙な「教師」の存在があるのだが……それらに関しての評価することも罪、となる。その立場の「教師」にオスマンは何の期待も抱いていないし、「教師」も期待をかけられたくはないだろう。そこもまた現在の学院のあり方である。

そのオールド・オスマンであつたが、いまここでコルベールが持ち込んだ厄介ごとに関してその判断を迫られている事実は酷く不快なものがあつた。

コルベールがそれを持ち込んだ。

それはいい。むしろ賢明な判断であつたと賞賛できるものだった。なんの対策も取らずに、ただ知らぬままこの事実が世間に漏れ出でてしまつては……。

それを考えれば、今ここに示されている結果は大変に幸運なものだった。

しかし、それを判断する立場となつては話が違ふ。

オールド・オスマンは正直に言つて、何故？という気持ちがあつた。

何故、今なのか。

何故、今まででなかつたのか。

首を下ろして眼を開けた先にあるテーブルの上には、ページが開かれた「始祖とその使い魔達」。

少し目線をずらせば、置いてあるのはコルベールのスケッチ。

何度も見比べたルーン。

ミス・ヴァリエールが呼び出した使い魔。

それに刻まれたルーン。

常人には理解することも想像することも困難な時間を過ごしたオスマンである。厄介ごとなどは掃いて捨てるほどにぶつかってきた。自身の命を失うのではないかと恐怖した瞬間も山のように経験してきた。

何かを飲み込み、何かを切り捨てる決断等はまだ数えるのも億劫だった。

しかし、今。

使い魔に刻まれたルーン。

その名をガンダールヴ。ハルケギニア創生の伝説における伝説の使い魔「神の左手」と称される存在であった。

テーブルの上のメモをなんとなく見つめるオスマンの内心は複雑だった。

何故？何故、今頃になって。

6000年にわたるとされるハルケギニアの歴史でそれが現れたことは唯の一度も無い。

いや、一度あった。

それこそが伝説である。

だからこそ伝説である。

それが目の前にある。

オスマンはコルベールを疑わない。

コルベールを学院に呼んだのはオスマン自身であるし、オスマンはコルベールの実力がある一面で自身を上回っていることに疑問を持たない。

だからこそコルベールを捕まえたのであるし、コルベールを手元に置いている。

オスマンは自分が全ての手綱を取って何もかもを御することが出来る等と夢想しないほどには経験があつたが、コルベールであれば手綱を持たなくても彼自身の判断に従って最善に近い手を取れるであ

ろうという信用が有った。

事実、彼はそれに応えている。

彼は他の何者をも差し置いて、まず自身にこれを持ち込んだ。カステルファイダルド、トリステイン魔法学院監督官に持ち込むことだって出来たはずだ。額面上は彼のほうが立場が上である。書類上、オスマンが処理する書類の決裁者もカステルファイダルドが最終決裁者になっている。面倒ごと、それも飛び切りの面倒ごとなのだ。コルベールが自身のみで判断するべきではないと考えたことは大変に自然なことであるし、上にそれを持ち込むこともまったく常識的判断であった。

であれば、本当の意味で学院の最上位者であるカステルファイダルド、トリステイン魔法学院監督官に「これ」を持ち込む行為もまた自然なことである。しかしその行為が巻き起こす結果は最悪であつたらう。何しろ彼は「始祖ブリミル」に仕える司祭でもあるのだ。その彼が「始祖ブリミル」のゆかりの伝説が再現されたと知つたのならば……。

結果は想像するだけでも恐ろしい。

よっていまここにある現実是最善に近い。それは理解している。だからといって面倒ごとが消えてなくなつた訳ではない。

誰かが下さなくてはならなかつた判断を自分が下す。

ただそれだけの事である。

ただそれだけの飛び切りの厄介ごとである。

「さて……間違いはないのじゃな」

コルベールの視線に気がついたオスマンは、なんとなく口に出してしまった。意図しない言葉に自分でも僅かな驚きを感じつつ、仕方がないと身を乗り出すオスマン。

「伝説の復活、か……」

コルベールは緊張した面持ちで頷き返した。

「はい。何度も確認しました。間違いようがありません」

彼は右手で自分の描いたメモを取り上げると、本の上に置き、該当のルーンの横に滑らせた。オスマンはその手が僅かに震えているこ

とに気がついたが知らぬふりである。

「偶然はありえないですね。たまたま似ているというのであれば、余りにもありえない話になります」

オスマンはその言葉を鼻で笑った。小さく表情を歪めて片眉を跳ね上げる。

『たまたま』で伝説のルーンのそっくりサンが現れるようなら世話はないよ。いや、今まで混乱がなかったのだ。ありえんな」

こんな大事である。人が呼び出されるだけでも異例な使い魔の召喚で、次に契約をしたところ、現れたのが伝説。騒ぎにならないほうがいい。

コルベールが示したルーンを見て、状況を理解したオスマンにとって、召喚の儀から今までに起きたそれなりの騒ぎが、実はそれでも平穩無事であったと判断するべきだと理解できた。魔法学院監督官が仕事に不熱心だったことは僥倖である。

考えるまでも無く、召喚で人間が呼び出されるのは『今までであれば』異常事態なのだ。それだけで魔法学院監督官が動く動機になりえる。ましてや腐っても司祭位をいただくロマリアの人間である。埃を被った伝説ではあるが、コルベールでさえ疑問を持ったのであるし、オスマン自身もすこし首を捻っただけで記憶から湧き上がった事実なのだ。カステルフィダルドが初日に動いていたのなら、今の魔法学院は消し飛んでいたかもしれないほどに微妙な問題であった。

「人間の使い魔、か」

オスマンも慨嘆を覚えて溜息を付いた。今度は隠せなかった。

何故それに気がつかなかったのかは今となっては恥ずかしいと思えるほどの疑問がある。

人間の使い魔。

ありえない。

常識として、無意識の常識として、そういう刷り込みがあった。振り返ってみると確かにおかしい。

勝手に思い込んでいただけなのだ。人間の使い魔などというのはおかしい。それこそがおかしいと何故気がつかなかったのだろうか？

使い魔がすなわち動物であつたり幻獣であつたりするのは寧ろ自然では「ない」。

「始祖とその使い魔達」。そこにははつきりと示されていた。始祖は人間を呼び出したのだと。

始祖は始まりである。現体制、現魔法体型の始まりである。だからこそ始祖なのである。その彼女が呼び出したのが人間。で、あるならば人間を呼び出せない「始祖に連なるメイジ」とは何ぞや？

どこかで甘く見ていた。眼を背けていた。おかしい。人間が使い魔として呼び出される。そんな馬鹿な。

それを呼び出したのがミス・ヴァリエールであつたという現実が視界を曇らせていたのだとしか言いようが無い。

それも言い訳に過ぎない。

ミス・ヴァリエールのあり方に関してはオスマンも含むところが大きい。

直接に間接に、様々な『要望』を受けている。彼女を思う人間は随分と多かった。愛された人間である。時としてオスマンを頭痛に苛むその手の『要望』のなかでミス・ヴァリエールのために寄せられた要望……寧ろ、嘆願とでも言える言葉は、オスマンを呆れさせる前に感心させてしまった。人とは人一人のためにこれほどまでに必死になれるものなのか。羨望すら一瞬抱いたほどだった。

実際に見た、聞いた、そして知ったミス・ヴァリエールという存在は自らが過去に諦めた一つの希望のある種の完成形であつた。オスマンがコルベールに対してミス・ヴァリエールの世話を強く要請したのは、そこに希望と、諦観があつたからだ。

オスマンはコルベールが、ある頃からその心を不安定にしていることを知っていたし、彼が割り切ることが出来ずに苦しみ続けていることも知っていた。

そしてオスマン自身の言葉でそんな彼を救うこと等できないことも知っていた。

そこに現れた彼女はコルベールにとっての希望であつた。

それはオスマンにとつても希望だった。

そしてその実際のあり方は余りにも哀れだった。

メイジとしての『成功』が無い貴族。

魔法が失敗するメイジ。

ゼロのルイズ。

その事実が気がつき、あがき、悩み、苦しんだ人々。

ルイズという存在が魔法を使えないことで苦しんだのがルイズだけではないことは明白だった。

ルイズが愛され、そしてルイズのために『嘆願』した者達の考えは理解できた。

普通の魔法を使えないミス・ヴァリエール。

ゼロのルイズ。

ならば、ある種の『実力』だけは認めさせよう。

ルイズは魔法を使えない。

しかし『力』はある。それは、知らしめる。ルイズが決して無力ではない実績を作る。

なんともいじらしい話である。

そして、オスマンに『嘆願』されるわけである。

それはこの世界のあり方としては異端ストレスレなのだ。

貴族である「ルイズ」。

普通の魔法を使えない「ルイズ」。

これは、通常結びつかない。

貴族はメイジである。

貴族は魔法を使う。

この世界の真理とはそういうものなのだ。

そこから外れたルイズ。

それを認めさせようとする周辺の人々。

『要望』ですむはずも無い。『嘆願』になる訳である。

普通ならそんな面倒なことをする「貴族」はいない。

自身の子供が魔法を使えない。配偶者に少しでも疑うところがあれば、お家騒動間違い無しである。

貴族の結婚相手は貴族。

つまりメイジとメイジが結婚する。そこからメイジになれない子供が生まれる。

ありえない。

そうであるからお家騒動にならないはずが無い。

と、なれば、お家騒動……不貞の糾弾はともかくとして、メイジになれない貴族はどうするか？

そういうことである。

相手に何の落ち度も間違いもないと心から信じる場合はどうか？

そこにあるのは誰にとってもうつそうと生い茂った茨を掻き分ける苦しい道であろう。

ヴァリエールはそれを選んだのだ。

そしてそこにオスマンを巻き込んだ。

えらい迷惑な話である。

しかしオスマンはそれに望んで巻き込まれた。今、自身が先頭に立って茨を掻き分けているといっても良い。それを望んだ。

そうした思いがオスマンの眼を曇らせていた。

そうとしか思えなかった。

通常メイジとは根本的にあり方が違う『メイジ』であるルイズ。ありえない現実には、ありえるかもしれない例外と摩り替わっていた。

それで納得し、思考停止していたのである。

ルイズという存在は、ありとあらゆる面で例外だった。その存在の有り様。メイジとしての、メイジと呼んでいいかも判断のつかない力の有り様。そして、そういう状況にありながら折れない心の有り様。

そうした「特殊性」が、人間の使い魔が呼び出された特異性に対する霞となっていた。

人間が呼び出された。おかしなこともあるものだ。まあ、ルイズだから。ルイズならば仕方あるまい。

それで納得してしまっていたのだ。

使い魔が呼び出されて4日。誰もそれに根本的な疑問を抱かな

かったのはそれだけ『常識』が堅牢である証左だった。馬鹿馬鹿しい。

オスマンは視線を移す。部屋の隅、入り口に近い場所におままごとももするのかという小さな家具が設えられた一角がある。

そこでナッツをかじるねずみがオスマンの視線を感じて振り返り、小さな首を捻る。

彼の使い魔である、モートソグニルである。ハムスターン・キヌゲネズミで、すばしっこく、人間では思いもよらないような場所にもぐりこみ、人が危険を感じることに無い場所から他を監視することが出来るオスマンの長い手の一つである。

オスマンの力量を知る者にとってはオスマンの使い魔がねずみであるというのは意外であったが、オスマン自身にとってはこれの出現は、必然と納得できた。

魔法の力量では他に比べるものも無く強力無比であるという自負があるオスマンである。実はその人間としての能力も、ただに長い生を生きてきたという部分から言っても、その中で経験した様々な部分から言っても、単純に推し量れるようなものでもない実力を誇っている。本気を出せばなんでも1人でこなせるだけの実力を持っていると自負していた。

しかし、使い魔を召喚して初めて、自分が井の中の蛙であったと納得もし得た。単純に小さくひ弱な生物でしかないねずみであつてすら、その視線が映す世界はオスマンの知らない世界の連続だった。オスマンが出来ることでモートソグニルが出来ることは少なかつたが、逆にモートソグニルが出来ることでオスマンが出来ることも少なかつた。

使い魔は召喚するメイジ自体に近い、或いは、メイジに必要とされる力そのものだといわれている。また、召喚された使い魔は召喚したメイジと相性のいいものが呼ばれるといわれている。

それを実感することは実際に召喚して、実際に契約を経た後になつてしまった。言葉として知っていることであっても、本当にそれに納得できたのはモートソグニルとの出会いのおかげであつた。オスマ

ンは素直にモートソグニルに大いなる感謝の念を抱けたし、モートソグニルはオスマンによくなついている。今となつてはモートソグニル以外の何かを使い魔とする自分の姿を思い浮かべることが難しい。しかし、つい先ほど思い知らされた現実を見た場合、それがなんなのだ、という思いも浮かぶ。

メイジとは始祖の血を受け継ぎ、始祖の起こした、或いは、興した、奇跡を再現できる者の総称である。

決して口に出せることではないが、メイジであることが大事であった。貴族という立場にあることはオスマン自身にはどうでもいいことだった。メイジをメイジたらんとするトリステイン魔法学院に校長としての立場を受け入れたうえで、収まったのはその思いがあったからであるし、そうであるからこそ、最終的には貴族という枠を破壊してでも始祖の奇跡を世に広めたかった。

この思いは世界各地にある、あった、魔法学院の共通した願いであったし、そういう人間であるからこそ教壇に立ち上った優秀なメイジが何人もいた。

だからこそ、何もいえなくなった。

希望を胸にトリステイン魔法学院に立ったときには魔法学院は既にトリステインにしかなかった。それもまた存続の危機に瀕していた。貴族にとって魔法学院が掲げる理想は彼らの存在とは相容れなかったのだ。

オスマンを外から引きずり込んだ前任者は、それらを飲み込んだ上で、今ではない明日のために魔法学院を残せるモノとしての能力を買って、オスマンを校長に推挙したのだった。

残念ながらそのときのオスマンは聡明で思慮深く頭も切れたので、それらの事実は簡単に理解できた。自身の理想が夢に過ぎないことは直ちに納得できた。

だから彼の夢は唯の夢で終わってしまった。それを胸に押し込んで生きる術を彼は知っていた。確かに、これほどまでに魔法学院という「組織を守る」事に秀でた人間は他にはいなかったのだ。

しかし「メイジ」である。

始祖の奇跡を受け継いだ人間。

それが、始祖が呼び出した使い魔を呼び出せないでいて、それを当然のこととして納得していた事実。

そんな馬鹿な話があるだろうか。あつたのであるから笑えない。いや、ここはコルベールと2人で爆笑するところであろうか……。

思わずモートソグニルから視線をそらす。思考は断絶して彼に伝わっていない。使い魔との思考の共有を意図的に遮断する術は、オスマンのオリジナルな術である。こうすることで妙に存在感のある「ねずみ」を唯のねずみに見せかけることが可能となるのだ。

しかし、いまここではその理由で思考を断絶したのではなかった。単純に自身の淀んだ思考がモートソグニルに伝わることを良しとしなかつただけである。

いたたまれなくなつて彼は応接室の窓を見る。

美しく磨き上げられたガラスが春の沸き立つような空気を遮断して、寒々しい雰囲気はこの部屋にもたらしていた。

何故、窓を閉めているのだろう。

何故、窓などというものが存在するのだろう。

ふと疑問に思つてしまう。

魔法によつて創られた「ガラス」というものは、メイジ達の世界を快適に過ごせるようにという思考から湧き出でた想像の産物だった。

それは今ここで自身と自然の境界となつて自分の前に立ちふさがっている。

それが途轍もなく腹立たしい出来事であるような気がして、オスマンは自身の脇に、ソファにもたれかかるようにして立てかけていた杖を取り、その先端を窓に向けた。

「われが願うところに於いて、窓よ。その閉じた口を開けよ」

一瞬の激情は攻撃魔法を思考に思い浮かばせていた。しかし口を突いて出た言葉はコマンド・ワードである。思考にふけるコルベールは気がつかなかったが、これは杖を向ける必要がない。魔力がある人間ならば、誰でも行い得る行為であつて、ただ意識を対象物に向けて、

そこにこめられた定型の行為を行わせるだけの命令でしかない。

魔法で創られた道具に創られた時点でこめられた魔法用量の上限内で行い得る行為を、メイジが製作途上で覚えさせたことであり、言ってみれば飼いや犬に芸を仕込んだようなものである。

一度芸を覚えた犬が芸を忘れることはよほどのことがない限りはありえない。

こうした付与魔法がこめられた道具も似たようなところがあった、一度設置されれば、元の形状を失うまでコマンド・ワードを「忘れること」はない。魔法を知っている者、つまりメイジであるならば、自身の杖を使うかのごとく、それらを扱うことが出来る。これらの道具はある種、固定した主人を持たない「杖」であるから、メイジであれば誰でも使うことが出来るのだ。それを「使う」のに自身の杖は必要なかった。

自分のちぐはぐな行動に眼を震わせて、誤魔化すようにそれに体重を預けて立ち上がる。コルベールがオスマンの動きに気がついて視線を上げる。

特に何か意図があるわけでもなかったが、オスマンは、常の威厳をたたえたまま窓際に歩み寄り……そして馬鹿げた騒ぎが起きていることを知った。

「見よ、コルベールよ」

身体を室内に向けて、コルベールに視線を戻したオスマンは僅かに呆れた雰囲気を滲ませながらコルベールを呼ぶ。

どこか有無を言わせない雰囲気には困惑しながらも、コルベールは杖を手にして立ち上がり、窓際にオスマンの横に立った。

オスマンの全身を治めてなお余裕がある窓は、コルベールが気がつかないうちに開け放たれて、外の空気を僅かに室内に運ぶ。

2重構造の外壁はオスマンの居室の直下で途切れて、そこに渡された床で、バルコニーのようになっていた。先に手すりなどは存在しない。ごく普通に魔法を収めたものならば空はそれほど珍しい場所でもないから、手すりがないことなどどうでもいい事なのだ。

重々しい足取りで「バルコニー」の縁に立つオスマン。その横に自

然に並んだコルベールの耳に「怒」つという歓声が響き渡る。

「決闘とはもう……」

常人では聞き取れない眼下の騒ぎから重要な単語を抜き出したオスマンは溜息を付いた。

「暇をもてあました貴族ほど下らない存在はないの」

コルベールも眉をひそめた。

「世界よ願う。その視界を広げて我に、遠い場所の真実を見せよ。ナイル・レープル・ハガント」

顔の前で手をかざし左手で杖を振るうと、視界が歪み、絞られて、針の穴ほどの一点のみがクリアになる。

次の瞬間にそれがコルベールの意識上は「引き寄せられて」彼の視界を埋め尽くす。

遠見の魔法だ。

実は大変に使い勝手が悪い魔法である。

ただ遠くを見る。

それだけの魔法だが、大きな問題として、視界が「見ている遠くの場所」を「近くで普通に」見ているように摩り替わってしまうということがある。

コルベールが見ているのは、高い場所から低い場所を「見ている」形だが、角度的な問題で「そこにいる人間の肩越し」に目の前を見ている、そんな風に視界が広がる。

この状態では違和感しか感じないのだが、意識上「そこにある」つもりで視線を振った場合、例えばそこにいる人間の横顔を見ようなどと思つて視線を横に動かすと、はつきりと見える視界が超高速で動いて横を見る——この場合、オスマンの頬の毛穴でも見る羽目になる。

例えば遠眼鏡を覗いている場合にそのような馬鹿な行為に及ぶものは滅多にいないだろうが、遠見の魔法ではそういうことをしでかすことが多い。遠くを見ている事実を認識できない、自身が通常の視界を持っているのか、魔法によってその視界が摩り替わっているのかを区別できないのだ。

ただ眼を回しただけなら笑い話だが、今コルベールのいる場所のようなどころで区別が付かないとなると大きな問題になる。

視界が摩り替わっていることを忘れて足を踏み出せばバルコニーから空中に投げ出されて地面を目指すことになる。

大抵のメイジは空中を駆ける事が出来るが、落ち着いて魔法を唱えることが出来ればの話で、基本的に二つの魔法を同時に使えないハルケギニアの魔法体型では、まずもって遠見の魔法を解除して、尚且つ、何種類かある空を飛ぶ魔法を選んで唱える必要があるが、そも、自身が魔法を使っている認識に混乱をきたしやうい遠見の魔法で、その区別がつかないがゆえに事故が起きると、自身が別の魔法を使っていることに気がつく前に地面に叩きつけられることになる。必死で空を飛ぶ魔法を唱えながら、それが果たせずにはのしかになるか、或いは遠い視界を近くに感じて、自身を包む浮遊感と風を切る音に疑問を抱きながら意識を暗転させるか……。

遠眼鏡という道具がハルケギニアの歴史の中で極めて早い段階で生まれたのは無理からぬ悲喜こもごもが合った故なのであろう。

コルベールは違った。

彼は自身のアレンジで片目のみに遠見の魔法を使ったり、或いは、魔力を調整することで、通常の視界に遠見を重ねたりすることが出来た。これは彼の過去の生き方から必要性にせまられて工夫した結果であり、そういう生き方でもない限りは、必要性の感じられない我流の技であったから、人に伝える気は無い術だった。

「片方はミスタ・ヴィノグラドフのようですが、相手はまだ来ていないようで……」

傍目から見ていると薄気味の悪い見た目とでも表現するしかない、虹彩が失われた眼をすぼめるコルベールが一瞬息をのむ。

「どうしたのかな？ 相手は『使い魔』とでも言うのかね？」

自分の眼にしたものを言い当てられて虹彩を戻した眼でオスマンを振り返って見つめてしまうコルベール。

苦い笑いを浮かべたオスマンが、眼下を見つめる。

「ま、そうじゃろうな」

コルベールはこういうオスマンの鋭い感性が苦手だった。過去には頼もしいと思えるときが確かにあったのだが……今となつては氣味が悪い。この瞬間はたいしたことがないことは分かる。ある程度鋭い者なら、先ほどまでの会話の後におきた出来事だ。そこで息を飲むとなれば容易に想像が出来るだろう。

だが彼は、今、ここで起きたオスマンの鋭さを示す事態と共に、自身を舌を巻いた過去のオスマンの鋭さを思い出してしまつて、口に苦いものが広がる気がした。

眼を閉じて、小さく首を振る。

今はそんなことどうでもいい。それよりも下で何が起きているとこのだろうか。それを見極めるほうが大事だ。

再度『中庭』に視線を戻そうとしたコルベールの肩をオスマンが触る。訝しげに首を回したコルベールにオスマンは小さく笑つた。

「部屋に遠見の鏡がある。それを使えば声も聞こえよう。そちらのほう都合が良いのではないかね」

それに一理あることを認めたコルベールは頷いて、窓から部屋に戻ろうとするオスマンの背に続いた。

遠見の魔法を解除する前の刹那に、一瞬、『中庭』に戻された視線がイングリッドと交錯する。

イングリッドはこちらを見ていた！

コルベールは慌てて首を振って魔法を解除した。そんな馬鹿なことがあるか。魔法を『使わない』人間がただ自身の視線だけでこちらを見つめる等ありうるものか。

「どうした、コルベール君。アボーツで遠見の鏡を引き寄せたよ。早く見ようではないか」

「はい、申し訳ありません。すぐに行きます」

首を振りながらコルベールも部屋に戻つた。

遠見の鏡で見た一部始終に、コルベールもオールド・オスマンも酷い頭痛を覚える羽目になつた。

伝説の使い魔（6）

ルイズの前を歩くロングビルという人間は、イングリッドが一見しただけでも胡散臭いどころの話ではなかった。

唯の「第一印象」である。特にこれといった判断材料があったわけではない。なんとというか……そういう匂いをイングリッドが嗅ぎ分けた。それだけである。

単なる勘違い……ということはありえなかった。断言できる。イングリッドは自身の「この手の勘」が外れたことはここ数百年で唯の一度も無かったことを「知っている」。

だからイングリッドの中ではロングビルの存在は、この世界にイングリッドが現れ出でて初めて、明確に危険人物であるとイングリッドに認識された記念すべき第一号になった。

そのロングビルに対する危険性の評価は断定的なものではあったが、個人的意見でしかなく、他人と共有できる類のモノではない。つまり、自身の主たるルイズに対してその危険性を惹起できない点でもどかしかった。

余裕のない表情をした猫背の少年等は、ヤバイ奴ではあっても危険ではなかった。イングリッドの中の評価はそうなっている。

彼が巻き起こした出来事は、うっかりすれば危険どころでは済まされない部分があったが、それ自体はイングリッドの認識不足、或いは対処のミスといったところで、彼自身が本質的に危険人物という訳では無いというのがイングリッドの見立てたところである。

イングリッドの理解しようのないところで発生させ、うっかり主たるルイズを危険に晒した先ほどの修羅場にイングリッドは反省しきりである。あの問題の本質はイングリッドの関係し得ない部分にあったとはいえ、問題の発生自体はイングリッド本人の行動如何でどうとでもする事が出来たはずである。イングリッド本人の余計な行動がルイズを危険に晒したのだ。避けるべき行為であったし、避けることが可能な危険であった。

で、あればこそ、イングリッドはロングビルに警戒の意識を向けて

しまう。彼女が発する危険性はイングリッドが管制できる部分を明らかに突き抜けている風であった。能動的に発生する危険性の匂いだった。

自分がこの世界に来て呆けてしまっている点について、大いなる自覚が出来たイングリッドだ。常に持っていた思慮深さを失って、それで主も失いましたでは反省するどころではない。この世界を甘く見ることは出来ないのだ。

教育棟を出て、良く手入れされた石畳を右に折れる。そよ風に揺れる花壇を脇に見ながら、大地を割り、聳え立つ姿を見せる職員塔を目指す。イングリッドは僅かに2回目となる職員塔訪問がすでに億劫となっていた。

あの怪しげな内部構造はイングリッドに不安感を抱かせるものだった。事実として6000年間変らず姿を保っていたのだから考え過ぎなのかもしれないのだが。初回の訪問で重砲らしき攻撃の衝撃に耐えた痕跡を見たが、しかしそれがあの建物に対する安心につながることは無かった。イングリッドの知る常識から外れた構造を持つ職員塔は、イングリッドの思考では6000年と1日目で倒壊するのではないかという不安を抱かせていた。

理解できないものほど恐ろしいものはない。

ましてや建築物なのだ。それが崩壊したときの物理的衝撃は想像しただけで恐怖である。

巻き込まれて自身が命を失う心配等、イングリッドはかけらも恐れていない。落ちて来る物を殴って蹴り飛ばして走り去ることはイングリッドには容易なことであり、自身の体重の数十倍に達する物が静止重量換算で自身の体重の数万倍の威力を持って降り注いでなお防いでしまえる術をイングリッドは持っている。

問題は我が主ルイズだ。

アレだけ巨大な建造物の崩壊に巻き込まれて、果たしてルイズを守りながらイングリッドが窮地を脱することが出来るか。甚だ不安である。

先ほど発生してイングリッドを酷く狼狽させた修羅場もそうであるが、イングリッドの経験の及ばない事態でルイズの身を守る困難さは想像を絶する。なにしろ一匹狼であることがイングリッドの人生だったのだ。

身を守ることもそうであるが、その生き方、そのありようも常に自分一人を優先すればよかった。

この世界では違う。

まずもって優先すべきはルイズなのだ。

ルイズの安寧を守ることこそがイングリッドの存在意義である。

となればイングリッドが不安を感じる場所や、不安を感じる存在に對して警戒を抱くのも当然だった。

イングリッドがルイズに抱く感情が尋常ではない状況にまで達していることにイングリッドは気がつけないでいた。

ロングビルに先導されてついて歩くルイズ。その後ろにつき従うイングリッド。その後ろに並んで歩くキュルケとタバサ。

すました表情のロングビルに、不安そうな表情を隠せないルイズ。そのルイズとロングビルの間を僅かに視線を揺らせながら、表情の消えた顔を持つイングリッド。身体をそらして両手を頭の後ろに回し、めんどくさそうな表情を隠さないキュルケ。常なる鉄面皮を張り付かせたタバサ。

怪しげな雰囲気を保つご一行様に気がついて、慌てて走り去る生徒がいる。紫色のマントがイングリッドの眼に入る。

とつくに午後の授業に突入している時間帯で外をうろつく生徒。と、いうことは堂々たるサボリ、という事であろうと思われた。キュルケやルイズが一致して語るところでは、まあサボって当然の時期だというのだから珍しくも無い光景なのだろう。校長が抱える秘書の一人だというロングビルが、そういった生徒の存在に特段の意識を向けていないのだから、イングリッドが気にするだけ損、という事なのか。

ロングビルが緑色の髪の毛を僅かに揺らせて職員塔の入り口を守る衛視に目礼する。

生真面目な表情の衛視が2人、微かに顔を紅潮させて頷き返す。美人とはなかなかにお得なものなのだ。なんとイングリッドは慨嘆する。

実は男子の立場から言えば疑いようも無く美少女——1人、或いは個人の趣味云々すれば2人は……、真実を知っていれば3人は、美少女、括弧クエスチョン括弧閉じ、というところだが、まあ、健康な男児であれば、外見のみを俯瞰した場合、この5人の集団は疑うことも罪というほどの「美人」の集団である。

今、後ろにおかれて彼女達を見送る衛視でなくても、その姿を見て、ましてや見つめられれば顔を紅潮させるぐらいは当たり前の反応だった。不意に声をかけられればうっかり前かがみになりかねない。それほどに色とりどりのジャンルの違う趣味思考を満足させ得る集団だった。イングリッドはそこに意識が向かない。そういう反応を示す人間がいることを知らない。そういう反応が世間一般にあることをイングリッドは知らない。

絶対に油断しない。そう思いなおしていたイングリッドではあるが、結局はイングリッドなのであった。そういう世間一般における機微、或いは「常識」な部分が欠落している。残念な美少女である。

ロングビルは階段を無視して、迷うことなくエレベーターに足向ける。エレベーターの前では書類を持った職員らしき女性やら、掃除道具を持ったメイドやら、大きな荷物を担いだフットマンやらがエレベーターの順番を行儀よく待っていた。

イングリッドは嫌な表情を、隠せずに顔に浮かべてしまう。

どういう動力を持って動いているか。いまいち分からない機械だ。大概にしてただエレベーターといっても、「現代」にあっても結構な頻度で致命的な事故を発生させている機械だ。ごくごく一部の先進国のエレベーターを除けば、年がら年中事故が起きているのは当たり前で、止まった、動かないならマシな方で、墜ちた、床が抜けた、エレ

ベーターの天井を破って何かが降り注いだ、なんていうことは世界的に眼を向ければ日常茶飯事の機械なのだ。

エレベーターの籠に視線を向けてそうであるし、エレベーターというシステムで見ても、扉が開いた、乗り込もうとしたら籠が無くて墜死。なんていうこともザラにある。危険性が高い。何かの故障が即座に致死性の高い事故に繋がる点で、イングリッドはこの機械自体が嫌いだった。

さらにいえば、籠に乗った時点で密室を強要される点がイングリッドは気に入らない。不特定多数の人間が同時に入って疑問をもたれないという状況を誰にも不思議に思わせることなく発生させるのは至難の業だが、エレベーターは「貴重」な例外の一つである。誰かを守る事を現在、第一義とするイングリッドの現状のあり方には大変に不満な状況だった。

事実、イングリッド自身も何度も遭遇した状況なのだが、エレベーターに乗ったら異性が野獣になって襲い掛かってきた等という事態は枚挙に暇がない。イングリッド個人で相対するなら相手がナイフを持っていようと重火器を持っていようと指先一つでダウンさせられ得たが、護衛対象があるとなると甚だ不安である。

単純な能力面で見ても、現状ではイングリッドを上回る力を持つルイズ。それには劣るが今まで眼にした学院の生徒からすれば相当な実力を持っていそう、恐らくは対処能力も持っているようなキュルケ。結構な修羅場をくぐっていることは事実と見られるタバサ。そのあり方は果てしなく怪しいが、実力に関していえば、そうであるが故にそれなりに有りそうと見立てたロングビル。そして自分。

「ちよつと」したことなら踏んで払ってぶち壊せそうなら5人だが、それは数値上の理論値であって、実際に何かが起きてどうなるかは分からない。たまたま寄り集まった3人と一組であって、5人がチームという訳では無いのだ。突発事態に対処するに当たって、ルイズを最優先するのはイングリッドだけだろう。ルイズに気を回しているのが確実であるキュルケだって、野郎！ぶつ殺してやる！となれば優先すべきは自身の身となる筈だ。そうになると、集団を形成している事は逆

に弱みになる。他の3人が邪魔になる事も想定しないといけない。

そうではあっても、エレベーターと言う機械は場合によっては使わざるを得ない状況を強要されるという点で、イングリッドにはなおさら嫌な思いをする機械だった。

何十階という高さを誇る高層建築物で、流石に階段を利用するのはきつい。状況によってはそうではあっても階段を選択したい場面もあるのだが、現代高層建築物ではある一定階層以上の上層部は非常階段以外はエレベーターの使用を強制している場合があるのが困りものだ。階段を選択したくとも、非常階段室の扉を空けた瞬間にけたたましい警報がフロアを駆け抜けるような面倒くさい建物がごまんとあったりする。イングリッドにはありがた迷惑どころではない話だ。

今、ロングビルに先導されて利用しようとしている職員塔のエレベーターは、やたらと待ち人が多いが、その籠は余り大きくは無い。そうであるが故に待ち人が多いのだろうか。エレベーターの到着音としては誰もが思い浮かべる「チーン」ではなく、産業用機械が響かせるような「ジャリリリーン！」という音と共に籠が到着すると、蛇腹の外扉と内扉はそれぞれの場所にいる利用者が自分で引き開ける形のものであった。エレベーターというより、鉱山等で動いている「昇降機」と言った方がしっくりする機械である。書類の束を持った職員が6人程降りてくると、彼女達は走り去って学院の敷地内に散っていく。

それを避けて籠に入るのは書類を抱えた職員3人に、掃除道具を抱えたメイドが1人。そこで扉が閉められる。だれもその人数に疑問を持っていない様でもない。イングリッドが見たところ、押し込めば10人は入りそうな籠だが、つまり、それぐらいの重量にしか耐えられない機械なのだろうということか。

エレベーターを待つ列が僅かに動く。
それにあわせて5人も足を進める。

一瞬訝しげな目をこちらの集団に向けた待ち人の列であったが、その中にロングビルの姿を見て首を傾げ、その後ろにルイズの姿を認めて納得し、慌てて目を背けていた。

ロングビルがエレベーターを迷わず選んだのもそういう事なのだろう。

そこで一つ重要な事にイングリッドは気がついた。推測はしていたが、確信できなかった事を確認出来た。「平民」である彼らが、ロングビルがエレベーターを待っている、という事態に対して、疑問を呈した。そして、ルイズと共にいることで納得した。

つまり、ロングビルは普段、エレベーターを利用する必要がないという事だ。それは、ロングビルがエレベーターを使わずとも学院長室に向かうことが出来る……メイジだということを示している。

イングリッドの中で、ロングビルに対する評価が跳ね上がった。悪い方向に。

13階にある学院長室を目指すのに階段を使うのは、流石のイングリッドでも嫌気を感じさせる行為だった。

内部構造的な言い方をすれば「13階」だが、1フロアの天井がやたら減多ら高いのが学院内の建物の特徴である。実質的な高さから換算し「現代」高層建築的な見方をすると軽く20階から25階ぐらいはある高層建築物なのだ。その最上部を目指す。しかもどこかの遺跡のように外周に張り付いた円を描く階段を昇る。更に言えばそこに手すりが無いと来てる。ちよつと冗談では済まない事になりそうだ。

となればエレベーターは当然の選択肢なんだろう。イングリッドが知るエレベーターとはまったく異質な轟音を轟かせて、目的のフロアで止まる毎に派手なスキル音とベルを鳴り響かせるエレベーター。

周囲の空間を飛ぶメイジがその音に顔を顰める位なのだから、イングリッドが胡散臭い視線を送ることは如何程でもないだろう。寮塔でルイズがエレベーターを避ける理由が分かったような気がした。これは酷い。

もしもロングビルが階段を選んだのであれば、もう隠すことも無くイングリッドがルイズを抱いて飛んでしまえばよかった。そのほうがいろいろな意味で面倒が無いような気がする。

もしそれをすれば最上階で待つコルベールは泡を吹いて倒れたに違いないだろうが。

やっと順番がやってきて5人はエレベーターに足を進めた。

ロングビルが腰を入れて蛇腹の扉を閉める。それは立て付けがよいとはいえないようで、がくがくとした動きでロングビルの腕に追隨した。

古い電車のマスコンを大きくしたようなレバーが扉の脇にあって、その前に立つロングビル。今、籠の中には5人しかいない。ロングビルはそれを確認して、1階を指し示しているレバーを13階の部分に回した。

間違いなくレバーが13階を示している事を確認した上で、その横にある作動レバーを下に下ろすと、ガクンと一つ、大きく揺れて一瞬沈み込んだ籠が、いろんなものがぶつかり擦れる音を撒き散らしながら上に向かって進み始めた。

イングリッドは騒がしいエレベーターの動きに身を震わせてしまう。今時、鉱山の立孔に設置されたエレベーターですらこんなに騒がしくはないだろう。目的地に着いたら銃を持ったロシア兵がずらりと並んでいました、なんて事になりそうだ。……あれは上ではなく、下に向かった先か。それに、元ロシア兵が混ざっていたかもしれないが、あの場では明確に「テロリスト集団」となっていた。まあ、あの場所ではエレベーターの籠が自由落下する羽目になったのだが……。意味不明なフラグを建てていたイングリッドにキュルケが笑顔を向けてその肩を叩く。

「リフトは初めて？心配しないでいいのよ」

その言葉に反応して、ロングビルが振り返る。気世話な表情を浮かべて、イングリッドに声をかけた。

「あら。申し訳ないことをしましたね。……そうですね。普通、リフトを使ったことのある平民なんていませんもんね……。最初に説明するべきでしたかしら？」

苦笑いでそれに手を振るイングリッド。

ルイズもキュルケも同じように苦笑いを浮かべてイングリッドを

見る。冷や汗をたらずイングリッドを見てロングビルがくすくす笑う。

しかしイングリッドは別のことを考えていた。

エレベーターではなくリフトと呼んだか。アメリカ英語ではなく、ブリティッシュ・イングリッシュがメインということか？しかし、ルーン。そしてダイアクリティカルマークのあるラテン文字と思われる文字。つまりヨーロッパ的な文字という判断が出来る。いまここに「ロングビル」という明白な英語という例外はあるが、いまのところは古典的ラテン文字を読む要領で問題は起きていない。言語で言えば、明らかなフランス語的固有名称、ロシア語的名称に、ロマンシユ的名称もあった。どういうことだろう？

がたがたと揺れる籠の中でなんとなくロングビルを見つめるイングリッド。微笑を浮かべたロングビルが小さく首を傾げる。

この女は明らかに英語圏の名前を持っている。教育棟の中庭で恥をさらした阿呆はともかくとして、基本的にフランス系の固有名称ばかりだった生徒達。コルベールもフランス的な名前だ。キュルケに關してはドイツ系と呼んで良いか、ゲルマン系と言つていいかの判断が難しい。タバサは論外だ。固有名称とは言えない。判断のしようも無い。あえて言えば、ある種、偶蹄目の動物的普通名称であり、その言語学的な由来から言えばヘブライ語かその周辺亜種と判断できなくもないが……言語学的にも混沌とした世界としか言いようが無い、ましてやその考え方からタバサに隠された真相を探ろうなんて無駄以外の何物でもない。

寧ろ、エレベーターを「リフト」と呼んだ事に安堵するべきかもしれない。いまのところはヨーロッパ圏だけで話は纏まっている。あからさまにモンゴロイド系の間がある訳でもない。アメリカ的英語まかり通つていたり、黄色人種が普通にいるようだと、文化的背景に対する推測が混乱するところではない。

ブレイキのスキル音を響かせてエレベーターが止まる。一瞬、沈み込んで派手なロック音が響く。「バシーン」と派手な音を立てて作動レバーが上に戻る。

一応の安全装置はついていることを知って表情を緩めたイングリッドを見て再度小さく笑ったロングビルは、扉に振り返って、蛇腹を開ける。その向こうで、エレベーターを待っていた人々が、外側の蛇腹を引き開けた。

脇に退いた職員に目礼をしながらロングビルが籠の外に出る。それに続く4人。足を出したときに、随分と体が強張っていたことを自覚したイングリッド。その仕草に気がついて苦笑いを浮かべるキュルケ。

もう……、エレベーターだけはカンベンな！そう思ったイングリッドであった。

エレベーターと行き来する僅かな部分だけに、申し訳程度の手すりを用意されたバルコニーを抜けて壁に囲まれた広い廊下に入ると、うっかりと安堵の溜息を吐いたイングリッド。笑いながらその腰に肘をぶつけるルイズ。歩きながら、それに手をやって押し返すイングリッドと、傍目にはじゃれあいながら歩いている様にしか見えない2人。

それを笑いながら見るキュルケ。

ふと脇を見ると、そんなキュルケをタバサが見上げていた。

ん？と表情に疑問を浮かべたキュルケはそんなタバサと、前を歩く2人をしばし見比べて、小さく笑みを浮かべてタバサを見下ろす。

「私たちもやる？アレ」

右手の親指で指差す2人はとても楽しそうだった。緊張していたルイズの姿はどこかに消し飛んでいる。

足を止めないままゆつくりとキュルケと2人を見比べたタバサは、小さく首を振った。

「……はい」

思わずその頭を撫でてしまうキュルケ。それに対して微かに不満そうな表情作ってキュルケを見上げるタバサ。しかし、その表情のどこかに満足げな雰囲気があるのをキュルケは感じていた。

後ろでエレベーターが作動する大きな音が響き渡った。

騒がしい喧騒が漏れる、実用一辺倒な味も素っ気もないつくりの扉が開け放たれた部屋の前を抜けて、その奥を目指す。

廊下には深過ぎず、しかし、足音は吸収してしまえるほどにたっぷりとした毛並みを整えた絨毯が敷かれている。

掃除はどうしているのだろうか、当然の疑問を持つてしまうイングリッド。

中世に於いて絨毯とは、カーペット的な使い方が主流だった。掃除機等思いもよらない時代である。テーブルや椅子のように、メイドであつても3人、4人いれば脇に寄せられる調度ならともかくとして、チェストやタンスに踏まれた絨毯となると、掃除をどうするんだ、という話である。

普通は、廊下のセンターに引いてあるか、部屋の床、そのごく一部分を飾っているかで、ここや職員室のようにその場所一面に敷き詰められているなんて言うことはありえなかつた。それこそ掃除をどうするんだという話である。

掃除機が出来るまでの地球では、絨毯の掃除と言えば、巻き取つて外に干し、たたき棒でビシバシ！が基本である。うっかり洗濯をしようものなら縮んだ、破れた、なんていうことになってしまう厄介な「家具」だった。箒で掃いてどうこうできるものではないのだ。

そういう意味では裸足で触れて柔らかな感触を楽しむことが出来、香りもよく、拭き掃除、掃き掃除で済ませることが出来て、精々年に一回ひっぺがして外でビシバシ！叩けば、それで何年も使える畳という奴は、スゴイ特徴的な、文化的な道具だった。

ちよくちよく見受けられる、明らかに地球の文化的背景とは比べる事さえ出来ない事実の現出は、イングリッドにハルケギニアが疑いようも無く別世界なんだなと自覚を迫るように思える。

ランプも燭台も窓もない廊下全体が淡い光に包まれていることも薄気味が悪い。イングリッドは自身がこういうことに慣れる事が出来るか不安を持っていた。

ロングビルはある扉の前（ちやんと取っ手のある普通の扉だった）に来ると、躊躇い無くそれを引き開けて、中に入った。

当然、目的の場所に着たら、扉をノックするのだろうと思っていた。イングリッドは虚を突かれてしまう。

ロングビルに続いて入るルイズ。その後を付いて室内に入ると、簡素な調度の部屋で、奥の扉そのものと、そこに続く絨毯だけが豪華な場所だった。

小さなテーブルと脇に置かれた数個の椅子。すまし顔でその内の一つに座っているメイドがロングビルを認めると、頷いて立ち上がり、奥の扉をノックした。

「どうぞ」

くぐもった声が扉をすかして響く。控え室がある構造の建物なんというのはいく数年、てんで無沙汰だったイングリッドは苦笑いを浮かべる。

そうそう。昔は、そこそこの地位のある人間が住んでいる場所というのはこういう構造だったなあと思ひ出す。

いまの時代、余程の大企業でもない限り、廊下に直接面した社長室とか、事務所の一角をパーティションで区切っただけの場所とか、職員室の奥に校長室とか、そんな構造が当たり前だったりする。

イングリッドの立場からすれば「余程の大企業」とか「大物政治家」なんていう存在は時代が下がるにつれて急速に縁の遠い存在になっていた。だからこういう経験は世間一般でなかなか得られるものではない。

こういう時代かかった構造を「今現在も」最も色濃く残しているのは、大抵は軍隊であつたりする。科学技術的な面で常に時代の最先端を行って当然と外部から見られている軍隊が、その内実に、保守的な面を色濃く残しているのは皮肉である。

扉が開けられて、内部が見通せる状態になってメイドが脇に下がり、頭を下げる。

ロングビルはそれに小さく頭を下げ返すと、背筋を伸ばして中へ一歩足を踏み入れ、声を上げた。

「4人をお連れしました」

それで頭を下げると、室内で扉の脇に退き、また頭を下げる。

「入りなさい」

威敵の詰まった重々しい声が響き渡る。先ほどの「どうぞ」とは違う声だった。「どうぞ」はゴルベールの声であったと推測する。となれば、この声の主は、この部屋の本来の主なんだろうとイングリッドは当たりをつけた。

ルイズとキュルケが顔を見合わせる。

タバサが僅かに傾いでいた杖を身体に寄せて垂直に戻す。

イングリッドは肩を竦める。

ルイズが一瞬眼を光らせて、イングリッドに振り向いたが、イングリッドが僅かに頷くと、溜息を吐いて奥に向き直る。

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。以下4名。お呼びにあがり、参上しました」

薄暗い、部屋の奥で誰かが頷く気配がする。それを認めてルイズが扉をくぐり、イングリッド、キュルケ、タバサの順で室内に入った。

それを見届けてロングビルは扉に手を当ててそれを引き、控え室に向かつて出て行った。鈍い音と共に扉が閉まる。

それなりに明るい場所から、薄暗い場所に入った事で、キュルケとルイズが戸惑う。

扉が閉まる前から眼を細めていたタバサは、すぐさま視界を取り戻していた。

イングリッドは何も気にならない。一切の光が失われた場所から投光器が照らし出す場所に飛び出しても何も不自由がないという、特殊な「眼」を持っているのだ。すぐさま室内を一瞥して状況を確認する。

部屋の構造と一体化した設えはともかくとして、調度に関しては質素な部屋だった。

一番奥の壁には3枚のタペストリーが、いや、言語的な特徴から言えば、タペストリーというべきか、それが吊るされており、室内で明らかに高価な品といったら、目に付くのはそれだけである。

中央のタペストリーは明らかに国家を示すと思われる紋章が豪華な刺繍で彩られ、左右のタペストリーは2枚で対になった刺繍を描い

ている。何がしかの神のみ技を現した一場面といったところか。

つまり、それで中央に飾られた紋章。すなわち国家が神に祝福された存在であることを示しているのだろう。

その前に置かれた巨大な机は、黒く光沢のある材質で、ほのかに光を反射している。ただしその上は殺風景だった。ペン立て一つ無い。つまり、普段、その机が執務等に使われる事は無いという事なのだろう。その机とタピストリーに挟まれた場所にある、凝った装飾を施された椅子に、なかなか複雑な印象を感じさせる老人が座っている。

即座にイングリッドは、この老人を警戒すべき対象であると認識した。

机の前にあるスペースに、長方形の低いテーブル。短尺側に一脚、机に面して1人掛けのソファ。長尺側に3人が腰掛けて余裕があるソファが向かい合わせに2脚。

左右を見渡すと、右側は単なる壁。小さなチェストが扉側にあるのみ。左側を見ると、大きな窓が一つ。ただし、カーテンがその前で揺れている。その横にコルベールが難しい顔をして立っていた。

扉側に眼を向けると、おままごでもするかのような小さな調度が置いてあって、これまた小さな籠に、なにかお菓子が盛ってある。

それだけの部屋だった。

僅かな時間を置いて、奥の老人が立ち上がった。机を避けて、前に出てくる。その左腕は身体の横で自然に揺れている。右腕には彼自身の背丈ほどのねじくれた、特徴的な木の杖が握られている。彼自身の内面を表しているがごときの姿だった。

1人掛けのソファの横で、柔らかな笑みをたたえて老人が立ち止まった。

「さて、立っていてもしょうがない。ソファに座りたまえ」

緊張を隠せないルイズが身じろぎする。

「え……でも、しかし」

要領を得ない言葉に、しかし老人は、小さく笑みを浮かべて頷いた。「遠慮することはない。御主らを客として呼んだのはわしじや。座るとええ」

顔を見合わせたキュルケとルイズが次いで首を振り、無意識にイングリッドを見つめる。

視線を浴びたイングリッドは肩を竦めると、首をこきこき鳴らしながらさっさと左側のソファを選んで座った。

あつけに取られたルイズとキュルケを無視して、タバサがイングリッドの向かい側に遠慮する事も無く座る。

それを見てもう一度顔を見合わせたルイズとキュルケはしかたなく、それぞれソファに向かった。

イングリッドの右側にルイズ。それと向かい合わせで、タバサの左側にキュルケ。この組み合わせもなんだか板についてきたようだ。僅かに一日弱程度の時間しか過ぎていないのに。イングリッドは、傾いだ顔で胡散臭そうに老人の顔を見上げながらそう思った。

この全体としては中世っぽい雰囲気の色濃く見せる世界では、かなり違和感を感じる背丈をもった老人だった。見た目だけで判断できる手合いでは無いと内心を緊張させる。

ジト目のイングリッドに視線をあわせると老人は小さく笑って、一人掛けのソファに腰を下ろして、手を叩いた。

「さて、ここは一つ、わしに見栄をはらせてもらおうかの」

手を叩くと同時に勝手に扉が開き、誰も人がついていないワゴンが無人のまま、音も無く入ってくる。

そこで老人は杖を振った。些細な事だったが、イングリッドの想像するところ、つまり、扉とワゴンは、杖無しでも、合図をすれば決められた動作をこなせる道具なんだな、そういう物もあるのだな、と記憶しておく。

ルイズの部屋の扉や、照明と同じ手合いなのだろうと納得しておく。意外と複雑な動きをこなせるらしい事は注意しておく必要があるりそうだ。

扉が閉まると同時にワゴンはテーブルに横付けとなって止まった。老人が杖を再び振るうと、その上に乗せられたティーカップや、ポットが空を滑り、テーブルの上に舞い降りる。

ソーサーやらナプキンやらスプーンがそれなりの秩序を持って

テーブルに並べられると、テーブルに鎮座していたポットが再び空を舞い、それぞれのカップにその中身を注いだ。

4人が見つめる先で、よどみなく人外の技が披露されて、僅かの時間でお茶の準備が整えられた。

微かに感嘆の表情を浮かべる3人に対してイングリッドは意識を背後のホルベールに向け続け、視線は老人から離さないでいた。

複雑な動きでありながら、かなり正確な動きを見せていた。何故そのようなものを見せる必要がある？つまりは実力を見せ付けるという事か？派手な爆発一つを見せるより、はるかに効果的でありながら、実力を持たない者には単なる見世物程度にしか思われない地味な行為だ。つまるところ、彼はイングリッド自身を評価しているという事なのだろうか。そして、それをイングリッドに伝えようとしているということだろうか。

茶番だな……。お茶だけに。

香りも味もたいしたものだった「お茶」を飲み干すまでは、どうでも良い会話が交わされた。

ヴァリエールの家は大変じゃの。長女の婚姻が遠のいたようじゃ。ええ！またですか！

どうでも良い会話とはいえないような気もしたが、まあ、どうでもよかった。

左肘をソファの肘掛について、身体を傾げて老人を見つめ続けるイングリッド。

ちよこちよこことそんなイングリッドの態度を気にかけるルイズ。そうして気もそぞろなルイズに視線を送るキュルケ。我関せずとお茶を飲むタバサ。

紅茶かと思つて取ったカップには、黒い液体が入っていた。コーヒーかとも思ったが、香りは中国茶に近い。色はウーロン茶とコーヒーの中間で、ややコーヒーより。温度は70度といったところ。口をつけると淡い香りの奥に、甘めのウーロン茶のような味がした。やや自己主張が過ぎる渋みもあり、控えめな苦味もあるが悪くは無い味

であった。短くない人生の中でも感じたことの無い味に、世界とはまだまだ広いのだなと、心の中で感想を漏らしたイングリッド。

いや。

思いなおす。

ここは異世界だったな。

お茶請けが欲しいところだったが、用意されたのはお茶のみ。ワゴンの上に残ったのは水滴を滴らせるウォーターポットだけ。ケチいやっちゃな、と思いつつ、まあ昼食の後だから良いかと思いなおして、空になったカップをソーサーに戻した。

「で、駄弁る為に我らを呼んだというのかや老人？」

ぶうつ！とお茶を噴き出したルイズとまともにそれを浴びたキュルケ。あわあわ、きやつきやと騒ぐ2人に視線をやって、すぐに老人に視線を戻す。

「老人とは挨拶じゃのう……。まだ若いつもりなんじゃがの」

にやりと笑った老人を見下すように見つめて、イングリッドは鼻で笑った。

「はっ！あの騒ぎを高みの見物で終わらせて、何が学院長じゃ。貴様等を我が糞じじい扱いしないだけマシだと思え」

芝居じみた仕草で両手を天に振り仰ぐイングリッドの背で息を呑む音が漏れた。それはつまり、肯定の意味。残された3人が息を飲む心配がする。

一瞬どこを見ているかも分からない様で天井に視線を這わせイングリッドは右手でスプーンを弾いて飛ばし、その行き先を気にすることも無く、老人のほうに向き直る。

甲高い金属音と小さな悲鳴が上がって、そんな声が起きることを予想だにしていなかった3人がびくりと肩を震わせる。

「ちゅっ、ちゅうちゅう!!」

ソファの脇からねずみが飛び出して、扉脇のおままごとエリアに走り去る。

それをあつけに取られた表情で見送る3人を気にすることも無く、あいかわらず老人を見つめ続けるイングリッド。コルベールが冷や

汗を流していた。

その一連の流れを興味深そうに眺めていた老人は、微かな笑顔を浮かべたまま、小さく頷いた。

「うむ。なかなか興味深い御仁じやの。コルベールの言うとおりにじや」

イングリッドは右手を差し出して老人の前に手のひらを向ける。

表情に疑問符を浮かべたその横で、タバサが溜息を付いて、それに釣られるようにルイズとキュルケも溜息を付いた。

またあのやり取りが繰り返されるのか……。

3人の予想通りにイングリッドは名前を名乗った。

「我の名はフェリシア・ド・アンダルシア・デ・レオニーダ・グリーディアという。主の名はなんと申すのじや」

3人の身体が硬直して眼が見開かれる。窓際のコルベールも驚きを隠せない。タバサの眼鏡がずり下がる。

老人も驚きが隠せず、僅かに眼を見開いた。

あからさまに貴族の名。いや、それだけではない。名前のなかに国号らしき響きが入っている。そんな名前を告げられて一瞬混乱する。苗字の後に接頭子を並べて家名を置き、更に子名を並べるのは何代にもわたって同じ名前が登場することのある由緒正しい貴族の名前であり方だが、更にその後ろに名を並べるのは家名以外に説明の必要がある名前、つまり国号。或いは領主号である。他の王国等に併呑された地方豪族名や公国名を残す意味がある場合も存在する。こういった名前の方が許されるのは、ハルケギニアの常識に於いては王やそれに連なる家名、それに比肩しうる貴族。そうした「高貴な地位」を名乗る場合のみである。

ルイズの正式な名が、そういう名前なのだ。

「ラ・ヴァリエール」は本来の家名ではない。歴史のどこかで王家に連なる女性がル・ブラン家にお興入れしたさいに下賜された「名」なのだ。本来の家名は「ル・ブラン」である。この場合の「ラ・ヴァリエール」は王家の分家筋を示している。

ただの名前。それだけでは済まされない言葉。

それだけで済まされようも無い言葉の羅列。

貴族社会、ハルケギニアの封建社会では途轍もなく重い意味を持つ名前。

身体の前で両腕を組み、轟然と顎をそらして視線をやる姿はまさに王の貫禄。

考えてみれば、紫という色は極めて高貴な色。特段、明文化された規則でもないが、それを身に纏う者というのは、かなり格の高い貴族か、或いは宗教集団に於いて、相当に高い位を持つ者が優先するという暗黙の了解がある。例えば平民が使うことに対して特別の禁がある訳でもないのだが、その色をあえて使うには相当なリスクを覚悟する必要がある。そうした「色」なのだ。それを自然と着こなす姿は、いと尊き姿。

身に纏う服は、繊細な刺繍が施され、やや短過ぎるスカートがどうかと思わせるが、それも乗馬等の外向きの用を考えれば、実に自然な活動向きの様でありつつ、そうでありながら高貴さを失ってはいない。

ベッドフォード・コード織のピケを3本打ち出した純白の手袋は、左が汚れてしまっているがドレス・グローブとしてもあまりにも凝った創りだった。これだけで庶民が一ヶ月は遊んで暮らせるほどに高価なものだろう。

ヴィノグラドフが先ほどの一件で無礼打ちを選ばずに「決闘」と叫んでしまったのも理解できる。この少女は内面から自然と高貴な雰囲気が出ているのだ。ヴィノグラドフが無意識に勘違いをしたのもまったく不思議ではなかった。

突然にその体躯が何倍もの大きさになったと錯覚させるほどのプレッシャーを湧き出させたイングリッドの前で、オールド・オスマンは冷や汗を流した。目が痙攣することを押さえられない。

イングリッドが貴族。

イングリッドが王族。

まったく強烈な説得力があった。

鉄面皮を張り付かせていることで有名な表情の欠落しているとき

れた少女も、ボンキュッボンな女性も、あつげにとられてイングリッドを見つめている。イングリッドの横に座るミス・ヴァリエールは左手をテーブルについて、腰を浮かせて固まっている。窓際に立つコルベールは青褪めた表情で身体を震わせている。

どこかで何かを決定的に間違った気がするオスマンだった。先ほどの騒ぎを眺めて済ませたのには様々な意味と思惑があり、それらが果たされることは無かったとはいえ、それなりの言い訳をいくつも考えていた。

「野次馬」していたことを見破られているとは思ってもよらなかったが、それとて言い訳はあった。それとはまた別の思惑として、本人には言えないことだが、現実問題としてはイングリッドが死んでしまおうと「どうでもよかった」。

誰にも明かせないオスマンの妄想であったが、イングリッドが死ぬばそれはそれで面倒が無くてよかった。めでたしめでたし。

しかし、イングリッドはこちらを冷めた視線で捉えて見下ろしている。いや、そんなことは無い。身体づくりからしてイングリッドにオスマンが見下ろされるなどということはありえない。

だのに、オスマンは見下ろされている。

そう思ってしまう。

そう思ってしまう。

それほどまでに大きなプレッシャーが少女から降り注いでいる。

コルベールと相談して決めた、彼女に言うこと、説明すること、その段取り。すべてが吹き飛んで、真っ白く染まり、思考が停止していた。

刹那なのか永い時間なのか。

緊張に包まれた世界で、イングリッドの口がやにわに歪み、小さく息が漏れる。

緊張が解けない5人が見つめる中でイングリッドは腕を解き、身をテーブルの上に乗り出してオスマンの顔に自身の顔を近づけた。

顔を汗が流れるオスマンを、ただ見つめることしか出来ない4人。

目を吊り上げてオスマンを見つめるイングリッドは少しの時間を沈黙で飾ると、もつたいぶつたように口を開いて、小さな声で言葉を吐いた。

「ウ、ソ、じゃ」

にまあと笑うイングリッドの言葉が理解できない5人。それぞれが頭の中で、何度も反芻する。

ウ、ソ、じゃ。ウ、ソ、じゃ。ウ、ソ、じゃ。うそじゃ。嘘じゃ。嘘

……？

イングリッドの横で火山が噴火した。

「う、ううう、ううううう、うそっ！ううううそって！嘘ですつてええええ!!」

身体の捻りと腰が入った強烈な勢いで、抉るように右腕が轟音を立ててイングリッドを襲う。イングリッドの右手のひらが軽いタツチでそれを止めた。予想以上に重い音が鳴り響いたが、イングリッドはすましたものだった。

怒りだかなんだか判らないもので顔面を染めて赤黒くなっているルイズに、イングリッドはにやりと笑いかける。

「どうじゃ。なかなか見ものであったろう」

その姿を見て顔を真紅に染め上げたルイズが2次爆発を起こし、滅茶苦茶に両手を振るう。

「……………!!」

怒りの余りに声にならない声を叫び、唾を飛ばし、髪を振り乱してイングリッドに殴りかかる。

「おう！おう！重いの！良いパンチじゃ!!拳闘士になっても喰うには困らんよぞ!!」

腰を浮かして素早くルイズの拳をさばくイングリッドもなかなか堂に入った姿だった。

半開きの口を髭の間から覗かせて、ぽかんと眺めるオスマン。タバサはソファの肘掛に身を預けて下を見つめている。キュルケはテーブルに頬をつけて目を閉じている。コルベールはあつけにとられて騒いでいる2人を眺める。

騒ぎが治まるまで、暫しの時間が必要となった。

なぜだか猛烈に疲れた表情をしたコルベールが咳払いをする。ルイズはどこかで見たような光景だなーと溜息を吐いた。

バツの悪そうな表情でオスマンも咳払いをする。

タバサは何かを考えているかの風に目を閉じて行儀良く座っている。目を閉じているだけだろうか？意識も閉じていそうだった。その隣でキュルケは大きく姿勢を崩してソファに背を預けている。両足もだらしなく広げられていたが、ルイズも文句が言えなかった。ただし、ルイズ自身は、自身のプライドにかけて背筋を伸ばして浅く腰掛け、オスマンの顔を伺う事をやめない。

イングリッドは……両腕を組んで、足も組んで、背を反らしている。大変に偉そうな姿勢だったが、オスマンもコルベールも文句はないようだった。

「ああ……さてな」

のそりと口を開いたオスマンの声に、イングリッドが言葉をかぶせる。

「我はイングリッドという。覚えておいてくりやれ。オールド・オスマン」

オスマンは小さく頷いた。が、ルイズ、キュルケ、タバサは顔を跳ね上げて互いに見合わせた。

オスマンは疑問符を浮かべた表情でその3人に視線を移す。

あわててルイズが手を振って否定し、隣のイングリッドに小声で訪ねる。

「ね、ね、イングリッド。いつオールド・オスマンの名前を教えたっけ？」

それに小さく笑ったイングリッドはルイズに振り返ると、身を屈めて随分と低いところから身を乗り出しているルイズと目線を合わせた。

「んむ。決闘騒ぎのときにな、上から聞こえた会話の中にあつたよ。随分と高いところの会話じゃつたがの」

そう言つて頭を挙げると振り返つて、窓際に立つコルベールに笑いかけた。

「のう。コルベールよ」

にししと笑うイングリッドに冷や汗を流すコルベール。何度目だろうか。

その姿にオスマンは髭を扱いて頷いた。

「うむ。随分と耳が良いのじゃの。羨ましいことじゃ」

オスマンに振り返つたイングリッドは口を開けて笑つた。

「我は若いからの」

オスマンも笑顔で頷いた。

「うむ。わしも歳をとつたようじゃの。仕方がないの」

あつはつはつと笑う2人の姿を見て緊張がぶり返した4人。汗を流したキュルケがウォーター・ポットをとろうと手を伸ばすと、いつの間にか杖を手にしたオスマンがそれを振るい、ポットが空を滑つてキュルケの前にあるカップに水を注いだ。

氣勢が削がれたキュルケが「あ、どうも」と気の抜けた声を上げると、オスマンは頷いた。キュルケがカップを煽ると再度、水が注がれてポットが移動し、タバサ、ルイズ、イングリッドと彼女たちの前に置かれたカップに水を注いで、テーブルに降り立つ。

それと入れ違いでティーポットがワゴンに戻つた。

それを横目で眺めてイングリッドがオスマンに視線を送る。

「説明、してくれるんじゃないかな」

「伝説……伝説のう……」

自身の左手をためすがえすするイングリッドにルイズが視線を注目させる。キュルケとタバサもあつけにとられてコルベールとオスマンの間で視線を移ろわす。

「眉唾モンじゃな。何の冗談……ではないようだの」

深刻な表情を浮かべてオスマンの横に移動したコルベール。オスマンは目を閉じて髭を扱っている。

ルイズの表情は蒼白になっていた。イングリッドが「伝説」である

という説明から即座に深刻な問題に気がついたのだ。蒼白にもなるうというものだった。それにはイングリッドも頭痛を覚える。

テーブルの上に両手について溜息を吐き、右手でさつと髪を払って眉間を揉む。

「つまりあれじゃ。我が主ルイズは始祖の生まれ変わりとか何とか、そんなところじゃと言いたいのかや、主らは」

目を開いたオスマンは重々しく首を振り肯定の意を示した。

イングリッドは鼻で笑う。

それに右手を挙げたオスマンは身を乗り出してイングリッドに顔を寄せる。身体をそらせて避けるイングリッドを僅かに見つめた後、重苦しい表情を保ったまま、ゆっくりと口を開いた。

ルイズが息を呑む。キュルケもタバサも言葉を待った。

「……オスマンじゃ」

あっけにとられた4人を見て満足げに頷くと、オスマンは身体をソファに戻した。

「オスマンと呼んでくれれば嬉しいの」

鼻から息を出して両手で天を仰ぐイングリッド。タバサは肘掛に身体をもたれさせて下を見つめている。キュルケは頬をテーブルにつけていた。ルイズはふるふると身を震わせる。コルベールはがっくりと頭を垂れていた。

ぬふふふと怪しい笑みを交わすオスマンと、テーブルを見つめていたルイズは同時に顔を上げると口を開きかけたが、イングリッドが氣勢を制して声をあげた。

「あれか、つまり第5の系統という奴か。そのせいでルイズは苦しんでいると?」

オスマンとイングリッドを除いた4人がハツとした表情で顔を上げる。特にルイズの驚きは尋常ではなかった。自身が伝説に「連なる何か」かも知れないだけでいいはいっばいだったルイズは、一瞬、イングリッドが何を口にしたのか理解できなかった。この話の経緯のどこからそんな話が出てきたか理解できない。

難しい表情を顔に貼り付けたイングリッドがルイズに向き直る。

『五つの力をつかさどるは、その術形、その名をペンタグラム。そこにあるは五つのエレメント』。契約の言葉はこうじゃったな」

ルイズは反射的に頷いた。何度も何度も練習した呪文である。間違いない。

顎に手をやって首を捻るイングリッドは、次いで顎から手を離し、眉間を揉む。

『今は失われたとされる『虚無』。これをあわせて全部で5つの系統がある』じゃったかの？」

それにも頷くルイズ。何度も勉強した。何度も見た一文。自身の系統を探るためにページに穴が開くのではないかというほどに読み返した教科書。文献。

全てに等しくそう書かれていた。

イングリッドはオスマンに向き直る。

『今は失われた』系統……『虚無』。なるほどのう。これでは誰にもルイズを教えて導くことが出来ぬわけじゃ」

身を強張らせたオスマンから視線をはがし、次いでコルベールに視線を向ける。視線を向けられたコルベールは緊張して息を呑んだ。

「虚無とやらがどんなことが出来たのか。記録も何も、碌に残ったりやせんのであろう？」

刹那の沈黙の後に、ゆっくりと頷くコルベール。考えが、思考が、こういう風に動くとは予想もしていなかった。

予想してしかるべきだった。

伝説の使い魔。

始祖の系統。

伝説の再来。

始祖の魔法。

並べれば当然、始祖が使った魔法はなんだったか、という話になる。『虚無』。

言われてみれば当たり前の結論だった。結論から先に聞けば、そういう推論をもって行って当然の結果だった。

その「当然」が思いつかなかった。

コルベールは次の瞬間に泣き出しそうになった。情け無い。なんと情け無い。

自分はいつからこんな腑抜けになったのか！

内心の葛藤で顔が痙攣するコルベールを無視して、イングリッドは腕を組み、頭を捻る。

「なんとも迷惑な話じゃな……そんな大事なことを部外者に知られてよかったのかえ？」

あごで向かい側をさすイングリッド。タバサは無表情で見つめ返す。キュルケは目をぱちくりさせた。

オスマンはゆつくりと頷いた。

「うむ。幸い4人は知らぬ仲という訳でもないようじゃ。2人で抱えるには重過ぎる結論じゃからな。3人なら楽になろう。4人なら気楽にもなるじやろう」

笑いながら部屋を見渡すオスマン。

「わしもコルベールも知っておる。6人じゃ。肩の荷も下りよう」

胡散臭そうな表情でオスマンを見つめ、何かを言おうとして……結局口を閉ざすイングリッド。

その仕草に満足げに頷いてオスマンはタバサ、ついでキュルケに視線を送る。

「聡明な2人なら分かっておるじやろうが、念を押しておく。ここで聞いた話は当然、口外を禁ずる」

小さく頷くタバサ。次いで神秘的な表情で頷くキュルケ。それにオスマンも頷いた。

「うむ。しかし、ここにいる6人には話してもええ。寧ろ積極的に話すべきじゃな」

呆けた表情でオスマンを見つめるルイズ。

「この先、何が起きるかはまったくの未知数じゃ。どんな困難が沸き起こるかも知れん。しかし、おぬしら4人でなら乗り越えることも可能じゃやて。わしら6人ならばいかなる困難をも乗り越えられよう。わしはそう信じる」

なぜかタバサを見つめて言い切るオスマン。タバサは目を閉じて

小さく頷いた。釣られるようにコルベール、キュルケの順で頷く。

頷かないイングリッド。それを見つめるルイズ。

「なんじゃ、イングリッドはミス・ヴァリエールの力になってくれんのか？」

緊張がぶり返した表情を浮かべたオスマンを無表情に見つめ返すイングリッド。コルベールも僅かに焦りを表情に浮かべた。

しかし、残りの3人は、興味深そうに、何かを期待するようにイングリッドを見つめる。

案の定、表情を崩したイングリッドは蔑む様な表情でオスマンを見つめ返して鼻で笑った。

「はっ。我はルイズの使い魔ぞ。頼まれるでもないわ」

身を乗り出して顎をそらしてオスマンの長身を見上げる。

「我がルイズを守らずして誰がルイズを守るといふのかや」

どやっ！と身をそらしたイングリッドはさすがに笑顔が浮かべていた。あつけにとられたオスマンが身を反らし、コルベールが何かに気がついて、やれやれと首を振った。キュルケがくすりと笑い、ルイズは無表情で頷いた。タバサも釣られて頷く。

「まっ、漏れ出でれば戦争になりかねん話じゃ。襲い来る敵は我が全てぶちのめしてくれようぞ」

そこまで言い切つて勢い良く立ち上がりルイズに振り返るイングリッド。突然の行動にあつけにとられたルイズはイングリッドを見上げた。

「うむ。やはりルイズは優れたメイジじゃったな！」

拳を握つて肩を振るわせるイングリッド。

眼を見開いたルイズはイングリッドの笑顔を見つめる。ただ、見つめて、見上げる。

『『ゼロのルイズ』。うむ。言いえて妙じやの』

拳を握りこんだまま腕を組む。肩幅に広げられた足が僅かに震えているのがルイズの目に見て取れた。そのまま煙を吐いて天井を突き破り、飛び立ってしまった。そんなほどに力が入っている。イングリッドは扉のほうを目を細めて強く見つめ、なぜか満足したように頷く。

と、再度、視線をルイズに戻す。

『虚無^{ゼロ}のルイズ』。うむ。2つ名は体を現す。素晴らしい名じゃ！」ソファとテーブルの間の狭い床に片膝をつくイングリッド。左腕がテーブルに当たり「がしやん！」と、テーブルの上が刹那に騒がしくなったがイングリッドは気にしない。呆けたルイズに視線をあわせて、僅かに見上げた。それで2人の視線が交錯する。絡み合う。小さな。

本当に小さな声で、ルイズに囁いた。

「おめでとうルイズ。主は、立派なメイジじゃな」

ハツとしてイングリッドを見つめ返すルイズ。イングリッドは小さく頷いて、更に顔を近づけて耳元で囁く。

「虚勢を張る必要は無くなったの。本当に主はメイジになったのじゃ」

その次の瞬間にルイズは表情を崩した。ぱっ！と、勢い良くイングリッドの胸におかしな体勢で無理やり顔を捻じ込むと、身体を震わせた。

イングリッドも抱き返して、その小さな背中を撫で続ける。

キュルケは迷わなかった。テーブルを飛び越えると震えるルイズの背中から抱きつき、イングリッド共々搔き抱いてルイズの頭を撫でた。

コルベールは涙を流した。オスマンの背中側で3人を見下ろしながら、涙を隠すこともなく、隠すことが出来ずに、静かに泣いた。

喜び、哀しみ、無力感、脱力感、そして怒り。

様々な感情が入り混じった涙だった。

オスマンも泣いた。静かに涙を流した。うんうんと頷き続けた。

若干、常とは違う、厳しさの増した無表情で3人を見つめるタバサの耳に「美少女3人の絡み！眼福じゃのう……」という万感の思いのこもった呟きが聴こえた気がしたが、タバサは幻聴だと思って首を振り、その言葉を振り払った。

タバサの冒険1

タバサの冒険 / タバサと吸血鬼と (1)

「はあ、はあ、はあ……っ！」
走る。

少女は、走る。

無心に。

一見した外観は、12歳程度と想像される少女。

息も絶え絶えに走る少女は、刹那、暗闇に包まれた道で、何かに足をとられて倒れた。

勢い良く地面に投げ出される身体。少女は、体表を削り取られるかのような瞬間の激痛に襲われる。

しかし、少女を苛む恐怖と混乱が、その一瞬の外的刺激に寸秒すら浸る贅沢を許さない。

眉を震わせ、眼を痙攣し、口を戦慄かせながら、じたばたと手足を投げ振り、慌てて立ち上がる。

だが少女は、気が急ぐばかりでうまく立ち上がれない。彼女を攻め続ける感情が、足を、腕を緊張させる。少女自身の身体であるというのに、少女の意思に背いて、素早い動きを見せない。

少女は倒れる。

背を反らして起き上がる。

少女は倒れる。

腕を付いて身体を起こす。

足に力をこめて身体を起こす。

少女は倒れる。

力の加減が妙なことになった少女は、まともに自身の身体を操ることが出来ない。

少女は倒れる。

釣り上げられた海魚かと、少女は地面をのたうつ。僅かな砂埃を吹き上げて、必死の表情を顔面に張り付かせて、地面を這う。

粗い息遣いと、地面を叩く音が、赤黒い夕暮れの空の下、一人の少女の存在以外に人の気配を見せない森に響き渡る。

少女の短い人生の中でも、ウンザリするほどに歩んだ、見知った道のりが、今、余りにも遠かった。

急速に夜へと歩みを進める世界で、生い茂った木々の枝葉が落とす影に遮られた路面は、少女の視界の中で、空虚を示す暗闇へと変貌している。

見知った世界。馴染んだ光景。精通した道のり。把握し尽くした筈の界限。

恐怖。

前に、右に、左に、そして後ろに。

広がる景色に、恐怖がわだかまる。生物が根源的に持つ暗闇への畏敬が、少女の心を絞りつける。

今、少女の知る世界は、少女の知らない世界へと。少女が知りつつも無視してきた、真実を曝け出そうとしていた。

少女の心を後悔の念が埋め尽くす。

どこかにのんびりとした表情を貼り付けた、少女に対して底抜けに優しい母はしかし、とある人間を指し示していつも忠告していたことを思い出す。

「あそこに住んでいる人たちは、村の人間じゃないのよ。だから気をつけなさいね」

煩いんです。

そんな風に聞き流した言葉。

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。

少女自身の声が、木霊となって彼女の耳朶を打ち続ける。

私が間違っていました。私が軽んじてました。今までそうだった様に、今もそうでした。母の言葉は間違いありませんでした。

少女は千路に乱れた思考の片隅で、柔らかな笑みを浮かべる母に謝り続けていた。

そうだ。あれはよそ者。あれは異物。あれは違う。あれは受け入れられない。あれはモノ。あれは……！

その『モノ』につれられて森の中に開いた丘に、野いちごを摘みに出かけた。僅かに4時間前の話。

こんな眼にあうなんて、思っていなかった。

ごめんなさい。

母は、私に忠告していた。

ごめんなさい。

朴訥とした表情は優しげで、盛り上がった筋肉に彩られた体軀は頼りがいがあつて、飄々としたしゃべりは親しげで。

ごめんなさい。

まさかまさか。

ごめんなさい。

こんなことになるなんて知らなかったの。

ごめんなさい。

あの「人」があんな『モノ』だなんて知らなかったの。

ごめんなさい。

ごめんなさい！

いつの間にか立ち上がる努力を放棄し、唯ひたすらに地面をつかみ、がむしゃらに四肢を振り回した結果として、遂に、村の明かりが姿を見せた。低い位置にある少女の視線の先に、揺らめく明かりが、少女の心の中にも光明を差し抱かせる。

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。助かったらもう2度とお母さんの言う事を違えません。もうお母さんの言う事を聞き逃したりしません。お母さんに頼いだなんて言いません。だからどうかどうかどうか私の身体をあそこに届かせて。始祖様ブリミル様。私はいままで傲慢でした。敬虔ではありませんでした。あなた様を馬鹿にしていました。古臭いモノだと思っていました。ごめんなさい。もう2度とそんなことを思いません。あそこにたどり着いたら始祖様の敬虔な使徒になります。間違いありません。毎日3度の祈りを欠かしません。お供え物も奉じます。自分で用意します。自分でとりに行きます。人に任したりしません。そんな始祖様の大事な信望者になる予定の私を守ってくださいますね？

声を上げる。上げようとする。それは少女の心に射し込んだ、僅かな希望が少女を突き動かした無意識の衝動の結果だった。灯りが見えただけである。冷静な状態であれば少女自身であっても、自身の幼い身体が発する声では、例えそれが、限界を超えよと発せられた力の限りの結果であったとしても、誰にも届く事のない無意味な音声であると知るだろう。少女の幼い体軀では未だ、灯りの点る世界は絶望感を抱かせるに足る距離があった。

しかし、少女は冷静ではなかった。冷静とは程遠い世界にあった。肺にある酸素を全て使い尽くしたかのような苦しみを耐えて、力を搾り出して、声と共に血も吐けよと、12年ほどの人生の中で今、少女が経験した最大の努力と勇気を振り絞って、叫び声を口から突き出した。

例え無意味であつても、今の少女は、それをなさざるを得なかった。そしてそれは、確かに無意味であつた。

「……い……!!」

!?

声は出なかった。

違う。

声は出た。

確かに声を出した。

しかし、音にならなかった。

空気が咽喉を震わせた。

唇を撫でた。

間違いなく自分の身体から空気が外に噴出した。

それは「声」という形を成すはずだった。

だが「声」にならなかった。

わずか、口から数サントの位置にある自らの耳に届かなかった。

そんな馬鹿な!!

必死に叫ぶ。つばが飛び、暗闇に吸い込まれる。千切れよとばかりに四肢を振って地面をのたくる。強いストレスに晒された少女は、冷

静を欠き、視野狭窄に陥った思考が「立ち上がる」動作を忘れ、自分は地を這うのが常態の生き物なのだとはかりに、地面を這う。

叫ぶ。喚く。怒鳴る。

声にならない。

そんなはずはない。

声が聞こえない。

そんなことはない。

ありえないありえないありえない。

自分の身体だ。自分の身体なんだ。自分が一番良く知っている。何をして何をやってもどう動くかは一番に自分が知っている道具なのだ。ありえない。

ありえない！

少女の身体が唐突に地面から遠ざかった。急に空中を舞った感覚に、少女の混乱した意識が更に掻き乱された。刹那、視界が朱に染まる。少女は首に強い圧迫感を感じた。

なんなのこれ!?

知らない。

こんな感覚は知らない。

そんな経験をしたことがない。

なんなのこれ!!

畏にかかった小動物のように四肢を振り回して、宙を切り裂く少女自身の身体の先に、男の姿があった。

今の今まで、自分が振り切ろうとした、逃げ出そうとした、あの「モノ」がそこにある！

「……………」

少女は腕を滅茶苦茶に振り回して身体を振る。

しかし、少女が全力を振り絞ったその抵抗はだが、あまりにも弱い。体格が違いすぎる。そも、力が違いすぎる。

伸ばされた男の腕の先、その手に握られた少女の首から、宙に位置を固定する少女の身体から、男の身体までは絶望的に距離があった。気がつけない。理解できない。自身の身体の状態を認識できない

少女は、ただただ手を振り回す。

男は手を緩めない。激しく揺れる、それなり以上の重量を持つ、生きた存在の動きにも微動だにしない。

その異常性に少女は理解が及ばない。

必死の抵抗を続けて身体を震わせる少女の視界の先に、男の顔があった。

無表情。

口が開いている。でも、それは開いているだけ。そこに表情は何もない。

アレキサンドル。

彼の名前だ。

数ヶ月前に、村の片隅に住み着いた占い師のおばあさんの息子。

丸太でも一人で担いで歩ける、身体が大きくて、でも、ちよつとぼんやりした雰囲気を持つ人。

周囲の大人たちは、彼を遠ざけていた。

よそ者だからと決め付けて、敬遠していた。

そんなことはない。

薪割りを手伝ってくれた良い人。

割った薪を運んでくれた良い人。

水を運んでくれた良い人。

鳥の血抜きを手伝ってくれた良い人。

畑の石除けを手伝ってくれた良い人。

その顔が無表情に自分を見ている。

そんなはずはない。

彼は、苦い思いを乗せた笑みを隠しきれずに、どこか困ったような風で、自分に野いちごのなる場所を教えなくて頼んだ。おとなりのジヨセツトさんが籠いっぱい野いちごを井戸から引き上げて、裏庭でへたをむしっていたのを見かけたのだという。

彼は、それを見て、寝たきりでベットの从上から動けないおばあさんに、それを与えたいのだと、はにかんだ表情で言った。

少女は思ったのだ。

やっぱりそうなんだ。

この人は良い人。

おばあさんを思う良い人。

おばあさんにおいしいものを食べさせてあげたい良い人。

でもみんな無視する。

みんな遠巻きに見るばかりで、近づけば逃げ出す。

だから彼は私に近づくしかなかった。

しかたがないじゃない。

私しか頼れないんだから。

幼少期の子供が、不意に頼られて、自身が人の役に立つのだと告げられて、突如として自己の存在意義を見出して、その場の全てをなげうって使命感に燃える、あの感覚が少女を撃った。

今の今まで与えられるだけの人生で、唐突に訪れた、自身が誰かに何かを与えられるかもしれないという直感。

その誘惑を振り切れる者は少ない。それを無視できる者は殆どいない。

自身の存在が無意味ではないと知る瞬間。

そのチャンスを見棄てられる者は余程にすれた心根の者だろう。

ましてや良い人。

なのに、周囲から孤立し、悪く言われている人。

でも少女は知っている。

彼は良い人。

少女しか知らない。

彼は良い人だった。

その自身が知り、他は知らない事実を少女のみが独占しているのだと言う「事実」。その優越感もまた少女を強く後押しした。

彼女は少女だった。人並みの子供だったのだ。

しかし、その「ヒト」は夜の帳が近づき、夕闇が大地を覆い隠そうとしたその刹那に豹変した。

突如として何かに入れ替わった。

ただ何の意味もなく開け放たれた口から見える牙。

「ヒト」ではない。

「ヒト」のほがさない！

少女は暴れる。手を振り回す。足を蹴り上げる。届かない。

1メートルほどの距離が絶望的に広い。

足の下、同じく1メートルほどの距離が銷魂するほどに遠い。

ヒトとしての存念が砕ける。砕けかける。ヒトとしての意識が揺らぐ。

狼狽。

恐怖。

戦慄。

恐慌。

少女の心を傷め続けてきた感情が少女の思考の一線を破碎しようとしている。

刹那、少女は猛烈な眠気に襲われた。追い詰められて心乱す少女は、その感覚を理解することは出来なかった。ただ、眠気に誘われて、自身の身体の反応にも理解を示すことのないまま、動転した視界を薄れさせて意識を霞ませた。

空気に融けていくような感覚の先に、囁きが届く。

もはやヒトとしての感情を保ってはいられない少女は、ただその言葉を耳にしたただけだった。言葉であることも理解し得なかった。唯の音であった。それだけだった。それが彼女の人生における、最後の外的刺激の一端であった。

「あなたが摘んだいちごを添えて、あなたを食べてあげるね」

ヨランド。享年12歳。肩まで伸びた金髪と、年のころの割りには大きいと称された体躯が目立つ、だが人並みの少女だった。

とつてもいい子だったんですよ。

村人による言葉ではそうであった。

母親の言うところ、少し、早熟で、他の子供より聡明だったという。ヨランドの事を問われたその母は、それを否定しなかった。周囲はそれを覚えていた。ヨランドとその母、ビゼットは、12歳と28歳と

いう組み合わせを超えて、娘と母という立場を超越したところで、なお、家族であった。

それが村人の記憶に残る2人のあり方だった。

その態度がヨランダの行動にいかなる影響を与えたかについては確かめる術がない。

残されていたのはヒトだった物の残滓。

ひび割れた体表を晒して、乾燥して色を失い、体積を大いに減じて、衣服を身にするが故に辛うじて人間であったと人々に思わせる程度の姿を残していた。

その上のほうに、触れただけで折れてしまいそうな細い首の上に、落ち窪んで澱んだ眼、沈み込んだ鼻、割れて裂けた唇、むき出しになった白い歯。

それは、口の中でむき出しになっているわけではなかった。そのほとんどが地面にばら撒かれてむき出しになっていた。唇の奥で萎びた歯茎に僅かな数だけがすがり付いていた。赤黒く変色した舌が奇妙に膨れて、口から突き出されている。なぜだかそこだけが奇妙に瑞々しかった。

痩せこけたのだという表現では到底足りそうにない輪郭を表す顔。抜け落ちた髪の毛が風に舞う。それが大地に列を成して滑る姿だけが、生前の快活としたヨランダの残影だった。大地に力なく投げ出されたその遺骸を眼にしてビゼットの心は碎け散った。

ヨランダの心はヒトとしての最後の一线に踏みとどまって、ヒトとしての生涯を終えた。

多分に偶然であつたらうが、彼女はヒトとして死んだ。

残された女は、ビゼットはヒトとしての姿を保ったままヒトであり続けることを諦めた。

残された結果は残酷で、余りにも辛辣な皮肉であつた。

タバサの冒険 / タバサと吸血鬼と (2)

陽光に照らされて、基本を青に、しかし、角度によって虹色とも取れる複雑な輝きで世界を照らして、シルフィードという風韻龍が空を切り裂く。真大気速度、時速800リーグという、恐らくは彼女を中心とした周囲数百リーグ以内で空を飛ぶモノとして、もつとも速い存在だった。

その彼女は、自身の背に乗せた少女の姿をちらと見上げた。

タバサ。

偽名で飾られた自身の主人。

シルフィードの広い背中に胡坐をかいて、足の上に本を広げている。

地上では絶対に得ることが出来ない、きらきらとした輝きの太陽に照らされた青い髪が、通常の人生を送る人間であれば見ることもかなわない濃い群青の空に混ざる。シルフィードの遮蔽フィールドを越えて耳朵を打つ風に巻く、鮮やかな青。

シルフィードの持つ能力を駆使すれば、完全に遮断できるはずの空気が、主の身体をなでている。

過去にそのほうが都合が良からうと空気の流れを完全に遮ったところ、青い顔を見せたタバサに杖で頭を何度も殴られた。だから、背にヒトを乗せるときは、ある程度の空気の流れを残す必要があると知ったシルフィードだった。

今、タバサは、深く透き通った湖の底を思わせる青を湛えた瞳を本に落としている。微妙な仕草で視線が文字を追っていることがシルフィードには見て取れた。

その瞳は青。どこまでも深い蒼色。僅かな揺らぎも見せない、地中の奥底に隠された湖で見ることが出来て初めて納得を得るであろう静謐さを備えた蒼だった。

タバサ。明らかな偽名を奉じた名。

ガリアの北シルヴァリエド・ノールバルテール花壇騎士、タバサである。

今シルフィードが翔る空は、対地高度10000メートル。ドラグーンはもとより、飛行船も飛空船も滅多に現れることがない孤高の世界だ。なんの対策もなく人がこの場に投げ出されては、数瞬の猶予なく意識を混濁させるような、そんな場所だ。

シルフィードであるから、シルフィードと共にあるから、そこにあることが許される世界だった。

シルフィードは遮蔽フィールドを持って空気の流れを遮断するだけでなく、自身の前で吹き付ける風を圧縮して、その結果として熱くなつたそれをシルフィード自身の周囲で外気に晒して回し滑らせ、最後に自身の首筋に送って噴出すという面倒な行為を行っていた。

高いところを飛ぶことでヒトが意識を朦朧とさせてしまうことに、シルフィードはタバサを背にして初めて知ったことだったが、それが空気が足りないがゆえと気が付いて自身の創意工夫で自分の背中に快適空間を現出させたのは、シルフィード個人の好意だった。

どう説明して良いのかシルフィードには説明の余地が無かつたから、高高度飛行に身構えたタバサも、2度目以降で快適な空の旅を得て不思議に思ったが、それに納得のいく理由を得られなかった。シルフィードが人に説明しようにも、人間の言葉の語彙が少な過ぎてうまく説明が出来なかつたのだ。

ただ、タバサにとってシルフィードがかけがえのないパートナーなのだという確信を深める役目だけを担った結果だった。

両翼20メートルになる細くも長く柔軟な翼をゆつくりと傾けて、5メートルほどの尻尾と首を慎重に揺らせて方向を定める。

気圧のわだかまりや澱みの結果として湧きあがる風や雲は滅多にこの高度に姿を見せない。この孤独な世界を突き破る雲は、そうであるが故に強力で狂乱だが、シルフィードの尋常ではない視力がそういった擾乱を遠くで捉えて慎重に避けて飛ぶ。

更に上、数千メートルの幅で、渦巻く東へ向く風の流れがあり、季節や、下の天気に影響されて、下に降りて来たりする事があるが、今の周辺状況は、シルフィードにとっても快適そのもの。

何にも邪魔されない世界がどこまでもどこまでも広がっている。

その空を翔け、一騎と一人は、シユヴァリエ・ド・ノールバルテール北花壇騎士としてのあり方を満たすために、ファン・バツティスタ・アントネジ宮殿を目指していた。

秘密を是とするそのあり方からすれば、いかなるものの目に付くこともない1000000メートルという世界は、まったくの都合の良い領域であった。

沈黙。

びようと耳を打つ風。

世界を見るために必要な情報。

視界に映る物も、耳に入る物も、肌に触れる物も、肌を感じる熱も、肌を打つ感覚も、世界を知るにはすべてが必要で無駄がない。

だからタバサの身体を痛めることなく、自身の首のみを遮蔽フィールドの外に突き出して世界を見る。

自身を守るべき存在であるタバサ。それが自身の背にある限りは、安寧を献げてその心を穏やかに。そのあり方に特殊性があると、竜のあり方からであつても感じる事が出来るタバサを、せめて自分の背にあるうちは安心と安穩に包まれるように。

いじらしい配慮の様がシルフィードのタバサに対する心根のあり方だつた。

しかし、沈黙。

耳鳴りを覚えるかのような静寂。

シルフィード自身を打つ轟音は、しかし、唯の自然の咆哮であつて、気にする必要も無い。

自身の今のあり方からすればそうなつて当たり前前の自然であつて、危険ではない。唯の情報。邪魔ではない。

今シルフィードを打つ由々しい事態は、その心を苛む閑暇。

暇なのだ。

人の世に現れて出でて、自身の知らぬ世界で自分達とは違う存在と話す新たな世界。

こんな経験は風韻龍の中でもここ数百年来、シルフィードにだけ与えられた特権だつた。

知らない、見たことの無い世界。

それと共に歩むヒト。

しゃべりたい。話したい。コミュニケーションをとりたい。

タバサ。

黙りこくっているだけでは余りにもモツタイナイ！

よってタバサの耳にうっとおしくはならない程度の音声で届くように注意深く調整された声をシルフィードは発した。

「お姉さまお姉さま。シルフィのお相手をして。シルフィと話しましょう。きゅいきゅい！」

その恐ろしげな顔からは似合わない、その体軀からも似合わない甲高い声を発して、シルフィードはタバサにねだる。

しかし、タバサの視線はその足元に広げられた本から動かない。視線がページの中を踊っている。時折風の悪戯で、ページが捲り上げられそうになるのにさっと反応して、右手が動く。

何とかタバサの気を引こうとしたシルフィードは、自身の遮蔽フィールドを弄って悪戯をしようかと思いつき、刹那、首をぶんぶん振ってその考えを押しつけた。

フィールド内部に空気を送ることをやめればたちまちご主人様は意識を失ってしまうだろう。この暴虐の世界は空気が足りないだけでなく湿度も低く、圧力も低い。

意識がなくなるだけならともかく、鼻血を噴出したりメンタマが飛び出したりしたら大惨事だ。干からびた死体を乗せて地面を目指すなんて真つ平なシルフィードは一瞬でも恐ろしいことを考えた自分が許せなくて瞳に涙を滲ませた。

メンタマがーとか干からびちゃったなんていうのはシルフィードの考え過ぎであったが、彼女の一瞬の激しい動きは凶らずもタバサの意識をシルフィードに向けさせることになった。

「なにっ？」

数瞬の恐慌を押しやって、タバサが意識の向きを変えたことに無邪気に喜びを感じて、シルフィードは刹那に思いついた、ここ数日思い悩むことを隠すことなく喚いた。思慮深いのか抜けているのか判断

しかねる反応だった。

「ねえお姉さま。ヴァリエールのおちびが呼び出したアレはすごかったのね！アレはちよつとないのね！きつとすぐ格の高い精霊様なのね！」

突然ありえない拝察の混じった意味を推測しかねる科白がシルフィードから飛び出して、タバサは僅かに眼を見開いて身体を反らせた。

「どういふこと？」

シルフィードは目を細めて尻尾をぶんぶん振る。空気の薄い高空で急激な動きが空気を掻き乱してシルフィードの体勢を崩したが、無意識で操られる風の力がシルフィードを支える。そうでなかったら失速していただろう。

その「些細な」事実を無視してシルフィードは、自身がイングリッドと言う存在に対して感じた、感じ取った特異性を思いつくままに喚きたてる。

「あれは太陽よね！お日様の精霊ね！きつと！」

あんな小さな身体にあんなに大きな力を溜め込んで、その、すごい
のね！

あれはないのね！人間ではないのね！竜でもあれは真似できない
のね！」

タバサは小さく眼を見開いた。自身の膝の上に開かれた本のページを右手で抑える。

それ自体には何の意味も持たない行為だったが、タバサが思考を弄ぶ上ではそれは必要な行為だった。

タバサは膝の上に本を広げていた。それは間違いではなかった。確かにシルフィードが見たとおり、タバサは本を広げていたし、そこに書かれた文字を視線で追っていた。

追っていただけだった。

実際にはそこにある文字情報はタバサの頭に入ってきてはいなかった。ただ追っていただけだった。

ここ数日来、タバサを悩ませる問題が、彼女をしてシルフィードの

上で無為な行為を強要していた。

実は、タバサはシルフィードが自身も知らない何某かの能力を發揮して、タバサ自身の思考を読んだのかとすら思った。

実際問題として、タバサは確かにそのとき、シルフィードが話を振った対象そのもの——つまりイングリッドと言う存在に対して思考を飛ばしていた。

しかし、タバサはシルフィードに答えを返さない。シルフィードの問いに応えない。

タバサは自身の悩みに対して、僅かばかりの情報の追加と、更なる困惑が加わった事に嘆息して、黙りこくった。埒の明かない悩みに、ひとまずの打ち切りを宣言する。彼女の内心のみで。

現に、イングリッドの存在はありとあらゆる意味でイレギュラーだった。

最初に現れて出でて、そのときその瞬間。タバサは即座にイングリッドの存在に警戒した。警戒せざるを得なかった。他でもない。シルフィードが大きな困惑と、その後には警戒を抱いたのだから。

しかし、タバサにはイングリッドを測る材料が乏しかった。だからと言って無視して捨てるにはイングリッドの存在は余りにも大きかった。だから積極的に関わろうとした。関わるより仕方がなかった。

無視して存在を脇に追いやり、そうして自身のあずかり知らぬところで何を成すというのか。それを想像すると、わからないままに捨て置くことも、それに対して意識をそらす事も難しかった。無関心でいられない存在だった。

で、あるならば判らないなりに近くにあつて、途切れず観察を続ける事。それくらいしか解決法を思い浮かばなかった。

その結論にタバサは歯噛みする。

その中途半端な解決は、実に自身の無能さ、或いは経験不足を自覚させる。所詮自身がひ若い存在である事を認識させる。

仕方が無かった。事実としてタバサには経験が足らなかった。

シルフィードが看破した様な、或いは特殊能力があり、それによつ

てイングリッドの特殊性を能力として知りえることが出来るのだとしても、それを実際に生かすには経験に裏打ちされた推測を導き出す必要があった。それがしてしかし、イングリッドがタバサの目的を邪魔する存在であるか、或いは路傍の石となるかの推定につながるまでは、タバサにも理解できた。

理解できただけだった。

タバサが理解に及んだのはイングリッドを分析する上での前提条件であり、イングリッドそのものに対する考察の段に進めなかった。

自身の足りない部分をシルフィードが補ってくれている。事実、タバサがイングリッドに対して警戒を表せたのはまごう事なきシルフィードからの警告であったし、今またここで、更なる情報の追加があった。

情報だけだった。

分析したわけではなかった。分析作業に入れなかった。

イングリッドの存在がイレギュラーすぎて、果たしてどこからイングリッドに対する考察を進めて良いか。その部分からしてタバサにはわからなかった。よって、タバサは件の少女についての思考をペンディングするしかなかった。

だからタバサは膝の上に広げられた本に対して本格的に意識を向けて、それを読み込むことに集中する事にした。

シルフィードの鋭い感覚——能力は、タバサが激しい反応を何とか押し隠したのだと言う残滓を、鋭く見抜いていた。

しかしそこでもまた見抜いただけで終わっていた。

情報をヒトの身あらざる故に、鋭く、細かく、深く知る事のできるシルフィードはさすがはドラゴンの端くれと言わなければならないが、なにしろシルフィードも若かった。経験が足りないのだ。

無意味な情報の乱出を受け止め、それを情報として溜め込み、そしてそれだけだった。

ドラゴンであるが故の能力から得られる情報は、人間から見れば情報の洪水としかいえないものだった。それを受け止め、記憶する事がシルフィードには出来た。さすがはドラゴンと言わなければならない。

それで終わってしまった。

洪水として流れ込む情報から有為なデータを引き出すことがシルフィードには出来なかった。ましてやそれを咀嚼して次の行動に……この場合はタバサに相對するときの「態度」に生かすことが出来ないで居た。

シルフィードもまたひ若い存在でしかなかったのだ。

よって刹那の疑問を話題としてあげて、声に出す以外に方法がなかった。

「ねえ、お姉さま。何の本を読んでいるのかしら？」

タバサはその声に、僅かな溜息を付いて眼を細め、数瞬の躊躇の後に、本の端をつかんでひっくり返し、表紙をシルフィードに向けた。

『ハルケギニアの暗部に巢食う魔物——吸血鬼に対する考察とその実例』？まあ恐いわ。もしかしてもしかしなくても、お姉さまの次に相手にするのは吸血鬼なの？なの？」

見せ付けられた表紙から得られた情報に、少なくともはないタバサとの「任務」の記憶を照らし合わせてシルフィードは狼狽に身を揺らせた。任務の内容とその結末を見た記憶。そこから推測すれば、次に激突する相手が吸血鬼であることは明確だった。

極端に無駄を省くのがシルフィードの主の常なる態度である。そうであるならば、ガリアへ向かう道すがら読む本が唯の暇つぶしであろう筈もない。と、なれば。

確かにシルフィードはひ若い。経験が足りない。人間社会を共に生きる上での経験は決定的に少ない。しかし、極僅かな経験からでも、自身の推測できる範囲内から推測すべき情報を得ることは出来た。それぐらい程にはシルフィードは優秀であった。

タバサは今度はシルフィードの問いに端的に応えた。頷いたのだった。

タバサの従姉妹であり、現在ガリアの王位継承順位筆頭であり、現状、北花壇護衛騎士団の団長たるイザベラから届けられた手紙には、珍しくも討伐対象が特定されていたのだ。

「吸血鬼は危険な相手ですわお姉さま！陽光に弱いことを除けば、お

姉さま達と見分けがつかないし。

先住の魔法は使うし！

きゅいきゅい！怖い！怖いわ！」

そうやって喚いて身を震わせるシルフィードの首を眺めてしかし、タバサが同様に身をやつす事はなかった。じつと手元の本に視線を落とすばかり。

「吸血鬼は本当に危ない奴なんですよ、お姉さま！血を吸った相手を手足のように思うが仮に操るって言うし！」

視線を本に落としたままタバサは眼を細めた。

そうなのだ。

確かに本にはそう書かれている。

メイジが一つ、使い魔を使役できるのと同様、吸血鬼は血を吸った相手を一人、屍人鬼^{グール}として操る事ができるのだ。膝の上にある本のみならず、過去にタバサが読み込んだ本についても同様の既述があったことを思い出す。そういった屍人鬼を使役して巧妙に立ち回り、自身の招待を明かさぬままに街ひとつを滅ぼした例すらハルケギニアの過去の歴史に残っている。シルフィードに言われるまでもなく危険極まりない相手なのだ。

「お姉さまが幾らお姉さまでも大変だわ！危ないの！吸血鬼は冷酷で残忍なやつなの！きゅい！」

シルフィードはそうやって喚き、騒いだがしかし、タバサはなおも黙りこくっていた。ただ静かに本をめくるだけだった。

使い魔の日常

初めてのお出かけ（1）

ハルケギニア暦 — 5996年

フェオの月 / ハイムダルの週 / イングの曜日

今日、イングリッドの身の回りの品を買い求める予定であったことは、ルイズの脳裏から綺麗さっぱり失われていた。

まあ、無理からぬことと言えなくもない。

ルイズが遭遇した出来事は、激動の日々が始まったその最初の4日間。イングリッドを核として余りにも激しい有為転変だった。始まりの日々と言い換えてもよさそうな4日間。その最後の1日に起きた出来事は、その発端がイングリッドにあったとはいえ、それがルイズに対して、そしてルイズの周辺に対して招来した結末は斜め上過ぎた。ハルケギニアの当事者にとってそうであったし、もう片方の当事者たるイングリッドに対してもそうであった。

最後に突きつけられた現実。その結果。その後の数時間。ベットの縁に腰掛けたルイズは寝入るそのときまで腑抜け同然だった。

イングリッドにはそれを捨て置くという選択肢は無かった。反応の薄いルイズを必死で御して、着替えさせたり、身体を拭いたり、髪を梳いたり、トイレに引っ張ったりと忙しかった。イングリッドが気がつかぬ内に、メイドのレンを呼んで軽食を持ってこさせたのはキュルケであったし、ルイズに無理やり食事を採らせたのもイングリッドとキュルケの共同作業だった。

腫れて酷い見た目になったルイズの顔を、どうにか見れるように治めたのもキュルケだった。

ルイズの顔を揉んだり、冷水で拭いたりと手際よく世話を焼くキュルケの姿はイングリッドも感嘆仕切りで、イングリッドはその自

身の長い経験の中に存在しようのない「他人の面倒を見る行為」を一生懸命になって記憶に焼け付けた。これから必要になることが確定的であったからである。

スタンダードアローンである事が日常だったイングリッドには、ハルケギニアで訪れた新たな日常生活をこなす上で、そういったキュルケの姿を見ることは貴重な時間だった。

その数時間。イングリッドがキュルケを認識して僅かに1日弱という時間だったが、妙に2人の距離が縮まった思わせる時間だった。目を覚まして一応の元気を取り戻した様に見えるルイズだったが、イングリッドが忙しく動き回らなければならぬ事に関わりなかった。

表情のみを見れば普段通りを装っていたが、のろのろとして心ここにあらずという雰囲気をかもし出されては仕方がなかった。

肩を落としたイングリッドは、ルイズの服を着替えさせて、洗面所に押し込んで顔を洗わせて、尻を押し移動し、朝食を採り……。しかし、部屋に戻ってようやくの事で能動的に動き出したと思えば、そのそと勉強道具を取り出したルイズの姿を見て、流石にイングリッドも呆れて声を上げざるを得なかった。

「今日は買い物に行く日ではなかったのかや、ルイズよ」

一瞬呆けて、刹那、首を傾げ。次いで、ようやくの事で自身の宣言を思い出したルイズは、さっと顔を青く染めて、ゆっくりとイングリッドに振り向いた。

ルイズのかくかくとして角のある動きは、それを眺めるイングリッドには出来の良い操り人形を思わせた。首を竦めているのが減点ではあったが。

「え……、その……、あの……」

あああうと口をパクパクさせるルイズに溜息を一つ吐いたイングリッドが、次いでニヤリと笑いかけ、扉に触れると、扉は内側に向かって口を開いた。

姿を現した廊下には、廊下を照らす淡い光を背に、腕を組んで呆れた表情を浮かべたキュルケが立っていた。

右手に持った紙をひらひらさせながら、ゆっくりとルイズに歩み寄り、キュルケはその紙をルイズに突きつけた。

無意識にそれを受け取ったルイズは、そこに書かれている文字を読んで小さく驚く。

「外出許可書……？」

ルイズの眩きを耳にしてイングリッドとキュルケは顔を見合わせる。イングリッドは腰に手をやって、かすかに笑いながらルイズを見やりつつ肩を竦めた。キュルケは深い溜息を吐いて、肩を落とした。「買い物行くて、さ。昨日、言つてたじゃない。オスマンに申し出ておいたのよ」

呆けた顔のルイズに近寄ったキュルケは、腰を折って顔を近づけると、やにわにその両頬をつまんで引つ張った。

「貸し、だからね」

「へむへむ」と声を上げて力なく抗議するルイズから書類をもぎ取ったイングリッドは、三つ折にされた書類の冒頭部分を読んで納得し、次いで書類を広げてそこに書かれた文章を読みこんで小さく驚嘆した。

「ダエグの曜日まで自由に学院を出入りすることを許す？ トリスタニアであれば外泊も許可する……」

その他の場所で外泊する場合は別途許可を申請すること。

……イングリッドの身の回り品については学院の名前を持ってバンカーズ・チェックを切って良い。常識の範囲内と認められる限りに於いては上限を設けない……なんだこれわ」

最後の部分を読み上げるとともに首を捻りながら顔を上げたイングリッドの姿に「いつ」と変な声を上げてキュルケが肩を竦ませる。その瞬間に力が抜けたのか、ルイズはキュルケの手を振り払って部屋の隅に逃げた。

イングリッドがじつとりとした目線でキュルケを睨みながら書類の続きを読み上げる。

「この書類の効力の及ぶところは以下の者である。

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールとそ

の使い魔、イングリッド

キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエル
プストー

タバサ

書類に疑念のあるところは、直ちにオールド・オスマンに確認すること」

イングリッドは書類を右手に持ったまま、両手を振り仰ぐと溜息を吐いて、表情を引き締めた。キュルケの顔を仰ぎ見るように、やや見上げた視線をぶつけながら、キュルケを大きく避けるようにして部屋の中央に置かれたテーブルを避けてルイズに歩み寄り、手にした書類を広げたままの状態の手渡す。

引つ手繰る様にしてそれを手にしたルイズは、眼を皿にして書類に視線を這わせる。

「……なによこれ。ななななな、なによこれっ！ずいぶんなことが書いてあるじゃない！」

斜めに傾いだ体の上で、更に傾いだ顔をキュルケに向けて。左腕を身体に沿わせてぶら下げて、右手を上に向けて肩を竦めたイングリッド。ジト目を崩せない。ため息というか、感嘆というか、イングリッドの鼻から何かが漏れた。

「えらく奢ったものよの。随分と筆つたではないか、キュルケよ」

「え、え、え」と、変な声を上げてきよときよと顔を動かすキュルケ。腰が引けて、首が竦められている。

「えーと、イングリッドでは、文字が読めないんじゃないの？」

その言葉を受けてルイズとイングリッドは首を傾げて向き合い、疑問符を飛ばしながら再度、キュルケに視線を向けた。

「何でそんな勘違いをするんじゃない？」

純粹に疑問を浮かべて首を傾げるイングリッドに、汗を流したキュルケが両手のひらを振って弁解する。

「え……その、お金の使い方が判らないって言うし、その、なんか、常識に通じてないって言うか……アレ？」

滑稽なほどに顔色を激しく変遷させるキュルケを見て、「ぶっ」とい

ささか下品な噴出し笑いを同時に放って、2人は顔を見合わせ、今度は大きく笑った。

「イングリッドを出汁に、適当にサボったり買い物したりするつもりだったのキュルケ？ここに書かれたことはどう誤魔化す気だったのよ！」

腰を落として後ずさりしながら、両手を身体の前で振って冷や汗を流すキュルケだった。あっという間に壁に追い詰められた。別に誰かが迫っている訳ではなかったのだが。

「あははー、そのね。外出許可のところだけ見せて、すぐに取り上げれば、ごまかせるかなー、なんて」

そこに何かを感じたイングリッドは素早くキュルケに近寄り、その身体を上から下まで視線を這わせると、一つ納得して、刹那の躊躇いも無くそこにある豊満な胸元に自身の腕を突っ込んだ。

「あ、だめーいやーん」

胸元から数十枚が束になった小切手が顔を見せた。それをイングリッドはルイズに向けて投げ渡す。

ルイズはそれに学院の紋章が描かれていることを確認した。裏紙にはオスマンの手書きのサインが記されていることも確認した。ぱらぱらとめくると、一々ご苦労なことに、金額欄が白紙のままであるにもかかわらず、全てにオスマンのサインと捨印が押されて、ちゃんと未決サインと保障サイン、有効期限を保障するサインまで間違いなく記されていた。ざっと見て30枚はある。それら全てに流麗な文字が躍っている。まったくもって準備万端になっていることがわかった。

俄かに眩暈を覚えたルイズは瞳を震わせながら大きく振りかぶってその小切手の束を振り上げると、勢いよく机に叩きつける。

「却下よ却下！イングリッドの持ち物は全部っ！私自身がつ！支払うわ!!」

「えー」と不満げな顔を隠さないキュルケは机の上に投げ出された小切手に手を伸ばしたが、ルイズは素早くそれを取り上げて振り回した。

「自身の使い魔を世話するのに、人の施しなんていらぬわよ!!」

「うがー」と歯を見せて威嚇するルイズを呆れた表情で見やるイングリッド。

肩を竦めて溜息を吐くキュルケはしかし、顔を上げると幾分か表情を真面目に取り繕って、更に言葉を連ねた。

「でもさ。武器を買うぐらいはさ、小切手を使わないとき、きつと足らなくなつちやうよ」

その言葉に首を捻って顔を見合わせるルイズとイングリッド。

目を細めながらイングリッドはキュルケのほうに振り返る。

「ん……確かに昨日、我に武器を持たせてみよとは言っておったが……。そんなに高価なものなのかや?」

後半の言葉をルイズに投げかけながら視線を戻したイングリッドだったが、そうして見たルイズの目は真ん丸く見開かれて、妙な強張りを持って口を一文字に閉じていた。

「……聞いておらなんだな、主よ」

「てへっー」とばかりに右手を頭にやるルイズの頭を、両手で乱暴にがしがしとまさぐるイングリッド。

2人のじゃれ合いを呆れた顔で見ながらキュルケは小さく溜息を吐くと、肩を竦めて両手を叩いた。

「はいはい。仲の良い事はわかったから、とりあえず準備をして、早く西門に向かいましょ」

互いに頭をまさぐりあいながら顔をキュルケに向ける2人。キュルケは口を引き攣らせた。

「タバサが先に行つて、シルフィードを用意しているわ。待たせちや悪いでしょ」

その言葉に顔を見合わせた2人は頷いて、次いで弾かれたように慌てて準備を始めた。

とはいっても、イングリッドは小切手を手にとって懐に入れれば準備完了だった。服装は完璧だった。一着しかない服を、パリツと着こなしていた。後はルイズの準備を手伝うばかりである。

ルイズは、イングリッドに手伝ってもらいつつ、制服の上からマン

トを背に身に付け、スカートの下、パンティの上からキュロットパンツを履く。ローファーを脱ぎ散らかして、外行きのブーツを引つ張り出す。イングリッドに支えてもらいながらそれに足を通そうとする。

かなり良い材質の革なので、紐を通したまま放置すればあつという間に「型」がついて見苦しくなりそうな、イングリッドが一見しても高価なブーツであった。非常に手入れがよくなされて、やわらかく柔軟に保たれていた。

グリスアップやシーリング、ブラッシングもルイズ自身が行っているのだろうか？イングリッドは微かな疑問を思っ首を捻る。

乗馬ブーツと遠歩きや山歩きを目的としたトレッキング・ブーツの合いの子という感じで、見た目よりも実用性を重視している形状であり、靴底が厚いのに持つてみると軽くて思わず肩透かしを食らってよろけたイングリッドだった。

ハイソックスに包まれたルイズの足に触れて持ち上げると、それが歳不相応に硬くて思った以上に大きかったことにイングリッドが気づく。その理由が思い浮かんだが慌てて振り払って、足を差し入れる。しかし、微妙にサイズアウトしているのに気がついてイングリッドはルイズを見上げた。ルイズも、指先が圧迫されているのに気がついたようだ。

「あー、入学のときに用意したものなのよ。最初の内はよく履いて外に出ていたんだけど。魔法実習が始まってからは……」

微妙な表情で目をそらすルイズ。要らんことを言わせてしまったと凹んだイングリッドだったが、とりあえず、ルイズに気が付かれないう様に指先に熱量を集めると、慎重に、だが素早く引き伸ばして形を整えた。その状態で一度、ルイズの足にブーツの先を強く押し付けて形を作り、次いで、強制的に熱を奪って形を固定した。

「どうじゃ？」

眼を真ん丸く見開いてルイズが見下ろす。ブーツに包まれた足を上下に振った。

「え……、なに？何をしたの??」

イングリッドはブーツを……ルイズの足をつかむと、先から揉み解

して徐々に上に向かって腕を動かしながらブーツ全体の形を整えた。
「これでよからう」

あっけに取られたルイズは信じられない思いで足を揺する。
「ぴったりだわ……」

腕を組んで指を揺らせていたキュルケが、疑問符を浮かべてルイズを見つめた。それに気がついたルイズがキュルケに視線をあわせて呆然と呟く。

「あわなくなっちゃったはずのブーツが……イングリッドが直しちゃった」

眉を上げてイングリッドの後姿を見つめるキュルケ。

イングリッドはもう半靴にルイズの足を納めて、同じように揉んでいた。傍からは揉んでいるだけにしか見えなかった。

「へえ？イングリッドって靴屋でもやっていたの」

すっかりと形を整えて満足したイングリッドは、靴紐を握って半瞬、手の中を滑らせた。それだけでアイロンが掛けられたように鈍い光沢が紐から漏れる。これにはキュルケもルイズも仰天した。

「なにをしたの……!?!」

ルイズが手を伸ばして紐を取ろうとしたが、イングリッドはそれを押し留めてさっさとブーツに紐を通し始めた。

「うむ。手入れがよいブーツじゃ。紐もグリスがよく乗っておるようじゃの」

手元を覗き込むキュルケの気配を無視してイングリッドはルイズのブーツに手早く紐を通す。片方に2本。全部で4本の紐が美しく編み上げられていく。指に圧力がかからないように、先端部をフットバックで通し、下から4つ目辺りからループバックで複雑な網目を作って両側を押しえつつ、きつくなり過ぎないようにしながら硬くとめるという、矛盾した、しかし合理的な形で固定した。

最後に見事な蝶結びを下向きに拵えて、強く抑えて捻ると、美しい結び目が現れた。

「どうじゃ」

表情を崩すことが出来ずに両足で立ったルイズが飛び跳ねると、結

び目が軽やかに舞った。

「すごい、すごいわ、イングリッド！完璧なはきごごちよ！」

膝を払いながら立ち上がったイングリッドは腕を組んでうんうんと頷いた。

「それは重畳」

はきごごちを確かめて満足したルイズが足を止めると、腰を落としたキュルケが好奇心を持ってブーツを撫で回した。首を捻りながら、イングリッドを見上げる。その視線の先には得意げに顎を挙げた顔の上で、細い眼がキュルケを見下ろしていた。

「はあー、すごいよね。私もブーツを治してもらおうかしら？」

その言葉に、やや不機嫌そうな表情を作ってイングリッドは言葉を返した。

「ルイズの足だから触れるんじや。他人の足等知らぬ」

そう言ってイングリッドはぶいと視線を反らした。その言葉にルイズはさつと顔を赤らめて顔を反らし、キュルケは立ち上がりつつ呆れて鼻を鳴らしてしまった。

気を取り直したルイズは、腰に巻かれた細くて光沢のあるベルトを引き抜き、外向けのいかにも頑丈そうなごつい見た目のベルトに付け替えて、ポーチを2つ取り付けてバックルでとめる。杖を治めるホルスターを右足の太ももにベルトで留めると、腰の後ろ側にシークレット・ホルスターを回して予備の杖を差し込んでカバーで覆い、ボタンで留める。

ハンカチにタオル、鼻紙を取り出して左側のポーチに押し込み、机の中から女子が持つには余りにも大きすぎる、凝った装飾を施された財布を取り出して、右側のポーチに押し込む。

引き出しを戻そうとして一瞬硬直し、思い直して再び開けると、ヴァリエール家の紋章が記された小切手を取り出してそれもポーチに投げ込んだ。

イングリッドの手を借りながら準備を続けるルイズを、呆れ顔で見ながらキュルケがぼやく。

「どれだけ買物する気よ……」

慌てて髪留めを前髪に差込み、伊達眼鏡を取り出して装着しながらルイズはキュルケに応える。

「一応よ、一応！ 備えあれば憂い無しよ！」

「はいはい……」

キュルケは肩を竦めた。イングリッドが苦笑いで応える。

そうしてからイングリッドはルイズに向き直って、やや表情を引き締めて尋ねた。

「で……だ。ダエグの曜日とはなんぞや」

キュルケもルイズも揃って肩を落とした。

準備を整えた3人は階段を降りながら、かしましく騒ぐ。

キュルケの横にフレイムの姿は無い。お留守番であった。寂しそうに顔を見上げるキュルケの使い魔の姿がイングリッドには心苦しかった。

「ハルケギニアの統一暦ではね、一年は384日、12ヶ月なの」

早足で階段を踏みしめ、ルイズがイングリッドに説明をしているのを見ながらキュルケはイングリッドの背中を見下ろしていた。

「ん、つまり、一ヶ月は32日と言う訳かや」

キュルケは小さく驚いた。その気配を察したのか、ルイズのほうに顔を向けていたイングリッドの視線がこちらを一瞬だけ向いて、すぐにルイズの方に戻った。

「大の月とか小の月なんていうのは……うむ。なさそうじゃの。なんでもないわ。忘れてくりやれ」

ルイズが首をかしげた。

「なにそれ……、何で一々さ、一ヶ月の日数を変える必要があるの？ そんなことをしたら日にちと曜日がずれるし、ややこしいじゃない」

イングリッドも驚く。2重の意味で驚いた。

「なんと！ ハルケギニアの一週間は8日間なのか！」

ルイズはその言葉を受けて再度驚く。キュルケは噴出しそうになった。忙しい2人だった。

「えー！一週間は8日でしょー！そうしないと曜日と日にちがずれちゃうじゃん！」

何故だか苦みばしった表情で、顔を顰めたイングリッドが視線を揺らす。

「あー、まあ、そうじゃよな……。一致しているほうが合理的よな……」

純粋な好奇心を乗せた視線をルイズから向けられたイングリッドは、首を竦めて右手で太陽のアンクルを撫でる。

「んー、私のいたところでは一週間は7日で、一ヶ月は30日と31日が交互に来ることが基本での。例外があるのじゃが、更にそれとは別に、まあ、日にちを調整する月があつてじゃな……」

首を捻ったルイズは、少し、ほんの少し考えた後、疑問を強めたような表情をイングリッドに向ける。

「イングリッドのところでは一年は13ヶ月なの？でも、そうすると、一回は18日間の一月になるわよね……。例外があつて、小の月？とかが続いても、余りうまくは調整出来なさそうだわ」

眉を跳ね上げたイングリッドは一瞬ルイズを見つめる。自然と足の動きが遅くなったがすぐに元に戻った。そんなイングリッドに訝しげな視線を送ったルイズの頭をイングリッドは撫でた。

「なによ」

突然にやさしく頭を撫でられたルイズは、僅かに頬を紅潮させてそっぽを向いた。ルイズの視線の先にはエレベーター・シャフトの外壁があつた。

「うむ。ルイズは頭が良いの」

その言葉でルイズは、瞬間的に激昂してイングリッドの腕を振り払い、イングリッドに飛び掛った。

「馬鹿にしているの！馬鹿にしているのね！算学も録に出来ないとか、子供じゃないんだから！そんなわけ無いじゃない！算学なんて出来て当たり前でしょー！」

予想以上に激しい反応を示したルイズの姿に泡を食ったイングリッドが慌ててなだめた。

「違う！すまぬ！言い方を違えた！」

壁に追い込まれたイングリッドは、両手を振ってキーキー言うルイズの肩を叩きながら弁解した。

「頭の回転が早い。そう言うべきじゃったな。すまぬ。要らん誤解を招いたのは私の落ち度じゃ」

一転してキョトンとした表情のルイズをイングリッドが冷や汗を流しながらなだめてすかす。

キュルケは苦笑いを隠せずに、ルイズの頭に手を乗せて、わしゃわしやと撫で付けた。ルイズは嫌そうに身じろぎして飛びのく。

階段の踏み代が広いのが幸いだった。普通の階段でそのような動作をすれば、ルイズは転げ落ちたであろう。無論、ルイズは足元の状況を理解した上でそういう動作をしたのだった。普通の階段であれば、ルイズはキュルケのなすがままだっただろう。キュルケは、それを残念に思った。

「はいはい、ルイズ。あんたもイングリッドを誤解させるようなことを言っちゃだめよ」

「むっ」とした表情を見せるルイズと、苦笑いするキュルケの間で視線を揺らしたイングリッドは、疑問符を浮かべてキュルケを見つめた。

「どういふことじゃ？」

再び階段を降りつつ、キュルケは説明した。

ハルケギニアでは算学どころか文字を読むことすら怪しい人間が山のようにいるという説明だった。

キュルケの故郷であるゲルマニアでは、貴族ですらそういった者が多いということだった。

その説明に、キュルケの予想に反して、何故かルイズが驚き、イングリッドが納得したように頷いていた。

イングリッドの反応にはキュルケも驚いたが、ルイズの反応に対しては、一瞬の驚きの後に、刹那の思考を経て納得した。

これは、ルイズの頭の中で「貴族」||「メイジ」という常識が抜き

がたい固定観念になっていることが影響している。

メイジがメイジであるためには、魔法を使えることが必須であることは言うまでも無い。

メイジが魔法を、人間として生まれた瞬間に、空気を吸うように、本能的に行使できるのであれば何の問題も無い。だが、無論のことそういうわけではない。魔法を使える能力というのは（ここに極めて稀な実例があるにせよ）メイジの先天的な特徴であるが、魔法を技術として行使できるようにするのは、後天的な努力の結果なのである。

つまりは、魔法を知り、魔法を学び、魔法を練習し、その上でようやく魔法の行使へと段を進められるということである。

その中で、1人の貴族がメイジへと足を進めるのに、別のメイジが1人、付きっ切りで教え込むのであれば問題は無いが、無論のこと、様々な理由によりそれは難しい。1人の熟成されたメイジは、メイジである以上は様々な仕事をこなして義務を果たさなければならぬ。暇なメイジ等ハルケギニアのどこを見渡しても存在しないと言っていい。例外の無い法則は無いが、それは置くとしても、そもそも、何をするにしてもメイジが手を出さないと何も進まない社会秩序が出来上がっているハルケギニアである。しかも、平民とメイジの人口比は極めて歪なのだ。平民の生活を円滑なさしめるには、メイジが走り回っている必要があった。

そうすると、1人のメイジを育て上げるのには、誰かが専属で教え込む以外の何らかの方策が必要になるわけで、その中で大きな比重を占めるのが書物ということになる。

6000年に渡るハルケギニアの歴史の中で、多くの人々によって研究熟成された魔法体系は、後代の者に伝える術として、当然のことながら書籍、書物という形をなした。そしてそれを円滑に使用する術として基本になるのは無論のこと、文字を読む能力に長じることである。つまり、ルイズの中では「貴族」||「メイジ」すなわち「文字を読む」という図式が完成する。

算学についても同じような図式が成り立つ。

魔法を行使するに当たっては、文字が読めることはまず持って、魔

法を学ぶための必須に近い手段であるが、算学は魔法を効率よく扱うに当たつての必要な技能となる。

例えば、威力を高めた攻撃魔法を扱うに当たつては、魔法は威力と射程距離のトレードオフが成り立つことが普通である。

必要十分の威力を維持しつつ、必要十分の射程距離を測るには、意外なほどに面倒なことであつて、無意識下で計算能力が活躍することになる。

自身の能力、その限界、その残量、その効率を定量化して、なおかつ、それらをバランスし、更に後刻の魔法行使の必要性を鑑みて、さらには、時間当たりの回復量も予想する必要がある。

仕事として魔法を行使するならばきわめて重要な技術である。この辺りをうまく計算できないと、やたらと疲れきつて、就業時間中に役立たずなメイジが寝つころがる事になるし、逆に行けば、力を出し惜しみるケチがいると後ろ指を刺されることになるだろう。

戦場でとなれば、開戦直後に力尽きた阿呆は、平民にすらずんばらりんされてお終いになるし、そんな馬鹿についてくる部下等いやしないだらう。だからといって、出し惜しみにしていいものでもなく、先を見通して、その場その場で出しうる限界を見極めつつ、許される最大威力を探り続ける事になる。戦場とは、優れた算学者のせめぎあいなのだ。

つまり、ルイズの中では「貴族」⇔「メイジ」すなわち「算学に長じた者」という図式が完成する。

この図式が実際に当てはまるのはトリステイン王国、ガリア王国、アルビオン王国の三ヶ国のみである。ロマリア連合皇国にもメイジは溢れているが、ここは宗教国家であるので、貴族がメイジである必要性は低い。寧ろ、貴族がメイジではないほうが都合がいいので、尚の事、いろいろな面で「ルイズの常識」が通用しがたい場所である。帝政ゲルマニアも含めて、他の国の貴族は存外に識字率は低いものなのである。

キュルケは寧ろ例外であり、通常の貴族に於いて最も重視されることは他人を顎で使う能力に長ける事なのだ。

メイジである貴族というのは、実のところ、他人が出来ない能力を持つているという一点で、自ら動き回り、力を発揮する必要があるわけで、真面目なメイジであればあるほど、領地を走り回る貴族という姿が出来上がる。そこに優雅さは無い。

三ヶ国の貴族こそが実は例外であって、ゲルマニア辺りの成金貴族から言わせると、領内を走り回って魔法を行使する貴族などは随分と泥臭いものだと言っている位なのだ。その辺りはゲルマニアからの留学生であるキュルケだからこそ理解できる感覚であり、始祖三ヶ国と他の国の貴族との間に横たわる埋め難い溝なのだ。

イングリッドの感覚からすれば、偉そうにふんぞり返って顎で人を使うのが常態の貴族像からすると、始祖三ヶ国の貴族は、やたらと勤勞な庶民の奉仕者ということになる。なかなか皮肉な情景だった。

算学についても同じ理屈が成り立つ。

数字をこねくり回して頭を悩ます貴族というのは、余りカッコいい物ではないという考え方がまかり通っている。

始祖三ヶ国ではメイジであるがゆえに算学に長じていることから、領地経営で必然的に発生する数字いじりを片手間に難なくこなせる事から、それほど不思議がられることも無い。だが、他の国に於いては、収入や支出の管理、そういった経済活動もろもろで起きる数字いじりというのは専門の官吏が扱うべき仕事なのだ。

分業として、職業の選択肢を増やし、職制を当てることで勤務箇所を増大させ、平民を引き上げる場として存外に必要な部分があるのだが、第一義には、貴族が扱う仕事としては華やかならざるという観念が強い。

地球の歴史でもそうなのだが、それが故に、貴族が平民出の下級官吏に出し抜かれて資産を横領されたりする事件の発生を招いたりするのだが、だからと言って始祖三ヶ国のように領地経営が厳密に貴族と平民の間で断絶してしまうと、そこに発生する意識の差異が抜き差しならぬところに進展して、平民の領民意識を減退させて無気力な国民を大量生産させることになり、ひいては国力の衰退に繋がることになるのだから話が難しい。

高度な算学を治めようと、文字を読む能力に長けて書類仕事が必要なようになるとうと、それらを生かす場所として頂点にある国政参加の道が無いとなれば、平民が学を修める動機を失わせることになる。国力の伸長というのは、貴族、平民の区別の無い、国民の就学力の高さとその結果が根本になるので、これが妨げられてしまう状況が放置されると、国家機能としては大変に不味い状況を招致しかねない。始祖三ヶ国で国力が衰微し続けているのは極めて当然の結果なのだ。

なお、地球における全般的な識字率の高さと言うのも実は大したことがない。地球世界では独立して、個人として生活可能な人間のほぼ全員が文字を書いて、文章を捏ね上げて、そして間違いなく読むことができる等と言うとんでもない国があるが、とびきり例外中の例外である。

所謂先進国であつても、識字率は9割を超えない。自分の名前を書ける。読める。程度でとどまっている人間が存外に多い。文章を読むことができるが文章を創り上げる事ができない、という部分まで区分を明確にすると、文章を創り上げる事が出来ない——つまり、報告書をテンプレなしに書き上げるとか、論文を書くとかが出来ない人間の比率はびつくり仰天するほど多くなって、極東の島国の国民ならば顎が外れる事になりかねない。

それくらいに世界と言うのは文字から縁遠い人々で溢れているのである。

数学にしてもそうである。

算数レベルまで敷衍を下げると、文字を読めない人よりもよほどに状況は改善するが、一次関数レベルで絶望的な谷間が広がったりする。多くの国では一次関数で既に（教育制度としての）数学のレベルに足を踏み込んでしまう場合があるのだ。対数関数以上は選ばれた人のみに許された世界である場合が多い。

ホワイトカラー製造機みたいな教育制度を曲がりなりにも維持できている国なんて少数派と言うよりはありえない奇跡とすら言い換えてよい。

そういう意味ではハルケギニアはイングリッドの見えるところ、地球に近い文化状況と見て取れると言えなくもない状況である。

何しろ地球では、生涯で最後まで読み終えた本が一冊しかないと言して憚らない大国の大統領と言う存在が許されているぐらいなのだ。ハルケギニアの情勢も、まあ、そんなもんかで済んでしまう。イングリッドの個人的感想ではあるが。

空を飛び交う生徒達を見上げながら、西門に向かって歩く3人の中で、想像もしたことも無い「常識」に触れて頭を悩ますルイズを眺めながら、キュルケも内心は疑問がいつぱいだっただ。

ルイズを慰めたり、ルイズの言葉に答えを返したりするイングリッドの姿が、イングリッドの能力が、よくわからない。

昨日の授業風景を思い浮かべれば、やたらと驚いたりしている姿を見て、常識が足りない田舎者と判断して納得しかねない部分がある。

しかし、外見を見ると、マントの有無こそあるが、その姿はその辺に転がっている有象無象よりもよほどの事、貴族らしくもある。

黙っていれば美少女と断じて良いイングリッドだが、人の容姿とはかなりの部分で生まれ瞬間に決まってしまうアンフェアな勝負事である。だが、そのスタートダッシュで得た馬身を生涯にわたって維持するのは存外に困難な事なんだろうという自覚がキュルケにはある。

ゲートを抜けた先で差をつけたことに安寧とすれば、ただ馬場を走るのみで草臥れる容姿が後方から迫る競り合い絡むことになる。ただ無策であれば、同じ時計を刻む馬場を走る以上は簡単に横に並ばれるのだ。

キュルケの見たところ、イングリッドの容姿は明らかに発走時から大きなアドヴァンテージがあるタイプであった。しかし、それを維持し続けることに費やされたムチはいかほどのものかとキュルケを悩ませる。

枝毛一つ見られない艶やかな髪。滑らかなで瑞々しい肌。引き締まってバランスのよい体躯。見る者を緊張させる程に均整のとれた容姿。どれもかしこも簡単に手に入れられるものでもないし、生まれ

た瞬間からそれを持っていたとしても、簡単に維持できるものでもない。

ほかならぬキュルケ自身が必死で悩み、苦しんでいる事なのだ。それをなすにはどれほどの財が、努力が必要なのかと、キュルケはイングリッドを斜めから見つめよう。つまり、キュルケの見立てたところ、ただその容姿だけでイングリッドが浅からぬ立場を持っているのではないかと推測させてしまう。キュルケならではの見立てである。

「美少女」であることを維持し、それを明日に残せる立場というのは、まさに貴族でもない限りは極めて困難な「個人的事業」なのだ。それがキュルケの納得するところである。

ルイズが今のところ、たいした努力も自覚も無く、悩むことなくその容姿を維持していることをキュルケが知ったのなら、キュルケは怒り狂っただろう。イングリッドに関して言えば、その辺りは余りにも人のあり方から外れている。キュルケのみならず、世の中の女性の9割ぐらいは、イングリッドにある真実に触れば、崖から身を投げかねない。イングリッドは「そういう方向から見ても」飛び切りのイレギュラーであるし、ルイズもまた「今のところは」イレギュラーだった。そして今のところは、キュルケはそれを知る立場に無い。幸運な事なんだろう。

キュルケがイングリッドの内面を探ろうと思いを走らせると、更に余計な混乱に見舞われてしまう。

まず、しゃべり方。

偉そうだ。

以上。

問題は、その偉そうなしゃべり方をして、なお、自然と受け入れてしまう雰囲気やイングリッドから濃密に漂っていることである。

オールド・オスマンとの間で交わされた茶番劇を省みると、現実にはあの「嘘」をあの場合でうっかりと納得し得るだけの説得力があった。それだけでは済まされない。しゃべり方のみならず、しゃべっている内容も、酷く説得力が合った。それはつまり、相当な知性をイングリッドから感じているということである。

先ほどの会話でキュルケは確信に至っていたのだが、実際にイングリッドは相当に頭がよかった。

384日で12ヶ月。そこから即座に一ヶ月を32日だと暗算していた。ルイズはそれが常識であるという部分から軽視したようだが、一ヶ月が30日であったり31日であったりする国の常識を持つた人間からすれば、そういった発想を持つには、当然のことながら計算するしかないわけであり、指も使わず、紙に書くこともなく、一瞬で計算してしまったイングリッドが唯の平民であるわけも無かった。キュルケの周りでも算学ができる事〓暗算ができる事、では無いのが普通なのだ。2桁以上の計算は紙に書いたり、地面を抉ったりしてようやく行え得る者が多い。この世界における算学というものは「通常は」、その程度なのだ。

イングリッドの発した僅かな言葉から、イングリッドにとっての常識たる暦を暗算したルイズも、また大した者ではあったが、ルイズに關しては、まあ当たり前だというのがキュルケの感想である。ルイズが疑いようも無く頭が良いのはキュルケも認めるところである。

その後、イングリッド自身の言葉から発せられたルイズの疑問を受けて、一週間で8日だと談じたやり取りは、結果だけ見れば当たり前前の結論を導いただけにも思えるが、実際にその場で、客観的な立場で結論に至った会話を聞いたキュルケとしては、仰天するところだった。

少ない会話から、あの結論に至るには相当な洞察力が要することは明白だった。複数の事実を自然とつなぎ合わせて別の結果を導いたのだ。頭が良いだけではない。実際に頭の回転が早いのだろう。そうでなければあのような会話を澱み無くできるはずが無い。

キュルケにはイングリッドの評価が定まらない。

ルイズとじやれあうイングリッドに視線が固定してしまう。

これでメイジではないって、どういうことかしら……？

結局のところ、キュルケもメイジに対する「常識」が抜き差しなら無いところで凝り固まっている現実があったのだが、キュルケ自身に自覚できることではなかった。

西門の手前に広がる「屋外実習場」の端っこ、或いは、西門と教育棟の間に広がる無為な土地とも呼べる広場に、タバサとシルフィードが待っていた。

イングリッドがタバサの使い魔たる風竜の名を「シルフィード」だと知ったのはつい先ほどの事だが、別に疑問を持つ必要も無かった。

風竜がタバサの使い魔であることは十二分に理解にいたるだけの経緯と経緯があつたわけだし、あのように美しい体躯を持った風竜の名が「シルフィード」というのであればなんともお似合いの、納得のいく名前だったから、妙な緊張感を漂わす「幼い顔立ち」の西洋竜とその前で所在無さげに立つタバサを見て、イングリッドは少しく首を傾げた。

「うわあ……やっぱり綺麗な子だね、シルフィードってば」

キュルケが感嘆の声を上げつつ、タバサの脇を走り抜けて竜の首に抱きついた。おとなしいものだが、その顔面にはどこと無く嫌そうな雰囲気漂っているのが見て取れた。

ハウザーに比べれば1000倍は可愛げのある顔に、イングリッドも思わず相貌を崩してしまふ。イングリッドはその趣味嗜好に若干の特異性があるものの、基本的に「カワイイ」物に目がないのだ。

突然走り抜けたキュルケを目で追って、ふと気がついて振り向くと、イングリッドすらもシルフィードの側に走り寄っていることに気がついて、ルイズは溜息を吐いた。タバサと視線をあわせて、肩を竦める。タバサの表情は普段と変らぬ鉄面皮だった。

ルイズとタバサが不可思議なコミュニケーションを取っている側で、イングリッドはシルフィードの正面に立ち、その視界がイングリッドの全身を十分に捉えられるであろう距離を取って立ち止まった。

イングリッドは眦の下がった瞳をシルフィードに向けながら、まず両手を身体の前に出し、手のひらと手の甲をためすがえすしてふと気がついて、慌てて手袋を脱いでポケットに捻じ込んだ。

キュルケを首にぶら下げ、緊張感を保ったままのシルフィードがイ

ングリツドの仕草を目で追い続ける。イングリツドは再び両手を差し出して、自身が何も持っていないことをシルフィードに認めさせた。

大きな体軀を誇るシルフィードであるが、今、首にキュルケを巻きつけているがために、随分と低いところに顔があつた。ただ立ち尽くせば、イングリツドとシルフィードの視線は直接交錯するぐらいの位置であつたが、イングリツドはあえて腰を低くして、両手を差し出したまま、シルフィードの顎の下に腕がいく程度の姿勢を保つてゆつくりと近寄つた。シルフィードはシルフィードで、随分な緊張感を漲らせて、イングリツドの視線を受け止め続けている。

遂に竜の顎の下に手を差し込んだイングリツドは、そのままやさしく顎を撫で付けてシルフィードの顔を両側からなで上げて、頭をゆつくりと押し付けた。

次いで、そのまま鼻を押し付けて大きく匂いをかいで、首まで回した腕で大きく円を描いてさすり、なでて、シルフィードが肌の感覚で知覚し続けられるように両腕をゆつくりと顔の前に動かして、最後に口元に寄せた。

戸惑つたように小首を傾げてイングリツドを見上げるシルフィードは、刹那、ためらいを見せた後に、その手のひらを嘗めた。

その様に、につこりと笑つたイングリツドはシルフィードの顎を両手で持ち上げると、躊躇い無く自身の口をシルフィードの口に当てて、嘗めた。シルフィードの首の脇でイングリツドの行動を眺めていたキュルケはびつくりして飛びのいてしまう。

タバサも表情を変えぬまま、しかし、左手を思わず突き出して、そこで硬直してしまう。

ルイズは、あつけに取られて立ち尽くすばかりだ。

唇……？の辺りを嘗められたシルフィードは暫し戸惑つた後、自分が嘗められたことに気が付いて、目を丸くしていたが、ぐりぐりと顔を押し付けられて、頭を撫でつけられている内に妙な表情になって、遠慮会釈無くイングリツドの顔を嘗め始めた。

「おうおう。ういやつめ。主はめんごいの」

いつの間にかわっしわっしと羽をバタつかせながら顔をイングリッドに押し付けているシルフィードは遂にイングリッドを押し倒して、地面に倒れたその顔を、そしてその身体をべろべろと嘗め回した。

「わわわ、やり過ぎじゃ、シルフィードよ。少しは遠慮というものをだな」

苦笑いを浮かべながらもぐくイングリッドの上で、ぐいぐいと顔を押し付けるシルフィードの脳天にタバサの巨大な杖が突き刺さった。

「いたいー！」

どこからか、ここにいる四人以外の声が響いて、タバサ以外の3人が驚愕に表情を歪める。タバサは……大変に珍しい事ではあったが、苦い怒りに表情を歪めて杖を振り上げた。

「やめるのね、お姉さま！それはいたいのね！」

今度こそ声を発する主を認識した3人は、驚きを顔面に貼り付けたまま、シルフィードの顔を見つめる。

シルフィードの随分と激しい親愛の行為から開放されたイングリッドは、身体を払いながら呆れた表情を浮かべた顔をシルフィードに向けつつ、タバサに問うた。

「……竜というのはしゃべれるものなのかや？」

タバサが答える前に、ルイズとキュルケが激しく首を振る。

タバサはぶるぶると身体を震わせながら杖を更に振りかぶったが、いやなのね！いたいのね！と喚いて首を竦める竜に視線を移して肩を落とすと、大きな溜息を吐いた。

「秘密」

なんとなく距離を取って一塊になった3人は顔を見合わせる。

そこで気がついたルイズはポーチからタオルを取り出すとイングリッドに手渡した。イングリッドも気がついて、ありがたく差し出されたタオルを受け取ると、乱れた髪をなでつけながらべたべたの顔を拭う。

その横でキュルケが呆然として呟いた。

「韻竜……！」

タバサがその言葉を聞きとがめて、ゆつくりとキュルケに近寄る。折檻を免れたシルフィードが疑問符を浮かべて自身のご主人様を視線で追う。

「秘密にして」

やや強めた視線を見上げたキュルケに投げかけて、次いで、ルイズ、イングリッドの順に視線を移す。そのタバサの表情にはどこと無く諦観が滲んでいように見えたのはイングリッドの気のせいだろうか。

キュルケはこくこくと首を振り、ルイズは首を捻り、イングリッドはタバサを見つめ返して言葉を吐いた。

「珍しいのかや?」

タバサは首肯した。キュルケが大きく腕を振って声を上げそうになり、だが声を出す前に気がついて腰を落として、他の三人と同じくらしいの位置に視線を落とした。囁くような調子で躊躇いがちに言葉が続ける。

「……珍しいどころじゃないわ。韻竜っていうのはとつくの昔に絶滅したといわれる、伝説的な存在なのよ。

風竜が呼び出されたってだけでも結構レアなのに、風韻竜だなんてことがわかれば大騒ぎじゃすまないわね」

キュルケの言葉の中段部分でイングリッドは眼を見開いたが、それを疑問として口に出す前に、横合いから青い顔が割り込んだ。

「絶滅なんて酷いのね。勝手に殺さないで欲しいのね。シルフィはここにいるのね。珍しいとか物扱いされるのは心外なのね!」

こちらを上目使いで見上げる大きな顔に呆れた視線を向ける3人。その対面でご主人様たるタバサは身体を震わせて、杖を振り上げる。

「約束は?」

脅えたシルフィード改めシルフィは、首を竦めて後ずさる。

「約束。約束? えーと、約束ね。その、えーと、ね。人前では迂闊にしゃべらないのね!」

そこまで喚いて首を捻った。

「アレ?」

その頭に杖が振り下ろされる。

「いたい！いたいなのね！やめてほしいのね！そんなにされたらシルフィは馬鹿になるのね！」

ほかほかと殴りつける杖はしかし、見た目こそ痛そうだったが、十分に配慮が透けて見える勢いで、躡けていると言うよりは、どこことなくじやれているような仕草だった。

肩を落としたルイズが、深い深い溜息を吐いた。

「はああ……。なんか、こここのところ、私の周りで大きな騒ぎが立て続けに起きているような気がするんだけど。気のせいかしら」

その言葉にキュルケとイングリッドが顔を見合わせた。次いでイングリッドが刹那にキュルケから視線を反らしてルイズに視線を戻し、それを虚空に僅かに彷徨わせながら肩を竦めた。

「ぬ……。まあ、なんじゃ。類は友を以て集まる、とか？」

片眉を跳ね上げたルイズがイングリッドを睨む。

「あんまり良い意味で言われている気がしないんだけど」

にははと笑うイングリッドの横で、キュルケは腰に手を当てて身体を伸ばす。

「アレね。そう、同じ羽毛の鳥は群がるって言うじゃない」

キーと声を上げてルイズがキュルケに視線を移した。

「同じ意味じゃない！」

じやれ合いを始めたキュルケとルイズを見、地面をのそのそと逃げるシルフィを一定の間隔を置いてゆつくりと追いかけるタバサを見、イングリッドは両手を振り仰いだ。

「やれやれ。いつになれば出かけられるのかの」

それは独り言のつもりだった。その言葉に対する反応が帰ってくることを期待していなかったイングリッドだが、腰に飛びついたルイズを引きずりながらキュルケが近寄ってきて、イングリッドの身体に顔を寄せて、鼻をすんすんと動かした。

「もっと遅くなるわね」

首を大きく傾げてイングリッドはキュルケを見つめる。

キュルケは指でイングリッドの顔を指し、そのまま下に降ろしてイ

ングリツドの服を指した。

「匂うわよ」

あつと驚いたイングリツドは両腕をすぼめてそこに鼻を当てる。匂いを嗅ぐ前に濡れ雑巾のようになった服に顔を埋める羽目になった。あわてて顔を離すイングリツドの鼻頭から、粘っこい糸が下向きのアーチを描いた。

キュルケから離れたルイズもイングリツドに鼻を近づけて、顔を顰めた。

「……臭い」

イングリツドはがっくりと肩を落とした。

初めてのお出かけ（2）

きゅいきゅい喚くシルフィを追い立てて、厩舎に押し込んだタバサ。シルフィードがやたらと抵抗を示したために4人とも酷く気疲れしてしまった。気疲れだけではすまなかったが。

今日行う筈の、目的の、行動の端緒にもついていないのにこれでは……。イングリッドにはひどく先が思いやられる事態だった。

シルフィが暴れたといっても、彼女なりに力を抑制していたのは理解できる。なにしろ彼女は竜なのだ。本気で暴れるとなれば魔法を使わない人など、塵芥とばかりに吹き飛ばされてしまおうだろう。だからと言って魔法を使って制圧等となれば僅かの間違いで殺し合いである。

そもそも、本来の竜の力とはそういうものなのだ。使い魔だから良かったとかいうレベルでもない。シルフィに配慮されたとも言えるし、或いは彼女に生暖かい目で見られているのかもしれない。所詮は人間なのだから。手加減されているのは確実だったし、手加減されないとどうしようもなかった。召喚の儀でコルベールが同行するのも納得である。

召喚されて一週間と経ていない筈の幻獣が、妙に物分りがいい事にタバサ以外の3人が疑問を思うことは無かった。

とは言っても、やはり竜。

足を踏ん張って羽をバタつかせただけで土塊が飛び、芝生が俟った。激しく。

それはシルフィ自身にとっては悪ふざけ程度の意識だったのかもしれないが、その悪ふざけ一つで極僅かの中に、4人の外見は大変なことになった。

特にイングリッドの外見は壮絶だった。シルフィの涎ですでに変な状態だったのに、土塊、埃、砂、芝生の切れ端、その他なにやら訳の判らない物を体中に貼り付けてしまった。水糊を被った上で、更に砂場で転がったのだというような見た目だった。それでもイングリッドはシルフィに笑いかけて頭をなでたし、ルイズは苦笑いするだ

けだった。イングリッドの状況というのは言ってみれば自業自得だった。防ぎ得たかもしれない結果だが、発端を作ったのは自分自身だという納得がイングリッドにはあった。だが、タバサは割と本気の勢いで、彼女自身の大きくて物理的破壊力の強そうな杖をシルフィの脳天に叩き付けた。

シルフィードの方も、イングリッドの状況を見て自身が仕出かした行動を遅ればせながら自覚して、必死に反省するかのごとく、その大きな顔をイングリッドに押し付けて情け無い声を上げたし、タバサの折檻にも耐えた。だからと言ってイングリッドの姿が元に戻るわけでもなく、無論のこと他の3人の姿も元に戻らなかった。

よって、4人は互いに顔を見合わせて溜息を吐くしかなかった。

「着替えないとね……」

胸のはだけた部分に入り込んだ砂を掻き出しながら、キュルケがぼやいた。

お行儀悪く土色の唾を地面に吐き出し、身体を左右に揺すりつつ服についたなにやらを手で払いながらルイズがぼやく。

「あー、お風呂に入りたい」

塹壕で一週間を過ごしたような見た目のイングリッドは、目元の土を拭いながら頭を振る。髪の毛に絡まった石が撒き散らされた。

「同感じゃの」

タバサは肩を落として溜息を吐いた。

これから出かけるのだという段でシルフィを厩舎に戻したのは、イングリッドが着替える必要性が出たためだが、まさか、全員が等しく着替える羽目になるとは思っていなかった。着替えるだけでは済まされない状況にもなった。酷く馬鹿馬鹿しい話だった。とはいえ怒るわけにも行かない。怒られるならイングリッドがまずもって怒られるべきだろう。だが、短い期間でイングリッドの行動原理を理解しているつもりになっている3人は、イングリッドの行動を眺めて止めなかつた事に若干の後ろめたさもあって、複雑な表情でうつろに笑うしかなかった。

「今日はお出かけるのやめようか……」

髪の毛を手漉きして、何とか整えようとするキュルケがぼやいた言葉を聞いて、自身の身体についたアレコレを払い続けるルイズは首を振った。

「ただの安い物ならいいけどさ。イングリッドは何も持っていないのよ。一刻も早く、身の回りを整えないと、生活するのにも不自由しちゃう」

払う程度でどうにかなるわけでもない見た目のイングリッドは、身体を傾いで溜息を吐いた。視線が自然と下を向いてしまう。

「すまぬの、ルイズや」

いろいろな感情が乗ったその言葉に、自身の外観が手で払う程度でどうにかなるものでもない諦めたルイズも、腰に手をやりながら首を振った。

「ううん。それはいいの。でも、ま、これじゃ出かけられないから、ホントにお風呂にしないとね」

たまたま近くを歩いていたフットマンを捕まえて、キュルケがアレコレ指図してから4人は、2年生に指定された入浴設備へと足を向けた。

レクリエーション棟の入り口で、イングリッド以外の3人が四苦八苦してブーツを脱いでいる間にメイドにフットマンにポーターと、20人ほど押しかけて、4人が脱いだ服を手早く払ったり、ランドリーに走ったり、土まみれのブーツの手入れをしたりと大騒ぎになった。

まあそうなんだろうなというイングリッドの想像通り、彼らの前で3人が何の遠慮することもなくメイドに制服を剥かれて下着姿になるのを見て、イングリッドも躊躇うことなくメイドに脱がされるままに下着姿になった。すべてメイドに任せられなかったのは、イングリッドの服がこの世界の一般的常識とは掛け離れているせいで、ボタンや、金具の取り扱いについて一々口を出したり、実際に実演したりとしなければならなかった。キュルケとルイズは、サーキュラー・クロシユで身を隠してサンダルに履き替えた状態で、イングリッドの着替えを眺めることになった。

タバサは、身長的な問題から一般的なサーキュラーを被るとすそを引きずることになるので、フレア・カプを被せられていた。タバサがいる場合のお約束のようで、わさわさと現れた彼らは最初からその用意を整えていた。なかなか優秀な使用人である。

身を綺麗にする施設が風呂という場所のあり方とはいえ、土や砂を内部に持ち込まれても、後の入浴者や、なにより使用人たちが、掃除をしたりするときに困るので、クロークルーム(クロークフロント)でメイド達が3人の髪の毛に絡まったゴミやら土やら砂やらを払う。

クロークに預けた物品をスタッフを取り出すのを待ったために、クロークルームにはテーブルと椅子がいくつも置かれている。だが今は、それらは必要ななかった。フットマンがそういった調度が汚れないようにとわっせつせと壁際に寄せる。珍しい時間帯に現れた団体客に、クロークスタッフが目を丸くする。

メイドたちが困ったのはイングリッドである。下着姿のまま、ひとまず濡れタオルで身体を拭くことになった。シルフィの涎はイングリッドの服を見事に貫通しており、ショーツはともかくとして、ブラジャーは濡れ雑巾みたいな有様だった。顔も髪の毛も泥だらけなので、何枚ものタオルを汚してイングリッドの外見を何とか見れる所までは持つていく。見れるところまでで限界だった。

埒が明かないと見たメイドは、結局、フットマンとポーターをクロークルームから追い出して、ブラジャーも引き剥がす羽目になった。

そうになると、もはや面倒とばかりに靴下もストッキングもショーツも脱がされて、頭につけた二つのアクセサリ以外は何一つ身にしない姿になった。

室内から異性が廃されてしまったので、更衣室手前の部屋であるにもかかわらず、まあ良いやとばかりに残りの3人も身につけた物全てを脱ぎ散らかした。

ポーチやらバッグやらという貴重品はクロークスタッフ(勿論女性だ!)が預かって頂く。貴重品の筆頭たる杖も、躊躇い無く預ける姿にイングリッドは内心で感嘆の声を上げた。

平民たる使用人に自身の命を預ける。それで平気な顔をしている3人にイングリッドは、良く出来た理想的貴族像を見た。

4人が脱いだ下着はメイドが纏めて、一人分づつを一人一人で手分けして持ち、4人のメイドが並んでクロークルームの扉を開けて……空気の読めないポーターが一人、控えて待っている事に気がついて瞬間、パンチが一閃した。

K. O!

メイドの放った鋭い一撃に、一瞬の幻聴を聞いたイングリッドであつた。

歳若い———こういう場所で勤めるポーターというか、常備というのは、ポーターという名の小間使いである。本来の意味でのポーターはフットマンが兼任しているので、この場所におけるポーターと言えば奉公に出された小児である。

見た目こそ一著前にパシリと決めた、学院指定の高価な服装で身を包んだ姿だが、所詮は子供に過ぎないので、任される仕事もまたパシリというところだった。そういう意味では仕事熱心なんだろうが、他にもいたはずのポーターが彼一人を残して姿を見せないというなら、若いにしても経験が足りないのだろう。空気が読めなかつたのだ。ラッキースケベを味わつた彼に、ルイズたち4人は苦笑いを向けるだけで済ませた。顔を真っ赤にした哀れな子羊は「ごめんなさあああい！」という鳴声でドツプラー効果を残しつつ、鼻血を押さえながら走り去る。メイドが振りかぶつた拳がうまい具合に突き刺さつたから鼻血なんだろう。そういうことにしておく。

メイドがぺこぺここと不手際を詫びたが、ルイズが苦笑いを表情に浮かべつつ手をひらひらさせた。室内にいるメイドたちはそれを見て隠せない安堵の溜息を吐いた。

自領で、自宅で、自身の直接の配下であると言うなら話は別だが、このような外部施設での使用人の不手際となれば、ましてや相手が貴族となれば、たかが子供一人に遠慮する言われもない。魔法の一つでも撃ちかけられて木端微塵にされても文句は言えないのだ。4人の心が広くて良かったと、メイドたちはルイズたちのおおらかな心持ちに

感謝した。

貴族の立場側からしても、入浴施設等で使用人にあまり強い態度に出られないという事情もある。メイジである貴族が力を発揮するには杖が必要であるが、入浴時に杖を持ち歩く者は余程に後ろ暗い物を背負っている輩となる。

普通の貴族はそうではないから、当然のことながら、使用人に全てを委ねて入浴するのが普通だ。信用するしかないのだ。

貴族の暗殺現場で成功率が高いところと言えば、入浴、排便、睡眠の3つが突出しており、使用人を蔑ろにする馬鹿は生活する上で死的に重要なその3つとプラスして食事時に脅えて心休まる時をもてないとなる。裸を見られたぐらいのアクシデントは笑って済ますぐらいが調度良いのだ。裸一つで使用人たちのルイズたちへの好意が得られるならば、快適な学院生活を期待する上では安い投資とすら言える。

イングリッドはともかくとして他の3人は無意識にそういう態度を取れるぐらいは貴族だった。

100人ぐらいが同時に着替えをする事が出来そうな更衣室は天井が高く、広々としていた。

天井近くに窓があつて、一部が開かれているが、寒々しい雰囲気ではない。何らかの手段を持つて空調が維持されているようだった。

背の低い2段のロッカーが室内をいくつかに区切っている。ロッカーの背がやたら低くて、極一般的な背丈を持っている者ならば室内を端から端まで見渡せるのは、防犯上の理由もあるのだろう。ロッカーで区切られたような通路形状に区切られている、通路それぞれ突き当たりの壁に椅子が置かれて、いちいちメイドが一人座っている。2方向の壁の突き当たりで互いを見張るような格好でメイドが相対し、ただ更衣室内を見ているだけが仕事であるのに、そこに12人も人手を割いているのだから、イングリッドから言わせれば「大したものだ！」とため息を吐きたくなった。どれだけの人件費が費やされていることやら。

それで別途、着替えを手伝うメイドが、更衣室の奥で扉の無い控え

室に10人ほど控えて暇を困っているのだ。平日の昼日中、というかまだ朝である。一限目の授業が始まったか始まるころかという時間帯である。本当の贅沢とはこういう事なんだろう。

更衣室に入る時点で既に素っ裸になつてゐるルイズたち4人を見て、控え室のメイドたちが驚き、その4人がぞろぞろと他にもメイドを引き連れてきて彼女達はもう一度驚いていた。控え室でござと互いに言葉を交わしているのは引き継ぐためか。クロークルームで4人を世話したメイドたちが控え室にいる別のメイドたちと互いに頭を下げあつて更衣室から出て行く。一人だけ残つて、彼女達の行動を見守つていたルイズたちに近寄つた。

「すぐに服は用意させますので、ご安心ください。ここの受け持ちに引き継ぎましたが、私は残りますので、何かありましたら控え室のほうに」

柔らかい笑みを浮かべたメイドは手を控え室のほうに向けた。そちらにいるメイドたちが4人の視線を受けて、一斉に頭を下げた。

それに頷いた彼女は、再度頭を下げた。

「では、私もあちらに控えさせていただきます。ごゆっくり」

背中を向けて歩み去つた。

それを見送つて、3人が視線を交わす。

「やっさと風呂にしましょ」

伸びをしながらキュルケが言う。頷いたルイズとタバサがキュルケに続いた。その後ろを一步送れて続くイングリッドはちらと、控え室に視線を送つた。

服を脱ぐときから気がついていたが、随分と注目されていた。今も、控えめな態度でちらちらとこちらに視線が送られているのがわかる。まあ仕方ないのだな、と諦めて、浴場に向かつた。

途轍もなく広い浴場だった。なかなかお目にかかれない風景だった。

目測で3メートルほどの幅がある浴槽がT字を描き、その横棒側には一段、座れそうな場所を取つて大きな窓があつた。透明度の高い巨

大なガラスで外界を区切っていて、浴場内を暖かく包んでいるのだから断熱性があるガラスなんだろうと想像する。現代でもあんなに巨大なガラスならば1000ドルでは収まらない価格になるだろうと思う。闘争の場で周辺の被害を気にすることなく遠慮会釈なくガラスを割り砕いて、かりんに引き攣った笑みを向けられたことがあった。それを思うと、豪華な浴場なんだなーとのんきに思ってしまう。

温泉地の同様の施設でありがちな水垢にまみれて外が見えねーぞなことも無く、透明度が維持されているのだから清掃の手間も大変な労力が費やされているのだろうと想像する。

その窓ガラスの向こう、外側はかなり間隔を開けて背の高い目隠しがあつて、手前に自然石を積み上げた露天風呂が用意されている。ただし、現状、そちらにお湯は張られていない。入り口から見ても左側奥に浴槽を避けて扉があるが、それが露天風呂への出入り口だろうか。目隠しの壁が高くて尚且つその外側にやたらと背の高い木が茂っているのは、覗き対策か。それでも露天風呂が存在する場が非常に広く取られているので、ちゃんと日が差し込んで暖かい雰囲気は保たれている。

T字の縦棒両脇の壁側には、25、6のシャワーヘッドが用意されている。50人ぐらいが同時に身体を洗えそうだ。

4人が浴場に入った直後に、T字の縦棒、右側の壁にある扉が開いて、すその無いマイクロミニのメイド服を着たメイドが8人も入ってきて流石に驚いた。身体を洗うのに一々そんなに人がいるのかとびっくりしているイングリッドの横でルイズたち3人が苦笑いをしている。内一人は常なる鉄面皮だったが。

イングリッドは呆れてルイズに顔を寄せて、小さな声を上げた。

「おいおい、あんなに人が要るのでは、普段はどれほどの手間がかかるのじゃ、主ら」

ルイズは笑いながら首を振った。

「アレくらいしかないよ。そんな、子供じゃないんだから」

いろいろな部分を端折ったとしか思えない言葉の意味を理解しかねてイングリッドは首を傾げてしまう。

ルイズの頭をつついたキュルケが補足するために口を開いた。

「昼間は流石に暇だからさ、暇つぶしに全員出てきたのよ。きつと。就学時間後の入浴時間でも、あの人数しかないよ」

そう言いながらそれぞれ椅子に腰掛けた3人を見て、イングリッドもルイズの隣に腰掛けた。目の前にある鏡の中に後ろから近づいてくるメイドたちの姿が見えた。つまるところは、イングリッドが珍しいのだろう。さっさと彼女の両脇に控えた2人に他の6人のメイドが残念そうな視線を送りつつ、それぞれに分かれた。

シャンプーやボディソープ、ボデイタオルに軽石といった道具を収めたかごと、真つ白で気持ちよさそうな清潔に乾燥されたタオルの束が詰まったかごの2つを8人がそれぞれ下げていた。

「うん、普段は主らがそれを配って回るのかや?」

シャワーから湯を出して温度を見ているメイドが小さく笑った。

「ポーレットです」

「?」

イングリッドはそのメイドのほうに顔を回した。

この世界では珍しくもない金髪を短く纏めた頭。ただポリウム感がある。大分癖のある髪の毛のようだ。ややくすんだ白い肌を見せる顔に散らされたそばかすが、特徴のない顔の特徴付けている。

平均的な顔立ち、と言って良い顔だった。ただし、現代的感覚からするとどうかと思わせる年齢に見える。

「……主の名前かや?」

小さく微笑んだポーレットはかすかに頷いた。

振り返って、足元に道具を広げているもう一人に視線を送ると、そのメイドもイングリッドの視線に気がついて小さく頷く。

「ザザです」

緊張が透ける笑みに、青い瞳が映えた。

白いというにはぎりぎりの肌と、これまた金髪というにはぎりぎりの髪の毛をアップに纏めている。まあ、平均的な顔立ちだった。こちらもまた年齢的にどうかとは思わせる容姿だったが。

それに頷いて首を回し、もう片方にも頷いた。

「うむ。覚えた。ポーレットにザザ。良い名前じゃの。我はイングリッドという」

膝立ちでこちらを見つめる二人に鏡の中から視線を送った。

「唯のイングリッドじゃ。以後、よろしゅうに」

2人ともくすりと笑みを浮かべた。その姿に訝しげな表情を浮かべてしまうイングリッド。

2人ともあわあわ言いながら、身体を寄せて弁解を始めた。

「あ、ごめんなさい。シエスタさんが言っていたとおりの人だなあつて」

「すいません……お気に触るようなことがあったでしょうか」

ポーレットもザザも、一見した印象に間違いなく、やはり人生経験が薄そうであった。この世界で言うところの貴族に対する言葉使いとしては危険を感じるところがある。とはいえ、右に座るルイズやその先にいるキュルケにタバサ、その3人を世話するメイドたちも皆、こちらの2人に負けず劣らず歳若い姿だった。歳若いという言い方も何かが違う。幼いと言い換えたほうがよさそうだ。

「あの、お湯をかけさせていただけます」

「ん。まかせる」

イングリッドが左手を差し出すと、ポーレットはびくついた腕を刹那躊躇わせて、シャワーヘッドから勢いよく出るお湯を、何度か素早く断続的に当てた上で、最終的に連続して浴びせた。

「お湯加減はいかがですか？」

「よい」

頷いたイングリッドの姿に安堵を見せて、彼女の後ろでザザと頷き会って、ザザの手にするボディタオルをお湯で浸す。

ザザが若干の緊張感を含ませた声でイングリッドにしゃべりかけた。

「お身体をさわらせていただきますね」

「ん、まかせた」

酷く緊張感の溢れた時間が始まった。

身体を洗う手順や方法はどうかという期待、或いは不安があった。イングリッドはさすがにやらせてみたのだが、なかなか興味深い体験になった。

まさか、ボディタオルでがっしがしとやられるかと思ったが、まずは湯に浸しただけのボディタオルで身体の何箇所かを軽く撫でられた。まさに撫でるだけで、汚れを落とすとか何とか言うものではなかった。

イングリッドの背に立ち、お湯をかけるポーレットに指示をしながら体中を「調べる」ザザは首を捻って、眩いた。

「イングリッド様の肌、すごく綺麗……」

つまり、汚れが酷ければガシガシするということだったのか。ザザがイングリッドの腕をつかんで腋を露にし、素手で触って、それを鼻に近づけて匂いを嗅ぐと、再度首を捻ってザザはポーレットと顔を見合わせた。ポーレットは純粋に疑問符を浮かべていたが、ザザは驚愕と言って良い表情だった。

息を呑んだザザは、刹那躊躇ってイングリッドに直接に問いかけた。

「あの……香水もお使いにならないので……?」

苦笑いを浮かべてイングリッドは首を振った。

「ない」

それでポーレットも表情に驚きを浮かべた。

「……朝に入浴されましたか?」

それにも首を振った。振るしかなかった。

「ない」

どうもこちらの会話に耳をそばだてていたらしいルイズ側のメイドからもぎよつとした反応が漏れて伝わった。

「……!」

4人のメイドが一瞬忙しなく視線を交錯させた。

それからザザが冷や汗を浮かべながら、手元に並べた各種のボディソープをまさぐって、一番使用頻度が低そうな、つまり、外のラベルの痛みも見られないし、かすかにガラスを透けて見える中身が殆ど

減っていない小瓶を手にして、それをほんの少しだけ手に乗せた。

「あの……その、お身体を洗らわさせて頂きます……」

微妙に困惑した表情を持って、ポーレットもシャワーヘッドをフックに掛けて、ザザに次いで手のひらにボディソープを乗せた。

ポーレットがイングリッドの正面を、ザザが背中側を担当して、手のひらで手早くイングリッドを洗ってゆく。

イングリッドはいろいろと納得した。

やはりこの世界の人も体臭がきついのだろう。体臭や汚れに合わせる洗淨力の違う石鹸……ボディソープを選ぶのだろうが、彼女たちが手に取ったのは、かすかに酢酸系の香りが感じられなくも無い、泡立ちも刺激も殆ど感じられない液体石鹸？だった。その使用頻度が少ないということは、まあ、強力な石鹸を使わないといういろいろアレな人が多いという事なんだろう。

実はイングリッドは他人の体臭とかをとにかく気にかけない。

イングリッドに相對する人間やら人間で無い輩やは、体臭がどうか、臭いがどうかかを超越したそれはそれはすさまじい物がいっぱいいた。

個性的な体臭を感じて、それを相手の気配の一つ、なんて認識して鬭争の一助にする事はあつたが、体臭に対して個人の趣味趣向に根ざした評価なんてどうでもよかつた。香水なんかはどちらかというところ「臭いー」と敬遠するほうだったから、けつあごの軍服親父と戦う前に割り込んだ占い師なんかは、漂わせる人工的臭いで死に腐れこの野郎ぐらいに思つたのだ。それぐらいに他人の体臭等どうでも良かつた。

それが自身に体臭をまとわせて平氣、という方向に行かないのがイングリッドだった。

何ヶ月も風呂に入れないような状況に置かれたところで、汗腺を操作して臭いがつくのを未然に防止したり、水は無くとも身体を赤熱させて消毒したりするぐらいには氣を使うのがイングリッド流だった。

他人がイングリッドを個人的趣味の範囲内で評価する事はどうでもよいにせよ、酷い体臭を漂わせて変な注目を浴びるのは自身の任務上よろしくないし、臭いが故に敵に氣が付かれましたではお話にもな

らない。

糞の処理をおぎなりにして、ブツは埋めて隠したにせよ、臭いが漏れて敵に奇襲されて壊滅した軍隊とか、体臭を数キロ先で感知されて待ち伏せを食らった軍隊とか言うのは珍しくともなんとも無いエピソードであるので、その中に自身の名を連ねるなんていうことは真つ平だった。よって、イングリッドの出来る範囲内で——それはとりもなおさず明らかな人外的行為を持って、自身に個人を特定させるような特徴的体臭をまとわせない、つまり、付随的に身体を清潔に保ち続ける術を無意識下で継続していたのがイングリッドだった。

これっぽっちも意識を向けていないが故に気にしていなかったのだが、よくよく記憶を掘り起こせば、ルイズも「現代的感覚」から言えば体臭がきつい方だし、キュルケは見たまんまかなりきつそうで、初見のときから香水を使って注意深く自身の体臭を誤魔化していた。タバサに関して言えば、はつきり言って臭い。悪い意味でその辺りに意識が向いていないのは明らかだった。体温の高い小児特有の「乳臭さ」があつた。

シエスタにせよレンにせよ、ここにいる別のメイドにせよ、かなりきつめの香水で体臭を誤魔化していたし、コルベールも悪い見本の筆頭に乗せたい臭さだった。オスマンの爺はえもいわれぬ加齢臭で身を飾っていたし、そこにニコチンの臭いが加わって大変にいろいろアレだった。香水で誤魔化しているようで双方が自己主張をして不協和音を奏でて素晴らしくもあるハーモニーを奏でていた。現代的な世界でアレが出てきたら思わずぶん殴っていただろうぐらいには、イングリッドは他人の体臭を気にしていなかった。

そういうモノにルイズたちが余り気を向けていないのは彼女達自身がそれなりに香水を身につけていたせいだろう。ようは自分の発する臭いで鼻が馬鹿になっっているのだ。それは言いすぎかもしれないが、他人が臭いことは仕方が無いみたいな了解があるのがこの世界のあり方なのかもしれない。そういうえば毎日洗っているわけでもなさそうな彼女たちのマントは、臭いのみで個人を特定できるほどに臭かったし、やたらとルイズの頭をまさぐるのもイングリッドの個人的

趣向にマッチした獣臭さ——ぶつちやけフェリシアを髣髴とさせる臭いが心地よいからという変態的理由があつたりした。最初の出会いの場でルイズの頭に顔を埋めたとき、慌ててシャンプー等と誤魔化した。余りの香りの強さに意識が飛びかけた。幸せな香りだった。……気絶していたほうが後々面倒がなかったかもしれないと突然に思いついたが、軽く首を振って否定する。

オスマンに顔を近づけられて身体を仰け反らせたのは、その雰囲気はどうとかではなく、臭いに対する防衛本能だったし、契約の儀の後で、左手のルーンを見せたコルベールを途中で払いのけたのも臭かったからなのだ！

授業を行った教室に漂っていた匂いなんて改めて意識をして思い出すとスメル・テロもいいところだった。個々人が身に纏った様々な種類の香水と、それぞれの体臭が入り混じった地獄を垣間見た。ジュネーブ陸戦協定違反スレスレの惨事だろう。現代的感覚を持った小児が投げ込まれば「かゆい……うま……」とばかりに中身をぶちまけるだろう。

それぐらいにはイングリッドは他人の体臭を気にならなかった。

……この感覚はイングリッドにとっては正直久しぶりだった。数百年ぶりの感覚だった。久しぶりだからこそ、つまりは過去の経験があるからこそ、耐えられた感覚だった。

4、500年前のレシピを完璧に再現した香水を作ってみると、現代人には耐え難い強力な香りを撒きちらすモノが出来あがつて困惑した。なんて話があるのだが、イングリッドに言わせれば当然だった。

衛生観念が極端に違う世界で、不愉快な臭いをシャットアウトすることが目的で合成された香水なのだ。その時代の香水を、その時代で当たり前であった使用量で使つたら現在の街路ではまさしく無差別テロである。ある時代で、丘の上に築かれた城砦とか岬の突端にある館とかで漂っている香りは、犬小屋か豚小屋かという状態だったのだ。財産を隠らせている貴族ならば住居スペース全体を統一した人工的香りで包むぐらいの工夫をしていたが、それをなすためにはとん

でもない金額がかかったので、例外中の例外だった。

だいたい、国王が住まう宮殿ですらアレな状態で後世、妙に有名になったのだ。その件に関して、トイレがないことをとやかく言う向きがあるが、その宮殿が設計された当時はおまるの利用が一般的だったので、トイレがなかったこと自体にたいして意見するのは問題の本質を見誤ることである。しかし、おまるの使用すら面倒くさがって、柱の影で臭い行為をするのが平気、という感覚は流石に腐りすぎだろうという意見には納得出来る部分がある。当時、女性向けスカートで流行了った(男性向けスカートも一般的だった時代である)形態である、クリノリンとかバススルなんかは、野糞をするのに都合がいいからという理由でもてはやされたのだ。当時の衛生観念を想像出来る話である。

ヨーロッパで畜産設備が町のそばにあつてNIMBY設備と嫌われないのは、そういう時代の残滓なのかもしれない。

その感覚を思い出させる世界がハルケギニアだった。御不浄に關しては今のところ優れて恵まれた状態しか見えないが……それだからこそ、もう一度、あの秋葉原の情景を思い出して安堵する。

あの少年がこの世界に引きずり込まれたら、接する人間の臭いにやられて寝込んだだろう。現代人には耐え難い……特に清潔であることで名を轟かす日本人の少年には耐え難い臭いが充満しているのだ。

どうでも良い事を考えている内に、ポーレットが正面に回って手下のほうに滑らせた。

「ひゃんー」

思わず自分の口が放つとはイングリッド自身でも信じがたい声が脳天をつきぬけた。ポーレットが驚いて手を引く。

「あつ、すいません！痛かったですか？」

そうではなかった。永い人生でも他人に触れたことなど記憶に殆ど無い場所を触られたのだ。悲鳴の一つもあげたくなくなる感触だった。しかし、全部任せると納得したのはイングリッド自身だった。若干赤らめた表情が鏡の中に見えたが、首を振ってポーレットに視線を向けた。

「ああ、いや、そのだな……」

隣でルイズが気がついて声をあげる。

先ほどの悲鳴に反応したようだ。

「あーイングリッドはメイドに身体を洗ってもらうような経験が無いんでしょ。違う?」

イングリッドは僅かに瞳を痙攣させながら、にやにやするルイズに首肯した。

背中では腰から下に取り掛かろうとしていたザザも、イングリッドの正面で視線を彼女の顔に向けているポーレットも驚いて、イングリッドの肩越しに顔を見合わせる。

イングリッドは慌てて手を振った。

「いや、まかせろ。そう決めたのじゃ。普段どおりにするが良い!」

冷静に返したつもりで妙に力の籠った声になった。それに気がついて顔を赤らめたイングリッドが気がついて顔を上げると、ルイズの頭を越えた向こう側から泡に埋もれたキュルケが下碑た笑みをこちらに向けていることに気がつく。

その顔に向かって右手で何かを投げつけるような仕草をして誤魔化すと、咳払いをしてそっぽを向いた。

「さ、さあさ、続けるが良い!」

ザザとポーレットはもう一度顔を見合わせた。

なかなかに得がたい、哲学的体験をしたイングリッドだった。人生経験が永いとか短いとかを超越する経験というのは存外にまだまだ多いのかも知れないと嘆息した。

身体を洗った上でなじませる効能もあるようなボディソープを身体に残したまま、髪の毛に作業を移した2人は太陽のアンクルに戸惑ったが、それを外す事をイングリッドは断固たる決意でもって阻止した。その代わりに、アンクルを泡だらけにすることは許した。そんなに柔なものでもないし、錆びたりする事は想像もつかない存在だった。

波動拳を直撃させても傷一つつかないし、輝きが霞むこともない代物なので、柔な手の力一つでどうにかなるものでもないからと2人を安心させて、イングリッドは顔を泡の海に沈めた。

イングリッドの首から上は顔面も含めてシルフィの涎の被害が甚大だったから、かなり乱暴な手つきで遠慮なく振り回された。おかげさまで身体を洗うのと同じくらいかそれ以上の時間がかかってしまった。

長い髪の毛のケアも大変そうで、上から下までしつこく細かくお湯を通された上で、何種類ものケア用品を髪の毛に塗りたくられて、梳かされて、イングリッドは身体を強張らせる羽目になった。2人が楽しそうに作業をこなしたのは幸いで、すべてを終わり、ポーレットが何枚ものタオルを駆使して髪の毛から水気を切り、洗い流すことが出来なかった洗剤やら何やらを拭うのに四苦八苦している横で、イングリッドはザザの絶妙な手さばきで身体を揉み解してもらって恍惚とした表情を浮かべた。

何となく鼻歌でも歌いだしたい気分だったが、楽しそうなザザの表情を見て、最初に刹那疑問に思ったことを問いかけてみた。

「のうザザよ」

イングリッドよりも寧ろザザのほうが歌を口ずさみそうな雰囲気だった。

「はい。何でしょうかイングリッド様」

それに苦笑いを返してイングリッドは、鏡の中の笑顔に視線を向けた。

「ん、主は今、何歳であったかの」

笑みを崩さぬままザザは小首を傾げた。

「えっと、確か、11で……もうすぐ12になるはずです」

結構な勢いで内心驚いたイングリッドだが、それを表情に出さぬまま、ポーレットに視線を向ける。

「あ……はい。私は12です。今年で13ですね。確か」

イングリッドは複雑な感情を押し殺して頷いた。仕方ない事なのだろうと嘆息する。イングリッドが過去に経験した時代の流れでは

それが常識だったのだし、実際に経験した中で彼女は、そのときその場所では疑問に思うことすらなかった。複雑な感情を抱けるのは時代の流れを体験と経験して、「今の社会」を知っているからであって、それを過去に当てはめてどうこう言うのはお門違いだ。イングリッドもそれは理解しているつもりである。

子供が「子供」という状態で区別すべき「特別」であると認識されたのは産業革命以後であるし、子供の人権がどうかなんて話はイングリッドの人生経験からすればごくごく最近の話なのだ。古代まで目を向けると子供を子供として区別をつけてそれなり以上の手を尽くした時代があるのだが、そういう部分でも大半の世界は、文化を退化させていたのが地球の歴史である。中世辺りで文化水準に巨大な谷が口を開けているのだ。そんな常識を指差して「非常識」となじつてもそれがどうしたという話である。

そうではあっても、古代の或る時期或る場所の子供に対する対応なんていうのは例外中の例外で、はつきり言つて人間が営んで形を成した世界に於いては子供なんていうものは圧倒的な期間に於いて、数撃ちや当たる。

外れたら捨てる。

が常識であったのだ。ある一定期間を生き延びることが出来て初めて人間と認めていいか。ぐらいなもので、そうでない期間では家畜よりは大事にされてる。ぐらいの存在であったのだ。

イングリッドの思うところ、ハルケギニアでもそういうものなんだろうといったところだった。いや、ルイズたちは幸運な世界の住人と評してもよいかも知れない。地球に於いては地位、立場なんていうものも関係なく、数撃ちや当たる、扱いだつたのだ。ところがハルケギニアの貴族は人間である前に始祖に連なる者であるという意識で持つて扱われる。貴族の血縁に連なる者は、すなわち神に連なる者に等しいので、作りすぎたから間引こうか、とはいかないのだろうというのがイングリッドの認識である。

ルイズに関しては非常に複雑な事情が感じられるし、実際に明らかになった事情は、複雑どころではないが、それが明らかになる前

あつても、躊躇うべき理由はあつたわけで、あつさりпойといかない点では大変に恵まれていると言つてよい。やはり幸せな世界なんだろう。

刹那の想像を振り切つてイングリッドはザザに視線をもどす。

「学院での奉公は長いのかや？」

ザザは小さく笑つた。

「まだ一年もたつていないんですよ」

イングリッドは頷いた。

「ほう。手馴れているようじゃから、私の勘違いじゃつたか。余程に優秀なのだな主は」

その言葉の意味を一瞬考えたザザは次の瞬間に僅かに顔を赤らめた。

「おからかいにならないで下さい……」

笑っているのか怒っているのか判別しがたいその顔にイングリッドは笑みを向けた。

「ん、いや、本気でそう思ったのじゃよ。ザザもポーレットも良い仕事をしなさるな」

突然に話を振られて顔を赤らめたポーレットは、大きく動揺してタオルを取り落とした。

イングリッドには、仄かに香水が香る湯船というのは余り経験のない感覚だった。

窓際のスペースに両腕を組んで顎を乗せると、髪の毛が湯船に広がった。髪にするりと抵抗無くお湯がなじむ感覚は気持ちよかつた。視線を上にとすると、春特有の薄く霞を引いた空が高くに見えた。断雲がところどころに散らばつた空に、大きな羽を広げた鳥が、円を描いていた。

キュルケとタバサはシャワーの前でメイドたちと共に四苦八苦しんでいた。それを横目にイングリッドに次いで作業が終わつたルイズが湯船を掻き分けながらイングリッドの横に並ぶ。

「昼間からお風呂つて言うのも贅沢よねー」

イングリッドが横を向くと、緩んだ表情のルイズが近くにあった。
「ルイズや」

「なーに」

ルイズを手伝っていたメイドたちが、こちらに会釈しながら控え室に戻っていきのが見えた。それを見送りながら、何となくルイズの髪を触ってしまう。さらさらのすべすべで気持ちよかったが、あの香りが失われ、かすかにフローラルな香りと取って代わられてしまったのは、何となく残念に思うイングリッドだった。

「……主はどれくらいの頻度で風呂に入るのじゃ？」

窓際に手をついて、イングリッドが見ているものを一緒に見ようとするルイズは、空を見上げて視線を揺らせている。

「そーね。今の時期なら週に1回かな？」

メイドにわしわしやられているタバサの姿を見ながら、イングリッドはルイズと肩を寄せ合った。ルイズも、腕を投げ出してその上に顔を乗せ、イングリッドの方を眺める。

「夏になると、昼間でも入るのかや？」

軽く目を瞑ってしばし考え込んだルイズは、目を開くと鳶色の瞳をイングリッドの紅い瞳に合わせた。

「そんなことも言ったねー」

だらだらと笑いあう2人の後ろで水しぶきがあがり、波がその背を越えて頭を濡らした。

「なにしてんのっ。2人ともー！」

慌てて振り返った2人の視界に巨大な黒パンの塊が押し寄せた。

「あやしー、何の相談？」

2つの丘の上にかすかに見えるキュルケの顔を見上げて、顔に張り付いた髪の毛を払いながら2人は顔を見合わせた。

それからイングリッドがキュルケを見上げる。

「このラードを使って、何を調理しようか、とか？」

イングリッドは目の前の突起物をぺしぺし叩いた。

「この脂身を捨てると、食堂の調理人に怒られそう、とか？」

ルイズは目の前の突起物をつまんでぐるりと一回転させた。

キュルケは2人の腕をつかんで引き剥がした。

「羨ましいならそういいなさいよっ！」

水しぶきを上げながらキュルケが後ずさった。2人は顔を見合わせて笑った。

「ま、それは半分冗談にしてもじや」

「半分は本気なんだ……」

胸を両手でガードして身体を捻るキュルケから視線をルイズに戻しながら、イングリッドは窓を背にしてキュルケに相對し、湯船に身体を沈めて肩まで水面に潜らせた。銀色の髪の毛が湯船に広がる。

つられてルイズも同じように身体を縮ませる。桃色の金髪が、銀糸と混ざり合ってキラキラと輝いた。

「あのメイドたちは新人なのかや？」

タバサにシャワーを浴びせているメイドを眺めながらルイズは頭を傾げた。

「そうね。どこか外でメイドの経験があるような子でもない限り、新人メイドは、まずはバス・スタッフよね」

湯船の中で胡坐をかいて、2人の対面に座るキュルケが頷く。

「2年ぐらい、長くても3年ぐらいで別のことをやるね」

ルイズも頷いた。

「風呂掃除とかもあの子達の仕事だから……意外と力仕事なのよね」

身体を揺すりながらイングリッドに視線を移すキュルケ。

「ここで身体を作ればつぶしが効くモンね」

そこでニヤリとすると、ルイズに視線を移して顔を近づける。

「う……なによ」

「ふっふーん？」とでも言いそうな息を鼻から吐いて、ルイズの顔を見回すキュルケ。

「風呂掃除が大変だって知ってるのは……お母さんに罰でも食らったのかしら」

その言葉に目を丸くしたルイズはしばし身体を硬直させて、ついで両手を湯船の底から勢いよく持ち上げてそのままキュルケの顔面にお湯をぶっ掛けた。

顔を伝うお湯を避けて眼を細めたキュルケはルイズににじり寄った。

「凶星？凶星？凶星なんだ！」

ルイズの顔に直行するように、身体を傾げて頬を触れ合わせたキュルケは、華やかならざる笑みを浮かべて言葉を繰り返す。

たつぷりとお湯を含んで、自身の右肩に絡むキュルケの髪の毛を嫌そうに払いながらルイズは顔をイングリッドに向けた。

「……知らない！」

ルイズの体重を自身の右肩に預けられたイングリッドは身じろぎして、キュルケに呆れた表情を向けた。平均から高いほうにあるルイズの体温が直接肌を感じられて心地よい。

「それを言えるということとはな、キュルケよ」

キョトンとした顔を傾げて身体を戻すキュルケ。それで頭の位置が殆ど変わらないのだから、つまりは足が長いということになる。理解はしていたが女性同士としてみても、いや、女性同士であるからこそ、その抜群のスタイルにかすかな嫉妬を感じてしまうイングリッドだった。

「主も、風呂掃除の大変さを実体験として知っているという事になりませんか？」

眼を真ん丸くしたキュルケに、ルイズも僅かに眉を上げて振り返る。

刹那の間を経て「ぷっ」とかわいらしい笑いを噴出したルイズに釣られてイングリッドもかすかな笑いを漏らし、キュルケは不満そうに頬を膨らませた。

キュルケが何かを言おうと身体を乗り出したところで、湯船を揺らせてその背中に張り付いた小さな身体から腕が伸びて、その双丘を横からつかんだ。

体格的問題から、突端部まで手が届かないのは明らかなので、両脇からわしわしとキュルケの統治する丘を揺らせるだけである。

「あんっ！」

普段のキュルケから想像もつかないかわいらしい声が彼女の口を

裂いた。

その身体にさえぎられて見えない後ろから、低い声が響く。

「妬ましい」

普段、タバサが醸し出す雰囲気からすれば、随分と感情の籠った声だった。

「ちよ、ま、いやっ」とか言いながら身体を振るキュルケの姿を見て、顔を見合わせた2人は溜息を付いて、突発的な地震に揺れる丘を眺めて呟いた。

「ま、羨ましく思わなくは無いかなあ」

「これだけ立派なら、役立つことも多かろうぞ」

イングリッドは呆れるばかりだったが、ルイズの手が湯船の中でわきわきしていたのは見逃すことにした。

しばらく4人でかしましく騒いで、ようやく湯船からあがって、そのまま更衣室に行くのかと思えば、3人はシャワーの前に足を向けた。それに連なつて、イングリッドも先ほどのシャワーの前に足を向ければ、再びメイドたちがぞろぞろ姿を見せて、シャワーからお湯を出して、身体をすすぎ始めた。

特に、髪の毛を入念に流した。

それぞれに一人づつがついて、櫛で髪を梳かしながらお湯を通す。

ザザとポーレット、それに他の2人を合わせた4人が、小さなタモみみたいなものを手に、湯船を歩き回ってゴミを……4人が落とした髪の毛をすくって、バケツに落としていく。

10分近い時間を費やして、ルイズたちの身体をすすいだメイドたちは、大量のタオルを駆使して、4人を包む水気を切っていく。あつという間に使用済みタオルの山が出来て満足がいったのか、互いに視線を交わして頷くと4人のメイドは一步下がって頭を下げた。

ルイズとキュルケが頷きかえすとさっさとその場を離れたので、タバサとイングリッドが後を追って更衣室に移動する。

僅かに振り返ると、頭を下げているメイドの向こう側に湯船の中を移動するザザとポーレットの姿が見えた。ポーレットはイングリッ

ドの姿に気がつくことは無かったが、ザザはイングリッドの視線を受けて、小さく微笑んだ。それにむかって手を振り、更衣室に下がる。

更衣室に入ると、メイドたちがわっと集まって、バスタオルで攻め立てた。レクリエーション棟の入り口から付き合ってくれたメイドが一人、キュルケと言葉を交わしている。彼女がキュルケに頷いて足早にクロークルームのほうへ向かうと、僅かな時間を経て、別のメイドたちがぞろぞろと入ってくる。

手にしているのは間違いなく着替えだった。一人分の下着を持つ者、一人分の上着を持つ者で、合計8人。随分手間のかかる騒ぎだった。

19人のメイドがルイズたち4人を囲んでわいわいと騒ぎ、12人のメイドが椅子に座ってこちらを静かに眺めている。なんとも不可思議な情景であった。

更衣室付きのメイドが手早く4人の姿を整えていく。ここでも手間取ったのはイングリッドで、すっかり綺麗になったいつもの服を身につけるのにイングリッド自身が手伝うことになった。

自分の服を着るのに「手伝う」というのもおかしな話だが、事実としてそういう形になった。これもまた、なかなか得がたい体験だった。

サンダルを履いてクロークルームに移動し、ポーチやバッグ、そして杖を受け取る。イングリッドも小切手の束を受け取った。イングリッドは気がついていなかったのだが、小切手の束も、シルフィの涎の餌食になっていたようだ。イングリッドの失態だった。いまここで手にした小切手は、明らかに新たに用意されたもので、インクの臭いが漂ってきそうだった。後ほどオスマンに頭を下げに行かなくてはなるまいと一人ごちる。

玄関ホールまで移動して、フットマンに手伝ってもらいながら、ルイズはポーチとマントを身に付け、そしてブーツを履く。ブーツの靴紐をフットマンが調べようとしたが、ルイズが遮って「ごめんなさい。それは使い魔にやらせる仕事にしたの」と断って、手持ち無沙汰のイングリッドを手招いた。

頷いて足早にルイズの前にかがんで、すばやく紐を通した。周囲で見守るポーターや、横で視線をやっていたフットマンが感嘆の声を上げた。

ルイズの足を最初に取ったフットマンが頭を下げた。

「見事な手前ですね。御見それしました」

大げさに言う彼に、気恥ずかしくなったイングリッドは小さく笑いかけた。

「ま、これぐらいしか芸が無いので……。主らのように何でも出来る者が羨ましいよ」

立ち上がって首を回すイングリッドに何故だか嬉しそうな表情を浮かべて彼は顔を上げ、再び頭を下げた。

すっかりと準備が整った4人は最後に互いの姿を確認して互いに背中を向けたり身体を捻ったりして満足すると、メイドたちに頷いた、ルイズは自然な動きで手を挙げて謝意を示した上で、声を出した。「手間を取らせてゴメンね。有難う」

若干の動揺を見せる彼らの中から、最初から何くれとこなしていたメイドの姿を認めて、彼女に改めて笑いかけるルイズ。

「有難うね」

かすかな困惑を表情に乗せて一瞬視線を交わした彼らは、再度、深々と頭を下げた。代表して件のメイドが、華やかさを感じさせる声を上げた。

「行つてらっしゃいませ。よい一日を」

それ続けて全員が唱和する。

「行つてらっしゃいませ」

身体を斜めに引いたルイズが笑顔でそれに手を振ると、彼らも笑顔を返した。

厩舎に向かう4人を彼らは、レクリエーション棟の角を曲がって視界から消えるまで見送った。

3階建ての厩舎にたどり着くと、柵の向こうでシルフィードが情けなく「きゅいきゅい」と喚いた。

ピロティ形式で一階が駐車場ならぬ、駐馬所になっているところは、シルフィのいるスペースだけ、急遽、作り変えたことが明白で、そこに繋がれている他の馬から完全にシルフィの姿が遮られるように囲われていた。

間を開けて2重にされた囲いのスキマに、香木が積み上げられているのは、シルフィの臭いで他の馬が脅えないようにする対策だろうか？

それを疑問に思っ、タバサに問うたイングリッドだが、なぜかキュルケが答えを返した。

「空いている寮塔の壁をぶち抜いて、シルフィードの住処を作っているところよ」

何だそりやと聞けば、つまり、竜や、ワイバーンとなれば、地面をのたのた走るより、高い場所に降り立つて、そこからまた飛び立つほうがはるかに効率がいいということだ。

「竜籠」と称される、大型亜飛竜とそれが下げる「籠」も、地面から飛び立つのでは、人や荷物を載せたままでは困難で、通常は、背の高い竜舎の屋上から飛び立つのだそうだ。

それが出来ない場所では、先に御者が竜籠を浮かべて、荷物を担いだ乗客が自身の魔法で空を飛んで空中で乗り移るのだと言う。それに感心してイングリッドは頷いた。

柵を空けてシルフィを引っ張り出すタバサだが、俄かに厩舎が騒がしくなった。あちらこちらから馬やら鳥やらの鳴き声が響いて、何かを打ち付けるような音も響く。あわてて走り回る人の気配が多数感じられるところを見れば、確かにシルフィがここにいることは大迷惑なんだなと納得する。

馬の嘶きが響く中で、ルイズがふと顔を上げ、それからタバサ、キュルケの順に視線を合わせた。

両手で拝むようにして頭を軽く下げる。

「ゴメン、ちょっと待ってて」

2人がそれに返事をする間もなく、ルイズが走ったのでイングリッドも慌ててそれを追った。

存外に素早いルイズが、厩舎の一角で一頭の馬を宥めている所でイングリッドは追いついた。

「どうなさったルイズよ……主の馬かや?」

馬丁が宥めていた牝馬は、ルイズが前に来たことで落ち着いて、しかし荒い息をルイズに吹きかけて、顔をルイズに押し付けてしきりに上下させていた。

馬丁が溜息を付いて肩を落とし、ルイズに頭を下げた。

「申し訳ないつす、嬢様。わしが面倒見切れないばかりに」

横面を撫でて馬を落ち着かせるルイズは首を振った。

「ううん。私こそゴメンね。最近顔を見せなかったから」

馬丁は手を振って慌てた。

「いや、申し訳ないつす。新学年が始まって忙しいところで、それは知ってますからに」

頭を挙げた彼は、こちらを訝しげに睨んだ。まず背中側に視線を送って、対応を変える必要のあるモノが無いことを確認して、胡乱げな眼でイングリッドをねめつけた。

「で、こちらさんは?」

馬の頭に額を擦り付けて離れたルイズは、腰に手をやって苦笑いを浮かべながら溜息を付いた。

「もう。直接会うのは初めてかもしれないけど、説明したでしょフランツ」

小さく驚いて、フランツと呼ばれた馬丁は慌てて頭を下げた。

「ごりや、もうしわけないつす。嬢様の使い魔になりなされたイングリッド様ですね。始めまして」

顎を引いたルイズが呆れた顔を浮かべて訂正した。

「イングリッドよ」

フランツは手を振ったあと頭をかきながら頷いた。

「ああーすいませんで。イングルリード様」

イングリッドは首を傾げてルイズに視線を移すとどちらとも無く笑ってしまった。

確かにイングリッドと言うのは「フランス語」的発音を常態にして

いるものからすれば発声が難しかろうと納得する。ルイズもそれを理解しているのか苦笑いするばかりだ。

考えてみれば、名を名乗って即座に正しい発音に「近しい」表現をこなせるルイズたちが例外だろう。やはり「メイジ」であるからだろうか。ホンの僅かとはいえ、実際に魔法をこなす姿を見た際、非常に完成された発音をしていた。授業でシユヴルーズが唱えた呪文とルイズが唱えた呪文は殆ど完全に同一の発音が行われていたことを思い出す。

魔法の行使にあたり発声や発音も重要な意味を持つのだろう。それがして、ルイズたちがイングリッドの名前を正しく呼べる事に繋がっているのだろう。そういえば、ルイズの声は、ある種の歌声を売りにする生業の者にも劣らない、美しい声だと内心で評したことを思い出した。

イングリッドは彼に頭を下げた。

「ルイズの使い魔をやっておるイングリッドじゃ。よろしゅうな、フランツよ」

彼は差し出された手を躊躇いなく握り、嬉しそうにそれを上下に振った。

「よろしくですだ、イングリッド様。嬢様をよろしゅうにして下さい」

純朴な顔に刻まれた険しい皺も頼もしく思える顔が、愛嬌のある笑顔で飾られた。よく日に焼けた肌が健康的で気持ちの良い雰囲気、外見から年齢を推測させることを難しくしている。無精に適当に剣刀を当てている程度に思える顔には、ひげが茂って、ますます年齢不肖な姿であった。

ただ、ルイズの事を心配しているのは存分に伝わってきた。恐らくは、ルイズの領地から馬と共に学院についてきたのだろう。

馬を世話する立場からすれば、馬の持ち主に対する情愛は、馬に対するものと重なる。いろいろと難しい立場に会ったことが知れるルイズであっても、馬丁と言う立場の職業人からすれば、自身が世話をする馬が愛する持ち主は、何がどうあれ、馬丁も愛する。シンプルな思考ですむのだ。魔法が使えないメイジがどうかなんていうのは

どうでもいいのだ。馬が心許すルイズ。だからフランツもルイズに心を許すし心配もする。その使い魔たる立場のイングリッドにルイズを託す。

この世界に出でて初めて、極めて簡単でそれでいて本心で主たるルイズに対して一切の打算の無い感情を感じて、イングリッドも華やかな笑みを返した。

「まかせておけ」

胸を張って、力強く応えた。

名残惜しそうな馬の姿を振り切って、フランツに手を振りながら、ルイズは溜息を付いた。

「ホンとは、今日も馬にしたいんだけどな……」

ほう、と首を捻って、ルイズに視線を移す。

「ルイズは乗馬が好きなのかや」

ルイズも馬からイングリッドに視線を移す。

「うん。そうね。先週末までは、3日と空けずにダルジナに触っていたし、ダエグの曜日の午後や、虚無の曜日はなるべく乗馬していたわ。

ダルジナには寂しい思いをさせちゃったかも」

「ダルジナ」が馬の名前なんだろうと当たりを付けて、頷く。

「家からつれてきたのだな」

ルイズは頷いた。

「うん。ダルジナが2頭目の私の馬なの。ダルジナに乗って直接学院の正門をくぐったわ。最初の仔は父のお下がりだったんだけど、足を折っちゃってね」

思い出したのか、沈んだ調子で足を遅くするルイズにイングリッドは寄り添った。

「……主が扱いを誤ったとは思えんが」

小さく頷くルイズ。

「歳だったからね。優しい仔だったんだけど。」

「……乱暴にしても怒らないアスタルテに、いい気になった別の貴族が魔法で驚かして……、ひっくり返っちゃった」

情景を思い浮かべたのか、足が完全に止まってしまったルイズを複雑な表情を浮かべてイングリッドは抱きしめた。

「いらぬことを聞いたの、ルイズよ。許せ」

首を振って否定するルイズ。顔を上げて視線をイングリッドに戻す。

「ううん。勝手に思い出しただけ。イングリッドには関係ない話よ」

身体を離して、両手でルイズの肩を叩いたイングリッド。

「うむ。そうかもな。だが、そういう話を自然に向けられるというのは、存外、嬉しいことじゃや。そこは有難うと言っておこう」

一瞬身体を跳ねさせたルイズは、慌ててそっぽをむいて、大きな動作を持って歩き出した。

準備を整えたキュルケとタバサ、そしてシルフィードがその先に待っている。

イングリッドは小さな笑みを表情に浮かべてルイズを追う。

「そういえばキュルケやタバサも馬を持っているのかや?」

行進練習でもするように両手を大きく振るうルイズが乱暴に答えた。

「そうよ!キュルケの馬は黒くて大きいし、タバサも藍が美しい牝馬を持っていたわ!」

ルイズを追いかけながらイングリッドは首を捻った。

「持っていた?」

徐々に歩くペースを普段のものに戻しながら、ルイズが頷いた。

「召喚の儀の前日、虚無の曜日にはタバサの馬丁が引いてどっかいったわ。あれはきつと、使い魔を受け入れるための準備だったのね」

ルイズは自分が言った言葉にかけるため疑問を持っている風ではなかったが、イングリッドは頭を傾げた。

召喚する前に、厩舎を空けた。なんだそれは。

うっかりインコや兎を召喚していたらどうする気であったのだらうか?

リユクスであるなり、ペガサスであるなり召喚したにせよ、それを見届けてから考えればいい話で、実際にそれをなしていないのに馬を

追い出すとか。タバサってば実はうっかりさん？それとも自信過剰??

ルイズとキュルケが騒いでいる。

どこ行ってたの。ダルジナが騒いでいたから。ああ、あなたの馬ね。そういえば私のアクセルはどうかしら。後にしなさい！

その騒ぎを横目にタバサに相對するイングリッド。その視線にタバサは首を傾げた。

初めてのお出かけ（3）

シルフィードの上で向かい風に当てられて初めて、ルイズが伊達眼鏡を用意したことの意味を理解したイングリッドであった。まったく想像力がないものだと思われながらも、自身は反省しつつ、嘆息した。ルイズが眼鏡を取り出した時点で疑問に思わないでもなかったのだが、あの時点ではそこに頓着しなかった。疑問があるのなら問いただすなりの方策があつた筈である。

キュルケも当たり前のように眼鏡をかけていた。こちらも伊達眼鏡であるようであつたが、控えめでありながら趣味の良いデザインだつた。形状的にはアンダーリムであり、鼻当てがなく、ブリッジで直接支えられているが、比較的高い鼻を持つキュルケには良く似合っていた。太いテンプルに精緻な装飾が施されているが、光沢のある赤で飾られた材料であり、反射した光が装飾の陰をあいまいにして、華美にならない印象だ。ゴーグル代わりというならなんとも贅沢なものだつた。

タバサは出会つた当初から眼鏡である。余りにも彼女の顔に似合っているため、逆に印象が薄い。こちらに関して伊達眼鏡であることは確実ではないだろうか、というのがイングリッドの見立てだが、顔を飾る装飾という意味でもなさそうだ。

鼻の付け根にある赤黒い部分は、随分と長い間眼鏡を掛けた者に特有の「傷」であるし、タバサ自身も鼻をつまんでいるクリップを気にした風も無い。ツルの無い所謂フィンチなのだ。落ち窪んだ彫の深い顔を持っているというのならともかく、若いタバサの顔は未だに「平ら」であるといったほうが良い、シンプルな顔立ちであるから、フィンチを使っているのは不自然さを感じる。イングリッドが不躰に観察したところ、タバサ程度の鼻の高さではやはりフィンチの使用に無理があり、通常の形態ではレンズがべったりと顔にくっついてしまふためか、クリップからバーチカル・ブリッジを介してホリゾンタル・ブリッジに繋がるといふ、無骨で虚飾がないデザインだつた。ただ、ルイズやキュルケが眼鏡をかけたことでイングリッドは、改めて

タバサを注目して、そこで初めて疑念を感じた。その程度の不自然さであり、特別に注目しない限りは、その眼鏡はタバサの顔に馴染んでいた。

クリップで顔面に固定するフィンチは、馴染まない内は皮膚を傷つけて血を滲ます結果をもたらす事が多い。タバサの眼鏡はその段階をとつくに乗り越えた状況だった。慣れているんだろう。ゴーグル代わりというにも小さすぎるような印象があるし、だいたい、呼び出して数日ほどこしか経っていないシルフィに乗るにあたって用意したというならば、いろいろとおかしな話になってしまう。なにか魔法的な意味があるのかもしれないのかなと、イングリッドには想像するしかないところだった。

シルフィの首の付け根に座ったタバサ。それを後ろから抱くようにするキュルケ。それと背中合わせになって座るイングリッド。それに相対するルイズ。

おかしな順番と座り方になっていたが、そうしないとイングリッドが眼を開けることが難しかった。シルフィードはそれほどまでに速い速度で空を駆けていた。

そういった状況に対して、それなりの「手立て」を持っているイングリッドではあるが、それをここで見せてしまつて良いかに関しては葛藤がある。秘密を共有することになった2人とはいえ、はたして自身の能力をどこまで晒して良いかという問題に関して、2人を判断する材料の持ち合わせが少な過ぎたのだ。決断できないでいた。最悪ルイズになれば見せても良いと思いつつ、優柔不断にも、ルイズに対してすら迷っている部分なのだ。

ここではシルフィードの存在も問題だった。何しろ竜なのだ。どんな神秘的な力を持って、イングリッドを見ているか。もしかしたら、すでに全てを見透かされていても不思議ではないとすら思えてしまう。

決して弱くは無い状態のイングリッドと正対して直角以上に渡り合ったハウザーという過去を思い出すと、シルフィードに心許す事が難しくなってしまう。こんなに「可愛い仔」に心を許すことが出来な

い……。なんとも寂しい話であった。

きやいきやいとかしましく騒ぐキュルケの後ろで、イングリッドはいろいろと不自然なことがあることに気がついていた。ルイズとどうでも良いことを駄弁りながら、小さな疑問を積み重ねてしまっていた。

シルフィードの背は広い。

彼女は、鼻の先から尻尾の先まで15メートル。翼を広げれば両翼20メートルを超える巨軀を持つ。その背中は畳2枚を長手方向に並べて3組6枚は載せられる広さだった。実際の可載重量がいくらかまでは判らないが、体育座りをすれば、大人12人は座れるほどの大きさなのである。

「元の世界」で竜の背に乗った経験なんてあるわけも無いイングリッドだったからそれ自体はどうでも良い事なのだが……竜に乗騎するにあたって、馬に乗るようにその胴体を足で挟むことはできなかった。そんなに大きい胴体を挟みこめる人間となるとサガツトぐらいしか思いつかないイングリッドだが。

つまり、騎乗姿勢が不安定なのである。

シルフィードの背は広い。翼の付け根の部分も含めて良いというなら、更に4人ぐらい追加してももなお余裕がありそうだった。事実、タバサは随分と慣れた雰囲気で胡坐をかいているし、キュルケも「女の子座り」だった。イングリッドとルイズは足を投げ出して互いに絡めている状態である。それで何の不安もない。随分と安定している。

これだけ広い場所なのだから、空の上とは言えども何の不安も感じることには無いのだが……おかしい。イングリッドはそう思ってしまった。

この世界の竜は、背中に何かを乗せることを常識としているのだろうか？

シルフィードが飛び立つそのとき、彼女は大して羽ばたくことも無かった。シルフィの周囲に風が集まって、翼を広げた彼女を持ち上げた。そういう風にイングリッドには思えた。鳥が地面から飛

び立つ様であれば、その背中にしがみつかなくは振り落とされるであろう。アホウドリのような飛び立ち方でも、大変な苦労があるだろうと思える。地面を駆ける間に振り落とされてしまうかもしれない。

竜であるのだから、多分に間違いなく「魔法」によるサポートがあるのだろう。竜という存在なのだからそれぐらいのファンタジーは許されるであろう。そうではあってもイングリッドが不思議に思ったのは、飛び立つときも飛び立った後も、シルフィードが背に何かを載せることに随分と慣れていて霧囲気であったことだ。

広い背中だと言っても、やはり生物の背中なのだ。幸いにして背骨の両脇から翼をつなぐ筋肉が盛り上がり、翼の付け根から随分と頑丈そうなフィレット状の膜が尻尾方向に伸びているから、相当に平らなのだが、それもシルフィードが明らかに騎乗中の4人に配慮して飛行姿勢を整えているからという面が大きかった。尻尾を跳ね上げた、かじりの前傾姿勢で飛行しているのだ。三角定規の長手方向を水平にしているかのような姿勢になっている。

モノを載せるために平らに均したわけではない、やはりどこまで行っても生物の背中なので、そこそこの起伏はあるし、もしも翼を羽ばたかせるような行為に及べば、背骨の左右極僅かの範囲以外は激震に見舞われるだろう。

しかしイングリッドがシルフィードの一連の行動を観察した限りでは、彼女が背中の上に特別な心遣いを見せているとしか思えなかった。

呼び出されて4日程度。それぐらいでそんなにも簡単に慣れる事なのだろうか？素晴らしい調教振りである。

呼び出したシルフィードに嬉々とした表情を浮かべて、日がな一日乗り回して喜ぶタバサ。などという想像も難しいことである。しかし、それぐらいをして初めて、シルフィードを慣らすことが辛うじて出来る程度の期間ではないだろうか？竜が、それも風韻龍が、格別のコミュニケーション能力を持っているがゆえに、特別素早く仕込むことが出来たのだろうか。それとも、やはり、この世界の竜は人を背にすることを常態にしているのだろうか？よくわからない。

どうにも悩んだところで答えが出る問題ではないし、さりとて、本人に聞いてよいものかも迷うところだった。少なくとも、キュルケやルイズがいる場所で尋ねて答えが帰ることは期待できない。

これもまた、要確認か。

疑問やら疑念やらが積み重なってイングリッドの頭の中で不安定な塔を築いてぐらぐら揺れている。その積み重なった積み木を崩れ落ちる前に処理できるのだろうか？ 深刻な疑問だった。その疑問すらも積み木の上に積み上げるといふのか？

嬉しそうでありながら、どことなく含みのある笑みを見せるルイズ。イングリッドと相對した主の顔を見つめる。

本当は2人きりで買い物に來たかつたのだろうか？ 自身の迂闊な発言で、余計なモノが着いて來てしまった。そういう反省があるのかもしれない。

ただ、イングリッドとしてはありがたいことだった。どうにもルイズにはお嬢様然とした雰囲気が付きまといっている。ルイズとのみ、2人で街に出かけて果たしてこの世界の暗部を見ることが出来るか。そこまでは行かなくても、どうもルイズと会話を続けているとこの世界の常識から微妙に逸脱していく感覚が拭えない。

イングリッドにしてもルイズの事を世間擦れしているとまでは言いたくはない。だが、タバサとは別の方向で世界の暗部を覗いている雰囲気があるキュルケが一緒であれば、今回の「お出かけ」は非常に心強かった。

「ゼロのルイズ」であるが故に、メイジという立場にある貴族の暗部を突きつけられたルイズ。

その出生に華やかならざる部分があるが故に、貴族社会の暗部を突きつけられたキュルケ。

そのあり方そのものに人間社会の暗部を突きつけられたタバサ。

そして、好むと好まざるを別とせず、その存在の有り様ゆえに、世界の暗部を渡ってきたイングリッド。

イングリッドに関しては、その生きた世界が別であることを考慮す

る必要があるにせよ、その存在の根底にわだかまっている澱の暗さでは似たもの同士の集まりかもしれないと思わせる4人だった。

風を斬る音を聞けば、時速200キロ前後だろうか？本格的なゴーグルを用いなければ通常は眼を開けるところかシルフィードの背にしがみついて何とか耐えられるか、といった騒ぎになるはずだが、実際にイングリッドの身体に吹き付ける風はそれほどのものでもなかった。眼を開けて前を見ているのが困難。程度で済んでいる。魔法的な防護があるのだろうか？

そもそもシルフィードは、上空に舞い上がって以降、殆ど羽ばたいていない。微妙な進路変更も尻尾を微妙に振り、翼の先端を僅かに捻るだけで見事にこなしている。よって彼女の背は非常に快適な空間を維持していた。風を斬る音自体も大音声と言う訳ではない。窓ガラスを隔てた向こう側から響いているような妙なくぐもりである。ドイツあたりのインターアーバン乗車中に感じたような音質だった。やはり人外の加護があるのであろうとイングリッドは推測する。

思考が行ったり来たりしている、自身の心の揺らぐ様を自覚してイングリッドは苦笑いを浮かべた。ルイズとの会話が途切れた瞬間に、何となく伸び上がって地面を見る。

かなり離れた所で大地を抉る傷跡……街道が見えて、そこにキャラバンのような一団が延々と列を成しているのがイングリッドの視界に捉えられた。

「あれは、なんぞや？」

新たな話題作りのためにイングリッドは、ルイズに聞くとは無しに尋ねる。

ルイズもイングリッドの視線を追って、それを眼にした。

「ああ、あれね。たぶん、学院にモノを運んでるんじゃないかな」

「ほう。学院はあれほど大量の物資が必要なのか」

「あれで一日分ぐらいじゃない？」

「……あれで？」

こちらの会話に気がついたのか、キュルケが振り返って話題に加

わった。眼下、というにはいささか離れた位置で、100両近い数の馬車が隊列をなしている。御者や、護衛の騎乗者が幾人か空を振り仰ぎ、こちらを眺めているのが「見える」。1000人近い人間の気配が感じられた。

「ああ。〴〵苦労様なことよね、アレ」

狭くは無いが決して安全とはいえないシルフィの背で、キュルケは危なげ無く慣れた仕草で身体を回した。

……ルイズが存外にさびしがり屋で会話に餓えている事実は十二分に理解していた。しかし、実のところ社交性がある風を装っているだけで、キュルケも気安い会話を渴望しているのではないか、と刹那に疑問を思うイングリッドだった。

どうも機会があると見れば、遠慮なく会話に割り込んでくる。そんな気がする。

「10000人を養うんだから大変よね」

「10000人じゃと……」

キュルケの言葉に頷いているルイズの横で、その言葉が示した意味が瞬間には理解できなくて鸚鵡返しになったイングリッド。変な表情でルイズを見てしまう。

「ああ、イングリッドは、トリステイン魔法学院にいる人間が、どれくらいか知らないモンね」

「そうね。トリステイン魔法学院は『学校』として見るといろいろと常識外れだから、イングリッドが驚くのも無理ないか」

2人が腕を組んで「うんうん」と頷く。タバサがちらりとこちらを見て、すぐに前へ向き直った。

そうこうしているうちに、キャラバンの隊列は後ろに置き去りになっっていた。

それを見送って、視線を戻し、キュルケが言葉を続ける。

「生徒数9000人余り。常勤教師が300人ぐらい。専門講師も300人ぐらいかな？職員数は2000人ぐらいで使用人が約5000人ってトコ。生徒以外は家族がいる場合もあるから、学院敷地内に暮らす人間は10000人をくだらないよね」

その言葉に続いてルイズも訳知り顔でイングリッドに向き直る。ルイズにしても誰かに頼られる、誰かに尋ねられると答えずにはいけない性癖があるのではないかと密かに見立てるイングリッドだった。生来、教師向きの性格かもしれないとまで思ってしまう。キュルケもルイズも落ち着いているところであれば、良い性格をしていると思える。

「特殊授業で非常勤を雇うこともあるし、課外授業では、常備職員を臨時で雇うこともあるわ。ほかにも生徒が直接雇い入れた使用人がいたりもするしね」

その言葉にはイングリッドも素直に納得した。

「フランツのようにかや」

ルイズが頷く。そうしてキュルケに視線を移すとキュルケも頷いた。

「私も馬丁を3人雇っているし……タバサは大変よね。シルフィの世話に30人も雇ってる」

その言葉に僅かに眼を見開いて驚くイングリッド。タバサの背に視線を送ると、斜めに傾いだ顔で半眼でこちらに視線を送り、また前に戻した。

「そんなに必要なのかや……」

キュルケが小さく肩を竦めて両の手で空を振り仰いだ。

「さすがにシルフィの食べるものを用意するまでは、学院が面倒見きれない見たい」

キュルケがシルフィードの背中を「ぽんぽん」と叩くと、抗議をするように尻尾が振られて彼女の長い首がこちらを振り返ろうとして……すかさず「ぽかり」と殴られた。タバサの杖はなかなかに使い勝手がよさそうである。

くすりと小さな笑いを見せたキュルケがイングリッドに視線を移す。

「まあ、半分ぐらいはシルフィが驚かす馬のフォロー役よね。シルフィ専用の住処が出来れば人数は減らせると思うよ」

シルフィードを引き出すときに発生した騒ぎを思い出してイング

リッドは頷いた。

「なるほどのう。納得じゃ」

しかし、イングリッドは別のことを考えていた。

学院に10000人。これ自体に驚く理由はない。

大学敷地内に10000人。そう考えると、それなりに大きな学校だ。で済まされてしまう。カレッジ敷地内に10万人がひしめいている場合も極僅かな例とはいえ、いくつもあるので、驚くべきことではあるかもしれないが、特殊な例外とまでも言いがたい。

しかし、生徒数9000人に対して、教職員が10000人。これはちよつと想像を絶する話だった。

なかなか比べるべき対象が思い浮かばないが、無理やり例に引き出しても、近世オックスフォードであつてすらこんなに歪な人員比率ではなかった。精々が生徒2に対して教職員1というところで、それも極初期の話である。

完全全寮制が維持されていたころのオックスフォードでは生徒数20に対して教職員が1という割合が平均だった。それでも他の学校と比べれば「飛び切りのイレギュラー」といわれるレベルで、現在では40対1ぐらいだろう。それであつてすら、なお過保護だと言われている。

対してトリステイン魔法学院。

過保護どころの話ではない。学業以外の何がしかの役割をトリステイン魔法学院が持っていると言われなければ、幾らなんでも生徒以外の人間が多すぎる。

或いは、そういう形がハルケギニアの常態なのかとも予想する。やたら滅多ら多いトリステイン魔法学院の教職員の総数を説明した2人の声には「平民なら驚くよね」ぐらいのニュアンスが透けて見えた。つまり、ルイズやキュルケにとつては常識であり、疑う事も無い貴族社会の通念なのだろう。

イングリッドはハルケギニア世界を自身の世界と「比較」する意味の無さを、遂に受け入れることにした。いや、ルイズの安全を図るた

めに自身の能力や常識と「比較」して行動原理を定めることはやめられない。だが、世界観の違いに一々驚くことはなんら意味がないことだと理解した。もう、この世界は「本当に」異世界なのだと納得したつもりになった。

今の今までイングリッドは、自身の認識のどこかにハルケギニアが「異国」であるという認識が張り付いていることに気がついた。いや、そう信じたかったただけだ。

異国ではない。違う。

異世界なのだ。

たまたま姿かたちが自身にそっくりの、コミュニケーション可能な生物がいた。それがイングリッドの認識を歪めていた。そうとしか思えない。

端からルイズが、こう、犬顔をした生物であったとか、猫耳でぼいーんばいーんな生物であったとか、極端な話、触手がうねうねしているような生物だったら、こんなことでうじうじ悩む必要は無かっただろう。異世界だから仕方ないね。それで全てを納得したはずだ。

……そんなのであったら、召喚された瞬間に大惨劇であったであろうが。

イングリッドは突然にハウザーに対して申し訳ない気分を持ってしまった。

あの姿が彼の世界の常態だというなら、突如として人間世界に引きずり込まれてしまったその時に、大暴れするのも当然過ぎる結果であろう。自身に置き換えて想像するとよい。周りに存在するモノが、術からずハウザーだというなら。イングリッドであつても冷静ではないられないだろう。

その大暴れの結果に対して、ハウザーを打ち倒す行動は常識的対応であつたと今でも思うが、その前に、何か別の選択肢があつたのではないかと思ってしまう。

結局は、イレギュラーな事態の出立に関して、抜きがたい先入観があつたのだろう。実際にそういう立場に置かれて始めて、彼がどのような困惑を得たか理解できたような気がする。

いや、まだ自分は幸運なのだ。見た目が変らない人間に囲まれている。衣食住で困ることも無い。皆が優しく接してくれている。唯生活を営むだけなら、異世界であるという自覚無しに生きることも可能だろう。この世界はイングリッドにとっては酷く優しい。呆けてしまうのも納得だった。

いつの間にか思考が飛んでいたイングリッドを置いて、キュルケとルイズがどうでも良い会話をしている。教師がどうか職員がどうか。顔が良いとか、仕事ぶりが素晴らしいとか、トイレが綺麗になったとか、朝食がおいしくなっていたとか。

会話をするうちに、内容がアツチにコツチに飛ぶのは女子特有の行動である。本当に平和な世界だと思う。

それに苦笑いを送って、キュルケの横を這い、タバサの後ろににじり寄った。タバサは即座にイングリッドの気配に気がついて横目を送る。

「なに？」

イングリッドは足を投げ出して、タバサの身体を挟み込む。風を受けて眼を細めつつ、胡坐をかくその小さな身体を抱きよせた。青い髪の下でその体表温度が僅かに上昇するのがわかった。イングリッドはそういったモノを「見る」能力に長けている。顎を整えられた青い頭髪の上に軽く乗せた。居心地悪そうにタバサは身動きみじろしたが、イングリッドは構わなかった。

タバサから本気で嫌がっている気配が感じられない。タバサもまた、人肌に餓えている雰囲気があった。それを理解しているからこそイングリッドは何気ない風を装って、抱きついたのだ。

……イングリッドの「カワイイモノ好き」という個人的嗜好を満たす部分も若干はあったが。

「うむ。いろいろと教えてほしいことがあつての」

ルイズもキュルケの横を避けてイングリッドの背中に抱きついた。「なによ。私に聞けないことでもあつたの？」

不満がありありと伺える気配に、イングリッドも苦笑いを浮かべる。その後ろからキュルケも抱きついてきた。

その腕が大きく伸ばされてタバサを前抱きにしようとするが……流石に間に2人もいれば、タバサの前に腕を出すことまでは出来ないようだった。刹那、逡巡した後で、仕方なくイングリッドの前で腕を交差させる。

「むぎゅ」

低い位置にある頭がキュルケの双丘で挟まれて、イングリッドの背中に顔を押し付けられて、ルイズが小さな抗議の悲鳴をあげた。

悲鳴だろうか？

「いや、すまぬのタバサや。使い魔の能力……ああ、つながり、とでも言うのかや？そういうのを知りたくての」

「？」

タバサがイングリッドの顎の下で首を傾げた。

「我はイレギュラーな様での。その、なんじゃ。視界の共有とやらとか、うまく出来んのでの。どういう風な感じなのか知りたいと思うのじゃ」

キュルケに抵抗してもぞもぞとうごめくルイズの動きが一瞬強張った。その後ろでキュルケが刹那のルイズの反応に敏感に気がついて、疑問符を飛ばす。

互いが互いの機微に長じる……良い事ばかりではないのだと、イングリッドは嘆息した。

自身の後方で起きている出来事に疑問を感じて首を傾げたタバサだったが、無意識にシルフィの背中を撫でつつ、イングリッドに横顔を向けた。

常と変らぬ鉄面皮であったが、そこには僅かに好奇心が浮かんでいる。

イングリッドはタバサの鉄面皮が、訓練等で得られた技能ではなく、完全に自己流の工夫の結果であるのだと理解した。

「何が知りたい？」

イングリッドがタバサの後ろについた時点で、つまり、イングリッドの顔がタバサの上に生えた時点でシルフィードは飛翔速度を落とされていた。時速にして50キロにも満たない「ゆっくりとした」速度

だった。なんとも気を利かす竜である。

「んむ。使い魔の視界を共有できるそうだが……どう見えるか、興味があつての」

まったくの好奇心から出た言葉。そう聴こえる筈だと思う。しかし、大いなる緊張を心に抱きもする。

はたしてタバサはそれを説明してくれるだろうか。特殊な特典がついて、闘争の場での大いなる利点となるのであれば、今、延々とイングリッドが悩んでいるが如く、その特殊性を誤魔化すのではないだろうか？

そのあたりでタバサのあり方が図れるかもしれないという淡い期待がイングリッドにはあつた。

人付き合いの形としては反吐が出る話だが、ルイズの安全が第一と定める今のイングリッドのあり方としては「仕方が無い」と納得するしかない。

タバサは僅かに眼を閉じて、何かに悩む風に首を捻った。イングリッドが内心のみで緊張する。表情には微笑を浮かべて、小さく小首を傾げながらタバサの横顔を覗き込むように見つめる。

キュルケから見ると、その姿は、単純に好奇心のみしか見えなかった。所詮は20年弱の人生経験である。いくらイングリッドが「普通」の経験に疎いとはいえ、イングリッド以外の3人からすれば百戦錬磨の練達と言っても良いほどに人生経験に隔絶した差がある。それを磨くために時間を費やしたのではないにせよ、折に触れてそれが必要になり、そして繰り返し返してきたイングリッドの経験は、通常の人のある方とはかけ離れた数が繰り返し返されている。完全な欺瞞モードに入ったイングリッドの本心を知ることとは3人には不可能だった。

「ん……。どう、説明して良いか、わからない」
「？」

顔を覗き込まれていることに気がついて、顔を赤らめたタバサがぶつきらぼうに答える。キュルケはその姿にむずかゆい思いを抱いた。唇が震える。ルイズは身体を緊張させたままだった。

「そう。水中から空を見上げたような……そういう風に見える」

その風景を想像しながら「ふむ」とイングリッドは頷いた。極僅かなためらいを乗せてしかし、更に突っ込んだ質問を口にする。

「そうじゃな……んー、意識してはつきりと見るとか、ああつと、んー、竜特有の視界と言うか何というか……」

イングリッドの緊張とか葛藤とかというものは、この場では完全な空回りになっていた。

イングリッドがタバサやキュルケを見極めることが出来ていない現実から来る弊害であつて、タバサの方にはシルフィードの能力をこゝとさらに隠す意図が無かつた。

タバサがシルフィの能力の隠匿にいい加減になっているのは、シルフィードの能力が隠すほどのものではないということではなく、シルフィードが風韻竜であることが隠蔽すべき第一義であるという認識があるからだつた。

その秘密が破られている。で、あれば、もはやその能力に関してこゝとさら隠し立てすることも無い。タバサはそう認識していたのだ。

これは2人のそれぞれの「常識」に埋めがたい溝があつた事に端を発する認識の違いだつた。

タバサにとつてはシルフィが「風韻竜」であることを隠すことが重要であつて、それがばれてしまつている現状では、もう、隠すことは何もないという考えだつた。

翻つて、イングリッドは「風韻竜」というものがこの世界に於いても特殊であることを理解しているつもりであつたが、それはそれとして、個々の能力が有事の際に自身にどう影響するかを重視していた。固有の名称が明らかになつたところで、それはそれ。隠せる能力は隠し通すことに利益があるというならば、隠すべきだ。そういう考えである。

常識が違つた。文化が違ーう！とでも叫ぶべきか。

そういう認識であつたからタバサはイングリッドの言葉を大いに誤解した。イングリッドが何を聞きたいかを「理解」した。実は勘違いでしかなかつたが、タバサはイングリッドが「竜」という幻獣に並々

ならぬ興味を持っているのだと思ってしまった。

無理からぬところはある。初めての顔合わせであればどこまでに熱烈なコミュニケーションを図ったのだ。イングリッドのあり方に不審があるのはシルフィからの警告も含めてタバサは理解しているつもりだったが、時タイミングが不意に見せる、外見相応の行為はタバサにとつて好ましくもあつた。だから、そういう好意的な誤解もまた仕方が無い部分があつた。

また、この瞬間に、イングリッドの体温を感じて、その奥底にある、何もかもをも溶かす不可思議な温かみを感じて、タバサの意識が掻き乱されてしまっているのも影響していた。

はたして、特に気負うことも無く、それを隠匿するべきものとも考えることなくタバサは、自然と答えていた。

「ん。シルフィの視力はすごい。自分の何十倍も良い」と、
「と、いうと？」

どう説明して良いかわからないのか。何度か首を傾げてからタバサは、ふと、学院の南西方向に見えた山の頂に視線をめぐらせる。

「シルフィ」

呼びかけながら首を叩くと、シルフィードが首をめぐらして、白を頂く山に視線を向ける。その間も飛行姿勢が乱れないのだからシルフィードという竜は、本当に大した物である。

「山」

簡潔に示された言葉に、イングリッドは苦笑いを浮かべた。

「山じゃな」

キュルケもシルフィードの首が向く方向から辺りをつけて、山脈のほうへ首をめぐらした。

「山ね」

キュルケの言葉を受けてタバサが頷く。

「右端から22番目のピークの下、127マイル程の位置にある斜面を、雪華大笹鹿18頭の群れが飛び跳ねつつ左に移動している……僅かに小さな体躯の、角が小さい若い雄の固体が今、足を踏み外して斜面を滑り落ち……ん、持ちこたえた」

「……はあああつ？」

タバサは俄かに赤く充血し始めた眼を瞬かせて、眉間に皺を寄せている。タバサの言葉の意味を瞬間には理解できず、イングリッドの内心にその内容が染みてきたころには、シルフィードもタバサも前に向き直っていた。しかし、タバサは微かに前かがみになってこめかみを揉んでいる。その身体も僅かに揺れていた。

イングリッドもキュルケも……いつの間にか、2人の身体の間から伸び上がって首を突き出したルイズも山を見つめる。

あつけに取られてイングリッドは、何度か「山」とタバサの間で視線を巡らせてしまう。

山。

確かに山だ。それは判る。

しかし右から22番目の山頂と言っても、霞んでよく見えない。だいたい、ピークのほとんどが雲に隠れている。いや、イングリッドの能力なら、実は、雲でも霞でも霧でもある程度は見通せる。山の輪郭については相当にくつきりと認識できる自信はある。

だが、斜面に鹿だと！

イングリッドが過去の経験に照らし合わせて、目分量でざっと乱暴に計測して350キロから400キロは離れた「山」だ。モンリユソソンからマルセイユを見渡せと言っているに等しい距離である。イングリッドの眼をしてもその距離では、流石に街は見えても人がいるとまでは確認できない遠距離だ。だいたい、350キロから400キロという距離は、大抵のスパイ衛星の軌道高度よりもなお遠い距離だ。しかもここから山を見る視線は、大気の影響をもろに受けている。

スパイ衛星が能力を発揮するのは存外に「薄い」大気の層を「上から」覗いているからなのだ。いくら高性能分解能力を持っているスパイ衛星のカメラといえど、大気の井戸の底では糞の役にも経たないだろう。精々50から70キロを見通して、なんとか人の輪郭を捉えることが出来る程度だ。

これはどれほど高性能なカメラであっても変わらない。大気の影響

の影響は、それほどまでに大きいのだ。大気の底で見る限り、どれほどまでにカメラの性能を引き上げたところで、大気の揺らぎをくつきり確認できるようになるばかりで、実際の目標物がはつきり見えるわけではない。結局のところ大気も「モノ」である事に変わりは無いので、カメラの性能を上げれば、大気を良く見ることが出来る。その先に何があるかは判らない。そういう結果になるのである。

イングリッドがうまく視線を通せない最大の理由は、そこなのだ。宇宙空間なら相当に細かく見通すことも出来よう。なにしろ視線の途中に「何も無い」のである。だが、ここは地上である！

キュルケもルイズも、信じられないものを見て、口をあんぐりと開けていた。その4つの眼は、しばし瞬くことを忘れていた風だった。

タバサは3人の様子に気がついていいのかどうか。何度も首を振っていた。

「疲れる。すぐく」

その一言でイングリッドは納得した。やはりそうなのかと理解を得た。

「すまぬの。つまり、普段は制限された視界が……視界のみが見られるのじゃな」

「そう」

いつの間にか緊張を解いていた、といよりも、緊張がぶつ飛んでいたルイズはイングリッドと顔を見合わせて頷いていた。初日の夜に交わした推測が正しかったことを理解して、互いに納得する。

キュルケのみがそこからつまはじきにされた訳で、キーキーと喚かれたので、説明をすることになった。

タバサとキュルケの言をもって、ルイズも加わって推測した結果としては、やはり、あの深夜の会話がだいたい正しいのだという結論になった。

シルフィードはやはり竜である。それも風韻竜という「特殊な」存在だ。何らかの特殊な能力がその視線にも備わっていた。

しかし、タバサがその能力を十全に生かすことは難しかった。余り

にもシルフィードの見る世界が人間にとって異質であったのだ。

通常常態でも、恐ろしく精密且つ遠距離を見渡せる視界、視力。それを見ただけでもタバサは激しい頭痛を覚えるという。やはり、人間の頭脳では情報処理がおっつかないのだ。

さらにシルフィードと深く繋がると、魔法の流れ、としか説明のつかない何かが見えるのだという。シルフィードの語彙の少なさから、彼女が言葉を尽くして説明したところで、他人がそれを理解することが出来なかったが、そういうものなのだろう。常識をただ常識と認識している事というものを他人に理解させるのは非常に難しい行為なのだ。ましてや異種族間で、となると困難どころではなかった。例えばアメンボが持つ4つの眼で得られる視界を言葉で説明せよといわれても、そんなことは事実上不可能だ。そういう難しさがあった。

その【不確定名称：魔法の流動】を見る事は、タバサにとって相当な苦痛を伴うという。一度だけためして、以後は「直接」見ることはやめたという。賢明な判断だと言える。シルフィードがそれで捉えたものを説明させることで情報として得るようにしているのだという。その辺りが現実的な妥協点だろう。

その何かが本当は何であるか、シルフィード自体がいまち理解しきれないがために、情報としての質が著しく劣化してしまうのが悩みの種だという。

更にシルフィードは風を「見る」事が出来るという。様々な色がついた水が、模様を描いて水面を彩るが如くに、流れを読むことができるのだという。

ややこしいことに、水面という2次元だけでなく、水中まで含めた、奥行きがある3次元的世界でそれが見えるというのだから人間では確かに処理出来る筈も無い情報だ。頭がパーンで終わるだろう。大きさ、重さ、速度。それらが違う物の動きを個別に区別できる——視界の通る範囲内全てにおいて！というのだから、イングリッドも恐怖するばかりである。

遠くを見ることが出来るのだといってもただ単純に「すごいね」では済まされない事実があることをイングリッドは理解したが、それを

3人に説明することもまた大変に難しい。よって、すごいね、で済ますしかなかったのがもどかしくもあり、また、安心も出来る結果だった。

タバサがあっさりシルフィードの能力を開帳してしまった事実
にイングリッドは困惑する。タバサにとって、突然現れたに等しい存在のイングリッドはそれほどまでに信用してよい存在なのか。或いは取るに足らない存在と思われているのか。それとも、未だに明らかにされていない秘密があるのだろうか。

考え過ぎだった。しかし、自身の常識から照らし合わせて、こういう結果を得られるとは想像していなかったイングリッドは、タバサから情報を得て余計に混乱してしまった。実に恐ろしきは固定観念とすべきか。

使い魔の能力。というか、幻獣の能力がその実、とんでもないことを全てのメイジが理解に及んでしまったら、そこから発生する問題は相当に大きいだらうとイングリッドは思う。

例えば、下世話な話、のぞき目的となれば、シルフィードの能力はある種の特殊性癖の人間には垂涎の的となる。軍事目的に転用する発想があれば、恐ろしく高性能な偵察機の出来上がりだ。何億ドルもする偵察機ですら鼻で笑ってすませてしまえる「超」能力だ。とんでもない高性能ぶりだ。

夜間も見通せるというのだからますますもって驚くより他無い。タバサがその状態でシルフィの視界を借りても何が何だか判らないと言うのは僥倖なのか……。しかし、シルフィードは人間と高度なコミュニケーションを交わす能力がある。シルフィードを訓練すれば、彼女自身が見たものを詳しく説明して情報に昇華する事も可能だろう。そんなことが常態になったら、それはまさしく
トランスフォーメーションだ。

フレイムについても恐ろしい事実が判明した。キュルケはそれが凄まじい能力である事に気がついていなかったが、イングリッドがある程度予想していたとおり、熱で物を見分ける能力を保有している事

実があつた。熱のコントラストを見極めて壁の向こうもそれなりに見渡せるというのだ。

キュルケと顔を合わせたあの朝。キュルケがルイズの動きを認識し得たのはつまり、フレイムのその透視能力ゆえだったのだ。キュルケはフレイムの視界を持つて、ルイズの部屋で起きていたごたごたを眺めていたのである。だからルイズとイングリッドの行動にあわせて、部屋を出ることが出来たのだ。

それを聞いたルイズはキュルケを激しい勢いで殴ったが、それを視界に捉えながらイングリッドは身体を震わせた。

甘かつた。

周辺状況に対する認識が甘かつた。

あーだこーだと騒ぐ3人の局外に合つて（とはいえ、タバサはキュルケになすがままに身体を揺すつていただけである）、イングリッドは自身が眼にした様々な「使い魔」を思い出す。

それらにどういった常識外れの能力があるのか。視力だけではない。

5感がどれほどのものなのか。第6感もあるのだろうか？それらを敵にした場合、例えば攻撃力が無い手合いであったとしても、情報を適切に扱える主と組み合わせれば相当に危険を感じる相手となる。そういった存在がゴマンといる世界！

……なるほど。異世界である。

どうも余計なことをした気がするイングリッドである。

タバサはシルフィードの能力を召喚してからの短い間に相当程度使いこなしているようだったが、キュルケに関しては藪蛇だった様な気がしてならなかった。認識していない、出来ていないフレイムの能力を穿り出す可能性^{ほしく}がある。隣の部屋から壁越しに四六時中観察されているというのは落ち着かない。冗談では無い！

その危険性に気が付いたイングリッドは眼を細めて、キュルケの顔を睨んだ。

「キュルケや」

ルイズとキュルケは互いの頬をつかんで捻りあうのに忙しかつた。

イングリッドはそこに割り込む。意図的に強い感情を載せて、キュルケの瞳を覗き込む。

その雰囲気気がついて2人は自然と手を離して、何となく居住まいを正した。

「のぞきは感心せんのか」

「……」

緊張するキュルケの肩に、イングリッドの手が乗る。反射的に身を引こうとしたキュルケだったが、途轍もなく強い力で逆に引き寄せられてしまい、唸る事しか出来なかった。

「のぞきは、感心せんのか」

眼を泳がせたキュルケはイングリッドの視線から自身の視線を逃れさせて、ルイズに眼を合わせた。

ルイズはそれに気がついて肩を竦めた。

「良い趣味とは言えないよね」

青い顔をしてだが、キュルケ固有の体表の色にそれを隠してしかし、絶望感に身を溶かして、タバサに視線を送る。その気配を受けてタバサが振り返る。若干の希望が差し込んだことに気がついて、キュルケが小さな笑みを顔に浮かべたが、タバサの言葉は更なる絶望の刃だった。

「悪趣味」

さっさと前に視線を戻したタバサの背中を、ぱくぱくと口を震わせて刹那の間見つめるキュルケ。次いでルイズに視線を移し、そしてイングリッドに視線を戻した。

数瞬唸り声を上げたキュルケは、遂に観念したかのように肩を落とすしてうなだれた。

「もうしません……」

イングリッドは笑顔を浮かべつつキュルケの顎をつかんで強引に視線を絡めた。キュルケの抵抗は簡単に破られた。まったく抵抗になっっていなかった。どれほど力をこめてもイングリッドの腕は微動だにしなかった。

強引にあわされた視線の先でイングリッドは柔らかな笑みを浮か

べている。しかし、その眼は笑っていないかった。

「絶対かや?」

その強い視線を浴びて身体を震わせたキュルケは頷くしかなかった。

「絶対です」

イングリッドは満足げに頷いて更に言葉を連ねた。

「未来永劫?」

細められた視線にキュルケは更なる恐怖を感じてこくこくと激しく頷いた。

「未来永劫です!」

その言葉を受けてイングリッドは目を瞑り、僅かな間を経て瞼を開いた。

そこには確かに華やかな感情が浮かんでいた。それを確認してようやくキュルケは緊張を解いた。

「うむ、良かろう。信じた!」

その体躯の違いを乗り越えて、イングリッドはキュルケの頭を撫でた。唐突にキュルケは、イングリッドに随分と大きな影を感じた。影だと思った。それがなんであるかをキュルケは自身の経験からすり合わせる出来なかった。

ただ、暖かいものだと思った。キュルケはその感覚を知らなかった。ただ、安心できる感覚だった。

キュルケは知らず、眦を下げた。体が弛緩する。

その姿を見てルイズは噴出してしまった。

「くっ……キュルケ。あなた、借りてきた猫みたいよ!」

呆けた顔でゆるゆると視線をルイズに移すキュルケ。どこも無く呆れた雰囲気を持ってタバサもキュルケを見つめている。

僅かな時間を持って状況を理解したキュルケは急速に顔を紅潮させて、だが、その特徴的体色からそれを外部に認識させ得ずしかし、恥ずかしそうに身を振った。

指でシルフィードの背に「の」の字を描くキュルケをルイズが抱き寄せる。キュルケは今までの人生経験の中で得たことの無かったモ

ノをイングリッドのなかに幻視して混乱し、それを受けた自身の反応に困惑し、なすがままにルイズに頭を撫でられた。

視線に気がついたルイズが頭を挙げると、タバサがキュルケの姿を見つめていた。

随分な嗜虐の感情を載せた表情でルイズはタバサを見つめると、ニヤリと笑って右手を差し出した。

「タバサも、キュルケを撫でる？」

その言葉にびくりと身体を震わせたキュルケがルイズの薄い胸に頭を埋める。

タバサは見開いた眼で数瞬、ルイズの手のひらを見つめたが、やがて首を振った。

「……悪趣味」

ルイズはその言葉で眉を跳ね上げた。イングリッドは苦笑いを浮かべながら溜息を吐く。

「やれやれ。毒舌よの、タバサよ」

姿勢を戻してタバサを後ろから抱き寄せたイングリッドに、尖った視線が刺さる。

「イングリッドほどではない」

ニヤツと笑ったイングリッドは、ぷいっとばかりに前に向き直ったタバサの頭を撫でて、首を回してルイズを見やる。

わなわなと唇を震わせるルイズを見て微かに笑い、それに反応を示したルイズが行動に移る前に言葉を被せた。

「さてルイズよ」

「なに！」

「メイルとはなんぞや」

タバサはこけた。が、イングリッドが後ろから支えたので、激しく身体を揺すっただけですんだ。

ルイズもこけた。ルイズの顎がキュルケの脳天に突き刺さった。

キュルケはシルフィードの背中で悶絶した。

強打した顎をなでながら、ルイズががくがくとした仕草で身体の位置を戻してイングリッドを見つめる。

「そこから説明しないといけないんだ……」

ルイズが右腕を水平に出して、左手で右手の先端を指し示す。

「1メートルというのはね、だいたいここから……」

左手をそのまま滑らせて、左手の付け根に持つていく。

「このあたりぐらいかしら」

そうやってキュルケに確認を求めた。

妙な表情をしたキュルケが、しかし頷く。

「そうね。正確ではないけど……当たり前か。だいたいはそんな感覚で良いんじゃない？」

イングリッドは顎を持つて頷く。

今、シルフィードの上は、タバサを先頭に、キュルケ、ルイズ、イングリッドの順番になった。キュルケとルイズはタバサを背にして後ろ向きになっている。前を向くイングリッド一人に2人が相対する形だ。

ルイズとキュルケの体格差を考えれば、ルイズの頭の上にキュルケの顔が見えるので、会話を交わすならばこれはこれで合理的配置なのだ。

空を翔る竜の上で、進行方向を見ない。「御者」であるタバサを視界に納めない。これは大変に勇気のいる行為であるとも思える。しかしキュルケもルイズもそのことに何の屈託も無い。

信じているのだとかことさらい必要も無く、タバサに全幅の信頼をおいているのだ。キュルケは、まあまだ判る。極僅かな邂逅からしても、タバサに対するそこそこの長い付き合いが感じられた。その経験がキュルケのタバサに対する信用なのだろう。

ルイズはどうなのだろうか。シユヴルーズの授業のときに見せた反応を見ると、どうも、ただのクラスメイトという位置から昇格して2日と経っていないような気がする。赤の他人とは言わないまでも、知らない人ではない程度のつながりだったはずだ。しかし、あっさりとタバサを許している。

ルイズと会話していると、ルイズに自覚の無いところでやたらと使

用人や職員がルイズに心を許している状況が想像された。風呂の騒ぎでも、やたらと気安い雰囲気はルイズと使用人の間にあつた。

随分な緊張を持つてキュルケが接してきたにもかかわらず、口では憎まれ口を叩きながら、結局はキュルケが側にいることに何の嫌気も感じていないように思える。キュルケもすでに緊張が見られない。この関係を外から見た人間が、僅か数日の内に構築された関係なのだと云われて、誰も信じることは出来ないだろう。

これがルイズの特性なのだろうか？ 思えばイングリッド自身もあつさりとルイズに「懐いて」しまった。生来の誑し気質なのだろうか？

それは脇に置いて、イングリッドはルイズの身体をしばし見つめる。

「ふむ。となると……ルイズの背丈は、1.51メートルというところか？」

ルイズが眼を見開いた。キュルケはそのルイズの背中を不思議に思いながら見つめる。

「どうしたの？」

ルイズはキュルケに一瞬視線をやつて、次いでイングリッドに視線を戻した。

「153 سانتなの……私の身長」

キュルケも驚いて、思わずイングリッドを見つめた。

イングリッドはニヤリと笑う。

「だいたいあつていたか…… سانتと言うのはマイルの下の単位でよいのかや？」

キュルケもルイズも揃つて頷いた。

正確な物差しを持つていないわけではないのでなんともいえないが、 سانتⅡセンチと見ても大して間違つてはいまいとイングリッドは見立てる。偶然だろうか？ メートル原器のようなものが作られたのだとすれば偶然とも言えるし必然とも言えるだろう。

ハルケギニアを抱く惑星が、地球とほぼ同じ大きさ、組成を持つて

いることはまず間違いないと思われた。重力に特段の差異は感じられない。あつたとしても極僅かで、その極僅かの差異はイングリッドでも流石に高精度では確認できない。

地面の下に大きな岩のひとつでもあれば「極僅かの差異」等どこにも発生するのだ。確認のしようも無い。

となれば、メートル原器の製作方法と同じ考えで統一度量衡を求めれば、長さの単位も重さの単位も術からずメートル法に近接するだろう。若干の違いは誤差の範囲で収まるのではないだろうか？

「マイルの上にも単位があるのじゃろう？」

ルイズはもう一度頷いた。

「そう。１キロメートルで１リーグ。１リーグは１０００メートルで、１マイルは１００サントなの」

キュルケも頷く。

「普段の生活ではマイルとサントで済ませちゃうの。例えば学院の広さは３０００メートル四方ぐらいだけど、いちいち３リーグとは言い換えないで、寮塔から南門までは１４００メートル位の距離、つて言うわね」

それを受けてルイズが続ける。

「キロメートルって言う言い方も算学的な言い方ね。成るべく簡単に記すための工夫で、リーグって言う言い方は街と街の間の距離とか、国境までの距離とかを適当に説明するときぐらいしか言わないね」

イングリッドは頷いた。キロという言い方があって、センチが無いのもどうかとは思ったが、まあ、そのあたりは「誤差」なんだろう。あるいは「センチ」に類する単位系が長く使われる間に形を変えて「なまった」のが「サント」である可能性もあるが、重要なことではないので、その考え方はこの場で切って捨ててしまおう。

「うむ。と、なるとじゃ。今我等が向かつておるトリスタニアとやらは学院から何リーグの距離があるのじゃ？」

キュルケが頭を捻る。詳しくは知らないのだろう。その姿を見てルイズが苦い表情を浮かべたが、肩を竦めてイングリッドに向き直る。

「学院正門からトリスタリア・キブヴィル・ロツシユ門までピアス・カ
レツジ街道を使つて133リーグよ」

キュルケがその言葉を受けて肩を竦めた。

「他の国の事なんて知らないわ」

ルイズが眼を細めて眉を跳ねた。

「一年の最初の授業で習つたじゃない！」

「そんなの覚えてないって」

イングリッドは取っ組み合いを始めそうになった2人を抑えて、苦
笑いをする。

「まあま。直線距離ではどのくらいだろうかや？タバサよ」

時速200キロ程度の速度に戻した……時速200リーグぐらい
と言い換えるべきか、シルフィードが虚空を切り裂いている。

「キロ」という言い方も、勿論おかしい。本来はキロメートルとい
うべきである。この世界でも「キロ」という表現があることがわかつた
のだから、距離単位系を考えるとときには気をつけないと、会話等
でうっかり勘違いが生まれかねないと注意することにした。

例えばセンチメートルに近い単位がサントという独立した単位に
なっているのだ。ありえなくも無い表現としては、キロセンチメー
トルという言い方は、地球での表記方法では絶対にあるべきでない異常な表
現となるが、ハルケギニアではキロサントという表現は「アリ」なのだ。
そういう表現が実際に「アリ」かどうかは別として、度量衡が混じつ
た会話では留意する必要があるだろうと身構えておく。

タバサはイングリッドの質問に刹那振り向いて、僅かに首を傾げ
た。

「ん……今シルフィードが目指すフォーテンブロー飛竜場までは直線
距離で150リーグぐらい。実際はトリスタリアの外周を迂回しな
いといけないから、直線距離という言い方は意味がない」

イングリッドはその言葉に2重の意味で驚いた。

直線距離で150リーグ。そこに空を飛ぶ乗り物が発着する場所
がある。単純には考えられないが、トリスタリア・キブヴィル・ロツ
シユ門とやらとの距離に、数値上は17リーグもの差がある。これは

つまり、トリスタニアの市街域が想像以上に巨大である可能性を示唆する。

外周を迂回する必要があるというのも驚きだった。

つまり、市街地域は飛行禁止というルールがあるということだ。フォーテンブロー飛竜場なるものは飛行場みたいなものだろうか？ファンタジーな世界であるので、勝手気ままにワイバーンやペガサスが街地上空を飛んでいるのかとも思ったが、そこまで甘くないということか。

「ふむ。つまり、トリスタニアの街中では貴族も飛んではいけないということじゃな」

イングリッドの出した答えにルイズは無邪気に頷いたがキュルケとタバサは驚いてしまった。結果からたどれば当然の結論だが、実際に出されたヒントは極僅かどころではなかった。

門と飛竜場の距離が違うこと。

トリスタニアを迂回しなければならないこと。

直線距離は意味がないということ。

この場に出されたヒントはこれだけである。

ここから「飛竜」などがトリスタニア上空を飛んではいけないことを推測するのは簡単である。しかし、貴族が飛行魔法を使っではないことに関しては話が繋がらない。

どこからそういう推測が成ったのか？

それを予想するのが難しい。恐らくは、3人が貴族であることを想定したのでろう。貴族が街を勝手気ままに飛んで良いなら、貴族が騎乗する乗り物も問題ないだろう。ましてやシルフィードは使い魔なのだ。乗り合い竜籠などが駄目で、貴族の私物は良い、などとなれば話が違ってくるが、シルフィードが着陸できる場所が限定されているのだという言質は、たしかにタバサの口から漏れた。

それ「だけ」の材料から即座に結論を導いた。

タバサもキュルケも驚くより他無い。やはりイングリッドは「平民」で括ってよい存在ではないと思いなおした。

2人がイングリッドという存在に対して思考をめぐらせている間

にも、イングリッドとルイズは会話を続けていた。

「トリスタニアとは存外に大きな街のようよな」

ルイズが待つてましたとばかりに胸を張る。

「そうよ。大トリスタニアの市街域は半径25リーグ。公称住民は100万人を超える大都市よ！」

「ええっ!!」

ルイズも他の2人もまったく想像し得なかった驚愕を持って、イングリッドが仰け反って驚いた。

大げさではなく飛び跳ねて、危うくシルフィードの背から墜ちるところだった。

イングリッドの顔面に表れた表情も、まったくの純粹な驚き……驚愕だった。

ルイズはイングリッドの反応に大満足して「ふふん」と笑った。

しかし、イングリッドは冷や汗を流してルイズを見つめる。

「ちよ、ちよつと待つんじやルイズ」

顎を突き出して得意げに背を反らすルイズに、イングリッドはすがりつくように手を伸ばした。その先端が震えて揺れている。

ルイズは気がつかなかったが、キュルケとタバサはイングリッドの驚きの様子が余りにも大きいことに疑問を思った。

「なにになになに？何でも聞きなさいー!」

底抜けに明るい声に、身を震わせながらイングリッドは躊躇いがちに尋ねた。滴り落ちる汗に気がついたシルフィードが訝しげに首をめぐらした。

「……トリステインの人口は幾らじや？」

一転、疑問を浮かべたルイズは他の2人と視線を合わせて首を捻る。その外側でシルフィードもかわいらしい仕草で首を捻った。

ルイズは頭を垂れて右手をイングリッドに突き出し、左手で眉間を揉みながら、顔を顰めて必死に思い出す。過去に知った情報に、人口の具体的情報が無かったかどうか……。

「まってまってまって!ちよつとまって!今思い出すから。えーと、えーと」

明らかにされるかもしれない驚愕の情報に、冷や汗を流しながらしかし、イングリッドは大して期待はしていなかった。

人口動態に関してある程度以上に確度が高い調査がなされたのは18世紀中盤以降である。

首都人口100万人というのも驚いたし、都市圏が想像以上に広いのにも驚いたが、多分に「ふかした」数値だという予想があったのだ。そういう想定は捨てるのだ！とつい先ほど覚悟完了したはずなのに、未練たらしきこの世界の文明度を15世紀あたりで固定したがっている感情がイングリッドにはあった。そうであって欲しかった。そうであればいろいろと面倒が少なくて済むのだ。

ルイズを守るといふ一点で、大変に楽になれるのだ。

だが、イングリッドの願いは脆くも、しかし激しく突き崩された。「そうだ！アラトリス・レオ・アフリカヌス分割諸国会議で公式発表があったわ！」

キュルケが「おおっ！」と唸って、手を打ち付けた。

「そういえばそうね。あれはかなり正確な数値だったはずよ」

イングリッドは「いいっ！」と変な悲鳴をあげた。聞きたいが聞きたくない。とんでもないデータが飛び出る危険を感じる。これを聞いてしまえばイングリッドの固定観念が全て爆砕粉碎されてしまう。そんな予測があった。駄目だ駄目だ駄目だ、聞きたくない！

「下駄を履かせた……水増しした数値ということはないんかや？」

キュルケが振り向いて首を捻る。

「んーん。それはないよ。ガリアのジョゼフ1世がうまいこと考えてね」

その言葉に一瞬、タバサの背が跳ねたが、動揺するイングリッドは気がつかず、背を向けたキュルケとルイズには気づく余地が無かった。ただ若干、シルフィードの飛行姿勢が乱れたが、考え込む2人を揺るがすほどではなかったし、内心に修羅場を抱えたイングリッドも気が付けなかった。

「レオ・アフリカヌス開発運動は、参加国家の人口ごとに土地を割り振るのが建前だったけど、それに比例して出兵兵力と、共同開発地の出

費比率もうまいこと調整してね。変に数値を弄るとどうしても馬鹿を見るようになってたから、結局はどここの国も正しい数値を出したのよ」

キユルケの言葉を受けて頷いたルイズは、しかしキユルケの説明に若干の補足をした。

「正確って言うか、アラトリステ永世中立諸侯連合に全ての調査を任せただから、誤差があるにしても一定の誤差でしょ。比例配分するための基準数値としては『正しい』と相対的に認められる数値というわけね」

イングリッドはごくりと咽喉を鳴らしてしまう。破滅的な結果が示されるような気がする。15世紀。15世紀ぐらいの予想数値で収まってくれないかなあ……。

瞳を震わせながら、キユルケを見、そしてルイズに視線を移した。

「……で、幾らなのじゃ？」

イングリッドは結果を知りたくは無かった。人口動態というのは文明の習熟度を知る手がかりとしてはこの上ない基準データとなるのだ。

国家の面積データが無ければ意味が無い数値ではないかという意見もあるが、それが当てはまるのは爆発的な医療技術の進歩と、高層建設技術の進展を見た20世紀後半以降である。高層建設技術の進展にしても実のところ、都市部の人口密度を飛躍的に増加させ得ただけで、国家全体で見た場合の人口動態に対しては大して影響を及ぼさなかった。

20世紀中盤以前は、人口密度に関して絶対的とも言える指数があつて、それをどうしても乗り越えることが出来ずに、何千年にもわたって人間を縛ってきた。国家面積あたりの限界人口密度が一定だったのだ。その限界値方向で定数を定めれば、殆どの場合で国家の国力を推定できてしまう。それは即座に国家の文明習熟度を規定してしまう。歴史シミュレーションゲーム等でよく使われる手法なのだ。それはそこそこ正確であるが故にゲームに取り入れられる。その関数に取り入れる変数がここで明らかにされる。

聞きたくは無い。

しかし聞かなくてはいけない。

それがこのハルケギニアの文明レベルを推定する決定的材料になるだろう。

ルイズが額を揉みながら、遂に、その数値を口にした。

「えつとね。トリステインで公称4700万人だったかな」

「……い！」

キュルケが後を受けて言葉を紡ぐ。

「ゲルマニアで5000万人ね」

こちらに背を向けたままタバサがぼそりと言う。

「ガリアは5500万人」

「……!!」

ルイズがこくこくと頷いて、指を鳴らした。

「思い出したわ！ロマリアが1200万人でルテナアが6500万人。オスタルリキで1900万人。パンノニアで1500万人。ヴェストヴァーレンが400万人。アルビオンが1100万人ね！」

顔を青褪めたイングリッドはもはや声も無かった。最悪に近い結果が出たのは確かだった。4700万人。4700万人！

ルイズは得意になって更に絶望的な言葉を連ねる。

「レオ・アフリカヌス開発運動に参加しなかったネーデルランドやパーガニア半島、アラトリステ、ヴィツシュトユラントも含めれば、全部で3億人以上かな？」

3億！

結果は出た。

3億人。

3億人!!

イングリッドは、余りにも甘い希望にすがり付いていた事実を突きつけられて膝が砕けたと思った。力なくシルフィードの背で身体を弛緩させてしまった。

3億人……。

この数値が意味することはハルケギニアが、20世紀初頭のヨー

ロッパに近い世界だということである。

必死で眼を背けてきたことであるが、実は大いに納得もしてしま
う。

納得してしまった。

電灯の代わりになる魔法の灯り。トイレ。水道。疑いようも無く
先進医療である魔法の治療術。何の疑問も無く出されたシーフード。
勘定を計算したレジスター。

一部分を取り出してみれば、20世紀中盤以降と断してもおかしく
は無い文明なのだ。唯単に、魔法が科学を取り替えただけ。

魔法を使えるメイジという存在が特別だと言い連ねて眼を背けて
しまっていたが、考えてみれば、文明の産物たる電化製品なども「誰
でも使える」だけであって「誰でも作れる」わけではないのだ。

生産者たるメイジの人数が一定以上の数があるというならば。

つまり。

この世界は。

初めてのお出かけ（4）

地平線の下からトリスタニアの町並みが迫り上って来た時、イングリッドは眉を蹙しませた。常人よりもはるかに優れた視力を持つイングリッド視界には、あれこれと想像していたのとはかけ離れた、そして先ほどのルイズたちの言から想像したとおりの町並みが姿を現していた。それを見てイングリッドは本当に、完全に、絶対に、完璧に諦めた。どうしようもなかった。

相当な距離があるのに、地平に広がる市街は、明らかに近代的な景観が見て取れるのだ。細部を見れば「地球で見られる都市風景」と比べるとかなりの差異があることが判るが、それがハルケギニアと地球との根本的差異につながる事であろうかイングリッドは考える。

イングリッドの見たところ、ぱつと見の印象は、パリやそれに類する現代大都市の百年ぐらい前の姿に似ているとも思える……いや、そういう表現ですら逃げであるのだ、と、イングリッドは思いなおし、徐々に姿を現しつつあるトリスタニアを展望しつつ、後ろに流れてゆく大地に視線を落とす。

シルフィードの背を這って、恐る恐るという雰囲気を下を覗き込むイングリッドの姿に、ルイズは首を傾げてキュルケと顔を見合わせた。後ろ向きになったイングリッドの身体に風が吹き付けて、その短いスカートと、肩を覆うカブ肩掛けが捲めくれ上がった。

森や、林に、茂みや、草原に。各所に明らかに人の手の入った池や湖も見えるので、建築資材や燃料を得るために手入れされていると思われる、人為的に維持された植生か。野生生物の気配が酷く乏しい。草原と思える場所も、実は牧草地なのかもしれない。眼を凝らすと、ロールが転がっていたり、家畜らしき動物の群れがのんびりと草を食む姿も見て取れた。

犬が走り回り、少年が棒を振って家畜を追い回している。

畑が広がり、街道が横切り、茂みを越えて、また畑が連なりとめまぐるしく風景が移り変わった。

めまぐるしく風景が移り変わる。これはこれで、ある種の判断材料になる。

大規模一貫経営ならば、牧草地にしろ畑にしろ、出来る限り広大な土地を同一目的で使用したほうが効率が良い。それをせずにパッチワークのような土地利用が見えるというのはつまり、独立自営農家がそれだけ多いという想像になる。そこから更に想像の幅を広げると、常識的に判断するならば、貴族による荘園経営から外れているか、或いは、貴族の土地ではあるものの、制限の緩やかな土地の賃貸が行われて自由農業が奨励されているのか、となる。

牧草地のみを切り取って考えをめぐらせた場合であっても、それが私的牧草地か、ローカル・コモンズなのかという区別も重要な判断材料になる。そこまで話を進めると、時代的背景云々よりも、政治的背景の判断となるが。ともあれ、どちらにせよ現状、眼下に広がる風景というのは地球の中世では殆どありえない光景であり、多国間の経済統合が推進される前の近代ヨーロッパでの「古典的独立専業農」最末期に近い風景だった。

各所に村や町が見え隠れして、全体的になだらかな土地が広がる。川が長閑に土地を穿ち、それらの風景を全て無視するように、徹底的に人工の風情を醸し出す明らかな運河と思える水濠があちらこちらに見えた。大量の船が行き交っている。

かと思えば、周囲の風景から浮き立った、まったく無粋な姿を晒す城に、館に、教会に。概ね街道に沿って、人々の流れを横目に飛ぶシルフィードは、そういった無粋を嫌うように緩やかな経路をたどって迂回し、それらの姿を背にしたころにまた、街道に寄り添う。

それらの風景の向こうから急速に建て込んだ街地が眼下の視界に割り込むと、あつという間に周辺が混雑し始めた。

地上ではなく、空で。で、ある。シルフィードの速度が急激に落ちる。

すぐに、途切れない街並みの上に影を落としながらシルフィードは

飛ぶ。

街を眺望してイングリッドは頭を抱えそうになった。

10階建てぐらいを限界として定めている、と、思われる高層のアパートメントがびっしりと立ち並ぶ。ファサードは想像以上に近代的な装いを見せていた。統一感がありながら精一杯に個性を引き出す、基本色を白としてモノトーンの外観を基本としつつ、控えめでありながら、細かい造作にぎりぎり雑然とした印象を見せない、極限を攻めたたデザインが街路を彩っている。文化的習熟度が非常に高いであろう印象を見せていた。それらの近代的建物と調和して、各所に計画的に配された公園が緑を心地よく見せている。

ほぼ完全に東西南北を向いて街を直角で区切った街路が、大地の起伏を一切無視して街を区切り、それらも無視して一応の法則をもっているかと思える、斜めに横切る街路が街を区切る。

碁盤の眼を切る道路は、直行する道路と交わって四つ角を作るが、斜めになった道路は、合流する道路の数が5本以上の場合は必ずロータリーをなすように設計されているようだった。きわめて計画性が高い配置である。

それらをぶち壊して川の流れのように街をうねうねとのたくる道路は、恐らくは街が成立する以前から存在する街道なのだろう。整然とした街並みを乱すが、それはそれで味があるランドスケープを展開させる。そういう印象を持たせるのは、街道の本筋を色調の明るい石で舗装し、左右に広い緑地を配して更に歩道のようなサイドスペースを用意した上で、碁盤目状の街の形状に緩やかに統合できるように、デットスペースを贅沢に飾り立てて、石畳の広場や、草原風の芝生張りとしてデコレーションしているからであった。まさに道路を「川」に見立てているのだ。地上から見ても趣がある風景が展開されているであろうし、空から見ても非常に計算された都市設計がされていることが推測される。極めて緻密な設計であった。

正確精緻な街路設計にわざと組み込まないで調和を乱し、それでありながらデザインのグラデーションで数学的幾何学模様を三次元

曲線を馴染ませるレイアウト。その芸術的な都市計画設計にイングリッドは溜息を吐きたくなつた。

見事だ。

そうとしか言いようがない。

おそらくは学校。恐らくは役所。恐らくは高級アパートメント。恐らくは警察施設。

そういったものが計画的に配されているのが良く判つた。デパートメントらしき建物や、運動設備に劇場と、レクリエーション設備も充実しているらしいことがわかる。どの街路もそれなりに賑わつて、多数の馬車や、馬の付いていない車が走り回っている。

自動車まで存在するのかと、イングリッドは冷や汗を流す。

イングリッドはようやく理解した。何度も何度もイングリッドが推測しては打ち砕かれた時代的推定というのは、その原因がトリステイン魔法学院の持つ、長い歴史、その由緒正しいあり方のせいだということに。

昔の風情を色濃く残した施設を、過去の栄光を残したまま使っている。それなりに近代化しつつ、それなりに便利にしつつ、それなりに快適にしつつ、である。これでは印象が混乱して当然なのだ。

まったく迂闊なことであつた。しかし、それも仕方ないだろうと言ひ訳もする。極めて極端な例を上げれば、日本の日光にある、過去を再現した観光施設内部に突然現れて出でて、その印象で日本の現代文化レベルを推定せよと言われた様な物なのだ。酷いミスリードに引つ掛かつていた訳だ。気がつけばなんということはないが、ある程度はそういう推論に持つていくことは可能だつたはずだとも苦い思いをする。明らかに文明レベルが懸絶した調度や道具、設備が混在していたのだ。

エレベーターとかの存在について、イングリッド自身の推測でも後付け設備と断じたのだし、後付けであるという裏付けもあつたではないか。教育棟のちぐはぐな構造等は割合に決定的な証拠と、振り返つてみると思えてしまう。ひたすら混乱してばかりだつた2日弱の記

憶が酷く馬鹿馬鹿しい。

今、シルフィードの眼下に見える風景を、無理やりに地球における過去の風景に当てはめた場合、第二帝政で大改造が行われたパリと言ったところであろう。勿論、異世界であるのだから単純な比較はそれこそ馬鹿らしいが、実際に、自動車のようなものが走り回っているのに、馬車も相変わらず大量に走っていて、馬やロバといったモノに乗った人々も見えることを考えれば、単純に地球の過去と比較することの無益さが判る。

地球の歴史では単騎駆けで馬を持って街中を走る者は極めて少数であったから、バイクか自転車かとはかりにそれらが走り回っている風景というのは、イングリッドのにとつてしてみてもまったく新鮮な光景であった。彼女の長い人生の中でも、まったく経験が無い光景なのだ。

他にも、各所にある運河から荷物を積み下ろしていたりするから、パリというよりヴェネツィアか、はたまた江戸かとも言いたいところではあるが、それとは別に空では「渋滞」が発生しているし、やはり異世界なのだと言いつつは嘆息した。

街地上空は飛行禁止と言われながら、どう考えても街地としか思えない雑踏の上を飛行しつつ、タバサがシルフィードを操って——とは言え、以心伝心になっているタバサとシルフィードである。彼女達は言葉を交わすことも無ければ手綱を操ることも無く、粛々と空を滑っていた。シルフィードには元から手綱等は存在せず、鞍があるわけでもないから、傍目から見れば、イングリッドたち4人が飛竜の上に乗っているだけと言うなかなか危険な外見があった。

そのためであろうか。空域が混雑しているにもかかわらず、シルフィードとの間隔をことさらに大きく取ろうと努力しているかのよう、周辺を飛ぶ他の飛行物体（そう表現する以外の方法をイングリッドは持たなかった）がイングリッドたちの近傍に無い状態である。シルフィードの前後だけ妙に空いていた。

微妙な間隔を見て取って割り込んでくる飛行物体が後をたたないが、シルフィードの状況を見て、それを操っているともしきタバサの姿を見てそれらが慌てて間合いを取る姿は滑稽だった。

そういう状況におかしみを感じて、微笑を浮かべるイングリッドの視線が通る範囲内でも、何百、何千という飛行物体が空を舞っている。一応の法則性は見て取れたが、それでもイングリッドはタバサに問いかけた。ルイズとキュルケの身体の横から顔を出して身を乗り出し、タバサの背に声をかける。

空域が酷く混雑しているので、シルフィードの速度は時速50リリーグほどに落ちていた。

日の光を浴びて暖かな空気を密やかな虹色と共に反射する、シルフィードの体表を覆う鱗を確かめつつ、イングリッドはタバサの後ろににじり寄る。

「飛ぶ場所……というか、通路？見たいのはあるのかや」

その問いかけが含む意味に疑問を浮かべたかのような妙な表情でタバサがイングリッドを振り返り、勝手に納得したかのように頷いて前に向き直った。

「シエル・ウワゾ・ドラグーンは対地高度10000メートル以上を飛行しなければいけない。10000メートルから20000メートルが……」

「まて、なんじゃ、その、シエル・ウワゾ・ドラグーンとやらは……」

キュルケとルイズが呆れて溜息を付いた。やれやれとばかりにキュルケが空を振り仰いで右手で自身の顔を扱く。タバサも酷く肩を落として溜息を付きつつ首を振っている。ルイズが疲れた風な声で呟いた。

「そこからなんだ……」

龍飛飛行乗物（シエル・ウワゾ・ドラグーン）は大きく分けて汎生個龍飛（シエル・ゾ・ドラグン・イズルカ）と汎魔法個龍飛（シエル・デ・ドラグ・マズルカ）に区別される。

シエル・ゾ・ドラグン・イズルカとは、飛竜やグリフォン、ペガサス、ロツク鳥等の為性魔法生物の総称で、個人が騎乗する飛行物全般

の事である。大変にややこしい話ではあるが、汎魔法個龍飛の内、基本的な状況で一人乗りが通常のモノは例外的に汎生個龍飛に準じて扱われている。会話等でそれらが扱われる場合は混乱を招きかねないので注意が必要である。

そのように、例外の無い法則は無いのだが、基本的に、個人が操る個人的自家用飛行物全般を指してシエル・ゾ・ドラグン・イズルカと呼ぶ。これらは根本的に機動性が高いのだが、騎乗した場合は長距離飛行が苦手であるという特徴があった。そもそも生物というのは背中に何かを乗せて行動すること等を前提として進化したわけではないのだ。また大抵の場合、騎乗時は時速30マイル以下の速度で飛行姿勢の維持が困難になるという欠点もある。

まさしくここに、シルフィードという飛び切りの例外があるのだが。

それに対して、シエル^汎・デ^魔・ドラグ^個・マズルカ^龍飛であるが、これは、魔法によって製作された、龍を模した飛行物等で、竜籠などが該当する。一般的には人工的に製作された魔法を動力として飛行する飛行物全般を指し示してシエル・デ・ドラグ・マズルカと総称するのだが、竜籠と見比べた場合、余りにも外見の違う飛空船や飛行船については慣例的にマズルカとは呼ばないことが多いのでこれまた注意が必要である。技術的区分では飛空船や飛行船もまさしくシエル・デ・ドラグ・マズルカなのだが、見た目の差異が大きすぎて、同じものとするのに躊躇があるのだ。呼び方にそういった混乱があるが、基本的には、マズルカというのは人工的な飛行物体全般であると考えて間違いはない。当然ではあるが人が乗り、荷物を載せて空を飛ぶことを前提として生み出された魔法機械である。

派手に勘違いしていたのだが、今までの会話の節々に言われてきた竜籠というものをイングリッドは、実際に生き物の竜が人の乗る籠をぶら下げているのだと思っていた。

無論、大いなる見間違いで、飛石という魔法的鉱物を利用して離着陸できる、人間が乗り込んで人間が操る「からくり」が今のハルケギニアにおける一般的な「竜籠」であった。

飛石を消費すれば、原則、垂直離着陸も可能なのだが、その場合は飛石の消耗は致命的に激しく、竜籠に求められる長距離飛行能力が失われてしまう。そのため、基本的には推力や方向の維持以外では成るべく飛石を消費しないようにするのが常である。そのために竜籠には顕著な翼が供えられている。空に浮揚するための揚力は翼で得て、推力を得る場合や方向維持などのみで風石を消費するのである。それが竜籠の長距離能力の根源となっている。

風石を使うが故の垂直離着陸能力は一応は可能という程度の認識であり、緊急時や、周辺地形等の制約により、どうしてもそれをせざるを得ない例外的事態以外では竜籠が垂直離着陸を行うことは無い。竜籠の構造上、というか、要求性能上、竜籠は水平方向の強度以外を切り捨てたのだとも言える構造を持っている。その為に、垂直離着陸を行うのは強度的な不安もあるのだ。無理に垂直離着陸を試みれば翼が折れてしまいかねない。

必要があつて垂直離着陸を行う場合は、乗載されるメイジ等が空荷で離陸した竜籠に、自力で飛び上がつて空中で乗り移るのだという話が学院での会話の中であつたが、そういう意味である。

中、長距離での高速飛行に性能が割り振られているため、水平方向の応力に対しては相応の強度を持っているが、垂直方向の応力は殆ど考慮しないで設計されているのが大抵の竜籠である。これとて例外があり、軍用の竜籠の中には、垂直離着陸の常用を考慮しつつも、中、長距離を高速移動することを前提としたものがあるが、総じて輸送力が小さいとか、やたらと高価だとか、飛石を大量に搭載する必要があるとか、傷みが激しいとかで、いろいろと面倒が多い。

地球的な感性で見た場合、竜籠は基本的に軽量頑強な素材で作られた巨大なグライダーのようなもので、自力で離着陸可能であるという観点からすれば、モーターグライダーと認識すべきかもしれない。必要な高度に達したら、なるべく滑空で距離を稼ぎつつ、必要な推力を随時風石より補填して高度を取り直し、また滑空をしつつ……というサイクルを繰り返して空を飛ぶというのが竜籠の基本運用であるからまさにモーターグライダーである。航続距離が必要な場合は、滑空

を主にするが、速度が要求されるのであれば風石の力を消費し続けることになる。

しかし、竜籠の基本的飛行原理を考慮すれば、今シルフィードが巻き込まれている渋滞時には主翼による揚力が期待できなくなるので、風石を推力以外、つまり、空中にあり続けるために消費する必要があるので。自動車とかにとっても渋滞というのは無駄なエネルギーを使う厄介ごとだが、竜籠などにとっての厄介は、それ以上である。

そうやって運用される竜籠の基本形状は、この世界の固定観念……ハルケギニアの空を自由に飛びまわる存在で、最も大きいものは龍であり、それがために必然的に龍を模した形を得たことから「竜籠」と呼ばれているのである。

小さな竜籠では10人程度の人間と、その手荷物を詰め込める、文字通りの籠（ケージ）という意味での籠ではなく、ゴンドラを吊るした龍という姿であるが、大きなものでは、数百人が乗れるような雄大なものも存在する。そういった大きなものでは龍の胴体そのものに人が乗るキャビンが備えられており、パイロットも「龍」の「頭」にあたる部分の内部に座って「眼」の部分から外を見ることがになるので、外見に無粋な突出物の一切を廃されたそれは、まさしく龍そのものである。

ただし。

大型の竜籠の中には、翼が串型配置で4枚あったり、複葉であったり3葉であったり、串型配置と組み合わせ翼の数が6枚であったり12枚であったりするものも見受けられるし、串型配置も、2連、3連、4連串型まであって、その場合は龍の尻尾や首の部分にまで翼があるという姿になる。

そういった大型竜籠になると、翼の数が24枚とかいうのも見られることから、はたしてそれを「竜」と呼んで良いかは深刻な疑問がある。

ただし、どちらにせよ、翼は固定であり、足にはゴムで出来た車輪、つまりタイヤがバネ等を介して取り付けられており、搭載した飛石で推力を得て滑走して、翼に揚力を得て飛び上がるのが通常の運用方法

だ。

翼は固定であるとは言っても、離着陸で滑走を行うのであるから、当然動翼が……操縦翼面あるはずだというのがイングリッドの知る常識であつたが、タバサが知る限りはそんなものは無かつた。イングリッドが説明してもルイズたちは動翼の概念を理解できなかった。

絵でも描いて説明すれば話は別であつたろうが、何しろシルフィの背中である。口で説明し、身振り手振りを費やす程度でどうにかなるものでもなく、ただ単純にイングリッドが疲れるだけで終わってしまった。無益な時間を費やしてしまった。

周辺を飛びかう、大小さまざまな竜籠をイングリッドが見渡しても実際に動翼はなさそうであり、つまりは推力さえ得られるのならば動翼でこなせば良い飛行姿勢の維持なども、もったいなくも全て飛石でまかなっているということになる。

とんでもなく燃費が悪いだろうとイングリッドは思った。

動翼が無ければ、つまり、リアクション・ロケット、或いはリアクション・ジェットで全ての動作をまかなうようなわけであるから、ほとんど飛石とやらが消費されてしまうだろう。イングリッドが周りを見渡しても、飛び交う竜籠は馬鹿正直に龍の形を模しているものばかりで、つまりは「飛行機」としては、まったく効率が悪い形のものであるというのも問題を感じるところだった。

空を飛ぶ生き物だから、彼らの姿が空を飛ぶのにもっとも効率が良い形であるかという点、そうではない。鳥などは存外、空を飛ぶ「だけ」を見た場合、非効率な形をしていることが多いのだ。

なぜならば、彼らは飛ぶために筋肉を発達させ、それがために外観に影響が出ていたり、大量のカロリーを消費する飛行行動のために莫大なエネルギーを溜め込む能力を持っていたり、高空に飛び上がって凍えてしまったりしないように、臓器や羽を動かす筋肉付近に脂肪を溜め込んでいたり、様々な外的影響から必要となる各種のパラメー

々のせめぎ合いの中で形創られた妥協の産物として「鳥」という外形を成しているのである。

極長長距離を飛翔するアホウドリ等は、飛行（というより飛翔）に特化したために地上や海上では相当な苦勞を背負い込む進化を遂げた訳だし、グンカンドリレベルになると、空にある以外のありとあらゆる問題を切り捨ててしまったような、きわめて「汎用性の低い生き物」になってしまっている。

空を自由に飛んでいるように見える鳥ですらそうなのだから、龍を模して直ちに空を自由に飛べる飛行物が得られる筈もない。外から観察しても竜籠には様々な問題があるように見えた。

だいたい、飛行機として見ると、竜籠は主翼以外に空を飛ぶための手立てが何もついていないのだ。「飛行機」ではありえない形状である。

最新鋭のフライ・バイ・ワイヤと反応の速いアクチュエーターと各種の動翼、莫大なデータを蓄積した高速演算装置にリアクションの速いモーター（エンジン）。そういったものを装備すれば、現代では、龍の形をした飛行機を作ることには不可能ではないと思われる。が、それにしては垂直離着陸だけは不可能であろう。垂直離着陸能力を期つて捨てたとしても、ただ飛ぶだけにしても恐ろしく不安定な飛行機になる筈である。

動翼が無いのであれば、唯飛行するだけであっても、恐ろしくも相当な困難が予想される。

動翼が一切ない翼を持った飛行機を設計すると、真対空速度の増減が即座に上下運動を惹起するので、唯「飛行」するだけでも上下に大きく揺れて飛行（フゴイト運動）する不安定な飛行機になってしまうのだ。

シルフィードの周囲を飛ぶ、大きさが様々で、空力形状も様々で、当然重量も様々な竜籠が、一定の速度で安定した飛行姿勢を保っているというのは、現代地球の科学力で再現するのは絶対不可能な飛行形態なのだ。飛行機を設計する技術専門家が見たら発狂すること間違い無しのありえない光景である。そういう意味ではハルケギニアの飛

行技術は地球よりも「進んでいる」とすら言える。

飛石というものが余りにも便利に都合よく飛行の手助けをする動作を可能にしてしまうから逆に、竜籠の飛行機としての性能追求努力が失われているようだった。

その代わりにパイロットの負担は凄まじかろうとイングリッドは想像した。飛行姿勢の維持に、常に飛石から力を取り出して適切に対応しなければたちまち墜落だ。

飛行高度によって、速度によって、気温によって、湿度によって、気象条件によって、飛行に必要な各種のパラメーターはめまぐるしく変化する。成層圏を飛行するジャンボ旅客機などは、安全レンジが凄まじく狭いところを飛んでいたりする。時速にしてホンの数10キロ速くても遅くても失速して墜落しかねない状況下に置かれて飛んでいることが多いのだ。コンピューターのサポート無しではパイロットの技量でどうにかなるレベルではない。上下運動が許されるなら（つまりそれだけ燃費が悪くなるわけだが）、手動飛行も不可能ではないのだが、安定した飛行姿勢を保った水平飛行というのは酷く難しい操縦であり、水平飛行を維持することはパイロットにとって精神的にも肉体的にも酷く消耗を伴う作業となる。

大いに勘違いされていることではあるが、旅客機が空港を離陸した後、高高度で巡航姿勢に入るころにオートパイロットへ移行するのは、ある一面で、水平飛行が離着陸動作よりも難しい部分があるからなのだ。

地上で自動車を運転する場合、カーブを一定角度で旋回するより、直線道路を等速で、一切のハンドル操作無しに直進するほうが余程難しいのと似ている。

無論、離着陸という行為が難しい以前に、常にクリティカルであることは否定されないが、それも自動車の車庫入れが常に困難であるのに似ていると言えなくも無い。

飛行機というのは、ピトー管に虫が巣を作っただけでなす術も無く墜落したり、外気温度計が狂っただけで失速したりと、パラメーターの検出に対して僅かな不具合が出ただけで、他の全てが正常であるに

もかかわらず危険な状態に陥るものである。飛行するというのはそれほどに困難な行為であるのだ。

現代地球の旅客機というか、飛行機はそういった多数のパラメーターを自動で素早く検出するセンサーを持ち、それらを瞬時に処理するコンピューターのサポートを受けて初めて安全に安定した飛行が出来るのである。

それらをすべて人間が処理しないといけないと考えるならば。

イングリッドがそういうニュアンスの事をタバサに問うと、マズルカというのはサポートのために制御オーブが備わっていて、飛行御者は相当にアバウトな指示をするだけで飛べるといふ答えが帰ってきた。それもそうかとイングリッドは納得せざるを得ない。

ただし、竜籠の形状が極端に変わるとオーブのサポートが破綻して飛べなくなるので、竜籠の形状や要求性能に合ったオーブの開発が竜籠開発の肝であるという。

それを受けて見渡せば、確かに、奇抜な形状の竜籠が飛んでいることも無く（翼の数という点で奇抜どころではない竜籠が見えるが……）、どれもかしこも似たり寄ったり形状だった。

竜籠は4000年近い歴史を有する魔法製品だが、オーブの新規開発が存外に難しく、新型竜籠の開発は酷く難航するのが常だというのがタバサの説明であった。

事実、竜籠の開発では幾人もの死者が出るのが常態で、ちょっとした形状の変更を試みたり、僅かな性能の向上を目指しただけであつてすらまともに飛行できなくなることがあるため、極めて難しい開発作業になるのだ。

4000年にわたる歴史の中で竜籠の種類は100種類程度に過ぎず、軍用のものも含めても1000種類に満たないのが現実であつた。

本来の意味で新規開発された竜籠は10種類程度であつて、それを基本形状として、他のほぼすべてがマイナーチェンジの繰り返しで性能を漸進させているに過ぎないのが実体だった。

飛石が便利過ぎる故に発生した弊害だった。

「……話を戻すと、1000メートルから下は飛行禁止。1000メートルから2000メートルが飛んで良い高さで……」

饒舌になった、饒舌にならざるを得なくなったタバサが「必死」でイングリッドに説明した。この手の話はルイズやキュルケも知らない部分で、いつの間にか3人で興味深く聞き耳を立てることになっていた。

どうしようもなくタバサは必死に説明するしかなかった。騎乗しているのがシルフィードでなくてはそんな説明をこなす余裕は無かったであろうし、シルフィードであるからそういう余計な苦勞をしようってしまったとも言える。

行く先さえ示せば、シルフィードが知っている場所である限り途中の制御を一切受けることなく、まったく手放しで飛んで行ってくれる。

シルフィードが知らない場所に向かうのであっても、だいたいの方角や、場所の説明……目的地周囲の地形がどうか、或いは目印に街道を指し示して、その先、突き当たりだよ等と説明すれば、シルフィードは自立的に思考して判断し、タバサに教え込まれた限りの人間の定めたルールを守りつつ目的地を目指してしまう。途中に渋滞などがあれば自己判断でそれを避けたりそれに並んだりすら出来る。

シルフィードの飛行能力というのは、地球の最先端技術でもありえない超自動自立制御なのだ。よって、タバサはある意味で「暇」なので、説明を求められて、それを避ける選択肢を見つけられなかった。

シルフィードがただの飛竜であつたら、高度とか方向とか、つねに指示し続けなくてはたちまち他のドラグーンの迷惑になるし、規定違反を犯して、飛空警備に捕えられてしまうだろう。

しかしタバサと付き合ひの長いシルフィードは、極僅かな例外をのぞけばほぼ全てのルールを覚えているので、一々細かくタバサが命令する必要が無かった。またシルフィードが判断できない状況があれ

ば、シルフィードは直ちにタバサに指示を仰ぐから、そういう面でも安心だった。

シルフィが風韻龍であることはここにいる3人には自明なことなので、シルフィがタバサの手を借りずとも人の世の空を自由に飛べるだけの知識を持っていることは明白だとタバサは思っていた。だから面倒であってもイングリッドが求めた説明を断る選択肢を得られなかった。

それはタバサの誤解だった。タバサがそういう自己の常識に囚われているからであって、3人にはシルフィが高度な「超自動自立制御能力」を持っていることは理解の外だった。よって、飛行制御にタバサがかかりきりだといわれれば、3人はあつさり引き下がった可能性が高い。

今の今まで胡坐をかいて、適当にいた事実も、シルフィが「使い魔」であるからであって、今の今まで、タバサが他に知られることなく、内心でシルフィを細かく制御していたのだと言われても、そこそ3人には判断の仕様が無かった。だから、シルフィードの制御に忙しいから、気が散るからで説明を断ったとしても、3人の答えは「そーなのかー」で終わっていただろう。

意外と間が抜けたところがあるタバサだった。

ハルケギニアでのルールでは、例外地域があるのだが、それ以外では、対地高度1000メートル以下は飛行禁止となっている。

これは、メイジが飛行魔法を使うからであって、メイジが飛行魔法を使って飛びうる通常の限界高度は精々が200メートルであるのだが、その限界ぎりぎりを巡航していて、緊急事態で突如として飛行姿勢を乱したドラグーンがなす術も無くメイジを跳ね飛ばしましたでは困るので、安全マージンを取って1000メートルなのである。

また、高度に関してマズルカについては制御オーブに高度を測定する機能がついているのでだいたい正確だが、イズルカについては騎乗する御者の能力しだいという話になってしまうので、誤差が大きい。それも含めて、マージンが大きく取られているのである。

騎乗する御者の能力しだいだから、いまここで起きている渋滞のよ
うに、イズルカが列に並ぶとも言える。周辺のドラグーンに飛行高度
も飛行方向もあわせてしまえば、そのあたりの判断を省略できて楽チ
ンなのだ。

騎乗するイズルカに「前を飛ぶドラグーンにあわせて飛べ」と言い
含めれば、一切の指示をしなくてすむので、御者としては気が楽であ
る。

空路的制限としてはなんとも原始的な方法であるが、1000から
2000メートルを飛行可能領域と定めて、1000から1100メ
ルが北向き、1100メートルから1200メートルが東向き、1200
から1300メートルが南向き、1300メートルから1400メートルが
西向きと固定して区分してしまっている。基本的にいかなる例外も
認めないとまでしている。どんな緊急事態があっても、である。更に
言えば、面倒ごとを増やしたくないという判断から、斜行も厳禁だ。
許される飛行方向は4つのみという事である。

これらの規則は、実際に飛行しているドラグーンや飛空船、飛行船
を外部から統括して統制する方法が無いための苦肉の策といえた。

1400から1500メートルは個々の国家で軍用指定であったり、
貴族や王侯諸氏の優先空域という取り決めが合ったりするが、安全
マージン空域というのが本来の扱いであり、その上で、1500メ
ルから1600メートルが北向きで……と、1900メートルまで飛行方
向が定められている。

これは、混雑空域で使われる高度で、混雑空域で着陸を試みるもの
は下を、混雑空域を通過するだけのものは上を使うのがルールであ
る。1900から2000が軍用などと指定されている場合も、同じ
扱いとなる。

2000メートル以上の上空は飛空船や飛行船の領域であり、これに
ついては速度も遅く(最大でも時速100リーグほど)、大きいから相
当な遠距離でも視認可能なので、海を行く船と同じ扱いで、そのほか
のルールはゆるい。離着陸で上下運動を行う空域が飛竜場付近に指
定されているの(上昇用と下降用の2箇所が設定されている場合が殆

どである)で、低空をそれらが飛ぶ姿はなかなか見られない。

最低高度さえ間違わなければ基本的にどこを飛んでも自由で(飛行禁止空域は無論避けて運行される)、風を受けるためにそれぞれが自由に最適な高度を飛ぶのが普通である。偶然に同高度で相對した場合、互いに左側を飛ぶのは海上船舶と同じであり、唯一海上船舶と顕著に違うのは、視認距離で相對した場合、水平方向で避ける努力を行い、決して高度の変更を行わないことというのが厳格に定められているだけである。

ドラグーンは離着陸等で指定高度を垂直方向に横切る必要があるわけだが、その際は、指定高度に入る度に変進して高度を変更するのである。つまり旋回しながら高度を変えるわけで、なかなかファンタジーというのも面倒なのだというのがイングリッドの感想だった。

例外というのは山地等である。対地高度1000メートルと言っても、山の高さが8000メートル有りますでは、飛行高度は9000メートルを取れとなるわけで、空中に暴露しているに等しいイズルカではその高度ではたちまち騎乗者は命の危機にさらされてしまう。マズルカでも、与圧装置なんていう高級なものはありそうに無いから、やはり厳しいだろう。また断崖絶壁を乗り越えるような地形なら、その隔絶した激しい地形高度の変化を横切る上でルールを守るのは困難というか無理なので、その周辺地形により、ローカル・ルールが定められているのだ。

それらを記したオーダー・マップが各種取り揃えられているので、ドラグーンに乗るものには必須の書というわけである。定期的には内容が変更されるので、高価なそれを定期的に買うことが出来ないのであれば、特殊な地形は迂回するしかない。意外と面倒ごとが多くて世知辛い現実にイングリッドはしよっぱい思いをする。

とはいえ、そういった様々なルールは、混雑している空域だからということであり、単騎で飛ぶ限りに於いては自己責任で自由に飛んで良いというのが暗黙の了解だというのがタバサの言である。しかし、まったくのルール無視でぼけつと飛んでいけば、双方の見張り不足で空いた空域で間抜けにも衝突事故などという事態を招来するわけで、

ますますもって世知辛いファンタジーの現実である。

蚊柱が横倒しになったかのごとくに何やかにやとひしめいている周辺は、更に上空にぼつぼつと飛空船や飛行船が姿を現し、更なる混沌になりつつあった。この空域は北行きと南行きがほとんどで、それを横切る飛行物体は殆ど無い。

解せないのは、飛行方向の区別しかないルールなのに、ドラグーンがわざわざお行儀良く列を成していることで、汗を流しながら唇を嘗めるタバサにそれを問うと「面倒だから」とシンプルな言葉が返った。なにが「面倒」なのか、イングリッドはしゃべることすら「面倒」そうなたバサに苦笑いを返したが、いろいろな想像は出来た。

離着陸の場が特定箇所定められていて、ルール上、斜行が出来ないとなれば、最低限の飛行進路の変更のみで目的地を目指すならば、最終的には一本のルートにすべてのドラグーンが集中するのである。東西南北、どのルートから飛んできて、最低飛行可能高度が1000メートルで、結局、着陸を試みるのに高度を落として、その場合の飛行方向が北向きしか許されないのであれば、混雑が少ない場所で旋回し、飛竜場を目指す北向きの列に並ぶ以外に選択肢が無いわけである。

目的地に近づけば近づくほど混雑が酷くなる一方という訳で、無線設備がなく、空域管制も期待できないとなれば、仕方が無いのだろう。ファンタジーというのも存外に不便なことだとイングリッドは一人ごちた。デリンジャー現象などで無線設備が使用不能になったら、地球の飛行機もこのようなことをせざるを得ないのではないかと想像する。飛石の量に余裕があれば、最悪翼をもがれても着陸は可能な竜籠のほうがある意味、飛行機より安全なのかもしれない。

しかし、これでは大都市部の周辺100リーグ前後では面倒が多すぎてドラグーンを使う理由がなくなってしまう。混雑空域であれやこれやと迂回を繰り返して、速度も落としてでは速達性が失われるし、常に進入方向や離陸方向が一方しかないのであれば、迅速性も失われてしまう。トリステイン魔法学院のトリスタニアからの距離と

いうのは微妙なところなんだなと思ってしまう。なるほど、生徒たちが馬を用意するわけだと理解できた。

シルフィードは例外なのだろう。

イングリッドの理解ではそういう結論である。

説明を終えて疲労困憊とばかりに肩を上下させるタバサをねぎらうつもりでやさしく撫でつつ、眼を細めてイングリッドが周囲を見渡せば、同じように行列をなすドラグーンがいくつもあることに気がついた。それをタバサに問おうとして、タバサがうつむき加減になっていることに気がついて苦笑いし、振り返って目が合ったキュルケに指差して尋ねる。

「ああして列がいくつもあるということは、飛竜場とやらはいくつもあるということかや」

その言葉にキュルケは身体を跳ねて、僅かに眼を見開いて唇を嘗め、微かに首を傾げて眼を泳がせた。その背後からルイズが伸び上がり、キュルケの頭を叩いた。

「知らないなら知らないと言いなさーい！」

本格的に首を傾げて照れたような笑いを浮かべながらキュルケは叩かれた場所を撫でた。イングリッドがキュルケを撫でてから彼女の行動がどこと無くおかしいことにイングリッドは気がついていたが、とりあえずは喫緊の問題でも無いので脇に置いておく。

ルイズがキュルケの脇を通って、イングリッドに這いよった。ルイズはイングリッドが見渡した方向を何度も見なおして、手でひさしを作って伸び上がり、眼を細めて、ようやくイングリッドの認めたものを見つけたようだった。

「イングリッドって眼が良いのね……。イングリッドに言われなかったら気が付かないところだったわ」

別に遠いところの「渋滞」を指し示したわけではなかった。無かったのだが……。地霧に霞んで微妙に視界が悪かった。見通し上5から10リーグは視界が通るので、シルフィードの今の速度なら特段に危険を感じるほどでもないが、うっかり自身の特殊性を詳らかにすると

ころであつたので、冷や汗を流したイングリッドだった。

ルイズはしかし、それ以上の追求をするわけでもなく、顎を右手で扱きながら首を捻る。空に線を引く列を見て、地上を見て、右手を頭の上に持っていった頭頂部を摩る。

そうしてタバサのほうに首を回した。

「フォーテンブローまでどれくらい？」

疲労から立ち直って、だが、いまだに億劫そうなタバサは前を向いたままぶつきらぼうに返した。

「20リーグ弱」

「ありがとー！」

ちよつとしたことでも僅かなためらいもなく謝意を示せるルイズのあり方に、思わず微笑んでしまったイングリッド。その微妙な表情のイングリッドに対して、ルイズは振り返った。

口を開こうとして、イングリッドが妙な表情をしていることに気がついてルイズは、刹那、口を紡ぐ。疑問を浮かべて首を傾げるルイズの視線に、冷や汗を流してイングリッドは誤魔化すように小首を傾げた。

おかしな表情をするイングリッドをしばし見つめて、何とはない仕事草でやたらとイングリッドに身体を摺り寄せるキュルケに視線を移して「そういうことか」と誤解したルイズは、キュルケを引つ張って2人の身体の間は無理やり割り込みつつ、視線を戻した。

左手で眼下を指し示し、イングリッドの視線がそれに沿って向きを変えたことを確認して、口を開く。

「あの一際立派な街道が、ノーベル・ノツド街道よ。あれの突き当りがフォーテンブローね。だからシルフィはあれに沿って飛んでるの。」

大トリスタニアの南の正門であるトリスタニア・キブヴィル・ロツシュ門まではピラス・カレツジ街道が通ってるんだけど……」

左手を宙に移して、列を成すドラグリーンを指した。

「アッチの列はトリスタニア・キブヴィル・ロツシュ門の先にある、ベルガモンジエ飛竜場に向かう列ね」

地図を見たわけでもないイングリッドの頭の中では、おぼろげにし

かトリスタニアの市街配置が思い浮かばないが、市街地に食い込んだ場所に双方の飛竜場が配置されている想像は付いた。

「街地上空は飛行禁止ではないのかや」

その言葉に「ああ」とルイズが頷いた。ルイズの後ろで、イングリッドに近づくことを阻止されたキュルケが微妙な表情を浮かべている。「飛行禁止なのは小トリスタニア、ね。トリスタニア中心から半径25リーグ四方全部飛行禁止だと、迂回するのが大変でしょ。離着陸も不便になるし。南側の飛竜場は、着陸はともかく、離陸したら急上昇して直ちに南に向かわなければいけないからそういう意味でも不便でしょ。」

昔はトリスタニア全市が飛行禁止だったみたいだけど……不便が大きすぎて、新市街地範囲の大トリスタニアは許されたのよ」

イングリッドの顔面に大きな疑問符が張りついた事にルイズは気が付いて、イングリッドが声をあげる前に説明を続けようとして……背後から、キュルケが声を被せた。身を乗り出して、ルイズの頭の上に自身の頭を乗せる格好になった。かなり強い力でルイズの両肩をつかむ。

「ああああ、あのね、小トリスタニアって言うのは昔からトリステインの王都として栄えた部分で、王城とか貴族街とか、古くからある市街地とかの部分なのよ！」

明らかに会話に割り込むタイミングを計っていたようなキュルケは早口で捲くし立てる。

俄かに興奮したキュルケの腕を乱暴に払いながら、右手で頭の上の顎を持ち上げて刹那、キュルケに跳ね上げた眉を見せて溜息を吐き、ルイズはイングリッドに向き直った。

「それを囲むように形成されたのが大トリスタニアね。新市街とも言うんだけど……曖昧な表現よね。イングリッドみたいは何も知らない人に説明するのは難しいわね……」

つまり、行政区分としては、ドーナツツの中空部分が小トリスタニア、ドーナツツのおいしい部分が大トリスタニアという事である。

人々が群がるのは、当然のことながらおいしいところなので、そのリングの中心線上に飛竜場があると便利、と言う訳だ。大トリスタニア上空を飛行可能にせよという圧力も当然だろう。

人間というのは便利な交通手段のある場所に住みたがる。周辺施設がどれほどに少なくて不便でも、移動手段さえ確保されていれば、人間は、荒野の真ん中にだって住み着いてしまう。

つまり、市街地上空は飛行禁止だからと言って、草原の真ん中に飛竜場を建設すれば、勝手に周辺が市街化してしまうのだ。余りにも単純化した市街地形成のプロセスだが、基本はそういうものである。

ルイズは市街地上空が飛行禁止だと不便が多いから、当局が妥協したというような表現を使ったが、実際は飛竜場周辺が市街化してしまっただけで、大トリスタニアの範囲内に取り込まれてしまったそれらの運用を維持するために、市街地上空の飛行を追認したのではないかとイングリッドは想像する。

卵が先か鶏が先かと言う話なのだから、導き出される結果は一緒であるが。

それはそれとして、一般的な民衆（貴族もだが）の認識としては「大トリスタニア」＝「トリステイン王国の王都全体」なのである。地上を這っている限り厳密な行政区分がどうかなんて、役人以外には関係ない話なので、それで良いのだ。トリスタニアの行政中心部を大きく取り囲んで形成された新市街地なのだからという安直な発想で「大トリスタニア」と名づけてしまったのも都合が悪かった。

「大トリスタニア」。なんとも大仰な名前である。それを耳にした人々の反応は単純だろう。ふかしの効いたその名前を住民が常用するのも仕方ない面がある。単純に王都を指し示すのなら「トリスタニア」ですむのだが、本来であればスプロール化した市街「のみ」を指し示す「大トリスタニア」をトリステインの首都に冠された正式名称のように言い募る感情がトリステイン国民の一般に存在するのである。

そういう言い回しがあちらこちらにあるのだろうと想像する。会話の節々でそういう部分を聞き流すとでっかい誤解を育ててしまいかねないとイングリッドは嘆息する。単純なファンタジー世界と無邪気に受け入れられない面倒さにイングリッドは苦笑いするばかりだ。異世界なんだな、と強く認識しなければならぬだろう。

ルイズの説明は続く。いちいち嘴を突き込みかねないキュルケをけん制しつつ早口で捲くし立てる。

「南から新市街地に入るならばベルガモンジエに向かうのが普通の経路なんだけど、今向かっているフォーテンブローはアール・ド・トリステインとも呼ばれる、パレス・デ・レ・アル、トリスタニア中央市場小トリスタニアや旧市街地に近いから、私たちの目的をこなすには都合がいいのよね」

その言葉を受けてイングリッドは再び周囲を見渡した。

「なる程……高級な竜籠マズルカや、イズルカが多いわけじゃ」

実際にシルフィを挟んで飛ぶドラグリーンは大仰な装飾を施したものが多かった。個人が駆るイズルカも煌びやかに飾られている。もつとも平民がイズルカを利用する可能性はほぼないので、イズルカに乗るものはそのまま貴族であると断言してしまっても不都合はない。

そういった中に大きい虚飾の排された実用一辺倒のマズルカが混じっているのが散見される。4枚や8枚といった翼を持つ大型の竜籠だ。

見るからに鈍重なそれらのドラグリーンが渋滞の根本要因になっているように思える。

「あれは何じゃろな」

イングリッドの視線を追って、キュルケが慌てて答えた。ルイズが「ちっ」とでも言いそうな表情で顔を歪める。

「あれは高級食材とか、貴族向けの荷物とかを運ぶトランスポルトン・ドラグリーンね」

「……輸送機かの」

「輸送機？」

「ああ……いや、その、な」

イングリッドはどうしたものかと右手で頭をかいた。輸送機という言葉が3人には伝わっていない。文化が違うのだで済ますべきだろうか。説明も難しそうである。

「うん、まあ、私の知る場所で言うところのトランスポルトン・ドラグーンの事よの」

「ふうん……？」

ルイズが首を捻る後ろで、キュルケが大いなる疑問符を浮かべて、刹那、弾かれるように身体を前傾させてイングリッドに顔を寄せる。その結果としてキュルケの身体の下敷きになったルイズが叫ぶ。

「くぎゅー！」

それは叫び声と言ってよいのだろうか？

「ちよつとまってイングリッド！あなた、ドラグーンが何か知らなかったんじゃないの？」

「えっ？」と顔を跳ねさせて後ずさったイングリッドにタバサも僅かな驚愕を顔に浮かべてこちらに振り向いた。もつともその表情は「知っているならなんで説明させたんだ？」という非難が混じっている風だった。

「あ、いや、そのだな！」

やぶへびだった。何もかもを知らないと装って、ひたすら相槌をうてばよいだけの話だった。うっかり余計なことを口走ったのだ。このあたり、致命的にコミュニケーション能力が欠如するイングリッドのあり方が見事に暴露される結果が唐突に現出した。殴り愛に終始したイングリッドの通常時のあり方がまったく通じない状況に置かれていることを、イングリッドはナチュラルに考慮の外に投げ出していたのだ。

「あああー、その、なんだな……」

僅かに空を振り仰いで眼を泳がせるイングリッド。非難めいた視線を送るタバサに、あれこれ喚くキュルケ。その下でじたばたと暴れるルイズ。

「なにをしているんだか……」とばかりにこれ見よがしの溜息を吐いたシルフィードが、前を飛ぶドラグーンから距離を取って着陸に備える。

一機づつ、右方向に旋回しながら【不確定名称：滑走路】に進入してゆく。事実、ハルケギニアでも「滑走路」で良いのだがそれを説明する人間が失われたシルフィードの背の上ではイングリッドにそれを知る余地はない。

着陸用と離陸用で分けられているわけでもなく、単純に、幅300メートル、延長5000メートルほどという巨大な滑走路南側が着陸用で、北の端から中間部2500メートルまでが離陸用とアバウトに区切られただけの滑走路である。

流石に着陸については4本ある滑走路に1機づつのマズルカが順番に着陸進入しているが、離陸に関しては2500メートルほどの距離を使って、何機ものマズルカが同時に離陸を試みている。「現代的」感覚からすればありえないどころの騒ぎではない危険な姿だが、当の当事者達にとっては特段危険を感じている風でもない。それなりに秩序だった風景が展開している。

空中のドラグーンや飛行船といったモノを管制することが不可能ではあっても、地上滑走については一応、管制が行われているようで、オレンジ色の服を着せられたグリフォンが低空を何羽も飛び回って、蛍光ピンクのジャケットを着た人間に指示を出して周り、それを受けて蛍光ピンクを光らせながら、地上を移動するドラグーンを案内しているようだった。人間にしてはありえない速度で地上を走り回っているのです、それらは何らかの魔法的補助があるのだろうとイングリッドは想像する。

滑走路の両脇に、一定の間隔を持って堀があり、そこに何人もの蛍光ピンクのジャケットを着た人間がつめているが、時に、グリフォンの指示がなくとも人間が飛び出していくのはどういうからくりだろうかと、イングリッドの好奇心がうずく。

2本の滑走路が東側に、もう2本が西側に。それぞれの滑走路の両側に誘導路があつて、ぱつと見たところ、それぞれの東側誘導路が北

側から回り込んで、離陸位置に移動するための誘導路。西側が着陸後、ドラグーンが避けて南側に移動して、エプロンへ向かう誘導路と分けられているようである。

滑走路そのものは白色の極めて滑らかな舗装がされていて、幾筋もの黒い線がその上を汚している。タイヤの跡なんだろう。離陸機誘導路は赤色に、着陸機誘導路は青色に舗装されて、それぞれのアプローチは黄色とそれぞれの目的方向への色にまだらに塗られている。その縞模様は進行方向に対してV字を描いてわかりやすい。それなり以上の工夫が施されていてイングリッドは激しく感心してしまう。

4本の滑走路の北の端と南の端を串刺しにするように作られた東西方向の滑走路は横風滑走路だろうか？しかし、使用頻度はきわめて低そうだ。ほとんど新品同様の姿を見せている。横風滑走路というのもイングリッドの勝手な想像で、実際はどうかはわからない。

その中央に、まさしくターミナルビルと呼ぶしかない巨大な施設が建ち、その両側に、エプロンがあつて、駐機した竜籠からぞろぞろと人間が降りてきたり、乗り込もうとしていたりする光景が展開されている。

ターミナルビルは、はつきり言って、イングリッドの想像をはるかに超えた建築物で、うっかりあごが外れるかと思つたほどだった。

中央にガラス張りのドーム屋根を抱いた巨大な円形の建築物があつて、その中央を穿って1500メートルはある高さの塔が建っている。円形の建物は半径300メートルはある5階建ての巨大な建物で、東西方向に幅500メートルほどの3階建てのデッキが1000メートルほど延びてエプロンを南北に分けている。そうして分けられたエプロンは、北側が搭乗用、南側が降機用と分けられているようだった。

南北方向にそれぞれ外側に翼を広げたY字の3階建ての建物が伸び、アクセス・ウイングとなつているようだった。両翼は優に1000メートルはあるようで、V字の付け根部分まで500メートル。V字部分それぞれ500メートルほどで、その開口は400メートルほどを取っていると推測された。その壁はほとんどがガラス張りで陽光をキラキラと反射している。

Y字の、V部分の付け根にそれぞれ高さ1000メートルほどの塔が建っている。

管制の幼稚さをのぞけば、地球でもなかなか見られない、極めて充実した施設を抱く、超巨大空港の姿がそこにあった。

ターミナルビルの上に北側と南側、そして中央と、3本の管制塔……としか言いようがない塔があるが、イングリッドが見た限りではどのような設備なのか想像もつかなかった。無線がないのでは、あのような設備があっても意味がないように思えるのだ。

一応は発光機がちかちかと光を瞬かせているが、どういう役目があるのかまでは想像をめぐらせる材料にならない。いろいろ聞きたい事はあるが、現状、イングリッドは他の3人に弁解するのに忙しくて、他の何かを成す雰囲気ではなかった。

エプロン北側と南側に大型の格納庫や整備設備と思しき施設が立ち並び、使われていない竜籠が牽引車？に引っ張られたり、イズルカが馬丁に引っ張られている姿が見える。そういうのも観察したいが、視線を反らすたびにルイズに髪の毛を引っ張られて、周囲を見渡すどころではない。

離着陸をするドラグーンに対して、大きな文字盤が掲示されて、離着陸寸前の終末管制や、着陸後の移動方向などを示している様でもある。拡声魔法を使って、着陸進入中のドラグーンに対する指示も行われているようだ。

マズルカは滑走路に向かって進入するが、イズルカに対しては、下から明らかな発光信号による指示が出されていて、それを受けたイズルカの群れは、高度3000メートルほどの位置で直径1000メートルほどの円を描いて空中待機する列に上から順番に加わっていく。待機位置は南側ウイングの上空、塔の上を中心としている。

下から細くて強力な光帯が伸びると、それに照らされたイズルカが旋回しつつ高度を落として、V字の先、口を開けた部分のエプロンに円形の光が描かれて、それを確認したイズルカが旋回しながらアプローチをして、光のサークル中心にタッチダウンした。着陸が終わった時点で、直ちに光が失われる。着陸したイズルカに数人の係員と思

しき姿が駆け寄る。

着陸が確認されると、南端エプロン部に別のサークルが描かれて、光帯に照らされた別のイズルカがそれを目指して旋回降下する。

無線等無くとも十分に機能的な管制が行われている事実を見て取って、イングリッドは、その秩序だった動きに大いに感動して見惚れてしまった。喚くルイズやキュルケを思考の外に追いやってしまった。

正しく、必要は発明の友だった。必要が無線の開発に歩を進めなかったのは残念だが、無ければならないなりに、安全な管制方法というのは工夫で補えるのだと理解した。十二分に魔法を駆使して空域の秩序を守っているのも感動的だった。

長い歴史を直に知るイングリッドであつても絶対に唯の一度も経験したことの無い風景だと断言できる光景が眼前に展開している。まったくの新しい世界が展開している風景にイングリッドの眼は釘付けだった。

無線がない管制塔が役立たずなんていう考えは、イングリッドの勝手な思い込みで、極めて有意義な用途を持つていた。南側の管制塔が着陸を試みるイズルカの管制を受け持ち、北側が離陸用。中央の管制塔がマズルカ用ということなのだろう。中央の管制塔は、塔の南側で着陸を、北側で離陸を受け持つているに違いないと想像する。

パイロットの背に向けて管制する形になる離陸管制がどうなっているかは大いに興味があつたが、それにしても素晴らしい秩序を持つて、飛び交うドラグーンの姿は見事だった。イングリッドは正直に言つて、この姿を見て初めて本当に、ハルケギニアが異世界なんだと、心の底から納得した。

まったくシャッポを脱ぐ光景だった。納得もしたし、感動もした。正直、もつと乱雑で混沌とした風景を想像していたのだ。

精々が、適当に整地された草地に、ドラグーンが群がって、先を争つて着陸する姿を想像していたのだ。その端っこで、桶に入れた餌をイズルカに食わせて、マズルカを大勢の人間が手押ししているぐらいの牧歌的風景を想像していたのだ。

イングリッドはハルケギニアを散々に嘗めていたことを認めた。ハルケギニアはハルケギニアなりに高度な文明を育てている、極めて高水準の社会を構築している世界だったのだ。

激しく顔を輝かせているイングリッドの姿に、3人が顔を見合わせ、苦笑した。極めて珍しいことではあるが、タバサですら生暖かい風の笑顔を浮かべていた。ルイズはつかんでいたイングリッドの銀髪から手を離し、うっかりと抜けてしまった数本の髪の毛が手元に残ってしまったことに若干の動揺を覚えて、それを、風に乗せて手放した。「イングリッドってば、幼い子供みたいね……」

イングリッドは、シルフィードの尻尾の付け根に這い蹲って、宙に顔を出し、しきりに周辺を見渡している。そこまで這っていくイングリッドをルイズは留める事が出来なかった。背にルイズを乗せたまま引きずって、好奇心いっぱい、空を眺めるイングリッドに、ルイズもお手上げだった。

ルイズと視線を合わせたキュルケが頷いて、次いでタバサに視線を移すと、タバサも大様な動作で頷いた。

キュルケが苦笑いに溜息を乗せつつ、イングリッドの顔を見る。

「ちよつと可愛いよね」

そのキュルケの言葉に、タバサもルイズも同感だとばかりに頷いた。

シルフィードはその光景を視界の端に捉えながら密やかな溜息を吐いて、管制に導かれて地上の光を目指す。

着陸の寸前まで尻尾の付け根のむず痒さを我慢する羽目になった。

初めてのお出かけ（5）

着地の衝撃でシルフィードから振り落とされたイングリッドは、ようやくその段になって正気を取り戻した。正気は取り戻したが、なす術もなく硬く舗装された地面を転がった。通常のイングリッドを知る人間なら、なかなか衝撃的なシーンが展開されたことになる。

地面を転げるイングリッドの姿をシルフィードの広い背の上で見送って、顔を見合わせたキュルケとルイズは、着地の際に感じた衝撃の大きさから、シルフィードがあえてハードランディングしたのだと理解した。だが、それがシルフィードの自主的な判断によるものか、はたまたタバサの命によるものか。その判断はつかなかった。ただ、離陸時に一切の衝撃を与えぬままに、ふわりと浮き上がったシルフィードである。地面に穴でも穿つのではないかと思わせる今の衝撃は、少々予想外だった。

そうは言っても、2人にとつてもかなりうざい状態になっていたイングリッドの姿を見れば、投げ出したくもなるかな、というのが2人の、口にしないまでも統一された見解だった。ましてや尻尾の付け根に抱きついて、ごそごそと下を見回していたのだから、シルフィードには「うざい」どころではなかったであろう。あの状態で安定した飛行を保ったシルフィードは大変にご苦労なことであつたし、それを見越した上でなのかどうかは判らないが、不安定な場所で身体を乗り出して「ふぬふぬ」言っていたイングリッドも大変にお疲れさまであつた。

ただし、投げ出されたイングリッド自身の身体に関する心配は2人にはなかった。投げ出された程度の衝撃でイングリッドがどうこうなるとは2人には想像できなかった。よって、心配するだけ無駄だろうという意見である。まったくありがたくも、それぐらいには信用されているイングリッドだった。

それ以前にルイズにとつては、飛行の最後の段階で、やたらとおかしな行動をとるイングリッドの姿がある意味で衝撃的であつたので、呆れた感情が心の大部分を占めて、イングリッドを心配する気持ちが

どこかに押しやられていた部分もあった。

キュルケにとっては、謎だらけで怪しい雰囲気のあるイングリッドだが、見た目に不相応な行動をとりつつ、時に、見た目に相応な行為を行うことには好意的な評価を付けがちであったので、地面を転がるイングリッドを見て苦笑いするだけだった。その外観を見ればどう上を見ても15か16歳程度であるのだから、19歳のキュルケとしては背伸びをして大人ぶる妹を見守るような気分だったのだ。

イングリッドがルイズに告げた、それを告げられたルイズ本人も大いに判断に迷うところのある自己申告年齢を聞けばキュルケはひっくり返ることになるであろうし、本当の年齢を聞けばショック死するところだろう。

タバサは鉄面皮のまま転がるイングリッドを見つめるだけだった。

そういう生暖かい視線の中でしかし、周囲の人間が起こした反応が大変だった。その立場に慣れきって、さらに外部と遮断された学院という箱庭のなかでは貴族という自覚が乏しい3人にとっては、イングリッドが地面を転がる姿は笑い話ですんだが、飛竜場職員としては冗談ではなかった。

特に、シエル・デ・ドラグ・マズルカに乗ってやってきた「貴族という固定観念があるエプロン職員は、目の前で発生した「貴族様の転落事故」には大慌てである。「わっ」とばかりに皆がイングリッドに走りより、大の字になって空を見上げる少女の身体の状態を酷く心配させる事態になった。最初にたどり着いた者がイングリッドを引き起こす。

その姿が想像以上に美麗で、その肢体が美しいことに気がついたある男性職員は、手に取ったイングリッドの右手が手袋に包まれていることに落胆しつつも、この日のシフトに入って仕事が出来たことに關して、永くブルミルに感謝の念を抱き続けたそうである。

それはともかく、そうして頭をさすりながら熱を持って自身の尻を苛める地面に腕をつけて周囲を見渡し、自分を囲んでいる男達に気が付いてイングリッドは小首を傾げたが、その仕草一つで顔を赤らめる

羽目になったのは、男達にとつては情けなくも正しくもある反応だった。その中の一人がこわごわといった風情で、イングリッドに声をかけた。

「あの………大丈夫ですか？」

その言葉を受けて疑問を表情に宿し、ゆつくりと周囲を見渡して、こちらに苦笑いを送りながらシルフィードの背から降り立つ3人を見て取り、そして自分の状況を理解して、イングリッドは取り繕うように顔に小さな笑みを浮かべて頷いた。

「……おおう、我の手抜かりじゃ。うっかり振り落とされてしまったわい……。大事無い」

声をかけた職員が差し出す腕を取り、反動をつけて立ち上がったイングリッド。

「よいっしょー！」

両足をピンと伸ばしてかかとを軸に、左腕を大きく振った反動と、男の腕のサポートで軽々と立ち上がった姿は、周囲に集まっていた職員に「この人に怪我はない」と納得させるに十分な説得力があった。安堵のため息が満ちる。その姿に気が付いて、イングリッドは大げさに頭を下げた。

「うむ。迷惑をかけた用じゃな。許せ」

互いに顔を見合わせる彼らに頭を挙げたイングリッドは、笑顔を見せて首を傾いだ。

「ありがとう、の」

腕を貸していた男を、握手というにはやや激しく振り回して、次いで手を離れた。イングリッドの照れ隠しだった。手を振り回された彼も、酷く赤らめた顔で頷き返した。

やれやれとばかりに手を振り仰いで男達は、それぞれの持ち場に戻る。ただし、イングリッドに触れていた男はやたらと他の男にちよつかいを受けつつ、背中をバシバシ叩かれながら、アレコレと立ち並ぶ資材の裏手に集団で「立ち去った」。あれが男の友情というものかと妙な誤解をしたイングリッドは、他の職員の前で、なにやら手続きらしき行動をしているルイズたち3人を見守る。

その後ろで、ドーリーが用意されてシルフィードがのそのそと足を乗せる。8本足のぎりぎりグロテスクに見えないですんでいるぐらいのデザインの「馬」が、トーイングバーを介してドーリーに連結され、馬の上に運転手？が乗る。明らかに魔法的道具と思しき機材が、それも含めてエプロンを行きかっていることにイングリッドは感心した。

その後ろで次のイズルカが降り立って、シルフィードに行われたのと似た動きが続く。現場の動きは迷いがなく、迅速で、秩序だった。文化的にも社会的にも成熟した世界が垣間見れたる光景だった。しかし、それらを眺めつつ、イングリッドは内心で動揺しきりだった。つい先程までの自身の心のありように衝撃を受けていた。僅かに過ぎ去った時間の中で、自分の行動がひ若い少女のようであり、思いついた瞬間に顔から火が出るかと思ってしまうた。

見た目のありようから想像もつかないはるか過去から存在するイングリッドであるが、見た目は美少女（自称）で固定されている。余りにも長く固定された外見に自身で慣れきってしまい、その外観が周囲に与える影響を時に、考慮しないが故の混乱を巻き起こすイングリッドだが、そうではあっても、心のありようは風貌と一致していない自信が合った。

筈だった。

ドーリーに乗せられて、格納庫？厩舎？へと引っ張られてゆくシルフィードを見送り、こちらに足を向けたルイズたちを見るイングリッドはしかし、心ここにあらずで、ルイズの姿も唯視界に入っているだけであり、認識している訳ではなかった。近寄って声をかけようとしたルイズが、イングリッドの状況に気が付いて顔を顰める。呆れた表情で見る3人に、数瞬遅れて気が付いたイングリッドは、咳払いをくられてそっぽを向いたが、その内心は千路に乱れていた。

まるで、姿容に引きずられたかのような自身の行動。それを自覚することも出来なかった結果。どうにもこのハルケギニアに召喚されてからの一々で、ちぐはぐな行動に終始しているような気がする。や

ることなすこと普段のファイターとしてのあり方から逸脱しているような気がする。

過去を思い出してもそのような状態にある自分というのは想像でしかなかったし、思いだせる限りに於いてはそんな風なあり方を持つことはなかった。ような気がする」とイングリッドは思う。しかし、今のイングリッドあり方は、前代未聞の状況だった。自己評価としても未曾有の事態に刹那、呆然とする。一体自分は……。

そこまで思考を進めたイングリッドの頭に、小さな手が当てられた。縦に。それなりに勢い良く。所謂チョップというものであった。

「アイテナー」

大して痛くもなさそうな声を反射的に上げて、大きさに頭をさすりながらイングリッドが振り向くと、ルイズが腰に手をやって溜息を吐いていた。いつの間にか建物側に移動していたのだ。イングリッドはそのことに気がついていなかった。そのことにも驚いてしまうイングリッドだった。随分と迂闊なことである。

「なにぼうつとしてるの？ここに居ると邪魔になるから、すぐに移動するよ」

表情が失せた顔を表して頭をさすり続けるイングリッドの姿にもう一度溜息を吐いたルイズは、イングリッドの右手をつかんで強引に引っ張った。が、地面に突き立てられた杭かとばかりにびくともしいその身体につんのめって、勢いよく倒れそうになる。

イングリッドは慌ててルイズの腰を抱き寄せてかばう。意図せず2人の体は密着した。

「おお。大丈夫かやルイズよ。慌てて怪我をしてもつまらぬぞ」

先ほどまでの葛藤を瞬時に投げ捨てて、ただルイズを心配してその顔を覗き込むイングリッドに、ルイズは一瞬で沸騰した。

「ば、馬鹿！誰のせいだと思って……」

首を捻って覗き込むイングリッドの顔を、ルイズは下から両手で支えた。視線を思いっきり反らす。

「近いから、顔！」

イングリッドの顎を右手で支えつつ、左手で突き飛ばそうとしたル

イズだったが、イングリッドの身体は小揺るぎもしなかった。ルイズの反応の作用が彼女の身体を支えるイングリッドの右腕に伝わり、そのまま反射してルイズの意図とは逆に、2人の体の密着度が高くなる結果をもたらした。よって、周囲から見ると、あたり構わず肌を触れ合わせることを好む、ある方面の特殊な趣味の2人組が場所もわきまえずに乳練り合うような光景が現出した。

思考の混乱を引きずるイングリッドは反応が遅れ、ルイズはルイズで学院入校以来、肌で触れ合うような類の濃厚な人付き合いが薄かったが故に、ルイズ自身の思考を裏切つて、その身体が大げさに反応してしまった。この場合は反応できなくなったと言ったほうが良いかもしれない。そうして2人は忙しく走り回る飛竜場職員の視線の中で、何がしかの演劇の1シーンのように見詰め合つて固まった。見つめあう瞬間、好きだと気づいたとでも言いかねないような、一種幻想的な光景だった。このような場所で展開するようなものではない、という意味でも幻想的だった。

純情な若い男児が多い飛竜場職員の中には、慌てて目を逸らす者もいれば、逆に眼を見開いて視線を釘付けにする者もいた。ドローリーで移動しながら首を回してタバサたちに視線を送るシルフィードは、やれやれとばかりに首を振った。

その2人の頭をばかり、ばかり、と杖で殴つたのはタバサである。常なる鉄面皮の下から隠しきれない呆れの感情が滲み出ている。その後ろを追つて、手にした財布の口を閉めながらキュルケが近寄る。何がしかの書類を渡されたタバサは、瞬間、書類に視線を走らせると顔を上げてキュルケに頷く。それに頷き返したキュルケは飛竜場を吹き抜ける風を身体で遮りながら、慎重に書類を折りたたんで、タバサのマントをめくり、その下から現れたサイドポーチに納めた。

「はいはいはい。仲が良いのは知ってるから、はやくカウンターに行つて処理しましょ。時間がモツタイナイわ」

ぱんぱんと軽く手を叩きながら、ルイズ、イングリッド、タバサの順に視線を送るキュルケ。最後に苦笑いを浮かべながら周囲を見渡すと、数人の職員が慌てて顔をそらして、彼ら自身の仕事を思い出し

て慌てる。

左手で自身の腰をもみ、右腕を途中で折って、手のひらで空を仰ぎつつ、片目を髪の毛で隠しながら軽く頭を傾げて溜息を付くキュルケ。目が上を向いて軽く泳いでいる。絵になる姿だった。そういう部分でも一々計算されたポーズを自然にこなす姿は、キュルケならではだった。その横でタバサが棒立ちになって、無表情にルイズとイングリッドを見る。が、内心にいらだたしきがあるのか。右手の杖がゆらゆらと揺れていた。

それに気が付いたイングリッドはわざとらしく大げさに咳払いをして、ルイズから僅かに距離をとる。茹だった表情のルイズの両肩をつかんで、回れ右をさせて、ここから見上げるとV字をこちらに開いている様に見える建物の、その付け根に身体を向けさせた。

「さあさ、ルイズよ。そろそろ行くうではないか。時間がモツタイナイよぞ」

ルイズの身体を強引に押しして歩き出したイングリッドの姿を認めてタバサを見下ろすキュルケ。タバサは「なに？」とでも言いそうだった。

肩を竦めたキュルケは、2人を追う。タバサもその後ろを付いて行く。

4人の姿が失われたエプロンでは、安堵とも残念ともつかないため息がそこかしこから漏れた。

イズルカに騎乗し単騎で訪れるものは、極僅かな例外を除けば貴族であるので、イズルカ騎乗者用の到着ロビーは相応の設備だった。建物2階にあるロビーは、華美ではないがそれなりに手間もお金もかかっていそうな調度が飾られている。天井が恐ろしく高いのも「現代地球的な空港施設」を思い出させる光景だった。軽く20メートルはあるのだ。一階の天井は5メートルほどしかないが、それも建物の天井高としては破格の構造だった。そういった部分をのぞけば、全般的にはシンプルな装いだが、格調高い雰囲気で周囲を包んでいる。V字を見せ

る建物の付け根にカウンターがあつて、そこでいろいろな手続きが行えるようになっていた。

カウンターと言っても、何十人もが同時にやり取りして困らない広さを持つし、それだけ広くてもなお行列が出来ているのだから、大変な混雑だった。イングリッドの見たところ、まさに空港そのものであった。

行列の後ろでは、各々の手荷物がおかれるスペースがあり、麻薬探知犬のような「犬っぽい」モノを連れた警備員らしき姿がそれらの間をぬつている。明らかに魔法的な生き物であるから、危険物を探知することが出来るように訓練されているか、最初から危険物を探知できる能力を持った何かなのだろう。それらの生き物がやたらとイングリッドを気にして振り返るのがうつとおしかつた。

今イングリッドたちがたむろするロビーは、長辺の真ん中で切り取られて断絶している。吹き抜けがあつて、その間にブリッジもないのだから隔絶した空間だった。東西に別々に区分されたスペースとなつている。V字の内側がイズルカ用。外側がマズルカ用と見えて、マズルカ向けのロビーは、イングリッドたちの場所に負けず劣らずの大混雑だった。時々怒号に近い声上がり、係員や警備員に利用者そのものも含めて走り回っているから騒がしい。その騒ぎにベンチソファーに座るルイズが顔を顰める。

吹き抜けから一階に眼をやれば、エプロンから断続的に人々が押し寄せている。長辺の真ん中で区切られた外側はそこそこ激しい混雑を見せるが、内側はお行儀の良い人々が僅かに群れるだけである。それを見て勘違いした人間が「外側」から「内側」に押し入ろうとして警備員と揉めている。それに軽蔑の眼差しを送つて、お行儀の良い人々が、ポーターに荷物を引かせて2階に上がってくる。僅かな「壁」を境に世界が懸絶している姿が見れた。

「さわがしいの」

苛々している風が傍目から見て取れるルイズの気を反らそうと、イングリッドがその横顔に声をかけた。彼女は即座に反応した。やはり苛々しているのだろう。

「ほんとね。まったく、羨が成っていないんだから」

その言葉に苦笑いを浮かべたイングリッドがふとイズルカ・エプロンを見ると、翼を激しく羽ばたかせながら両翼50メートルになんなんとする竜籠が舞い降りる姿が見えた。地面を撫でる激しい風圧に、飛空場職員が身体を落として耐えている。

実際に着陸をも行う場所を「エプロン」と呼んで良いかに刹那の疑問を抱いたイングリッドだが、それ以上に疑問を感じさせる光景に、慌ててルイズに問いかけた。

「ルイズよ。あれも竜籠と呼んで良いのかや？」

周囲を見渡していたルイズはイングリッドの声に視線を移して、イングリッドが見たものを捉えて、小さな感嘆の声を上げた。ほぼ全面ガラス張りと言っても良い「壁」は、だが遮音性も断熱性も高いようで、建物内の騒がしさもあって、イングリッドに言われるまで、ルイズは竜籠の姿に気がついていないようだった。

「ええ。あれも竜籠と言えるわね。でも、本当の意味での竜籠よ。なかなか見れるものじゃないわ」

イングリッドは首を傾げた。

「竜籠というのは術からずマズルカではないのかや」

その言葉にルイズは小さく微笑んでイングリッドに視線をあわせる。

「うん、そうね。一般的な認識ではそれで良いのだけど、ああいう昔ながらの竜籠も、まだまだ残っているのよ」

イングリッドはルイズの言葉をしばし頭で反芻して頷いた。

「あれが『本来』の竜籠というわけか」

「そうよ」

つまりは、やはりイングリッドの最初に想像した竜籠の姿が本来的な意味での竜籠であったということだった。

昔の竜籠は——今でもわずかばかりに運用されているのだから完全に過去のもののように言ってしまうのはおかしいのだが、生きた飛竜に下げられたゴンドラに人が乗るものだった。ただし御者は飛

竜の上に乗らないといけない。シルフィードのように、飛竜が使い魔であるなら、ゴンドラ内部から遠隔で指示することも可能であろうが、そして過去にはそういう例もあったのだが、捕獲、調教した通常の飛竜を腹の下から指示を出して操るのは不可能なため、そうせざるを得ない。

そうであれば素人考えでも思いつくいつもの困難がある訳で、飛竜を操る御者というのは極めて特殊な技能の持ち主ということになった。例えば、飛竜を操るなら飛竜の頭頂部に腰掛けることは合理的だろう。しかし腹の下にあるゴンドラが見渡せないのです、着陸地点の選定が困難になる。本来の飛竜であれば、理論上、足が納まる場所があればどこでも着陸可能となるが、足が跨ぐ位置に馬車でも置いてあつたらゴンドラが大変なことになってしまう。

言うまでもなく飛竜はゴンドラを吊るすために生まれてきた生物ではない。足に獲物をつかんで飛ぶことは可能であるし、時に自身とほぼ同じ大きさの獲物をつかんで何十リーグも飛翔することが知られているから、大きな飛竜であればゴンドラを吊るすこと自体に不自由はない。ただし、足と足の間にあるスキマに腹を回したベルトで固定されたゴンドラをつけることは調教した後という話になる。幼い内から調教できた場合は除くとして、すでに自分の能力で自由に空を飛ぶことを知った飛竜となると、降りろといわれれば、足の置き場さえあればどこでも下りてしまう。大きな岩をまたいで、ゴンドラが岩と飛竜の腹に挟まれてぺっちゃんこになりました、となってしまうば、大惨事どころではないので、そういう部分も考慮して飛竜を操るのが御者の役割となる。

だいたい、何十人も乗って、その荷物も載せて底が抜けないゴンドラという重いものを腹の下に吊るして、空を自由に飛べる飛竜などという存在がごろごろしていたら大変である。注意深く調教したから竜籠をぶら下げてくれるのであって、野生の巨大な飛竜にとつては本来、人間は唯の餌である。

竜籠が素早く空を移動できる道具として便利でありながら長い間——少なくとも4000年前までは超高級な乗り物であつたのは

そういう理由である。

実際には巨大な体躯を持った飛竜は珍しい存在であるし、傷をつけずにそれを捕獲することは何十人もメイジを動員した一大事業になるしで、さらに、傷をつけぬように捕獲をする困難さは言うまでもない。調教するとなればいかなる難題となるかは想像も付かないし（非捕食者が捕食者を飼いならそうというのだ！）、維持管理も考えるところ、どれほどの手間隙がかかるかというものだ。

シエル・デ・ドラグ・マズルカというものが発明されて、突然に竜籠の門戸が庶民に開放されたのは当然のことで、大量の物資を運搬するような使用には適していないが故に、飛行船や飛空船が淘汰されていないのだが、こと、人間が移動するのであればこれほど便利なものもなかった。だから、多少は料金が嵩めど、野宿の用意とか、夜盗に脅える旅路とかを想像するならば安いものだど、あつという間に普及したのである。マズルカを当初開発した者が純粋な研究者だったことも功を奏した。最初の制御オーブの開発には1000人以上の犠牲が出たという伝説があるが、そうであったのに彼は、制御オーブのコピーに頓着しなかったのだ。

外観や構造のコピーはトライアングル・メイジ一人か、複数のライオン・メイジが協力すれば難しくはなかったもので、シエル・デ・ドラグ・マズルカの普及はなおさらに急速だった。国家間の国家権力競争思考も含めれば、国策として大々的に普及が図られた面もあるから、改良型の開発競争も激烈だった。かくして古典的竜籠の経済的意味での存在意義は失われたのである。

「で、あれは？」

窓の外を指差すイングリッドの身体の向きとは逆の位置で……タバサとキュルケはカウンターで喧々囂々である。いや、2人が喧々囂々ではない。一方的に騒いでいるのはキュルケだった。エプロンで手付けとチップを支払って仮書類を作り、それをカウンターで正式なものにする作業を行っているのだが、飛竜場使用料にシルフィードの預かり賃といろいろと金がかかるのだが、シルフィードの大きさについてキュルケが譲らなかつた。

外形5マイルおきに料金が変わる制度だが、累進加増制度なので、大きくなればなるほど急激に高額になる。エプロン職員はシルフィードの大きさを、地面に書かれた目安の印と見比べて20マイル程度と判断して、書類にも20マイルと書き記した。

これがキュルケがごねる元になってしまった。20マイルが「以上」なのか「未満」なのか。常識的に考えて、20マイル以上25マイル未満と言うつもり「20マイル」なのだろうが、書類に書き記す数値として不備があったのは間違いがなかった。厳密に「20マイル以上25マイル未満に該当する」ことがはっきりわかる書き方——つまり、適当に23マイルなどと書いても良いし、本来ならば、そもそも規則上は「20マイル以上25マイル未満」と書くべきだったのだ。

キュルケがシルフィードを20マイル未満と強弁するのは、飛竜場側のミスであるとも言える。取り扱いが極めて面倒なイズルカである。もともとの料金が低いのも当たり前なのだが、キュルケも必死である。本来はタバサが払う金であるのだが。

そしてタバサはそれに頓着していなかった。迷惑そうにキュルケを見上げて、唾を飛ばすその姿ををぼんやり見ている。カウンター職員も相手が貴族であるとはいえ、ここで引き下がれば他の貴族に「我も我も」とやられてなし崩しになるのは確実だから「決死」の覚悟である。

そうになると、騒ぎは短時間で収まらないだろうと思いつつ、イングリッドは知らぬ風を貫く。まあ、キュルケであるので騒ぐだけ騒いで満足すれば引き下がるであろうという目算もあった。キュルケがめんどくさい思考を持つことに気が付きつつあるイングリッドだが、引き下がるとなればあっさりと矛を収めるだろうとも思っている。キュルケが満足するまで騒がせておけばよかろうと無視して、巨大な飛竜に視線を戻した。

ルイズは、イングリッドが何を見て視線を反らしたかに気が付いて、自身もそれを無視しつつ、飛竜を見た。

「まあ、貴族の見栄ね」

言葉通りである。

得ることも維持することも困難な「竜籠」であるから、それを所有しているだけで貴族の格が上がる。マズルカの普及で貴族以外ではことさらに新規に古典的竜籠を得ようとする者が少ない現代では、なおさら「実用的ではない」とされるシエル・ゾ・ドラグーン古典的竜籠を所有することの意味は高いとも言える。

マズルカの普及以前からでも竜籠の所有はステータスであったから、逆に、今になって古典的竜籠の所有欲求が大きくなっている部分もあった。皮肉な話である。

それでも巨躯を持つ飛竜の絶対数が少ないのであるから、どれほど需要があっても古典的竜籠の数が急速に増大する結果とはなっていない。そして需要があるのに供給がないとなれば、その対象価格は高騰するわけで、ますます古典的竜籠のステータスが上がる訳である。

今、確実に古典的竜籠を得ようとするならば、もともと所有している貴族に頭を下げて金貨を積み上げるぐらいしか考えられない情勢なのだ。新規の古典的竜籠を得ようと思えば、相当以上の幸運を祈るのでもなければ何十年というスパンで見ると見る大事業となってしまう。先祖伝来の竜籠を持っている貴族となればそのステータス性は格別なものである。

「先祖伝来とな？ 飛竜とはそんなに長生きなのか？」

首を捻るイングリッドに、首を振りながらルイズは溜息を吐いて応えた。

「イングリッドって時々ものすごい馬鹿……うっうん！ 世間知らずに見えるわね」

「馬鹿って……お主」

「ルイズよ」

「……」

飛竜の生物学的寿命は確定していない。竜種全般がそうなのだ。

なるほど、一度飛竜を手懐ければまさに貴族にとって、かけがえのない財産となる訳である。一生モノどころか末代まで轟き渡る業績のひとつと見られる理由である。

無論不老不死という訳でもない。困難とは言え、人が打ち倒すことも可能だし、飛行中に悪天候に阻まれて墜死という例もある。しかしそれ以上に飛竜が死ぬ原因として知られているのは、何十年かに一度行われる脱皮である。

脱皮一回で5分から一割は大きくなるといわれる飛竜である。脱皮をすればするほど幾何級数的に大きくなることが知られているが、ある程度の大きさを超えた竜種の脱皮は非常に危険が大きいのだ。

脱皮行為自体が無防備を晒す状況であるし、実際に、竜種を狩る、飛竜を捕獲するという行為を行う上での最大のチャンスは彼らの脱皮中なのだ。

無論、彼ら自身もそれに自覚があるが故に、深い森の中とか、険しい山の奥とか、巨大な自然洞窟の突き当りとかで脱皮を試みるのだが……：体躯が大きい竜種は、脱皮に手間取って敵に襲われることもあるし、脱皮そのものに失敗して、息絶えることすらある。年老いた巨大な竜であれば、そもそも身を隠すことも困難になる。

脱皮自体が途方もなく体力を消耗する行為であるし、脱皮に失敗して身体の自由を失い、衰弱死ということもある。大きくなればなるほど、どうしてもなく脱皮に伴う体力消耗も激しくなるし、大きくなれば手先の器用さを失うのだから、脱皮はますます困難になる。大きく育った竜種は一般的に、体表が分厚く頑丈になることが知られているので、それもまた脱皮を困難にさせる原因となる。だからと言って脱皮を我慢すれば、自らの表皮に締め付けられて圧死などという愉快な事態になる。だから竜は脱皮に命をかけざるを得ないのだ。

よって、彼らの寿命とは脱皮が不可能になったそのときではないか？というのが現在の主流な学説である。

学説が学説にとどまっている理由は、人間の手によるものである。ヒトに飼われる飛竜であるならば、それがいつまで通用するかという疑問はあるにせよ、脱皮をヒトが手伝えるのだ。道具や魔法を使って

表皮をはがしてしまえば良い。ただし脱皮を手伝う行為は普遍的ではない。脱皮に苦しんでいる飛竜に突然近づいて表皮を引き剥がそうとすれば攻撃されたと勘違いして流血の騒ぎである。実際に何度もそういう事故が発生したのだ。それでもヒトが手伝おうとするのは立派な飛竜を維持したいという打算もあるし、単純に苦しんでいる飛竜を助けたいという純粹な好意もあった。しかし、大抵は飛竜の死と言う悲劇的な結果に終わっている。

飛竜の寿命が永久に近いのに竜籠の数が純増しない最大の理由なのだが、例外があつて、脱皮が簡単に済むころから積極的に脱皮を手伝っていた貴族がいたのである。

まったくの偶然でしかなかったが、最小でも一日がかりの脱皮を、時間がかかつてはそれだけ飛竜を使う機会が減るからという理由で、飛竜が幼い内から脱皮を手伝った貴族がいたので。

竜籠としてではなく、イズルカとして使っているうちからそういう扱いを常態として、飛竜を甘やかす貴族がいたので。

柔らかい表皮を持っている時代に、手作業で撫でるように外皮を巻くことをしているうちに飛竜も、人間が脱皮を手伝ってくれるのだと理解したのだ。そうして、大きくなって脱皮に困難と苦痛を得る状況になっても、寧ろ積極的に人間に脱皮を手伝わせるようになった要領の良い飛竜が少数生き残っている。その中には始祖の時代から生き残っているとか、背に始祖を乗せたことがあるとまで言われている飛竜までいるのだから、やはり竜種の寿命は謎だと言いたい方がいい。

「んむ。なれば、あれは有名な貴族の持ち物……と、言うことかの」「ジュネス・ジョワ・ドラグ・エスポワレね」

その言葉を聞いて、イングリッドは噴出した。

「大仰な……いや、すごい名前じやの」

イングリッドの笑い声に、首を伸びやかして眼を見開いたルイズ。その顔には驚きとも呆れともつかない表情があった。

その妙な表情のまま、しばしイングリッドを見つめた後にルイズは肩を擧めて身体を屈め、イングリッドに擦り寄ってその顎を下からつ

つく。その目は半眼で、睨みつけるような形状になって、首を大きく傾げながら見上げる形になった。

「あなた……イングリッドの事が時々わからないわ、私」

そのルイズの態度に半開きの口を固めて、首を傾げるイングリッド。その表情を認めてルイズは、イングリッドから身体を離すと、肩を竦めて、ガラスに遮られたエプロンの方向を向く。

巨大な飛竜は、片足に一つ、2基の大型ドーリーに乗せられて、大型の牽引機（牽引馬？）からY字のトーイングバーがドーリーに連結されるのをおとなしく待っている。大勢の職員が忙しく足元を走り回り、首の上には御者が座って首を撫でている。

あれだけ巨大なモノの足元となれば、感じる威圧感、或いは恐怖感も半端ではなからうというのがイングリッドの感じた素直な感想だった。翼を畳んでいるとはいえ、地面から20メートル近くの高さに頭がある巨大生物だ。イングリッドですら気後れするかもしれない。鯨が地面に打ち上げられてもこれほどまでの存在感を發揮することはないだろう。こんな姿を見せる生物なんて、地球では想像の埒外だ。

逆に言えばハルケギニアでは、当たり前な情景なのかもと思いなおす。が、ルイズの言葉を信じるならこれだけの巨大な飛竜はこの世界の人間にとってもお目にかかることが難しいのだと言うのだから……。まあ飛行場職員がジャンボ旅客機を恐れない様な物なのかと納得しておく。イズルカとしては珍しくとも、今までに見たマズルカの中には、見たところ100メートルオーバー等というのもいたから、大きい乗り物に対する恐怖はないのかもしれない。周辺を這う人間に、飛竜を恐れる雰囲気は感じられない。それだけ信用されている、或いは慣れているということなのか。

飛竜の足元でペコペコと頭を下げる職員に、大様に頷く男。実務的なことはその隣で別の人間が担っているようだった。バトラーであろうとイングリッドは判断する。

長身の、見るからに貴族といういでたちの中年男性とそれを取り巻くバトラーにポーター、フットマンにメイド、メールボーイと、

サーヴァントセルヴァンに傳かれた姿は、見た目という意味ではまったく古典的貴族中の貴族という光景だった。

「アリ・ニコウル・ド・ラ・モット伯ね」

集団を作る貴族の姿を見つめて、ルイズが呟いた。あまり良い感情が感じられない。

「お……おーお、なるほど。ジュネス・ジヨワ・ドラグ・エスポワレは、そのモットとやらの持ち物か。あれほどの竜籠を持つ貴族となれば、モットとやらは権威ある大貴族なのかや？」

その言葉に即座に首を振って否定するルイズ。俄かに肩を怒らせてイングリッドに振り返る。その右手人差し指がイングリッドの鼻先に突きつけられた。

「あんなのが貴族だと思われたら迷惑千万よ！成り上がりよ、成り上がり」

ルイズの表情に浮かんだ僅かな嫌悪を見てイングリッドは、まさかヴァリエール家と敵対するような貴族なのかと思った。そうではなかった。貴族としての関係がどうか以前に、人間としてのモットを嫌っている雰囲気があった。

そのことに気がついて、何故だか安堵したい気分になったイングリッドだった。そして、ふと、なんに安堵したのかわからなくて、首を捻った。それを見て誤解したルイズは、身を乗り出してイングリッドに迫る。

「成金よ！新参よ！野蛮よ！レオ・アフリカヌス開発運動で儲けた、数少ない貴族なのよ！」

いやに興奮するルイズに身を引きながら、イングリッドは迫る肩を抑えた。

「んー、レオ・アフリカヌス開発運動とやらは何度か聞いたが……それは、みんなで儲けるために始めた事業なんじやろ。結果的に儲からなくとも、それは自己責任じやなろうか。儲けたというなら堅実だったのか、能力があったのか……」

それに言葉を被せてルイズが唾を飛ばす。このあたりの興奮具合はキュルケと変わらないような気がしたイングリッドだった。実は

似たもの同士なのかもしれないと、ルイズにとっては甚だ本意であろう想像をしてしまう。

「そりゃね、ウチみたいに儲けたところもあるけど、あそこは違うのよ。卑怯なのよ！」

その言葉に何か違和感を感じたイングリッド。何かまでは理解が及ばないが、その直感間違いなくて、無視できない重要な意味を持っていると信じた。だがその疑問を解消する暇もなく、ルイズは言葉を連ねる。

「あそこはね、開発運動に参加しようにも、資金を用意できなかった貴族相手に高利貸しまがいのことをやって儲けたの。あいつが今もっている城も、あのドラグ・エスポワールもあいつが差し押さえたものなのよ」

その言葉に新たな疑問を感じて首を捻るイングリッド。真面目な顔に表情を繕って、まじまじとルイズの顔を見てしまった。

「さて、ルイズよ。城とは領地とセットである。接收しました、貰い受けましたなんぞとできるものなのかや？」

イングリッドの疑問は、地球における中世の観念から言えば当然だった。多分に形骸化していたとはいえ、貴族の領地というのは、王から管理を委託された土地であって、貴族の立場とは建前上、賃貸物件の大家か管理人ぐらいのものなのだ。当事者間で勝手に抵当に入られるものではないし、勝手に収用できる物でもない。当然の事だが、そういうやり取りをして許されるものでもない。そういう「常識」だ。

無論、ハルケギニアの常識ではないのだといわれればそれまでだが。

「……あーぎなよ、あいつ」

イングリッドから身をはがして前を向くルイズ。肩を落としているが、顔には反吐でも吐きそうな嫌悪感が隠せない。

「……アイツには子供がいっぱいいてね。それを相手に押し付けて、相続の権利を得て、互いに納得した形でアイツが、アイツの子供が相続したり生前贈与を受ける形で、どんどんアイツ自身が肥え太ったの

よ。立法上は問題ない体裁をとっていたから非難する言われはないけど、さ。アイツのせいで野に下った貴族は多いのよ。

「どれだけの人間が泣いたのか……。それを考えると納得している者は少ないよ」

興奮して支離滅裂に近い言葉を吐くルイズ。余程に嫌っているらしい。しかもどうしても名前を呼びたくないようだ。何故そこまで嫌うのか。そこに、好き嫌いの感情以外の何かがありそうだとイングリッドは感じた。顎に右手をやり、左手を膝に打ちつける。ルイズがびくりとしてイングリッドに再度、顔を向ける。

「んー。差し押さええた事実がダークなのはわかるが、一応は、法に沿った行為なのじやろ。それに、金を借りた事実が変わらん。自業自得の面もあるよ。違うのかや？」

その言葉にルイズは首を竦めて、刹那、ゆっくりと頭を振った。「貸す時もね、早手回しに銀行とかから大々的にアイツが借り受けてね。レオ・アフリカヌス開発運動が正式に決まる直前で、一応は、秘密にされている時期だったから、銀行なんかは大喜びで金を貸したつて言う話よ。」

大銀行は、景気が低迷しているときだからとアイツに貸した時には低金利で融資したのに、すぐ後にレオ・アフリカヌス開発運動が発表されるでしょ。どうなると思う？」

イングリッドは感嘆とも取れるような表情をして、頷いた。あくまで地球の歴史と比べた場合という話ではあるが、妙にちぐはぐとした文化的成熟度を持つハルケギニアで、そういうインサイダー取引まがいの事を意図的に行ったとすれば、モットというやからはそれなりに頭が良いと考えるべきなのだろうとイングリッドは思う。

「金利が暴騰したのか……」

ルイズが頷く。

「開発運動の話が秘密って言うのも、さ。紳士協定で、別に文書にされてたわけではないから、罪というわけでもないのよ。でもさ、そういう抜け駆けができるって言うのは、少なくともアイツ以外は間違いないし黙っていたってことでしょ。そうじゃなきゃ抜け駆けできないし」

その言葉にイングリッドは唖る。やはりモットは頭が良かったのだろう。インサイダー取引みたいな行為が常態としてあるなら、当然それを禁ずる何がしかの手が打たれる筈である。それが無いというならば、モットが行った詐欺まがいの行為は、彼のオリジナルな思いつきなのだろう。

低金利で市場から流動性資金をかき集めて、その後で、資金が必要となる状況が出来るのなら。モットが何を考えたかがわかるような気がするイングリッドだった。

「むう。それだけで、恨まれる……と、いうよりは、まあ、他の貴族は眉を顰めるじやろな」

ルイズが頭から湯気でも出しそうな勢いで言葉を連ねる。

「アイツに金を出したところは、別のところに融資する余裕が無くなったし、アイツに金を貸していなかったところは当然金利を上げるとし、金を貸せる銀行自体が少ないから、トリステインでは他国に比べて金利の高騰が急激だったしで、大変なことになったわ」

「ん。しかし、金がないなら諦めれば良いのではないのかや?」

「そこでアラトリステ・レオ・アフリカヌス分割諸国会議が影響するの」

「……」

ガリアのジョゼフ1世が提唱した、諸国配分の方策はジョゼフ1世によるトラップであったと後に分析されている。レオ・アフリカヌス開発運動は、参加国家の人口ごとに土地を割り振り、諸国の出動兵力や配分を固定してしまった。

その数値の上限で各国が持ち出さないといけないという決まりがあったわけではないが、国家の利益を追求する立場とあっては、手抜きも難しかった。

皆が様子を見て、徐々に進出していったというならともかく、なにしろガリアが初手から参加限界で兵を出動したのだ。貰い受ける土地の広さを配分しただけで、大陸のどこがどこの国のものともまでは規定していなかった協定の趣旨を考えると、早い者勝ちは明らかだっ

た。と、なれば、どこの国も初手から協定で許された上限いっぱい
全力でレオ・アフリカヌス大陸に打って出なくてはいけないことにな
る。

ジョゼフ1世が周到な用意を持って、アラトリステ・レオ・アフリ
カヌス分割諸国会議で協定案をぶち上げたのであろう。事實は、そこで
明らかになったが、それ自体について歯噛みをすることはあっても文
句を言うことは憚れた。ジョゼフ1世の提案した協定を認めたのは
会議の参加国自体である。反故にしては、敵を作りすぎるし、そも国
家の信義を貶める。と、なれば、各国はとる物もとりあえず、直ちに
兵を上げる必要があつたのだ。

「トリスティン常備軍を出すのは不味いし、動員するにも時間が足ら
ないし。そうすると、出兵は貴族軍を出すしかないでしょ。王が出兵
を命令すれば貴族も嫌とはいえないし、出兵すれば、貴族の取り分が
大きくなるって言う打算もあつたから、どこも出兵自体は拒まなかっ
たけど……」

「金がない、か」

ルイズは頷いた。

大きな銀行はモット伯に金を貸していて、当座の金がない。レオ・
アフリカヌス開発運動による経済の活性化を考えれば金融商品開発
を行って、預金を集めることは難しくはないだろうし、出資者を募る
ことも出来たはずだ。だが、ガリアの出兵が迅速であつたせいで時間
がない。金を用意して兵力を準備したところには、レオ・アフリカヌス
大陸沿岸はガリアの旗で埋め尽くされていたとなりかねない。それ
では意味がない。

アラトリステ・レオ・アフリカヌス分割諸国会議で決定された領土
配分も各国の利害が絡んで曖昧にされていた事がここで災いした。
得られる土地の広さを絶対的数値にせず、各国の相対的数値にしてし
まっていたのだ。

つまり、先手を取つた国が広い土地を得れば、後から出てきた国が

誰にも文句を言われる事なく同じ広さの土地を得ることが出来るのだ。ただし、先手を取った国が抑えた場所以外の土地を自力で占領しなければならぬ。

会議事態は何年もかけて行われたので、各国はそれなりの準備を行っていた。ただし会議の行方がどうなるかなんていうのは誰も想像がつかなかった。占領部隊も段階的に増派すれば良いという考えだったし、各国の派兵状況を見極めてバランスを取りつつ行えばよからうという「常識的」対応策が考えられていたのだ。

紛糾する会議の最終段階で突如として持ち込まれたジョゼフ1世の提案は、どこの国にとつてもそれなりに納得のいく妥協案であったから、数ヶ月程の調整でほぼ原案通りに通ったのだが、原案どうりに通ってしまった事がガリアにとつての果てしなく大きなアドヴァンテージになるのだという事実をガリア以外の国が予測できなかった点が「トラップ」だった。

大慌てで出兵を言い募る政府に対して、貴族が取れる手は少なかった。政府自身が出兵準備を行うのは当然としても、小回りの効く貴族が政府より素早く兵力をかき集められるはずだった。ところが小さな銀行は用意できる資金が限られていた。儲かることが確実なのだから、金利を暴騰させて貸し渋るのは愚手だが、そうせざるを得なかったのだろう。運転資金まで手を出すことは出来ないし、海千山千の状態であるレオ・アフリカヌス開発運動に全てをかけて、国内金融を崩壊させては元も子もない。

貴族が自身で資金の手当てをすることも難しかった。一部の貴族のみが出兵するというのなら問題ないだろうが、ほぼ全ての貴族に動因が下令された状況では、広く出資者を募るのは難しい。領地内に呼びかけるのが精々だろう。

出資する側にも問題がある。自身の領主が優れた者であると言う評判ならば良いが、そうではなかったら。だからと言って、評判の良い他の貴族に融資するのは難しい。自分が住む場所を治める貴族に知られればどんな難癖をつけられるかわからないし、出資に応じられる資産を持っているならば、商家とか資産家ということになるだろうが、

ライバルにその行為を難癖つけられてしまえば後の商売に差しさわりが出かねない。

そうして、貴族たちは資金調達に窮したのだ。しかし、迅速な出兵は規定路線だ。と、なれば。

イングリッドは感心した。そこまでの話はさすがに想像できなかった。そこまで計算したのだろうか？そうであつたらとんでもなく危険な手合いとなるが……流石に偶然だろうと思う。ただし、ギャンブラーとしてならば、時に偶然をつかむのも資質の一つだ。詐欺師と見られるような行為を行うものであつてもそれは、制度の不備をついたのであれば、投資家と言い換えることも出来る。投資家としては稀代の成功者ということか。

「モット伯に頭を下げに行くか……」

ルイズは再び頷いた。

「……貴族間の金融取引はかなり厳しい規定があるんだけどね。そのときはそれどころではなくて、あいつの行動にいろいろ納得できない状況だったけど、トリステインとしても、道理を曲げるしかなかったみたいなのね。ベルダン財務卿やリツシユモン高等法院卿の後押しも合つて、アイツに貴族間取引を行う特例を作つたらしいのよ」

「……らしい？」

ルイズがイングリッドに視線をあわせて、もう一度頷く。

「……口頭詳述で、書類は後から作るみたいな話だったようなんだけど、良くわからないのよね」

ルイズは両手で空を仰いだ。

「記録が残ってないらしいのよ」

イングリッドは鼻から勢いよく息を吐いてしまった。ルイズの顔を見つめてしまう。

「なんだ、それは」

ルイズは肩を竦めた。

「記録を見ると、レオ・アフリカヌス狂乱といわれる10年は、みんなで横車の押しあいつて感じなのよ。最初の最初で特例が通つちやつたから、特例や勅令が乱発されて滅茶苦茶になったの。ハルケギニア

年代記のトリステイン史を見ても、そのあたりの記述は混乱しているわね。新版が発行するたびに内容が変遷して、何を信じれば良いか判んない」

顔を右手で覆っているルイズに、イングリッドは納得した視線を向けた。イングリッドも前に向き直って、飽きることなく騒いでいるキュルケを見つめる。

「ああー、うまくいっている間は誤魔化せるが、そんなんでは少しでもややこしい問題が起きれば……」

出所怪しからぬ書類が乱発されている状態で、融資が焦げ付いたとなれば、後はなし崩しであつたろうとイングリッドは想像する。つまり、南海泡沫事件が再現されたという事だ。大混乱だったのだろう。普段ならどうと言う事はない、短期の運転資金がショートしたとかの騒ぎは、普段ならどうと言う事はないという常識がある故に、市場に与える影響は激甚だったろう。

手紙のやり取りに数ヶ月とかかかるなら、影響の広がりも緩やかだったはずだが、竜籠に代表されるそれなりに高速の連絡手段が確立された世界だ。影響の広がりも南海泡沫事件どころではすまなかつただろう。まさにバブルがはじけたのだ。

ルイズの言葉は呟きとなって続いている。

「徳政令を出そうにも、民衆に与えた影響も大きかったし、なによりアイツが反対した。ベルダン財務卿は徳政令やむなしという意見で、王もそれに賛成したんだけど、外からお輿入れした人だったから、意見を押し通せなかつたのよね。」

リツシュモン高等法院卿なんかは原則論を振りかざして、それに乗つかった行政書士も多かつたしで、結局、徳政令は出なかつたの」

「……破産した貴族は多かろうの」

ルイズが首を振った。イングリッドは首を傾げる。

「アイツが助けて回つたわ。恩を押し付けてね」

「……あー血縁縁故政策か」

ルイズはイングリッドの言葉に一瞬驚いて、小さく頷く。

「殆どの貴族が名前を残したわね。でも、本家筋だけがアイツの領地で部屋住まいって言う状況よ。野に下った貴族はどれだけいたことか。学院にも、アイツのところから来ている貴族が多いし」

ルイズはイングリッドの顔を見つめる。

「ま、そういうことをするのがアイツよ。あれが貴族だなんて認めたくはないわ」

ようやく話が纏まったのか、キュルケとタバサが連れ立ってこちらに歩いてくる。ルイズは立ち上がり、腰に手を置いて伸びをした。

それにあわせて立ち上がろうと、ソファに左手を置いたイングリッドの右腕をとって、ルイズが引つ張る。

エプロンで起きた騒ぎで、イングリッドの身体が固い、或いは重いと無意識に想像したルイズは、力いっぱい引つ張ってしまった。

油断して力を抜いていたイングリッドは、跳ねるようにソファから引き剥がされて、勢い良くルイズとぶつかってしまった。ルイズもそんな事になるとは想像もしていなかったから、たまらず後ろに倒れこんだ。

イングリッドは即座に身体を回してルイズと身体的位置を入れ替える。ごくごく僅かの瞬間で、ルイズをかばったイングリッドは、ルイズを前に抱いて、背中から派手にロビーに投げ出された。

大きくはないが、こういう場所で発生する音としては想像もしない質の音の発現に、ロビーにたむろする人々の視線が一斉に集中する。タバサは僅かに眉を跳ね上げたただだったが、キュルケは天を振り仰いで右手で顔を掻く。次いで「やれやれ」とばかりに首を振ると、大またでルイズたちに近寄る。

床に抱き合った状態で転がる2人の前で、周囲からもはっきりと判る大げさな仕草で溜息をついて、眼で天を仰いでしばし視線を泳がし、キュルケは大げさに肩を竦めた。右手を差し出す。イングリッドはルイズの下から自身の右手を差し出してそれを握ると、勢いをつけたキュルケの腕の動きにタイミングを合わせて、ルイズを抱きしめたまま刹那に立ち上がった。

赤面して、明らかな混乱に顔を歪めるルイズを、先ほど立ち上がった

たばかりのソファに座らせて、イングリッドは頭をさすった。ルイズがしつかりとソファに座った事を確認して、キュルケに視線を移す。「すまぬ。ありがとう、の」

キュルケは腰に手を当てて溜息を吐いた。

「あー、もう、さ。言うのも馬鹿らしいけど、さ」

身体を傾げて立つキュルケの脇に、タバサが追いつき、2人は何となく視線を交わした。キュルケはそれからゆっくりと、ルイズ、イングリッドの順番で視線を移す。

「ホント、仲良いよね」

ここで予想外の事がおきた。タバサが大きく頷いたのである。しかも、感想らしき言葉も吐いた。

「同感」

その言葉に、イングリッドは大いに顔を歪めて苦笑した。

「ああー、まあ、そのな……」

その後の言葉をイングリッドは続けられなかった。

周囲の人間からの注目は既に外れていたのだが、不躰にどやどや言いなながら集団がロビーに上がってきて、一瞬の躊躇いの後に、大きな足音を立てながらこちらに近づいてきたのだ。

その気配にイングリッドは表情を消して、ルイズをかばうようにして立ちふさがる。

イングリッドが予想したとおりに、先ほどまでの話題の中心にあったアリ・ニコウル・ド・ラ・モット伯その人が、相對していた。キュルケとタバサは、見た目は違うが、真実姉妹であるとしても言いそうな雰囲気をもとって、無表情で脇に避けた。キュルケの切り替えの速さに苦笑いを浮かべそうになったイングリッドだったが、そういうことが学院内でいらぬ騒動を引き起こしたのだと思い出すと、意識して無表情をつくった。キュルケとタバサは無表情であったが、イングリッドがつくったそれは能面というレベルだった。

モット伯はイングリッドによって遮られた視線を訝しんで、身じろぎする。イングリッドはそれを器用に遮って、ルイズの姿を見せな

い。マントを持たないイングリッドの姿に、無礼とでも思ったのか、咳払いをして大様に手を振ったが、イングリッドは無視する。

ルイズがこやつを嫌っているから顔を見せたくない。

そういう訳ではなかった。先ほどの醜態で、ルイズの表情が人に見せられるものではないから、視線を遮っているのである。彼らが2階ロビーに上がる前の話だったので、ルイズの痴態が、それはとりもなおさず自分の痴態でもあるのだが、それが見られた可能性はなかった。だからこそ、呆けているルイズをモット伯に見せるわけにはいかなかった。

モット伯に付き従う者達の視線までは遮れない。しかしイングリッドはそのことを気にしない。貴族に使える立場の者である。それなり以上に空気を読む能力に長けているだろうと想像する。はたして、彼らは、ルイズの状態に気がついていいる風だったが、疑いようもなく大貴族であるルイズの状況に気がついて、お行儀良く眼をそらしていた。

だが、モット伯は空気を読めない。空気を読まない。去れとばかりに振られた仕草を完全に無視した「平民」の姿に、俄かに顔を赤らめた。その仕草を見てイングリッドは不審を感じた。

ルイズとの会話で現れたモット伯のあり方は随分とずる賢い姿だった。イングリッドはモット伯に高い評価を与えたと行って良い。行った行為の結果はともかくとして、優れた行為であれば素直に賞賛するし、資質も評価する。行為の貴賤はともかくとして、能力が優れているならば、その能力に敬意を表すべきなのだ。それがイングリッドのあり方である。

しかし、実際に対面したモット伯はイングリッドの想像と違っていた。拙速に状況を断定して勝手に状況を悪くしている。イングリッドが何をしているのかを考慮しようとしてもしない。随分と尊大な態度だった。

確かに服装を見れば、イングリッドがセルヴァンであるという判断は難しいかもしれない。事実セルヴァンではない。しかし、ルイズの側にいて、ルイズを守るような振る舞いをしているのだから、何がし

かの想像は出来るはずだ。しかもルイズとあわせて3人の貴族と共にあるのだから、何らかの立場を予想しても罰は当たらないだろう。それが全て誤解であったとしても、ルイズの立場を考えれば、ルイズと共にある者をぞんざいに扱って許される事でもないだろう。

イングリッドならそう判断する。だのにモット伯は勝手にボルテージを上げている。貴族の卵ならば短い期間ではあるが山ほど見てきたイングリッドでも、その姿を見てハルケギニアの貴族に対する評価とはしなかった。評価の材料になるとは思っていなかったのだ。しかしモット伯は、学院教育棟で相対した阿呆と同じような姿を見せている。ハルケギニアの貴族とはこの程度のものなのか？

口を戦慄させるモット伯は強い視線でイングリッドを見つめる。イングリッドは内心で冷や汗をかいた。失敗を繰り返したのかもしれない。何度も何度も気をつけると言いながら、結局、また同じように自身の固定観念で相手をしたと言うのか。本当の貴族となれば、どういふ騒ぎになるのだろうか。イングリッドには想像できない。ハルケギニアの貴族に対する行動としては、ルイズをかばう行動は下手であったのか。

しかし、その想像も違うようだった。モット伯のバトラーが彼の肩に手を置いて、素早く耳打ちする。刹那身体を跳ねさせたモット伯は一転、こちらを伺うように視線を揺らす。イングリッドは、素早くそれも遮った。そこまですてようやく合点したようだ。気恥ずかしげに咳払いをして、妙な沈黙が降りる。

イングリッドは能面を維持したまま、内心で首を捻る。モット伯に対する評価が定まらない。

そうしていると、背後でルイズが状況に気がついた気配が伝わってきた。それを察して、イングリッドは素早く左に避けた。タバサやキュルケがいる場所とは反対側である。これは無意識の行動だった。ルイズを守るのはイングリッドのみ。タバサやキュルケは戦力として数えていなかった。一度騒ぎになれば、2人は寧ろ邪魔だった。なるべく自由を確保して戦いたい。スペースを確保して、背後に邪魔を置かない場所を選んだのだ。ルイズとの会話から、今、揺らいでいる

とはいえ、モット伯が危険な存在かもしれない、そして、ルイズの態度からモット伯がルイズの敵対者である可能性を除去できないのであれば、その態度はまったく自然だった。

ルイズが慌てて立ち上がって、頭を下げた。

「これはモット伯。お久しぶりです」

そこで言葉が途切れた。あからさまなルイズの態度に、イングリッドは呆れてしまう。表情には出さなかったが。

貴族同士で相対するならば、かなりギリギリの挨拶だった。本来であれば面倒くさくも秀麗な美麗賛辞を尽くして、本題とは何の関係も無い会話を数分は交わすべきなのだ。それが貴族同士の付き合い方というものだろう。

それについてはイングリッドの想像ではない。確信があった。カウンターの前の騒ぎで、やたらと面倒な会話が飛び交っていたのだ。イングリッドの耳はその会話の全てを聞き取っていたから、この世界の貴族とはそういうものだと理解していた。面倒な付き合いだが、そのあたりは地球と変わらないと思っただ。その考えが先ほどの態度をとる理由となっていたのだが。

はたしてぞんざいなルイズの挨拶に、モット伯は微かに唇の端を跳ね上げた。イングリッドがそつと視線を移すとキュルケが無表情をつくる努力の中で、僅かに唇を震わせている。視線も揺らいでいた。そこから極僅かにもれ出る感情は、嘲笑だった。相当に嫌われているのだろうか？

そうではあっても流石は貴族だった。一瞬で気を取り直し、軽く咳払いをして一転、笑顔を取り繕った。しかし、咳をする際に顔をそらさずに真正面を向いたままだったのだからモット伯も大概だった。流石に拳で口を隠していたが。

「これはヴァリエールの3女どの。ご機嫌麗しゆうことで」「ありがとうございます。モット伯にあっても、壮健な様で何よりです」

とても親しいとはいえない雰囲気は僅かな会話で漏れ出でて、イングリッドは頭痛を感じた。控えめにいっても犬猿の仲だ。どうい

関係なんだろうと観察する。

「このような日に、学院を出てトリスタニアにいるとは。そのようでは母上が嘆きますぞ」

その言葉に、ルイズは舌打ちでもしそうな表情を一瞬だけ見せたが、それは本当に一瞬だった。モット伯は気がつかなかつただろう。

ルイズはぎりぎり不自然には見えない笑顔で、モット伯の長身を見上げる。イングリッドの見たところ、その視線は顔をむいているが、彼の眼には向けられていない。どうも、鼻の下にある髭に向けられているような気がした。

「いえ。よんどころ無い事情がありまして。学院長の正式な許可の下に、外出しております」

そう言いながら、きわめて自然な仕草で偉そうに顎でキュルケを示した。その仕草に自然とモット伯の視線もキュルケに移る。イングリッドは感嘆した。下々に心優しくあるだけでなく、こういう場の態度も実に堂に入っていて、貴族として眩しかった。キュルケはルイズに頷いて、懐から外出許可書を取り出す。

キュルケはそれを自分の顔の前で広げて提示する。無論のこと表紙の部分だけである。それ以外を見せる事に必要を感じていないのだろう。

一瞬顔を歪めたモット伯は、無意識にそれを手にしようとして、それに対してキュルケは避けて、後ろに下がった。彼の顔が更に歪んだ。しかし、ルイズはそんな事はお構いなく声を続ける。

「ご不審がありましたらオールド・オスマンにご確認ください」

僅かに顎を引いて、不愉快さを滲ませた彼はしかし、鼻から息を吐いてルイズに向き直った。

「これは失礼しました、ミス・ヴァリエール。お手を取らしましたな。よいお使いを、お祈りしておりますぞ」

「ありがとうございます」

「うん。では失礼する」

軽く頭を下げたモット伯は、身体を翻す刹那に、一瞬殺気にも似た感情を乗せてイングリッドに視線を送った。似ただけだった。イン

グリッドにとっては何れにも等しい感情だった。ダンのほうが強い殺気を表す事ができるだろう。単純に評してシヨボイ。捨て台詞より質が悪い。イングリッドの内心でモット伯の評価が混乱する。

マントをはためかせながらカウンターの脇を抜けてゲートをくぐる。手続きはセルヴァンの内の誰かが済ましたのだろう。スタッフが頭を下げる中を、胸を張って歩み去る。見た目はまさしく貴族の中の貴族だった。

手にした外出許可書をたたみながらキュルケが溜息を吐く。タバサは手にした巨大な杖を揺らしている。ルイズは腰に手をやって、酷く大げさに溜息を吐いた。頭を軽く振って、それからイングリッドに視線を移す。

「どうだった、アレ。イングリッドの感想が聞きたい」

イングリッドも溜息を吐いた。イングリッドを見るキュルケとタバサの視線に好奇心が溢れている。右手をさっと横に突き出すと、数瞬、ためて、ゆっくりと眉間に動かし、中指、人差し指、親指で、軽くもんだ。

「ん、イバるのは小心者の証拠よの。あやつ心の惨めさに泣きそうになったわ」

その言葉にキュルケもタバサも眼を見開いた。ルイズも一瞬呆けて、次の瞬間に声を上げて笑った。

キュルケは表情に呆れを滲ませて、イングリッドを見つめた。

「言うねえイングリッドってば」

ルイズはイングリッドの肩を叩きながら、笑いをおさめる事が出来ないでいる。イングリッドはその姿を見ながら眩いた。

「どう見ても親しいとはいえん間柄のように見えたが……それでも挨拶するのが貴族の礼儀なのかや？」

笑い続けるルイズを見ながらキュルケが肩を竦めた。

「別にー。挨拶したくなければ無視すればいいのよ。視線があったら挨拶しないわけには行かないけどさ。さっきのイングリッドの行動みたいに遮られたなら、頭の一つでも下げて、そのまま立ち去ればいいのよ」

「む。先ほどの我は流石に無礼とも思ったが、あれでよかったのか？」
「流石にぎりぎりな感じだったけど、まあ、互いに納得できる範囲だったと思うよ。普通、あそこまであからさまにやる人なんていないし。前例が無い事だから、こういう対応をとっても自由ってのもあるかもねー」

イングリッドは顎に手をやって、唸った。流石にやばかったのかと思う。しかしモット伯のバトラーはこちらの真意を察していた。それであれば、その場を立ち去っても良かったのに、モット伯はことさらにルイズに声をかけようとした。何がしたかったのかさっぱり理解できなかった。2人の会話の最中、モット伯の後ろに控えていたセルヴァン達の表情はひどいものだった。

つい先ほどまで高い評価を与えるべきと評したモット伯が、実体はアレであった。擬態なのだろうか？何がしかの考えが合つての事なのか？判断できない。しかし今までの短い間でもルイズの言葉に信憑性があるのは理解できている。ルイズの他評が優れている事を考えると、即断は危険とするほか無い。

「むう。あやつ、何がしたかったのか……よう判らんのじゃが」

ルイズが腹をさすりながらようやくやく笑いをおさめた。肩を震わせながら、荒い息を吐いて、イングリッドにもたれかかる。今度はイングリッドはそれを間違いなく支えた。油断は無かった。さり気無くルイズの腰に右手を回してその身体を軽く支える。

「きつとね、ヴァリエール家とラ・モット家が同格だって、周りに示したくてたまらないのよ。きつと、ね」

右肩に乗ったルイズの顔を見つめながら、その耳に負担がかからないようにイングリッドは囁いた。

「逆効果だったようじゃが……」

ルイズは噴出した。声こそ上げないものの、ルイズは身体を震わせる。

「レオ・アフリカヌス開発運動でしこたま儲けたけど、それが恥ずかむべき事だという自覚はあるみたいなのよ」

ハアと溜息を吐いたルイズはイングリッドから身体を離れた。腰

に手を当てて肩を擧める。

「ヴァリエールは、き。ツエルプストーとの……ゲルマニアとの最前線だから、兵は動かせなかつたらしいの。その代わり、艦隊の一部を動かして輸送を請け負ったり、泣きついてきた貴族に金銭を融通したりで、まあ、結果的に相当儲かったのよ」

キュルケが何かを思い出して、顔を上げてイングリッドを見た。「そうそう。チェニスタニア撤退作戦ではゲルマニア兵も相当拾ったみたいだから、ウチの国からも相当な謝礼が出たって話だったよね」その言葉に眉を跳ね上げたルイズがキュルケを睨むように見つめる。

「現地で素寒貧になったあんたのところの貴族にも相当資金を融通したんだけど」

意地悪な物言いだったが、キュルケは複雑な笑みで頷いた。

「そうだったね」

その言葉に満足したルイズは、それでイングリッドの方に視線を戻したが、次いで呟かれた万感の籠った言葉をイングリッドは、イングリッドの耳は捉えてしまった。

「置き去りになった私も、母も。あなたの家に助けられたのよ……感謝しているわ」

イングリッドが表情を変えなかったのは、長い人生経験の賜物だった。その短い言葉で全てを理解できるものではなかったが、キュルケがやたらとルイズに親愛らしきものを感じている理由の一端が垣間見えた気がした。

キュルケの言葉に気がつくことのできないルイズは、イングリッドに言葉を連ねる。

「やったことは全然違うのにさ。儲けた事だけを頼りに、ヴァリエールはラ・モット家と同じ孔の貉だ！つて言いたいんじゃないかな」

ようやくルイズがモットに対して何を怒っているのかが理解できた気がしたイングリッドだった。

「む。つまり、ヴァリエール家を貶めて、自身の格を維持したいとかでも言うのか、あやつは」

ルイズが頷く。

「小物よね」

ようやくすべてが収まって、やる事が済んで、ゲートをくぐる4人。その最後尾で、かしましく騒ぐ3人（一人は相変わらずだんまりだが）を眺めながら、イングリッドは考えをめぐらせた。

どうもモットのあり方がおかしい。インサイダー取引じみた行為も、その後の行動も、見たままのモット、聞いたままのモットを考えるとちぐはぐだった。偶然にしても結果を見ると、それだけと切つて捨てるには得たものが大きすぎる。しかし、ルイズとのやり取りを見ると、評価が難しい。

そうすると、一つの仮定が持ち上がってしまう。

モットは、誰かの手のひらで踊っただけではないのだろうか。

否定する。即座に否定する。

それは陰謀史感という類のモノだろう。余りにも手が込み過ぎている。モットだけでなく、ベルダン財務卿とやらやリツシユモン高等法院卿とやらもかかわってくる事になる。実際にあつたであろうやり取りを想像すると、影響は計り知れないほどに大きいだろう。そんな事が出来る者がいるだろうか。それも10年単位の陰謀である。物語ならともかく、ここは現実なのだ。想像できない。それでも陰謀だったのだと言うなら。

もつとはつきり言えば、シナリオを書いたのは誰か、となると……。

イングリッドは首を振って否定する。

話が大きくなりすぎる。幾らなんでもありえないだろう。馬鹿馬鹿しい。

品の良い調度で飾られた通路は、どこまでも貴族用と見えた。スロープで上に上がり、騒がしい平民用のロビーを見下ろせる3階通路は、下の喧騒の上に浮いているようなものだった。通路の両側には、おしゃやかなカツフエや、レストラン、売店などが、重厚なたたずまいを見せて軒を連ねている。窓際に寄せられた通路と、中央を穿つ谷間

には、等間隔に橋が渡されて、ショッピング・モールのようだ。しかし、下と上では世界が懸絶している。ここまではつきりと区別されていると、貴族の特権階級のほどが、余りにも大げさとも思えてしまうが、それはこちらの常識に慣れていないゆえの感傷なのだろうか。

長い通路の先に、中央のドームが見える。あそこまで行くと、地下までの直通リフトが存在して、車寄せがあるという。そこでリムジン・ハックニー・コーチに乗りあうか、ハンサム・キャブリオレを雇って、街に出るのだという。リムジン・ハックニー・コーチはバスに、ハンサム・キャブリオレはタクシーといったところだろうか。どんな「からくり」が飛び出すか乞うご期待というところか……。気が滅入ってしまいうイングリッドだった。

気が滅入ると言えば、イングリッドは、学院に於いてルイズがやたらと排斥される理由の一端も見た気がした。その勘は間違いないだろうと思えた。ルイズとの会話で得た違和感は多分これだろうとあたりをつける。

大勢の貴族が没落したレオ・アフリカヌス大陸開発運動。没落は免れても、相当な痛手を被った貴族も少なくないだろう。あからさまに言って、体裁を気にしつつ貧乏にあえいでいる者も多いのではないかと想像する。

先ほどのようなモットの底の浅い活動はしかし、それを信じたがる者も多いのではないだろうかという想像につながる。ヴァリエール家が隆盛して、我が没落する。ルイズに聞く限りでは、ヴァリエール家が家力を伸張したのは多分に偶然によらしめるところ大であったが……。それを感情で否定する者もいるだろう。ましてや、モットが、ヴァリエール家がラ・モット家と大同小異で、華やかならざる手管で儲けたのだと喚いて歩いている。らしい。それを信じたがつている者がいるのではないか。

そこに「ゼロのルイズ」である。貴族にあるまじき事に、魔法が使えないルイズ。なるほど。歴史も格もある家に、泥を擦り付ける理由になりえる。ヴァリエール家があのもットと同じであるというなら

ば遠慮するいわれは無いのだろう。

地球で経験した中世世界のあり方からすると、隆盛を誇る公爵家の実子に中傷をするなど自殺行為以外の何者でもないだろうというのがイングリッドの考えだった。しかし、僅かに2日ほどの経験でも、声にならない視線や、或いは声が届かない中傷も含めて、ルイズに対する生徒たちの扱いは酷いものだった。表立っていないのはやはり、ヴァリエール家という家名の靈驗あらたかなところだろうが、こそこそしているつもりでも、イングリッドには筒抜けであった。それによるイングリッドの精神的疲労は酷いもので、夜を過ぎれば心機一転というところだったが、学院内を歩けば1時間と経たずにイングリッドの心を掻き乱すものだった。

そんな些細な事をルイズに伝える気が無いイングリッドだったが、いくら陰口とはいえ、ヴァリエール家のあり方からすれば、御注進とやる人間は出そうなものだと思ったのだが。

その裏にこういう理由が隠れていたとなると、イングリッドは溜息を吐くことしか出来なかった。おそらくはルイズの両親にも声は届いているだろうと思う。しかし、レオ・アフリカヌス開発運動の結果のみを見れば「説得力がある」誹謗中傷だと言える。そしてモットという糞虫がそれを補強して歩いている。とんでもない状況だった。

ルイズの両親がそれを否定していないわけではないと思うが、国境を守る立場ゆえに中央にその声が届き難いのだろう。あるいはそのような事に対して声を上げる事を恥と考えている可能性もある。そうであれば何たる誇り高い貴族よ。となる。それで子供が傷ついているのだからそんな埃は払ってしまえとイングリッドは表情に怒りを滲ませた。

常なる冷静さの無いイングリッドだったが、そのことに自覚が無いまま、暗い感情を発散し続けていた。

初めてののお買い物（1）

大きかった。

何が大きいかと言えば、全体的に大きかった。イングリッドにはそう表現する以外の方法が思いつかなかった。いちいち、部品、部位ごとにやたらと大きかったのだ。

理由は想像できるし、実際に見て、触って、納得できた。大きく、太く、そして小さく小分けにしたうえで更に、一々補強してあった。つまりは、部品単位ごとであつてもそれら単体ではともかく、組み合わせて必要な機能を持たせようとした時点で、周辺部品から伝わってくるストレスに対抗できるだけの強度が足りないのだ。だから何もかもが大きくなっている。

ルイズ達を選んだ乗り物は、ハンサム・キャブリオレであつた。その実際の姿を見てイングリッドは唖つてしまった。イングリッドであつても見たことのない形状の「自動車」だったのだ。

見たことが無い形状だといっても、ある一定以上の常識を持った現代地球人が見てば、100人が100人「自動車だ」と理解できる外観を保っている。しかし、そのエクステリアは他に比べるものが無かつた。個性的な外観だと言う外無い。

全体的には地球の歴史に於いて自動車が社会一般に受け入れられた時期にありがちな、馬車のキャビン^{客室}にフロントボックス部分を付け足してモーター^{エンジン}を乗せたキャブ^{ボンネット}を加えた「無骨」な形状であつたが、全体的なデザインで言うところには洗練された形を見せていた。

地球の歴史にあつては、自動車の形状というのは馬車に自走走行装置を付けるところから始まった。馬車の中でも操行装置を持つていたヴィクトリアやランドーと呼ばれる形態のキャブで、座席の下にモーターを搭載した変形ワンボックスRRが始まりだと言われる。次いで、座席の下に納まらなくなつてしまつたために、前方にモーターが追いやられた2ボックスFRという方向に進む。純粹に技術的制約下で生まれた形状が2ボックススタイルである。

技術開発が進展して大出力モーターが現れると、ワゴネットやピク

ニツクワゴン、更に大きくなって、コーチ等が自動車化されることになる。

面白い事に、取り扱いの難しい多頭立ての大型馬車こそ、早期に自動車化した場合の利得が大きいのは明らかであったのに、それらは一且、自動車化の波から取り残されてしまう。モーター技術とそれが発生させる動力を動輪に伝える周辺技術が未熟だった故にカーゴや、^{トトラック}コーチが自動車化するのはかなり後になった。ガソリンを燃料としたモーターは極めて早いうちに大出力を手にしたが、それを実際に動力で取り出す段になると必要不可欠な、歯車やチェーン、シャフトの製造能力が貧弱であったために、自動車の動力となりえなかった。また、タイヤに使うゴムの技術が未熟であった点も影響している。大量の荷物や人間を搭載しつつ、馬車とは比べ物にならない速度で走る自動車に履かせるには当時のタイヤはお粗末に過ぎた。大出力エンジンが巨大で重かったのも問題である。シャーシが耐えられなかったのだ。

そういった理由で産業革命期のロンドン等では、数人が乗る自動車の群れをぬって馬が引くコーチが大勢の人間を乗せて走り回っていた。それでも最終的に、コーチはバスへと進化する。

都市間を結ぶ長距離馬車^{馬車}は、更に混沌とした経緯をたどる。

モーターの技術進展と遠距離を故障なく運行できる信頼性を得る前に鉄道技術が大きく先行したために、一時的に歴史の舞台から消えてしまった。1930年代後半まで自動車とは壊れて当然。特に、モーターはありとあらゆる場所が壊れるものだった。それらを出先でたいした道具もなく素早く応急修理してしまえる事が良い運転手と呼ばれる必須事項だったぐらいだから、自動車の信頼性の低さがうかがい知れる。所謂「馱馬車」と言われるような長距離輸送の手段としてみた場合、当時の自動車はあまりにも心細かった。国土が狭い国ならともかく、何百キロと言う区間で人家も見当たらないと言う地域を走るには信頼性がなさ過ぎたのだ。うっかりすれば遭難である。

例外的に北アメリカで1920年代に長距離バスが隆盛するが、貧困層向けであったり、開発途上の州への片道切符であったりした。客

が片道切符であったばかりではない。大陸を横断してそのままスクラップになるバスが続出したという意味でも片道切符だった。

当時のアメリカ合衆国が大々的に移民を受け入れていたのも大きい。ヨーロッパと違ってアメリカの鉄道は導入当初より、広く一般大衆に門戸を開いていたのだが、それらの敷居ですら跨ぐ事が困難な、裸一貫の人間が長距離移動をする需要があったのだ。鉄道と違い、極端な話、とりあえずバスを買ってバス会社でございと言えば起業出来てしまうのも、アメリカで長距離バスの増大する土壌となった。しかし、やはり当時の技術水準では無理があり、相当数のバスが移動途上で失われている。乗客にも少なからぬ被害があった。

そういった一般的ではない特殊事例はともかくとして、都市間交通の一部としての馬車は、第一次世界大戦直前まで生き残ることになった。大戦後にそれらが復活しなかったのは、馬が戦場で大量に「消費」されてしまったからである。最も過激な推計では、騎兵や伝令等に使用されて前線で失われた馬が500万頭以上、輸送などの後備使用馬も含めれば1200万頭以上が失われたとされるから、影響は激甚だった。

そのような情勢下で、既に鉄道網が完備されている状況では、都市間をドアトドアに近い形で運行される馬車の復活は認められなかった。数少ない馬は農耕用や、運搬用途に集中されて、農村部でスパイダータイプ等の馬車が生き残った以外は、貴族用などの例外をのぞいて常用馬車は壊滅状態となる。馬が使えないならバスを使えばいいじゃないかとはならなかった。都市内完結交通としての路線バスや、鉄道のライダー輸送としてのバスはともかく、長距離輸送にあてがうには当時のバスは問題が多すぎたのだ。起伏の激しい地域を踏破して国家間を跨ぐような移動では未だ、技術的信頼性が無かった。駅馬車の系譜はここで途絶えてしまう。

第一次世界大戦で、乗用馬が壊滅的な情勢になった故に自動車産業が大きく花開いたのは皮肉な結果だ。

極少ない馬を取り合う状況が発生したために、農耕馬や駄馬であっても価格が急騰した。農家にとっては耕作に使用する馬の存在は死

活問題であつたから、ヨーロッパの大抵の国で政府が介入して馬を買い取り、農業従事者に配分することになった。そのために、なおさら馬の価格が跳ね上がった。その時点でもなお高価であつた自動車の価格に、余剰馬の価格が肉薄する事態になつたのだ。

直接的な影響を免れた南北アメリカ大陸でも馬の価格は急騰する。ヨーロッパで馬が足りない事から大々的に輸出されたのだ。行き過ぎた自由商業主義的思考が儲けを重視する商人に横溢して、アメリカの国内需要を無視した勢いで、新大陸から馬を奪つていった。しかも管理が杜撰であつた為に、輸送途上で大量に馬が死んでしまったことが更なる混乱の元となる。生きて海を渡つたものの中にも船酔い等で弱りきつて使用に耐えず、港に停泊する貨物船から海上に突き落として処分されるような状況が続出した。ついでのように、北アメリカ固有の家畜伝染病がヨーロッパにもたらされてとどめとなつた。これがアメリカ国内で馬の需要を圧迫する。アメリカ国内の馬の需給バランスの崩壊は政府が介入すべき情勢にまで進展していたのに、下らない別の状況が発生して、無視されてしまう。

禁酒法の成立だ。

これで下級官吏が腐敗に飲み込まれてしまったために、馬の需給と適切な管理システムが崩壊してしまつた。馬車の基本構造が犯罪組織に大いに利用された影響も大きい。頑丈なフレーム構造の上にキャブを載せるのが基本形態の馬車は、密造酒を隠して運搬するのにまことに都合が良かったのだ。そういった理由で、誰も予想しなかつた勢いで馬車とそれを引く馬が失われていった。滅茶苦茶な状態だつたのだ。

そこで大量生産技術を確立して自動車産業が発展を見たのは極めて大きな影響を世界に与えた。そうやって世界情勢とは複雑に絡まっているのである。

駅馬車の復権は、高速道路網の発展と、比較的小型で大出力のディーゼル機関が安価に供給され、それに加えて材料技術と構造技術の発展により、大型のキャビンを持った箱型車体を頑丈軽量に組み立てる事が出来るようになって以後となる。セミモノコック構造を

持った近代的大型バスの構造は、コーチタイプの乗り合いバスとは技術的に断絶しており、寧ろ飛行機の構造を引き継いでいたから、運行の考え方自体は駅馬車を引き継いでいたのに、技術的には馬車の特徴を何一つ受け継がなかった。

乗合馬車であるコーチを出自として、都市内完結交通の一部として発展した乗り合い乗用バス、所謂路線バスは、自動車としての構造も、外見のデザインも、永く馬車の系譜を引きずったのだが、高速バスの開発がきっかけとなって構造を一新した。フレーム構造を持った都市内乗用バスは、もろにコーチタイプの馬車を引きずって高床構造が多かったが、高速バス向けの構造を路線バスに適合して、急激に進化する。やたらと背が高いのに頑丈なフレームの上に客室が乗っている故に、狭くて天井が低い車体構造の古典的構造をもった路線バス向けの中型バスはあつという間に廃れて、ワンモーションタイプの箱型構造を持った近代的中型バスに取って代わられた。乗用自動車の形状はバスよりかなり早い段階で馬車の外観から遠ざかっていたから、セミモノコック構造のバスが大量生産され始めた1960年代後半で、自動車は馬車の呪縛を完全に振り切ったと言える。

貨物自動車に関してはまた別の話である。頑丈なフレームの上に架装する形態を持つトラックの荷台構造は、材質や組み立て方法に関して随分な技術進展があつたが、基本構造のみに焦点を当てると、馬車から何も進歩していない。

荷馬車の前、御者席部分にエンジンとドライバーが乗るキャブを加えたのがトラックだと言ってしまうと乱暴すぎる結論だが、あながち間違っていない。馬車の系譜は貨物自動車の荷台に息を潜めて隠れているといえるかも知れない。

一般乗用自動車に関しては、極早い段階で、手荷物等を客室内に持ち込みたくはないという理由から、車体後部に手荷物を収める区画を設置すると言う、純粹に利用者の立場から生まれた後部隔離区画——つまりトランクを持った3ボックスへと移行して行ったのだが……、地球にあつてはごく一部の例外、例えば、ロンドンタクシー等を除けば、その時点で馬車の意匠をエクステリアに引き継ぐのをやめ

た。3ボックス形態の馬車なんていうものは存在しなかったから、当然の結果ではある。

また、馬車が基本的にやたらと床が高いと言う不満が自動車になって強烈に噴出した事も大きい。男性ならともかく、女性では自力で乗り込むことも降りる事も困難だった馬車から、自動車に移り変わってまず強く要求されたのは、客室床を下げる事だった。踏み台が無ければ客室にたどり着けず、降りる際には下で待つ従者の胸に飛び込まなければ降車も出来ない馬車の不便さは女性にとっては不都合どころではなかった。これは自動車技術の黎明期に、女性用ロングスカートが大流行した事実も大きく影響した。ロングスカートを着用した状況では、馬車を自力で乗り降りすることは事実上不可能だったのだ。

そういった理由もあって、一般乗用自動車は急速に車高を下げた。セダン・デザインが受け入れられたころには、馬車の臭いは自動車から完全に失われていたのだ。

イングリッドがルイズたちと共に乗っているハンサム・キャブリアレという自動車は、地球の産業界が精練させてきた工業製品としての自動車とはデザイン発展のベクトルが明らかに異なっていた。

貴族が乗る事を前提とした重厚長大なデザインの馬車ポアチュールにモーター区画を取り付けて、そこから更に基本的デザインを馬車に定めたまま発展させる方向性だった。馬車の意匠を残したまま自動車としての機能性を追及、発展したと思しき姿なのだ。馬車の中でもランドローと呼ばれるタイプを発展させた形状だった。ただし、御者席もキャビンで囲っているのです、その部分は馬車よりも進化していると言える。馬をモーターに置き換えた時点で、手綱もムチもいらさないわけだから、御者席をオープンで残す意味はなくなるので、車体全体が屋根と壁に覆われるのは当然の結果ではある。

地球でもそうであったように、トランクの要請と必要性が、3ボックスっぽいデザインをオートモビルに強制していたが、全体から受ける印象はまさに馬車だった。そういう印象を強く見せつつも、実態は馬車ではなかった。やはり自動車なのだ。矛盾した表現だがイング

リッドにはそういう表現を思う以外になかった。生産性とか取り回しとかの要請で地球の自動車が出た馬車の雰囲気の色濃く残しつつ、自動車としての機能性を発展させた形状だった。つまるところ一言で言ってしまうえば「効率が悪い」形だった。地球的意味での「自動車」と比較してという意味で。

ルイズたちが乗る自動車の、基本とするエクステリアデザインは柔らかな円を描くものだった。車高は3メートル弱ほど。1メートル以上の大きさを持った巨大なタイヤに支えられているシャシー下には40セント近いクリアランスがあるため、乗り込むための折りたたみ式ステップが設けられている。運転席、助手席用の簡単なつくりのステップとは別に、客席用のステップは幅も広さも十分の2段式ステップで、なんと自動展開式だった。車体下に折りたたまれたステップはイングリッドたちが乗り込む時にゆっくりと車体側面に姿を現して、同時に客室扉も自動で開いた。そのためイングリッドは顔をひくつかせる事になった。

車内は1.7メートル近い高さがあった。それでもキュルケには窮屈だが、イングリッドも含めた他の3人にはまったく問題が無かった。イングリッドの身長は152センチしかないのだ。実はルイズよりも極僅かに低い。タバサにいたってはその身長142センチ。車内で立つて何の問題も無かった。ただし、車高が3メートルで地面とのクリアランスが40センチ。差し引き2.6メートルで車内が1.7メートルしかない。つまりシャシーが分厚くてその上に載る床も分厚いのだろうという推測がなる。天井もまた分厚い。車体を構成する部材も一々分厚いので、当然客用扉もありえないほどに分厚い。事実、各所に設けられた窓ガラスは、大きくなくぼみの奥に嵌っている様な物だった。

室内にふんだんにあしらわれた木材。前傾したフロントウインド。精度の高い設えのドア。前に運転席区画。客室と運転席は壁で区切られているが、そこには横開きのガラス窓が備えられている。その下に後ろを向いたソファ・シート。キュルケほどの身体を持った人間でも3人横に並んでなお余裕がある。それがそのまま車体幅だった。

いや、室内幅というべきか。室内幅は1・8メートルから2メートル。ドアのある部分めがけて弧を描いて大きくなっているのだ。上から見ればキャビン部分は前と後ろを平行に断ち切った卵型といったところだろう。フエンダーの張り出しを考えれば2・4メートルほどが最大車体幅となる。

シートの横には縦長の窓。観音開きの客用ドアが車体の両脇にある。そのドアにも窓ガラスがはめ込まれている。室内の床には毛並みのたっぷりとした絨毯が敷き詰められている。それを挟んで前を向いたソファ・シート。お互いのソファ・シートの間には1・7メートルの間隔がある。それはドアの開口部幅でもある。頑丈なヒンジとそれを支える車内に張り出した太目の構造があるので1・7メートルがそのまま有効開口というわけではないが、自動車に備えられたドア開口としてはありえないほどの広さではある。相対したシートの間隔はキュルケ2人が対面して足を投げ出してもなお余裕たっぷりといったところだ。後ろのシートの脇にも縦長の窓。そして後ろの壁。そこにも窓があつて後ろを見る事ができる。そして寸詰まりのトランク区画。後ろから観音開きのドアで中にアクセスできる。ゴルフバックなら縦にして8コぐらいは2列に並べて押し込めるぐらいの大きさだ。

客室全長3メートル強。幅1・8メートル。室内高1・7メートル。イングリッドの感覚から言えばこれを「タクシー」と呼ぶには躊躇するどころではなかった。極東の島国でやたらとはやっているタイプの「乗用車」ですらなかなか無いような豪勢な自動車だ。

車内は全体が高級そうな布に囲まれている。ドランカーズパスで飾られた室内はイングリッドにとってはやや「うるさい」印象だが、窓が小さい故に自然光が差し込みがたい室内を華やかな雰囲気には飾っている。

自然光が入りがたいだけであつて、実際の室内は明るい。魔法の光が天井全体を仄かに照らしているが、若干不自然な白色光であつてイングリッドの神経を逆なでする。それについては仕方が無い部分があつた。多分に慣れの問題だろう。イングリッドに馴染みのない輝

きではあるが、ルイズたちには気にならないようだった。

全体的に一々重厚なデザインであるから「古臭い」ものだと言うにも躊躇がある。地球の高級車であってもなかなかありえないほどの遮音性と断熱性を持って車内は極めて快適だった。息苦しいわけでもない。足元のスリットからそよぐ風はエアコンデショナーを通り抜けたかのように一定の温度と湿度を保って車内環境を守っている。

ドアが開いた時点でイングリッドは気がついたが、分厚いそのドアが開いたその時に、車体からきしみ音一つしなかった。つまりそれだけ車体剛性が高いのだ。西部開拓時代にアメリカ国内を駆け回った駅馬車等では、屋根の上に荷物を載せて車内に人が乗るとシャシーが歪んで、扉を閉めるのに御者が蹴りを入れたなんていうのが常態だったから、その技術の高さは驚くべき事である。地球の現代でもトラックやバスで、荷物や人を乗せすぎるとドアが閉まらないとか、振動で勝手に開くという事故がそこそこ起きうる事を考えれば、強度を保ちつつ不便ではない広さを持ったドアを自動車の設計に適合させるのは存外に難しい事なのだ。見た目はアンティークと言つて良い外観の自動車が、それを裏切つてさり気無い高度な技術を主張している。異世界なのだなあとイングリッドには声も無い。

全体的な印象を総括すれば、地球の自動車と比べるのも難しいが、無理やり当てはめればロンドンタクシーにシトロエン11CVあたりのボンネットを差し替えて、全体的な特徴にシトロエン2CVの雰囲気混せて、巨大化したとも言えば良いのか……。全長5メートル以上で幅が2・4メートルとなればずいぶんとずんぐりした自動車である。相当に無理やりな言い方であるが、それだけ自動車としては地球人的感覚から外れたデザインだった。特に車高が3メートルという点で大きな違和感があった。

広い街路を滑るように走るハンサム・キャブリオレは時速50リールほどの最高速度を持って、自動車の群れの中を泳ぐ。乗用車だけでなく、トラックやバスも走っている。相当な混雑なのだが、驚くべき事に周辺の空気は清浄そのものだった。イングリッドの特殊な視界

であっても排気ガスらしきものはまったく捉えられなかった。

片側3車線の道路はよく整備されていて、坂は多いものの、穴が開いていたり、蓋のない溝が横切っているわけでもない。滑らかな石畳の舗装が輝きすら見せている。

中央に幅2メートルほどの贅沢なつくりの中央分離帯が備わっていて、手入れの良い楓の街路樹が窮屈そうに路面に影を連ねている。車道の両脇に硬く締められた土の路面馬路があって、「普通の馬車」や単騎の馬、1人から2人程度の人間を乗せた「馬っぽい動物」などが列を成してお行儀よく一定の速度で進んでいる。そして両脇を植え込みが囲んで、秩序だつて建植されたマロンの木が整列している。その向こう側に広々とした歩道。大勢の人々が行き交って、あちらこちらにベンチやテーブルが配されている。非常に活気溢れる風景だった。

イングリッドは感心する以上に溜息を吐きたくなった。

「すばらしいの……。トリスタニアはどこもこんな風なのかや？」

独り言じみた声を漏らしたイングリッドだったが、外部の喧騒と懸絶した車内では思ったよりも大きな音になった。キュルケと会話に興じていたルイズが振り向く。後ろ向きのソファ・シートにイングリッドと並んでいるルイズは、進行方向左側の窓に張り付いていたイングリッドに身を寄せて、その脇から首を伸ばしてイングリッドの眺める外を見渡した。そうして小さく笑う。イングリッドの右肩を軽く叩いて首を振った。それに気がついてイングリッドもルイズのほうへ首を回した。

「あはは、さすがに大トリスタニア全部がこうってわけじゃないよイングリッド。この通りはトリスタニア一番の大通りだからってだけだよ」

その言葉にイングリッドは、いつの間にか緊張していた肩から力を抜いて溜息を吐いた。

「……で、あるか」

ルイズは笑みを乗せた顔を窓に近づけて外を見回す。

「トリステイン観光としても定番だし」

同じように前向きのソファ・シートから外を見回していたキュルケ

も、その言葉に続けた。

「海外から来た観光客向けのぼったくり価格のアクセサリー店とか、何ちやってファツションショップとか、とりあえずカツフェとか、いろいろあるからねえ」

タバサはキュルケの右側でぼんやりとしていた。借りてきた猫のように、シートの上にちよこんと乗る姿にイングリッドはおかしみを感じて笑みを浮かべた。杖を抱えてそれを所在無くいじいと撫でる姿もまた可愛らしい姿であった。

「ラベニユー・デ・シャンゼリーゼは大トリスタニア一番の大通りだし、トリスタニア観光で行くべきお約束の観光地はだいたいこの通りに沿ってるから、余計に混雑するのよ」

右手人差し指で天を指し、ややあごを突き出して得意げに語るルイズの姿にキュルケは眼を細めて肩をすくめた。

「まあ、見事な通りよね。通りに面したファサードも見事だし、通り自体の手入れも抜群に良いから『トリスタニアは道路も観光名所にする』っていうのも納得だね」

イングリッドはその言葉に僅かに眉を跳ねて、キュルケの顔に視線を移す。

「ん？こういう光景はトリスタニアでも特別なのか？」

その言葉にキュルケは皮肉げな笑みを浮かべて首を傾げた。小さく首を振る。

「ちがうちがう。トリステインが特別なのよ。さすがは夢見る国よね」

キュルケの毒のある感想にルイズが眼を見開いて抗議する。

「なによ。ゲルマニアみたいにならな年中戦争ごっこに現を抜かしている国とは違うのよ」

苦笑いを浮かべたキュルケは「はいはい……」と溜息を吐いた。「そうかもね……。トリステインは平和だね。それが一番良いことなのよね」

直前のキュルケの言に、短気を爆発させそうになって勢いよく身を乗り出したルイズは、やけに存念の籠ったキュルケの眩きに毒気を抜

かれて、腰を浮かせたところで固まった。怒りとも苦笑いともつかない微妙な表情でキュルケに視線を送ったところで、首を捻りながら、シートに腰を戻す。

「ん、まあ、そうよ」

その2人の姿をぼんやりと眺めているタバサ。妙に反応が薄かった。

イングリッドは微かな笑みを浮かべながら3人を視界に納めつつ、別のことを考えていた。

極楽浄土大通りとはね……。

あからさまにフランス系の名前である事にも驚いたが、それ以上にエリユシユオンという概念がこの世界にあることに驚いた。

社会学的概念としては事実上の一神教として理解している始祖ブルミルを奉じるこのハルケギニアで、エリユシユオンとは違和感しきりである。

社会通念上は天国と極楽は同じようなものとして理解されているが、厳密には違う。特にイングリッドのあり方からすると、絶対に同じものとして扱えない。正確な説明を求められると100万の言葉を尽くしても足らないが、あえて正確でない簡単な説明を試みるなら、天国とは「神」が管理する「桃源郷」である。大抵の一神教が掲げる天国のあり方とはそういうものである。一神教ではないが、北欧神話で言われるところのヴァルハラも例外的ではあるが同じ概念の世界観である。

対して極楽とは「神」も含めたありとあらゆる生ある(生あった)存在が全て平等に列する、「浄土」して最後にたどり着く世界である。神様未満、人間以上を奉じる宗教観念における極楽浄土がこの概念だ。その系譜の宗教をひとくくりにするといろいろと憚りあつて文句を言う人もいるし、概念自体に対しても様々な解釈の違いがあるが、世間一般に流布されている極楽の概念はそういった感じである。何でもかんでも受け入れる心広い観念方向の分派が唱える理念であるから「本流」側から強い異議を突きつけられる言い方ではあるが、社会

一般ではそう理解「されてしまつて」いる。だから「正確ではない説明」という言い方である。

正確でない社会通念上の理解であっても、天国と極楽浄土の間にはこれほどの大きな違いがある。ハルケギニア全土を覆っているらしい始祖ブルミルがどうやら「神」では「無い」らしき部分まで考察を進めると、なおさら一国の首都の、それも一番の大通りに「極楽浄土」等と名づける者の気が知れないという話になる。

ましてや魔法を使う者はすべからずブルミルの直系の子孫とされている世界観を持つハルケギニアである。概念上の差異は大きい所ではないだろう。何を考えているんだか……と、いったところである。一個の人間個人としてはどうでも良いような話なのだが、イングリッドの出自を言えばこの話はこだわつてしまふ部分である。

ただ、それをイングリッドがことさらに言い募る事もなかった。この考えは例え自身の主たるルイズに問われたとしても、決して言葉として出でる事のないイングリッドのひそやかな思考であつた。内心の葛藤で押さえ込める程度の「違和感」で済ませられるぐらいにはイングリッドは「大人」だつた。世界がそれを許容している限りに於いてはイングリッド側から藪を突くような事をしない。この手の話は突き探して蛇どころか竜が飛び出す話なのだ。想像上の言葉遊びで終わらしたほうが良い。

それでもそのような想像をするのは、そういう得てして激しくぶつかり合いを行いかねない「概念」があつさり同居している世界観が、ルイズ周辺世界に与える実際の影響を思えばこそである。そういう「厄介」どころではすまない事態がルイズに影響を与えかねないかもしれないという想像は、イングリッドにとっては無視できない問題だ。そういう「宗教概念」の衝突があるのかないのかという判断は、イングリッド自身の立ち位置を考える上でもきわめて重要だつた。そういう意味では、ブルミルの名を奉じる貴族たちの頂点にある王の住まう場所に「極楽浄土」の名がすんなり収まっている状況というのは、ある意味で大変に安心できる材料でもある。

アメリカ人的なあつけらかんとした楽天的思考形態を持って「字面

がカツコイイから」などという理由で通りの名が決められていたら、それはそれで厄介なのだが……まあ、そういうことを気にしないような、ある部分に対しても無頓着な人間性が普通であるのがハルケギニアであるというなら、それはそれで平和な事である。

ある種、極めて重要にして特殊でありながら普遍性を持った特別に危険な問題を、至極適当に切って捨てたイングリッドは、そういう思考を持っていたことを3人に悟らせぬまま、にこやかな表情で会話を続けた。1人はいつも以上の鉄面皮で顔を強張らせていたのだが。

イングリッド達が乗る自動車は、通りを進んでいく。その歩みは順調とは言い難かった。走っている車両の数が多いために、ストップ・アンド・ゴーを断続的に繰り返している。そのあたりの雰囲気も現代地球の大都市的雰囲気の色濃い。とはいえ、馬車も自動車も同一の車道に群れていた19世紀ごろのヨーロッパも似たようなものだった。それとは大きく異なっている点として、トリスタリアの人々のほうが交通ルールに対してはるかに厳密だという事実がある。

地球における自動車交通の黎明期はどこも混沌としたものだった。技術の進歩に法整備も環境整備も教育も間に合わなかった。事故は頻発するし、マナーなんて無かったし、馬糞は散らかり放題だった。トリスタリアでは、自動車は車線をきっちり守るし、ロータリーがメインの交差点はスムーズに流れるし、馬糞を回収する係員がかなりの頻度で馬路に出ている。フランス風の町並みで左側通行なのが違和感を感じさせるところだが、道路を横断したい歩行者のために、横断地下道が各所に設けられている姿に気がついて、異世界の風景であるのだと、イングリッドは何度目かの納得を得る。

余りにも眼に入る風景が、地球の文明社会ににじり寄るので相当に強く意識しないとハルケギニアが異世界なんだという事実がイングリッドの脳裏から飛んでいってしまう。唯の物見遊山ならそれで構わないだろうが、イングリッドにはルイズの護衛という重大な任務がある。精神的に「普段の世界」と変わらない部分を残していると、異世界ゆえの面倒が発生した際に対応を間違えう恐れがある。イング

リッドがことさらに異世界なのだから、と、思考をループさせる理由はそこなのだ。

しかし、トリスタニアの街路を眺めながら、この町が地球と決定的に違っている部分があることをイングリッドは理解していた。

とにかく綺麗なのだ。

「美しい」という意味の「綺麗」ではない。全体的な印象として、文字通り「綺麗」なのだ。

ぱつと見て、現代ヨーロッパ人ならトリスタニアの光景は驚くべきものだろう。建物のファサードは白を基調として光沢すら感じられる。窓からてんでに下げられた洗濯物が乱雑な印象を与えるがしかし、妙にこぎれいだった。

路面の石畳も白が基本で、タイヤの痕があちらこちらに黒い筋を残している点が残念だが、太陽の光に照らされて美しい。土埃が舞っているわけでもなく、ひび割れた姿を見せているわけでもなく、陥没が見られるわけでもなく、汚水が溢れているわけでもない。

車線を区切るラインはかすれひとつ無く、運転手の視覚に必要な情報を訴えている。秩序だった路面情報は幾何学的な美しさすら感じられる。馬路と車道の間にくつも建植されている標識はうつつおしく思えるほどの数ではなく、それでいながら鮮やかな赤や黄色で彩られて、視覚を刺激する。それすら美しさを感じさせる。

列を成す自動車の群れも美しい。左右に車線を動く車両は殆どいない。マナーが大変によろしい。そういう姿もまた美しさを感じさせる。

そういった個々の印象以上にイングリッドを強く感心させるのは、なにしろ空気が綺麗な事だった。余りにも空気が綺麗過ぎて違和感を感じつつ、その違和感の原因を思い至るのに時間がかかってしまったほどだった。

精白純麗なのだ。

これだけ人工的構造物に覆われて、そして大量の自動車が群れている大都市。であるのに空気は純潔。まったくありえない光景だった。

例えば、1960年代の地球の大都市と言ったらどこも酷い有様だった。何しろ空気が汚かった。澱んでいたとか言う意味ではない。物理的に汚かった。工業地帯に隣接した大都市となると猖獗を極めていた。酷いものだった。

健康を害する、生物を苛む様々な種類の物質が宙を舞っていたのだ。ヨーロッパのある島国等は、産業革命以後、基本の服装が黒色で統一されたほどだった。それはとりもなおさず空気が汚かったからだ。黒色以外の服装では、あつという間に薄汚れてしまった。とにかく汚かったのだ。観光客が今現代の街角を眺め、古い建築物の外観を振り仰いで、重厚で落ち着いた風合い等と観想するのは滑稽な事だ。

産業革命を潜り抜けた古い建物は、凄まじい大気汚染に晒されて好むと好まざるを得ず、黒ずんだ姿を得てしまった。大規模機械産業が進展する以前の町並みは、自然石や煉瓦の風合いが色濃いフアサードが美しい町並みだった。「今」のヨーロッパの古い建物の意匠がどれもかしこも「重厚」なのは建築者の意図するところではない。

そして、現代であっても、町が清潔だとは言いがたいのが地球の姿である。

最も公害が酷い時代と比べれば、現代地球の環境ははるかに綺麗だといえる。しかしそれは最悪な時期を基準とし、それと比較しての話である。中世の世界から比べればはるかに汚いのだ。

年代基準が曖昧な暗黒時代と呼ばれるヨーロッパでは、確かに人の営みを見せる場所は汚かった。しかしそれは洗練されていないという意味が強く、人間工学的に滅茶苦茶だったが故に、一見した印象的に汚かったのであった。古代ギリシャの都市などより、都市建設に対するポリシーが退化してしまったために「汚ない」情勢だった。ただし、臭いとか、視線をどこに向けても汚物が転がっているとかはあつても、空気は綺麗だった。空気を顕著に汚すものと言えば煮炊きの煙ぐらいで、後は鍛冶屋が大量の煙を吐いている位だったが、世界全体を汚すほどではなかった。あの当時の「空気感」とも言えるものは、イングリッドが見たところ、地球に於いて再現される場所は既に無いだ

ろうというのが嘘偽り無い感想である。

山の頂だろうが、人の手の入らない秘境だろうが、南の果ての極地だろうが、どこに逃れても人の営みによる空気の汚れはついてくる。どうしようもなかった。科学文明の発達は、どれほどまでに環境技術を進展させても、完全に清浄な排気を作り得るわけではない。最悪の時代に比べれば、圧倒的に清廉だとは言え、僅かながらの汚染物質は空气中に排出され続けている。個々の排出量が少なくなっているとはいえ、排出者の絶対量は増える一方なのだ。絶対的な量が減らないのでは、汚れは蓄積するばかりである。人口が増え続ける限りは仕方が無い現実なのだ。

しかしトリステインの空気は綺麗だった。清浄と言っても良い。ハルケギニアの人口から言ってトリステインのような大都市がここにあることは確実な事を考えると、トリステインが綺麗だという事はハルケギニアが……否、この世界全体が綺麗なのだ。そう断言するほか無い。イングリッドの知覚出来ない超技術でハルケギニアがドームのような物で覆われて、強力な空気清浄装置が動いているとかいうのでもなければ、この場所で感じられる空気の清浄感は、そのまま世界が清浄である事を示している。

この事実はイングリッドを戸惑わせてしまう。

この世界のハルケギニアと呼ばれる狭い範囲内ですら、3億もの人間がひしめいているのだ。地球の第一次世界大戦前夜にあるヨーロッパの状況に比肩できる世界で、中世以前の美しさを保つ世界。違和感どころではない。なにより、3億人の人間を養う後背技術を考えると恐ろしくもなる。地球の歴史で3億人の人間を養う科学技術の進展は、そのまま世界を汚す技術でもあった。仕方が無いのだ。全てを自然に任せた技術背景では、ウラル以西で養える人口の限界は5000万程度なのだ。食糧生産のみを考えれば5億人分の食料を用意する事が可能であろうが、環境を汚す最大の排出者たる先端運送技術を排してしまうと、食料の効率的配分が不可能になって、結局は人口を維持できない。3億人を養う技術はどうしようもなく世界を汚してしまう。

工業製品に関しても同じだ。

建築物が高層化するのとは、とりもなおさず工業力の技術進展の結果だ。土木建築技術の発展は科学工業技術の進化ゆえである。建築物を見ればその地域の技術進展の度合いがわかるのだ。ギゼーのピラミッドやピサの斜塔のように、少数の高度技術を駆使した建築物がポツンとあるのは、費やされる時間を無視してしまえるのであればなんとでもやりようはある。極端な話、100階建ての超高層建築物を古代に人力のみで建築する事すら不可能ではなかった。100階建ては大袈裟にしても、現実にアレキサンドリアの大灯台や中東のミノレットといった実例もある。単純に時間と労働力と間接的要因としての社会的安定性がどれだけ確保できるかという問題はあったが。

しかし、イングリッドの視界に入るトリスタニアの町並みのように、軒を連ねる高層アパートメントという風景を作り出すには、工業技術の発展が絶対に不可欠だ。すべてが人力だったら、これほどまでに外観の揃った建物で大地を埋め尽くすなんていう芸当は不可能なのだ。見渡す限り建物で埋め尽くされている町並み。高度な建築機材が揃っていないくは無理な話だ。

労務提供環境という点でも世界を美しく保つのは難しい。大量供給、大量消費が確立されて始めて、労働環境が整い、人口を急激に押し上げる原因となる中産階級の発生となる。つまり、工業技術が大発展して、大量供給がなり、それに釣られて大量消費が発生しなければ、人口の増大は望めない。供給と消費は同じ紙の裏表という話ではあるが、3億の人口を支えるには大規模工業の存在が不可欠という結論は変わらない。そうなれば空気が汚れるのは必然なのだ。働く場所が無ければ金を得ることが出来ない。よって子供を育てるのもままならない。そうなれば人口は増えようが無い。

狭い場所に大々的に人間を押し込めて労務を提供する環境が無ければ、人口の集中は起きないから、アパートメントなんて建築する意味がない。トリステインのように100万の人口を擁する大都市の形成が意味のない状況となる。100万の人口を維持する物資の供給技術も相当な負担になる。

極東のとある国では相当の昔からありえないほどの人口集中を見せた都市を何百年と維持してきたが、それは、そういう都市が一箇所だけだったから何とかなったのであって、国のあちこちにそういう都市があったら、あつという間に国家崩壊だったろう。件の国であつても、人口の一極集中ゆえに、それを円滑に維持する労力は中世技術では莫大な乱費だった。都市人口を3割程度に抑えて、国土に人口を分散させておけば、はるかに円滑な国家運営を永く続けられたはずだ。

科学技術の裏付けが無い人口の一極集中は害悪しか生まないのだ。

その科学技術の進展が、人口の一極集中を可能とした。遠隔地で採集される生鮮食料品を高速で安定的に大量輸送する事が可能となる技術的裏づけがあるが故に、1000万の都市圏などという途方も無い世界が可能となる。そしてそこから供給される労働人口を吸収できる工業があつて初めて1000万の人口集中の動機となる。どの方面から見ても科学技術の発展が人口増大圧力の発端となるのだ。

そしてそれらが生む結果として、世界は汚れる。

どういう方向から見ても、トリスタニア……ハルケギニアが綺麗なのは不自然極まりないのだ。イングリッドが知る常識からは、ハルケギニアの世界を冷静に俯瞰できないのだ。しかも6000年の歴史である。3億の人口を擁する世界としてはこの世界は異様に「綺麗」なのだ。イングリッドには理解できない。

イングリッドの見るこの世界には、まるでアニメーションで描かれた町並みを見るような、奇妙な違和感があつた。

ルイズの横で、シートに座ったイングリッドは、窓から街路を見渡して顔を顰めていた。それを横目にルイズは、イングリッドが顔に浮かべる表情に理解が及ばなくて戸惑ってしまう。腕を組んで背筋を伸ばし、シートに浅く腰掛けるイングリッドの姿は不機嫌そうだった。組まれた腕を、イングリッド自身の指が不規則に叩いている。ルイズならば貧乏ゆすりを発生しかねないほどに不機嫌な雰囲気が出ていた。そういう2人の姿に気がついていたキュルケは、ことさらに明るい声でルイズに会話を投げかけた。必死で話題を捻り出そうと努力を続けていた。会話を受けたルイズが隣にそれを投げ渡して、

話題に乗った瞬間は穏やかになるイングリッドだが、話題が途切れると、ふとした瞬間に難しい表情を浮かべて、頭を捻ったり、顎を扱いたりする。その姿を見て、ルイズが眼に見えて落ち込む。それに気がついてキュルケが頭を絞って話題を振る。それが繰り返された。

それを苦痛とは思っていないキュルケもなかなか良い思考していたとも言える。実のところ激しく面倒見が良いのがキュルケの長所でもあった。生来のお姉ちゃん気質とでも言おうか。出自的にまったく孤立した人生を歩んできたキュルケであったが、そうであるが故に、そういう気質を磨いたと言うならキュルケにとつての僥倖だった。よい気質を育んだと言えるし、面倒を背負い込む性格になったとも言える。人生のある一面で大いに損する人間性だった。

そういうわけで、無意識に何くれと2人の面倒を見るキュルケだったが、苦痛は感じていなくても疲労は鬱積していた。本当に損な性格である。

トリス・スタニア中央市場
パレス・デ・レ・アル入り口は大混雑だった。

パレス・デ・レ・アル正面入り口から200メートルは、自動車が出入りするのに便利なように左折用レーンが2車線用意されていたし、馬路と車道の間にもう一車線増やせそうな路肩も用意されているが、そこからはるかに離れた場所まで大渋滞だった。左折待ちの車が本線まではみ出して混乱を助長する。馬路も混雑がはなはだしく、それを嫌った馬や馬車が車道にはみ出したり、単騎駆けの者の中には歩道を走り始める者まで現れて混沌に拍車をかけていた。

のろのろと動くキャブリオレの中で4人は辛抱強く待っていたが、その視線の先で、同じように列に並ぶハンサム・キャブリオレが路肩に寄せて、客が降りる姿を見ると、キュルケが遂に爆発した。

キュルケはシートから飛ぶように跳ねると、思い切り天井に頭をぶつけた。その様を見てタバサがびくりと身体を震わせる。唐突な行動とその結果を見てルイズもイングリッドも呆けた風で頭を抱える。キュルケを見つめる。

「つうう……」

涙を湛えた瞳を上げて、慎重に身体を起こしたキュルケは、目の前のイングリッドとルイズの表情に気がついて刹那、顔を赤らめたが、首を振って前に向き直る。我慢できずに「ぷっ」と噴出したルイズを無視して身体を傾げて首も傾げ、折り曲げた右腕で天井を下から押さえつけて身体を安定させながら、客室と運転席を仕切る窓の前に身を乗り出して、それを乱暴に叩いた。

ルイズとイングリッドは、その2人の身体の間でシートに左腕をつけてそういう行動を取るキュルケの意図を測りかねた。そうして無表情に見つめるイングリッドの視線の先で窓が開いた。渋滞に一番ウンザリしているであろう運転手が、疲労の隠せない表情で顔を覗かせる。

「どうされましたか、お客様？」

その言葉をかけられている最中に右腕で懐を探ったキュルケは、こちらを見る運転手の鼻先に硬貨を2枚差し出す。

「ここで降りるわ」

その言葉に溜息を吐いて頷いた運転手は、ひとまず差し出された硬貨を無視して左側のサイドミラーに眼をやり、次いでルームミラーを見て後ろを確認する。首も回して左右の安全を確認した後、ハンドルを大きく回して路肩に車体を寄せた。ブレーキを踏みながらサイドブレーキレバーを引き、インパネにある幾本かのレバーの中から2本を選んで下に押し下げると、軽く空気の抜けるような音と共に車体左側の客席ドアが開いてゆく。

運転手はそれを確認してから、差し出されたままだったキュルケの手のひらからゼツキーノ金貨1枚を受け取った。

「お釣りを用意しますので少しお待ちください……」

前に向き直ってコンソールから財布を取り出した運転手に、キュルケはもう1枚の金貨を投げつけた。

「チップよ。釣りはいらぬ。ここまでアリガトね！」

辛うじて金貨を受け止めた運転手に声を投げかけて、あわあわする彼を無視して身を屈めつつ、キュルケは飛び降りた。渋滞する馬路をさっさと横切って、植え込みを軽い仕草で飛び越え、歩道に立って伸

びをする。鼻先を掠められた馬が嘶いて抗議の意を評するがキュルケは気にも留めない。

意外なほどに身が軽い仕草を見せたキュルケを見送って、イングリッドは苦笑いと共に溜息を吐いた。運転席側に左手を挙げて運転手に無言の感謝を告げると、イングリッドも開いたドアに身を寄せ

る。首を出してさっと左右の安全を確認すると、路面に降り立ち、ステップの横に移動する。妙に疲れた表情を見せるタバサがゆるゆるとした仕草でドアに近寄ったので、イングリッドが手を差し出す。タバサは素直にそれをつかんだ。ステップを踏んで、タバサがゆっくりと路面に降り立つ。

呆れた表情でキュルケを見送ったルイズは盛大に溜息を吐いて車内に立ち上がり、前に振り向いて、多すぎるチップに戸惑う運転手に作り笑いを向けた。

「ここまでありがとう、ね。運転手さん。お金は受け取っておきなさい」

ルイズもドアの横に移動すると、それを認めてステップに片足をかけたイングリッドが、その腕を取る。

イングリッドのエスコートで路面に足をつけたルイズの背中に、運転手の声がかげられた。

「有難うございました。またのご利用をお待ちしています！」

その声の前に向いたまま左腕を挙げて手をひらひらさせたルイズは、イングリッドに手を引かれたまま馬路を横切り、植え込みのどこどこに設けられた横断用の通路を迂回して歩道に移動した。まっすぐに全てを横切ったキュルケから若干離れた場所で歩道に達した3人は、首をふるふると回して腰に手をやり、ストレッチじみた行為を見せるキュルケに合流した。

キュルケが3人に気がついて、首を戻す。身体を回して3人に相対する。腰に手をやって両足を軽く開き、背筋を伸ばして顎を僅かに突き出し、芝居じみた仕草で髪をかき上げて、小さな笑みを浮かべて喚く。

「おそーい！」

その声を見殺ししてすたすたと歩くルイズは、そのままの勢いを保ってキュルケのわき腹を両手で押した。突き飛ばしたと言ったほうが自然か。キュルケが倒れそうになって、慌てて踏ん張った。僅かに強張った表情で、身を落としたキュルケがルイズに振り向くが、次いで出されようとした声を遮って、腰に手をやったルイズがキュルケに強めの視線を浴びせた。

「はしたない事しないの、キュルケ。マントを翻すような事をしないで！」

イングリッドは、どこかの女学生がスカーフを翻すような事ははしたない事なので、常日頃から気をつけて歩いているような話をしていた事を思い出す。それと同じ事なのかと合点したが、魔法学院内では割合に皆、マントをはためかせるのを普通にしていたとも思い出す。つまりは、外向きでの話かと勝手に納得して自己完結した。

うんうんと頷くイングリッドを薄い疑問符で彩った表情で見るタバサ。しばし見つめた後、キュルケのほうに視線を移して歩く。つい先ほどまでの微妙な表情は消えて、常日頃の表情に戻っていた。

不特定多数の人間が往来する歩道に何気ない仕草で視線を移ろわせながらタバサの背中も見ると、イングリッドは、ルイズとキュルケが気がついていなかったタバサの微妙な変化に想像を走らせる。

……きつと、自動車のような乗り物に弱いのだろう。そう評価する。

乗り物酔いしやすい体質というのは、ただ単純に「弱い」以外に、空間把握能力が高い者、という場合がある。他の、もつと普遍的な理由があるのに、一番最初にそれを思ったのはタバサの姿であるからだっ

た。

動く風景の中で自身の位置を素早く特定できる者の中には、自分自身が操っていない乗り物の動きと、自己の意識する位置関係が微妙にずれていく感覚をうまく補正できずに「酔う」場合がある。三半規管に優れた能力を持ち、視力がよく、聴覚も良いという者に顕著にそういった症状が出る。こういった者は、丁寧で癖の無い運転手が操る自

自動車や、厳密な規格で敷設された鉄道であれば動きを素早く理解して、酔いが収まるものである。また、一定速度で動いている自動車では酔う事はない。

ところが船のように、予測不可能な動揺があると、酔いをおさめがたい。慣れることも出来ない。渋滞に巻き込まれた自動車というのも都合が悪かった。背が低いタバサは当然座高も低いので、前を見る事ができる窓があるといっても、それは高い場所にあつたので、タバサでは前を見る事は事実上不可能だった。つまり、断続的に発進、停車する自動車の動きを予測できない状態だった。進行方向に対して横か縦かと言う違いはあるが、タバサにとっては船に乗っているのと同じ感覚であつただろう。

片目だけ視力が悪いとか、片方の耳のみ悪いとか言う場合も同じように「酔う」のだが、そういった者は慣れないと、自分が運転する自動車の動きですら酔ってしまったりする。タバサの場合は、自分で運転する場合には平気、という手合いだろうとイングリッドは見立てた。

乗り物に酔うというのはそれ以外にも様々な要因があるが、タバサに対する評価はそういうものと結論したイングリッドである。

そういう情報がどこで役に立つかわからないが、いちいちそういうことに思考を飛ばしてしまう自身の思考形態に苦笑いを浮かべつつ、イングリッドは、肩を並べて歩道を歩き始めた3人の、その背中を追つた。

パレス・デ・レ・アルは大盛況だった。窮屈に軒を連ねる商店の狭間に20メートルほどの幅を持った街路が貫くが、せつかく広いその道を出店が埋め尽くしている。どこの世界でも変わらない市場の風景だった。

貴族の姿は見られなかったものの、明らかに貴族の使いといった風体のフットマンやポーターが食料品や日用雑貨を抱えて歩き回っている姿も見られる。消費財を抱えて歩き回っているというのも変な話だが、彼らが腕に抱えているものは、高級品とか掘り出し物とかそ

ういった類のモノなのだろう。日常的に消費される食材とか雑貨品ならば、貴族の家に直接出入りする業者があるはずである。そういう意味でも貴族がこういった場所に姿を見せるなんて殆どありえないのだろう。

よつて、混雑を作り出している人間の群れとは、つまりは平民なのだ。治安を預かる警邏とか、違法販売品の取締りを行う役人とかの姿もあつたが、現場に出る人間は、基本的に平民なのだ。イングリッドが観察するところ警邏にせよ役人にせよ、想像以上に魔法の杖を持っている者が多い。しかし彼らはマントを身につけていない。であればメイジであつても貴族ではないのだ。よつて疑いようも無い貴族であるルイズたち3人と、その後ろを付き従うイングリッドに近づく者はいない。大げさな間隔を開けてみんなが道を空けてゆく。あからさまに迷惑そうな表情を浮かべる者も多いが、視線を直接向けてくる者はいない。有名観光地の商店街ほどに足の踏み場も無いような混雑が、イングリッドの視線が通る範囲内の全てを埋め尽くしているが、4人を避けるぐらいの隙間を作るのは容易である様だ。4人を避けようとする人の波が、買い物をする人の波とぶつかつて、商店や屋台の商品の山を崩したりする騒ぎがそこそこで起きるが、イングリッドの前を歩く3人はそんな下々の出来事に気を向けるそぶりすらなかった。平民の人波を歩く貴族にとつて、出エジプト記のような光景などは当たり前なのだろう。文化がちがうと叫べばいいのだろうか？イングリッドは苦笑いするばかりである。

「……まずは、どこへ行くのじゃ？」

周囲の状況を見渡しながら問いかけるイングリッドに刹那振り返つてルイズが頭を捻る。立ち止まつたルイズにキュルケとタバサが訝しげな表情を浮かべつつ、数歩たたらを踏んで立ち止まる。その姿を見て同じように立ち止まつたイングリッドにルイズが溜息を付いて、戸惑うイングリッドを引っ張つた。

「一緒に歩こうよ、イングリッド。そんなに離れなくて良いからさ」

戸惑いを収められないイングリッドが引っ張られるままにキュルケとタバサの横に押し込められた。4人が横一線に並んだ姿を見て、

周囲の人間が迷惑そうにする。狭い通路にルイズ、イングリッド、タバサ、キュルケの順に並ぶ。迷惑どころではなかった。

「まちなされ、我主ルイズよ。これでは酷く邪魔じゃぞ」

その言葉に3人が一斉に首を捻ったのを見てイングリッドはこげそうになった。3人は真実、自分達が周囲に混乱を撒き散らしている現実を理解していなかったのだ。本当に貴族なのだ。

イングリッドはルイズに腕を取られて身体を寄せている。しかしその右でタバサもキュルケも十分な間隔を開けて普通に距離を取っている。会話をするのに不自由は無く、歩くのに腕をぶつけない自然な距離だ。学院で構内を歩くにはまったく自然な間隔だったが、こういう混雑した場所で歩くにはありえない姿だった。3人はそれを理解していない。

イングリッドは眼を震わせながら、左腕に引つ付いたルイズを引きずってタバサに近づいてその体を押し、キュルケに寄せる。疑問符を浮かべたタバサは押されるままにキュルケに近づくが、同じように疑問符を浮かべたキュルケは、寄せられるタバサを避けて距離を取ろうとする。

その姿を見てイングリッドは、口元を震わせながら右腕を延ばしてキュルケの左腕をつかみ、タバサの右側に引き寄せる。

「ん、まあこんなもんじゃろ」

街路に立ち止まって3メートル以上の幅を取っていた迷惑な貴族の集団は、イングリッドの努力で2メートル以下に収まった。周囲を避けて歩く人々の群れが心なしかスムーズになる。その状況にタバサが最初に気がついた。

「ん……気がつかなかった」

その言葉に再度首を捻るルイズとキュルケ。タバサは首を傾げて密着する身体を離そうとするキュルケの左腕をつかんで引き寄せる。

「迷惑」

ゆっくりと周囲を見渡すタバサの視線に釣られて、同じように視線を動かすキュルケとルイズ。背の低いルイズはともかく、人の群れの中で頭一つ飛び出したキュルケの姿を見て、視線から逃れようとする

平民が、一部で押し合いする。その騒ぎが横に伝播して、衝撃を受けた哀れな出店屋台の商品が崩れ落ちて店主が慌てる。幸いにして通路側でなく店内側に崩れたために、更なる混乱を招く事態には至らなかった。

そこまで見て初めて2人は合点したようだった。僅かに顔を下に傾げたキュルケはばつが悪そうに鼻をかいいた。ルイズはいつそうイングリッドに身を寄せる。

「気づかなかった……」

イングリッドに顔を向けるルイズは気恥ずかしそうに首を振った。それに笑顔に向けたイングリッドは口を開きかけて何かに気がつき、一瞬で表情を緊張させてルイズに相對する形で身体をすばやく回す。ルイズの身体を前抱きにして、タバサとの距離を取る。左腕をルイズに取られているために、そうせざるを得なかった。その横でタバサが遠慮なくキュルケを右に突き飛ばし、タバサ自身はそうして空いた空間に身体を避ける。ただし、身体だけ避けたので、地面に突き立てられた彼女の長大な杖はその場所に残った。左腕につかまれた杖は斜めに傾ぎ、何かの罫のように空間を遮った。

そこを走り抜けた男がいた。当然のごとくタバサの杖に足を取られてつまずき、派手に顔面から4人の前方に身体をダイブさせる。「ずさっ」と音を立てて身を滑らせた男は即座に身を引き起こして刹那振り返り「ちっ」と声を上げて人の群れを掻き分けて走り去る。突き飛ばされた人々が抗議の声を上げた。

ルイズが呆れた表情で男の背中を見送る。

「……何アレ？」

身体を元の位置に戻しながらイングリッドはタバサを見る。地面に腰を落としたキュルケを引つ張りながらタバサもイングリッドを見つめる。その仕草を横目に、腰を払いながら立ち上がったキュルケが溜息を吐く。

「スリね」

びつくりして眉を跳ねたルイズがキュルケを見つめる。眼を細めたキュルケはやれやれとばかりに小さく両手を振り仰いで首を振る。

イングリッドとタバサが頷く。キュルケはその姿を見てタバサの頭を撫で付けた。

「あいかわらずカンが良いのね」
「ん」

頭を撫でられながら、タバサは再度頷いた。そこから視線をルイズに戻したイングリッドは、そして周囲に気を配るように眼を揺らす。ルイズはそんなイングリッドに感嘆を滲ませた。

「気がつかなかったわ……」

しかしその言葉にイングリッドは表情を緩めない。難しい表情のまま、後ろを流れる人の群れの中、一点を見つめる。ルイズは首を傾げた。

「どうしたの……?」

眼を細めるイングリッドの腕が妙なところに伸びている事に気がついて視線を移すと、ルイズ自身のポーチをかばうように、力の入った事が見て取れるイングリッドの手のひらが見えた。

「?」

疑問を浮かべてイングリッドに視線を戻すルイズ。イングリッドは刹那、ルイズに視線を移して、元の場所に視線を戻す。

「……魔法を使ったスリと言うのもあるのかや?」

その言葉を受けてキュルケが慌ててイングリッドの視線を追う。タバサが僅かな緊張を滲ませて周囲を見回す。ルイズが口元を強張らせた。

それで、イングリッドは緊張を解いた。

「こちらが気がついていることに相手も気づいた様じゃな……3人は確認した」

身体を傾げて右腕を水平に突き出し、次いで、髪をまくって首を振ったイングリッドの仕草に、銀色の髪が輝きを散らす。そうしてその視線がタバサに下ろされる。

「どうじゃ?」

タバサは3人にも辛うじて確認できる小さな仕草で頷いた。

「2人一組。別の場所に見張り。多分もう1人、掏り取ったモノを受

け取る役割の子供。あと、さっきの男がコツチを見つめてた」

その言葉に天を振り仰いだイングリッドが顔を右手で扱く。

「おおぅ……、5人いたか。そこまでは気づかんかったわ。タバサは優れて気が効くの」

ルイズを引きずってタバサに身を寄せるイングリッドは、右腕を伸ばしてタバサの首、その後ろ側を撫でた。頭の上にキュルケの手が乗っているのだから無かった。鉄面皮の影にこそばゆい表情が見え隠れする。そのタバサの姿にイングリッドは眼を細めた。

瞬間、イングリッドはルイズの身体を引き剥がしてタバサに押し付け、一瞬で数メートルを跳ね、4人を避けて歩く人波から1人の男の顔をつかんで引きずり出す。160セントはあるそこそこ屈強な出で立ちの髭面がなす術も無く引きずられる姿を認めた人々が、あつけに取られて立ち止まる。

顔面をつかまれて、仰向けに引きずられる男は顔を強くつかまれているがために言葉にならない言葉を喚いていたが、刹那、勢いよく投げ出されて地面に転がる。慌てて立ち上がるうとしたその胸をイングリッドの右足が押さえつける。軽く乗せられたような仕草だったが、それで男の動きは完全に封じられた。必死で地面をかく男は微動だにしないイングリッドの足に、腕を叩き付けた。それが岩か壁かとはばかりに頑強である事に気がついて動きを止め、脅えた視線で見上げる。その先には端を跳ねた奇妙な笑みを口元に浮かべた顔があった。語気を強めて、周囲に響き渡るかのような声をイングリッドは発した。

「舐めんでもらいたいの貴様等！失敗したのだからケツを捲くれば良かったのじゃ！」

鋭い視線で男を見下ろし、次いでもったいぶった仕草で周囲を見渡すイングリッドの姿に脅えた周囲の人々が距離を取ろうともがくが、前後から押し寄せる人の波が動きを滞留させる。その中でことさらに大袈裟に人を掻き分ける背中に視線を送るイングリッド。

「貴様等の臭いは覚えた」

数人がびくりと肩を震わせる。1人がこちらを思わず振り向いて、

その先に間違いなく自分を見つめるイングリッドの冷たい視線があることを理解して、慌てて視線を振り切つて身を屈めた。

それを見送つてイングリッドは地面を這い蹲る男から足を離し、腰に左手を当てて、おデコにひさしを作るように右手を掲げた。下から見上げる男の視線の先で、眩しい太陽光を遮られたイングリッドの顔が露になる。

黙っていれば万人が美少女と評する顔には表情が薄かった。しかし、視線には隠さない強い感情が含まれていることに気がついて男は、一層身体を振るわせる。ニヤリと口元を吊り上げたイングリッドは、怒気を含めた声を男に振り落とした。

「3度は無いぞ」

その言葉に含まれているモノの意味を刹那の間をもつて理解した髭面は、かくかくとした動きで首を上下に振る。それを受けて右手も腰にやったイングリッドは、束の間、男を無表情で見つめた後、溜息を吐いてルイズに視線を送り、あつけに取られている姿を見て小さく笑い、左手で「しっしっ」と男を振り払った。

「去るが良い。……2度と我に顔を見せるなよ」

腰が砕けた男は、地面を滑稽な姿で這いながら、イングリッドの声に振り向く。その顔にイングリッドの視線が突き刺さる。

「……たいして永くない一人の一生。忍んで沈むもはじけて散るもの自由じゃが……後悔の無い人生を送ることじゃ」

先ほどとは一転、妙に爽やかな笑みを浮かべたイングリッドの姿に、情けなくも涙を湛えた表情を隠すことなく、男は慌ててどうにか立ち上がると、人波に突進してそれを掻き分けて走り去った。周囲に立ち止まった人々と、それに遮られて戸惑う視線がイングリッドに集中する。肩を竦めたイングリッドが小さく首を振って、顔を上げ、周囲に視線を送る。

「見世物では無いのじゃがな……」

「ピッ」と突き出された右腕が空気を切り裂いて、微かに甲高い音を立てる。まっすぐに突き出された腕は、次いで、ゆっくりと曲げられてイングリッドの耳に触れる。そのまま髪の毛の内側に差し込まれ

た腕が、髪の毛をまくつて、大きく銀色を撒き散らした。

それで我に帰った人々が、慌てて自身の目的を思い出したかのよう
に、動作を再開する。三々五々に散って、市場に動きが戻った。右側
のアンクルを擦りながら、やれやれとばかりに首を振り、ルイズの前
に戻ったイングリッドは相対する桃色の髪の毛の下に、あんどりと口
を開けた表情を見つけて、苦笑いを浮かべながら僅かに首を傾げて腰
に手をやり、溜息を吐いた。

「やりすぎたかの？」

ルイズの横でタバサが首を振る。

「ん。いい葉」

左足に体重を寄せて、右足を斜めに投げ出したイングリッドはタバ
サに視線を向けて笑った。

「で、あるか」

笑みを浮かべたままルイズに視線を戻したイングリッドは、呆けた
表情の肩に、手を乗せて軽く揺すった。

「で、だ」

のろのろと表情を戻すルイズの顔を覗きこみながらイングリッド
は尋ねる。

「……まずは、どこへ行くのじゃ？」

キュルケはその言葉に溜息で答えた。

初めてのお買い物（2）

「武器屋に行きましょう！」

コーヒーハウスで一息つく4人の中で、突然ルイズが宣言した。カティモールに似た、ハイブリッドらしき渋みを「楽しんで」いたイングリッドは、そんなルイズの姿を認めて訝しげに眉を上げる。

出発前の学院でも、到着時の飛竜場でも、そしてパレス・デ・レ・アルの入り口でも、アレ、コレ、ソレとばかりにいろいろあつたため、時刻は既に昼食時間に踏み込んでいた。何のために朝食を素早くかき込んだのか。イングリッドは内心で愚痴る。

そうであるがために、単なるカツフェに過ぎない店内は閑散としていた。カツフェは所詮カツフェ。軽食を軽く掻き込んでというならともかく、昼食を取るには不向きであるし、それを曲げておなかいっぱいにしようとすれば馬鹿みたいにお金がかかってしまう。貴族たるルイズたちであつても食事をするのにカツフェでは、流石に馬鹿馬鹿しい選択である。勿論の事大多数の「平民」にとつても食事を採る場所としてカツフェが選択肢に上ることはない。よつて世の中の大多数の人間が昼食を取るべき時間と定めた今、ルイズたちが座るカツフェは暇そうだった。休憩の場としてコーヒーハウスをキュルケが選んだ意義は、その「空いていた」という点が大きい。

イングリッドが何故そういつた感想を弄ぶのかと言えば、カツフェで昼食と言う選択が存外に「悪くはない」選択肢になりうる世界があるからである。

具体的に言えば、数日前まで自身が存在した日本である。

正確に言えばカツフェではなく喫茶店であるが、日本の「喫茶店」という店舗形態もあるころから確かに「カツフェ」だった筈とイングリッドは思い出す。しかしいつのころからかどこかでおかしくなつた。それがどれくらい前の事だかイングリッドには正確に思い出すことが出来なかつたが、気がついたときには日本における喫茶店と言う店舗形態を採るカツフェは、朝昼晩と食事をしてしまつても十分に満足がいくような「異常」さを呈していた。

そしてイングリッド自身も気がつかず、特に疑問を思うこともなく便利に利用していた。

特に朝食をたしなむ上では便利で済ますにはあまりにもサービス過剰だった。それでよくもまあ店を維持できるものだ感慨したもののである。

無論のこと、あの「世界」においても日本の喫茶店と言うものは飛び切りのイレギュラーであつたから、イングリッドは端からハルケギニアのカツフエに期待するところはない。

初めて訪れた喫茶店でその店独自の味を主張するカレーやら焼きそばやらを楽しみにしているなんてことはない。

厨房からあの独特なしつこさをかもすソースの匂いがしない事に、わずかながらの残念を思つたりなどと言うことはない。

ルイズが気がついてしまうほどに、イングリッドがこの世界のカツフエに微かな落胆を感じて表情が沈んでいるのは、まったくの気のせいである。

「昼食はどうするのじゃ？」

お茶請けとして脇に添えられた豆菓子を口に投げ込みながら、店の外を眺めるイングリッドの視界に、人気の少なくなつた市場が見える。日差しが降りそそぐ通りには、買い物を終えて荷物を下げた男女がせわしなく行き交うが、その人数は少ない。

買い物をする場所がことごとく閉まつているので、足をとめる者が絶えた風景はどことなく物悲しかった。ほとんどの店がシャッターを下ろしていたし、屋台も店番であろう歳若い子供が暇そうに椅子に座つて、足をぶらぶらさせている光景が見て取れるだけだ。店主は食事に行つていいるのだろう。弁当のような文化が薄いと見えて、イングリッドの視界に入る範囲内では、本来の店主が屋台の中で軽食を取つているような姿は見られない。

かく言うイングリッドも、弁当文化にはそれほど馴染みがある訳ではない。日本で活動する時であってもコンビニエンスストアで棚に並んだ弁当を見て、当初は胡散臭い目で眺めた位だった。軍用食じみ

たパウチ物かと思ったのだ。

そもそも調理済みの惣菜や食品が棚に並んでいる風景と言うもの自体に馴染みが薄かったイングリッドである。お菓子やドライフードならともかく、ナマモノに近い状態の調理済み食品というのはイングリッド個人の理解出来る範囲を超えていた。

イングリッドの経験では、調理済みの食材が並んでいるとなると、パンとかケーキぐらいがそうであっただけの時代を過ごした期間が長かったのだ。ふつくらおいしく焼き上げたパン等は、数日どころか十時間弱でカラフルな見た目になる事もあったが、長期間保存を前提としたパンの中には、痛んだところをより分けてしまえば半年ぐらいは「食べられなくは無い」なんて物があった。ケーキに関しても同様で、極めて特殊な製造法を持って作られた【不確定名称：ケーキ】の中には10年ぐらい、場合によっては100年ぐらいは元のまま形も味も保てる「何か」がある。そこまで行くとケーキとは言い難いし、お菓子とすら言えなさそうだが「ケーキ」として売られていたのだからケーキなんだろう。

食べる事が目的と言うよりお供えもの的な意義のほうが大きいそれらは、それでも一応は食べる事が出来た。大規模災害時や、飢饉の際にそれらを食することで命を永らえる事が出来た例があるので、まさに保存食である。

後は漬物とか醗酵食等で保存が効くものがあったが、それらは店で売られるよりも各家庭で自家製造される場合が大半であったから、どちらにせよイングリッドが店で調理済みの食材を買う経験には繋がらなかった。

調理済み惣菜を買い込めば、食卓をそれとなく飾れるという日本の食文化はイングリッドの個人的印象としては、一種異様であったと感じたし、食事一食分が「箱」に収められた姿はイングリッドの知る常識からすれば、胡散臭いどころではなかったのだ。

日本で活動拠点と定められた、組織が指定したマンション等で比較的長期間一人暮らしをする際であってもイングリッドは、一々スーパーマーケットに足を運んでは生鮮食料品を買い込んで自炊してい

た。イングリッドの外見からすると想像し難たい事ではあるが……さくらやかりん等は手早く料理を作るイングリッドの姿を見て、失礼にも仰け反るほどの驚愕を見せた。まったく無礼な話である。そもそのイングリッドのあり方からすれば、自炊能力があるのは当たり前なのだ。

スーパーやデパートの食料品売り場の惣菜コーナーや、都市部の街角ですら大々的に弁当が売られるようになって初めて、なんとなく弁当に手を出したぐらいだ。実際に食べてみると意外なおいしさにイングリッドは驚嘆した。一人暮らしでの自炊に於ける様々なリスク……買い込んだ材料を使いきる前に駄目にしてしまったりする事態や、一食あたりの消費金額。材料費だけでなく燃料費や自身食事を作る手間隙。さらには一時的な仮住まいに冷蔵庫だのコンロだのを用意する出費を天秤にかけると、場合によってはワンコイン——500円以下で買ってしまう弁当の簡便さは魅力的に過ぎた。

以後、数ヶ月程度の短期的なステイである場合、日本での活動時限定ではあるものの、イングリッドは弁当の熱烈な愛好者になっていた。ただそれも、ここ10年、20年程の短い期間である。

そういう便利なものが存在しない世界である。皆、いちいちレストランやらに足を向けて食事休憩となっているのだろう。

キュルケが選んだコーヒーハウス周辺には、同じようにテーブルを並べたオープンカフェが多かった。この辺は地球の風景と変わらない。同じような店舗が軒を連ねると、相乗効果を発揮して客が入りやすくなるのだろう。屋台に関しては空いている場所があれば割り込んでしまえばかりに適当な店構えを見せているが、建物内に入っている店舗は基本的に、区画によって売り物が偏っていた。

食料品店が偏っている区画、玩具店が偏っている区画、アクセサリー店が偏っている区画。そういった具合で、この周辺は、コーヒーハウスやコーヒー豆の専門店などが多く軒を連ねていた。街路いっぱいにはコーヒーの独特な香りが漂っている。

コーヒーの出所に関して、イングリッドにもいろいろと思うところ

はあったが、それに関する詮索は諦めていた。この手の嗜好品に関する細かな歴史的背景なんて、イングリッドは考える事がなかった。単純に知らないのだ。原産地がどうか、どのようにそれらが広まったかに関する知識があれば、イングリッドもいろいろと頭を悩ませる事態になったであろうが、無知である以上はどうしようもなかった。だいたい、その手の話で頭を悩ませるような事態に陥る可能性がある等とはそれこそ想像の埒外だった。イングリッドの手落ちとは言いいれない。

イングリッド達が腰を落ち着けている店は、ごく普通のカフェらしく、店内にテーブルを広げているが、店先の通りにも遠慮なくテーブルと椅子を張り出させている。そのあたりのモラルとかルールとかがどうなっているかについて、イングリッドには微かな好奇心があったが、店員を呼び寄せて聞いたところで曖昧な答えしか帰って来そうに無い想像があったため、眺めるに留めた。

アレコレと想像を膨らませるイングリッドに、当初の疑問に答える形でキュルケが声を上げた。

「今、昼食を食べに行ったらさ、迷惑になっちゃう」

キュルケが肩を竦めた。イングリッドはその言葉に首を傾げる。

「どういふことじゃ？」

イングリッドがキュルケに視線を移すと、何となくと言う勢いで外を眺めるキュルケが右手で鼻を掻いた。どこと無く苦い表情が浮かんでいるのが見て取れた。

「イングリッドに教えてもらうまではさ、気がつかなかったんだけど……」

左手に持ったコーヒーカップをソーサーに置いて、キュルケはイングリッドに向き直る。ソーサーに置かれたスプーンが小さな音を立てた。ルイズがそれを聞きとがめて微かに眉を上げたが、それだけの反応で留めた。貴族の社交の場でもないのです、見逃したのだろうか。「思い出してみるとさ、どんなに混雑していても、私が店に入ると必ず空いている席があったのよね」

そう言いながら両腕の肘をテーブルに置き、立てた手の上に顎を乗

せてキュルケはイングリッドを見つめた。

「あれはきつと貴族の……私達のために無理やり席を空けていたのではないかしら」

「んん……う？」とイングリッドは唸ってしまった。ルイズもそういつた状況に覚えがあるのか、そっぽを向いて鼻を掻いている。タバサはカップを両手で抱えてコーヒーをすすっていた。

イングリッドは頭を捻る。そういうことがあるだろうか？飛竜場での厳密な区分け。学院での平民と貴族の間にある深い谷。市場内での平民達が4人を避ける動き。それらを思えばありえそうな話である。

ただし、イングリッドの想像では考え過ぎではないかとも思う。いつかやって来るかも知れない極僅かな可能性のために、そういう場合専用場所に空けている可能性がある。余程にボロイ店や、狭い店ならいざ知らず、ある程度の広さを持った店ならばテーブル一つぐらいを常に空けておくことは難しくもない。これはヨーロッパや中東あたりでの経験上の話で、店舗規模で、大きな面積を取れない場合が多い極東地域でどうなっているかに関しては、イングリッドは経験が無いために想像出来ないのだが。

「ん、しかし、市場内には貴族向けの店と言うのはないのかや？」

そのイングリッドの言葉にしかし、ルイズは首を振って否定する。「パレ・ス・デ・レ・アルアール・ド・トリステインは庶民の場所よ。それはまあ、ね、旧市街に近いところだからさ。店のレベルも高いし、周辺に住んでいる人の所得も高いんだけど、あくまで庶民向けよ。庶民向けにしてはレベルが高い、つてトコ。貴族が直接モノを買いに来る事は少ないから」その言葉を受けてキュルケが両手を仰ぐ。

「私達学生はさ。貴族とは言っても、自由になるお金なんて高が知れてるから、一々小トリスタリアの中まで足を延ばすことなんてほとんどないし、トリスタリアで買い物つて言ったらパレス・デ・レ・アルで済ませちゃう」

足を組んでテーブルを見つめ、頭を撫でるキュルケ。いちいち芝居がかかった仕草だったが、キュルケの外見には事のほか嵌まった姿だっ

た。すべて計算ずくなのだろうか？

昨日、昼食後の会計を思い出して「高が知れている」の「たか」がどこにあるかを疑問に思うイングリッドだった。

「まあね……普通の買い物は学院内や学院周辺でなんでもなっちゃうから、パレス・デ・レ・アルに足を延ばすことなんて殆どないし。馬でトリスタニアに出たら往復だけで2日、買い物だけで1日。全部で3日はかかるから、長期休暇でもなければ王都に出ることなんて滅多にないんだけどね」

キュルケの独白にも似た言葉に、身体を伸ばして椅子の背もたれに強く背を預けたルイズが、顎を抜く。木製の椅子が微かな悲鳴を上げていた。

「そうね。乗り合い竜籠は予約をしないと、まず使う事もできないし、そもそも緊急事態に優先されるから、予約自体を躊躇っちゃやし。虚無の曜日によつと買い物。では、トリスタニアは敷居が高いわね」

そう言いつつルイズも目を細めてテーブルを見つめる。ソーサーの上に置かれたカップから、香りと共に微かな湯気が揺らぐ。装飾より実用性を重視した分厚いふちを見せるカップは、コーヒークップとしては底が深く、随分とゴツイ。イングリッドが見ても明らかに保温性が高そうで、中身が半分以下になった現状でも、残されたコーヒ―は未だに熱を残している事が見て取れた。

何かを思い出すように、頭をさするルイズ。キュルケと同じような仕草を見せるその姿は、外見のみを比べればまったく似ていない筈の2人の印象を姉妹と思わせた。イングリッドはソレを見て微かな笑みを浮かべる。

それには気がつかずにキュルケが天を仰いで、顔を右手でさする。「ああー、今考えると私。なんて能天気だったのかしら」

普段、トリスタニアでショッピンングをしている時の自分の姿を幻視したのか。キュルケは顔面にあった手を上に滑らせて、頭を乱暴に掻き巻く。

先程の3人の立ち振る舞いを思い出せば、イングリッドが予想する所、貴族とは随分と傍若無人なのだろう。本人達には欠片も思うところ

ろの無い行動でも、周辺が気を使つてなにくれと配慮していたのは想像に難くない。それに気が付けなかつた過去を思っているのだろうか。しかしモットという悪い見本を見た後だと、自身を省みる事が出来る2人の姿は随分と好ましくも見えた。

イングリッドは肩を竦める。

「まあま。次から気をつければよからう。過ぎた事じゃ」

のろのろと視線を移す3人にイングリッドは笑いかけた。ルイズが溜息を吐いて、カップに残ったコーヒーを一気に飲み下す。

「そうね。しょうがないよね……」

ポーチに手を延ばしつつ立ち上がるルイズを、キュルケが右手で制して立ち上がる。キュルケが首を傾げたルイズにウインクを投げて、懐から自身の財布を取り出すと右手を挙げた。ギャリソンスターのフロア・アテンダントがそれを認めて小走りに近寄る。

それを確認してキュルケはルイズに向き直る。

「ルイズはイングリッドの買い物で物入りでしょ。これぐらいは私が払うわ」

その言葉に一瞬、身体を跳ねて食って掛かりそうになったルイズの鼻先に、右手の手のひらを差し出して抑えたキュルケは、微かな笑みを浮かべた。

「奢った、奢られた、なんて無し。コーヒーを飲みたかつたのは私のわがまま。つきあわせたのは私。だから私が払うのは当然なの」

「むー」と膨れるルイズをいなして、大きな銀貨をフロア・アテンダントに渡すキュルケ。頷く彼に、さらに数枚の小さな銀貨を渡す。

小さな仕草で驚きを表すフロア・アテンダントにキュルケは笑顔を向けた。

「チップ。みんなでおいしいものでも食べて、ね」

人好きするキュルケの笑顔を向けられて、微かに紅潮した顔をさするフロア・アテンダントの姿にイングリッドは苦笑いを浮かべながら、立ち上がりつつコーヒーを飲み干す。カップをソーサーに戻しながら肩をゆすり、崩れたカプを整える。テーブルに椅子を戻し、店先にある姿見の前に移動して覗き込み、胸のリボンを整えた。数瞬で全

身を見回して、コーヒーが飛んでいないことを確認する。紫と言っても良い深い藍色の服は、僅かな汚れでも目立つ事この上ない。黒いシミがあれば酷く収まりの悪いアクセントになってしまう。それを恐れている話だ。

飛竜場で地面を捲くれた時には、実のところイングリッドは無意識にフィールドを張っていた。イングリッドのあり方からすると、意識していないと防護フィールドを展開してしまう場合が多い。身を守る手管は無意識で発動しているのが常態なのだ。ルイズの傍らにいたときは常に緊張を強いられている。

イングリッドにとつて、防護フィールドを張らないように、意識して普段と違う状態を維持しなければならないと言うのは随分と疲れる事だった。そうではあるが、それを面倒とは思わないイングリッドだった。

店から外に出て——とはいっても、扉も窓も全部取り払われたカツフエで、内と外をどこで区分するかの判断は難しい。背が高い観葉植物が収まる鉢植えが、通りに広げられたテーブルや椅子を、何となく囲い込んでいる。人氣が途絶えたに等しい今の状況なら問題ないだろうが、雑踏の中で人の背に隠れるテーブルや椅子があつては蹴躓いて危険である。それを防ぐための目印としての鉢植えなんだろう。それらで軽く区切られた場所から離れば、そこは店の外。と、いうことか。ルイズが伸びをして軽い仕草で周囲を見渡す。キュルケも釣られる様に伸びをした。大きくはだけられた胸元が揺れる。僅かながら存在する通行人の中で、それに注目する人間がいないのは、この世界が本当に貴族と平民の間で断絶している証明であるかのようにイングリッドには思えた。

人間の欲求の中でも、それなりに満たされた生活を送っている者ならば、最後に残される欲求となる場合が多い「性欲」を断ち切るのは難しい。興味があるとなれば、聖職者であつても手を出すのが男の悲しいサガである。少なくとも地球ではそうだった。ヨーロッパでは、王族であつても低俗な趣味のパーパブツクに、ポルノじみた創作の

モデルとされて大問題になったりした。まったくの想像で下品な創作の産物が決め手となつて、首を落とされた女王が居たくらいだが、逆に言えば、そういつた出所確かならぬペーパーブックに下世話な期待をして眼を通す人間が、世論の大勢を形作る程に掃いて捨てるぐらいには居たと言うこの上ない証明だとも考えられる。

そういう風は大問題になつて大騒ぎしたのに、数年置きに同じような騒ぎを繰り返しているのだから、苦労様である。

イングリッドの知っている世界ではそうであるのに、ハルケギニアではキュルケのように同姓から見ても疑いようも無く拔群のプロポーションを持つ女性の、セクシャルな動作に注目が集まらない。この事実はイングリッドを緊張させる。この世界は学院でいくつか経験した内容、そこから想像される以上に、貴族と平民の立場、その差異が大きい可能性を示唆している。

学院内部での僅かな経験のみを頼つて、外部で平民に接してはまたしてもいらぬ騒ぎを起こしかねない。イングリッドはそう分析した。それが理解出来ただけでも、今回の外出は得るところが大きかった。やはり学院内部は閉塞空間に過ぎないのだ。文化レベルの推測を散々混乱させただけはあつた。

「さて、どつちに行こうかしら？」

キュルケが左右を見渡す。ルイズがそれに近寄つて、同じように首を回した。タバサが自身の杖を引き寄せて、ことさら場所を取らないようにと配慮を滲ませて2人に身を寄せる姿が愛らしい。

「装飾剣を見に行つても仕方が無いし、実用向けの武器屋つて、どこかにあつたかしら？」

ルイズが額を揉みながら、首を傾げる。キュルケも空を仰いで顔を顰める。ハルケギニアの貴族としての通常のあり方からすれば縁遠いどころではない店を探せと言うのだ。身を守ることすら魔法を使うのが常態というのであれば、確かに護身具としての武器に対する興味はありようがない。少なくとも回数トリスタリアに訪れている2人でも、確かに存在するが興味が無い店と言うのはそも、存在していないも同然だつた。記憶に無いのだろう。頭を捻り続ける。

腰に手をやってさり気無く周囲に気を配るイングリッドだったが、実のところ、それぐらいしかやる事が無い。市場のどこに何があるかなんていうのは予想する事すら出来ない。こういう「庶民の生活」に関する事柄に疎いと言う点ではイングリッドは、ルイズ達と大同小異と言ったところだった。

イングリッドと言う人間は、ある国のある都市で路地裏に望まず紛れ込んでしまったりすると、頭の中で絶対位置を推定出来ているのに、目的の場所に向かうのに、凄まじい勢いで明後日の方向に走り出す事があった。

自信満々の態度で選んだ道の先で袋小路に突き当たったり、全然違う場所に向かう道路に出てしまったりと、迷子になったも同然に右往左往する事を繰り返した。ある程度以上の生活能力がある人間なら、経験に照らし合わせて、このあたりならパン屋がある、このあたりならガソリンスタンドがあると、それなりに確度の高い推測が出来るものだが、イングリッドはそういう方面で勘を働かせるのが大の苦手だった。

自身の任された仕事上、ありとあらゆる地域に足を延ばして、広く浅い知識しか持たないから仕方が無いのだとは言いついて出来ない。とにかく永い人生を送っているのだから、ありとあらゆる場所ですれなりの以上の経験を自分でいる筈なのに、迷子に等しい遠回りをする。グランド・セントラルからタイムズ・スクエアに向かって歩いて行った筈が、川辺に突き当たって遠くにある自由の女神を眺めたりするのだから滅茶苦茶である。

自身にやたらと時間の余裕があるという自覚が悪い方向に顔を出した結果だった。ハルケギニアに出でた根本的理由となる、秋葉原をうろろうろしていた理由からして、神保町方面から東京駅を目指して迷子になっていたという事実があった。何故地下鉄を使わないかと言われてもイングリッドは困ってしまう。壁をぶち抜いて構わないと言われない限り、地下鉄とか地下街はイングリッドにとっての鬼門なのだ。

しかしイングリッド自身は、東京の神田周辺で迷子になっていた事

実を綺麗さっぱり忘れ去っていた。そも、あの時あの瞬間に、自身が迷子になっていたのだと言う自覚すらなかった。

あーでもない、こーでもない結論が出る筈も無い議論をする2人を見てタバサは溜息を吐いた。傍観するに任せるイングリッドを横目にタバサは、杖を揺らしながらキュルケの裾を引つ張る。「ん？」とばかりに見下ろしたキュルケの視線を受けて、タバサは左手で先を示す。

「あっち」

極端に惜しまれた、短い言葉を聞き止めて、全てを理解したキュルケは笑みを浮かべて頷く。顔を上げてルイズに向き直る。

「タバサが知ってたみたい」

一瞬、眼を尖らせたルイズは次の瞬間に、大袈裟に溜息を吐いて肩を落とす。先ほどまでのキュルケとのやり取りがなんだったのかと、顔面に隠せぬ徒労感を滲ませたが、タバサだから仕方がないとばかりに首を振った。タバサを先頭にして4人は歩き出す。パレス・デ・レ・アル東門から市場に足を踏み入れたときに感じられた喧騒からすれば、静まり返っているに等しい通りを、足音を響かせながら奥を目指す。

後ろから周囲を警戒しつつ歩くイングリッドは、小さな疑問を思いつてルイズに問いかけた。

「武器屋が庶民の出入りする市場にあるというのは、ハルケギニアでは普通の事なのかや？」

足を出しつつ、顔を斜めに傾げてこちらを見るルイズには、イングリッドが表情に浮かべる以上の疑問が張り付いていた。

「え？武器は普通に売ってるでしょ？」

キュルケも一瞬だけイングリッドの方を見て、すぐに前に視線を戻す。

「身を守るための武器や、徴兵された時のための武器、傭兵をやるための武器なんかも売ってるよ」

その言葉に、表面上は納得して感嘆の声を上げるイングリッドだっ

た。

「お、おーおーおー。そうかそうか。そういう需要があるのか。納得じゃ」

イングリッドは、口ではそう言いながら、内心では必ずしも納得していなかった。

身を守るための武器。つまり護身具。それは納得できる。

人を傷つける類の道具の携帯に極めてうるさい、とある極東の国でも、例えば打撃武器やスタンガン等は比較的簡単に手に入る事が出来る場所があった。実際に使用した場合の後についてくる諸問題はどうあれ、手に入れる事自体はそれほど困難だという事でもないのだ。金さえあれば存外どうともなる。

その国では、護身具で済ますには殺傷力がありすぎるベアリング・ライフルやクロス・ボウなんかは野放しに近かったりする。これは法律の隙間を掻い潜ったグレーゾーンだが、手に入れる段では、割合に何とかなるものだという一例である。時々やりすぎて、レーザーガンを販売して即座に回収騒ぎになったりするのは、ご愛嬌である。

地球で一番の超大国では、24時間営業のスーパーマーケットで、拳銃どころか多弾数装填ライフルなんかも普通に買った。セミオート・オンリーのアサルト・ライフルですら「普通」に買えるし、流石にややこしい書類申請やら何やらという段階を踏まないといけないとは言え、軍用の重機関銃や、ミンチ・メーカーたる重火器に類する、M134「ミニガン」7.62ミリ、ガトリングガンの所持すら、まったくの合法で許される場合がある。

ただし「買える」と言うだけで、携帯する段階では様々な規制がつく。全世界的に大いに誤解されている事だが「売っている」、「買える」、「そして「所持出来る」は、「街中でぶっ放せる」事につながる。実際に手にする事が出来る以上、トチ狂った者がいれば違法に使用される可能性が無いわけではないのは否定出来ないが、実際に使用されれば大事件になる程度には、かの国でも厳密な法規制があるし、それなりに高いモラルがある。

法的な面から言つて小さな国の寄り合い所帯であるその国では、地域によつて大いに差異があるのだが、たまさかに起きるライフルを使用した発砲事件が大騒ぎになるのは、逆に言えば、ライフルを使った犯罪が明るみに出れば大騒ぎする程に珍しいと言う事なのだ。実際に発生した事件件数で言えば、永世中立を標榜する国で1980年代に頻発したアサルトライフルを使用した事件と比較すると、何も起きていないに等しい程の平和さである。目糞が鼻糞を笑う類の比較だ

が。

そういう「平和」な国でも、溢れんばかりの銃火器が市中に出回っているのだから、護身用の武器を売る店がそこかしこにあること自体はイングリッドにとつても問題ない。しかし、徴兵されたときのための武器、傭兵をやるための武器とはなんぞや？というのがイングリッドの隠せぬ疑問である。さすがにそんな話は「現代地球」では想像の埒外だ。

無論、これは「平和な先進国に於いて」という但し書きがつく話ではある。

紛争地域では、安全な水を手に入れるよりも軍用アサルトライフルや、ロケットランチャーのほうが簡単に手に入る場合があった。いくら人外の力を持つイングリッドであっても、そういったものが一般人の間に出回っている地域と言うのは「頭痛が痛い」所の話ではなかった。非常に大きな問題である。

岩を砕く拳を受けて、後ろに吹き飛ばされて「アイテテー」で済んでしまうイングリッドでも、当たり所によつては身体の一部をもぎ取るような威力を持った鉛玉や対戦車ロケット弾を、四方八方から浴びせかけられては酷く難儀する。困った事に、そういった極端に危険な地域でイングリッドのような者が必要とされる場合が増えつつあるのは厳しい現実だった。歴史的に世界を俯瞰すると「世界は平和になった」と断言しても問題ない程に争いは減っているのに、極僅かな平和でない地域では、歴史上、類例を見つけれない程に危険度が、極度に跳ね上がっているのが地球の悲しき現況だった。

そういった例外があるにせよ、ハルケギニアは……少なくともトリ

ステインは、疑いようも無く「平和な先進国」である。勿論、イングリッドがトリステインの全体を見通したわけでは無いのだが、イングリッドにとつてはそれは確信に近い予想である。そうでなければ、ハルケギニア全土からやんごとなき身分の子弟が押し寄せる魔法学院と言う施設は危なくて運営できようも無い。どこかの要塞かというごときの堅牢さを誇る姿を見せていた魔法学院だが、初日に眺めたところ、ルーチンワークを適当に済ませて終わりという程度で緊張感の無い警備兵が欠伸をしていたのだから、間違いないだろう。

そういった判断が本当に正しかったのか？それを確かめる意味でも、武器屋への訪問は楽しみなイングリッドだった。

イングリッドにとって、そういった事柄は政治的、社会的背景の判断材料としての側面があつたが、それ以外に、科学技術の進展具合を見る材料として、武器屋への訪問が「楽しみ」でもあつた。

言うまでも無く、武器、兵器というのはその歴史の節々での最先端科学技術の結晶である場合が多い。とある、今は失われた国では、他の全てを犠牲にして兵器の技術開発に狂奔した例すらある。青銅にしろ鉄にしろ、まずもって武器としての利用を目的として技術は進展した。大規模建造物も宗教目的を例外として、大抵は軍事目的を第一として技術が進展している。土木技術も測量技術もそうだし、縫製技術も間違いなくそうだった。漁業技術が進展する上でも軍事技術は密接どころではなく深く関わっていたし、飛行機等は戦争が無ければ未だにプロペラ機で済んでいただろう。医療技術を爆発的に進展させる時期は大規模戦争の前後であるのは歴史が示すとおりであるし、一件関係なさそうな耕作技術ですら軍事技術の一端を担っている場合がある。

市中の武器屋ごときでどれほどの情報が得られるのかと言う問題はあるが、ある一定の指標にはなろうと言うのがイングリッドの期待であるし、恐れでもあつた。

「イングリッド」

周辺を警戒しつつ、益体も無い思考の底に潜っていたイングリッド

は、有意な意識の埒外でタバサの言葉を聴いて意識を覚醒させる。タバサが指差した店は、どこかのファツションショップのように、立派なショーウィンドーが展開されていた。店構えもこじやれている。しかし、ディスプレイされているのは、剣や小刀、拳銃であった。拳銃。

それを認めたイングリッドは、俄かに冷や汗をかいた。

眉を痙攣させるイングリッドを置いて、ルイズを先頭に3人はドアを押し開けてさっさと店内に入ってしまう。イングリッドも一つ頷いて拳を握り、緊張した面持ちを見せつつ、店に入った。

「レイピア、マンゴシユ、フルーレにエペ、ショートソードか」

一直線にカウンターに向かって行き、即座に店員と話し始めたキュルケを置いて、壁を飾る刀剣を眺めるイングリッドの言葉にルイズとタバサが驚いた。特にタバサが微かな緊張を顔に表している。と言つても、イングリッドだから気がつける程度の本当に些細な機微であり、一見すれば表情に乏しい鉄面皮で済ませられる顔だった。こういった武器に興味がなさそうなルイズは、イングリッドに武器を与えてみるという本論を忘れたかのように、つまらない表情を隠さずにタバサの後ろを付いて歩いている。

「随分詳しいのね、イングリッド」

足早に歩くタバサとルイズは、イングリッドから随分と離れた位置に移動していた。ガラスで区切られた棚の中に、宝石で彩られた短剣が陳列されている。タバサもルイズも、ちらちらと短剣とイングリッドの間で視線を揺らせている。

タバサが、何かを誤魔化すために短剣に目を向けている事はイングリッドの目には明白だった。タバサの興味は、本質的にイングリッドの動きそのものだった。タバサにとって、飾る以外に何の役にもたない短剣等、どうでもよかった。ただ、ルイズのほうは、煌びやかな短剣に気が逸れていた。イングリッドも気になるが美しい芸術品としての役割が大きい短剣が気になってしょうがなかった。棚の隙間

から見えるルイズの有様に気がついたイングリッドは苦笑いを浮かべながら半瞬、足をとめて周囲を見渡す。壁以外にも、陳列棚にずらりと並べられた武器に視線を移す。様々な種類の剣が、所狭しと並んでいるのを認めた。イングリッドがたまたま足をとめた場所は、大きな刀剣が置かれている場所だった。「武器」を陳列していると言うより、釣り道具を陳列しているかのごとき無造作な姿だった。

「んむ。まあ、こういうのとも無縁ではいられん生活じゃったからの」ルイズの問いに答えつつイングリッドは、棚に斜めに立てかけられたロングソードを何気なく手にする。思ったよりも重いそれは、見事な装飾が施されていたが実際に持つて見ると、予想外に実用的なつくりであることがイングリッドには理解出来た。

その事実イングリッドは眉を跳ね上げて一瞬身体を強張らせる。片手で危なげなく剣を振り上げて剣先を、頭上3メートルにある天井に向け、軽い仕草で振り下ろすと、それは鋭い風切り音を発した。磨き上げられた木製の床に突き刺さる直前で寸止めすると一瞬、撓んだ剣が不愉快な異音を発した。

店内の視線が、ただ剣を振るう。それだけの行為では起こり得ない、時ならぬ金属の悲鳴に引き寄せられる。音の発生原因を正確に察したタバサは、棚の隙間から視線をイングリッドに向け続けていた。その表情を緊張で強張らせる。

自身に発生した異常事態に口を歪めたイングリッドは、ロングソードを元の位置に戻し、ゆっくりと手を離す。右手を顔面まで持ち上げて首を傾げ、ひらひらと揺らす。左手を腰に当てて身体を傾げて、右手を顎に移して扱く。

再度首を傾げたイングリッドは視線を移ろわせて、別の剣を手にとった。刀身の根元に刃が無い部分があるグレートソード、一般的にはツヴァイハンターと呼ばれるそれを右手のみで持ち上げると、捻る軌跡を宙に描きながら斜めに振り上げた腕の先で、手首の動きのみで腹を水平に倒した。そうして170 سانتほどの高さがある棚の上の空間を切り裂きながら滑らかにすべらせて、腕を引きながら大きく振り回す。

その間もイングリッドの足は微動だにしない。身体が揺らぐ事もない。動いているのは腰から上だけで、それも、剣を振る為の動作であり、決して剣に振り回されているのでは無かった。見るものが見れば、イングリッドは確かに自身の意思で巨大な剣を自在に操っている事が理解出来た。

轟音。

その音を聞きとがめてショーケースから視線を引き剥がし顔を上げたルイズは、イングリッドが持つ馬鹿デカイ剣を認めて、顎が落ちるかという程に口を開けた。ルイズは必死で視線を剣先に追随させるが、間に合わずに首が不規則に震える。

イングリッドの一挙手一投足を見逃すまいとしていたタバサは、唸り音を立てて自在に宙を舞う巨大な剣の動きを見て、杖を取り落としそうになった。

キュルケはカウンターの前で腰を捻って、音の発生源に気がついた段階で固まっている。

キュルケに対応していた歳のいった店員は、顔面に刻まれた皺に汗を滲ませて、両手をカウンターの上についた状態で立ち尽くしていた。

店のそこかしこに居た店員は、男女の区別無く、その今際の瞬間の態勢のままイングリッドを見つめている。呆ける暇も無く、その数瞬に浮かべた表情のまま、イングリッドの腕の動きを眺めていた。

自身の新しい獲物を見定めていたと思しき、がっちりとした体格の中年男性は、手にしていた商品を今にも取り落としそうになっていた。

緩急自在な動きから一転、緩やかな動作で空気を撫で、軌跡を描いて空中に複雑な文様を描くツヴァイハンターを振るいながらイングリッドは、棚の上から頭を突き出して口をあけて自身を見つめる中年男性に視線を向けた。

「ほれ、呆けておると剣を落とすぞ」

その言葉に正気を取り戻して、腕から滑り落ちそうになっていたバスター・ソードをあわあわと抑えようとした男は、うっかり刀身を手

のひらで握りこんで悲鳴をあげた。時ならぬ異様な緊張感に包まれた店内はその声で時間が戻ったかのように動き出す。しかし、おかしな空気が店内を包み込んでいる事に変わりは無かった。

杖を強く握るタバサは、遂に表情を崩して大きな動揺に身を包んでいた。足が震えているかのような錯覚すら覚える。

タバサにはイングリッドが異様どころではない事を仕出かしている事実を理解して、瞳を震わせていた。口を閉じる事すら出来なかった。

タバサが見たところ、イングリッドが軽々と振り回すそのグレート・ソードが彼女の身長の数倍ほどもあるのが理解出来た。斜めに棚に立てかけられていたからイングリッドはそれを手にする事が出来た程の巨大さである。極僅かな可能性として、それがディスプレイ用のイミテーションであり、木の棒程度に軽い可能性も想像したが、振られるたびに発せられる「剣圧」はその想像を吹き飛ばした。間違はなく「本物」である。

ツヴァイハンターとは、イングリッドが今やっているように、片手で振り回すような武器ではない。決して手首で操る類の武器でもない。少なくともタバサの知る常識の中ではそうだった。

しかしイングリッドはそれを成している。ありえない光景だった。どんなに頑強な男であっても、ツヴァイハンターは両手で持つ武器である。利き手で長い柄を握りこみ、ツノで刀身と区切られたリカッソを反対の手で握りこんで力を込めてようやく、どうにか持ち上げる事が出来る剣である。途轍もなく重たい、刃の部分が大きい「槍」。それが剣の形をしていると言ってしまうても良い。それぐらいに特殊な武器なのだ。

穂先を揺らすぐらいの動きであつてすら、全身の筋力を使わないといけない。断じて手首で操る類の武器ではない。そんな馬鹿な真似をすれば手首を挫く。イングリッドがやって見せているような、複雑な軌道を空中に描く類の武器でもない。あのような動きは、エペやレイピアで見せるべきなのだ。

ツヴァイハンターに限らず、基本的に両手持ちの大剣は、全身の筋力を使って振り上げて、力任せに振り下ろすのが通常である。極めて使い勝手が悪い武器だ。攻撃目的で許される動作は、一つに限られているといっても過言ではない。剣先を上下に振るだけだ。

スなイぎピン私グブ攻ロウ撃というモーションもあるが、ツヴァイハンターでやるべき攻撃ではない。剣の重さが無駄になってしまふ。槍や斧のように、武器単体としての重量が先端部に集中している類のモノと比べた場合、遠心力を発生させるための柄に過ぎない部分も含めて、ツヴァイハンターの場合には重量が分散している欠点がある。その手のポールウエポンと異なる利点として「柄」の部分にも攻撃力があるのがグレート・ソードの特徴だが、打撃を発揮する重量自体が武器全体に分散しているがために、上下方向の移動動作を主体として重力を利用しなければ、動きが鈍る上に打撃力も弱まる弱点があるのだ。ツヴァイハンターのように重くて大きい武器には、別種の問題もある。

タバサのように大いに経験を持っている者や、専門の教育を受けた者でもない限り勘違いされがちな事だが、人間の身体というのはモノを持ち上げる動作が得意で、モノを振り下ろしたり、モノを取り下ろす動作が苦手である。同じ重さのものを同じ速度で上下させると、下ろす動作で激しく疲労する。その点で言えば、筋力の限界まで振り絞って振り上げた後に、軌道を安定させる以外の力を抜いて、剣そのものの重さで相手に斬撃を与える事が出来るグレート・ソードというのは、肉体疲労面から見ても利に適っている。打撃力を武器の重さのみに頼る事が出来るので、剣を持ち上げる事が出来る限りに於いてはどれほど疲労していても、理論上、最低限の攻撃力を維持出来るのだ。最も、重量を重視した打撃武器となれば、バトルアックスやバトルハンマーという更に効率のよい武器があるので、ツヴァイハンターを効果的に使用するのであれば、力いっぱい素早く振り上げて、力いっぱい振り下ろすのが常道である。

ただし、斬撃モーションに入ると一切の融通が利かないので、攻撃を行う際には極めて慎重になる必要がある。キャンセルは効かない。

攻撃を外しても、地面に刃先をぶつけるまで止まらない。普通の人間が振るう分には、であるが。見た目の華やかさからは程遠い、細やかな配慮が必要な武器なのだ。攻撃に於いては一撃必殺の破壊力を持つが、一撃無為な隙を見せる。いろいろな意味で危険な武器である。

イングリッドはそれを振り回している。

一流のレイピア使いかという華麗な剣さばき。無造作に見える仕草の中に、繊細精緻な軌道を持つて剣先が揺れる、美しいモーションだった。イングリッドが手にした武器が、真実レイピアであったのなら、タバサが驚愕する心情は感嘆で埋め尽くされていただろう。

タバサの眼前で展開される事実は、そうではなかった。そうであったからタバサは驚愕する以外の反応を身に表す事ができなかった。

イングリッドが剣を引き寄せながら、手首を捻り、自身の身に向けて振り戻す。その勢いは外から見て、とても止められるものではなかった。ルイズは剣先で頭を割られるイングリッドを幻視して、顔を引き攣らして悲鳴を上げそうになった。悲鳴が間に合わないほどの勢いでイングリッドの顔を目指す刃。眼をそらす暇さえなかった。辛うじて眼を瞑る時間が許されただけだった。

軽い音と共に、何かにささげられるような態勢で垂直の刃を見つめるイングリッド。最後の瞬間に彼女は、リカツソに軽く左手を添えることで剣の勢いを止めてしまった。それを見届けたのはタバサだけだった。他の人間は術からず眼を背けてしまっていた。

男が一人、涙目で血が滲む手のひらにタオルを当てていたが。

イングリッドは冷めた表情でツヴァイハンターを元の位置に戻した。何が起きていたか理解出来ないとはかりに、滑稽なほど混乱した表情が飛び交う店内で肩を竦めたイングリッドは、集中する視線を振り切つて柵の間を縫って歩く。様々な種類の武器を眺めながら、ルイズの元に近づく。

ルイズの顔に視線を向けて、ふと首を傾げたイングリッドは、通り過ぎた柵の間に視線をやってから振り返り、ルイズの横で強い視線をイングリッドに向けているタバサに視線を移した。身体を捻つて右

手親指で背後を指し示す。

「すまぬが、あの男の治療を任されてくれないかタバサよ。あれの原因は8割程は我であるからの」

止まらない血を真つ赤に染まったタオルと手のひらの隙間から滴らせる男は、イングリッドの言葉に驚いて視線を上げる。タバサは男とイングリッドの間でしばし視線を彷徨わせると、一つ頷き、身体を男のほうに向けた。

それを見送ってイングリッドはルイズの肩を叩く。それで意識を覚醒させたルイズは、跳ねるようにしてイングリッドに詰め寄った。

「何アレ！何をしたのイングリッド!!説明しなさい!!」

しかしその言葉に、難しい表情を崩さずにルイズを見つめるイングリッド。その強い視線に射すくめられて、ルイズは身を震わせてしまった。ルイズにそのような反応を強いてしまった事に気がついたイングリッドは微かに苦笑いを浮かべると、表情を崩して改めてルイズの両肩を叩いた。

「後で、皆と共に説明する。今は留めてくりやれ」

明らかに周囲を憚るイングリッドの小声に、ルイズは納得しないまでも頷いた。疑問を隠さずに表情に浮かべたまま、腰を落として男の手のひらを見るタバサを見、イングリッドに視線を戻す。

「後で、必ずよ！納得のいく説明が欲しいわ」

「うむ」

先ほどまでとは打って変わって、やたらと顔を輝かせながらイングリッドについてまわるルイズは、ここ3日間の騒ぎでどことなく落ち窪んでしまった瞳を見開いてた。それなりにルイズとの仲が長いキュルケが見た事がないほどに瞳が輝いていた。好奇心いっぱい、くりくりとした鳶色の瞳をイングリッドの手先の動きに合わせて忙しなく彷徨わせている姿は新鮮だった。

いや、違う。

キュルケは否定した。

その瞳はキュルケの記憶にあった。

入学式の後。押し込められた教室で3年間を共にする生徒達の自己紹介の場で、何かを吹っ切るかのように希望に満ち満ちた雰囲気と共にあった瞳だ。それを蘇らせたに過ぎない。

時を経るにつれてその瞳は、澱み、穢れ、失われていった。召喚の儀の時も、その後も、招来された事態の特異性に流されて、ルイズの瞳に輝きが戻る事はなかった。

契約を経てルイズの顔が、その前1年間とは違って、随分と見れるものになっていったと思っていたが、今の今までどこも無く疑念が付きまどつていたような気がした。何をするにしても、イングリッドを伺うような雰囲気が出ていたのだ。キュルケは今ならそうだったのだと言える。1年間で鬱積した後ろ暗い感情は、一週間に満たない時間では払拭される事がなかったのだ。

それが吹き払われた。

余りにもあり得なさすぎる光景。巨大な剣を振り回す少女などというのは、キュルケが眼を通した事がある物語の中でも想像された事はない。その衝撃が、ルイズに蟠っていた僅かな澱みを吹き飛ばしてしまったのだ。想像する事のできない行為の結果、想定外の結果がもたらされた。そんなことを見込んでイングリッドがツヴァイハンターを振り回したわけではない事は判っているが、もたらされた結末は素晴らしいものだったと言えるだろう。

それを思つてキュルケは、僅かばかりの後悔と嫉妬を覚える。

キュルケは、自身の身の近くで煤けて行ったルイズの変化に気がつかなかつた。日々、霞んでゆくルイズの表情を思うことが出来なかつた。常人にそれを成せというのは酷な事なのだが、キュルケが思い出すところ、入学式のあの時、気圧されるほどの輝きを見せた、キュルケが憧れてしまったあの表情と、召喚の儀の場で見せた、追い詰められた鬼気迫る表情とを比べれば、途中で何か出来た筈ではないかと、今更どうしようもない仮定を思ってしまうのだ。

僅かに3日。実際の時間を言えばそれ以下しか側にいないイングリッドが、1年間で形作られた絶望を、ルイズにまわり付き聞か、あつさり粉砕した。その事実には思い至つてキュルケは、ルイズと、

それに寄り添うイングリッドの姿を初めて眼にしたあの朝に、イングリッドに対して一瞬感じた違和感の正体をようやくに理解した。

カウンターの側でイングリッドとルイズを見つめながら、キュルケは小さく自嘲する。ようやくの事で理解に及んだ自身の感情を弄ぶ。

つまりは恋。キュルケはルイズのあの表情、あの気配に恋焦がれていた。自分が決して持ち得なかったあの表情にあこがれた。あの姿が好きと嘯いていたが、それどころではない感情が渦巻いていたのだと理解した。それは初恋だった。それが砕けた。それが手に戻る事は永久に無いのだと理解した。そういう感情をこういう場所で理解する、理解させる事になるイングリッドのあり方は大概だとキュルケは苦笑いするばかりだが、そういう破天荒な部分も含めてキュルケはイングリッドに敵わないのだと了解した。キュルケは失恋したのだ。キュルケが不幸だったのは、ルイズが実家でたぎらせていた暗い感情とその結果を知らなかった事だ。

ルイズが入学式で見せた輝きは、ルイズの家族ですら見た事の無いイレギュラーだった。自身の無能に対する絶望に押しつぶされて、心を折る寸前だったルイズは、世に響くトリスティン魔法学院に絶大な希望を寄せて、あの時あの瞬間に、ありえないほどの陽気を発散していた。出自からして、決して逃れる事の出来ない闇を抱えたキュルケが浴びるには、それは眩し過ぎた。ある意味で幸運だったと言い換えても良いかも知れない。偶然だった。たまたまそれを見てしまっただけに過ぎないのだ。キュルケが一目惚れするのも無理のない事だったのだ。

ルイズにとっても、実はこの上ない幸運だった。酷く歪んでいるとは言え、キュルケの愛情を散々にぶつけられた、ぶつけられ続けた1年だった。ルイズはその心に気高い誇りを抱いていたが、それは魔法を持たないが故だった。それしか頼るものが無かったのだ。それのみに頼っては、ルイズは1年を乗り越えられなかった可能性が高い。最後の希望と続いた召喚の儀で、心を保って望む事が出来なかったかも知れない。ルイズが最後の悪あがきの場として召喚の儀を選んだのではなく、最後の希望の場として望めたのは、キュルケの感情の発

露に影響され続けた結果だった。その結末にイングリッドが現れたのは、キュルケに対する不幸だったのは間違いないし、幸運であったかもしれない。

今となつてはありえない想像でしかないが、ルイズが召喚の儀の場で、完全な失敗を得てしまっていたら。

ルイズが壊れてしまった上に、キュルケも壊れてしまったかもしれない。キュルケには想像もつかない理由で、それに付随して、ぎりぎりで心を保っているタバサも壊れてしまったかもしれない。そして、ついでのように、一人の教師の心も砕けてしまった可能性がある。それを見てもう一人の老人が心を折り、それに対して様々な心配りを要求していた人々の心すら砕けていたかもしれない。

誰も理解の及ぶ事ではない場所で、様々な意味でぎりぎりだった召喚の儀から得た結果で、その瞬間に受けた影響を、最後に租借したのがこの場のキュルケだった。この瞬間に、本当の意味で召喚の儀が終わった。キュルケがそれを理解し自覚するのは、もう少し未来の事になる。

そんな重大な結果が、ほんの少しはなれた場所で発生しているなど露と知らないイングリッドは、眼に入った一振りの剣を見て、眉を跳ね上げた。その僅かの仕草を見逃さなかったルイズは、イングリッドの腹をつついた。

「ね、ね。イングリッド、なにこの剣。随分と変な形してるけど」

ルイズに視線をやつて頷くと、イングリッドは身体を回して右手を挙げ、立てかけるための柵の上に手を伸ばして柵からそれを引き抜いた。かなり危険な形状をしている剣だったので、手にするには面倒な状態でおかれていたのだ。ルイズに危険が及ばないところでゆつくりとそれを振り上げて、その波うった刀身を、窓から差し込む光に透かした。

「フランクベルジェじゃな」

頭の中に流れ込む、不躰な情報の波に頭痛を覚えてイングリッドは顔を顰めた。ゆつくりと刃先を返して、柄から剣先までを観察する。

フランベルジエとは火繩銃^{マスケット}が軍隊に大々的に配備されて一時期、僅かに花開いた仇花だった。イングリッドの承知する地球の歴史ではそうである。

一部の部隊だけでなく、一つの兵科として、隅々までマスケットを持った部隊が軍に行き渡った際に明らかになった問題として、銃を持った軽装歩兵が乱戦に巻き込まれて近接戦闘を行う際に、従来の刀剣では使い勝手が悪過ぎた事を解消するために考案されたのがフランベルジエである。

マスケットが開発量産され始めた時期というのは、重装歩兵や、フルプレートメイル全盛期に重なっていたため、剣にしろ槍にしろ、やたらと重くて頑丈頑強巨大な代物になっていた。サブウエポンは、これらの重厚長大を極めたメイソウエポンに対してやたらとシヨボいナイフや、エペ、シヨートソードばかりになって、近接戦闘における適正戦闘距離が小さくなりすぎていた。サブウエポンに要求された攻撃力が、倒れた重装歩兵や騎士の鎧の隙間を刺突可能である事が要求されたから当然だった。あまり長くて細い剣だと、鎧の隙間に捻じ込んで致命傷を与える前に折れたりしかねない。体重をかけて敵の身体に剣を押し込む上でも、サブウエポンは小さくて短いほうが都合がよかったのだ。バスターソード等の両手剣とシヨートソード等の近接戦闘剣の間を埋める武器が失われていたのだ。

プレートメイルを着込んだ騎士や、巨大なシールドを担いでチェインメイルやラメラーマーで身を固める重装歩兵に比べると、銃兵の服装は裸も同然だった。比較的軽量なチェインメイルであつてすら動作を阻害し、射撃速度に影響する事がわかったため、銃兵の服装は簡単簡便になり続けた。マスケットの威力を十全に発揮するには発射速度を上げて弾幕を貼る事が肝要と理解されると、いつからか防御力より素早い動作が重視され過ぎて、その当時の庶民の平均的服装よりも簡易な服装が奨励される程にまでなった。それに向かつてバスターソードやツヴァイハンターを向けるのは、いかにも効率が悪い。かといってナイフや、ナイフに毛が生えた程度まで退化したシヨートソードでは、敵を切り倒しても、勝者の側でも重軽傷を受け

る事が多かった。戦闘がショートレンジ過ぎて、危険だったのだ。

戦闘レンジをマスキットの得意な距離で保つ事も難しかった。援護の騎兵や弓兵を除外して考えた場合でも、有効射程100メートル以下で、100発撃ち放って1発あたればいいかな程度の命中精度で、しかも再装填から発砲までに数十秒の時間がかかる上に不発の可能性も高いマスキットでは、数千人規模の会戦では、互いに3度撃ち放てば後は突撃乱戦だった。

黎明期のマスキットであっても、よく訓練された兵が、慎重に狙えばかなりの命中率を期待出来る。戦例では数百メートルで狙撃された実例は多く報告されている。しかしそれは暗殺とか不意打ち事例であつて、戦場におけるものではない。混乱し、慌てる兵が戦場で術からず慎重に狙撃するような事は現実的な話ではない。通常は司令官が命じた方向に当てずっぽうに近い形で一齐射撃するのが常道なのだ。戦場から数キロはなれた村に、勢いを無くした銃弾が雨露と降りそそいだなんていう話もザラにあるから、当時の戦闘実態が偲ばれる。

片方だけがマスキットを装備していた場合を想定しても、相対する相手は逃げるか、それが許されない状態なら、覚悟を決めて思い切つて突つ込む以外に手が無い。損害等は気にしていられない。よつて、銃兵側が3度発砲する間に敵を全滅させられなければ乱戦必至。

相対した双方がマスキットを装備している場合、お互いに自身が持つ武器の威力を知り尽くしているがために、奇襲をかまして撃ち逃げするか河川などの地形的障害がなければ、相手が撃つ前に肉薄して突つ込むしかない。乱戦必定。

通常の銃兵部隊と言うのは、必ず、多数ある部隊の一兵科でしかなく、しかも独立戦闘能力が無いとみなされていたから戦闘の実態はここまで簡単にはならない。とはいえ、戦場で銃兵同士がぶつかると、極小戦術レベルで発生する結果は、互いに殴りこむという状況だった。

後知恵を働かせれば、戦術的思考の変更で幾らでもやりようはあつたと思われるし、実際に戦術レベルの工夫でうまくやった国もあつた

のだが、あくまでも歴史上の話である。後付の理屈を捏ねたところで空想に過ぎない。その時代における最善手は、その場所その国で出来る限りの手立てが打たれていたのだし、当然のことながらそれに対抗して出来る限りの対応がなされていたのだ。

そういう状況に直面して考案されたのがフランベルジュである。旧来の刀剣製作工房で、たいした新技術を導入することなく、従来の技能で生産できる新しい概念の刀剣である。また、これを扱う側にもたいした訓練を施す必要がないという面でも都合がいい形状が模索された結果が、うねうねとした刀身をもった軽量バスターソードとして形を成したのである。

柄を握って殴りつけるように剣を振るえばとりあえず切れる。刃先が波うつているため、どういう方向から切りつけても、刃があたり、刀身に前進する力が加わり続ける限りはどこかの刃が相手に「立って」切り傷を負わす事ができる。日本刀やサーベルのように刃を研ぐ必要も無い。それなりに刃が立っていれば、勢いで切り裂く事ができる。刀身が波打っているだけでなく、捻りも加わっているため、ある程度刀身が寝ている関係なく殺傷力を維持できる。そも刀身に向きがあるかどうかも怪しい剣である。そういうある意味で乱暴な、それまで歴史の中で磨かれてきた剣技の全てを否定するような武器だった。

ただし、すぐに廃れた。

幾ら軽く持ち運びに便利なようにしたのだとは言っても、バスターソードである事に変わりが無かった。やたらと巨大な剣がはやった後に出でた武器なので、相対的に見て、小さく取り扱いが楽であったというだけで、サブ・ウエポンとして扱うにはやはり邪魔だった。マセットは技術開発の進展であつたという間に大きく重くなったし、生産量が増えるにしたがつて一丁当たりの価格が下がったから、フランベルジュのように面倒くさい武器に割く予算がモツタイナイと言う話になった。有効射程距離は相変わらず100メートルほどでも、弾薬側で素早く装填する工夫がなされて、発砲速度が増大したのも大きい。命中を喫した有効射程距離が100メートルであっても、擾乱を

目的とした弾幕射撃も含めると300メートル程の距離から撃ちまくる様な戦術が多用されるようになる、サブウェポンがバスターソードのような中途半端な戦闘レンジの武器を携帯する理由が無くなった。突撃されてもぎりぎりまで射撃を継続するのが常道の戦術になると、背負ったフランベルジェを取り出す暇が無くなった。

大きく重いマスキットを担いでなおかつ、鞘に収めることの出来ないフランベルジェを携帯するのは、邪魔である以上に危険だった。どの方向から触っても、触れただけで怪我をする剣が抜き身で背中に背負われている。廃れて当然だった。以後、フランベルジェは変てこな刀身を持つ事を逆手にとって装飾剣として僅かに生き残る事になる。一時期、貴族同士の決闘で使われる剣と叫びたら大抵は美しく装飾された、複雑怪奇な刀身を持ったフランベルジェとなる。

それも短筒が広まると廃れてしまった。フランベルジェは形状が特殊であるが故に壁に飾っても収まりが悪く、また、スポーツ的に使うにはあまりにも実戦的過ぎた。刀身がうねっている事で、製作時に十分な強度を持たず事が難しいのも災いした。品質が悪かったのだ。刀身をさらした状態で飾ると、簡単に錆びてしまったのだ。

そうして後世に殆ど残らなかつた。本当に仇花だったのだ。

フランベルジェの存在を脅かした新発想の新しい武器が登場したのも影響した。銃剣である。当初はスパイク状の剣とは呼べない代物だったが、それをつければ剣以上に訓練が簡単な、刺突攻撃可能な槍が手に入るのだ。かくしてマスキットは歴史上、随分久しぶりに顔を見せた実用的コンポジットウェポンとなる。

訓練上の要求から言っても、安全性から見ても、資源的な面でも、何より、兵の荷物が減って、身軽になる点からしても、フランベルジェが戦場に生き残る事は出来なかつた。戦争におけるフランベルジェの存在は技術発展による影響ではなく、新規発想によって抹殺されたのだ。

「斬撃ではなく、切りつける事を目的とした、バトル・ソードじゃ。メイン・ウェポンではなく、軽装中距離戦闘歩兵が乱戦に巻き込まれた

ときに扱う、サブ・ウエポンじやの」

マスケットを扱う戦列歩兵という言葉が通じるかどうか疑問を持ったイングリッドは、迂遠な表現でそれを表現した。拳銃を眼にしたが、この世界の戦争の実態がそれだけで詳らかに^{しまひ}なつたわけではない。それを思つての事だった。

しかしその配慮も、ルイズの言葉であっさり覆されてしまった。

「へー、^{戦列歩兵}マスケーター^兵ってこんなのを帯剣してるんだ。知らなかった」
「ぬ」

予想外に素早い反応に、うっかり変な声を出してしまったイングリッドである。その言葉に訝しげな視線を向けてきたルイズに、イングリッドは誤魔化すように声を上げた。

「あー、トリステイン軍の歩兵がこれをもっているとは限らないではないかの？」

ハルケギニアで戦列歩兵が過去の歴史になっている可能性を考えて、イングリッドはどうとでもとれる曖昧な表現を選んだ。この言葉に返される反応である程度、ハルケギニアでの軍事技術を図ることが出来るのではないかと言う期待があった。

はたしてルイズは、自分の国の軍隊に対する理解をイングリッドに返した。

「トリステインの戦列歩兵はハルケギニア全土を見渡しても、精強で知られているからね。この剣がマスケーターのためにある武器だというなら、きつと、動員された兵士が個人で設えるために用意されているのではないかしら」

ルイズは、柵に並べられた様々な意匠のフランベルジェを見渡してイングリッドに頷く。その言葉にイングリッドは納得を得て、別の面で疑問を思つた。ルイズの顔を見つめたまま、首を傾げる。

「ん？兵の武装は、国が支給するのではないのかや？」

ルイズはその言葉に、眼を瞑って手を仰いだ。

「見得、よ」

「？」

口元に手をあて、首を傾げて眼を細め、微かな笑いを浮かべながら

キュルケがルイズの後ろに回りこむ。微かに漏れる笑い声に同期して、キュルケの肩が微妙に揺れる。

左手を腰にやって身体を傾げるルイズの肩をキュルケは軽く叩いた。肩を竦めたルイズが半眼でキュルケに振り向く。

「トリステインは……トリステイン国民はさ、従軍するときには許される範囲内で、おしやれに気を使うのよ」

その後にはタバサも加わって説明される話によると、トリステイン王国軍は、服装に対する決まりが緩やかであるとの事だった。地球的常識からすると、文明レベルを進化させた状況でそういった状態が許される事は殆どなかったから(例外はあるが)、身体を傾いで左足に体重をかけたイングリッドは口を半開きにして、アングルを右手でさすりつつ、ただ説明を聞いて頭の中でアレコレ考える事しか出来なかった。

トリステインでは、基本の服装、特に帽子に関しては絶対の規則がある。兵科の区別や尉官にはそれ以外は許されないという帽子の規定があり、頭の上を見ればその人間の戦場での役割が理解できるのがトリステイン軍である。頭を守る兜ヘルメットの使用も認められていない。

しかし、それ以外は割合に適當だった。

例えば戦列歩兵のマスケットに関しては王国支給の銃以外の携帯は(あたりまえだが)認められていないが、サブウエポン等は、支給される以外の武器を持ち込んだり、服装につけるアクセサリー等も割合に何でも許されてしまう場合が多い。

その辺りを決定するのは隊長の鼻先三寸というところだが、軍団長レベルで緩やかだと、隷下の部隊はやりたい放題という場合が多いのだ。

トリステイン王国軍では中隊、小隊レベルで隊長が裕福である場合で、更に駄目な方向(ゼークト的な意味では無く個人の嗜好面で)に仕事熱心な場合等は、上部組織の許可を得た上で、自弁で部隊の服装を設える場合もある。

流石に装備面での自由は少ないが、サブウエポンに関しては、例え

ばフランベルジェを装備すべしとなっていていれば、兵士一個人が市中で好きなデザインのものを買い込んで持ち込むのも是とされている。寧ろ、そうであることのほうが「粹」とされているのだ。

また、そういう目立つ装備が個人的趣味で設えられた場合、顔も分らないほど損傷した戦死者の個人を特定する材料になる。アクセサリー等に関しては特徴的なものを持つ事が寧ろ、推奨されている場合すらある。

戦場で、敵に対して目立つアクセサリーや、装飾を飾って煌びやかに光を反射させたりすれば部隊全体がいらぬ危険に晒される場合もあるが、その辺りの感覚に緩いのがトリステイン風だった。他の隊員達から許された、場合によっては賞賛された装備が原因で部隊が危機に陥っても、仲間が死んでも「しようがないね」で済ませてしまう。おらかな話である。「文化がちがう！」どころではない。人間性からして違いすぎる。

イングリッドは頭痛を感じた。なんとも牧歌的な戦争風景である。なるほど。「徴兵された時のための武器」が売っている訳である。

貴族軍に関しては話がややこしい。貴族の趣味に任せて適当な姿を許せば、戦場で合流して敵と見間違う等と言う事になりかねない。よって王国直轄軍よりも余程に厳しい服装規定がある。ある筈なのだ……レオ・アフリカヌス出兵で貴族軍が当初の主力を勤めた事が話を混乱させた。兵は貴族軍から抽出されていたのに、司令官は王国軍の正規士官という場合が多かったのだ。

彼らが隷下に納めた貴族軍は規模も能力もまちまちであったが、だからと言って勝手にシャッフルして再編成という訳には行かなかった。彼らは貴族の私的財産である。混ぜこぜにするのは許されなかった。しかし実戦で指揮を取る際に、同じような外見の部隊を見分ける、区分する事は困難だった。その為に、レオ・アフリカヌス出兵部隊は司令官の自弁と独断で、服装を設える事になる。レオ・アフリカヌスの現地の気象条件がハルケギニアと大きく異なっているのも影響した。

貴族軍に強く要請されていた服装規定。それを言ったのは王国で

ある。しかしレオ・アフリカヌスの地でそれを破ったのは王国の士官である。後は、どうにでもなれとなった。

傭兵に関しての事情は、イングリッドの想像出来る範囲を超えていた。

ルイズやキュルケの言う傭兵は2種類の意味が混在していた。その為に会話がすれ違って混乱した。イングリッドが理解するために、いつの間にか戻ってきたタバサが呆れた顔をして会話に割り込んだ上で、助言する必要があった。

軍事組織としてのパートタイムソルジャーと言う意味のマーセナリー軍事的傭兵と、トレジャーハンター冒険者としての傭兵である。

トレジャーハンターのほうは、文字通りの冒険者という意味と、何でも屋という意味でのシティアドベンチャーを生業とする傭兵シティアドベンチャーが混在していた。後者に関しては、欧米的な意味での私立探偵に近い。何でも屋的な意味を持った組織を「私立探偵」と自称している場合が地球では多いのだ。イングリッドはそう理解した。ただし、ハルケギニアでのシティアドベンチャーの中には、地域に根ざして準警察組織的な権限を持つ場合があり、そういう部分ではマーセナリーと言うより、ミリシアと言うべきだろう。

冒険者としての文字通りのトレジャーハンターは、未踏破世界が周囲を囲んでいるハルケギニアでは、特段に珍しくも無い職業だという。成功者になれば億万長者も夢ではなく、実際に少数ではあるが億万長者に成った者もいる。ゲルマニアの初代皇帝はトレジャーハンターであったという伝説があるぐらいである。そんな成功例がぶら下がっているのは、確かに珍しくもない職業にもなろう。ただし、成功例は散々である。またトレジャーハンターは相当に大規模なパーティーを組まないともな探索に出れないという点では、ファンタジーとは言い難いところがあった。

未踏破地域は文字通りの人跡未踏の地なので、出来れば食料等はハルケギニアから輸送したほうが良い。行った先で補給拠点を作って

先へ足を延ばし、更に前線拠点を作って足を延ばすと、人も物資も金もやたらと消費するのだ。場合によっては何年もかかる探索を覚悟すると、未開の地に町を一つ興す如き覚悟が必要になる。地球における登山での極地法に近い。随分と世知辛い話だ。それらの諸問題故にトレジャーハンターがギルドじみた組織を作る理由ともなる。そうであるから、貧乏人が困窮を打破する一方法として「冒険者でござい」と言うのは難しい。ある程度以上の成功を収めた者が行う、道楽みたいな一面があるのだ。

そういった組織に飛び込んで一角千金を狙うのは容易いとも言えるし、難しいとも言える。

冒険者として第一線に立つには、想定外の問題に対処できる頭脳も必要であるし、モンスター等に立ち向かえる能力も必要である。人跡未踏の地を踏破する体力も重要であるし、大勢の人間と強調する協調性も大事である。

様々な能力を同時に発揮するオールラウンダーである必要性がある訳で、一級の学者であり、一級の体力馬鹿である必要性もあるのだ。そういう意味でも経済的に恵まれた人間でなくては難しい職業となる。水準以上の学業を修められる時間と、水準以上に身体を鍛えるのは日々の生活に追われる中で片手間にするのは難しすぎるからだ。そのあたりのことを考えると、ゲルマニアの初代皇帝がトレジャーハンター上がりだというならそれは、成るべくして成ったと言える。

トレジャーハンターの端っこにぶら下がるのは難しくは無い。探検事業を行うと、ポーターにせよクーリーにせよどれだけでも困らないので、大々的に募集がかかる。そういう人間が市中で酒を飲んで「冒険者なんだぜ」と言うのは自由である。ある部分で失業者対策になるので、国家による探索事業でトレジャーハンターが動員される事例は多い。

……行つた先で大勢の人間が命を落とせば人口調整の側面も出てくるので、そういう部分の期待があるのも否定出来ない側面である。無論成功すれば、国家にとっても利益は計り知れない。

国家が前面に出て行うレオ・アフリカヌス開発運動は大失敗したも

同然の惨状だが、各地のトレジャーハンターギルドによる探索は継続されている。それによる様々な成果も出ていて、ある程度の利益がハルケギニアにもたらされている現状がある。

一種のアルパインスタイルで世界に挑む者がいない訳でもない。例外の無い法則は無いのだ。ただし彼ら、彼女らが出発地に成功して帰ってくる可能性は殆ど無い。成功失敗以前に、生還者自体が稀なのだ。

マーセナリーとしての傭兵もハルケギニアでは珍しいものではない。国家や貴族の依頼を受けて、輸送品の護衛や、警察活動、土木建設事業への労働力供給、災害派遣、レオ・アフリカヌスへの出動、そして、ハルケギニア特有の問題である、モンスター討伐等で日銭を稼ぐ組織なのだ。無論、戦争となれば、組織が本拠地を置く国家に味方して、軍隊として命を懸ける。であるから、国に存在を認められた民間軍事組織を維持できるのだ。仕事の内容を見ると、ある意味で、軍事力をもった人材派遣業といえるかもしれないとイングリッドは納得した。

かくの如しで、シティアドベンチャー、トレジャーハンター、マーセナリーはあらゆる部分で仕事为重なる一面がある。事実、各組織がなんであるかについては自称である事が多く、外部から見ても、彼らが主に何をしているかで区別する場合が多い。組織間でも、足らぬ事、手に余る事があれば互いに協力する事も多いので、境界はますます曖昧である。

無論、一つの仕事、一つの儲け話に対して組織が互いにいがみ合ったり、実力行使に出ることもあるので、そうなると、地球でのあれな組織による抗争と変わる所が無いとも言える。

イングリッドは3人の言葉に頷きつつも、異世界であるハルケギニアを理解しようと必死だった。地球と比べられる部分の無い異質さがあった。ちぐはぐな文化的背景も、地球での常識を持ち込んで混

乱するだけである。本当に異世界だと納得しなければ、生活するのも難しくなる。

異世界。

異世界なのだ。

地球の世界を、その歴史をリアルタイムで肌で感じながら渡り歩いた経験が、逆にハルケギニアに対する理解への妨げになっているのではないかと危惧するイングリッドであった。

様々な武器を手にし、いちいちその度に自身に現れた特異な現象を自覚し、若干性格が変わったかのようなルイズの問いかけに反応しながらイングリッドは、最後の最後に、最も手にして分析したかった武器、拳銃の飾られたカウンターに足を向けた。カウンターに収まるのは50代ほどの、そこそこ威厳と愛嬌と、そして隠された殺気のある男である。それをイングリッドは店長であると看破した。

「店主よ、拳銃を見たいのじゃが」

拳銃。それで通じるかどうかイングリッドは内心で疑問を抱いたが、そのまま言葉を発した。そこから話がどう転んだところで、異世界を知る手がかりにはなる。恥を搔いた所で別になんとも思わない。この世界に対してイングリッドが無知に等しいのは事実なのだ。知らない事は知ればよい。それだけだった。

イングリッドの言葉に破顔一笑した店主は、皺が深い笑顔を向けた。若干暑苦しい表情だった。

「これはこれはヴァリエール様とそのご友人。そしてその従者、イングリッド様でよろしかったでしょうか」

その言葉に無表情になって一転、外向きの笑顔を作ったルイズが一歩、前に進み出でた。

「名を名乗ったつもりは無いのだけど？」

トーンの変わった、威厳ある言葉が漏れる。歳のころを考えても十二分に貴族としての権威の現れた声であった。普段向けの声を散々店内で喚いて、今更に貴族だというのは業腹だが、その辺りを使い分け、前段を聞かなかったことにする分別があるのがハルケギニアの平

民のあり方だった。

「これは申し訳ありません。ご挨拶に伺おうと思ったのですが、イングリッド様は武器にお詳しい様子。私ごときの言葉は要らぬ世話と見ましたので、落ち着くところを見計らっていたのでございます」

微かに眉を跳ね上げたルイズが、男を見上げる。

「で。」

ルイズの笑顔が張り付いたままの表情の奥に、聞いたことに答えなさいという感情が透ける。男が頷いた。

「はい。まずは、我がデ・アソ・テイエヌⅡアム・ブティックにお越しいただきまことに有難うございます。私、店主にして所有者でありますオーレリー・アツソ・テイエヌでございます。以後見知り置いて、鼻屑にしていただければ光栄でございます」

そうして、頷き、背の低いルイズを見下ろすような事をしないために、腰を降りつつ、カウンターの途中で一步下がる。

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール様ですね。わが店は若かりし頃のカーリーヌ・デジレ・ド・マイヤールⅡデ・ラツソ・ヴァリエール様のご鼻屑にされた身。一目見て、カーリーヌ様のご息女とお見受けしました」

半瞬、疑いような無い笑顔を浮かべて過去を振り返るオーレリー。「カーリーヌ様も、武器を呻吟される際は、雑音を嫌った身。ご挨拶しない無礼はどうかとも思いましたが、勝手に遠慮させていただいておりました。申し訳ありません。お許しただけでいいでしょうか」

オーレリーの言葉に驚いたルイズとキュルケだが、それ以上にタバサが驚いていた。キュルケがタバサを見下ろしてニヤリと笑う。

「噂のカーリーヌ様を通った武器屋を選ぶなんて、タバサも審美眼があるのね」

眼を跳ね上げてルイズがキュルケを睨む。

「噂って何よ」

キュルケは肩を竦めた。

「いろいろ」

歯を食いしばって肩を怒らせたルイズがキュルケに食って掛かり

そうになったので、イングリッドはまあまあと抑える。オーレリーは眼を細めて背を伸ばし、視線を移してタバサに領きかけた。

「タバサ様もご鼻唄いただき有難うございます。今日はご友人を我がデ・アソ・テティエンヌに招かれた事、まことにありがたいことです。ります」

タバサは無表情で頷いた。オーレリーもそれに領き返す。タバサの極端に言葉を惜しむ仕草に慣れた対応は、タバサがこの店を少なくとも回数利用している事を思わせた。

「つきましてはタバサ様。こちらのご友人を紹介していただけたら幸いです。……」

キュルケを手のひらで指し示して言うオーレリーを制して、タバサは口を挟む。

「慇懃無礼」

タバサは一言呟くと、キュルケを見上げて、次いで、ルイズ、イングリッドの順で見渡した。キュルケとイングリッドはそれだけで察したが、流石にルイズは気が付く事が出来ずに首を捻る。それを認め、キュルケは笑いながらルイズの肩を叩いて、オーレリーに向き直った。

「私はキュルケ。キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルト・ツエルプストー。ゲルマニアからの留学生よ。いつもタバサと話している感じがかまわないわ。無礼だなんて思わないから安心してね」

ウインクでも飛ばしそう勢いでカウンターにもたれかかるキュルケ。離れた場所で耳に届いていたが、イングリッドは先ほどまで別行動をとって、店主と気さくに話していたのはなんだったのかとキュルケを見つめ、次いでルイズを見る。それで理由に気がついた。大いに呆れた表情を見せるルイズの顔面に、僅かながらの葛藤が浮かんでいる。つまり、貴族としての対面や礼儀にうるさいルイズを思って、キュルケはわざとそういう態度を取ったのだ。

イングリッドにもキュルケのそういう行動は理解できる。確かにルイズであれば貴族である立場を崩さずに対応するだろう。恐らく、

謙讓の乗ったやり取りが延々と続くに違いない。それを嫌うキュルケだ。面倒を省きたかったのだろう。

ルイズは、ひとしきり口元をわなわなさせると眼を閉じて一つ、溜息を吐いて肩を聳めた。その間、イングリッドはルイズから一步身を引いて、ただ黙っていた。従者と見られている以上は、主たるルイズを遮る訳には行かないのだ。誤解を解くかどうかはルイズ次第。ただ、主の反応を待つ。

ルイズは遂に観念したかのように、声を乗せて溜息を吐いた。

「はあー。しようがないわね。うん。それで良いわ店主さん。タバサと同じで良いわよ」

イングリッドは小さく笑みを浮かべてルイズに肩を寄せた。

「ん。心広い主を戴いて、我も幸せじゃ」

横を向いてイングリッドに視線を合わせたルイズは、その鼻に指を突きつけた。

「ルイズよ」

「……」

キュルケとタバサはそのやり取りを聞いて顔を見合わせて苦笑いした。オーレリーは行儀良くそれを聞き流した。

オーレリーが持ち出したのは、リボルバーだった。一見して古典的なパークッションタイプの9連式リボルバーで、イングリッドが手にするにはかなり大きい。外見的には、リボルバーの軸がやたらと太く、ぱつと見、銃身が2本あるように見える。地球で見られるリボルバーとの明らかな差異は、ハンマー部分が見当たらない事で、リボルバー部分からスリムに整形された金属ボディが、ピストルグリップに繋がるデザインが特徴的だった。

カウンターに置かれたクッションの上に鎮座するそれを、イングリッドはまじまじと観察する。キュルケ達3人は若干の緊張感を滲ませて、イングリッドと拳銃を見つめる。オーレリーも緊張感を滲ませてイングリッドを見ている。

顎を扱きながら首を動かして外観を嘗めるイングリッドの視線は、

これまた緊張感に溢れていた。どうしても拭えない違和感を感じていたイングリッドは、その正体に理解が及ばずに首を捻るところしきりだった。

「コンビネーションリボルバーじゃな。着火はパーカッション。装弾数は8+1。装弾方法は前装式」

イングリッドはオーレリーに視線を移して尋ねた。

「手にしても？」

オーレリーは頷いた。

「もちろん」

イングリッドは右手で拳銃をつかみ上げた。

「グリップに貼られた滑り止めの木は手に馴染むの……じゃが、我には大きすぎるわ」

そう言いつつも、イングリッドは拳銃をためすがえすする。その仕草に8つの視線が付いて回る。

イングリッドが誰もいない方向に拳銃の銃身を向け続けている事に、オーレリーは感心した。グリップを握るだけで決して引き金に指を差し込まない事にも驚嘆する。オーレリーは、店内でおきた騒ぎでイングリッドに対する評価が混乱していたが、ここに来て個人的評価を大いに跳ね上げた。

店内で、しかも陳列棚の前で剣を振り回す。冗談ではなかった。

剣は対人殺傷目的に特化した汎用性の無い武器である。客がいることが常態である店内で、陳列棚の前で剣を振り回す。気が狂った所業である。

しかし、オーレリーはその場でイングリッドの評価を定める事が出来なかった。

身長150センチ程の少女が、頑強な男でも難しい、片手で大剣を振り回すという行為を行っている。一応は周囲に気を配って、他の店員や客に危害が及ばないようにしているとも思えた。どちらにせよ、店の裏にある剣を試す場所を使わずに、店内で剣を振り回す行為がそれで許されるわけでもないのだが、人外の行為を見て、ルイズの姿を認めて、イングリッドが魔法生物の類かとすら思ってしまった。

その時にオーレリーが思い浮かべたのはカリーヌではなくエレオノールだった。

エレオノール・アルベルティーン・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール。ラ・ヴァリエール公爵の長女である。トリスタニアに住む者でそれなりに世情に聡い者なら、評判を耳にする事は難しくない人物である。怪しげな事を行う事に躊躇が無い王立魔法研究所の研究員で、土魔法に優れた人間だ。そこから何がしかの怪しげな道具が渡されて、そこに形を見せているとまで想像した。

ルイズとの会話を聞いて、一緒に居たキュルケの人となりを感じて、更に混乱する。どうにもイングリッドは普通の人間らしいと言わざるを得なかった。何が普通なのかという点で、オーレリーは価値観がひび割れる音を聞いたような気がしたが、イングリッドは普通の少女だった。

武器を解説する言葉を聞いて、本格的に混乱した。恐ろしく詳しくかった。外見で判断しては人間性を図れない類の存在だとは辛うじて理解出来た。

そして今。

実包が装填されていない拳銃をしかし、注意深く取り扱う姿。イングリッドはオーレリーの見るところ、極めて武器の扱いに長けた人物だった。店内で剣を振り回した行為に疑問はあるが、もしかしたら、こういった店で武器を見る経験が無かったのではないかと好意的に解釈した。考えてみればラ・ヴァリエール公爵が娘につける従者である。それが只者である筈は無い。外見も擬態としては素晴らしい。普通の従者として見るなら、美少女たるイングリッドの姿はルイズと共にどこに行っても違和感が無いだろう。疑いようも無く美少女であるルイズと釣り合っている。それなのにあのような力を発揮できるのであれば、魔法を扱うメイジとしてルイズが、力を発揮する時間を稼ぐのは容易であろう。やはり、貴族というのは従士一つとっても特別なのだなど、オーレリーは激しく感心した。

イングリッドが剣を振り回した理由は単純である。剣をとって、その瞬間に武器の情報が頭に流れ込んで混乱したのだ。剣を振り回し

たのは、武器の情報を読み取った上での無意識の行動の結果だった。無意識の行動を行う前に、無意識に周囲の安全を確認していたところは普段のイングリッドそのものだった。

オーレリーがルイズに対する評価を誤解したのも無理は無い。ルイズの真実は貴族社会では噂レベルで周知されているに近い情勢だが、平民社会には知られていない。幾度と無く確度の低い噂として平民社会に顔を出しているが、名にしおう名家たるヴァリエール家に対する醜聞としては話が突飛過ぎた。貴族間のやつかみ混じりの大嘘としか取られなかった。積極的にルイズの欠陥を社会に浸透させようとした者もいたが、優秀なメイジの子供が魔法を使えないという話は妄想にしても馬鹿馬鹿し過ぎた。よってルイズが無能等と言う話を信じている平民は皆無に近いし、ルイズが無能かもしれないと思っ

ている平民でも、それを直接口にする事は無かった。なにしろ相手は公爵令嬢なのだ。それを徹底的に貶める内容の「魔法が使えないルイズ」。場合によっては不敬罪にすら取られかねない。国王の親族なのだから。

オーレリー自身もルイズの醜聞を耳にしたことはある。ただし耳にただけで一笑に付した。カリリーヌを知る身なのだ。その息女が無能だという想像はありえなかった。よって、すぐに忘れ去った。そんな話があったことすら忘れている。ルイズに対する態度がぶれる事は無かった。

オーレリーが経営するデ・アソ・テティエンヌⅡアム・ブティックはルイズの母が足げく通った店である。それに対応したのもオーレリー自身だ。カリリーヌと言う人物が他に比べるものが無い程の才媛である事は十二分に知っている。その彼女が通った店にやってくるルイズがそれに近い存在である事は間違いないだろうという推測もあつた。ある一面を切り取ってみれば、一種の自画自賛でもある。優れたメイジに鼻屑にされる店。なんとも晴れやかな話である。

イングリッドはオーレリーに視線を向ける。

「ふむ。引き金を引いても問題ないだろうか？」

大問題である。普段の、普通の客なら、たとえ装弾されていない新品の拳銃であっても店先で引き金を引かせるなんてありえないし、そもそもよつぽどの客でもない限りは拳銃を出す事はない。しかし、ヴァリエールのご息女とその従士である。よつぽどの客だった。イングリッドが持った拳銃は新品である。発砲されたのは工房で完成検査をしたときと、納品された後でのチェック時のみである。店先に出したときに、シリンダーの中が空っぽであったのはオーレリーが確認済みだし、カウンターに出す時にも確認した。問題は無かった。

オーレリーは頷いた。それを確認してイングリッドは拳銃を上に向けて天井に向けて引き金に指をかける。

——イングリッドは一気に引き金を引かなかった。

何かを確かめるようにゆつくりと引き金を引く。ある深さを探ったら、指を戻して再度引き金を引く。引き金を引いた分だけシリンダーが回り、指を戻すとシリンダーも戻る。それを上目使いで確認して、そして探る。その姿を見てオーレリーによるイングリッドの評価は天井知らずになった。

初めて扱う拳銃を持って、引き金の重さを探る。撃鉄が落ちる瞬間を探る。老練な経験を持った戦士にこそふさわしい態度だった。

タバサもイングリッドの仕草の意味を理解していた。誰もいなければ唸り声を上げかねなかった。表情を保つのが難しい状態だった。ルイズとキュルケは神妙な顔をしてそれを見つめてしかし、内心では疑問符を飛ばしまくっていた。双方とも拳銃等は縁遠い存在なのだ。イングリッドが何をしているか理解出来ない。

がちり。
がちり。

2つの音がほぼ同時に響き渡った。重苦しい作動音と共にシリンダーが回り、軽い音と共に遂に撃鉄が作動した。無論、銃弾が発射される事はない。イングリッドは納得した表情で拳銃をカウンターに下ろした。その動作の間にも、銃身が決して人の居る方向に向く事はなかった。

拳銃を下ろしたイングリッドは身体を乗り出してグリップをオー

レリーに向けた。

「センターガンを発砲する切り替えはどうやるのじゃ？」

オーレリーは頷いた。

「拳銃を貸してください」

頷いたイングリッドは銃身を斜め下に向けてグリップを突き出す。それを受け取ったオーレリーは大袈裟な仕草で身を引いて、銃口を店の奥に向けてグリップをイングリッドに見せた。

「ここにトグルがあるでしょう。これを上に向けて回し、動かなくなる場所でセンター、下に回せば通常のリボルバーとして作動します。グリップを握ったまま、親指のみで回せるようになってるんです」

うん、と頷いたイングリッドは、そこでこの拳銃に感じていた違和感が付いた。

初めてのお買い物（3）

このハルケギニアという世界に出でる前の、イングリッドの普段の生活とはどのようなものであろうか？

言うまでも無い事だが、イングリッドの本質的存在意義とは、人の世を脅かす尋常ならざる存在を、それが人の世に大きく出でる前に、人の世に知られることなく密かに排除する事である。それが大前提である。

イングリッド達が敵対する相手とは、人の生活を、人の世界を根本的に破壊する手合いであり、それは悪魔としか言えないような手合いであり、或いは鬼としか言えないような相手であつたりする。

しかし、多くの者が勘違いするところではあるが、イングリッド達にとつてそれが必要と断じるならば、世間一般で言うところの「神」に近い相手であつてもイングリッド達にとつては敵対相手となりうる。

イングリッド達の根本的な理念によれば、人の世の移ろいは人に任せであり、どれほどまでに絶望的な状況が、ほかならぬ人の手で現出したところで「神でございます」とばかりに超常の能力を持った者が理想に燃えて現れ出でたとしても、人の世の流れに、人の世に寄らない断絶を与えるのであればそれは排除対象だった。

逆に言えば、人が、人として、人の世を滅ぼす選択を選んだ場合、イングリッド達は、ただそれを眺めて過ごすだけである。

キューバ危機がそうだった。

ほんの少しのボタンの掛け違えで、間違いなく世界は炎に包まれたであろうことが確実な、ぎりぎりの状況であつたが、イングリッド達は傍観するに任せた。それが人の選択であるならそれもまた運命であるというのがイングリッド達の考えであつたからだ。

逆に、そのとき、その場所で、超常の能力を持った人ならざるものが、世界を救うために力を振るつたとしたら、イングリッド達は世界を救わんとするそれらと闘争に入ったであろう。現実としてその時、

大陸間を滅びの光が舞ったとしても、その下で「救世主」相手に死闘を繰り広げたかもしれない。

東南アジアで発生した事態に関しては非常に判断が難しいところがあった。

とある軍事組織の対立状況下で、大量破壊兵器を使用した根本的解決法が採られようとした時、その一方の当事者にまごうことない人外が存在が収まっていたのだ。ただし、大量破壊兵器の使用そのものには関わっていないかった。

だが、東洋の片隅で使用されるかもしれない低威力の大量破壊兵器の炸裂が、偶発的な全面的大量破壊兵器の投射に繋がりがねなかったという点で難しい判断に迫られた。軍事組織での内紛が、そこに居た人外の存在によってお膳立てされたのだと言う事実が問題を深刻にしていた。その意を受けて、下の者が偶然に手に入れた大量破壊兵器を独断で使用してしまおうと企らんだのだ。

この件についてはありとあらゆる面で、イングリッド達は出遅れてしまった。

決断したときにはすでにどうしようもなかった。イングリッド達の持つ能力を發揮してなお届かない、時間の無さと、能力を持った者達がいる場所からの距離の隔絶が、危うく全てを手遅れにするところだった。

何も起きなかったのは、ただ、運が良かっただけである。

使用が試みられた大量破壊兵器は、使用期限が切れていた。それだけならば炸裂した可能性はある。それらの大量破壊兵器というのは自らが発するある種の電磁波によって、構造を自壊させる。

よって製造された兵器は使用期限が切られる。ただしその期限は、生産されたその種の兵器全数のうち、無作為に抽出された半数の内の50パーセントが不活性化されると予想される期間の70パーセントの時間が過ぎた場合と言う、かなり安全寄り（ある意味で危険寄り、とも言える）の数値が設定されているので、例えば5年で使用が推奨されなくなる兵器ならば、理論上は8年後であっても2発に1発は問題なく作動する可能性がある類だった。

使用された3発すべてが不稼動だったのは、東南アジア特有の気象条件化で暴露した状況で極めて適当な扱いを受けていたために、酷く劣化していたからで「通常」の扱いを受けていたら、ほぼ確実に作動していただろうという状況だった。運が良かったのだ。

その後、人外の存在はイングリッドたちと全面的な闘争に突入したのだから、結果的に、人の世に関わるべきではない存在が、人の世を掻き乱す事態を引き起こしかねなかったのだという形になった。ただ、結果論であるので、この事件に関する経緯や経過は、イングリッド達の間でも長く論争になった。しかも結論は出ていない。

イングリッド達が行う「闘争」とは、かように常人には理解する事が難しいところがあった。

イングリッド自身にも、その他人に理解されがたい部分に関しては自覚がある。

実のところイングリッドやその仲間が、自身の存在意義に関して他言葉を交わしたことは、その永い歴史上僅かの例外なく、唯の一度も無い。彼らは、人の歴史の影で、まさしく影そのものとして活動を続け、そして、消えていくだけの存在だった。

イングリッドはそれに思うところは無い。そういうものなのだとイングリッドは「知って」いた。

言い訳もしない。納得も無い。理解しているだけだった。ただ、そうあるだけなのだ。

それが、人に理解されるものではないと「知って」いる。ただそれだけである。だからイングリッドは他観的に見て、ある種、賽の河原で石を積むが如き自身の行為の本質を主張することは無かった。

これが、東京をシャドルーが破壊したその時に、イングリッド達が介入しなかった理由である。あの時、あの場所に近しい場所にイングリッドが存在していたが、それは、シャドルーの行為に乗っかって動きかねなかった、とある人の世を踏み越えてしまった人物をけん制する事が主目的であり、あのときのシャドルー、分けても、ケツ顎軍人は、人間が誰でも行き着ける「可能性」がある、化学的研究、或いは鍛錬の成果としてあそこにたどり着いていたのだというのがイング

リッド達の判断だった。彼が尋常ならざる高みに至っていたとはいえ、そのあり方としてはイングリッド達が見るところは、人間の枠組みを外れてはいないと結論していたのである。

その後、イングリッドは件のケツ顎軍人と直接対峙する事となった。しかも「あべし」とばかりに相手は吹き飛んだ。

これは、相手が超常の技術に手を出したからであり、その技術とは、あろうことかイングリッドの持ち物と同じところから出でた物だった。具体的に言えば、太陽のアンクルそのものに手を出したからであり、それを使つて如何こうするのだと言われれば、イングリッド達が介入しないわけが無かった。

つまり、彼らは人の道を違えたのである。

彼らは明確に、イングリッド達と敵対した。一度そうなれば、二度は無い。彼らが自身の力のみで、再び世界を征服、或いは破壊を試みたとしても、イングリッド達は介入するだろう。一度人外の力に染まった存在は、それが個ではなく集団であっても、その時点で人ならざる物に成ってしまったと言う事なのだ。

そういつたことを延々とこなしてきたのがイングリッド達である。それが人の世に知られることは無い。

ただ人、としかいえない者たちと交錯する事は何度と無くあった。近いしい過去であっても、例えばさくらとかかりんといった存在は、やや通常の人のあり方から道を踏み外しているとはいえ、なお人ではなかった。人としてその能力を見た場合、異常としかいえない能力を持つていたとしてもそれは人外ではなかった。そこに至る事が出来る者が極めて少ない場であるにせよ、人としての存在を保ったまま至れる高みにたどり着いただけの異常だった。それは超常ではない。マイノリティであるだけだった。

疑いようも無く超常の存在たるイングリッドはマイノリティと言うのもおこがましい少数派な訳だが、超常の世界ににじり寄った彼女たちは、日常のすぐ脇にいるイングリッドやそれに近い存在と、あまりにもあり方が近接してしまう場合があった。それがして、ストリートファイトと言う交合に至ってしまう訳である。それは一種の

事故だった。

「俺より強い奴に会いに行く」。

そう言つて憚らない者がいたが、強さを極めようという者は、自覚のあるなしにかかわらず、誰もがそういう言葉で表現してお終いな部分を、多かれ少なかれ内心に持っている。そも、強さとは歴史上の誰某よりも強いとか、あの何某かよりも強いだとかいう表現で個人の強さを表現する場合が多いことから言つても、相対的な部分が大きいから、結局は最終的に自分より強い相手を求めて彷徨うのがファイターの宿命なのだとも言える。そういう病気を抱えて尋常の世界で強さを極めてしまつたら、更に先を目指すというなら超常の存在に挑むしかない。

彼らが望むと望まないに限らず、結局は、超常たるイングリッドや、宇宙人、異世界人、人外の化け物と争うのは、宿命としか言いようが無かった。

ただし、それはイングリッドの非日常的日常の光景ではあつても、真に日常と言うわけではなかった。寸余をおかず、超常の存在が尋常ならざる行為を尽きせず企んでいるという事はさすがになかったし「頼もう」とばかりに時を置かずしてイングリッドに挑む者が引きも切らないという状況も無かった。普段のイングリッドたちは存外に暇だったのだ。

それが人の世の在り方として「平和」であるというのは簡単ではある。そのほうが良いと嘯くのは安易だ。

それでも一応は「生き物」の端っこにぶら下がっているつもりイングリッド達である。暇だ。する事がない。そうは言つても霞を食つて生きていけるわけではないのだ。そうなると、どうしようもなく「日常」を積み重ねる必要性が出てくる。

結局イングリッド達は超常の存在でありながら人の世の尋常に混ざわるしかなかったのだ。

そうすると、生きるためには衣食住を得る必要がある。

衣食住を得るためには金が必要。

金を得るためには職を得る必要がある。

超常の存在であるのだから、人に混ざることなく彼らのみで完結した生活を送ってもいいではないかとも思えるが……それはあらゆる意味で不味かった。

隠れ里のようなものを設えて、孤立してしまえばたちまち情報弱者の出来上がりである。そうなれば人の世で何がしかの尋常ならざる出来事が起きたときに出遅れる事になる。困った事に、ごく一部の例外を除けば、尋常でないものが尋常でない行為を成そうとする場合、たいていに於いて当事者自身が尋常で無い事に大いに自覚があるので、隠れてこっそり、ぎりぎりまで雌伏して、準備万端備えてどかーんとやるのである。

どかーんとやられては、イングリッド達の敗北である。人外の存在は人の意識の埒外でこっそりとペシペシしてしまるのがイングリッド達の使命なのだ。そうであるならば、イングリッド達は常に人の世に眼を向け、耳をそばだてている必要がある。自身の使命を全うする上でも人の世にまぎれる必要がある。よって職を得ることが急務とならざるを得ない。

人の世に交わるのが必要となれば、まさかに押し込み強盗をやって金を得るとか、食料を強奪するとか言うわけにはいかない。人の世の裏に潜むのがイングリッド達の必要だというのに、何故のぼりを立てて振り回さなければいけないのか。普段に合っては人畜無害のその他大勢を装わなければ、尋常の外にある何かも警戒して顔を出さない。イングリッド達を避けて手の届かない場所であれやこれやをやらかされてはイングリッド達の使命を全うできない。

そうであるからして、イングリッド達の日常はなかなかしよっぱいものになってしまう訳である。

ここで、イングリッド個人にスポットを当ててみると、さて、彼女にお似合いの職業とは何か？という話になる。

サーヴァント？

セルヴァース？

グーヴェルナント？

実のところ、どれも難しかった。

近世以前ではハウスキーパーたる形で、マドウモワゼル・サーヴァントという立場は得ることはほぼ不可能であった。誰が身分を保証するというのは？どこの誰とも知れない有象無象を雇うような家はなかった。

同様に喫茶店や食堂でセルヴァーズというのも困難である。広く世の中から、赤の他人を個人経営の店が雇う雇用形態ができたのは近代以降である。それ以前で、雇ってください。ハイ判りましたとはならなかった。領主や教会等によほどの伝手があるか、近隣で災害が起きて難民化した人間が押し寄せたとか、付近でドンパチ言わせてそれに参加するの兵士や傭兵等が大挙して押し寄せたとかいう、一時的人口増加が起きて人手が足らなくなるような切迫した事情が無い限り、どこの誰とも知れぬ人間が商店やレストランに雇われるのは難しかった。

家庭教師？なにを馬鹿なことを、と言うものである。世界中を巡り、世界中の常識に「ある程度」精通し、あるレベル以上に教養のあるイングリッドは、人にものを教える技能があるかという以前に、家庭教師になるにはうってつけの能力があるが、結局は身分の保障が無い自由人。誰が雇うと言うのか。

近代以前で、女が一人で世を彷徨い生きるというのは恐ろしい難事だったのだ。

結局、近現代以前でイングリッドが常態とした職業と言えば、サーカスの団員であつたり、或いは（まがい物の）宣教師として世を彷徨う姿であつた。

時に薬師として、時に占い師として、世界を彷徨った事もある。意外な事に、傭兵として世界を巡ったこともある。中世では女性の傭兵とはそれほど珍しいものでもなかった。ヨーロッパだけでなく、中東やアジア、アフリカであつてもある。

永世中立を標榜する国家から輩出された名高い傭兵には幾人もの女性が混ざっている。専門性の高い大砲や、銃を扱う傭兵団では長が

女性であることは特別な事ではなかった。肉体を持って武器となし、前線で切り結ぶ事ができないと「見られていた」女という存在は、であるからこそ、ひとつの事に長じる事に時間を得ることが可能である時代があったから、専門職となれば女性のほうが多かったなんていう時期があったのだ。男性優位社会が行き過ぎた時代における一つの皮肉な到達点である。

ただしイングリッド自身による傭兵のあり方というのは、当初は前線でペしペしやるのが通常だった。イングリッドの持つ広くて浅い知識では、本格的な専門的研鑽を積んだ者には太刀打ちできなかった。よって世にも珍しい肉体派女性傭兵が出来上がってしまった。

肉体派女性傭兵と言うものも歴史上はそれなりの数が現れたから、完全に世情から浮き上がっているわけでもなかったが、目立つ事には変わりなかった。イングリッドが後に振り返るところでは、実は肉体派女性傭兵の誕生はイングリッド自身が呼び水になったのではないかと言う疑念があるので、色々と反省する部分ではある。目立つ事を避ける必要性から、最終的には傭兵団の端っこにぶら下がって世話係とばかりに雑務をこなしている形になった。世界中を彷徨って、あちこちで滞在した経験が生きた。世界中から集まる個々の傭兵にあわせて気遣い出来るイングリッドは大変に重宝された。いろいろな国の料理にそこそこ精通しているのも喜ばれた。

国家間ばかりでなく、地方豪族や貴族間での対立が絶えなかった時期が世界中で長く続いたので、そういう形でも存外に広い世界を彷徨う事ができたのだ。

女性が世界を巡るのに、誰もが即座に思いつくであろう、女性であるという部分を武器とした職業をイングリッドが選択したことは無い。情報収集の手段として、そういう職業を詐称した事はあるが、それは手段でしかなかった。実際の行為に及んだことは無い。

実際にそれをしたがために当然に発生する新たな生命の発現は、イングリッドの本来の仕事を大いに阻害するし、そも、その存在の特殊性故に発生する外見的特異性が、ある程度の時間を経て他人に対して顕在化する前に、一時的定住地を放棄して、遠く離れた場所に移動す

ることを常態とせざるを得なかったイングリッドが、発生した生命の黎明状況を持って連れて世界を巡る等と言うことは、難しいどころの話ではない。

そも、イングリッドがその一見した外見上の生物学的特長そのものに、自然な行為を成せるのかと言う問題もある。イングリッド自信が確かめた事がないのだから事実は藪の中である。

選択肢が殆どない状況が急激に変化して、イングリッドが様々な職業を急速に体験することとなったのは、近代以降であった。その永い生からすれば「極最近」と言い換えても良い。

具体的な時期を言えば、産業革命以降であった。

突如としてイングリッドの前に職業選択の自由が現れた。

よりどりみどりだった。

ウエイトレスだろうがメイドだろうがなんでもありだった。農家でお手伝い、というか農奴一步手前ということもやったし、炭鉱で籠を担いだこともあった。造船所で鋳撃もやったし、工場で糸を手繰った事もある。

ある時期には、工場で大量生産される麻薬の製造にかかわった事もある。現代的常識から言えばありえないことだが、ある時期には国家事業として麻薬を大量生産して他国に輸出していた国家があったから、そして、その仕事と言うのは労働者に大変な健康被害を惹起したから、いくらでも人手が必要で、出自怪しからざるものでもとりあえず雇うことが出来れば誰でも良いやと言う状況であり、イングリッド個人としては大変にありがたかったのである。

無論、そこで生産された華やかざる工業製品の行く先にはイングリッドも思うところがあった。だが、それは泡沫の夢と思ひ浮かんだ刹那の夢想であり、それが引き起こす惨禍のありようは、まあ、歴史は繰り返すものだど慨嘆するだけだった点にイングリッドの特殊なあり方が見え隠れした。人の紡ぐ歴史に対しては傍観者でしかないのがイングリッド達のありようなのだから。

そういった様々な職種の中で、製鉄、鑄造、鍛造といった金属加工

業の経験がイングリッドにはあった。

現代社会にある者がそれを聞いたなら、例外なく「えええっ！」と驚く事であろう。労働に関わる法律を持っていて近代先進国ならば、間違いなく女性の就労を禁じている職種である。

しかし、産業革命以後、ある一定の期間、少なからぬ数の女性が身を投じた職が、製鉄であり、鑄造であり、鍛造だった。

近代産業の大豆たる製鉄も、近代産業の小麦たる鑄鍛造も、近代鉄系産業製品にはなくてはならない裾野産業である。これが無くては工業製品は何も始まらないといって良い。勿論、コークスの生産だとか、加工機械の鑄造だとか、更なる裾野技術があるが、それらもひっくるめて包括する意味でまとめて大豆だ、小麦だと言える産業だ。

であるから「近代化」が進行する中で、製鉄にせよ鑄鍛造にせよ、常に需要が逼迫し続けた時期があった。産業革命を経験した全ての国で経験されたことである。ある国では国を挙げてリソースを傾斜集中したし、ある国では中世産業の延長線上で家内工業的鑄鍛造が先行したために、世界中から屑鉄を輸入した事で製鉄の遅れを補った。ある国では国家戦略的失敗から孤立主義を採らざるを得なかったために、製鉄すら家内工業的方法で不足を補おうとして大規模な環境破壊を起こして滅茶苦茶になったりもした。

そういつた原材料資源の不足もさることながら、産業革命期に顕在化した最大の問題は産業に従事する労務者の不足だった。フォークリフトやコンベア等による工場内製品輸送の機械化がなされる前の近代産業はどれもかしくも労働集約産業の最右翼であったから、どこもかしくも人が足らなかつた。何を成すにしても人力以外に選択肢がなかつたからしようがなかつた。

現代の人間が思う工業化であれば、工業化の進展によって労務者を減らす。全体として生産性を高めつつ人を減らすと発想しがちだが、実際の工業化とはその歴史の初期に於いては作業者の集約集中と同義だったのだ。

その中でも、製鉄、鑄鍛造は重大な欠陥が合った。

初期のそれらの産業では、就業中の労務災害が極めて多かったの

だ。

従事者の肉体的意味に於いて、人がいつかなかつたのがそれらの職の特徴である。人死には日常茶飯事だった。年間死者数で言うと、戦場よりも危険とまで言われた時期すらある。

製鉄では、溶解した鉄を輸送する段で大量の死者が出た。冶金技術が低かったので釜の品質が悪い故に底が抜けたとか、チェーンが切れて中身をぶちまけたとかで大変な地獄絵図が展開された。

製鉄炉も当たり前のように崩落事故が続出した。大量に消費したコークスから発生したガスで中毒事故が発生したとか、ガス爆発が起きたとか言う事故も多かった。控えめに言っても大惨事である。耐火煉瓦の生産が追いつかなかつた時期では、工場が炎に包まれても日常風景で、またやっつてるよで済まされた時代すらある。初期のそういった犠牲があつたからこそ、冶金技術が発達したわけで（なにしろ釜もチェーンも製鉄炉も、製鉄した先にある加工製品である）必要な犠牲だったと看過するしかないかもしれない事だが……。

鑄造もいろいろな問題があつた。

鑄造と言う技術自体（製鉄、鍛造にも言えることだが）は存外に長い歴史があるのだが、それを大量に扱おうのだと言う点で問題が続出した。

型が崩落したとか、熔融材料が噴出したとかはともかく、家内工業的な生産では考えられない量を一度に扱おうと試みたところ、材料自体が爆発したりもした。

数百人が死傷した事故の記録を現代的技術で振り返ると、どうやら単純な水蒸気爆発であつたらしい事例があるのだが、家内工業的な鑄造で発生する水蒸気爆発——溶解した材料に汗が滴り落ちて大きな音は立てて爆ぜるぐらいの認識しかない時代に、ワークの熱を取ろうとして水を大量に振り掛けたら「大変な事になった」等と言う、経験の未熟故の事故があつた。

鍛造も同じである。

スチームハンマーや鍛造プレスといった大型機械は輸送技術が未熟であるがために、設置する場所で躯体を鑄造するしかなかつた。東

大寺の大仏様と同じである。鉄の塊であるプレス機やハンマーの輸送技術は1950年代ごろになってようやく安定的に確立されたといっても良い(海辺等にある工場では船で輸送する事が可能であったから「製品」としての鍛造ハンマーや鍛造プレス機が絶無だったわけではない)。それまではそのような大型産業機械はレディメイドどころではなかった。使用される個々の部品は既製品の組み合わせであったのに、全体としてはひとつとして同じ機械は存在しないといっても過言ではなかったのだ。

産業革命期には技術が先行するばかりで製品の品質面はおざなりにされがちだった。それは製品を生産する機械そのものについても例外はなかった。よつてとんでもない事故が発生した。

現代でもハンマーによる鍛造での死亡事故はある一定の割合を下回る事ができないでいる。産業現場における死亡事故を根絶するには、死亡にいたりかねない危険から従事者を引き離す事が肝要であるが、ハンマーやプレスは、致命的状況を現出する場所から作業者を根絶する事が現状、不可能なのだ(トランスファープレスのような例外はある)。

何十トン、場合によっては何百トンもあるラムが高速で上下して打撃する鍛造現場では、バリが飛んで作業者を受傷させる事故が後を立たない。それは容易く死亡事故に繋がる。しかし、熱間鍛造にせよ冷間鍛造にせよ材料をハシでつかんで保持しつつ打撃しなくてはならない状況をなくす事ができないので、作業者は常に命がけである。

現代であつてもそうなのに、産業革命期のスチームハンマーは現代常識から言えば想像もできないような事故が続出した。

バリが飛ぶのは当たり前だった。材料のバー材の品質が安定しないために、初期の鍛造ではバリが飛んで当たり前だという風潮すらあつた。鋼が大量生産可能になる前は、材料が銑鉄や鋳鉄といった脆いものしか選択肢がない状況もあつた。現代では熱間鍛造中にバリが飛散するというのはよほどに硬い材料であつたり熱管理の失敗でもなければありえない事なのだが、当時の材料供給事情では、そのよほどに硬い(そして脆い)材料を使うしかなかった。よつて、ハン

マーマンだけでなく、周辺で材料を輸送する人間や製品を輸送する人間にも死傷者が続出した。

それだけではない。

型の固定技術が未熟だったために型の脱落事故は日常風景だった。1日に10回も型が脱落したなんて話もあるので命がけどころではない。型が脱落するだけならともかく、型が破損して破片が飛び散る事も珍しくはなかった。

それどころか打撃の衝撃で、ハンマーの躯体そのものが破損したり、場合によつては躯体が崩落する事故も合った。致命的どころではない。

型の付け替えも命がけだった。現代では、型はある程度の温度まであらかじめ予熱しておく事が重要だと知られているが、初期の鍛造では、熱くなった型を冷やさないと製品に悪い影響が出るみたいな常識がまかり通っていたので、水で急冷するのが当たり前だった。

型自体も品質的に未熟な時代であるから、そんなことをすれば型が脆くなってしまうどころではすまない。極僅かに生産される鋼鉄をなるべく型の製作に集中したりもしたが、鋼鉄自体の品質も怪しいところがあつたから、対策としては不十分だった。打撃中に型が崩壊する事故の本質的原因でもあるし、型代え時の不意の脱落事故の原因でもあつた。

かくして、鍛造現場は慢性的な人手不足となつた。流石に受傷事故がそのまますべて死亡事故に繋がったわけではないが、指がない、腕がない作業者なんて当たり前だった。人が足りないとは言つても、最終完成形態の工業製品に至る最初の段階で、鍛造が必要であることはどうしようもないので鍛造が暇になることはなかった。大量供給が叫ばれていた、採掘現場で使用する動力や、ポンプ、船舶用エンジンでは鍛造品の使用が大であるので、供給状況は常に逼迫していた。となればとにかく人を集めないといけない。

女性作業者が金属加工現場に従事するのは必然だったのだ。

労務災害史はそのあたりの事実に関して沈黙している。殆ど記録が残っていないのだ。産業史にとつてもまつたくの黒歴史であるか

ら、その辺の労務災害の記録は曖昧模糊である。研究者も少ない。それらが明らかになるのは遠い歴史の向こうだろうと思われる。

しかし、イングリッドは知っている。他でもない。実際にそれらの仕事に従事していたからだ。

溶融した材料を人力トロに載せて押す（！）ということもやった。あまりにも危険に過ぎるのでごくごく初期にしか行われなかった作業方法で早い段階で機力に移行したが、熱にめっぽう強いイングリッドの存在は非常に重宝された。

これまた産業革命初期の話だが、製鉄途上の材料を転炉の口腔から鉄棒で掻き出す作業があったから、それもまたイングリッドにはうつつつけの仕事であった。ベッセマー法の確立までの間、極超高温の溶融鉄の側で作業者が何くれとやらないといけない状況が酷く多かったのだ。

高温の転炉に材料を投げ込むのまで手作業であった時期が10数年続いたのだから、当時の製鉄がいかに危険極まりない現場であったかがわかる。そういった場所でのイングリッドは適材適所の最たるものとしかいいえなかった。イングリッドの外見的特徴等どうでも良かったのだ。

数百度から千度以上に熱した材料を、輸送者が天井から吊った大型のハシで受け渡しして自身のハシでつかみ、型に載せ、スチームハンマーでガンガン叩くようなこともイングリッドは実際にやっていた。バリが飛ぶ。型が割れる。銃弾のようにそれらが飛ぶ。手でそれを弾く。そんなことをやっていた。

それらの作業現場は熱いどころではなかった。50度超え、60度超えは当たり前だった。手元が数百度と言う状況も当然だった。汗が噴出しても、身体を冷やす役割を成さないほどだった。身体が塩で真っ白になった。本来のイングリッドであれば別段苦にならないし、汗が噴出して……何てことも避けられた。しかし、周辺の作業者が術からず白く染まっている中で一人だけ涼しい顔をしている事もできないので、まあ、しかたなく人まねしていたというのが本当のところではある。

産業革命期前後に、やったらめつたら戦争をやっていたのも問題をややこしくした原因である。製鉄や鑄鍛造等、そういつた危険な作業に従事すべき若い男性がどんどん戦場に出て行った。そして彼らが近代産業が生み出した工業製品、つまりは、銃や銃弾をじゃんじゃん消費した。それがために製鉄業や鑄鍛造業の需要は更に逼迫した。しかし作業者がいない。いないならあるところから補充するしかない。だからイングリッドがそういう場所にもぐりこんで誰も疑問に思わなかったのである。

そう。金属加工によって生み出された大量生産工業製品。つまりは、銃である。

イングリッドがカウンターの上で眺める銃は、おかしいどころではなかった。

イングリッドが手にする拳銃には稼動部分がある。なにを当たり前の事を言っているんだといわれるかもしれないが、黎明期の「銃」には稼動部分なんかなかった。青銅製の筒に撃発用の火種を入れる穴がいていただけとか言うのが初期のころの「銃」である。所謂「手砲」というやつで、その言葉から想像されたとおり、初期の銃とは砲の小型版だったのだ。

火砲というものは、まず持つて据え置き型の砲から歴史が始まっている。それをそのまま小さくして初期の銃が生まれた。

野戦砲はごくごく最近（イングリッドの印象から言つての話である）になるまで、火砲としての本来的な機能部分には稼動部品絶無と言う状況だったから、それを模して小型化しただけの銃に稼動部分がないのはおかしいことではない。

しかし、それでは不便過ぎた。発砲するのに蠟燭を近づけたり、火縄を押し込んだりする手間が必要では、銃を両手で保持できないという事である。現代のアサルトライフルであつても両手で保持しなければまともな命中率を得られないのは常識だから、初期の手砲とやらがどういうものであつたか想像するのは容易い。

手砲と言いながら結局は、実戦では2人がかりで運用して初めて実

用的な能力を發揮したというのだから、手砲を銃とは言い難い。だからこそ「手砲」と呼ばれたのである。

手砲が銃に進化するには、発射装置の装備が必要だった。トリガーとそれに連動する着火装置の発明が銃という機械の発生に繋がった。そこから先は良く知られていることである。

火縄を保持してそれをトリガーと連動させる簡単な装置から発展して、火打石を利用したものに進む。一回だけ火花を飛ばしても不発が多いので、ぜんまいと組み合わせて連続して火花を飛ばす装置が発明されるが、それほど時をおかずに、雷管が発明されてパーカッション方式が考案される事によって、手間が無くなった。

しかし、パーカッション式は稼働部分に対する衝撃が大きいので、衝撃を逃しつつ確実に作動する機構が模索された。冶金技術の進展と製品の品質管理技術の進展が合わさって薬莖が発明されると、銃に内蔵される稼働部品は劇的に増えた。ボトルアクションによる手動連発銃に至ると、銃というのは複雑精緻を極めた工業製品となる。

冶金技術が更に進展すると一転、今まで複数の部品に分けておく必要があった部品を一つにまとめて問題なく運用できる事から、銃に備わる部品が減ることになったが「突撃銃」の開発が更に状況をひっくり返す。

またぞろややこしい部品が増えた銃は、ある一時期工業製品としては不合格だといえないほどに不安定な「機械」になってしまいが、新たな発想や発明が工業製品としての銃を救う。またまた部品点数が少なくなつた銃は、それなりに安定した商品となって現代に至る。これは小銃の歴史である。

他方、拳銃についてはその歴史にいろいろと厄介な問題が突いて回る。

据え置き型の野戦砲も固定式の要塞砲を小型化したものが始まりであるから、銃火器の歴史とはそのまま小型化の歴史であると言い換えられるかもしれない。

要塞砲、野戦砲、手砲、小銃、榴弾拳銃、拳銃と歴史は進む。

そのなかで拳銃のみを概観すると、その歴史はつねに必要意義を問

われ続けて揺れ動いた歴史と言ってよい。

火縄銃が銃の全てであった時代、拳銃の存在意義は、騎兵による強襲火器であった。前装式しかない時代では、後代のカービン銃的発想で短小銃を作ったところで殆ど意味がないから、思い切つて小さい小銃を作ってしまったという発想から、結果として拳銃が生まれた。現代拳銃において重きを成す「護身具」としての役割は欠片も存在しなかった。

火縄が「生きている」状態でなければ発砲不可能な「拳銃」は護身具としては失格である。

護身具としての機能が必要な場面で火種を起こして火縄に着火してなんて手間をかけていたら、ブスリと刺されてお終いである。

フリントロックタイプの拳銃も、本質的な存在意義は騎兵用の火器であった。一発撃つてお終いでは、護身具としての実用性が低過ぎた。フリントロック方式では火縄よりも不発率が上昇したという現実も大きい。

ホイールロック式が発明されて不発の問題は一応は解決されたが、単発であるという問題は解決されなかった。長銃身の小銃であつても命中率の低さを数で補うのが普遍的戦法であつた時代であるから、拳銃の命中率もお察しくださいだった。護身具にはなりえない。

しかし、そのころからやたらと拳銃がもてはやされる事になる。

決闘文化の成立である。

実は、決闘が文化として定着して皆々様方において喧嘩だ、すぐさま決闘だと言い出すようになったのは中世後半の事である。既に拳銃が存在した時代だ。極普通の貴族であるならば、まあ簡単と言つてよいレベルで前装式拳銃が手に入る時代である。以降、拳銃の歴史とはすなわち、決闘の歴史と言ひ換えてもおかしくない状況となる。

戦場で弾幕戦法が普通となると、騎兵は拳銃を捨て、機動力を生かした迂回戦法や、マスケーターが近接して殴りあう状況での突破戦闘に戦法を移行したから、決闘文化が花開かなかつたら拳銃の歴史が途絶えた可能性すらある。

拳銃の命中率が悪く、しかも一発撃つてお仕舞いと言う根本的欠陥

は決闘という喧嘩に対してまことに都合がよかったのだ。拳銃を使った決闘による当事者の死傷率は1パーセントを越えなかったというから、決闘文化の本質が垣間見える。どんなに大きな問題を抱えた決闘であっても互いに当たらない拳銃を向け合って、バーンとやればそれで全て水に流せるというのであれば貴族社会における潤滑剤として非常に有益であったのだ。しよっぱい現実である。

本気で相手を殺したいと思う決闘であれば刀剣を使ったものになるわけで、記録上、刀剣を使った決闘は非常に凄惨な結末になることが多かったようである。かなりの確立で当事者双方が命を失ったというから、華やかさも優雅さも無い話である。

しかし社会情勢が不穏になると、拳銃に護身具としての能力を求める声が出てくる。何もない状況からであったら、護身具を拳銃に求めるなんて発想は出なかつたらうが、遍く貴族が決闘用に拳銃を所持している状況では、決闘と言いつつ起きるかわから無い事のために死蔵しているものに、別の役割を持たせたら便利、という考えはわからなくもない話である。このころから連発式拳銃が模索されることになる。

最初に考えられたのは単純に、銃身を多数持った拳銃である。多数の銃身から一発ずつ発射するのではなくて、同時に多数の銃弾を発砲して命中率をあげようという発想である。

マスケットでは2つ玉という、一つの銃身に2発の弾を込めて、一種の散弾銃とする考えがあったが、拳銃程度の銃身長でそれをやると火薬の爆発エネルギーが弾に伝わりきる前に銃口を出してしまい、威力が激しく減退してしまう事がわかったので、銃身を増やしてしまえという発想になったのである。

しかし、弾の挿入方法は変わらないので、一度発砲すると、再度使用可能な状況にするのは非常な手間となった。タマに使うかどうかと言うのが護身具なのであるからタマの装填が難しい事なんかはどうでも良いじゃないかとも単純には言えなかった。

装填したままでは火薬が湿気ったり、劣化したりでいざと言うときに発砲できないとなってしまうので、定期的に中身を入れ替える必要

がある。となると酷く面倒な話である。

貴族なのだから使用人に任せてしまえばいいではないかというのも乱暴な話だ。いざと言う場面で不発でしたといったら眼も当てられない。最終段階で自分の命を守るかもしれない道具である。それを他人に任せるのは、よほどの馬鹿である。よって、拳銃の整備に少なくない時間を取られる事になってしまう。

また多砲身拳銃は重く嵩張り、体裁も悪いという問題もあった。

それでもタツプアクション拳銃が発明されると、ある程度の期間は命脈を保つ事になる。

タツプアクション拳銃は銃身の数がそのまま持続発射可能な弾数になるので、護身具としては相当に実用的な武器となったのである。

タツプアクションの発想は現代的な考察からすると、リボルバーの薬室部分を分離して、銃身に振り分けるような発想であるから、つまり、リボルバー拳銃が発明される下地が出来たわけである。ペツパーボックス型リボルバーは、装薬と弾丸を一つの銃身に振り分けて、銃身を回す事でタツプアクションを単純化してしまったのであるから、最初からリボルバー形式が考えられなかった事がおかしいといえるかもしれない。

何故リボルバーが最初に開発されなかったかと言えば、工業水準が低かったために、同一口径の銃身を多数作ることが難しかったからで、中世の工業製品としては例外的に精緻な機構のタツプアクションも、ハンドメイドで作ることは可能であったから、口径の違う銃身にそれぞれ装薬を振り向ける機構のほうが都合がよかったのである。

ペツパーボックス型は極めて単純な発想であったが、それを実際に実現するためには技術革新が必要であったのである。

ペツパーボックス型から、薬室部分のみを回転させる事で全体としての軽量化を考える事も自然な流れだったが、薬室部分と銃身の隙間を、許容できる範囲まで狭める技術がなかったことで、普段現代人がリボルバーといわれて思い浮かべる拳銃の形に行き着くのは酷く時間がかかってしまう。ハンドメイドで現代的リボルバーの形を成した拳銃や、ライフルは、すでに1600年ごろには存在していた事が

確認されているが、恐ろしく高価であった。非常に腕のいい職人が半年から一年がかりで手を入れて創り上げるような代物だったというから、一般に普及することはなかった。

工業技術の進歩が発想に追いついたのは19世紀中期で、まともな大量生産工業製品としてリボルバー拳銃が世に出たのはコルトリボルバー・ウォーカーモデルが最初だと思われる。

例外的に17世紀中期にイギリスでスナップハンズ式のリボルバー拳銃が一定数量産されているものの、やはり職人の手によるもので、価格を抑えてそれなりに多数を備える必要性から精度が甘く、中には薬室から発射された弾が銃身に詰まって、その衝撃で銃身だけ前に飛んでいった事故が報告されているから実用性ではクエスチョンをつけざるを得ない。

ウォーカーモデルが真に実用的な拳銃として体裁をとれたのも、工業技術の発展による一定品質の部品が大量供給可能になったという事実以外に、雷管の実用化という科学技術の進展と言う部分も大きいから、拳銃が現代の拳銃としての姿を取るにはまことに多くの工業化学技術の発展が必要だったわけである。

さて、イングリッドが見つめる拳銃である。

パークァッション・リボルバー式で、撃鉄が外にないのだからダブルアクション専用と言う事で間違いないだろうと思われた。実際に先ほどの動作確認では、間違いなくダブルアクション特有の動作を見せた。

イングリッドが驚いたのは、拳銃のフレームが一体整形をなしていることである。驚くべき事に、パーテーションラインが見当たらないのだ。しかも通常はフレームに捻じ込む形になる銃身すら一体整形と言う驚くべき形態を持っていた。違和感を感じないわけがなかった。

センターガンとリボルバーの切り替えを行うトグルも、ムクの鉄材に唐突に開けられた穴から顔を覗かせているに等しい状況だ。非常に凝った方法でうまい具合に分け目を隠しているのかと思ったイン

グリッドは、オーレリーから受け取ったそれを右に左に裏返したりして——無論、銃口は常に人がいない場所に向けられたままである——工業製品として当然あるべき分割部分を探したのだが……。

「……分解できそうにないの」

赤い眼をくりくりと躍らせながら、驚きを隠せずにイングリッドは呟いてしまった。まったく信じられない事だった。

稼動部分があるのである。つまり、それを動作させるための機構がなければおかしい。その部品を組み立てるには拳銃の外側を分解できなくてはいけない。

イングリッドが知っている拳銃はモナカのように外側を分割できた。皮の部分が拳銃の外観をなす躯体であり、アニコがシリンダーと撃鉄を動作させる機構となる。

そういう構造でなければイングリッドの知る常識の範囲内では拳銃は製造できない。まさかボトルシップではあるまいに、トグルスイッチの顔を見せる小さな穴からちまちまと部品を押し込んだとも考えられない。イングリッドが見たところ、驚くべき事に、シリンダーとそれを回転させる支柱も一体整形だった。その外側のフレームも一体整形であるから、どうやってシリンダーをフレームに押し込んだのか想像も付かない。トグルスイッチについても同様であった。

あまりにも得体の知れない構造に気がついて、イングリッドは背筋を震わせてしまった。背中に冷や汗が出る気分だった。

そもそもかなり複雑な外観を持つ躯体が銃身まで含めて一体整形である。外側に大きな銃口を開けた2本の銃身はまだわかるとして、手元の構造はさっぱり理解出来ない。見たところトグルスイッチ、トリガー、撃針。それらが顔を見せる部分しか穴が空いていない、内部に稼動部分を持った中空一体整形製品というわけがわからない構造なのだ。

3Dプリンターを使えば、そういう構造を再現することは不可能ではない。しかし稼動部分を内蔵することはほぼ不可能だ。3Dプリンターが更に技術的に発展すれば、開放不可能な中空部分にギアやカム等の稼動部品を内包する事も将来的には可能となるかもしれない

が……。

イングリッドは拳銃にせよ小銃にせよ、生産する現場を見たことがあった。というか実際に生産した。生産現場で作業者として従事したのだ。

ハンマーを踏んで部品を製造した事もあるし組立工場で旋盤を回したり、ボルトを締めたりした事もあるから、単純な発想で、単純な外観を持つリボルバー拳銃が実は相当に高度な工業技術の賜物である事を理解している。

リボルバー拳銃の存在を手にしたこと、ハルケギニアの工業技術レベルを19世紀後半と見積もったイングリッドだったが、その構造の特異さ、いや、異常さに思考が追いつかなくなりそうだった。地球の技術ではほぼ再現不可能な構造を、イングリッドの手の中にある拳銃は見せている。頭がどうにかなりそうだった。

困惑するイングリッドを見てオーレリーが小さく笑みを浮かべた。

「この拳銃は、テルアメイム工房一の職人。エマメルが作った一品物でございます」

その言葉にどう反応して言いか判らないイングリッドは動揺したままに、手を出したオーレリーに拳銃を手渡した。

オーレリーは拳銃を出来のいい美術品を扱うような仕草で、ゆっくりとまわす。

「見てのとおり、美しい設えでございます。エマメルは腕の良いトライアングルメイジでございますから」

グリップをイングリッドのほうに突き出して見せる。

「この通り。木製の滑り止めのみは別の職人の手によるものですが、全体の構造は、土魔法で一気に錬金した物でございます」

その言葉にキュルケが感嘆の声を上げた。

「へー。すごいよね。エマメルって」

その声にイングリッドは顔をキュルケに向ける。

「ん……その、すごいとなのかや、それわ」

衝撃が抜けることなく、それが行動にまで影響が出てしまったイングリッドは、ぎこちない仕草でキュルケに視線を合わせる。おかしみ

を感じさせるイングリッドの姿に刹那首を傾げて、頭を捻ったキュルケは、ふと、何かに思い至って勝手に納得したように首を振り、小さく笑みを浮かべた。

「うん。すごいわこれ。コレだけ複雑な形と構造を持った物を破綻なく錬金出来るのは、ただトライアングルメイジだって言うだけでは無理よ。」

相当にイメージを強く持って、作りたいものの構造を隅々までわかって、確固たる設計を頭に描かないと、まともに動くものにならないよ」

その言葉を受けて、オーレリーが大きく頷く。

「そのとおりです」

オーレリーはエマメル作の拳銃をマットの上におくと、僅かにかがんでカウンターの下をまさぐる。すぐに目的のものを手にして、それをカウンターのの上に置く。

「こちらが一般的な拳銃になります」

無骨な外観を持つそのリボルバーは、イングリッドがぱつと見ただけでもごく普通の構造を持っていた。

つまり、各所が個別の部品に分けられて、ねじ止めされていたり、捻じ込まれていたり、工業製品としてごく普通だった。

外見上、地球のリボルバーと顕著に異なる点としては、中折れ式と思しき支点がトリガーの上であり、どうも銃身を跳ね上げる形態のようである部分が不思議だった。

「ん………こいつの」

オーレリーが頷く。

「はい。部品を各々の職制に応じて錬金する、大量供給品ですから、どうしても精度が甘くなります」

フレームとシリンダーの間を指差す。

「このように、どうしても遊びが大きくなりますし、仕上げも、やすり掛け等の手間をかけてますので荒くなります」

外に露出したハンマー部分をイングリッド側に向けると、分割線を指差す。

「部品を組み付ける作業は手分けして労働者が行いますから、それだけ大量に生産できます。つまり価格もそれだけ安くなるわけですが、精度が落ちますから、能力もそれなりと言う事ですね」

その「大量生産品」と「エマメルの拳銃」を見比べたイングリッドはシリンダーを指差した。

「つまり威力も低いというわけじゃない」

その言葉に一瞬、大いに驚いたオーレリーは一転、笑顔を浮かべて頷いた。

「そのとおりでございます」

その言葉に眉を跳ね上げたルイズが慌てたようにイングリッドのすそを引いた。

「えっ！なんでそれで威力が小さいとか言う話になるの？」

イングリッドはルイズに身体を向けて視線をあわせ、一瞬、それを外してオーレリーに向ける。

それで意図を察したオーレリーが拳銃を差し出した。イングリッドがそれを受け取った時点で彼は、直ちに身体を右に……イングリッドから見て左に避けた。それを確認して、イングリッドは銃身を店の奥に向けた状態でルイズの顔の前に差し出す。

「見るが良い。この隙間の広さを」

疑問符をあからさまに顔に貼り付けたルイズが頷く。

「うん、見たわ。大きな隙間……なのかしらね？」

その言葉にイングリッドは苦笑する。確かに、その銃身とシリンダーの間にある間隔というのは、例えばドアと壁の間にある隙間などと比べればずっと小さな隙間であった。

「うむ。この隙間と言うのはな、シリンダーが回るためには必要不可欠なものじゃが」

そう言いつつ銃を持ち上げて店の奥に差し向けて引き金を引く。

「とまあ、トリガーを引けばシリンダーが回転し、弾が発射されるが」

左手で住を手にして右手を銃身に沿え、再びルイズにハンマーを向けて銃を差し出す。

「シリンダーと銃身の間が広いとだな、発射薬の爆発したガスが隙間から漏れて、それだけ威力が落ちるのじゃ」

左手で「エマメルの拳銃」を指差すとルイズも視線をそちらに移す。キュルケもタバサもそれに釣られて視線を動かした。

イングリッドの経験では、先込め式のパーカッションリボルバーに装弾する際にグリスを塗りこむような作業が必要だったはずだと思いつく。それを手抜きすると、発砲した瞬間にガスが噴出して顔を焼いたりする事故に繋がるのだ。

「こちらは殆ど隙間がないじゃろ。じゃがシリンダーの大きさは対して変わらない。ということは発射薬の量もそれほど変わらないはずじゃな。」

と、なればじゃ」

タバサがそれに被せて後を引き継いだ。

「力が伝わる量が多い」

イングリッドはタバサに視線を合わせて小さく頷く。

「同じ発射薬の量なら、隙間が小さいほうが威力は増すの」
その説明にルイズは「ほへー」と声を上げた。

オーレリーもキュルケも自身の驚愕の表情を勘違いした事に理解が及んで大いに納得したイングリッドだった。

どうやら、イングリッドが「エマメルの拳銃」に驚愕したのは、その精巧なつくり故と理解したのがオーレリーのようである。

イチから魔法で創り上げた故に精巧にして精緻なつくりを見せている事に、イングリッドの理解が及ばずに驚愕していたのだと理解したのがキュルケだったようだ。

その勘違いの説明であっても、イングリッドが感じた驚愕の説明は得られたからそれでよかつたとも言える。結果論ではあるが。

魔法。

錬金とは土魔法の持つ能力の一つであるとイングリッドは理解している。しかし個人のイメージをココまで再現可能となると凄まじいの一音である。そういつた部分では明らかに、現代地球の工業技術

の上を行っていると断言しても間違いないと思われた。

どこまで技術レベルが優越しているかまでは理解しがたいにせよ、しかし、当然と思える疑問をイングリッドはオーレリーに向ける。

「しかし、この拳銃は、日常的な整備をどうすればいいのじゃ？」
右手に持った拳銃をカウンターに置きつつ、左手で再度、エマメルの拳銃を指し示す。

オーレリーはエマメルの拳銃を手を持った。

「かなり強固な『固定化』がされていますから、殆ど整備は不要ですが……」

オーレリーは僅かに困った表情を顔に浮かべて、首を捻る。

「1000発程度の射撃でどうなるものでもないのですが、何か問題が起きれば工房に持ち込むしかないでしょうね」

固定化。

まったく理解出来ない概念が出てきてしまい、イングリッドは一瞬、眉を跳ね上げる。無表情のままルイズに顔を向けると、彼女はイングリッドの疑問を察したようであった。小さく頷く。

「後で、ね。教えるわ」

その言葉に僅かな溜息を吐いてイングリッドも小さく頷き返した。

その2人の交感の意味を理解できなかったオーレリーは再び首を傾げた。

初めてのお買い物（4）

テティエンヌはブティックで散々に大騒ぎをした末にイングリッドが——実際に購入したのはルイズだが——選んだ武器は、拳銃2丁にその弾薬一式その他。何の変哲もないロング・ソード（バスター・ソード）とその他一式。装飾も何もない、実用性重視のショート・ソードと剣帯。さらにはサブのサブとしてダガーを複数選んで終わった。

拳銃には重厚なつくりのガン・ベルトとホルスターを、剣にはそれぞれに鞘をつけた。

地球の現代人にとって、剣を購入して「鞘をつけた」と改めて言うのは不思議な感覚だが、イングリッドが駆け抜けた歴史の中で、実際に剣が戦場を支配していた時代では、鞘をつけることと剣を買うこととは別次元の話であった。

剣が戦士や兵士のメイン・ウエポンであった時代、それは基本的に、所有者の背中に剥き身で背負われるのが普通であった。どう考えたところで所有者自身の身長ほどもある大型の剣を鞘に収めて、さて使用するのだという瞬間に咄嗟の動作で引き抜くのは不可能事である。よって鞘とセットの剣と言ったら装飾剣ぐらいで、後は気取った騎士が鞘に入った剣を馬にくくりつけるか従者に持たせるかといったところだった。畏まった場で礼装としての装備の場合はまた別の話ではあるが。

馬にくくりつけた場合は、装備位置をうまく調整して自力で引き抜ける工夫がされていた場合が多い。だが、それでも行軍中に不意を打たれてメイン・ウエポンを装備出来ない状況で敵を迎え撃ったという記録が多数残っていたりする。歴史を紐解くと、そういう状況でなすすべも無く重傷を負った世界的大帝国の主などという例まで飛び出してくるので、武器をどうやって携帯するかという話は現代人の想像以上に重要な話であったりする。

その手の話では、サブ・ウエポンを咄嗟に抜き放って卑怯な敵を迎え撃ち、苦戦の末に退けた騎士は勇敢にして優秀であり……みたいな

描写が残っているが、それがどうしたという話でもある。

メイン・ウエポンを火急の際に危なげなく用意できる者であれば、不意を打たれたが鎧袖一触でした。済んだ話を、あたら修飾する必要があるのでお話にならない。従者に持たせた場合でも、一人で抜き放つのが困難な事には変わりないから、不意の状況ではやはり剣が無いという状況に置かれたようである。それもどうよという話である。

よって鞘なんてものは存在しない剣が主流だった。リカッソがついたグレート・ソードとか刃先が手元より広いサーベル（直刀である）なんてのも普通だったし、戦闘における実用性を重視したバトル・ソードでは剣先が敵に深く突き刺さらないように返しがついていたりするのもあった。そんなものどうやって鞘に収めるのだと言う騒ぎになるし、そういった形状の剣は鞘に収めたところで抜くことは出来ないだろうとなる。よって戦闘の可能性が無い長距離行軍時などは油をしみこませた布を巻いて刃を保護するぐらいが精々で、護身用のショート・ソードやダガーに鞘がついていた程度である。

今回のお買い物でショート・ソードはともかく、バスター・ソードに「鞘をクレ」と言つてすぐさま「かしこまりました」となったのは、テイエンヌⅡブティックであったからとしか言いようが無かった。無骨な実用剣にも残らず余さず鞘を用意しているのはテイエンヌⅡブティックの立地故であると言え、或いは店長の裁量故とも言える。剣を売る上では無駄になる可能性が高いものを、客の求めに従って如才無く用意できるのは店長が優れて商売能力がある証明だった。そのことに気がついたのはタバサのみである。タバサは密かにこの店を鼻屑にしたことを誇った。タバサの密やかな感情の起伏に、誰も気がつかなかったがそれでよかった。その自己満足はタバサにとって、自身の実力を再確認するうえではことのほか気持ちが良いものだった。

欲しい物が自身の言葉に従って遺漏無く用意される。ルイズにとっても気持ち良かった。キュルケもイングリッドも感心する。その結果にオーレリーも十分な満足を得た。皆、幸せな結果を得られた。良い買い物になったといえる。

ただし、シヨート・ソードとダガー。その鞘と剣帯以外は全て学院に別途届けてもらう事になった。身長150 سانت前後のイングリッドが全長180 سانتに達するバツソロング・ソードを担いで歩けば、邪魔である以上に滑稽である。ルイズたち4人組のなかで体格的にバツソを担いで不都合がおきそうにないのはキュルケであるが、それを頼んだところでキュルケは断るだろうことはイングリッドにも想像がついた。

だいたい見た目麗しいキュルケがバツソを担いでも、外観上の収まりが悪い事には変わりない。やはり滑稽なだけだろう。地球において特殊な趣味を嗜む者が見れば、そうではあっても、大いに満足する外観を呈しそうだと言グリッドは一瞬夢想したが、ここはハルケギニアであるので試すことはしなかった。まあ、本人が嫌がるであろうことも想像がついたことであるし。

幾ら体格的に優るキュルケであっても、所詮は女性に過ぎないのだ。力仕事をこなす上で体格的に恵まれたというならともかく、キュルケの場合はモデル体型的な意味での優秀な外観なのだ。それに重量20キログラム近い剣を押し付けるのもどうかと思えるイングリッドであった。

拳銃に關してもそのまま持って帰るのは問題があった。

ルイズたちはまごうことなく貴族であるので、この世界における立場上の話からすれば、拳銃を抜き身で持って歩いてもなんら問題はない。

しかし、貴族が、しかも子供に過ぎないルイズたちが拳銃を持って歩くのはやはりおかしい光景になるのがハルケギニアでの常識である。また、杖を抱くものが拳銃を持つ理由はないというのがこの世界での常識なのだ。貴族の護衛があえて拳銃を携帯するのはありえるが、ここにある4人組を俯瞰して、辛うじてそう見えなくはないかもしれないと思えなくもないイングリッドであっても、拳銃を持つ事による外観の変化は収まりが悪かった。立場、ことのほか見栄を重視する貴族であるルイズには、イングリッドがごっつい拳銃を腰に挿すことは、彼女の美意識上、到底許容できる事ではなかった。

拳銃にアレコレと付属品が多いのも問題となった。清掃道具や整備するための道具が大量に用意されたので、それを担ぐとなると大騒ぎである。なにしろ貴族——つまりはメイジであるルイズである。そんな彼女の部屋には似つかわしくはない道具。つまりは工具一式まで一から揃える必要があった。

整備等殆ど考えなくていいよという触れ込みのエマメルの拳銃を選べば、かなりの部分を省けるはずであったが、それを拒んだのはイングリッドである。それについてルイズが不満げな顔をしたが、その手の武装に関して知識が薄かったためか、イングリッドの意見が通った。自身を、と言うよりもルイズを守るにあたって使用の可能性がある武器が、自身の責任に於いて整備できないというのはイングリッドには看過できる事態ではなかった。よってグレードが落ちるにせよ、所有者自身が手をかけることが出来る量産品の拳銃をイングリッドは選んだ。それがために拳銃を買っておしまい、ということにはならなくなったのである。

イングリッドが思い出すところ、確かにあの秀麗なルイズの部屋にドライバーやペンチがどかんとばかりに置いてあっても違和感を感じるところではすまない。だから、拳銃を購入するに当たってやたらと荷物が増えることは仕方ない側面があった。まごうことなく精密精緻な工業製品の一種である拳銃を購入して扱うのだとなれば、日常的なメンテナンスは避けて通れぬ道であるから、アレコレ物が増えることはしょうがない。

剣についても清拭道具一式や整備道具が必要であることには変わらない。拳銃に比べれば用意するべき道具は少なくてすむのだが、実際に使用して敵を打ち倒せば刀身とグリップがガタツク結果になったりするのは避けては通れぬ話なので、刀身を固定する楔を打ち込むためのハンマーとかは必須になる。そういうものがルイズの部屋に存在することは想像がつかないので、ウエスやら清拭油等と含めてセットで購入することになった。

結局、戦場においてはサブ・ウエポンに過ぎないショート・ソードがこの場におけるイングリッドにとってのメイン・ウエポンとなっ

た。イングリッドの存在のあり方からするとメイン・ウエポンが剣であるというのもまた滑稽な話であるのだが、今のところは誰も知りえない話である(何しろルイズにすら知らせていない事実なのだ)ので、それはそれでしようがない話である。

貴族の従者が捧げるのがショート・ソードと言う姿は、ルイズにも辛うじて妥協できる形であった。本当はルイズ自身の美意識上、イングリッドにはイングリッド自身の外観に似合うだけの装飾が施されたレイピアあたりを持たせたかったようだが、それについてはイングリッドが拒否した。ルイズもキュルケも驚くべき事に、イングリッドはルイズの強弁に折れなかった。

余計な物を持つては逆にイングリッド本来の強さを阻害しかねないのだからイングリッドも強硬だった。装飾剣を持つてそれが邪魔な故にルイズにいらぬ怪我をさせましたでは、ルイズの護衛こそが本義と定めた現状ではお話にならない。

よってルイズの従者を詐称するに当たり、武器を持たなければならぬ事に妥協点がないというなら、イングリッドが実際に携行する武器に関して、一切の妥協の余地はなかった。学院内部ならいざ知らず、町に現れてイングリッドの立場を一々詮索されては面倒が多すぎるから、イングリッドの対外的立場はルイズ専属の従士ということになった。だから武器の携帯は必定だった。

これはテティエンヌ・ブティックでオーレリーがイングリッドに対して思う誤解にルイズが気がついて、急遽そうしようとなった事であり、結局、オーレリーの誤解が解かれる事は無かった。オールド・オスマンとの会話からすると、誰が見ているか判らない街地で、声高にイングリッドが使い魔でございませと叫ぶのはリスクが大きそうであったから、オーレリーの誤解はまことに都合が良かった。

学院内部の津々浦々までイングリッドが使い魔であることが知られている現状は、後々いらぬ問題を招来しそうではあったが、それについては今更仕方が無い話と嘆息するしかなかった。人間の使い魔というのが色々と問題を引き起こしかねない微妙な存在だなんて、ルイズたちはあの時点では知らなかったから仕方が無いのだ。

今の今まで明らかな殺傷武器を携帯する習慣のなかったイングリッドではあるが、俄かに判明した自身に発現した特殊な能力によって、武器の良し悪しが判別できるようになった現状である。イングリッド自身が選んだショート・ソードがベストではないにしろ、モア・ベターであるという判断があった。その能力が判定するところから言っても、装飾が施されたレイピアなどはそもそもイングリッドの選択肢に入らなかった。

イングリッドにとってのすべての真実を知っているとはいえないタバサはしかし、今まで見てきたイングリッドのあり方からすれば彼女がショート・ソードの携帯に固執するのは納得がいく話であった。タバサ自身のイングリッドに対する見立てに間違いがなかったようにだという点で安堵もした。そしてまた緊張もする。イングリッドと言う存在がなんであるかに対してタバサの想像が定まらなかった。

実際のところ、イングリッド自身に存在しない外部一般の美意識からやってくる、イングリッドの自覚がない、彼女の外見上にある特徴故に、彼女の腰にぶら下がるショート・ソードと言うのは違和感があるどころの話ではなかった。この点についてはルイズとキュルケが全面的に正しかった。

美しい肢体にそれを覆う美麗な服。その腰にぶら下がる無骨なショート・ソード。収まりが悪い所ではない。道行く人が思わず振り返るほどには滑稽な姿だった。そういった悪意のない視線はイングリッドにとっては脅威ではないので、彼女自身が特別に気をまわすことは無かったが、イングリッドに好奇の視線が向けられるたびに、ルイズは身が竦む思いだった。なんとしてでもレイピアを押し付けるべきであったかもと小さな罪悪感がルイズを苛む。ルイズにとってのかけがえのないパートナーであるイングリッドが滑稽な姿を――ある一側面で、みすばらしいと言い換えることが出来る姿を曝すのは、つまりルイズ自身の甲斐性のなさの決定的な表明となりかねないのだ。

従者を着飾らせることは出来ても、それが持つ武器はケチとなればイングリッドの主人たるルイズに対する評価が微妙になる。この場

合、従者たるイングリッドが着る服が、実はイングリッド自身の自弁によるものであつて、ルイズには何の責任もないのだという事実は救いにならない。他人がイングリッドを見てどう思うかが重要であつて、真実は関係なかつた。

ルイズにとつては自身の評価がどうかなんていうのは今更どうでも良い話なのだが、それによつてイングリッドの評価が結果的に貶められるかもしれないという想像はルイズには我慢できなかつた。

なかなかややこしい葛藤を思うルイズであつた。

イングリッドの外見に影響を及ぼさない部分で、ダガーがいくつも隠れているのは周囲の人間にあずかり知れぬところである。腰にまわした実用一辺倒のベルト。そこにぶら下がるショート・ソード。背中側に左右から互い違いに収まるキドニー・ダガーが2振り。周辺の視線はそこに集中してしまい、それ以外が想像できない点では、そうして隠されたダガーの存在意義が増すというところである。そうしてイングリッドの両脇には、服に隠されたミセリコルデが収まっている。

またブーツに隠してファイイン・ダガーが収まる。ダガーと言うよりヒ首だが、サブのサブのサブといったところで、通常のヒトであれば、闘争における最後の手段となろう物だつた。イングリッドの普段のファイト・スタイルからすれば、拳の延長線上で扱えるそれこそが実はメイン・ウエポンではないかという想定がイングリッドにはあつた。こればかりは実際に死しあう合段階にいたらないと判つたものではないが。

パサージュ・クローヴェルを歩く4人はイングリッドに対する本来のお買い物をこなすべく、精力的に商店を冷やかしにかかつていた。実際に冷やかしているのはルイズとキュルケなのだが、商品を審議する段ではタバサも積極的に商品に対する批評を行う姿はイングリッドを驚かせた。

納得のいく商品を見つけては注文するルイズ。キュルケが小切手を切りまくる。当初、ある程度の葛藤を見せたルイズだったが、テ

テイエンヌルブティックで予想外の出費を強いられたので否応がなかった。請求の段で実家からどういいう問い合わせが来るかについて頭を悩ませつつあるルイズである。

飼葉を注文しました。専用の厩舎を設えましたなら、使い魔召喚の後にやってくる請求書としては自然であるが、ベットやダンスが必要ない使い魔とはなんぞやとなると弁解の仕様もない。どう誤魔化すべきかとルイズは頭を捻る。ましてや武器である。馬用の貫頭鎧とか、チャージング・ピッケルならともかくとして、剣や拳銃を持つ使い魔ってなに？という話である。

武器の購入にラ・ヴァリエール家の小切手を切って、今、身の回りの品に学院の小切手を使っているのは大失敗だったとルイズは思い始めていた。逆ならある程度は誤魔化せたのではないかと考えたのだ。自身の欲求に従った散財だというなら、それはそれでルイズの立場が悪くなりかねないが、少なくともイングリッドに対して火の粉が降りかかる可能性を小さくすることはできなくはないかも……そういう想像である。今更な話ではあったが。

イングリッドが健康で文化的な生活を営む上でのある程度のお買い物になったと満足しつつあるルイズとキュルケは、いつの間にか手にしたガレットにかぶりつきながら、大きな川のほとりを歩く。そうは言ってもイングリッドも押し付けられたガレットを口にする。素朴な味わいを楽しみながら緑が覆う堤防道路を眺める。自分の顔ほどもあるガレットと格闘するタバサは見なかったことにする。あの小さな体のどこにあれだけのものが納まるかについての議論が必要ない気がしたイングリッドだが、まあ、ファンタジーな話だからと意識の外に押し出す。自分達のあり方からすれば、あれぐらいは常識的な光景であろうと思うイングリッドだった。

穏やかな周囲の光景を眺めるとはなしに眺めつつ、ガレットを飲み下したイングリッドはたわいのないことに話を咲かすルイズとキュルケに声をかける。

「さて、ある程度は事をこなしたと思うのじゃが、この後はどうするんじや？」

振り返りつつルイズは肩を揺らせながらイングリッドに答えた。

「そうねー。どうしよつか?」

穏やかな流れを見せる大河は、多くの船が行き交っている。明らかに動力があり、おそらくはスクリューで推進しているであろう事実が気がついたイングリッドだが、それに関する考察は放棄している。もうどうにでもなれという感覚だった。

自分達が歩く堤防に向かい合った反対側の岸に、栈橋やら荷役場やらがあつて、大きなクレーンが唸りをあげている光景は無視する。その奥に水蒸気を盛んに吹き上げる工場らしき建物がひしめき合っているのはイングリッドの目には映らない。そういうことにしておく。そうしないとイングリッドの精神的平衡がどうにかなりそうだった。

楽しそうな表情を浮かべて首を傾げるルイズの横で、頭の後ろで手を組んだキュルケが空を振り仰ぐ。清純な空気が長く後ろに垂らされた髪の毛を撫でて揺らす。

「んー、後、なんか買う物あつたっけ?」

特段の目的無く散策するには都合が良い堤防道路は、控えめな装飾がされていて気持ち良かった。道路上に張り出した木々の落とす陰が、歩み続ける4人に千路に落ちて、陰影が心地よい。対岸の喧騒も、緑を抱く土の堤防が柔らかく受け止めて、何某かの気の利いたBGMのように周囲を渡っていく。川面をすべる船が切り裂く水の音も、岸を打つ波の音も計算され尽くしたいっぱしの芸術のようであり、それを耳にしつつ歩く人の姿は少なくは無かった。

平民が殆ど全ての散歩道だが、自動車走つても不都合を感じないだろう広さを持つ散策路は、4人の部外者が歩んで邪魔になることはなかった。対向する者達が袈裟な仕草で4人を避けていくことは、まあ互いの立場の違いを思えば仕方が無い事であろうという思いもイングリッドにはあつた。

ルイズの従士であり護衛であるというなら、ことさらルイズに近づく者がいない現況はある意味気が楽でもあつた。他人との不意の交歓を楽しむのも気軽な散歩の醍醐味であるという考え方があることをイングリッドは知っていたが、知っているだけであり、実際にそう

いった状況が現れる場合は戸惑うばかりであるから、現状はそういう意味でもありがたかった。

しかし、気軽ではすまない空気が蟠っている事に、イングリッドは徐々に不機嫌を募らせつつあった。アール・ド・トリステインを出て、気が向くままに町を歩く4人に対し、あからさまな感情を持つて後を付回す人間が複数いることは、イングリッドには不満であった。多少のトラブルはあったが、イングリッドの自覚がある範囲内では人々の反感を買うようなことはなかった筈であるという自己分析があった。明らかに目的が違う意識が互いをけん制しあいつつ後方を、或いは側方を併走する状況は、イラつくどころではなかった。

しかし、街地である。人跡未踏の大森林の中とかいうなら問答無用で良いが、人々の平穏な生活がある場所では対応が難しい。イングリッドの持つ力では穏当な対処と言うのは困難なのだ。

緊張感を徐々に高めつつあるイングリッドに気がつくことなく、ルイズがキュルケに向き合う。

「宿は……いつものところで良いし、夕食には気が早いしねー」
その言葉にピンと来たとはかりにキュルケが右腕の指を立てた。

「あつ、それならさ、最近評判だって言う、パリー・デ・ミ・カン水上レストランなんてどう？ちよつと遠いけど、チューブ地下鉄を使えばイイ時間にたどり着けるのではないかしら？」

その言葉にルイズは首を傾げる。

「えっ、それは良いけど、ちよつと早すぎるんじゃないかしら。今から向かったら開店直後ぐらいじゃない？」

ルイズの疑問にキュルケが肩を竦める。

「予約無しに押しかけたら迷惑になっちゃうじゃん。だったら早めにたどり着いて席を確保したほうが、ね。ねえ、ほら。私達、その……貴族だから、さ」

苦笑いを浮かべながらキュルケはイングリッドに視線を移す。ルイズも俄かに苦笑いを浮かべて同じようにイングリッドを見た。その突然の行為に打たれて、イングリッドは足をとめて眉を跳ね上げた。

「……我が、どうかしたかや？」

その姿を認めて、ルイズもキュルケも立ち止まって肩を竦めて小さく笑いあう。その横でタバサが杖に身体を預けつつ顔を傾げた。他事に気を取られているイングリッドには前後の話が繋がらなくて、戸惑うばかりだった。タバサの姿を認めて同じように顔を傾げる。

その仕草を見て遂に2人は大きく笑った。眼を細めて顔を震わせる。キュルケは腰に左手を当てて、右手でお行儀よく口元を隠した。ルイズは文字通り腹を抱えて笑う。そんな2人を呆れた表情でタバサが眺める。

そしてイングリッドは……。

イングリッド以外の3人が気がついた瞬間にはルイズとの距離をつめて、その前に立ちふさがった。その前には怪しい風体の男達が現れていた。堤防を駆け上がってくる者もあり、そいつらは各々に剣呑な獲物を引っさげて、或いは手にしていた。

突然の出来事に反応が出来ないでいるルイズとキュルケは脇に置くとしても、タバサも撥ねるように身をずらしてキュルケの前に立つ。大きな杖を構えて身を半身に傾げて腰を低くする。完全な戦闘スタイルであった。イングリッドはそれを横目に、ルイズの前で両足を軽く広げて両腕を弛緩する。ただ風に揺れるままにゆらゆらと揺らして首を回して周囲を観察する。

突然の状況の出現に、周囲の人々は蜘蛛の子を散らすように逃げ惑う。大変に反応が良かった。そのことは、この手の修羅場の出立がさほどに珍しい事ではないと示しているようでイングリッドは頭が痛くなった。それほどまでに治安が悪いのだろうか？

「ルイズや。これな事は茶飯事であるのか？」

無表情でナイフを構える男の前に、イングリッドは疑問を口にす。はつきりと困惑に顔を染めたルイズが小さく首を振る。

「そんな……ありえないわ。トリスタニアでこんな事……。初めての経験だし、見た事もないわ」

キュルケがその隣で首を振る。

「平民同士が喧嘩とか、何かの諍いの延長で一人の人が大勢に囲ま

れるとか言うのは見た事あるけど……貴族に正面切つて喧嘩を売
る平民なんて知らないわ」

ふむ、と一つ頷いたイングリッドは更に強く周囲を警戒する。貴族
イコールメイジである事実から一つの推測をなしたので。気配を探
る範囲を一気に大きく広げた。予想通りに厄介な存在が川中の砂洲
にある、ささやかな木立の中段に存在する事が知れた。穏当な対応の
可能性はその瞬間に失せてしまった。血の雨が降るかもしれないと
イングリッドは嘆息する。

「さて。こういう場合はどういう対応が正しいのじゃルイズよ」

首を揺らしつつイングリッドはルイズに尋ねた。言葉の持つ意味
が広過ぎるためにルイズは即答できずに息を呑む。イングリッドは
殺意を隠さない男と正対して、小さく苦笑いを浮かべる。

「あー、そのな。我がヤツラを叩きのめして構わないのかと、まあ、
そういうことじゃ」

貴族に害をなそうという相手である。地球の中世世界であつても
問答無用にずんばりんが許される状況である。学院で起きた馬鹿
らしい騒ぎを思い出せば、ハルケギニアでもそうなんだろうとイング
リッドは想像する。

とはいえ一国の首都であり、また、地勢的にも大騒ぎが許されるか
微妙な場所である。それなりに高級なファサードが並ぶ場所で、一方
的な虐殺劇が許されるかどうかまでにはイングリッドには想像がつか
ない。ルイズが手を出さずに従士たる自身が手を出して言いかと
いう疑問もある。無礼を働いた平民を貴族や騎士が無礼討ちにした
実例をイングリッド自身もいくつか見た経験があるが、その場の作法
と言うか、順番と言うか、そうしたものは知らなかった。別に知りた
いとも思わなかったことであるし、そういった出来事に直接巻き込ま
れる事態はイングリッド自身の経験としてはありえそうも無い事
だったから、観察するにしてもおぎなりだった。それがこうした場で
問題になるとは想像もしなかった事もある。どう対応して良いかわ
からないというのがこの場のイングリッドの正直なところであった。

4人を取り巻く10人ほどの男たちはしかし、どこも無く躊躇いが

ちに身を進ませていた。包囲を狭めるといには動きが緩慢だった。ひどく戸惑っている感情が透ける。川中でも妙な動揺があつて、既に逃げ腰なのがわかった。どういう理屈であろうか。イングリッドも戸惑う。張り切つて喧嘩を売つてきたのは相手なのに、逃げ腰とか意味不明である。

そういった情勢の機微に理解が及ばないまま、ルイズが動揺に口を震わせたままイングリッドに視線を向ける。

「……うん。その、ね。まあ、切り殺されてもしようがないと思うんだけど」

動揺に身を竦ませても、そこに恐怖は無かった。ルイズに胆力があるのかと言えばそうでもなくて、単純に急展開についていけないだけだろうというのがイングリッドの見立てである。同じように驚愕に身を竦めていたキュルケではあつたが、既に立ち直り、今では指揮棒のような短い杖を引き抜いて、あからさまに楽しそうな笑みを浮かべて身構えている。それを認めたタバサが身体をずらして位置を変えらる。いつの間にかルイズを他の3人が囲んで守る態勢が自然と出来ていた。

イングリッドは川縁を駆け上がってきた男に相對して、さらに射線を川中の木立に通している。両方に対応可能な立ち位置だった。キュルケとタバサは堤防道路を遮つて左右に対応している。2人とも実戦慣れしているのは明らかだった。特にタバサは堂に入っていた。歴戦の戦士を思わせる態度であつた。

唐突に状況が動いた。

川中で閃光、硝煙、銃声の順で反応が発生した。こちらにいる者達の耳に、銃声が届くか否かの微妙なタイミングでイングリッドは気だるげに右手を振るつた。銃声が彼らの耳を震わせるのとはほぼ時を同じくして、軽い擦過音が3人と男達の間を駆け抜ける。それだけだった。それ以外に何も起きなかつた。

その事実。

男達が予想していた結果が起きなかつた。まったく、男たちの想定範囲外の結果に、彼らはまったく反応できなかつた。彼らが予想し

た反応は、イングリッドが血を噴出して崩れ落ちるような姿のはずだった。初撃が外れるにしても、射撃音に着弾音。それらが相次いで鳴り響けば何某かの混乱が発生するだろうという目算が男達にはあった。

現実には何も起きなかった。

真実何も起きなかったわけではない。射撃音に敏感に反応して、イングリッド以外のすべてが反応を示した。ルイズ、キュルケ、タバサは一瞬、身を竦めた。特にタバサは耳朶を打った音の意味を即座に理解したがために、大いにうろたえてしまった。ところがその後を引き継いだ不可思議な擦過音が全ての反応を混乱させてしまった。

事を起こすのだと、対象たる4人の一挙手一投足に神経を集中していた男たちはそうであるが故に、予想外の出来事に全ての対処手段が碎けて極一瞬の空白を生み出す結果となった。

イングリッドが掌底をもつてして、ただそれを横薙ぎに振るうだけで3・75グラムほどの重量を持ち2700ジュールの運動エネルギーを持った音速に等しい鉛の塊を弾き飛ばしたのだといっても、実際にその場で見た事実であっても男達には到底信じられるものではなかった。最も危険であると予想されたイングリッドの行動を見つめていた男たちは、それがために信じられない光景を見せ付けられる羽目になった。

彼らが使ったパーカッションライフルが、火縄銃を改造した骨董品であり、現用の軍用ライフルよりは幾分か威力も精度も落ちるとはいっても、フルメタルプレート貫徹して人間を即死させるに足る威力を持つていることは間違いが無かったから、銃弾を弾くという行為は想像の埒外だった。荒唐無稽な物語の一場面だとしてもあまりにも有り得なさすぎて、一笑に付すような類の妄想であった。だから彼らは——ルイズ、キュルケ、タバサもそうだが……イングリッドが何を成したかなんて理解出来なかった。

イングリッドと言う存在を前にしてそれは、致命的で決定的な隙であった。

ルイズがハツと気がついたときには、イングリッドは男達を張り倒

して回っていた。タバサも反応できなかった。タバサは銃声を耳にした時点でそれが行い得るであろう結果を想像して、一瞬の硬直に身をやつしていた。致命的なインターバルを持ってしまったが、イングリッドがそこにあつたことで、笑い話になってしまった。

最後の一人を引き倒して左手でキドニーダガーをその首に当てるイングリッドの周囲には、人事不詳になった男達が倒れ付していた。彼女の腰にあつたはずのダガーは2振り共見当たらなかった。

ひとつはイングリッドの手にある。だが、もうひとつは？

一瞬の疑問の後に、顔を刹那の驚愕に染めたタバサは銃声の発生源に視線を向けた。背の高い木立の下にのた打ち回る男の姿を認めて半瞬、忘我に身を委ねる。

距離は目視で300メートルほど。戦場で咄嗟に射撃するのでは命中は期待できないけれども、よくよく狙う時間があるというなら、水準精度を持ったパークッションライフルであれば狙撃は難しくない距離だった。マークスマンカスタムが施されていて、なおかつ、職業として狙撃を生業にする者や、野原や山野で獲物を狩る者であれば、即死をことさらに狙うのでなければ命中させるのは難しくない距離ではある。

しかし、相手が狙撃したのであつて、それに対抗するイングリッドの反撃は銃弾ではなかった。手首から盛大に血を噴出して地面を転がる男を傷つけたのは、キドニーダガーであつた。距離300メートルを隔てて、投げる事にはおよそ向いていないキドニーダガーである！ゆるゆると首を回すタバサの視線の先で、地面に倒れて顔を天に向ける男の左腕を捻りあげたイングリッドは、その身体を無理やり返して背を上に向けた。そこに膝を押し当ててさらに腕を捻る。

聞いた者すべてがうっかりと顔をそらしかねない不快な音とともに、男が情け無い悲鳴を上げた。

「二度はない、と、言うた筈じゃがのう。どういう理屈を持って、我らを襲ったのか。じっくりと聞きたいところじゃな……」

その言葉を聞いたタバサは再度の驚愕を顔に浮かべる。刹那にイングリッドの脇に走りよって身をかかめる。その落ち着きがない行

動をイングリッドが微かな疑問を浮かべて眺めていたが、タバサにはどれどころではなかった。タバサが覗き込んだ、脂汗を流して身を振る男の姿は、確かに見覚えがあった。スリに失敗した男である。その事实に、タバサがハツとして身を起こし左右を見渡すと、倒れて声もない者達の中に、確かに見覚えがあるかもしれないと思える姿が混じっていた。

タバサがあわてて首を回す先で、のた打ち回っていたはずの男は、あまり見覚えの無い揃いの衛視服を着た女性2人に組み伏せられておとなしくなっていた。組み伏せられて大人しくなったのか、血を流し過ぎて人事不詳になったのかまではタバサにも判断がつかなかった。

一息、息を吐いて辛うじて動揺を収めたタバサが左右を見回すと、川中で見かけたのと同じ服を着た衛視たちが——何故か全員女性であったが、白で揃えられた長いライフルを背に、群れて走り寄ってくる。随分と面倒な事になりそうだと溜息を吐きつつ、肩を竦ませたタバサだった。

ようやく再起動を果たしたルイズであったが、そのときにはすべてが終わっていた。実に事件が発生して数分。突然始まった修羅場は唐突に終わを見た。起き得るかも知れない問題に対して何某かの対応を図ろうとした者たちは、イングリッドと言う例外を除いて誰一人としてまともな対応を行い得なかった。

驚愕、驚嘆、狂騒、狂乱。

その原因の最も近くにあつて、その一部始終を目撃したタバサにとつてもどうしようもない一瞬であった。目撃したとは言つても、タバサですらなにが起きたのかは咀嚼できなかつたし、理解も及ばなかつた。狙撃をイングリッドが何某かの手段を持つてして防いだといつても、防いだらしいまでは想像できたが、なにをしたかまでは予想も出来なかつた。

タバサの理解では発砲寸前の何某かの徴候を知つて、ダガーを投げたのでは？ 位の理解だった。300メートル先で狙撃態勢にある男にダガーを投げて事を阻止したなんていうのも、眩暈がするほどに荒

唐無稽な想像だったが、ここではそれぐらいの予想しか立てられなかった。真実を知れば泡を噴いて倒れたであろう。大いなる経験を持つているタバサであつてもそうなのだから、周辺に集まりつつある常識人の群れには真実は残酷過ぎた。理解が及ばないのは寧ろ幸福である。

ルイズは何となく無意識に頭をさすりながら周囲を見渡す。それもまた無意識の行為で何の意味も持たなかった。怒涛の展開に翻弄されるばかりで、ルイズはここ数分の出来事についていけなかった。キユルケもまた呆けて眼を瞬かせるばかりである。ファイティングポーズが勇ましくも空しい。

周囲から走り寄って来る衛視？ に、視線を送るタバサは、そんな2人のにじり寄って両手を広げて引き寄せた。一人だけ意識を残す男から離れるわけには行かないイングリッドは、微かな驚愕を浮かべつつも、何故か呆れた表情を張り付かせる衆目華麗な外観の衛視に視線を固めていた。

遂にイングリッドの前に立ったその衛視(?)は腰に手をやって溜息を吐くと、周囲の衛視たちに素早く指示を出した。金髪と言うには色の濃い髪の毛を適当に短く切りそろえた頭を振って、部下の行動を監督する姿は堂に入っていた。

「しつかりと捕縛せよ。メイジ崩れの可能性もある。ギャグを噛ませてしゃべれなくさせておけよ」

その言葉を聞いて、くすんだ感じの青い髪をザンバラにした短髪の衛視が頷いて走る。

地面に転がった男たちは20人近くは湧いて出たと思われる衛視たちによって遠慮会釈無く縛り付けられてゆく。

自動車の進入が制限されているはずの道路にトラックが横付けされて、荷台にある恐ろしい外観のケージ——格子をなす部分にトゲが立っているのだから危険極まりない代物である——に適当に投げ込まれていく。

マントを身に着けたものは術から貴族であるとの説明を受けていたイングリッドには、貴族自らが泥臭い作業を行うその姿に違和感

を感じた。しかし、それ以上に違和感……脅威を感じたのは、彼女達がガンベルトに下げた拳銃と、背負うライフルの姿だった。

右に拳銃。左に弾装囊。それだけで口元を痙攣させる原因になった。弾装囊の下を通して提げられる秀麗な装飾が施されたカッパガード護拳を持つブロード幅・ソード剣は、長さ的にはショート・ソードと言うよりもスモール・ソードに近かった。しかし、カッパガードの装飾とは裏腹に、全体としては強く実用性を訴える形状である。拳銃をメインに、ブロード・ソードをマンゴーシユ代わりとして扱うものとイングリッドは見立てた。遠距離戦闘ならばライフルとなるのだろう。警察的行動を行う組織が成す武装にしては実戦的に過ぎた。トラックに男供を押し込む者達は、若干装備が違うのも気になるところである。専門的な職業分離、役割分担がしっかりと決まっているのか。そうになると、ますます全員がマントをしている事がイングリッドには気になるところである。

先ほどの青髪の衛視がイングリッドに駆け寄り、身体を落として視線を正面に向ける。数瞬の躊躇いの後に小さく頭を振った。もう一度イングリッドに向き直る。

「あー、ラ・ヴァリエール公爵令嬢、ルイズ様の従士、でよろしいでしょうか？ミス」

もぞもぞと身じろぎする男を押さえつけたままイングリッドは小さく頷く。半瞬、ルイズに視線をやったが、ルイズの表情は心ここにあらずといったところであった。その事実に小さく溜息を吐いてイングリッドは顔を上げた。

イングリッドは自身の身体の上にある金髪に視線をくれた後に、目の前の女性に視線を戻す。

「うむ。ヴァリエール家が三女。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールの従士、イングリッドである」

もう一度顔を上げて金髪の女性衛視に視線を移す。

「街頭衛視であるか、主らは？」

走りよった衛視から何かを受け取った金髪衛視はイングリッドの声を受けて瞬間に身を正し、一步身を引いて大きく腰を折った。

「はっ。トリステイン銃士隊が隊長、アニエス・シユヴァリエ・ド・ミランであります」

その言葉を受けて、イングリッドの脇に屈んでいた衛視も立ち上がって身を正す。

「同じくトリステイン銃士隊が副隊長、ミツシエル・シユヴァリエ・ド・グロワールであります」

イングリッドは大様に頷いた。男を組み伏せている態勢なのでいまいち様にならなかつたが。

「ん。ぐ苦勞であるな」

イングリッドは両手が塞がっている為に、顎で下を指し示す。偉そうな態度ではあつたが、威厳のある言葉に身から湧きだす気に押されて、2人の銃士は自然と頭を垂れる体勢になつた。

「こやつを任せても良いかの？」

ミツシエルが即座に頷いた。

「勿論」

アニエスが手招きをして、他の銃士を呼び寄せる。

「コイツを捕縛しろ」

男を押し込んだトラックが走り去る。銃士のうちの数人がライフルを持ち出して周囲を睥睨する。視線は厳しく、いつの間にか現れて出でた野次馬に睨みを利かせて寄せ付けない。拳銃を抜いた銃士が3人一組になって街路を駈けていく。イングリッドが気がついていたら別の誰かに、何らかの対応をするのだろうとあたりをつける。それなり以上に優秀な者達なのだとイングリッドは感心して頷いた。

そうして振り返り、ようやく人心ついた風なルイズに近寄って、その肩を叩いた。ルイズが無表情のままイングリッドに視線を向ける。その向こう側で頭を掻くキュルケが苦笑いを送っていた。

「我が主ルイズや。コレでよかつたかや？」

何を言われたかに刹那、理解が及ばないルイズはしかし、半瞬の忘我を超えて言葉の意味を理解して、慌てて頷いた。

「う、うん。まあ、その、イングリッドが優秀で助かつたわ」

その言葉を聞いてイングリッドは、疑いようも無く晴れやかな笑顔を顔面いっぱい浮かべて大きく首を上下に揺らせた。

「うむうむ。そうであろう。我は優秀であろう！」

イングリッドは顔を乗り出してルイズの首の下に指を差し出し、小さな仕草でつついて眼を細めた。

「見直してくれりや？」

ルイズはその言葉に反射的に頷いた。顔面に表情が戻っていた。未だ小さな反応ではあったが、イングリッドだけに向けられた笑みが眩しかった。

「おほん」

その背中で不躰な咳払いが空気を壊した。無表情になったイングリッドが振り返ると、若干の困惑を乗せたアニエスが身体を傾げていた。

「あー、お取り込み中のところをすまないが、今回の件について話をさせてもらえないだろうか？」

イングリッドはルイズに振り返る。そのことにある意図を正確に読み取ってルイズは頷いた。それに頷き返したイングリッドは僅かな疑問をもよおしつつ、アニエスに向き直る。

このような事件に巻き込まれた場合、警察組織は居高に対応するのが普通だった。イングリッドが知る現代社会における警察とはそういうものだった。事件に巻き込まれた人々を救ってやったのが自分たちだというならその態度も、まあ納得できなくも無いかもしれない。

過去になれば、それはひどかった。当事者となれば被疑者も被害者も構わず十把一絡げに紐で括って連行なんぞと言う事すらあった。事件を起こしたやつが悪いので、事件当事者であるというなら、彼らから見れば術からず容疑者扱いして当然だったのだ。

無論、そこにイングリッドが混ざっていると、そういう対応をした者達はありとあらゆる意味で後悔する事になる。望んでヒトに影響を与えることは無いイングリッドだが、相手のほうが悪意を持って相対するというのなら遠慮は無かった。そういった状況においてイン

グリッドは、比較的穏当な態度を持ってやんわりと抗議をすることになる。

そうはいつでも手加減一発岩をも砕くのがイングリッドのあり方なので、場合によっては悲惨極まりない結果となった。自業自得ではある。

そういう経験則に照らしたイングリッドにとって、ここにおいてア二エスと言う「貴族衛視」の態度が不可思議であった。貴族であるなら、貴族の従士に過ぎないイングリッドはもつとぞんざいに扱って問題はないのでは？ というのがイングリッドの想像だった。暴力沙汰になってはルイズも黙ってはられないが、マントを背にするア二エスである。最低限、ルイズの前であるという部分さえ気を使えば、従士に過ぎないイングリッドに対する態度等と言うのは、ぞんざいで構わないはずなのだ。

しかしア二エスにしろミツシエルにしろ、やけに下手だった。イングリッドは首を捻るしかない。

「まずは謝罪を」

ア二エスとミツシエルが大袈裟に身を折って頭を下げる。少しく仰天したイングリッドが慌てて手を振ってそれを制する。

「まてや主ら。いきなり頭を下げられても意味がわからんぞよ。わかるように説明してくりやれ」

その言葉を受けて頭を挙げた二人は互いに顔を見合わせて頷く。

「申し訳ない。本来なら場所を変えて説明したいところなのだが、すべてが終わったとは言いがたい状況であるので、このような場で長々と話す無礼をお許し願えないだろうか？」

イングリッドは困った表情を浮かべて身を振り仰ぎ、ルイズに振り返る。周辺状況を理解しているとは言いがたいルイズは何も言えずにしかし、困惑の表情を浮かべたままとりあえず頷いた。

イングリッドは忙しくもア二エスにもう一度向き直って、斜に構えて頷いた。だんだんと態度が適当になってきていた。

「感謝を」

ア二エスが小さく頭を下げた。

「……ヴァリエールの令嬢がおかしなヤツラに尾行されていると、通報があったわけか……」

そういう可能性は思いつかなかったイングリッドである。考え直してみれば、二つはないと思える見事なピンクブロンドを持つルイズだ。目立つ事この上ない。公爵令嬢と言う立場もある。ことさらに義務だ、好意だと言い募らなくても、それだけの立場がある者が自分たちの住まう土地の近傍で面倒に巻き込まれれば、周辺住民にとっても迷惑極まりない話である。

取調べだ、街路封鎖だならまだ話は軽いほうで、どこぞの皇帝陛下の暗殺未遂事件（その瞬間は戴冠前の話だが）のようにワンブロックまるごと爆薬でどカーンとなれば命すら危うい。怪しい動きがあれば、自分の生活を守るためにも通報するのが最善手と言う話になるのだ。

イングリッドは尾行に気がついていたし、周囲に人が散っていることにも気がついていた。アニエス達銃士が後方を駆けるのも気がついていたし、そのせいで男たちの手が分散したのも気がついていた。離れた街路でもみ合いになって、実際に襲う段階で人数が思ったより減ったのだろう。ルイズたちの前に飛び出して、想像以上に人数が少なかった。その事実に対する実行犯の困惑はいかほどであったろうか。

イングリッドとしても素直にアニエスに感謝するところがある。銃士隊が迅速な行動を見せなければ、ルイズたちを狙う銃口が穏健な態度では手におえない数になった可能性がある。それでも対応できないわけではなかったが、そうなればとても穏当な対応とはならなかった筈である。事が起きる直前にイングリッドが血の雨が降ると想像したのは、それを想定しての事だった。

憂鬱だった。

ひた隠しにしてきた実力の一端をここで表せなければならぬ。これだけの不特定多数が居る状況で。しかもそれが招く結果は、イングリッドが想定するところ、控えめに言っても屍累々と言ったところ

だった。それをルイズの前に招来する。血にまみれたイングリッド。最悪だ。

それが防がれた。最善の結果だったといって言い。

この場合、そもそも尾行者が出ることを防げばよかつたのではと言う想定は論外であった。普段の生活の中で、強い決意となんらかの目的を持ってルイズたちを尾行するのだと言う者が現れても、事前に排除するのは困難極まりない。この手の事案は一方の当事者にとつては受身にならざるを得ないのだ。それを押して事前排除を望むなら、怪しげなものは端から全て片付けるしかなくなる。それこそ死山血河となりかねない。受動的防御策としては、それこそ引きこもるぐらいしか根本的な対応策は無い。それでも相手側に目的がある以上は根治的対策に成り得ない。

他を護衛する任務とはそういう部分で極めて難しい。明確な敵対者がいた場合、護衛任務は術からずパッシブ・リアクティブにならざるを得ないのだ。先制攻撃してしまえばいいではないかというのも極論であるし、話を取り違えた結果でしかない。先制攻撃してしまえばそれは護衛ではなくなる。戦争だ。明確な敵対関係に陥つてもなお穏当な対応を望んだ最後の一線が、護衛任務となる場合が多いことを考えると、望んで任務失敗を選択するのは話が違う。

スタンドアロンである事が常道だったイングリッドが延々と頭を悩ませてきたのはそこである。

アニエス達はその部分でイングリッドを救った。そう言っても過言ではない。困惑の表情の下でイングリッドはアニエスに抱きついてキスの雨を降らせてもいいとすら思った。それぐらいに難しい状況だったのだ。

それをなせば実はアニエスが狂喜乱舞したかもしれない事実は誰も知りえない真実だった。この先にルイズたちに待ち受けている運命を考えるなら、アヴァンギャルドな感謝を表明してイングリッドがアニエスに個人的友誼を深めておくことは何らかの救いとなった可能性はある。しかし、神ならぬ身には知りえない事実と未来だった。

アニエスと相対するイングリッドであったが、その後方でひどく苦
勞しながらミツシエルがルイズやキュルケからも事情聴取をしてい
た。

格上の貴族に対して事情聴取という警察活動を成さなければなら
ないという面倒もあつたし、タバサも含めて実は、イングリッド以外
の3人が状況を殆ど理解していなかったという面倒もあつた。

よってトンチンカンなやり取りが延々と続いていた。ミツシエル
が明確に各下であつたのはこの場合、大いなる救いであつた。同列の
相手に面倒なやり取りを繰り返せばルイズが爆発した可能性が高い。
イングリッドのあずかり知らぬ話だが、シュヴァリエとは名誉称号な
のだ。名を明かした最初の挨拶でフルネームを明かしていたのも奏
効した。貴族称がない苗字であつたから、平民が何らかの功を経て、
貴族に列せられたのは明白だつた。そのことを一切の誤解無くルイ
ズは理解していた。

ルイズは基本的に淑女然とした態度を取る事ができる良くてきた
貴族だつた。相手の各が同列で無い限りは。

自身に近い立場の人間が、自身と同じように優秀である事を当然
であるという要求を、無意識で求めるルイズの態度は、同級生の立場
辺りからするとたまつたものではないが、そうではない者、特に、格
下相手にはひどくやさしい態度となつて現れる。

シエスタをはじめとした学院の一般職員からルイズがやたらと人
気があるのは、そういった無自覚の態度があつたのである。

イングリッドと言う存在はそこに割り込んだ貴重な例外の一つで
ある。

事実の摺り合わせを行い、互いの理解を深めつつあつた彼女らに、
アニエスの部下の銃士が走りよる。2, 3言葉を交わして頷いたアニ
エスは、イングリッドに振り返つた。

「ミス・イングリッド。あの男はあなたの関係者だといっているよ
うなのだが、間違いないのだろうか」

その先には大柄で鍛え抜かれた体軀を不遜に揺らせながらしかし、
大人しく銃士に引つ張られるどこかで見た顔が合つた。

イングリッドは少しく頭を捻って、すぐに思い出す。

「お、おーおー。テティエンヌⅡブティックにおった……」

そこで疑問を呈して、小さく首を捻るイングリッドだった。

「だれじゃったかのう……？」

後ろでタバサががっくりと肩を落とした。その気配に気がついて、イングリッドが振り返る。

「？」

首を捻るイングリッドにタバサが溜息を吐いて答えた。

「グロージャ」

その答えに三度首を捻るイングリッド。

「トリスタニア3大冒険者ギルドの一つ。『陽炎の戦団』の中堅戦士、グロージャ」

肩を竦めて答えたタバサに、イングリッドも肩を竦めて応えた。

「名は聞いておらなんだからのう……」

それを聞きとがめてがっくりと肩を落とした男が、鼻を掻きながら手を挙げた。

「よう、イングリッドさんよ。ひとまずは面倒ごとを避けられたっほいかね？」

その言葉だけで合点が行ったイングリッドは、身体を傾げて笑いかけた。

「なるほどの。主か、銃士を呼び寄せたのは」

だがしかし、グロージャという男は手を振って否定した。

「違う違う。あんたらを追いかける途中で、思ったより剣呑な状況だったからよ。手近な人間に片っ端から声をかけて走らせたのよ。思ったよりも大袈裟になっておどろいたぜ」

その応えにかすかに眼を見開いて次いで声を上げて笑うイングリッド。

「なるほど。最善に近い手が得られたわけじゃな。銃士の数が少なくては、もっとひどい結果になったやも知れぬ」

イングリッドはアニエスの横を抜けてグロージャの目の前まで歩むと、相変わず後ろ手で敵意が無い事を示し続ける彼の前で、大き

く腰を折った。その姿にルイズとキュルケが驚く。その態度に何事かとミツシエルが振り返る。イングリッドの行動を眼で負っていたアニエスは小さく苦笑いを浮かべた。グロー ज्याを横から挟み込んでいた銃士もイングリッドの態度に驚いていた。

「ありがとう、陽炎の戦団の戦士がグロー ज्या。我主のおかげで大分に助かった。多いに礼を言っておこう」

礼を捧げられた相手であるグロー ज्याは大慌てで手を振って、首も振って否定する。

「やめやめ、よせやい！ 礼が言いたかったのは俺だぜ！ それがたまたまこんな話になったただけだぜ。偶然だったの！」

その言葉に首を捻りつつイングリッドは頭を上げた。グロー ज्याが照れたように頭を掻きつつ、イングリッドの頭上を越えて後方のタバサに小さく頷きかけた。それでタバサも察して頷き返す。首を捻るルイズとキュルケを無視して、グロー ज्याは自身の随分下にあるイングリッドの顔に笑いかけた。

グロー ज्याはゆっくりと両手のひらを前に突き出してイングリッドに見せる。

「おれっちがミスって怪我したのに、あのちっこい貴族様に言っただけで直してくれたじゃん。これで礼の一つも言えなかったら、グロー ज्याの名が廃るってモンだぜ」

それでようやく納得の行ったイングリッドは大きく頷いた。振り向いてタバサを手招きする。

小さく首を傾げながら、ミツシエルに頭を下げつつタバサはイングリッドの後ろに立つ。

「我が礼を言われる筋合いは無いわ」

朗らかな笑みを浮かべたイングリッドはタバサの背を押して、グロー ज्याの前に押しやった。その巨体の前ではタバサは幼児のように見えた。

「ほれ、礼を言わんか」

ニヤツと口を吊り上げたイングリッドが右手親指を掲げる。それでグロー ज्याも頷いて腰を折った。

「有難うございました、貴族様」

小さく口を戦慄かしたタバサはそつぽをむいて杖に身体を預けた。イングリッドは遂に声を上げて笑いながら、タバサの頭を撫でた。「照れるな照れるなタバサよ」

タバサにとっては新鮮な驚きと戸惑いがあった。何かを成して何かの結果を残す。彼女の明かされぬ日常からすれば、それは当然の求められるべき結果に過ぎなかった。成功の報酬は沈黙。だが、失敗は批判される。

それがタバサのもう一方の日常だった。だから命じられるままに何かを成すのはタバサには自然な事だった。デ・アソ・テイエンヌ II アム・ブテイックで起きた面倒ごとで、その瞬間に心ここにあらずだったイングリッドの、無意識の頼みごとに対してタバサは、ある意味で命令され慣れていたために何の疑問も無く即座に同意した。それにことさらに感謝を受けることなどは想像しない結果であったし、その先で、このように助けられるとも思っていなかった。善意のスパイラルの先で、結果を得た事実タバサを戸惑わせるばかりだった。

「あっー！」

突然にキュルケが叫んだ。ルイズとキュルケに辛抱強く聴取を続けていたミッシェルが仰け反る。何某かの失礼を成したかと、僅かな恐怖を浮かべるミッシェルに、キュルケは慌てて手を振って否定する。

「違うから。あなたに問題はないから」

そう言ってからキュルケはグロージャに指を突き出した。

「思い出した！ あなた！」

つかつかと歩み寄って、キュルケの背丈であつても振り仰がなくてはならないグロージャの顔を見上げる。

『『トラブル・グロージャ』！ 何をしてても大袈裟に話を大きくする迷惑者！ そうでしょ！』

その言葉で大きく表情を歪めたグロージャは、口端を跳ね上げて大きく笑った。

「まいった！ 貴族様までにその名が知られているとは！」
手を振り仰いで肩を竦めた。

「俺も有名になったもんだぜ」

いまいち状況がつかみきれないでいるルイズは、事が始まって以降、ひたすらに周囲の状況に振り回されるばかりであった。

その横で、今更ながらに回収されたキドニー・ダガーをアニエスから受け取るイングリッドだった。

そして初めての…… (1)

ごうごうと音を立てるチューブ地下鉄に乗ってイングリッドは、その車内の壁に背を預けて様々な事を振り返っていた。

町の外観はともかくとして……眼にした、手に取った工業製品。武器のみならず、家具や服飾品も含めての話であるが、様々に——現代地球的な観点から見ての話——違和感を得ていた事を思い浮かべる。

9両編成の列車の前から3両目に乗り込んだルイズたち一行である。地下を走っているのだから「地下鉄」で間違いはない。間違いはないのだが……シエル飛行機・デ・ドラグ機械・マズルカに次いで、ハルケギニアが「異世界」であるとイングリッドに強く訴える存在となった。

そもそも論として、地下鉄と言うものは地球的現代感覚から言うと、その出自から考えてもモノ・クラスであるのが「常識」であった。しかし今イングリッドが乗っている車両は「貴族専用車」である。紅い帝国の地下鉄に「ダーチャ族専用車」があった、なんていう風聞もあるけれども、イングリッド自身がそれを実見したことはなかった。そも、イングリッドが地下鉄を利用する事なんて年に数回あるかと言うところなのだ。紅い帝国が「紅い」時代に、その地下鉄を利用するなんてことは唯の一度たりとも無かったことなので、「常識」が常識で無い国があったかもしれないという話は、多分に未来永劫、確認する事のできない仮定であり続けることになりそうだった。人間社会が続く限りにおいて未来永劫存在し続けるであろうイングリッドが見逃す事実が存在するというのは、永く存在することがイコール全知になる事ではないという、皮肉な実例の一つと言うわけである。

今現在、明らかな地下を疾走するチューブ地下鉄は前3両が貴族専用。機関車1両を挟んで後ろ5両が平民用と分けられている。線路と線路に挟まれたホームも貴族用と平民用に分けられていた。上下線ともに前進側が貴族用、機関車後方が平民用と分けられているのだから、千鳥方配置というわけで、ひどく面倒な事になっていたが、やたら減

多ら天井が高いホームは上層に貴族専用通路を設けてそれぞれの乗降場所に階段を下ろすという、これまた面倒な構造を持っていた。馬鹿馬鹿しい。

大時代的な装飾に飾られた天井は、貴族、平民のわけ隔てなく下から見上げることが出来るので、妙な部分で「平等」と言えるのかも出来ない。しかし貴族専用コンコースと平民専用コンコースが複雑怪奇な構造を持って地下で錯綜しつつ、地上では貴族専用の出入り口が立派な建造物を持って道路わきに鎮座しますという状況にあって、平民専用の出入り口は道路わきに屋根の無い階段が口を開けていると言うのだから差別意識ここに極まれりと言いたくもある。

しかし、貴族専用通路から見下ろした平民通路の端部には、エスカレーターが見えた。昇り、降り、双方が備わり、しかもホームの両端部にあった。ホーム自体がやたらと広く——貴族専用乗降場を避けて通る通路が必要だから仕方が無い——その通路部分は列車が停車しない範囲となっているので、ホームの全長は18両分にも及ぶ。

13両分あれば十分ではないかといいたいところだが……両端部共にホームの幅半分以上を貴族専用スペースが3両分食っているため、平民の乗降客が滞留するスペースが必要なのである。そのところは良く考えられているというべきか、無駄の多い設計と言うべきか。悩ましいところである。

ちなみに平民専用階段は昇降エスカレーターの内側にあつて、横に6人は並べそうだったから、2列に並んで乗客が列を成していたエスカレーターと含めて考えればホームの幅が想像出来ようという物だ。

ホームの貴族専用スペースは高さ250センチ——サントというべきであろうか、背の高い壁で仕切られて、壁の厚みも大した物だった。ホーム中心線上に貴族専用回廊を支える柱があるので、その分、スペースが段違いになっているのだが、そうやってホームから引っ込んだ壁に沿って2人分に区切られたソファシートがいくつも等間隔に置かれて、柱には花瓶にいけられた花、壁には絵画が飾られるという意匠であった。イングリッドはそれらを見てはつきりと眩

暈を覚えてしまった。そんな「駅」なんてイングリッドの記憶上唯の一度も見たことが無い！

ただし、イングリッドが見たことが無いだけで、実際には地球上の歴史上もそういった駅の形態があったのかもしれない。そういう部分に無知であるのはイングリッド自身も認めるところである。

仕方が無いのだ。航空機、船舶の利用は仕方が無い。大量輸送機関が発達したことによる副産物として、それらを管制する装置……レールダーの発展が、イングリッドたちが自力飛行する余地を奪っていたから、海を越えるためには公共交通機関の利用は強制である。

しかし陸地にある場合において移動するのであれば、徒歩か、或いは自ら自動車を運転して個として移動するのが常態である。危なげなくランドクルーザーを運転するイングリッドを見てあっけに取られていたかりんの姿は、滑稽である以前に怒りを覚えたものだが。

これまた仕方が無いのだ。出来る限り、存在した事実を残さないようにするには、そうせざるを得ない。イングリッドのような存在が事実存在したのだと言う証拠を残せば、イングリッドが掣肘すべき存在が警戒して深く世界に埋没しかねない。世界に人々が満ち満ちた現代、完全に存在を消すなんてことは不可能事なのだが、リアルタイムに存在位置が情報化されない限りは、先制のアドヴァンテージを持ちえる。

ところが鉄道を利用すると、あまりにも人目につきすぎるし、移動した痕跡を残しすぎる。なにしろ基本的に鉄道と言う輸送機械はレールの上から逃れられないのだから、衝突事故などから安全を担保するためには、様々な安全機器を置いて、まずは運行ダイヤを厳密に定める必要がある。マイルトレインなんていう見た目は最先端な鉄道貨物輸送を実現しつつ、隔時法で列車運行を行っている無閉塞運転が常態となつている鉄道会社が存在する国なんていうのもあるが、まあ例外中の例外で、ダイヤが厳密に決められている中でイングリッドの存在を察知されたら、その後の行動を推測するなんて簡単になってしまう。だから、鉄道の利用がすぐさま、隠密行動なんていう言葉とは遙か遠いところに逝ってしまう訳である。

だからイングリッドの移動手段に鉄道が選択されることは殆ど無かった。

と、なれば出来る限り、鉄道を除いた手段を用いるしかない。さくらやかりんと交流した日々と言うのは、他の同僚に対するデコイであった日々と断じて良い。実のところどうしたって目立つ立ち姿のイングリッドは、先進国の現代社会において行動を制限されつつあったのだ。そうなるを囮として派手に行動するぐらいが精々となってしまう。高度に情報化された社会では、イングリッドはその本質的存在を抹殺されたも同然なのだ。だからこそイングリッド自身の本格的活動範囲が混沌とした紛争地域に集中し勝ち、という結果に繋がっているわけである。

それはともかくとして「鉄道の駅」という状況ならば……実は存在した。大英帝国華やかしき頃にそのコロニーである南アフリカやインドにそれに近いものが存在した。ただし、主用駅のみである。断じて地下鉄に存在することはなかったし、全ての駅に存在するわけでもなかった。イングリッドの眼に入る、停車するたびに否が応にも視界に入ってくる全ての駅がほぼ同じ形態だなんてことは流石に地球では唯の一度もありえなかった。

進行方向側3両が常に貴族用車両（最前列には運転席があるわけだが）、機関車を挟んで後方5両が平民用という特異な構造は、地球の鉄道を見慣れたイングリッドをして疑問だらけの構造だったわけだが、ルイズに対してそれを控えめに問いただしてもクエスチョンマークが跳ね返ってきただけだった。よってこのチュ_地ューブ_{下鉄}が全体としてどのような構造と運行形態を持っているかは想像するしかなかった。

はつきりいって、自動車、飛行機械、そしてこの「列車」。まったく動力がわからない。想像すらできない。ひどく悩ましいところで、イングリッドが強く警戒するところでもある。ついでにそこにリフト_{エレベーター}、そしてエスカレーターも含めるべきとなってしまうって、イングリッドには頭が痛いどころの騒ぎではなくなってしまうている。

この街に至って激しく眼を背けてきた事実……否、正直に告白して、トリスティン魔法学院にいた時点で気が付いていたが、気が付か

ないフリをしていただけの事。その事實は、この世界に至って唯の一度たりとも電線を見かけなかったことだった。魔法学院の中だけがこの世界に理解を得る材料であった時点では、納得もしよう。あの箱庭内部を俯瞰すれば、そこから得られる時代背景は、精々が地球における18世紀前半である。電線やらコンセントやらなんて無くて当たり前なのだ。

しかし、このトリスタニアに至ってハルケギニア^世の「実際」の一端に触れて地球における「20世紀」前半に近しいと思いついても「電線」が無い事實はどうしようもなく納得できない事だった。

或いはすべからず地中化されているのだとしても、壁やら天井やらが発光しているので蛍光灯も白熱電球も当然見ることは出来なかったし、そうは言っても道路に街灯としか思えない構造物を見たのだから、やっぱり電気があるのではないか？という想像はしかし、この「列車」を見たときに吹っ飛んでしまった。

否、列車が来る前に気が付いてしまった。

この列車は、この列車を支える構造物周辺には電線やなにやらといった構造物が一切無かった。白い、ツルんとした光沢を見せる壁と、下を這う2本のレール。それを支えるラダー枕木……ラダー枕木だったのだ！レールと枕木を締結する装置はなかなか凝った構造をしていた。していたが……絶縁装置なんて見当たらなかったし、何十メートルか置きにあるレール同士の突合せ面には、例えば日本の鉄道における本線軌条には必須の継ぎ目ケーブル（帰線電流漏洩による周辺工作物の電食を防止するため、軌道回路の確実な構成を担保するため）は見当たらないし、上方に架線も見当たらず、見た目は恐ろしいまでにクリーンだった。じゃあ、と思つて第三軌条を探したわけだが……キュルケに首根っこをつかまれて、ホームに引き摺られる様な真似までして、軌道周辺を見渡したのだが、電力設備なんて見当たらなかった。「滅茶苦茶」にシンプルな構造だったのだ。

レールと枕木の間を介在する締結装置に絶縁体が見当たらない以上、つまるところシーメンスがベルリン工業博覧会で披露した、レールに直接電気を流す……現代で言えばメルクリンなどのごく一部の

メーカー以外が製造販売する小型の鉄道模型に一般的な電気供給方法も取ってはいない。と、言う事になる。

なんでイングリッドが鉄道周辺の付帯設備にやたらと詳しいかと言えば、それは、ストリートファイトという闘争の結果として発生する付帯危害に鉄道が巻き込まれると、とんでもない2次被害を惹起するからである。

19世紀〜20世紀前半で根本原因が不明の鉄道事故が大小含めていくつもあるのだが、原因がストリートファイトにあったものが混ざっているのである。これはイングリッドを含めたストリートファイターたちが無知であったが故に起きた悲劇である。否、自然災害のように言ってしまうのは無責任極まりない。現実世界に明らかとなればどうしようもなく重大かつ悪質な犯罪であるとしか言いようが無い。

死合う事のみが生きる道と嘯くファイターであるならばそれでも良いかも知れない(巻き込まれる方としては良い事あるか!というものだ)が、人間社会を守ることこそが本意であるイングリッドたちにとってはストリートファイトによって付随する2次災害を見逃す事は、自身の存在意義そのものに対する重大な疑義になりかねない。

よって、産業革命以降に突然に爆発的進展を見せた科学技術に対する知見、理解は重要不可欠な項目となった。だからこそ「飛行機」に対して触り「以降」の技術的理解があり、それが故にシルフィードの上にあつて頭を沸騰させていたわけである。「タクシー」に乗って頭を捻ったわけでもあるし、ここに来て、いよいよ頭を爆発させそうになっっているわけでもある。

本当にこの世界はイングリッドの理解が及ばない事だらけである。

ストリートファイトが本義であるように見える(大いなる勘違いである!)イングリッド達が科学技術に理解を深める必要なんて無いだろうと言う「偏見」は無くなり様がない状態だったが、イングリッドにしてみれば、そんな訳あるか!と叫びたいところだ。

例えばかりんがC-117K（このKは空中給油機を意味するものではなく、「神月」が発注した特殊モデルに対するメーカー側が付与した便宜上のサフィックスである）輸送機上で披露した神月流歩行術なんて無知であるが故のクリティカルなアクシデント一歩手前の自殺行為であった。雲の上（一万フィート≒約三〇〇〇メートル）を行く高層で現代飛行機の外板を穴だらけにするような行為は、機体の空中分解を引き起こす直接的原因になり得たし（C-117ではなく、通常の与圧された旅客機であれだけばこぼこやらかせば減圧から壊滅的構造破壊、空中分解に至っていたはずである）、B787のように非金属製胴体を持った飛行機であれば胴体は粉々である。

そうはならなかったとしても、大気が薄い、すなわち揚力が少ない場所で胴体が著しく変形すれば空気力学的な変状で飛行能力が奪われて失速、急降下からの空中分解となったはずである。つまるところかりんと「蘭姉さま」との計画的かつ突発的なあの闘争と言うのはかりんが命綱を切られた時点で想像しうる最終的結末が一つに収斂していたのだ。「蓮姉さま」が自爆ボタンを押さなくても、あのC-117Kは遠からず墜落していたのだ。……かりんが市街地に激しく「軟着陸」した結果を見ると、自爆装置発動で跡形も無く粉々にしていかかったら、現場直下で発生したであろう事態は想像するだけでも恐ろしい話である。うっかりすれば数年後にFND！FND！と言われているだろうか。カナダのTV番組制作会社が神月家の妨害を振り払って映像化できるのか？という疑問はあるわけだが……。

ただ航空機墜落事故で最終的にもつとも原形をとどめていることが多い……つまり航空機の空中分解事故で金属の塊として落ちてくるであろうエンジンを、間違いなく粉々に吹き飛ばすような芸術的自爆を演出している時点で、あの争いに対する評価が難しくなる。

大型航空機墜落の付帯被害を軽減するがためにエンジンを木端微塵にしたのか、かりんを確実に抹殺せんがために念を入れたのか。はたまた証拠隠滅もかねての事だったのか。真実は不明であるが、はっきりしている伝えられている事実は、あの件で東京都世田谷区に雨霰と降りそそいだ航空機の破片で死傷者は出ていないということであ

る。神月家の御印象宜しきを得て、なんて裏があつたら嫌な事だが、イングリッドのあずかり知らぬ事である。

この事例はあまりにも直截的かつ、特異な事例だが、例えば街中で死合うにしても技術に対する無知は大事故を誘発しかねない。

プロパンガスボンベに爆裂波動拳をぶち当てた結果がどうなるかなんて空恐ろしい事だし、大型タンクローリーにやらかせば発生する事態はロス・アルファクス大惨事の再来か、なんて事態になりかねない。

過密な街路に高圧電線がまま存在する日本で電柱を倒したりしたら、感電のような直接的2次災害は勿論、大規模な停電の発生。それに伴うエレベーターの閉じ込めとか、それで赤の他人が存在する中で、漏らしてしまつて精神的死亡とか、手術中の死亡事故、生命維持装置が必要な入院患者の死亡で人間の魂を異世界に飛ばす事故とか、情報産業に対する大規模被害とか、執筆中の小説原稿がぶっ飛んだとか、それはそれは悲惨極まりない大惨事を惹起しかねないわけで。

過密運転を強いられている東海道新幹線線路のわきで無邪気にストリートファイトからのうっかり軌道破壊なんぞとなれば、エシエデ鉄道事故以上の惨事は免れないだろうし、道路でパワーゲイザー!とやって水道管が破裂しました、下水管が破裂しました。それだけでも大迷惑だけでも、本当に恐いのは、その瞬間に眼に見えた被害が出ていない状況である。

実はガス管が破損していて後でグアダラハラ爆発事故が再現されましたとか、上水道管が破損して汚水が混じりこみ、数ヶ月、数年後に大規模な健康被害が判明しましたなんてことになったら眼も当てられない。それ以前に大規模道路陥没事故へと繋がるだろうが。

現代社会ではほんの些細なイレギュラーがインフラストラクチャーへの大規模破壊へと繋がるので、ストリートファイトと言う行為は、人間社会に対する危険極まりない挑戦となりつつあるのだ。常識的世に生きる人々のうちのどれ程が、イングリッドやヒューゴの存在を想定するのだろうか。ユンやヤンあたりの「技」ならまだしも常識的範囲内だろうが、社会的インフラをむしろの事、故意に破壊して

まわるネカリのような存在まで想定したインフラ整備なんていうのは、大地震と洪水と落雷と隕石落着が同時に起きるかもしれないから対策せよと言うに等しい空しさがあるわけで。

銃や砲火器の存在は厄介なものではあるがイングリッドにとって致命的ではない。流石にMOPが脳天直撃とか、120ミリ・スミーズボアから発射されたAPFSDS弾がおなかに命中とかはちよつとやばいかもしれないが、21世紀初頭になっても、常識的範囲内でイングリッドの生命に危機を及ぼしかねない武器なんて核物質を使用した兵器ぐらいである。しかしイングリッドの生命的危機を及ぼす存在は未だ少なくとも、技術的進展による結果として「イングリッド達」の存在意義を抹殺しかねない事態と言うのは斯様に増える一方である。こういった事を想定せざるを得ない事態を強要されるのを嫌うが故に、イングリッドは殊更にハルケギニアの時代推定を下の方に……18世紀以前に固定したがっていたのだ。そういった判断をするにはある程度以上に科学技術に精通している必要があるために、イングリッドはストリートファイター以外にやる事なす事多くて大変！という事態に追い込まれて……ある意味追い詰められていたのだ。

しかしこのハルケギニアと言う世界は厄介である。成る程、異世界だと達観するのが容易いが、さて、実際にイングリッド自身が全力全開をかましてどれほど世界に影響を与えるのか？これが推定できないと、ルイズを守るといふ必須行為に対して力加減が難しくなる。

鶏を牛刀で切り裂くが如し行為を常に行って、それでルイズは守りきりました。そうしてハルケギニア市民の死山血河を築きました。それではイングリッドと言う存在に対する自殺行為である。社会的インフラが大々的に整備された世界では、イングリッドが直接的に拳をぶち当てなくとも、2次災害、3次災害で被害を広めかねない。コレはすなわちイングリッドの力を制限する枷となるのだ。

そうは言っても、何はともあれ「ルイズを守る」これが大前提である。となれば許された限界ぎりぎりを見極めて全力を出すことが求められているのだから、イングリッドは殊更必死でこの世界の技術レ

ベルを確定しようと努力しているのだ。そしてその努力が実を結ばない。

なんとと言う絶望的状况か！

今までは何とかなっている。河川脇で発生した事件も、辛うじて何とかなつた。

辛うじて、である。

あの時、サンバーストも、サンシユートもイングリッドは使わなかった。力を隠したかったからではない。それらの技を使ってどんな2次災害が起きるか。それに確信的な推定が及ばなかった。となれば、代替案を持ち出すしかなかった。あの場では幸いにして代替案があつた。直前にナイフを買い込んでいたのは僥倖だったのだ。

何たる幸運。

もしあの場で、ナイフを持っていなければ、どう対応すべきだったか……。イングリッドは身を震わせるばかりである。

歩道を舗装していたタイルを引き剥がして投げる？ 良く整備されて、継ぎ目がドコにあるかも怪しいタイルを咄嗟に引き剥がせるか？ ルイズを抱えてダッシュする？ 自身のみであれば何の問題なく数メートルどころか数キロメートルだってかっとなでいけるが、ルイズがその加速に耐えられるだろうか？ 無理である。数メートルダッシュであつても背骨が折れる、首が折れる等と言う結果を招来してしまふだろう。

あの場に至る前に、自身が知覚出来ない場で何らかの対応がなされていた。その結果として襲撃者の行動がちぐはぐになつた。それがために余裕を持つて対応できた。

……それは他力的な現象によつて招来された結果論である。何処にも自身の実力が発揮されていない。その他力が発揮される前提にタバサの治療行為があり、それをなさしめたのがイングリッド自身の行動であつたのだとしても、あまりにも偶然の要素が大きすぎた。

そういった偶然を招致するのも含めて、勝負における時の運などと言う事もあるが、あれは、そうではなかった。勝負ではない。テロルなのだ。現実には護衛対象たるルイズがテロルに巻き込まれた時点で

護衛任務としては失敗していたに等しい。つまるところはイングリッドの無能の証明と言うわけだ。情けなさに目が眩む思いである。今、自身が身を委ねるチユープ^{地鉄}。コイツの動力源が確定できないと、万が一この場で闘争が発生すれば、対応方法が限定されすぎてどうしようもない。もしディーゼルとか、ガソリンで動く内燃自動車だったら？

サンシユートを発射してガソリン・タンク損傷して大爆発！とか？燃料が軽油であっても安心は出来ない。うっかりBLEVE現象発生となれば結果は似たようなものだ。自分を残して周辺すべてが黒こげで終わり。その中にはルイズも含まれる。自身を守る能力技術に事欠かないイングリッドだが、なんと言う事か！他を守るすべを知らない。

必殺技で襲撃者を「必殺」出来ない。どうする？通常技でコンボを繋げるか？しかし、襲撃者を一撃で倒せないとなると、ドールズのような複数人による連携攻撃を展開されれば、「YOU「LOSE」」一直線である。

それこそショート・ソードの出番か。ファイン・ダガーを暗器の如く取り扱って、襲撃者の命を狩るか……しかしイングリッド自身に「武器」を使って他人の命を奪った経験なんてなかった。イングリッドの「武器」とはすなわちイングリッド自身であった。今まではそれでよかった。複数人相手でも、順番に拳でwastedと食らわせばよかった。

しかしルイズを守る。そうなると複数人相手となれば、対処方法がわからなくなってしまう。本当にわからないのだ。イングリッドはそういう行為にとことん無知であった。

どうすればいい？過去の記憶の中に、たまたま眼に入った事例として、誰かが何かを、誰かを守る行為の実例があつたが……何しろ無意識に視界に入った事例である。意識していない有意の外で発生した現象なんてまともに記憶に残っている筈も無い。イングリッド自身が思い描く、ルイズの側を動かずに多数相手を排除する方法なんて、精々がSMGで銃弾をばら撒くぐらいである。だが、今のところこの

世界で機関銃や機関短銃なんてお目にかかれていない。その代替として拳銃を2丁購入した訳だが、拳銃一丁につき6発。二丁で12発。最大で12人を相手取ることが出来るなんていうのはあまりにも楽観的過ぎる。

人間一人を確実に無力化するには最低限ダブルタップだというのは、自身に拳銃が向けられた事による経験上知り得た事実である。つまり6人しか相手できない。それだって理想的状況での話であって、ジャムつたらお仕舞いである。だからこそ自身で整備可能な拳銃を選んだわけだが、銃火器の故障確立はゼロには出来ない。限りなくゼロに近いリボルバーであっても完全ではない。発射薬に何らかの不良があれば……そしてそれに気が付く事が出来なければ装弾されたすべてが発射不能なんてこともありえなくは無い。そんな事態であれば拳銃は唯のゴミである。鈍器にもならない。こぶしで殴ったほうが遥かに殺傷能力がある。

襲撃者がジエツト・ストリーム・アタックとばかりに一列に並んだら、拳銃での対応も途端に難しくなる。前列が死亡したのだとしてもそれを盾とされれば、無力化されたも同然だ。この場合無力化されるのはイングリッドである。

襲撃者がサガットばりにタフだったら眼も当てられない。そも拳銃なんて持っているだけ無駄となる。M1911から45ACPを全弾撃ち込まれたなんてことがあったようだ(サガット自身は拳銃の種類に詳しくないのでそれが本当にM1911であったかどうかは疑問である)が、その後遺症なんて実際に出会った時点では欠片もなかった。かりんだって、前記した闘争でNATO弾を雨霰と撃ち込まれて、そのうち何発かは確実に直撃していたであろう筈なのにケロツとしていた。世の中にはタフな奴がいるのだ(その筆頭付近に自身がいることはとりあえず脇に置いておく)。

そもそも拳銃は今、この場に無い。

ルイズの美意識がどうかなんて時空の彼方に吹き飛ばして、なんとしてでも携帯すべきだったか……。しかし後の祭りである。

じゃあどうする？

わからない。
どうするの……？